默阿彌全集首卷

河竹繁俊著

増訂改版

河竹默阿彌

〔詳傳、日記、年譜、著作解題〕

(附載)河竹糸女略傳

春陽堂發行

序

一人にして能く前に往ける幾多同業者の長所特質を統襲し得たる上に、移り行く時代の好尚にも自由に響應し、しかもよく見識を持して品位を墜さず、其作いよ〳〵出でゝいよ〳〵老巧に、斯道の宗師と崇められ、個人としての人格も卑しからず、次の全く異なれる時代までも尚若干の餘威を存じて前期の總代表者と見做さるゝが如き劇の作家は、内外ともに其の例多からず。而して河竹默阿彌は其多からざる總代表者の一人なり。

近松門左衛門は德川文藝の興隆期に於ける最初の最大の集大成者なりしが、默阿彌は其頽廢期に於ける最後の最大の集大成者なり。近松が我平民劇の最古の唯一人の眞詩人たることは一人の異議も無き所なるが、默阿彌が其最後の最も老巧なる狂言作者たることも輿論の爭はざる所ならん。

近松の淨瑠璃を讃美して我劇詩の旭光となすべくは、默阿彌の諸脚本は、少くとも其花やかなる夕陽たるの光榮を荷ふ價値あるべし。江戸の演劇は默阿彌に及びて至り極りたればなり。

その初めに於て廉價なる娯樂を純一の目的として興りたる我國の平民劇は、三世紀に亙れる天下泰平の恩澤に浴して、頗る順當なる發達を遂げたりしにも似ず、其爛熟の晩期に至るまでも、其遊戲本位の本來性を蟬脫する能はざりき。簡撲なるが爲に詩趣ありし其初期の浪漫劇は其進化につれて繁褥となり、濃厚となり、餘りに巧緻となり、目先の變化を主として脚色の技巧に力め、因果の聯絡をも性格の論理をも無視したれば、劇は遂に鬚ある小兒輩を喜ばすべき一種の錦眼鏡と化し了りぬ。されば前後三百年間の我演劇の隆運も、其最も純粹なりし元祿享保の交に於て纔かに老近松一人を出だせし外には、一の眞詩人をも産せざりき。淨瑠璃の世に傳はれるもの恐らく千を以て算ふべく、臺帳の當りを博せしものもまた無數なれど、其中不朽の價値あるもの果して幾篇かあるべき。作といふ作は殆ど悉く純空想の産物にして、遊戲衝動の餘技のみ、生の觀察にもとづくものゝ如きは全く絕無なりといはんも不可なし。時の狂言作者等は、只ひとへに觀衆の感覺と想像とを駭かさんとのみ望みて、互ひに思附の新奇を競ひ、筋立脚色の巧慧を爭へり。剽竊は其公然の權利にして翻案補綴は其最も得意とせる手段たりき。かくの如きことは元祿享保の振興期に於てすら盛んに行はれたりし所なれば、其頹廢期に在り

ては勿論の事たり。默阿彌の如きもまた同じ巣立の一鳥たることをまぬかれざりき。
生の觀察の不足より生ずる筋立の荒唐無稽と娛樂本位に伴ふ遊戲三昧の不眞面目とは我演劇の宿弊にして、其爛熟期まで附帶せしが、明和天明の頃に及びて時尙漸く移らんとし、彼の初代櫻田治助が時代世話混淆の弊を矯めしよりこのかた、所謂生世話物の發生と共に、世態人情を描寫するの筆は次第に現實味を加へ來れり。四世鶴屋南北、三世櫻田治助、三世瀨川如皐等いづれも其進步に與りて力ありき。而して最も後れて出で、其後れて出でたるが爲に能く諸家の長を併せ、最も多く且つ最も有效に此方面に力を致したる者は默阿彌なりき。生の觀察の比較的眞面目にして細緻なるは彼れが作の特長なり。

併しながら之を作劇の才のみより觀れば、默阿彌は未だ必しも、脚本作家中の最大なるものとはいふべからず。例へば關西の劇壇には寶曆明和の並木正三あり、江戶演劇の中興には津打治兵衞あり、壕越菜陽あり。爛熟期のはじめには關の東西に霸を唱へし並木五瓶あり、前に擧げたる初代櫻田治助あり。四世南北、三世治助、三世如皐等の傑作中にも、優に默阿彌の作と拮抗し、或は其大膽なる創意に於て、或は其詞藻に於て、もしくは其脚色、もしくは其人情味

に於て、時に彼れのを凌ぐに足る才華の閃きを見せたるもの少からず。默阿彌と其周圍との關係は沙翁と其儕輩、富嶽と其近山の如くならざりしや勿論なり。しかも默阿彌は其前に往ける及び其左右に歩めるものゝあらゆる長所を措摭して悉く之をおのが藥籠中のものとなして、自在に配劑するの巧みなるは沙翁、近松の上にも出でたり。前人の意匠脚色にして、或は其骨を換へられ、或は其胎を奪はれて、彼れが作中に再現しをらざるものは殆ど稀なりといはんも、甚しき誣言にはあらじ。彼れを評して江戸演劇の最後の集大成者となすは此故なり。

此點より觀て、彼れは同時代の平民藝術の二大家、小說に於ける曲亭馬琴、浮世繪に於ける龜戸豐國と其位置をも境遇をも功績をも同うす。曲亭も豐國も、共に創始者にあらずして集大成者なり。曲亭が其師京傳に駕して登り、三馬、一九、種彦等をして遙かに其後塵を拜せしめしが如く、又豐國が初代豐國の美人畫、舞臺畫より出でゝ、彌々婀娜に、彌々華麗に、國芳、廣重等の儕輩を凌ぎて一世を風靡し、役者繪といへば豐國以外には其人なきが如く傳唱せらるゝに至りしが如く、はじめは五世南北の一徒弟として五瓶、治助、如皐等に兄事せざるを得ざりし默阿彌も、一作毎に其技倆を發揮し來りて、彼の小團次と相遇ふに及びてはバーベージに

認められたる沙翁の如く、信長に知られたる秀吉の如くに躍進しはじめて、遂には全勝を一身に收めき。其持久して最後に全局を贏ち得たるの點三者まつたく揆を一にす。併しながら此の三人者の相似たるは啻に其他位と境遇とのみにはあらず。又其天分の創始よりも集大成に適したりし點のみにもあらず。其性の用心深かりしも三者頗る似たり。其交際嫌ひなりしも三者酷だ似たり。其よく自重して謹嚴なりしも相似たり。それが爲によく壽を保ちて自然に最終の勝を收め、長く其權勢を持續し得たりし點も相似たり。其作物に見えたる用意、趣味、情調等も相似たり。就中曲亭とは相似の點殊に多し。觀察よりも空想に重きを置きて、趣向脚色に全力を注ぎ、詞の節調を主とするの餘り、次第に七五本位のマンネリズムに墮り、晩年には其所謂名文句すらも華多くして實乏しく、言はゞ掛言葉の連續に過ぎざりし點なども相似たり。作意の勸懲に累せられて因果の說明の煩はしかりし點なども相似たり。但しかくの如きは偶然の相似といはんよりも、寧ろ頹廢期文藝の代表者たる運命の然らしめし所ならんか。

　三人のうち年齢の最も若くして長壽なりし默阿彌は、新時代との交涉といふ點に於ては曲亭及び豐國に一籌を贏ち得たり。彼れは明治十年代の末までも作者としての餘命を有せしが故に

維新以後の劇壇に對しても多少貢獻する所ありき。學海、櫻癡によりて仕上げられし活歴劇も其端緒を發きしは彼れなり。彼れはまた幾多の斬髪劇を作りて明治の新風俗をも寫さんと試みたり。怨靈の怪異を神經作用を以て解釋せんとする劇をも試みたり。新時代の作者たる守田新水、福地櫻癡等をも指導したり。すなはち或程度までは新舊兩時代の橋わたしの役をも勤めたりき。かりに之を小說の上に見れば、馬琴にして魯文、延房等をひきゐ、更に櫻癡、逍柿園等と握手せんと試みたるものとすべく、又之を浮世繪に比せば、豐國にして芳幾、芳年を便し、永濯、淸親等を蠶食せんとしたるものとも見るべし。

三世紀に亙る我近世演劇史上、一作家にして前幾代かの蘊蓄を兼該し、其最終の集大成者として後には一人の來者をも有せざる默阿彌の如きはまたあらず。彼れは眞に江戸演劇の大問屋なり、德川平民文藝の羅馬帝國なり。卽ち彼れは一人にして一大都會なり、一身にして數世紀なり。しかれば彼れの傳を善く讀まん者は、善く我頽廢期の演劇史を讀破するものといふを得ん。按ふに本傳の使命は主として繫りて此點にあるべく、其價値もまた主として此點に存すべきなり。

大正三年十一月

逍遙

河竹默阿彌翁

饗庭篁村

其名は盛んに世間に傳はりて其人は纔かに劇界に終始して六十年、舞臺に新奇妙案を盡して喜怒哀樂の情致を細かに現はしながら、家庭は平易淡和にして溫厚謹直、よく人と交りて情誼を全くせられし翁の如きは、狂言作者の大家として古今稀なると等しく、また芝居社會の個人としても類例少なき全人と言ふべし。翁が一世の大作小作殆ど三百種、これ天禀の才筆走るがままに馳せたるに非ずして刻苦努力の結果なり。翁は書冊の上の學問には系統なしといへども實地の上の世間學には縱横曉通せられたり。世の人の學問といふは學校に於て教師に依りて、好も嫌ひも選むことなく押詰らるゝものなるが、翁の學問は我が好む方のみを選みて自ら教へしにて、其名を「貸本學問」といふ。翁若くして貸本屋となり好文堂の荷を負ひしは小書籍館を身に着けて往來したるなり。得意廻りに本の性質を說明し、世間話に作の內容を交へしは講義なり、また試驗なり。嫌ひは棄てゝ好むところに偏よる、天才助長、便宜便利を併せ得たり。貸本

屋たらざる前には貸本屋より借りて讀む得意たり。而して其才を試むるに茶番雜俳あり、まだ若き者の氣に乘り、勝に誇る事なれば、進境速かにして十八九にして其道に名をなしたり。其の狂名を「よし〳〵」と付けたるは吉村のよしと芳三郎のよしを取りたるなりといへど、是或ひは後漢の司馬徽の好々先生の故事に據りたる歟。翁が生涯人と爭ふことなく「作」の外の事には執着少なかりしが如く見えたるは、克己忍耐してたゞ「好々」とうなづかれしにはあらざるか。翁が處世の秘訣、此の「好々」の二字に在るがごとし。若盛りの十九二十、さるむづかしき故事に據るべくもなき樣なれど、貸本學問は飛道具なり、何を讀んで何を知るかを量るべからず。後年其水と號せしも其の水鏡先生の德を懷ひ「好々」の二字の處世に益ありしを深く知得したるの故なりしも知るべからず。其事をまた人に告げざるは愼み深きによるところ、もし此說を以て世に在りし時に問はんにも、貴公の說もまた「好々」と一笑に附せられしならん歟貸本學問は翁にありては斯の如く至便なりしが、根柢なきゆゑたまさかには作の上に微瑕なきにもあらず。貸本學問も浮世學問と倂せ學ばざれば實地の用をなさず。浮世學問は授業料莫大なり、小文才ある輩面白くして容易き事とおもひ、俄に翁の若き時を學びて敗家の人となる事

勿れ。翁が芝居道に入りし時に家は「拗當分」と披露されしことも、若輩放蕩の谷底へ落ち込まざるの用心なり、此の用心は終始一貫して遊樂浮薄の交友の中にありて泥まず溺れず能く獨善を保たれしは、是もまた司馬徽德操先生の遺風を暗に守られしには非ざるか。翁は作の餘技として雜俳狂文其外とも皆能くせられたるが、俳句のみは俳優に代りてか又は必要の外、それに耽られたるかと思はるゝあとなし。俳諧は多く禪機を加味して飄逸たるところを尊む。翁も俳諧は好まれたるならんが其の飄逸なる俳人氣質はやがて放逸の作者氣質に合し易く、物に拘はらず世の中やりぱなしを風流と思ひ違へて貧を以て人に驕り道樂を以て世に誇るを狂言作者の常となし、人を誘惑してまでも其風になさんとする惡弊あるを深く慨き、身を以て其弊を矯直さんと勤められしより、自然思想も空華閑寂を避け、作劇の上に用ある雜俳狂文に考へを費さるゝ事多かりしなるべし。是よりおもひても「作」に全力を盡し卽ち狂言作者の位置に忠實なりしを察すべし。翁は一面、其の時代の流行繁花の中心たる芝居の舞臺に金繡絢爛の才思彩筆を揮ひながら、一面には作者社會の輕薄浮華の習俗を打破して質實堅固の門庭を作らんと勵まれたるにて、それを形容せば右の手は槍を拈りて突て掛り左の手は楯を持て敵を防ぐ勇士の

如くなりしにて、自ら勵まし自ら抑へ惡戰苦鬪隙なきを、春光和風いと穩かにもてなして平和の生涯を送られたるはそれも一つの狂言にて、其作もつとも苦心にして且つ會心の作なりしならんか。今推あてに予輩が云ふのみならず、すでに交友中にて十六羅漢に見立てし時に一新羅婆娑選者」の名有りしは、何事も知つて何事も知らざる底の翁の腹を穿ちしものにて、翁も例の「好々」流にて莞爾と默諾せられしなるべし。天地一大戲場なれば人間一生また一芝居、其の狂言の大作者の實傳は、芝居の花の根ともいふべし。花を愛づるものは其の根を護る。翁が七十八歳の一期、花なきところ即ち花なり。翁の芝居道にありて能く計策を運らし役者を働かせ座元を立るところ諸葛孔明扶漢の功あり、家庭にありて温厚の長者たるは孔明を玄德に薦めたる司馬徽の德風あり。「好々」の狂名夙く自ら號け得て空しからずといふべし。

默阿彌傳の成るを聞きて

「河竹默阿彌」といふ名が余の頭に忘れがたき印銘を殘したのは、坪內博士が「讀賣新聞」に其の作の「鼠小僧」を載せると同時に、翁の藝壇に於ける位地を世間に紹介するの文を公けにせられた時からであつた。

これより先き、博士が「書生氣質」を著されてより此のかた、余は博士の新聞や雜誌に發表せられた一文一章をも殆ど漏らさぬやうに讀んでゐた。さうして其ういふ事情から默阿彌の作や其の傳記やにも始終熱心なる注意を拂ふやうになつた。春陽堂から翁の「狂言百種」が發行せられた時、余は如何なる悅喜を以て其れに對したであらう。

しかし翁の死せる明治二十六年に、余は尙ほ高等學校の一貧書生であつた。隨つて維新の前後に跨つて日本劇壇の大權威者たりし翁の謦欬に親しく接するを得ずして止んだ。余は此の事を余が生涯中の遺憾なるものゝ一つだと思つてゐる。

幸ひにして、其の後、遺子糸子女史と相識るに至り、又其の義子繁俊君と交友であり、而も

今や其の繁俊君の編纂せられた翁の傳記によつて、生前の面影を偲ぶ事を得るは、余が生涯中の遺憾を補ふものとして、此の書の著者に對して多大の歡喜と且つ感謝とを捧げる。

伊原青々園

無線電話

チリン〳〵●あゝもし〳〵、最大長距離を願ひます。■どちらです。してあなたの番號は。●わたくしは嘘の八百番ですが、極樂の普門品二十五番を呼んで下さい。■少しお待ちなさい………●もし〳〵わたくしは普門品二十五番ですが、なんといふ人を呼ぶのです。●明治二十六年一月二十二日に冥府(そちら)へ行つた吉村新七といふ人を呼んで下さい。●それは河竹默阿彌さんのことですか。●さうです。●少しお待ちなさい………●もし〳〵あなたはどなたです。▲わたくしは守田勘彌ですが、あなたはどなたです。●わたくしは川村成義です。▲あゝ、さうですか、なるほどあなたのお聲ですね、●ねえ、守田さん。本所のお師匠さんに少し話があるのですから、ちよつとこゝへ出して下さい。▲默阿彌さんはこゝにおいでですが、電話を掛けることが不得手だから、氣の毒だがわたしに代つてくれろと頼まれて出たのです。●あゝさうですか。そんならお師匠さんはそこにおいでなのですねえ。▲さうなんです。●さうしてお師匠さんにはお變りはありませんか。▲少しもお變りぢやありません。●あゝ、さうですか、

早速お尋ねをしますが、お師匠さんはお内のお糸さんに御養子が出來た事を御存知でせうか。▲………御存知ださうです、繁俊さんの事でせうね。●さうなんです。そんならお話をしますが、此度お孫の繁俊さんからお師匠さんの傳記を拵へるにつき、昔馴染としてわたくしに、序文様のものを書けと仰やつて下すつたのです。ところが例のわたくしですから、とても出來ませんとお返事をいたしました。するとそんなら冥府へ電話を掛けて祖父に其の話をして貰ひたいといふお頼みです。これは御辭退をする事柄でないと思ひまして、只今電話を掛けたのです。▲あゝ、さうですか。●さうしてお師匠さんが冥府へお出になつてからは、芝居も大變に變つて來て、脚本は多く學者方がお書きになるやうになり、又一しきりは飜譯物でなければ夜も日も明けないやうな事もありましたけれど、豪いものですね、それでもお師匠さんの書かれた物は絶えず上場されてをりました。▲あゝ、さうですか。嬉しうございますねえ。●それが此節になるとお師匠さんの物に限るやうになつて來たのです。▲あゝ、さうですか。●ところで來年はお師匠さんの二十三回忌に當るところから、繁俊さんに是非お師匠さんの傳を書けと諸方から勸められたので、終にお書きになつたわけなのです。▲それは至極結構な事です。ち

よつとお待ち下さい。本人に言つてお返事をしますから………今お師匠さんに申しましたところが、おつしやるには惡い事ではないが、わたしの傳記なぞを宅の者が書いては困る。わたしは決して傳記などを書いて貰ふやうなものではないのだからと言はれます。●ねえ、守田さん。やつぱりお師匠さんはいつものお師匠さんですねえ。わたしが考へるには、それは要らざる御遠慮だと思ひます。近年の脚本家としては、お師匠さんを置いて第一に指を屈するものはないぢやありませんか。わたくしなぞはもう十年も前に默阿彌さんの傳記が世間に現はれないのを不思議に思つてゐたのです。さうぢやありませんか。▲勿論です。それはあなたのおつしやる通りです。●そんならもう一遍聞いて下さい。▲承知しました………もし〳〵中々好いとはおつしやいませんから、わたくしがお師匠さんに向つて、其の事は跡にゐる人に任せて置いたらどうですといひました。するとお師匠さんは、いやそれは困りますとばかり言つておいでです。ねえ田村さん、どうしませう。●ねえ、守田さん。これは本人が書いて貰ひたいと言つても書くべき人でなければ現はれる氣遣ひもなし、又厭だと言つたからといつて、人がこれを望めばいたし方のない事ぢやありませんか。▲えゝ、無論さうなんです。これはわたくしが

請合つて置きますから、お孫さんの思召しに任せて置いた方が好いでせう。●いやさうですが一旦耳に入れたものですから、是非得心をさせて下さい、▲承知しました。少しお待ちなさい………いろ〳〵おつしやいましたけれど、つまりお任せになるさうです。●それは有難う。出來たら本をお屆け申したいが共の便がありませんから、共の內又あなたを勞して、わたくしが立讀みにしてお聞かせ申しませう。▲どの位の長さです。●六百頁位あるさうです。▲それは大變ですが、お讀み下さいますか。●わたくしのことですからねえ。▲なるほど。是非お願ひ申します。●承知しました、さやうなら、お師匠さんに宜しく。チリン〳〵。

大正三年十一月三日

田村成義

例言

一　私が此の傳記を編まうと志した動機は、來る大正四年一月二十二日が故人の二十三年忌に相當するので、それまでに作り上げて、せめてもの追善に資したいと考へたからでありました。然し故人の詳傳を述べるとなると、勢ひ文化文政から明治前半期までの演劇界の變轉を背景として語らなければならなかつたのであります。で一通り調べて、さて出來上つた所を見ますと、故人を中心として書かれた江戸末期より明治へかけての小演劇史のやうなものになつたのでした。そこで閲讀を請うた諸先生のお勸めもあり、交遊諸君の賛同も得たところから、編著の動機は私事であつたにも拘はらず、竟に之を公にするに到つたのであります。

一　私は此の傳記を編むに當つて、成るべく推測や臆斷や理窟ばつた評論を避けたいと思ひました。すなはち私一個の一時の考で評論するやうなことをしないで、專ら事實の精確といふ點に重きをおいて、及ぶべきだけ有りのままに記述し、而して批判は讀者の識見に一任したいと思つたのであります。けれども淺學なる私の事ですから、尙屢〻誤解や獨斷に陥つて事

實の眞相を誤つたやうなこともありませう。おそらくはもつと廣く材料の蒐集、參考書類の涉獵に努めなければならなかつたのでありましたらう。それら不備の諸點に關しては、切に賢明なる諸君の御示敎を仰ぎたく存じてをります。

一　本書の成るに際して、恩師坪内博士は常に有益なる助言と指導とを賜はり、饗庭篁村氏は故人の眞知音として、懇ろに蒐積を閲讀せられて種々の敎示を與へられたのみならず、幾多の興深き新事實を加味せられました。又伊原靑々園氏は其の諸著によりて著者に裨益を與へられたる所頗る多く、田村成義氏もまた劇場側を代表して種々の珍らしき材料を寄與せられました。そればかりでなく、右の方々は何れも極めて趣味深き序論乃至追想文を賜りました。これらの御好意に對して著者は深く感謝の意を表します。

一　尙此の書の編著に際しては市川左團次氏、六鄕弘純氏、服部長兵衛(尾寅)氏、服部鎚次郎氏、小笠原英祐氏、尾上菊五郎氏、河原崎權之助氏、吉村勘兵衛氏、田中佐次兵衛氏、竹內元正氏、永井荷風氏、名倉納氏、太田長子氏、松本芳太郎氏、寺島さと子氏、渥美淸太郎氏守田勘彌氏等、及び今は故人となられた伊東專三(橋塘)氏、磐瀨淺々氏、幸堂得知氏等、何

れも直接もしくは間接に援助を與へられました。謹んでこゝに殊記して謝意を表します。

一　又故人の高足たる竹柴其水氏は、絶えず煩瑣なる私の質疑に應じて解說せられ、或は調査の勞をとられました。其の他故人門下諸氏一同もおの〳〵著者に同情して、種々有益な忠言を與へられました。最後に、私の養母であつて故人の長女である糸女は、最も深き同情を此編著に寄せて、故人の私生涯に關する他人の知る能はざる確實なる材料を提供し、著者を俾補せられた事が甚だ多い。ともに深く感銘して、長く忘れ得ない所であります、

一　出版は演藝珍書刊行會川上邦基氏の好意によつて成されました。これまた附記して謝意に代へます。

大正三年十一月十二日

著者　河竹繁俊誌す

〔初版卷頭〕

親子は一世にして緣うすく又深きもの、自分はをさなきより家にありて他にいでず、父は七十八歲母は七十九歲にて歿したれば、父母にはながく仕へしが、このふみの成るにつけ、存生中の事ども思ひいだされて、

いつしかにめぐる月日は夢にして
　はたとせあまり三年經にけり

いゝ女

この小著を祖父默阿彌の墓前にそなふ

繁　俊

『河竹默阿彌』目次

挿繪目次

一惠齋落合芳幾筆の默阿彌似顔繪、元治元年三座新築落成し、舞臺開きの際の口上に見立てゝ畫かれた錦繪の一部分。

默阿彌の似顔繪

自筆短冊二葉

默阿彌の書いた短冊といふものは、編者の知る限りでは、狂歌を認めたこの二葉だけである。いづれも七十七歳の折のものである。

芝居へ出て五十七年
やう〳〵ことし
しりぞきて
氣の利た化物は疾引込むに
ろくろ首ほど長くのびたり
七十七翁
默阿彌

福もなく祿もなけれど
壽ばかりは
まつ天窓ほと
長生をしつ
七十七翁
默阿彌

遺言状

「別遺言」として、發病後明治廿六年一月一日に認められたもので、これがほんとの絶筆であらうと思ふ。不思議にも震火を免れたので、こゝに掲げることにした。
左のやうに讀み得る。（吉村新七は默阿彌の實名である）

別遺言之事

一 遺言状には本葬を出し候事に認め御座候得共本葬を出し候得ば多分之費用も掛り世間之人に一日之日を爲費無益之事故本葬は出し申間敷候、此件の儀に

一金三十圓　　永代經料源通寺へ納め可申事

一五つ包饅頭　　登行院人數丈施し可申事

右本葬之儀を彼是申仁御座候はゞ我が多年の望み此遺書を爲見御斷り被下望み通りに可被成候

一 四十九日に門弟打揃ひ源通寺へ參詣なし歸路馳走可致事

明治廿六年一月一日

吉村新七

伊藤こと殿
吉村勘兵衛殿
吉村いと殿

河竹黙阿弥

第一　家系と出生

祖先――日本橋小田原町の魚問屋――式部小路へ轉居――祖父は通人――父の人となり――母――默阿彌の出生。

默阿彌の祖先に就いては頗るぼんやりしてゐるが、江戸へ來てからの代々が、屋號を越前屋、主人の名を勘兵衛と稱した町人であつた事は確である。寺の過去帳へ最初に記錄されたのは釋正順信士で、寛保二年三月三日の死歿、日本橋小田原町越前屋勘兵衛（又、市左衛門）だとある。これが默阿彌から五代前の先祖に當る。

小田原町に住居してゐた事と、多少言ひ傳へられてゐる事とを綜合して見ると、日本橋の魚河岸で魚問屋をしてゐたものと想像される。而して、此の初代の勘兵衛は多分越前から、はるばる江戸へ來たものだといふ推測もつくのである。それは當時の習慣として、他國から來てその土地に落着いた者の多くは、生國の名をその儘採つて屋號に稱へたからである。三河から出たものが三河屋、越後から出たものが越後屋ととなへたやうに、江戸で越前屋を用ひたのも偶然ではなかつたであらう。

然し溯つて、其の先祖が國元で魚商をしてゐたものか、百姓をしてゐたものか、それとも士分の

果てであつたかは、依然として明らかでない。いづれにしても、初代の勘兵衛は、貞享の末か元祿の初年に生れ、中年にして志を立てゝ、當時將に三ケの津の隨一となり、百花將に開かんとしてゐた江戸へ來たものと見て差支へない。即ち默阿彌の先祖は、今日から凡そ二百年前（享保年中、八代將軍吉宗の治世）に江戸小田原町の一角に、魚屋の店を開いた事となるのである。それから凡そ百年を經て生れた六代目の勘兵衛が、狂言作者河竹默阿彌にならうとは、蓋し先祖の思ひも寄らなかつた所であらう。

初代の歿後二代目の歿するまでには、四十年程の年限を閲してゐるが、其の間に同じ日本橋ながら通り二丁目から東仲通りへ曲る所の、今も俗に式部小路と呼ばれてゐる町へ轉住してゐる『仲通りの角』とも記されてあるから、角店ででもあつたらう。これは職業換をしたものか或は家運の都合であつたか判然しないが、二代三代は此處に住つて此處に終つてゐる。默阿彌が初聲を揚げたのも此の家であつた。

默阿彌の祖父に當る、三代目の勘兵衛に就いては僅ばかり話草に殘つてゐるが、なか〳〵の通人であつたといふ。何にせよ此の祖父は、文化文政の眞中に生れ出たゞけに、洒落た通の生活を追ひ『江戸町中喰物重寶記』などを伴侶にして、料理通を以て誇らうとしたのは言ふまでもなく、初鰹、初鮎、初鮭、さては生椎茸、わらび、めうどなどといふ、蔬菜類の初物をも珍重したと傳へられてゐる。さ

ういふ贅澤を盡した結果は『賣家と唐様で書く三代目』の格で、前二代が角店にまで作り上げた家産をも、だいぶ傾けたさうである。

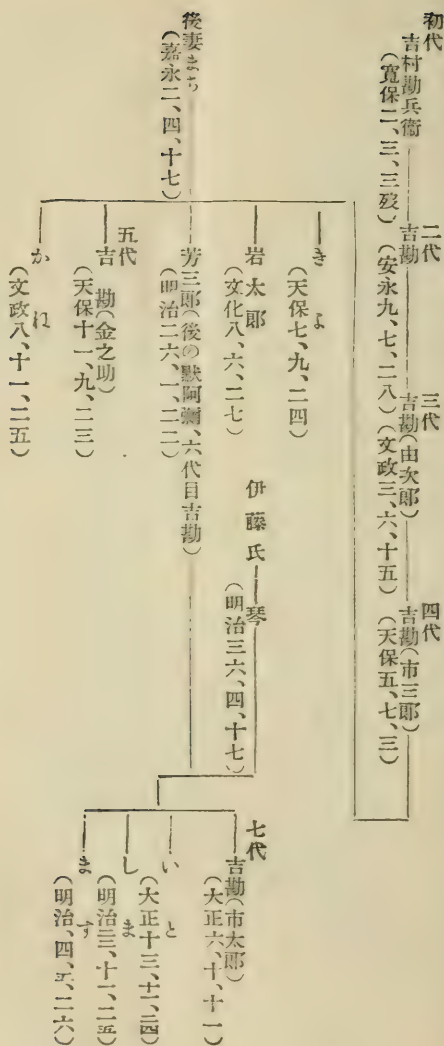
道樂者を父に持つた悴に、却つて身上持のよい經濟家が出來るといふ例も少くないが、四代目の勘兵衛、卽ち默阿彌の父が矢張りさうであつた。父は天明元年の生れで、幼名を市三郎と呼んだ。極く堅人で道樂の道の字はどう書きますといふ位、實子ながらも父とはまるで性格を異にしてゐた。口重で几帳面な人物であつたといふ。後年默阿彌が假名垣魯文に書送つた履歷書の中に、『父勘兵衛は湯株を多く持ち、此賣買を家業となす』と手記した通り、湯屋の株を扱ふのを職としてゐた。つまり株の仲仕をする傍ら、傾きかけた湯屋を引受けて改革し、人足のついて繁昌するまで經營して轉賣もするといふ業體であつた。此の父は不幸にも二人の兒の母であつた妻に死なれた。上の兒は女で清と呼んだ。次の男兒は薄命なる母の跡を追うて赤兒の中に世を去つた。清が母に別れたのは五歳で、人並外れて氣むづかしく癇の強い子であつたから、情強な繼母にかけるのが不便さに少くも四五年は後妻を娶らずに暮してゐた。こゝへ、佛様のやうに優しい心立の者だからと保證するものがあつて迎へたのが後妻のまちである。まちは良人より四つの年下、天明五年の生れで、士分の出であつた。

默阿彌は此の後妻に生れた第一の男兒で、文化十三年二月三日が誕生日である。父は三十六歳、母は三十一歳といふ成熟期に生れたのであつた。幼名は芳三郎（又由三郎）と名付けられた。これは多

分祖父の命名になつたものと考へられる。何故といふに、祖父の幼名が由次郎で、父が市三郎であつたから、何事にも因縁を持たせる時分の事だから、組合せて芳三郎が出來たものではなからうか。順序から言へば次男であつたが、先妻に宿つた長子は水子の中に亡くなつてゐるから、事實は長男であつた。弟には一つ違ひの金之助があり、六歳の年下の妹があつた。妹は物心のつかぬ間に早世したから、默阿彌の傳記には關係がない。

斯うして見れば、默阿彌は町人と士分の女との間に生れた子であつた。祖父の通人肌の贅澤な江戸ツ兒氣性と、父の質素にして堅固なる性質と、而して母の物やさしい心だてとが自然に傳承する位置に置かれたのである、果せるかな、默阿彌の生涯を貫く要素は此の三者を合したものであつた。

式部小路――里俗通二丁目東の新路を式部小路と云ふ。往古醫員久志本式部の宅ありしよりの稱也。又西の横町は十九文横町と呼ぶ。明治二年改正の時、東西新路を通二丁目に合す。（東京案内）

略系圖（本姓は吉村氏、明治以後越勘を改めて吉勘と稱す）

第二　芳三郎時代

一、幼名芳三郎――劇場に入る前――幼年――教育――芝へ轉住――二、早熟、遊蕩――勘當分――三、江戸時代――『八笑人』の生活――四、貸本屋――父の死――五、姉と弟と――芳々の茶番――趣向の才――六、南北と知る。

一

默阿彌が劇場裏に入つて作者部屋の人となつたのは二十歳の春で、それからは勝諺藏といふ名を貰つて、狂言作者の路を辿るのである。茲にはそれ以前の生立から十九歳までを、芳三郎時代として述べようと思ふ。

默阿彌の幼年時代がどんな風に送られたか明白でないが、その生れた時に作られた初着と五歳の袴着に用ひられた布地とによつて判斷しても、さう貧しい家の子として育たなかつた事が分かる。今でも保存されてある初着は流れに蓑龜を漂はした紺地のもの、袴着の方は柿色に大形の面盡しで、兩方ともに縮緬である。後者は三枚重ねの下着に出來たものだといふ。一般に衣類調度の好みを盡す此の

時代でも、これだけの支度が出來れば中以上と言ふべきであつた。つまり默阿彌は、中位の町人の長男格として、大切に育てられたものと見てよい。

家族は總體で七人あつた。祖父母と父母、姉と自分と弟とであつた。此の中祖父には五歳で別れ、祖母には九歳で別れたから、祖父母の腰巾着になつて花やかな生活に親しんだり、祭禮に出かけたのも數へる程で、孫として愛されたのも束の間であつたらう。

昔は六歳の六月の六日に手習を始める事になつてゐたから、芳三郎も其の頃から手習師匠へ通つたものであらう。然し其の師匠がどんな人であつたか、又芳三郎の出來がよかつたかどうかなどといふ事も分かつてゐない。けれども後年の記憶のよい直覺的悟入力に富む默阿彌の頭腦から見れば、相當に出來のよい少年であつたらうと思はれる。どんなものを敎へられたかそれも明瞭でないが、矢張り當時の寺小屋敎育だけのものであつた『名頭』から『江戸方角』『商賣往來』『庭訓往來』などといふが如きものを習得したに過ぎなかつたであらう。要するに默阿彌は別にこれと言つて際立つた敎育を受けたものではない。親の方針も、商人として必要なだけを敎へ込めばそれでよいといふに留まつてゐた。祖父を見送つてから、父は芝へ移轉し新に質商を始めた。默阿彌の手記によれば『文政八年芝金杉通一丁目へ轉住父は質渡世を始める』とあるが如く、七八歳前後に父は住居を轉じて質屋になつたのだから、當然其の跡を取るべき芳三郎は、質屋の帳面がつけばよい位の程度で手習をさせられた

ものと見るべきであらう。

而して又、父も祖父も、文字を好んで隨筆を遺したといふ人でもなければ、母が士分の出ながら特に讀書を好んだ話も傳はつてゐない。すべてさういふ文字上の系統を遺傳的に引いてゐる事は認められない。默阿彌とても特に手習を好んで、稽古に行つて斯うであつたなどゝいふ神童めいた話などは殘されてはゐない。唯一つ幼時の追憶として傳へられてゐるのは、生れつきの弱蟲で、喧嘩などはしたことがなく、朋輩にいぢめられて泣いて歸つた事が度々であつたといふ事だけである。

二

天才には往々早熟があるといふ。それに江戸ッ兒はいつたい早熟であつたかも知れないが、默阿彌もさうであつた。其の脈管に流れてゐる血の最初に燃えたのは、道樂者の祖父の血であつた。

それは十四の春であつたといふ。父方の伯父が、ある日兩國近邊まで用達しに來て、其の頃名の通つた料理屋に休んでゐると、三四人の藝妓や雛妓が一人の少年を取卷いて、若旦那々々と囃しながら入つて來て二階へ上つた。伯父は其の少年が、堅人で評判の父をもつた、芳三郎であることを知つて驚いたのである。よもやと思つて確めると、芝の質屋の若旦那で、此間から度々見えると明かされていよ／＼驚き、早速芝へ行つて父に告げた。

此の報知を聞いて一層愕いたのは、これまで眼の中へなすり込むやうに可愛がつてゐた母と姉とで、今更のやうに悔んだ。愛にかまけて言ふがまゝに、父にも内證でやり〳〵してゐた小遣錢が、そんな役に立つてゐるとは夢にも想はなかつたからである。斯う分つて見れば父も打捨てゝは置けないし、親類の手前もあるから、懲しめの爲めに手酷しい異見も加へたが、兆し始めた道樂氣は容易に止まなかつた。やがては手もつけられない遊蕩兒となり上つてしまつた。

默阿彌は長男でもあり、一つ違ひの弟もあつた所から、年齢よりも大人びた、ませた所もあつたらうし、家も相當に豐かであるので、誘ふ友達もあつてか、十四五の頃にはもう一人前ののら息子になりすましたのである。父の異見も姉の異見も、利き目がなかつた。止むを得ず到頭勘當分にして、その親類の伯父へ預けた。

親類預けに遭つても、決して一室に蟄して、謹しんではゐなかつたらしい。何かの用事にかこつけては抜け出してゐたのが、やがてはその親類をも飛び出して友達の家、友達の家と、それからそれへほツつき歩いたものと想はれる。默阿彌の青年期を彩る放浪生活は、此處に其の端を發する。

三

早熟の默阿彌は、こんな順序であつぱれ當時の風潮に同化してしまつた。若し江戸時代、殊に此の

頃の世相に暗かつたなら、其の行狀に就て密かに眉を顰めるかも知れないが、文化文政前後の遊惰淫佚の江戸を知るものには、實に何の驚愕にも價しない家常茶飯事であつた。

吾等は江戸時代を想ふ毎に、暗い黄金の光りに包まれた、そして強い官能的の刺戟を藏してゐる奇異な世界を思ひ浮べる。西鶴の好色本や近松の淨瑠璃に描かれた元祿の復興期から、泰平が打續いて文化文政の爛熟期、頽廢期に到るまで、上方から江戸への三百年間は實に平民、町人の時代であつた。その民衆をして、閉され閑却されてゐた花やかな情意生活を極度まで享樂せしめた時代であつた。

然し斯の如き特色のある時代も、德川幕府といふ封建制度によつて壓抑されてゐた故に、特に文化文政度に到つては水の澱みて腐れるが如く、最初に持つてゐた生氣をも自と失ひ、溫室に咲いた花のやうな人爲的、痼疾的な文明とはなつた。かゝる文明の久しきに亙れるが爲めに人々の神經は、次第に疲勞し倦怠を催して來た、其結果はいやが上にも強烈な官能的刺戟によつて、辛くも趣味の生活を營み續け得るの狀態に陷つたのである。志ある幕府の良佐が、それを戒飭せんとしたのも何度であつたらう。けれども濁流の滔々たるを沮むべき術はなかつた。溫室に咲いた花は大氣に觸れて損はれこそすれ、最早蘇りはしなかつた。

默阿彌も斯うした江戸文明を、正しく分け前した一人である。祖父の血を享けて美食家でもあつた。他の通人と同じく放縱詩人の生活を憧憬してゐた。四季を彩る花、祭禮、川開き等の如き、彼

等を動かしたものはまた默阿彌をも誘うたであらう。特に日本橋（魚河岸）と並べて三千兩と稱された花街（吉原）と芝居とは、江戸人の見出した歡樂境の最たるものであつた。默阿彌が其の渦中に卷き込まれたのも無理ではない。芝居が如何に江戸を支配したかは次に讓るとしても、紅の物語の浮動せる吉原五丁町、其の他の花街の如何に繁昌した事であらうよ。上下蕩然として遊樂に沈湎したのは此の頃を以て頂點とする。『掛聲勇ましき山谷通ひの駕籠の中、長裾下駄穿き醉步蹣跚たる茶屋の歸るさに鼻唄口三味線』なるものは、『近世々相志』に述べられたるが如く、實に當代江戸ッ兒の理想であつた。

　春水の人情本に現はれた遊冶郎は、必ずしも此の時代にあつては不自然ではなかつた。丹次郎式人物が單に時代の影法師であつたばかりでなく、その理想的に描かれたるものを轉じて實生活に模倣せんとする者も少なくなかつた。而して、所詮は默阿彌も時代の兒であつた。商家の子弟が放蕩して勘當され、出入りの棟梁や鳶頭の家の二階に居候をきめこむのは、講談や落語にもよくあるやうに世間並の事になつてゐた。質屋の若旦那芳三郎がのら息子になつて、親類預けとなつたのも別に特筆すべき出來事ではなかつた。

　勘當されてからの生活が『八笑人』そのままであつたとは、後年に默阿彌が人に語つた所である。默阿彌の芳三郎時代が遺した紀念の『茶番集』を見れば、その言を領會するに難くない。『花暦八笑人』

は春水の兄なる瀧亭鯉丈の著である。鯉丈は三馬、一九の後を受けた人情本、滑稽本の作者であつた。『かく有りたらんにはと思ふ程を、春の日秋の寐覺々々に、うつつ心の數々書散したる其の反故をかくは名づけしなり』と、鯉丈は『八笑人』の第二編の序に述べてゐる。これで見ても明らかであるが通人の理想郷、かく有りたらんにはを書かうとしたものである。文政三年に始まつて天保五年迄に、四遍追加の卷まで書いて、鯉丈は弘化元年に歿したのであるから、默阿彌が五歲の時から十九歲までに順々に出版された事になる。年代から考へても、默阿彌が此の『八笑人』の如き書によつて、其の讀書慾を滿足せしめた事は疑ふを要せぬ。『八笑人』は實に其の時代の流行を穿ち、文化文政期を代表する通人生活の一面の消息を、理想的に或は如實に描いた作であつた。遊びに勞れ樂しみに飽いた結果は、色氣にも喰氣にも感興を惹かれ得ずして、一切のものを洒落のめし、ふざけ散し、玩弄し盡さんとするに到つた。當時の危險なる又一方より見れば暢氣極まる、行き盡したる通人を、その主人公に選んだ作である。

若隱居となつて不忍の池畔酒狂亭に、浮世を避けた左次郎を取締役として、居候の眼七を筆頭に、安波太郎、卒八、頭武六、呑七、出目助、野呂松の八人が卽ち八笑人なのである。彼等の多くは一定の家業を持ち妻子のある身分であるが、『オホン、大人は御在宿かな』といつた調子で、毎日のやうに酒狂亭へやつて來ては、寢たり起きたりごろつちやらしてゐる。『春雨や芝居好みの友群り』で、あれこ

れと趣向較べをしてゐる中に、大仕掛な茶番の筋を立てる。話し合つて出來た茶番の趣向をば左次郎が取捨して、それに入るだけの衣裳とか鬘とか小道具なんぞを、それ〴〵の損料屋から借り出し、人込みの中で不意に屋外劇をやつて、見物をアツト言はせてやらうといふのである。浮世を眞面目くさつてのさばる奴等を茶化してやらうといふ、とんだ頼まれもせぬ思ひ付きをするのである。

差詰め左次郎が舞臺監督兼作者で、興行師で、金主だから、勝手な事が出來た。斯うして彼等は花の飛鳥山へ敵討の趣向を構へ、隅田川へ押出しては狂亂を演じ、兩國の夕涼みに狂言の投身をやつて悉く失敗るのである。此の間のすべての趣向が、洒落で押し通した芝居がゝりになつてゐる。やれあの身振りは三津五郎で行くとか、あの狂亂は仲藏で行くとか、粂三の聲色がどうとかいふ有樣である。

さうしたのらくら生活は、卽ち默阿彌の勘當以後の生活であつた。『八笑人』に描かれた所を述べる以上は最早改めて蛇足を添ふるを要しない。唯連中が少し多くて、十二笑人であつたといふ。其處此處の友達の家を酒狂亭に擬して、彼れは自ら左次郎を氣取つてゐた事は言ふまでもない。

默阿彌は此放浪時代にあらゆる世相に通じたものと言へる。芝居へも花街へも出かけたであらう。此頃から緣日も流行し始め、寄席も盛んになつた。或は又、春夏秋冬花に川に秋草に枯野に雪に、默阿彌の連中も出來るだけの遊樂を盡し、若き好奇心を鈍らせるまでに通の生活をし盡したであらう。

或時は自分が作者になつて茶番を演つた事もあつた。或時は盛り場に出入して見せ物を見たり、よくその作物に出る遊人のやうなものをも知つたであらう。人入れを家業とした家が、親類にもあり、亦櫻田備前町邊にもあつたが、さういつた所にも立入つて、腕の喜三郎のやうな親分にも接したであらう。がえん部屋でほしいまゝな話も聞けば、中間部屋の雜談に耳を傾けて日を暮した事もあつた。博奕の打ち方などを知つたのも、さういふ場所であつたといふ。これらの見聞が後年の糧となり、默阿彌自身の作物と如何に深い關係を持つに到つたかは、次第に明白にされるであらう。

十四、五、六と滿三年間は、かういふ八笑人的のだらしのない道樂者の生活を送つた。けれども此の手もつけられない道樂者には、何處かに硬い所があつた。何かしら引きしまつた見所のある、惑溺しない奴だと、父は見拔いてゐたといふ。然し堅氣な父であつたから、表面上實家などへ寄せつけはしなかつたが、どうせ金には困るであらう。困れば親類へ借りに行くに相違ない。其の時の用意にと言ふので、二十五兩包みを親類先へ預けてあつたといふ。父の見ぬいてゐたのが、どういふ所であつたかは明白でないが、質屋の主人として堅氣一方の父親が、それだけの寛容を示したことは感嘆に値する。かゝる父親なればこそ、默阿彌が後年名を成すの素因も賦與されたのであらう。子も子なれば父も父であつたのである。もし父が頑固で、妙にとつちめたとしたならば、たとへやくざな人間にならないまでも、質屋の平凡な主人として一生を終つたかも知れない。默阿彌は自由な生活を追つてゐた

間に、世間學なり、彼れ獨得の才能なりを、如何ほど獲得したか、培養したか測り知られない。

四

純粹な八笑人的生活は三年間續いて、十七歳からは貸本屋になつた。

其手記にも『常に雜書を好み終に貸本屋となり、天保三、四、五年三ヶ年の間荷を脊負ひにし歩いた』とある所を見れば、以前よりの讀書癖は、つひに自らを驅つて、貸本屋とならしめたものであらう。それほどに書物は好きであつた。貸本屋の若い衆になれば、手當り次第に本が讀めるといふ事が第一に默阿彌を赴かしめた。第二は、其の本の間に板を挿んで高く積み上げ風呂敷に包んで中結をしたのを小器用に脊負つて、千草色の股引に尻端折り、草履ばきといつた拵へで、得意廻りをするといふのにも興味を覺えたのであらう。又本屋といふ名を笠に着て、ちよつと素人には行けない芝居の樂屋とか、上中下の家庭へも踏み込めるといふ事もあつた。何にしても面白づくの道樂にやつただけで、眞面目な世帶じみた考なんぞからでは決してなかつたであらう。

其頃京橋の尾張町二丁目に、後藤某の經營してゐた好文堂といふ名の聞えた本屋があつた。今の朝倉といつた格の本屋で、新古本共によく集つてゐた寶庫であつた。默阿彌はそこの若い衆になつたのである。この爲めにその讀書慾がどんなに充足されたか知れない。こゝに到つて、浮世學問を卒業し

た默阿彌は、雜學ながら書物によつて新たなる眼を開き始めたのである。

傳ふる所によれば、本屋の後藤には院本、脚本の類が殊によく蒐集されてゐたといふから、それらをも耽讀したであらうし、洒落本、滑稽本、人情本より移つて合卷物、讀本等の比較的眞面目な戲作をも次第に手にしたことであらう。

然し、『素よりなまけ者にて芝居を好み茶番などして遊びあるいてゐた』と告白してゐるやうに、絕えず遊びにほうけてゐたのである。芝居へは始終のやうに出入りしてゐた。樂屋へ行つて荷を下し、好きな本は勝手に御覽なさいと言ふので置きッ放しにして、自分は樂屋中をあちこちと覗きまはり、狂言の稽古ぶりを見たり、作者部屋へ行つては書拔きの仕やうから本讀みの仕方、果ては芝居一流の丸い字の書き方などをおぼえたのだと言はれてゐる。默阿彌が見習作者として出勤したその年に、番附の下繪を描いたなどといふ事は、素人ばなれのした行き方であつた。拔目なく芝居の裏面を觀て、敏活なる頭腦に寫し取つたからであらう。

かうして八笑人のやうな生活より貸本屋時代と、何等の方針もなくぶらついてゐた間も、後に到つて役立つた。よしんばそれが秩序あり系統あるものではなかつたにせよ、所謂浮世學問と、雜書雜學によつて感得した豐富な生動せる知識とは、劇作上どんなに必要なものであつたか知れない。かくて暢氣極まる貸本屋さんも三年目になつて、一つの不幸事に襲はれたので止めなければならなかつた。

即ち天保五年、默阿彌十九歳の七月三日に、慈愛深い几帳面な父に死別れたからであつた。
もと〳〵父は餘り壯健な體質ではなかつた。父の持病は脚氣で、その爲めに腰が立たなくなつた事もある。其の時には氣丈な姉が孝心深くて、父の爲めに堀の内の御祖師樣に百日法華の願をかけ、やがて起居が自由になつたといふ話もある。亡くなつた年の六月、山王祭りの見物がてら親類へ行つた。すると急に差込みが來て倒れ、駕籠で送られて家へ歸つたが、それから思はしくなく七月に到つて歿したのである。五十三歳といふ男盛りであつたのに、脚氣衝心ででもあつたか、脚氣の毒で取られたのだと言傳へられてゐる。

五

父が歿すれば、長男格の默阿彌が當然家を嗣がなくてはならなかつた。所がこれまでがこれまでで、家を外にして遊び歩いた、藥の利いた道樂者になつてゐたので、家業の質商に就ては殆ど何等の智識もなかつたらしい。口上茶番には縱横な才辯を振つた默阿彌も質札をどうつけてどう控へるのやら、それには手も足も出なかつた。唯質屋の息子として育つただけに、附きもの丶觀世撚が人並勝れて器用であつたといふに過ぎなかつた。勝手氣儘に賑やかな場所々々と進んで歩いてばかりゐたなまけ者には、しかつめらしく帳場格子を控へ澁い顏をしてゐなくてはならぬといふ、堅氣な生業が手につか

なかつた。むしろ苦痛であつた。

そこで自分には此の業は襲げないと見込をつけ、改めて弟に讓る事とした。『八笑人』の左次郎も、『生れついての呑太郎、年中續く夕べ氣に受くる家業もうるさしと弟右之助に相續させ』て、自分は隱居の身になつたのであるが、何處までも左次郎式にできてゐたのである。

此の時弟の金之助（呼び慣はしには金三郎）はまだ十八歲であつたが、默阿彌とは打つて變つた、落着いてむづりとしたおとなしい人物であつた。兄の默阿彌が祖父の血を享けたものならば、これはまた父親まる出しといふ堅偏人であつた。從つて始終家に居たから、生業をさして出來ないこともなくそれに氣丈な姉が後見をしてくれることになつた。

姉の淸は此の時廿七歲であつた。後年に『女丈夫と言つても差支へない人だらう』と默阿彌が人に語つた通り、父の歿後を兎も角も持堪へたのは姉の力であつた。さう美しい方ではなかつたが、人前へ押出して決して馬鹿にされないだけの見識を備へた、しつかりした女であつたといふ。腹違ひながら默阿彌を殊に愛したので、母と相談しては道樂の尻を何度拭つてくれたか知れない、默阿彌に取つては最も感謝すべき人であつた。

家との關係を明らかにした默阿彌は、再び前ののそらく者に返つた。相も變らず以前の友達を集めては、八笑人の生活を蒔き直したのであつた。狂歌も詠んだ。戲文も作つた。冠附ものは附、折句

五文字等の雜俳を、何でも御座れで手當り次第に器用にしてのけた。前後六年間も彼處此處を歩いて磨き上げた手腕には見るべきものがあつたであらう。特に其の最も長じたものは茶番であつた。八笑人のやうに茶番狂言の趣向を立てゝ屋外劇を試みるといふ事もあつたか知らぬが、今現に殘されてゐるものはしかた茶番、口上茶番ばかりである。いづれも茶番狂言の緊縮せられたもので、個人々々の才能に依頼する所が殊に多い。頓才的趣向的乃至三題噺風の手腕の有無は一目に瞭然され、又それによつて支配されるが如き類ひのものであつた。

芳々といふのがその頃の默阿彌の號であつた。八笑人の生活以來、此の號を以て雜俳の點者となり茶番連の牛耳を執つてゐたのである。劇場裏の人となつてからも、趣向に關した遊び友達としての附合には芳々と呼ばれた事もあつた。かの津藤や嵐璃寛の手紙などには『芳様』としたのが見當る。芳芳と號したのも洒落たもので、吉村芳三郎だからさうしたのである。同人中の杵屋源三郎が杵源と號し、土屋の辰さんが土辰と號したのと同じであつた。

默阿彌の主宰してゐたのは司馬連中といふのであつた。芝の金杉にゐた頃だから芝をもぢつたものであらう。此の連中の口演した茶番の勝れたものを集めたのに『朝茶の袋』といふが遺つてゐる。默阿彌によつて書殘された最も古い、最も若い時のものである。天保五年九月吉辰とある所から推せば父に別れた年時から二月目にできたものである。父の死は默阿彌に大なる憂鬱を値しなかつたか、そ

れとも以前のを此の頃に淨書して、集にしたものか定かでない。筆記のしかたは極めて几帳面で、芝居に行はれた、丸い字で書かれてある。

『朝茶の袋』には總計廿五番の口上茶番が記載されてある。作者の名前數は十九で、森萬、森秀、東書堂、伊勢辨などといふ名前がある。金八女とした女の名も見える。その中で芳々のが七番、稻傳と杵源のが二番づつあつて、他は一人で一番づつしか載せられてゐない。秀逸のばかりを集めたものであらう。現に存してゐるのは此の第一集のみであるが、第二集に默阿彌の芳々が述べた序文といふのが、他の手帳に書留めてある。『根にかへる花、谷に入る鶯、又立返る春に逢ふめでたきためし幾とせもつきぬ趣向の茶番連、各々才物の遊ぶる所にして予が如きの及ぶ所にあらず。蓋し此の草紙は四方の邪君子の茶番を書きつけ置きしに、予が愚十の趣向も二つ三つ共數に入りしは云々』といふのである。『朝茶の袋』もちやうどかういふ風にして出來たものであらう。何しろ十九名廿五番中七番だけ芳芳で、續く次點が二番づつ二名といふのを見れば、どんなに芳々が茶番の作者、趣向者として幅を利かせてゐたかが想見される。自分で編輯したから、手前味噌で數が多かつた譯ではあるまいと思ふ。

茶番の題には『塵積つて山となる』だの『二階から目藥』などと俚諺に取つたのもあるが、『義經腰越状』、『お俊傳兵衛、堀川』などと芝居から來由したのもある。『三月』、『七月』、又は『馬士』、『革羽織』などといふのもある。芳々のには、『是に限る』、『草』、『生竹の細工』、『一の谷』、『蛙の面へ水』、『五月』

(二〇頁參照)

『飛脚』等の七番がある。此中で體裁の異つたものを一つ二つ擧げて見よう。

蛙のつらへ水――『蛙のつらへ水と申題で御座り升故、蛙を御覧に入升（ト墨塗りのしやくしを出し）是がおたまじやくしで御座り升。初めはどろ水に住みますさうで御座り升。是もどろ水に住みまして飯もりと申升。ケ様に塗つて御座り升と美しう御座り升から客が大勢御座り升が、つとめが悪いかして客が皆かへる／＼と申升さうで、内證でもいろ／＼しおきも致升して、小刀ばりや何かで責めまして、此の以後客がかへるとつらい水責めにすると申すさうで御座り升が、其様に言はれて升ても何ともおもひ升ン（しやくしへ水をかけて見せ）しやァ／＼としており升から蛙のつらへ水で御座り升う。此しやくしも當家で借物で御座り升から、景物はかはず（蛙、不買）で御座り升。』

これなどは、杓子一本ですませた口上茶番で、比較的分かりもよければ單純でもある。中には次の『草』のやうに、長唄を一くさり置いてから取かかるのもあつた。『草』の方は『天地人の一つ』と朱點の入つてゐる極附のものである。處々吾々には解らない所もあるが、參考の爲にお目にかけよう。

（長唄秋の種）「包めども出て空行くかりがねはあとと先とになきつれて（中略）月のもる夜の物思ひ秋の七くさ咲きそめて（下略）――芳々「ヤレ／＼くたびれた／＼（ト捨ぜりフにて出になる。着附旅なりにて草箒を持つ）「今夜の茶番の題が「草」と申す題故、ナニガ武藏野の原へ参りまし

て方々尋ねました所、殘らず枯れまして持つて參りますやうな草も御座り升ず、少々枯れ殘りました草を持つて參りました（ト草カゴを下し）、武藏野の玉川の岸通りは皆あしで御座り升（ト足駄を一足出し）あしだで御座り升。すゝで塗つて御座り升からすゝき（ト鼻緒を返して見せ）、鼻緒を返し升れば緒鼻（おばな）で御座り升。はぎは下つゆと申升（ト牡丹餅を出し）萩の露で御座り升。尤も尾張町の桔梗屋で製しましたので御座り升。かるかやは（ト芝口の訥升さんの箱入はみがきを出し）訥升さんのお箱で御座り升。藤ばかまは蘭で御座り升（ト箙の先へ扇をつけ）きやうらん（狂亂）で御座り升（ト扇を取直し）是も夏はちようはうで御座り升が、只今時分はふようで御座り升。男へしに女郎花は尾野の賴風の故事が御座り升て何か色取ださうで御座り升（ト香箱に椎の實筆を出し）是が男かしは女がしはで御座り升。菊は長壽を保つと申升（ト燒物の花ごまを出し）菊の花の見立で御座り升。いたつて壽命が長う御座り升。おぎは上風とか申升上風ならふり出し位でよろしう御座り升う（ト双六を出す）此の双六も春の持遊びで御座り升が只今時分で御座り升から秋かいとうでもござり升う。是だけ秋草をもつて參りましたがまだ籠の底に落葉が御座り升（ト木の葉をせんべいを出し）是が落葉で御座り升。是は風が強いと吹とび升（ト連中へまく）。

『草』は歷卷の作と見えて、他には天地人中に加はつたものはない。此の他長短さまぐ\のはある

が、何分穿ちや洒落に難解な點が多いのと、下がかりが多いのとで公表することを憚らねばならぬ。
茶番以外の狂歌、繪俳諧等に就ては尚次々に述べる事とする。然し茲に注目すべきは、默阿彌が斯く口上茶番に就て、特殊な卓越した技能を揮つた點である。かかる頓才的趣向的才能はやがてその作物の生命の一半であつた事を想はしめるのである。これより廿年を經て來る所の小團次との結託時代にまで、默阿彌を押し進めたには此の才能の與る所が甚だ多い。又後の三題噺、繪合せ、遊食會等に默阿彌を趨らしめ、もてはやされたのも此の才能故に他ならぬ。
一つの光明をも忘れ果てゝゐた八笑人的生活も、やがては其の生涯を光明に導く動機となつたのである。

六

父の死後二三箇月はなす事もなく、ぶらり〳〵と日を送つた。——狂言作者になつたらばと、出來心のやうに思つたのは、以前から度々默阿彌の頭に浮んだ事であつた。けれども家が貧しいといふではなし、未だ歳は若し、別段急にそれを求めて一生の職にしようとまで突きつめた考はなかつたかも知れない。それが或る機會で、踊りの師匠澤村お紋の口入で、その縁者なる後の五代目南北當時鶴屋孫太郎と呼んでゐた狂言作者の門に入るに至つた。

お紋は澤村四郎五郎といふ役者の娘で、其弟は澤村東藏と呼んで相當の女形であつたといふ。踊りの師匠をして芝の宇田川町に住まつてゐた。宇田川町と言へば金杉とは二三町離れてゐるかゐない所で、默阿彌もそこへ踊りを習ひに通つたのである。此の頃は女は勿論男とても、少し洒落た道樂氣のあるものは擧つて遊藝を習つた時代である。お淨瑠璃に長唄、三味線踊りの一手位は、町家のものから武家方にさへ流行つたのである。なまめかしい看板をかけた横町新道の女師匠の許へ通つて浮身をやつすといふのが隨分とあつた。默阿彌はお紋の許で踊りは少し習つたが、性質が惡いからとて斷られたといふ。其の後の事、去るお邸へ招かれて素人芝居を演じた時、默阿彌が瀨ノ尾をやつた。すると白だけは海老藏そつくりであつたが、身體がちつとも動かなかつたといふ話もあるから、踊りは惡かつたであらう。

踊りはいけなかつたかも知れないが、茶番の才能に富んでゐた位だから、お紋の所に溫習でもあるか何か催し事でもあれば、先に立つていろんな趣向を凝らしてやつた。素人芝居の依賴でも受ければお紋は囃子方を、默阿彌は舞臺の指圖をし、段取を敎へなどした。殊にツケを打つのが上手であつたとかいふ。そんなこんなで、お紋は芳三郎を芳樣々々と珍重し、その器用さと工夫の才とを愛して別扱ひにしてゐたのである。そこでお紋は或る時緣者に孫太郎南北のある事を告げて、狂言作者になつてはどうかと勸めた。芳三郎はもとより好める道の事ではあり、早速弟子入りする氣になつた。

默阿彌が始めて鶴屋孫太郎と近附になつたのは、天保五年十月十二日、十九歳の秋にお紋に引合はされたのである。孫太郎は此の時四十歳で、まだ立作者にはなつてゐなかつたが、其の入門を承諾した。此の時の若き芳三郎の胸中は、どんなであつたらう。

此の翌年卽ち廿歳からは、芳々に代うるに勝諺藏を以てし、一歩を作者としての生涯に轉ずるのであるから、自ら別の境地を拓く事になる。振り返つて見れば、十四歳に始まる七年間の放縱なる生活は默阿彌に何を敎へたのであらうか、唯々躍動せる人生そのものであつた。雜學そのものであつた。先づ生ける人生は最初に默阿彌を醒しめた。次に當時の俗文學と稗史院本等の耽讀によつて刺戟されそれに性來の芝居好きが手傳つて、狂言作者としての生涯を誘導するに至つたのであらう。

第三　劇場第一期

一、江戸と芝居――役者の人氣――當時の劇界――二、師孫太郎南北――勝諺藏として見習作者――甲府行き――その日記――傷寒を病みて退く――三、第二の「八笑人」――雜俳と――姉の死――四、河原崎座出勤――修業ぶり――一人前の狂言方――「勸進帳」の稽古――海老藏と――五瓶と――弟の死去――實家相續――五、堅い決心――再勤して柴晉輔――二三枚目作者――六、三座の移轉――河竹新七と改名――初代河竹新七が事。

一

芝居は實に江戸の花であつた。

前にも述べた通り、江戸は町人の時代であつたから、俳句、狂歌、川柳より戲作に至る通俗文學が持囃され、都會藝術、平民藝術としての芝居も比類のない大發展を遂げたのである。

飛び離れた新開の町、交通不便な江戸――猶更、窮屈なる階級制度と冷やかなる儀容とに包まれた江戸、嚴重な封建制度の下にあつて、自由な旅行さへも禁ぜられてゐた江戸に於ては、その單調な町

人生活を彩るものは、實に花街と芝居とであつた。江戸に芝居と吉原とがなかつたならば、江戸人は如何に寂寞を感じたであらうか。典雅なる能樂に一境地を拓いた足利時代の貴族は知らず、我江戸時代の平民は、空想的にして官能的なる芝居に、そのほしいまゝなる歡樂を求め、多大の感謝を覺えたのである。

『世の中は團十郎や今朝の春』なる一句は、歌舞伎芝居と役者とが如何に江戸人を魅してゐたかを明らかに語つてゐる。寛政から、默阿彌の生立つた化、政、天保にかけて殊にそれが甚しかつた。江戸ツ兒として、狂言の噂、役者の品定めの出來ないものは殆どなかつた。芝居の內幕、役者の內輪話にまで通じなくては通人とは稱されなかつた。その勢は町人、平民に留まらずして、上は千代田の大奥から六十餘州の大小名、旗本八萬騎、邸々の宿直噺に至るまでの流行を促がしたのである『寢起きから芝居噺の長局』に春を埋むる御殿女中が、芝居にあこがれ役者の面影を描くのはどんなであつたらうか。役者の紋所を簪や扇の上にまで寫したほど狂熱的であつた。上つ方で狂言師を傭つて芝居の眞似事をする世の中である。茶番狂言が流行したのも當然であつた。役者の錦繪もどん／＼できた。草雙紙の挿繪も役者の似顏に賴つて人氣を集めた。正本仕立の戲作も出來た。今でさへ見られないやうな黑人じみた評判記が跡から／＼と版行された。それにつれて世間の風俗に對する役者と芝居とは侮るべからざる支配力を持つてゐた。衣服と言はず、日用品と言はず、すべて流行の源にもなつてゐた。

高麗屋縞、宗十郎頭巾、路考櫛、半四郎下駄などゝ算へ立てたら際限もあるまい。藏前の札差しを始めとして、通を誇る江戸ッ兒で役者を贔屓にしないものはなかつた。世間咄の態度から、日常の座作進退まで、贔屓役者の身振聲色で押通した者さへあつた。

かくまで〳〵人氣を集めた芝居の繁昌はまた格別であつた。大江戸の眞中、堺町の中村座と葺屋町の市村座とは相接して歡樂遊戲の別天地を成し、大茶屋小茶屋に圍まれた十三間間口の芝居小屋――梵天建てたる櫓を揚げ、鳥居風の繪看板に彩られ、組物格子の鼠木戸に客を導く大建築は、如何に彼等の胸を躍らしたであらうよ。自體世の中も人間も、共に芝居じみてゐて芝居らしい生活を追つてゐたのである。芝居が滿都の人氣を集め、その燒點となつたのも不思議ではない。

見物人は朝の白々明けから夜晩くまで、飽きもせずに心行くまで醉はされ、たんのうして歸るのであつた。一度木戸を潜れば、彼等は期せずして有頂天になり、芝居の氣分に漂はされた。芝居じみた本性を遠慮なく發揮して、或は聲色を使ひ、或は半疊を打ち込み、たわいもないツラネに聲を涸らして喝采した。見物してゐた武士が舞臺の上に躍り上つて『親不孝の奴め、手打に致す』と言ひながら刀を拔いたこともあつた。天下茶屋の元右衞門が蜜柑の皮や土瓶を打ちつけられたり、土間に逃げ込んだ敵役が、中にゐた中婆さんに尻を抓られたなどゝいふ話もあつた。小一にゐる客が、役者のかんで棄てた鼻紙を守袋に入れたといふやうな、懷しらしい話も幾らも傳はつてゐる。

默阿彌もさうした芝居狂氣の一人であつた。どんと開いた芝居の初日に押し返されながら見て來て、それから膏の乘つた中日前後に見直し、その後でもう一度見るといふ仲間であつた。芝居も一つのを三度位見なけりやお話が出來ないと言はんばかりの勢であつた。

かうして育つた結果は默阿彌も劇場裏の人となるやうに導かれたのである。中年から芝居に入つて作者となり役者となり、または囃子方などになつたものには、さうした徑路を取つたのが多い。默阿彌が見習作者の頃世話になつた三升屋二三治もさうであつた。二三治はもと伊勢屋宗三郎と言つて、淺草藏前の札差し仲間でも幅の利いた家の長男であつたが、七代目團十郎(海老藏)を贔屓にして道樂半分に作者となり、芝居者を集めて贅澤を盡したので、終には家を逐はれて劇場の人となつたのである。或は旗本の次男、或は士分の者、侍醫の悴などにも、芝居好きと放蕩の擧句、かうした生涯を辿つたものも、此の時代に少くはなかつた。それほどに芝居は江戸人を捉へ、それほどに役者は人氣を持つてゐたのである。

默阿彌が葺屋町の市村座へ出勤したのは、二十歳の春、天保六年で、寛政から化、政へかけての全盛は見られなかつたが、まだ〳〵盛んなものであつた。亡くなつた九代目團十郎にせよ、五代目の菊五郎にせよ、未だ生れない前の事だから大概見當もつく。

その春の狂言は、猫石の怪や權八のある『梅初春五十三驛』で、座頭は先代菊五郎の祖父に當る三世菊五郎(梅壽)であつた。まだ五十三歳といふ男盛りの年配であつた。美男で以て、利かない氣の勇み肌が江戸ッ兒に好かれ『お祭佐七』のやうないなせな世話物と『四谷怪談』のやうな怪談物に工夫を凝らした藝とで、當時一方の人氣役者になつてゐた。

これと對峙してゐたのが七代目の團十郎で、つい三四年前、忰に八代目を讓つて海老藏になつたばかり。即ち九代目の父で此の頃は四十何歳かでパリ〳〵した日の出の勢ひ。小柄ではあつたが眼玉の大きい名調子の、時代、世話、武道と荒事に長じ、實惡はもとより生世話にも成功したといふ、總括的完成的な大極々上々吉の役者總卷軸であつた。我儘で贅澤を盡してお構ひとなつた、あの海老藏が手一ぱいに活動してゐたのである。天才的で、愛嬌と人氣とで有名だつた八代目の團十郎は、まだ十三歳の少年ながら、一廉の座頭格を占めてゐた。

海老藏と菊五郎とを他にしては、此の年の十一月に七十二歳で一世一代の松王を勤めた五世松本幸四郎といふ元老が控へてゐた。鼻高幸四郎と呼ばれたくらゐ鼻の高い、凹んだ眼の瞳が小さくて而かも凄い睨みの利く、天下一品の仁木役者がゐた。濡事師に起つて實惡より生世話までを兼ねて、自然主義的劇術をも創造した、精力的な彼れはまだ矍鑠として光つてゐたのである。彼れが役者の氏神、古今無類との贊辭を得たのは天保五年のことであつた。『澁團』とまで呼ばれて、寫實の活歷的藝風の

先驅をなした五世團藏も、二三年前から江戸の人となつてゐた。江戸ッ子氣質で喧嘩早かつた『よい〳〵三津』の三津五郎もゐれば、これと對して和事に秀でた『刈萱』や『鈴木主水』で有名な五世宗十郎も舞臺の上に働いてゐた。『天下茶屋』の元右衞門で名代の大谷友右衞門が、三角眼に番臺面を振りまはし、四世歌右衞門が度々阪地より下つて江戸の人氣を一身に集めたのも此の頃の事である。女形では眼千兩の大太夫と謳はれた五世岩井半四郎(杜若)が、その二人の子と共に、三座の立女形を獨占してゐた。假五世團十郎はあらずとも、梅玉歌右衞門は來らずとも、『芝居の人氣』を落さしめるやうな事はなかつた。所謂歌舞伎劇式の芝居の發展し盡した爛熟期であつた。やがて此の傾向に新生命を吹き込んだ小團次は、まだ大阪の濱芝居で米十郎といふ名前で密かに修業を積んでゐたのである。

默阿彌が始めて鶴屋孫太郎の弟子となつて、勝諺藏といふ名を貰ひ、作者部屋の人となつたのは、かういふ時代で、かういふ役者が江戸の舞臺に音頭を取つてゐた時のことであつた。これらの名優の多くは、これからの默阿彌とさまざまな關係を持つてゐるのである。

二

默阿彌の世話になつたのは他にもあつたが、師事したのは孫太郎南北一人であつた。大南北として知られた、怪談物や世詁物の名作者たる四世南北の聟に、三枚目までの作者になつた勝兵助といふの

があつた。その養子が此の孫太郎南北である。つまり四世の孫に當つてゐて五世南北を相續した人である。寛政八年に生れて嘉永五年の正月廿一日に五十七歳で歿した作者で、南北の名をば天保八年に襲いだのだから、默阿彌の弟子入りした頃はまだ鶴屋孫太郎として作者連名の中軸を占めてゐた。單に『養父の狂言をよく呑み込みし人』と言はれてゐるだけに、大南北の祖述者に過ぎない。創作した作物を澤山に遺した作者ではなかつた。默阿彌との間には、子弟の關係は結ばれてゐたが縁は薄かつた。同座した年數もほんの算へる程で、南北風の作意を影響されたのも特に此の人からと限つた譯でもない。

師匠南北に手を引かれて始めて出勤した頃は、まだ三座とも猿若町へ引けなかつた時分だから、市村座も葺屋町にあつた。作者の顔觸れは、立作者が三升屋二三治で、其の下に中村重助と鶴屋孫太郎とが同格で作者部屋を支配してゐた。默阿彌は二月から出たのだが、興行中に出勤したので名前はまだ出なかつた。從つて作者としての仕事も別にしなかつたであらう。通常の見習同樣に、朝も早く來て部屋の掃除をしたり、水を汲んだり、火をおこしたり、或は上の作者の用達しなどをしたに留まつてゐた。

次の五月興行には『初日前に書拔、淸書をなす』とあるから、役者に渡す書拔と正本の淸書を一部分やつたものと見える。これも通常の見習が先づ最初に踏む順序であつた。けれども默阿彌は前以て

貸本屋時代から芝居の內部に立入つてゐたので、そんな仕事は物珍らしくも不慣れでもなかつた。自分が茶番なんどで散々やつて來た事を繰返した位なものであつたらう。此の五月を初めとして、師匠から與へられた勝諺藏といふ名前が紋番附の作者連名の中へ出た。一番小さく細い字で師匠の傍へ載つてゐる。勝といふ姓は、大南北の前名が勝俵藏であつた所から、南北の弟子には用ひられてゐた。
六月には師と共に甲府の龜屋座へ行つた。それは梅壽菊五郎の實子で和事師の三代目松助が座頭として甲府へ招かれたので、其の狂言作者として出かけたのである。默阿彌が旅芝居へ行つたのは天にも地にも此の時一度限りであつた。

天保六年の六月十九日の朝四ッ半時に出立して、大宮から府中、日野、八王子、猿橋、石和を經て五日がゝりで甲府へ着いた。一座の開演すべき龜屋與兵衛座は、其の頃西江戸と呼ばれた甲府で第一等の劇場であつたといふ。二十九日が初日で七月の十六日まで打續けて景氣はよかつた。狂言は身延に緣を持たせた『日蓮記』であつた。歸途には身延へ參詣し、二三人の連と共に船で富士川の急流を下つて岩本に上り、それから沼津、箱根、小田原へ出て七月二十二日の朝、『目出度江戸入り』をした。

此の一ヶ月に餘る旅行は默阿彌にどんな興味を齎したか測り知られない。始めて江戸の地を離れて自然に接し、年來夢見た望みを遂げて、役者と一緒に暢氣な旅をしたのである。默阿彌は此の間の消息を興味深い明細な日記によつて表白して居る。

日記には、何處の何屋で晝食をした。すると其の家の前にかういふ地藏があつたとか、かういふ道敎へがあつたとか、渡し場で船頭に叱られて詫事をしただの、或は芝居が大入りで『目をまはせし人三人あり』などといふやうな事まである。富士川の急流や、難所の釜ヶ淵の事などをも印象的に書いてある。殊に其の間々に挿んで說明にした寫生畫は、ちよつと素人ばなれのした筆致で、成程かうもあらうかと思はせるに足りる。默阿彌の丹念で綿密な性質、筆まめな所はもう其の頃から備はつてゐた事を證明してゐる。その中に『番附の畫をかく、筆耕重助』などともあるから、師匠も先輩も默阿彌の器用と畫心とには一目おいてゐたのでもあらうか。また旅芝居の番附にしても、それが描けたといふ事は異例とすべきであらう。

九月の市村座は大當りの『裏表忠臣藏』であつた。菊五郎の師直に九太夫、海老藏の定九郎、勘平、由良之助、團十郎の力彌といふ立派な顏觸れであつた。此の興行に默阿彌は每日二三治の宅へ通つて一と場づつの書拔をして、到頭一日中の狂言を一人でしてしまつた。二三治宅でしたのは當時の作者界の習慣として、書拔でも淸書でも立作者の宅へ集まり机を並べて一緖にしたからである。二三治も默阿彌が一人で全部の書拔きをしたのを見て、その熱心さを知つてか、彼れの『世話で菊五郎附きに』なつたと手記してある。つまり菊五郎に關する作者方面の仕事を特に受持つ、附人作者に推薦してくれたのであつた。

斯くやうやくにして、見習作者として認められるに至つた此の興行中に、默阿彌は不幸にも風邪に冒され、それが昂じて熱病になつた。陰性の傷寒だとも傳へられてゐる。病氣は此の年の末になるまで全快しなかつた。

病氣になつてからは、止むを得ず座を引いてゐたが、つひに『姉の意見により芝居を斷』つて退いたのである。默阿彌の第一の劇場生活は、七箇月の見習作者を以て一段落を告げなくてはならなかつた。

三

翌年は病氣だからとの理由で芝居には出なかつた。默阿彌を愛した姉も其の健康を氣遣つたし、自分も芝居へ强ひて行かうとはしなかつた。其れ程一心に芝居の人になりたいといふ希望は、多少稀薄にされてゐたかも知れない。始めは唯だ憧憬の眼を以て熱望してはひつたのであるが、扨その中の人となつて見れば、さま／＼の情實と惡風とに辟易したことであらう。

天保七年からは『雜記』とした小さな帳面へ、時々の出來事や見聞した事を書留めた手記が殘されてあるが、其れによつて見ても芝居に無關係の間も、さう身體が惡かつたのではない。十月から病氣したのだが、其翌七年の五月からは、そここゝと出歩いてもゐれば、別に床に就いた樣子も見えない。

唯『浮世をのらりくらりと渡』つてゐたのであつた。芝居へは二の足を踏んで戲作者にならうとした形勢さへ窺はれる。矢張り此の時代の遺物で『叙跋集』として京傳、馬琴、三馬と限らず、あの頃に流行してゐた合卷、讀本の叙文、跋文等をこくめいに書き蒐めてある冊子によつて見ても、戲作に對する研究、熱心が通り一遍の嗜好だけではなかつた事を想はしめる。

そこで『天保七年八年素人となり、雜俳を好みよし〲といふ名にて折句五文字などの連に入り遊びゐたり』とあるが如く、此處に再び第二の八笑人的遊樂時代を持來したのである。七年八年は二十一歳と二十二歳の兩年で、雜俳の點者芳々としての全盛であつた。此の方面では年限も短かつたし、後へ名を殘すといふ程ではなかつたが芝の明神前へ『千羽鶴』といふ點者の店を出したと言はれる位だから、相當に芳々の名聲を揚げてゐたものと想はれる。別號には柴狩山人、不通などといふのがあつた。

冠附、五文字、ものは附等の雜俳を他にしては、狂歌、狂句、折句、なぞ〲もあつた。繪俳諧といふ事もあつた。都々逸、トッチリトン、一中くづしと言つた流行唄なども自作した。が、殘念な事にはそれらの多くが、明らかに自作か他人の作かを見分けがたい事である。

折句といふのは、二字、三字又は四字位の題を出し、それを五、七、五の調の頭へでも又は中へでも讀み込んで、氣の利いた句にするといつたもので、芳々に次のやうなのがある。

「ひともし」の題に、引ける手も取る年妻の持殺し。
「と、と、と」の題に、鳥追の取る阿彌笠に年が知れ。

　　どなられて戸までひなどゝとぼけてる。

いゝものは附で『嬉しいものは』と題を出されて『羽目にぶッつけた頭』とつけて御牢内の空氣を描いた句が入つた時、默阿彌の芳々が高點をつけたといふ話も殘つてゐる。

狂歌も當時の流行であつた。泉岳寺の開帳へ參詣した歸りに、八文じるこを喰べて、

　　一膳が八文なるにしるこ餅、などや甘みのうすくあるらん。

と讀めば、伴友の白水樓が直に筆を取つて、

　　八文で甘けのなきをさみなすは、ふりのお客のさがにぞありける。

と返しをした事もあつた。芝居へ行つて『葺屋町の盆狂言に九藏、羽左衛門、榮三郎などにて（二番目）に山莊太夫を勸めたるを見て』、

　　からき世につれて芝居も小つぶなる役者がなせる山莊太夫。

と讀んだ事もあつた。天保の初年は一般に不景氣でおまけに凶荒續き、物價高直となつて世智辛かつたので、役者の小柄をかけてかう洒落れたのであらう。また『何月何日の夜泉屋にて天狗狂歌といふをして遊ぶ』として、

末廣の（泉萬）子を壽きて（高雨）かつ多く（土辰）龜の齢の（芳々）御世ぞ目出度き（船定）としたのもある。こんな附合せのやうな變態の狂歌をもやつたらしい。『瓢箪の酒に心の駒もぬけ』の手並から推せば、狂句や川柳も相應に行けた筈である。

なぞ〳〵にも、『低い火の見』とかけて『無銘の刀と解く、心は鍛冶が知れぬ』などといふのがある。謎々や判じ物、當て物なども盛んに行はれたやうである。

『茶番を兼ねし物好きは今流行の繪俳諧』といふ文句が、芳々の筆になつたある茶番集の序に見えるが、繪俳諧といふのは後の繪合せ、又は嵌め畫などの總稱である。矢張り兼題を出しそれを見立てて案じた畫組を卷に仕立て、點者が評點を加へるものであつた。『何月何日繪俳諧の開卷あり、高點束よし〳〵、西誰某』などと記したのが『雜記』中諸所に發見される。此の頃はすべてさういつた風の酒落れた、取合せの面白い、趣向めいたものが一般に流行したのである。

茶番はもとより引續いて行はれた。

『某月五日柴井町土屋に茶番を催す、兼題番組』として『遠からん者はしやぎりの太鼓の音にも聞け、近くは寄つて目にも見よかし茶番の番組』と前書きして、

兼題　四季遊山盡

春野、梅、櫻、鹽干、凉、網、蟲、月、茸狩、紅葉、雪。

などと引札めかしたものさへある。又ある時『扇箱』といふ兼題を得て

扇にもいろ〳〵御座り升が、當時流行の扇を御覽に入れ升（と菊五郎半四郎の錦繪を出し）是が重扇（菊五郎の紋）に三ツ扇（半四郎の紋）で御座り升。模樣はどちらも日の出で御座り升。尾上の松には鶴も巣籠り梅我の美名は龜井戸に名高く、たけ（他家）に眞似のしても御座り升ぬ。いづれ劣らぬ一對の扇、此のあふぎにはお箱がいかい事あり升。

と口演した事もある。自作の茶番やら雜俳の集を拵へて『たゞは言文摘』と名づけた由も見え、其の序文も書取つてはあるが、肝腎の集冊は何處へどうなつたか行方が知れない。

此頃の習慣として、すべてさういつた催しには、高點を得たものには何かしら景物の出るのが常であつた。中には景物ばかりが目當で生業にしてゐるものさへあつたといふ。反物、手拭のやうなものから日用品の如きものをば、開卷の當日席へ飾りたてたものだといふ。景物を飾るにも趣向を以てしたので、默阿彌はまたさういふ事にも巧みであつた。芝居へ入つてからも、聯合せ、扇合せ、手拭合せ等の趣向や景物を見立てゝ飾るに不思議な才能を持つてゐたとは、未だに故老の間に噂される所である。芳々の頃、或る時の繪俳諧の開卷に趣向した景物が出來た。兼題が『引』といふので『引盡し』の景物にしたのである。

一「引廻したる六枚屏風」と申すは、言はずと知れたうちはおいらんで御座り升うト、おいらんの團

扇を。

「引重ねたる錦の夜具」と申すを地口でお景物を差上げます。これは「ひっかゝれたるにひきのにやご」で御座り升ト猫の子二匹を出す。

といふやうな類である。猫の子を二匹貰ふはとんだ災難ながら、こんな思ひも寄らぬ趣向が悦ばれた。

かうして雜俳や綺俳諧や茶番をして、遊び廻つた二年間の友達を調べて見ると、矢張り幼なじみの八笑人仲間であらう。いつも茶番集に見えた、司馬連中の名前が交つてゐる。その中の土辰と號するのは、芝柴井町の土屋の辰さんと言ふ人で、後年默阿彌が本所へ居を構へた七十幾歳かになつてから訪ねて來て、心置きなく一日話して歸つた事があつたさうである。大抵は同年輩の遊び仲間であつたが、中にはずつと年上の者も交つてゐたものと見える。『緣枝園の葬儀を送り、年頃まめやかなりしと聞きしが此のきさらぎの二十四日にみまかりぬるを悼みて』として、

老いてさへよりも戻らず強かりし命の綱のいかで切れにき。

とあるが、これで見るとまんざら二十歳や三十前後の友垣ではなかつたやうである。一寸俳句の一つもひねらうといつた町家の連中が、上下老若を論ぜず、がや／＼と集まつては遊び散してゐたものと想像される。

家に就いては、些の苦勞もない芳々は、そんな催しに凝る外、陽氣のよい春先や秋晴などには遠足に出かけた。八笑人の遊行にならつて、茶番めかし彌次喜太めかして歩き廻つたかどうか知らないが二三の同志と伴れ立つては散策した記事もある。堀の內の御祖師樣へも參詣した。四谷のお岩稻荷樣へも出かければ木下川の藥師へも行つてゐる。淺草の觀世音を始め各處の開帳緣日には缺かさず出かけてゐる。何でも珍らしいもの／＼と搜して見歩いたやうである。その間には芝居見物もすれば讀書もした。遊びにほうけてゐる默阿彌の身體はなか／＼に忙しかつたであらう。默阿彌が後年人に語つて、自分が遊樂に耽つてゐる頃には天保一枚、　ら百文あれば一日中ぶらりと遊び廻つて來られたと語つた。それはかういふのであつた。芝の家を出て兩國まで來て、兩國の五色茶漬を喰べてこれが卅二文、湯に入つて八文、髮を結ふのが十二文で十六文が寄席であつた。殘りの三十二文は小遣として何にでも使つたのである。默阿彌もかうした生活を趁うてゐたのであつた。一方では斯く其の頓才的技倆を揮つて「安樂屋よし／＼房」とまで自稱してゐたが、其の家庭には一つの不幸が起つた。姉の清が天保七年の九月二十四日に歿した事である。夫も迎へず、唯々家の爲を思つて働き通したのに三十歲で早世してしまつた。三年前に父を失ひ今又茲で、愛してくれた姉に逝かれてどんなにか心細かつたらう。けれども弟がしつかりしてゐたので、まだ翌年一ぱいだけは遊樂を續ける事が出來た。

四

默阿彌も二年間をのらくら者で過したが、家庭の事情を顧みて、何か身に定まる業を求め、少しは自活の路を開かねばならぬと考へてはゐた。即ち第二の芝居生活がやがて始まる事となるである。天保九年（二十三歳）の正月から『本屋半七に勸められて』、木挽町なる河原崎座へ見習作者として出勤し、勝諺藏の以前に歸つた。

本屋半七は前に市村座で同座した朋輩で、此の時には三枚目の作者に進んでゐた。立作者は師匠の南北で、去年から南北を襲名して一座を持つてゐたのである。

此の第二の芝居生活こそは默阿彌に取つて試金石であつた。決心も態度も自ら別様とならざるを得なかつた。而して今度は前の見習時代の經驗に照して、作者仲間の風習又は交際關係に對する政策上、勘當分になつて出勤したのである。それ故家を出る時には、何かやはらかいものを着てゐても、途中の宿で松坂縞の着物に小倉の帶といつた扮裝に化けて行つたのである。それが爲め默阿彌は、人一倍に苦勞しなくてはならなかつたであらう。といふのは、前には金の威光でちやほやされもしたのであるが、今度は裸一貫の勘當分で入り込んだのであつた。然し默阿彌がそれだけに心を勞して、新しき生活に入らんとした決心は、そのやうな困難にも打負かされる事なく、勉勵した甲斐あつて次第に

人に認められるに到つた。

河原崎座へ初めて出勤した時の役者は、座頭が團十郎で、海老藏、團藏、紫若、冠十郎などがゐた第一の興行に默阿彌のした仕事は、單に書抜、清書に留まつたが、三月に繼足した『琴責』に稽古といふものを始めてした。これを手始めに容易い場から稽古をし續け、此年十一月の顏見世興行には三立目（即ち今の序幕）の稽古をした。此處に到つて、完全に『一場の稽古をなし狂言方のあたま數に』入つたのである。即ち見習はまる一年で切り上げる事が出來て俗に狂言方と稱する下の作者になれた。

此の三立目を稽古した時に、すでに白を暗んじたものと見えて『無本にて教へ、頭取小川十太郎に褒められ給金上る』と手記してゐる。記憶は始めからよかつた。作者が頭取に褒められるなどといふ事も異例であつた。これより前、師の南北は座方から斷られ、代つて並木五瓶が立作者になつたのであるが、いつたいならば南北と共に中村座へ一緒に行くべきであるのを、河原崎座で名代の『帳元鈴木屋松藏の手に附き』續けて出勤する事になつた。帳元が引受けたといふのも、餘程目をかけられてゐた證據であらう。

尚此の第一年に記憶すべきは、看板、番附の下繪を書いた事と五月から七、九、顏見世（十一月）と四度まで序開きを書い事である。序開きといふのは『作者の見習俗に（狂言方）が趣向を設けて書くものにて、狂言の中心は物の精靈姿を變へて入込むといふ筋にて、短き一幕の内に所作あり探りあり

見出しありて、末に何の精靈なるわと其の物の姿になり、幕際に芝居繁昌守るべし、何の精靈かたがたさらばと、宮神樂にて幕になる』ものであつた。默阿彌が最初にどんな序開きを書いたか明白でないが、鰻の蒲燒から思ひついて、蒲の冠者範賴を題にして趣向を凝したのがあつたさうである。

又此の見習時代の修業期に、鼻の高い關三の先代の關三十郎（二世、歌山、天保十年歿）が、何かにつけて親切に教へてくれたさうである。後年默阿彌が人の問ひに答へて、今まで見た中で一番巧い役者は、此の關三十郎であると言つたさうであるが、樂屋名人で世間には餘り持囃されなかつた人であつた。其の關三が何かの役で幕切れに花道へ行つて、傘を開くのを木の頭で拍子幕になる役を勤めた事があつて、默阿彌が其の拍子木を打つのであつたが、木はなか／＼難しいもので、傘のバラリと開くのと木頭のチョンとがしつくり合はないので困つてゐた。その時關三が教へてくれて、無暗に私の科ばかり見てゐて打つてはいけない、私の心になつて胸の中で呼吸を量つてチョンと打つて見よといふので、其の通りにしたらば、好い工合に打てたといふ（篁村翁直話―補遺參照）。

顔見世で一人前の狂言方になつたので、翌年からは作者連名の文字も中位の太さになつた。そして正月からは序開きを卒業して、二立目を書き始めた『二立目は作者も見習よりは一段上のものが筋立なして脚色むものにて、一日の狂言の趣きに習ひ、一幕の中にだんまり、所作事だんまりほどきありて見出しになり、本名を名乘り幕際に何の何某かた／＼さらばと刀を擔ぎ見得をなし、片シヤギリに

て幕になる』ものである。これも默阿彌にどんな作があつたか明白でない。

然し、此の時代の專門は作をするといふよりは寧ろ稽古に熟達する事であつた。三月の『薄雪物語』には序幕淸水の場を見事に稽古して退けた。役者は紫若の代りに粂三郎が入つたほかは同じ顏であつた。これだけの大場が滿足に稽古出來るやうになつた時、不幸にも默阿彌は再び病氣にかかつた。『六月よりしつゝを煩ひ芝居を引き、暮まで全快いたさず』といふ目に逢つた。道理こそ十月から後は再びその名を番附面から逸したのである。

默阿彌は生れ立ちは餘り身體が丈夫ではなかつた。殊に此のしつゝを煩ふまでは兎角病身であつたが、此の大煩ひ以後はさつぱりと忘れたやうに健康が恢復して、それからは一生涯病氣らしい病氣はしなかつた。

しつゝは暮に到つて全快したので、翌る十一年正月から再勤した。南北が中村座へ出てゐたので、その方へも名前の載つてゐる所を見れば、中村座へも手傳ひに行つた事があると見える。それとも名義だけかも知れない。此の十一年からは單なる狂言方を脱して二、三枚目の作者の仕事をもした。五月の『騎飾忠臣藏』に於て『二の口、三の口を仕組み二番目を引受け直しを』したとか、九月に『伊賀越』の三幕目、七幕目を補つたとか、或は依賴によつて綺草紙を畫いた事もある。これらは明らかに二三枚目作者の仕事であつた。從つて番附の格も上つて二枚目どころに据つた。けれどもまだ上の作

者から、筋を貰つて一幕なりとも書いた事はなかつた。

倚此の年には默阿彌が、生涯の記憶として忘れ得ぬ出來事があつた。卽ち天保十一年三月に初めて興行された歌舞伎十八番の『勸進帳』に關してゞある。此の芝居によつて海老藏との緣も深くなり、その爲めにどれだけ座方の信用をも增したか知れぬ。『勸進帳』は元祖市川團十郎才牛百九十年の壽を紀念して、海老藏が辨慶を、八代目團十郎が義經を演じたものであつた。作者は並木五瓶、唄三味線は杵屋六三郎（後の六翁）、振附は西川扇藏であつた。

『勸進帳』の稽古は卽ち默阿彌が一手に引受けたのであつた。稽古が次第に進んで行つて見ると、富樫を勤める九藏（後の六世團藏）は非常に記憶のよい人で、二三度も稽古する間に呑込んで、『お先きへ』と挨拶してはすた／＼歸つて行く。海老藏はあれだけの人物に似ず記憶の惡かつた人で、どうにも問答が覺えられず焦れ込んで、九藏の仕打を、禮儀を知らぬ奴だといま／＼しがつたが、扨仕方もないので、默阿彌を依賴して特別に稽古して貰つた。初日の四日程前からは、名代の潔癖家が樂屋の三階に寢泊りして問答の稽古に餘念もなかつたが、物が物で急にも呑み込み兼ねて、何度も繰返す內、當人よりも默阿彌が富樫の白も辨慶の白もすつかり諳記してしまつた。これを見た海老藏は『それではお前さんが附けてくれれば安心だから』と言つて、白の諳誦もそれなりにして初日を出したといふ。

普通の舞臺ならば、後ろへ本を持つて出て附けるに不思議はないが、何しろ能がかりの舞臺でそん

な不體裁は出來ず困つてゐたが、默阿彌が諳んじた以上は無本で差支へないのだから、初日から後見と同じ扮裝で舞臺に出て首尾能くし果せた。海老藏も非常に悦んで褒美をくれたといふ。此の事實は海老藏のみならず、座の者をも感服せしめたといふ。

海老藏との間にはまだ次のやうな話もある。『勸進帳』の前後の事であつた。默阿彌は記憶がよくて熱心だといふので、すつかり海老藏の氣に入つて『入組んだ所は諺藏さんにやつて貰はう』と言ふやうになつてから、或日樂屋で、何か稽古のすまない事があつてか、明日の朝木を持つて來てくれと賴まれた。が、朝起きて見ると、宵からちら／＼降つてゐた雪が五寸餘りも積つた。けれども約束に背く譯にも行かないので、尻端折りに半合羽と言つた出立で、朝暗い中に起きて芝から深川の木場を目ざしてやつて來た。何分にも激しい吹降りで永代橋まで辿り着いた頃は凍死せんばかりであつたといふ。ふと向うから來た河原崎座の大札が見るに見兼ねて、二分金を一つ惠んで呉れたのが實に嬉しかつたさうである。實は用心の爲めとあつて懷中には若干かの金は絶えず持つてゐたのだが、勘當分といふ名義なのだから、先方は氣の毒だと思つてくれたのである。

こんな眞似までして木場なる海老藏親方の宅まで行つた事もある。またこれよりもずつと後、海老藏が追放赦免となつて、江戸に落着いてから、性來の道具好きに、入歯を外して道行振を着用して、默阿彌を連れ、下谷から本鄕の方へ折々出かけた事もあつたといふ。

かくして、默阿彌の實驗時代と見るべき第二の劇場生活は將來の望みをつなぐに十分であつた。座方一統からは贔屓にされ、海老藏始め役者にも重寶がられた。然し亦これまで漕ぎつけるのは一通りの苦心ではなかつた。

天保の往にし昔は、現今の如き風習ではなかつた。一般に人心の腐敗した極度で風儀がよくなかつた。少しきら〳〵した着物でも着てをれば、借りて行つて質屋に打ち込んでしまひ、十人位の頭に一枚の羽織を共同に使用して間に合せてゐようと言つた風である。殊に作者同志は神經質だから、其間には猜忌し又は嫉妬する事も度々あつたであらう。此の間に立つて默阿彌も隨分苦しめられた事もあらう。世上に傳ふる所によれば、一旦南北に別れてから立作者として戴いた、並木五瓶には隨分虐められたさうで、同輩には却て憎まれないで、五瓶には睨まれたといふ。

南北と五瓶の仲があまりよくなかつたから、其の故もあつたであらう。然し又一方に、辯護するではないが、五瓶といふ人は片意地で、頑固な人であつたかと思はれる節がある。例へば、天保四年に篠田金次三代目並木五瓶となつた時に初代種彥が、彼れをものは附の中に諷して『おしの強いものは並木に化ける葛の葉』と附けた事がある。また、かの『勸進帳』の演ぜられた時、當り振舞の席で、海老藏が節附の六翁と振付の西川とへは感狀に添へて禮物を贈つたが、作者の五瓶へは何等の沙汰もなかつたので大不平を唱へたとも言はれてゐる。又龜藏になつた彥三郎が中村座から南北を伴うて來

た時も、南北の來るのが不服で旅行した事實もある、すべてかういつた調子の人であつたかして、さすがの默阿彌も、隨分彼の爲には邪魔もされ、いぢめられもしたやうに傳へられてゐる。けれども默阿彌は決して怨むやうな人物ではなかつた。五瓶は安政二年七月十四日に歿したのであるが、日頃から有名の貧乏で蜜柑箱を机に代用しゐた位、歿前に及んでは一層甚しい貧窮に陷つた。その時に默阿彌は舊交を思つておとづれ、若干の見舞金を贈つた事があるといふ。『諺藏さん、お前さんにこんな事をして貰つてはまことに面目ない』と涙をこぼしたとの事。又默阿彌へ送つた手紙の中には『モウ樂や芥子の浮世の捨坊主』とした辭世を、最早覺束ない手で書いて厚く禮を述べ、息子の金次を何分頼むと言越したのもある。

　然しさう言つた氣兼苦勞の間にも洒落氣はあつた。相應に面白い事もあつたであらうし、樂しみな事もあつたであらう。積善と號した、もとは役者の坂野半十郎の話に、河原崎座へ見習に出てゐた當時は同じ芝の道筋なので、一緒に行き通ひをして折々汁粉などを奢つて貰つた事もあるといふ。

　又眞面目なやうな中に茶氣滿々としてゐた、此頃の作者質氣を示してゐるのは、師匠南北への詫狀である。それは南北の宅へ幽靈が出ると言觸したので南北が怒り、仲間一同が詫を入れた一札で、面白いものだからそのまゝ引いて見よう。

詫入申一札の事

一　今般貴殿お引移被成候御新宅へ毎夜幽靈罷出候趣を仲間内の者一人ふと戲言に申出し候を全く實說と相心得兩三輩至極臆病なる者殊の外恐れ申候て彼是蛇足の思附を加へ申談じ候を去十五日貴殿お耳に達し兼て川柳點にも有之候通り町内で知らぬは亭主ばかりなりと我耳に入候迄餘程近過の口の端に相掛り可申不容易の儀と御立腹の段御尤千萬に御座候貴家事は兼て早桶の亡者幽靈の儀は度々御遣ひ被成候得ば貴殿は格別御内室は女儀の事故右を御聞被成候と御心痛のあまり其夜御うなされ候由旁々戲言より種々御心配相掛候段如何樣被仰候共右の一條申出候者は素より雜談に掛り合ひ候者一同申譯無之消も入度存意には候へ共幽靈と事替り其意に任せず據なく以書面連印詫入申候所御聞濟被下忝奉存候右幽靈之儀は有之間敷候且右詫書差入候上は掛焰消燒酎火ドロ〳〵の謎へもなく横合より如何樣の幽靈亡者化性ヶ間敷者罷出候とも連印の者一同何時と限らず丑滿の刻限ごろにても早速罷出退散爲致可申候若一同の手際に及び不申候はゞ名鏡寶劍靈佛の威德にても相賴み急度埒明亡者得脫爲致貴殿へ御苦勞相掛申間敷候去乍譯て御斷申上候は右連印の者御受合申上候は亡者幽靈お化の三通りに御座候て怨靈の儀は我々手際に防ぎ兼日々責められ候へば萬一此儀有之候節は御相對の御約定に御座候右書面差入候上は前文幽靈一條は黑幕に消して申出間敷候爲後日連印を以て詫入一札仍而如件

天保十一庚年九月

勝　諺藏　印

姥　尉輔　印

峯　千助　印

笠間亀助印
絞吉平印
登春吉印

鶴屋南北殿

眞面目だかふざけてゐるのだか、判斷に苦しむ詫状だが茶氣のある所が面白い。勝諺藏は勿論默阿彌で、二枚目にゐる絞吉平は後の三世瀬川如皐で、二人ともに南北の弟子として同座してゐたのである。

然るにかく一人前の作者になりかけたところへ、またもや一つの不幸が起つた。それは弟金之助が天保十一年九月二十三日に死去した事である。これで母と自分と唯二人になつてしまつた。止む事を得ず『師匠へ名前を返して作者の業をやめ』、一旦實家の相續をしたのである。

母は此の四五年間に、引續き家に取つては大切な三人が三人まで歿したので、何か家の内に不吉でもあるのではないかと方位家に見て貰つた。すると暗劍殺に建てた土藏が災をなしてゐる。若し此の儘で行けばもう一人の息子さんも、お前さんまでも危いと警められたので、非常なおそれをなし急に宇田川町へ引移つたのだといふ。

五

默阿彌も實家の相續はして六代目越前屋勘兵衛となつたものの、質商などは無論其の任でない事を知つてゐた。一度芝居國の自由な空氣を呼吸した默阿彌には折目正しい町人生活にも、また面白味も洒落氣もない堅氣な生業にも堪へられなかつた。

然し狂言作者として立つ以上は、一廉の立物にならなくては、到底一家の維持は困難である事も知つてゐたが、一方實驗時代の試みに於て、茲數年の間には相當の地位に上り得るといふ自信もないではなかつた。そこで默阿彌は諸事萬端の家務を片付けてから、最後の熟慮と決心をなした。而して結局は狂言作者として一生の職を求める事に堅く決心したのである。

翌天保十二年の四月には、當時河原崎座の立作者であつた『中村重助の賴みに任せ假に柴晉輔と名のりて出勤』することになつた。これが第三度目の芝居生活で、これ以後は死に至るまで一年も作者の業を廢さなかつた。三度目に到つて尻が落着いたのである。

柴晉輔（後には斯波晉輔）といふ名前になつたのは、一旦師に名前を返したといふ點もあつたらう。一つには二度も三度も出たり引込んだりした名前だから、芝から出た新參者との意味で洒落れてかうしたものであらう。別に深い理由もなくてさうしたのであらうが、南北の居るにも拘はらず、『假』

にもせよ名を取更へて出勤したのは、面目を一新して出直さうとした、堅い決心を語るものではなからうか。

柴晋輔時代になした仕事は、立作者の立案になる狂言の一幕二幕を書くことであつた。脚色することであつた。即ち二枚目作者だけの職務を果したのである。始めて三立目を書いたのは天保十三年正月の『飾海老曾我門松』(曾我と双蝶々の狂言)である。同年三月の『岩藤波白石』には、西澤一鳳の筋書で二番目の大切を書いてゐる。下作と助筆と稽古とを以て滿たされたのが此の時代で、作者として踏まねばならぬ階段を略々登り盡すに至つた。

時には一流の狂言を、書いた事もあつたのであらう。岩井紫若に狂言を頼まれたので、早速書上げて見せた、所がやがての返事に、『あれは結構ですからお預りして置きませう。』と皮肉を言はれたので、引退つたといふ話も傳はつてゐる。

篁村曰。默阿彌翁が始めて西澤一鳳の許を訪はれし時の話しに、一鳳は或家の狹き二階に寓居してありしが、翁を其の二階へ請じて、狹いから是は邪魔だと呟きながら机を下へ持ち行かれしがそれを屑屋に賣りて翁へのもてなしに盛蕎麥を出されたり、後に一鳳より其事を聞いて、翁も大に氣の毒にも思ひ、また其の瓢逸無頓着にも驚きたりとぞ。一鳳には狂言の筋または京阪芝居仕來りなど聞て益を得る事多かりしといふ。默阿彌翁が狂言作者の生活狀態を高め其の地位を得ら

れしは、前の並木五瓶の末路や一鳳の數寄なる有樣を見て深く感じられたるにも依るところありしなるべし。

六

默阿彌が勝諺藏から柴晉輔と更つて、二年間を經る間に世の中も移り變つた。

將軍の家齊が退いて十二代目家慶の治世となり、新たに老中として水野越前守忠邦が立つた。而して此の天保度も末に到つて紀綱いやが上にも頽廢して再び安永、天明の昔に復らんとしつつあつた。此の形勢を見た水越は町奉行遠山左衞門之丞に命じ、江戸全體に亙つて手嶮しい一大改革を施した。卽ち弊政に流れたるを革め、奢侈に赴けるを禁じたのである。殊に劇場に對する此の『天保度の御趣意』は最も酷であつた。かの海老藏が舞臺に實物の甲冑を用ひ、邸宅を長押造りにして床に塗がまちを用ひ、赤銅七々子の釘隱しを打つたなど、奢侈僭上の故を以て罰せられ、天保十三年の九月には江戸十里四方お構ひとなつたのは著名な事である。女形の坂東しうかや尾上菊次郎が女湯に入つて、手鎖の刑と科料三貫文に處せられたのも此の時であつた。それらの結果として江戸三座の移轉も始まつたのである。

天保十二年の十月中村座から出火して市村座をも燒拂つた。すると政府は、劇場が火災の危險多き

事と、狂言の仕組卑猥にして市中に悪風を流し、風俗上大害があるとの口實を以て淺草の聖天町へ移轉を命じた。代地は小出信濃守の屋敷で猿若町と命じ三町に分かたれたが、その頃は廣々とした沼地で、これが芝居町になるのかと當時は嘆息した向もあつたといふ。兩座は五千五百兩の移轉料を給せられて新地に移り、翌十三年の十月から興行を始めた。河原崎座は一時の猶豫を許されてゐたが、これも移轉を命ぜられて、天保十四年の五月からは猿若町の三丁目で興行することとなつた。

河原崎座が移轉した年の十一月の顔見世狂言の折から、斯波晋輔は更めて二代目河竹新七となつた『見習に出てから六年目（二十八歲）の幕に立作者の居所に』据つたのである。補助として三代目の櫻田治助（狂言堂左交）が控へてゐてくれた。此時の興行は『稚軍法振袖武藏』（源平盛衰記の脚色）で、中村歌右衛門が座頭であつた。

歌右衛門と左交とは、以前芝甑と稱した時代からの知己で、彼れの行く所へは必ず左交が同時に出勤したものである。歌右衛門の羽振がよかつたに連れて當時左交は江戸に於て最も勢力ある作者であつた。默阿彌は此の時に左交の筋書で四立目（二幕目）を脚色し、大切淨瑠璃の『江戸紫男道成寺』に補修を加へたといふ。而して立作者の格を追うて、顔見世興行に限つて行はれた寄初の式に大名題を讀上げた。寄初といふのは來る顔見世より一年間同座すべき、重なる役者と座元と作者とが寄初めをなして祝盃を交し、其席に於いて立作者は麻裃の禮服で來年の惠方に向ひ、顔見世狂言の大名題（作

の題及語り等）を讀上ぐる式例である。十月の十七日に執行されると定まつてゐた。默阿彌も天保十四年の顔見世から此の式を執行つたのである。

河竹新七と改名したに就いては說もあるが、自らはさう希はずして外側から推擧されて、立作者の地位に上るに就いて改名したものらしい。第一に座方一統に愛されてゐたといふ事があつた。特に座元にして、才物の六世河原崎權之助は末の見込をつけて姪を贈り櫓付の作者たらしめんともした。けれども兄株の中村重助が役者附き、櫓附きの作者になる事を堅く警めたのでそれは斷つた。大茶屋で奥役を兼ねた川島や、役掛りの伊豆屋半七などゝいふ座方の者が相談の上で、實力はまだ作はなかつたのであるが、立作者の地位になほしたのだといふ。第二に是れと關聯して、兼ねて引立ててゐた左交と師匠の南北とが改名を勸めたのである。芝居には改名して出世の動機とする習慣があるのだからと、例の二三治も口を添へて三代目如皐を襲げと勸めたが、名家の跡だからと言つて應じなかつた。世話好きな左交は猶も頻りに勸めるので、河竹新七を襲名したのである。

どういふ考で河竹新七を選んだかは明白でないが、その音調が粹で、字面がきちんとしてゐるから好いたのだらうとの說と、跡が暫時斷えてゐて人の記憶から去らんとしてゐたから附けたのだとも言はれてゐる。或は前に姪を薦めた河原崎の河が含まれてゐるからだなどゝも推測されてゐる。そんな事は兎も角も、改名に際しては師の南北よりも左交がよけいに盡力してくれた。座頭が歌右衛門だか

ら當然自分の據るべき場所へ出してくれたのは、好老爺左交のお蔭であつた。默阿彌が後年左交の歿した際によく面倒を見たとか、彼れの一世一代の引祝は殆ど一手に引受けて世話をしたといふのも、此の頃の情誼に報いるの意味も含まれてゐたであらう、

默阿彌が選んだ河竹新七の初代が、どんな作者であつたかは詳かにされてゐないが、關根氏の『名人忌辰錄』によれば、

狂言作者堀江撒次の門人、始め竹三郎、能進と號す。寛政卯年三月十四日歿す歲四十九淺草唯念寺地中南松寺に葬る。

とある。これ以外には彼れが深川の六間堀に住つてゐた事と、安永七年森田座の顏見世に立作者となつた事とが發見され、また死歿日に就いては、默阿彌の手記には三月四日となつてゐるだけの相違かある。これらの輪廓以外その傳記として傳ふべきことは殘つてゐない。作者としても特に時代を劃すやうな事蹟を擧げた人でもない。唯初代仲藏の爲めに『双面』の所作から脱胎した『忍賣』(垣衣戀寫繪)の淨瑠璃を、安永四年の正月中村座で綴つたのが當り作であつたといふ。其の淨瑠璃の文句に『わしが在所は京の田舍の片ほとり八瀬や小原やせりうの里忍賣る身はかうもあろかと、取りなりゆかしかちはだし千鳥かもめの名所なる隅田川原に着きにけり』とある中の、取りなりゆかしに振り

が附かなくて拔いて語つたので、作者が立腹して振付を責めたとは『芝居祕傳集』の述ぶる所である。これで見ると多少の見識は持つてゐた人であつたかとも思はれる。同じ書に、仲藏の『秀鶴日記』も恐らくは河竹の筆になつたものではないかと言つてある。仲藏に贔屓にされてゐたのは事實だが、後世に遺る程の作は別にないのである。

茲に初代河竹の事を調べて行つて氣の附くのは、默阿彌がそもそもの初めから世話になつた二代目中村重助の先代が、長らく初代河竹新七の一枚上に立つて同座してゐた事である。奇緣といへば奇緣である。一つにはさういふ緣故もあつて名前を襲いだのかとも憶測される。何にしても、靑は藍より出でゝ藍より靑しの諺もあるが、二代目を名のつた默阿彌は、まさしく先代の名前をより立派なものにした狂言作者であつたと言ふに躊躇しない。

【默阿彌甲州日記の一節】

い、
廿日。○府中、日野まで二里九丁、女郎屋四軒有り。○谷保村、米の粉の燒餅あり、あんに砂糖な
し。○相川、武玉川の川上なり、舟渡し一人前十文。舟を渡り番小屋にて渡し錢を五文と思ひ三人
前十五文渡せしに、番小屋の老爺二人前とは何の事、一人前十文づゝ、何で三人前だと咎めけれ
ば、孫太郎（南北）一人前なり跡より二人前出ると言ひて行きぬ。我等跡より錢を出しいくらやらん
と言ひしに、老爺二十八文にてつりをやらんといふ。我師の出せし十五文に錢を足し二十八文にし
て出せしを老爺腹を立て、分からぬ奴かな、跡へ返れといふ。我りやうけん違ひの趣を言ひ二十八
文出してつりを取りあやまりて行く。あたりまへの渡し錢を出してあやまりしもをかし。

第四　劇場第二期

一、當時の作者界――二、默阿彌の實權　試作――處女作――「ゑんま小兵衛」――その作歴――合巻物及種員と――三、市川小團次と――「忍ぶの惣太」――楔點――「五十三次の天日坊」――四、結婚――妻女琴――五、母及師の死歿――安政の大地震――「世直し」――河原崎座廢座となる。

一

默阿彌が立作者の地位に上つたのは、人なみ勝れて早かつた。が、作者としての順序は確實に履んで來たのである。見習作者として正本の淸書、書抜きもすれば、序開きを書き、二立目も書いた。狂言方になつてからは專ら稽古に身を委ね、二、三枚目所の作者並に一幕二幕位づつの助筆、述作も何度かやつた上で河竹新七になつたのである。默阿彌の生れながらに備へてゐた才分と、熱心と、努力と、溫厚篤實な性格とによつて、昇進も早かつたのであらう。從つて同輩の者をもどし／＼乘越して鰻登りに登り、又一方に於ては、昨の師は對等のものになつた。五瓶でも南北でも左交でも、一度立作者の位置に立つた以後は、番附へ出ても同じ太さの文字で、同じ格式を守るやうになつた。

扨默阿彌が河竹新七になつた當時の狂言作者界が、如何樣であつたかは吾等の知らんと欲する所であるが、江戸、上方を通じて注目に値する程の作者は、先づ一人もなかつたと言つてよい。

かの世話物と怪談物とに名を揚げた大南北は、文政二年に歿したが、それ以後默阿彌が小團次と結托するまでの三十餘年は、殆ど作者として指を屈するに足る者は出なかつたのである。徒らに古人の作を改修補綴し、役者の頤使に甘んじてゐたに過ぎない。作者道の衰微した極であり、墮落の極に陥つてゐたのである。寶暦を中心として活動し、江戸作者中興の開山と呼ばれた津打治兵衛より、安永の濠越二三治、金井三笑及寛政に於ける初代櫻田治助及並木五瓶ごろまでは、『役者は軍兵作者は軍師』なる言葉通りに、作者は芝居國に重んぜられてゐた。然るに文化文政を代表する大南北の死後は軍師にあらずして、茶道又は幇間的の地位に墮したのであつた。けれども罪は己にあつて他にあつたのではない。役者の勝れた技藝に伴ふだけの見識あり、技倆ある作者が出なかつたからである。此の下落せる作者の地位は、默阿彌が認められて勢力を得るまでは挽回せられなかつた。

其の頃江戸の三座に顏を見せてゐた立作者格のものは、默阿彌の外に四人あつた。三升屋二三治と三代目の五瓶と三代目の治助と五代目南北とである。

二三治は年齢の上から言つても一番の年長であり、初代治助の直門とあつて、先輩故老の故を以て立てられてゐた。けれども唯、單に芝居界によく通じたまでの人で、『作者店卸し』や『歌舞伎品定』

などを隨筆風にものした以外にはまとまつたものもなかつた。他人との合作になるか、或は補綴を以て責を塞いでゐた一個の老劇通であつた。五瓶は二代目の門下で三代目を襲いだのであるが、『勸進帳』の外にはこれがと取立てる程顯はれた作もない。默阿彌の師事した南北は、前にも述べた通り大南北の祖述者たるに過ぎなかつた、此の間在つて兎に角際立つてゐたのが、後の狂言堂左交卽ち三代目櫻田治助であつた。歌右衞門との關係上、天保、弘化、嘉永にわたつては、時として二座三座をも兼勤した位の勢力はあつた。然し作者として見れば依然として特殊な活動をも示さず、初代より相傳の淨瑠璃に柔かい筆致を見せ、時流を穿つた頓才的の洒落た思付に富んでゐた位なものである。非常に世話好きな好人物であつたといふ。勿論かういふ作者界に於て立作者となつた默阿彌も、其の當時に格別な、パッとした手柄を現はした次第でもなかつた。

斯く不振を極めた作者界は、あだかも年若き選手を待ち設けんとしつつあるかの如き觀を呈してゐた、が此の後十年間は言はゞ醱酵時代で、何等の新消息をも齎さなかつた。如皐も默阿彌も蛟龍の池に潛めるが如くにして現れなかつた。

二

默阿彌も改名して立作者になつた以上は、新狂言でも書いて其の實を擧げたかつたのだが、河原崎

座の座元なる權之助は新作を好まない人であつた。時代物が好きで、殊に興行上の勝敗を懸念する所から、極附きの有りふれたものを選擇しては場に上せしめた。八代目團十郎が座頭の時にも、何度か新狂言の案を立て筋を話して見たが應じなかつた『有り物にしませう』といふ座元の言葉には失望せざるを得なかつた。帳元の川島に相談を持ちかけ、勸めて貰はうとしても、『でんでん物（義太夫劇）が好きだから』と宥められて、いつもがつかりしたさうである。

斯うして默阿彌は、嘉永に到るまでの凡そ十年間は、何の仕出かす事もなく過さねばならなかつた。時々に左交等の補綴を助けて、一幕位づゝ筆を取つたまでゞ、或はだんまり又は曾我の對面に兄弟のツラネ位を書いたに留まつたのである。尤も『弘化二年十一月顏見世より名題を書き狂言の相談萬端一人にて引受勤む』とも手記してゐるが如くに、二世河竹を襲いだ時は單に地位を贏ち得たのみであつて、眞に立作者としての實權を握りその職責を盡したのは、尙それよりも後弘化四年の末からであつた。從つて、此の間に彼れの座へ來た役者には、團十郎、宗十郎、歌右衞門、彥三郎、小團次及女形の梅幸、菊次郎等があつたけれども、默阿彌は手を束ねて傍觀せざるを得なかつたのである。座元の信用はあつたが、まだ默阿彌の作劇上の技倆を信ずるだけの機會も、材料もなかつたのである。

默阿彌が一流れのまとまつた作物を出す前に書いた中、獨立したものと見るべきは、嘉永二年三月

の『景清岩戸だんまり』(難有御江戸景清)であつた。これは海老藏が追放赦免になつて、江戸へ歸つた時の御目見得だんまりであつた『琵琶の景清』に據つて書き添たもので、天の岩戸に見立てた江ノ島辨天の岩窟を忍び出る、景清の持てる短刀小烏丸の威力によつて、世界の明暗を支配すると言つたもので、暗に海老藏の勢力を標象したものであつた。

默阿彌の第一の作物は、嘉永四年の顏見世興行に新作された『昇鯉瀧白旗』の二番目えんま小兵衛の件二幕三場の世話物であつた。默阿彌が世話物作者であつた事は言ふまでもないが、其の最初の作として先づ世話物を選び、本街道を辿らうとしたのは、自らを知つた賢な行き方であつた。然し此の作の前に一幕程づゝ助けて書いたものも世話物のみであつて、時代物に關したものは殆どない。例へば弘化二年の忠臣藏に『赤穗酒屋の場といふ緣切りのやうな』一幕を、宗十郎の爲めに書いたのも世話場で、同四年の『伊賀越』に書加へた五幕目も『孫八の世話場』であつた『えんま小兵衛』は卽ちそれらの結晶であつたとも言へる。此の時の一番目は『青柳硯』、中幕が『嫗山姥』で、二世嵐璃寛が上方から下つた時の御目見得狂言であつた。が二番目の『えんま小兵衛』の方が好評であつた。

○此の作の序幕は源兵衛堀と向島とで節分の前夜の事。吉原若菜屋の若草が惡足の堀の船頭浮世屋伊之助と駈落がしたさに、米伊勢屋の番頭ひね六をだしに使ひ、年忘れのどさくさまぎれに首尾能く大門を拔出す。伊之助とは向島の平岩河岸で逢ひ、龜井戸境町なる西念の所を志し『濡嬉浮

寢鵆』といふ清元に送られて道行と洒落る。玆へ一番目の時代物を受けた筋が絡んで三位中將重衡と呉羽の内侍とが落延び來り、癪に苦しむ件がある。そこへ通りかかつた佛師屋のゑんま小兵衞が、助けてやらうとして百兩の金を腹につけてゐるのを見極め、金を奪つて二人を河中に蹴込みニツタリとする。すると蘆原から西念が現はれ、若草と伊之助も來合せて世話だんまりの後、三位中將の落した系圖は西念の手に、人相書は小兵衞の手に、百兩金は伊之助の手に收まつて分かれる。

○二幕目の始めの場は龜井戸境町の居酒屋店先き。今日は節分だといふので、赤鰯、豆莢、柊などを賣買したり、鬼やらひの話などしてゐる所へ、昨夜のだんまりの中へ紛れ込んで脾腹を打たれて悶絶した番頭ひね六を早桶に入れて持つて來る。と、その掛繩が切れて騒いだ揚句が喧嘩になり、手桶の水をぶつかけると、轉び出たひね六に水がかかつて息を吹返し、てつきり地獄へ落ちて來たものと思込み、閻魔樣の所へ行かうとなつて小兵衞の所へふら〳〵と行く。次の場は地獄極樂隣り合せの場で、閻魔を飾つてある小兵衞の家と、天人の繪などを張つてある修行者西念の住家とが壁一重で隣り合せになつてゐる。小兵衞はひね六から話を聞いて、隣りに匿まつてある二人づれが、其駈落者だらうと見當をつけ、これも昨夜ちぎり取つた片袖に物を言はせて百兩金を取返してやらうと思ひ立つ。そこで戸の隙間からひね六に檢分させると、若草伊之助に相違

ないと分かつたので、先づ女房お六を入れて、美人局の罠に陷して首尾能く金を奪ふ。此隙に戸棚へしまつて置いた若草をば、ひね六に後ろの壁を切破らせて盜ませる。伊之助は小兵衛の仕打を憎み、ひね六を殺し小兵衛をも殺さんとして、躍り込む。若草も中にはひつて二人とも手負ひになる。すると若草の血と伊之助の血とが一つに寄るのを見て畜生道であつたと分かり、兩人は小兵衛實は平家の殘黨越中ノ次郎盛次の双生兒であると知れて自害する。西念も義清盛久と分り、平家再興に志を同うせるものだと知れる。兩人の首級は重衡中將と呉羽の前との身替りに立てて梶原に引渡す。小兵衛も切腹し、重衡呉羽の前は出家する。

處女作とも稱すべき『えんま小兵衛』の梗概は大體右のやうである。顔見世狂言に從前から用ひられた形式の、生世話から時代になる仕組を應用したものであつた。作の眼目とする所は「語り」の中にも『年々歳々有ふれた隣同志の世話場をば仕組を更へて地獄極樂』とある通り、二幕目の隣合せの場で、特に意匠を凝らした所であつた。哀調に富んだ所謂世話場ではないが、巧妙なる筆峯と役者の活用とは、後年の作物に比して遜色を認めないものである。龜井戸の神事を取入れて節分の情調を對照的に描いたのも大成功で評判がよかつた。默阿彌の作全體に通ずる寫實的で時好を穿つといふ傾向をば、すでに此の頃から發揮してゐた事が分かる。

書卸しの役者を見ると八代目團十郎が伊之助と梶原、海老藏がえんま小兵衛、九藏が西念、若草と

女房お六とが粂三郎であつた。色敵のひね六は淺尾奥山で、九代目團十郎は僅か十歳の若太夫として、蝶々賣眼玉の長吉を勤め、長い振事を見せてゐる。役者も揃つてゐたが作もよかつたのであらう。

殊に注目すべきは、此の場の立案が事實にもとづいた事である。默阿彌の作には自己の經驗によつて出來たものも少なからずあり、殊に部分々々に就ては實地の見聞に據つたものも往々にあるのだが此の處女作から其の吉例は開かれてゐる。

それは此作の出來た年の夏の事であつた。默阿彌の門弟の一人に能晉輔といふがあつた。晉輔は始め淺草日輪寺で役僧まで勤めた沙門の身であつたが、常磐津の女師匠に現をぬかした末に寺を逐はれやがて默阿彌の門下となつたのである。その後その女に恥しめられたのを根に持つて殺害しようと思ひ、天道干で買つた出刃庖丁をケシ玉の手拭に包んで腰に差し、まさかの時の用心に剃刀まで二の腕に結びつけて、いざ躍り込まうといふ時になつて露見し、自身番沙汰にもなつた所から、默阿彌は此の先何か生じた場合を案じて確かな引受人を拵へろと命じた。そこで晉輔は以前寺で入魂にしてゐた高澤某といふ龜井戸の佛師屋を推擧したのである。或る夏の夕默阿彌は晉輔と連立つて、宿元を見屆け旁々判を取りに佛師屋へ行つた。狹苦しい棟割長屋の裏住居で、七月のことで蚊いぶしが燻ぶつて濛々としてゐる中に、たくましい亭主がギョロリと光る眼付でしい、やに構へた面魂はなか／＼隅に置けない方で、殊に其の薄暗い部屋の中には、塗りかけの閻魔や、金箔を置きかけの佛像、御首ばかり

の地藏尊だの、菩薩だのが雜居してゐる狀を見て、ああ面白い圖だと、深い印象を殘して歸つたのである。これから思ひ付いて、顏見世の事ではあり、節分の神事を取入れて綴つたのが『えんま小兵衞』であつた。

『えんま小兵衞』の材料を供給した能晋輔に就いては、茲に少しく語つておきたい。晋輔はもと飛驒高山の產、文政四年の生れであつたが、六七歲の頃兩親に連れられて越後に行き、其の地に於て兩親ともに失ひ、途方に暮れたのを近所の寺に救ひ上げられ、やがて遊行上人の巡錫された時、江戶に伴はれ來つて日輪寺の小僧となつたのである。其後前述の理由で寺を破門されて、默阿彌の門に入つて狂言作者になつたが、其の讀書癖と氣質とは寧ろ合卷作者、戲作者たるに適してゐると見た默阿彌は、彼れを柳下亭種員の門に入らしめて合卷作者とならしめた。卽ち草雙紙としての『鼠小僧』や『小猿七之助』等を綴つた柳水亭種淸がさうである。其の後安政の末に到つて遊行上人への御詫が叶つて歸山し智俊と號したが、戲作の筆は絕たなかつた。『兒雷也物語』『しらぬひ物語』等を、種員の死後制作したのは種淸であつた。明治前に都門を去つた爲め、あまり世間には知られてゐないが、やがて藤澤より轉じて相州酒匂村の上輩寺の住持となり、明治四十年三月に八十七歲で歿するまで、一年も文筆の嗜を棄てなかつた。それ故版行されたもの亦されないで存してゐる著作が甚だ多い。『戀車淀翡翠』、『不思議塚小說櫻』、『旅雀我好話』等

の戯作には相當の名聲を博し得たものであつたといふ。明治になつても、『繪本太閤記』に據つて想を構へた『豐臣勳功記』百卷、『東山譽美誌』（五十卷）、『加賀騒動』（四十何卷）等の史談風の述作もあれば、『笑評詩話』といふやうな述作もあつた。明治以後は久留島の三人殺しなどの時事問題を捉へて綴り、名譽毀損だと訴へられた事などもある。非常な精力家、勤勉家であつたが、不幸にして時代の大變轉に逢つて忘れられてしまつた。蓋し所謂戯作者の眞の最後の人ではなかつたかと思はれる。種清の述作は特に文章が好いとか、面白いなどといふ事ではなくて、佛學を心得てゐた人だけに、其の構想、趣向が如何にも神變不可思議であつた事である。墓は淨句の上蓮寺にあつて、戒名は桂光院實阿上人智俊堂山老和尚といふ。（追記。――種清後には八功舍得水とも號した）。

河原崎座が『えんま小兵衞』に意外の當りを取つてから、座元も新狂言に氣のりがして、ぼつ／＼默阿彌の作も上場され始めた。翌年の正月には清玄の二番目として『雁金五人男』を脚色したが、これはさほどのものではなかつた。次いで七月に八代目團十郎の好みとあつて脚色したのが『兒雷也豪傑譚語』で、これは合卷に手を染めた始めである。

『兒雷也』は本來美圖垣笑顏の作であるが、それを柳下亭種員が嗣作した合卷で、當時相應の流行

をなしてゐた。此の時には第十編までを材料としたので、以下は數年を經て後日狂言として綴られた。元來默阿彌と種員とは親交のあつた仲で、種員は本名を坂本新七と呼び默阿彌も河竹新七だから兩新七と謳はれてゐたといふ。作者の種員は版元を兼ねてゐたから芝居に上場さるれば合卷の賣行がよくなるので、友達甲斐に兩人相談の上で名題も其のままに取つて用ひたのである。何しろ團十郎はつい四五年前に、親孝行の御褒美を頂戴してから急に人氣が出盛つてゐたし、芝居も評判なれば合卷も廣く行はれるに至つた。

これに味をしめてか、翌年の二月、四月と續けて矢張り種員作の『しらぬひ譚』を初日、後日ともに脚色して上場した。

これは本傳以外に亘る事であるが、合卷『白縫物語』の作者種員が默阿彌と親交のあつたことは述べたが、其の前後より默阿彌とも親交を續けた日本橋魚河岸の角尾氏は芝居界とも緣故深く、又慶應時代の『繪合せ』などにも出席した職業柄に似ぬ雅人であつたが、氏も亦種員とは親しい仲であつた。角尾氏は種員の死後其の名跡を預かつてゐた位であるが、氏が二人の子の父となつてから、二人の子持になつた以上は、こゝまでのやうに一緒に遊びに來ることは止めるから其の積りで居てくれろと斷つた。と種員も贊成して『金を蓄めるは無論好い事だが、一つ御注意したい事がある。今私は『妙々車』といふ因果譚を書いてゐるが、實に因果はめぐる小車であるから、善根は是非お積みなさい。それには寒の中三十日の間施粥をするやうになさい』と勸めた、

角尾氏はそれ以來種員の言葉を守り、絕えず每年寒になると、早朝に起きて粥を作り、大擔ひ一荷を擔はせて、日本橋から江戸橋、照降町通りから兩國橋邊りまで步かせたさうである。その途中の路上又は橋の上などに慄へてゐる乞食へ、柄杓に一ぱいづつ惠んだのであるといふ。

三

斯くする間に安政元年となり、默阿彌も立作者の地位に上つてから十年を經過して卅九歲とはなつた。此の年こそは默阿彌に取つて紀念すべく又意味ある年であつた。といふのは、先代小團次との間に楔點を發見した年であり、眞の立作者として一日の狂言全部を自身で立案するに至つた年だからである。

後に名人とまで稱された四代目市川小團次は、江戸市村座の火繩賣榮藏の子として生れ、始めは米藏と呼び、阪地に上つて米十郎と改名し、海老藏の追放されて伊勢路より大阪に入つた時、其の手に附いて大阪角の座で小團次と改名したのである。それは恰も默阿彌が河竹新七となつた翌年卽ち弘化元年の春であつた。小團次は先づ業事に評を得て江戸へ下り、市村座で七變化の所作を演じたのが同四年の冬であつた。これより狐忠信の三味線の胴拔け、又は法界坊の釣鐘拔などにその人氣を集めてゐたが、嘉永四年の正月に中村座で『石川五右衛門』に大當りを取つて、七十八日間も打續け、追ひ

かけてその八月に、『東山櫻莊士』(佐倉宗五郎)を演じて大好評を得、十月まで百四日間も打續けたので、名聲は頓に揚つた。所作と業事師の外に地藝に於ける眞價が認められて來たのである。此の『佐倉宗五郎』の作者は、藤本吉兵衛改め三世瀬川如皐である。從つて小團次と共に如皐の名も響いた。始めに默阿彌よりも後進であつたに拘はらず世の中には早く其の名が聞えた。後年に至つて默阿彌が、『始めの内は如皐さんに負けまい〳〵と出精した』と或人に語つた言葉によつても、その間の消息は分る。其の後も尚小團次は如皐の新作によつて『切られ與三』の觀音久次、『黑田騷動』の安養法師などを演じて、益々人氣は高まりつゝあつた。

斯くばかり賣出しの人氣役者小團次は、安政元年の三月から河原崎座に出勤して『都鳥廓白浪』に忍ぶの惣太と七變化の所作とを演じた。座頭は訥升で、しうか、竹三郎、友右衛門等であつた。訥升には幼年の事故、實權はしうかと小團次との手にあつた。此の『都鳥廓白浪』を選定し、上場するまでの事情こそは即ち小團次と默阿彌とを結び付ける機となつたのである。默阿彌の歿後(明治二十七年)に此の作が歌舞伎座に上演された時、篁村氏が劇評代りに默阿彌の實話を誌された次の一文は、よく其の時の事情を語つてゐる。

座元權之助此の古狂言を選み出し、本讀も濟み一座役割も納まりしが、肝腎の小團次が何か進まぬ氣色なりしかば權之助は新七を遣りて其の考を聞かせたりしに、小團次はチロリと下目に見て

何の用にてと言ひしばかり、新七は膝を進め、今度の惣太役に付き何か思召しも有るかの樣子故其の儀を伺ひに參りしと述ぶれば小團次は冷然と、私も當座は昨今の事、役につきて彼是申すやうな事はござらぬ。併し先づ考へて見て下さい高い金を出して此小團次をお抱へなすつて、明盲でも役を殺すだけの役を座元がお見立なすつたのは如何いふ御見込か、成程書下しの歌右衛門さんは名人だからそれでもお客が來ましたらうが、御存じの通り柄はなし男前も口跡も惡い私に其眞似は出來ませんが、私の方に考へはない座元の方に定めてありませう、此小團次の體に箝まるやうにして下さるか。左もなくば御辭退申さうと思ひますと、捻りて出しに新七は愕き、早速權之助の方に到りて此の趣を語れば權之助は大いに當惑し『意地の惡い奴だナ』それなら其の樣に本讀の時に不承知を云へばいいに、今となつてそんな事を言ふとは『仕樣のねエ奴だ』併しいふ通り大金を出した者を、氣の乘らない事を無理にさせても面白くない。仕方がない、どうにか工夫して納めてくれとの賴みに、新七は我家へ歸り徹夜工夫して堤の殺しの場へチョボを入れ、舞臺と花道を割ぜりふに直し、偖翌朝小團次方へ其本を持參し、一直しして見ました、御氣に入るかどうか先づ聞いて下さいと、正本を讀たてしに小團次は昨日の不興に引かへ、にこにことして聞終り、よく直りました是なら私にも出來ませう、ドウも昨日は我儘を云つて――コレ茶をいれなほして來いよと、俄に機嫌なほり自ら初日を急ぎて出して見ると、何が偖梅若丸を勤めしは、後に

近世女形の名人と言はれし澤村田之助がまだ由次郎のころの評判の子役。小團次の實。由次郎の花、舞臺は花盛りの向島の堤の月。花實情景ともに具はりて見物大喝采――此事よりして小團次は深く新七の才に感じ、次狂言にも強ひて新作を頼み、新七も小團次の藝に感じ云々。

これによつて見ても分るが如く、小團次が再三不服を唱へたのは、主として向島堤の梅若殺しに關してであつた。

忍ぶの惣太は、もと京都吉田家の家臣であつたが、腰元と不義したのを班女御前のお情で助命せられ、江戸に下つて隅田川の邊りに櫻餅屋を開き、世を忍ぶの身となつてゐる。その間に吉田家は御家騒動があつて沒落なし、御家の系圖と都鳥の印が紛失したに就て、班女御前は末の子梅若丸を連れ、惣太の舅軍介に伴させて惣太を使に東へ下り、行方も知れずなりをる長子の松若丸と、寶の詮議をなさんとする。惣太は松若の行方を尋ねて廓に入り、漸くそれらしき花子を得て、猶も確めんと心勞した末鳥目になる。一方梅若は幸くも隅田川の堤まで辿り來て難に遭ひ主從散々になる。梅若はひたすらに遁げ走つて『往來もまれに星影の見ゆる朧の雨上り』なる牛島に惱んでゐるのを、折から通りかかつた惣太が介抱してやり、懷の金を探り當ててお主とも知らず、今宵につまる都鳥の印買取りの金に困じた身故に強奪する『猿轡掛けるはずみに手拭が咽喉へ廻るも見えぬ目にそれと知れねばぐつとしめ』惣太は誤つて殺してしまつた事に氣付いて愕いたが、亡骸は水葬禮にして歸る。翌日舅軍介の

話に、梅若丸は昨夜牛島でしめ殺されたが、その敵の證據は此の吉野櫻に忍を染出した手拭だと聞いて、扨は自分であつたるかと悟り、原庭なる丑市が家に馳せつけ、花子實は松若丸の手にかかつて最期を遂げるといふ筋である。

今玆で、其の作の訂正された部分を詳しく說明する事は出來ないが、三度まで修訂された結果は、確かに前のよりも一歩づつ進んだ藝術味のものになつてゐる。小團次が納得して決定された殺しは、以前の物に比べて如何に情趣が籠つて哀調に漲ぎつてゐるか知れない、口にする白も床で訴ふるチヨボも緊縮されて、唯〻役者の優秀な劇術を發揮せしめ、また三味線樂に依賴して効果を擧ぐべき痛切な場面として描き出されてゐる。『殺し』に應じて惣太が自分の所爲だと悟る件も、これと同じく默阿彌の苦心した箇所であつた。

一篇の眼目も自ら其處にあつた。小團次も此の處に於て成功したのである。其の頃の評判記『花くらべ』には次のやうな記事が見える。

梅若殺しのあのよさ〳〵、始終そこひの思入にて梅若丸のふところから金取出し、さぐつて見てコレ此の包みは、ナニ金だ、ハテ有るところにやァあるものだなァとぞつとする仕打。それより梅若を殺しびつくりしたる意味合愁嘆、(許して下されゆるしてと身をかきむしり悔めども今は返らぬ魂呼ばひ)、たつぷりあつて、骨を惜しまぬ風情。……舅軍介に逢ひ梅若丸を殺したのは惣

太なりと知つて、こりやたまらぬといふ思入は無類飛切上々吉云々。

と、小團次はかくの如くにして默阿彌の苦心を無にしなかつた。此の他一座の友右衞門の僞盲人宵寐の丑市は勿論よく、しうかの松若丸は花子と共に水の垂れるやうな、端出やかな藝を見せて此の芝居は大當りであつた。

八月に同じ顔觸れで上場したのが『吾嬬下五十三驛』である。これは天日坊（小團次）と地雷太郎（璃寛）の叛逆と、人丸於六（しうか）の強盜とを組合せて天地人の仕組と稱されたもので、一日の狂言全部默阿彌の立案によつて新作されたものであつた。

此の作に對する世評も幸ひによかつた。それは、當時の習慣として評判のよい芝居には、それを叙述した草雙紙が出來たものだが、此の時にはそれが三種ほども出版されたのを見ても知れる。其の一つは普通の草雙紙で、一つは默阿彌自身に筆を取つて、戯作した眞面目な合卷風、他の一つは草雙紙まがひの評判記であつた。それ程に世評はよかつた。後年三世河竹新七を讓られた竹柴金作は、此の芝居を見て『世にはこれほどの作者もあるものか』と感服した餘りに其の門に入つたとさへ傳へられてゐる。一口に言へば面白盡しの芝居であつた。妙趣向に富み、變幻出沒を極めた草雙紙のやうな芝居で、殊に天地人のだんまりと今も話柄に殘つてゐる。三人のだんまり、畫面の見得は諸所に繰返されて喝采を博したといふ。小團次に取つても若い野心家の天日坊と、忠義一徹な百姓三作と、家老の奥方、

猫石の怪と、各種別樣の技倆を揮ふに都合のよいものであつた。

小團次との最初の接觸は、大凡そ此の二作であつたと言つてよい。小團次も初めには皮肉も列べたし我儘も言つたが、默阿彌の忍耐強き熱心と腕前とを買はない譯には行かなかつたであらう。單に此の二新作を以てのみ斷ずるは早計かも知れないが、默阿彌の世話物に於ける才能と、小團次の有する地藝の才能との間には、何等か相一致せるもののある事を悟らしめたものと想像するに難くない。

四

默阿彌は斯く完全に一人前の作者とはなつた。が、此の際に其の個人としての方面をも見ておきたい。

三座が猿若町へ引けてからも、住宅は芝にあつた。芝から淺草まで通ふのだから、自然不便な事もあつたので、劇場の近くへ間借りして倶樂部のやうなものを設けてゐた。然しそれも實際不便であり、一生涯の職と決定した以上は移轉するの必要を感じたので、淺草の正智院地内の寐釋迦堂の傍（今の馬道二丁目十二番地）へ轉住した。何時越したかは明白でないが、弘化三年の結婚以前に移つた事は確かである。三座の移轉後間もなかつた事であらう。屋敷者の住つてゐた手堅い普請の二階家で、土藏と家作とが附いてゐた。地所は寺地で購はれなかつた。此の所は居を構へてから明治十九年まで三

十何年の間、家こそ燒失して度々新しくされたが、動かずに筆を執つた思ひ出多き場所になつた。默阿彌が『地内の師匠』と呼ばれたのは、正智院の地内に住つてゐたからである。

結婚したのは弘化三年の十一月であつた。矢張り淺草の並木町に住居してゐた伊藤氏、大和屋源兵衞の次女琴を迎へて妻としたのである。默阿彌は卅一歳、琴は十歳年下の廿一歳のことであつた。

伊藤氏の祖先には、棒の達人があつたとかいふが、當主の源兵衞は諸家樣御出入りの茶器骨董商で俳名を月砂又は花來と呼び大源を以つて通つた茶人であつた。文化文政度の茶人取組番附にも三幅對の中に算へられたさうで、松平出羽守に最屓にされ不昧公の御氣に入りで、若殿には茶の御指南をしたと傳へられてゐる大の通人で、琴女の幼い折に吉原へ伴れて行き、泣き出されたので[illegible]の花鳥といふ花魁が琴女を袿に包み、緋縮緬の扱で駕籠に結へつけて送り返した事もあつたといふ。

琴女の父はさういふ通人であつたが、母は女丈夫とも稱すべきしつかりした賢婦人で、默阿彌の性行を聞き、一度見合ひをしたきりで早速にその母親が取極めたのだともいふ。また琴女は十三歳から緣故のあつた出羽樣へ上つて二十歳まで御殿奉行を勤めて下つたのだから、屋敷育ちの母に氣に入るだらうと默阿彌も思つたのであらうといふ。

琴は濶達な女であつた。氣轉の利く愛想のよい、而も几帳面な性質であつたので、佛樣のやうにお人好しの姑とは一も二もなく氣が合つて家庭はいつも春のやうであつた。老母も『芳がるなければ

よい』などと言つて、むつつりした默阿彌よりも嫁と仲が好かつた。御殿下りだといつても些しもそんな臭味はなかつた。粹な好みの拵りだつたので、人は皆船宿の娘か、料理屋の娘かそれとも藝妓上りだらうと思つてゐたさうで、いつもおひきづりに着流して裾で踵をうつやうに着こなした着物に、白縮緬の腰卷をちらかせてゐるといふ粹な裝であつた。それでゐて、褄をつひと取つて帶に挿んで、どんどん臺所を働いたり子を負つて糠味噌の手入れまでしたとさへ傳へられてゐる。夫の默阿彌には主人としての位を持たせ、家政萬端をよく取締つて、内助の功には沒すべからざるものがあつた。詳しくは後にも述べるが、眞に御内寶の字義通りの、貞節な妻女であつた。

默阿彌は此のやうな妻女と、誠心深き子女とによつて幸福な家庭を作り、幸福な生涯を送ることができたのである。

五

默阿彌の母は、嘉永二年の四月十七日に歿した。默阿彌は幼時を道樂者で送つて、孝養を盡す暇もなかつたといふので、母をば大切にした。病床に就いてからは、枕頭で合卷を讀んで聞かせたこともあつた。

師の南北も、嘉永五年正月二十一日に五十七歲で歿した。母に別れ師匠を失つた默阿彌は、必然的

に新生活を營まねばならなかつた。
此の際に突如として起つた出來事は、安政の大地震であつた。本所深川を震源地とした安政二年十月二日の夜四ツ時（十時頃）の大地震は、今も故老の間に噂される未曾有の大地震で、江戸中の屋財家財を震ひ落し、燒拂ひ、七千人の死者を出した天災である。種員や浮世繪師の廣重等の壓死した呪ふべき大地震であつた。
默阿彌は其の夜寄席へ行つてゐたが、平生から注意深いだけに楷子の降り口に座をしめてゐたからそれといふなり早速飛びおりたので、仕合せと怪我一つしなかつた。が、往來へ出て見ると方角も取れない程に見る限り打壞されてゐた。漸くにして土藏を目當てに我家へ辿りついて見れば、野暮に堅い建物だけに倒潰もせず、家内中いづれも無事なのでほつと安心したさうである。
其時にこんな話がある。少しばかりの貯へ金を箱に入れて土藏の二階に置いてあつたのを、妻がこはごは取りに上つた。四方の壁はすつかり震ひ落されて、巢竹が哀れに殘つてゐる。その隙間から遠方を望めば、此處彼處に火事の焰々と燃え上るのが目に入つた。餘りの事にびつくりして夫の傍へ來て、『旦那どうしたら宜うござんせう』とさすが氣丈の妻女も弱音をふいたが、『しつかりとしてゐねえ、おれが附いてる』と、默阿彌に一聲勵まされたので氣を取直したといふ。其の勵ました默阿彌が翌日になつて一面の慘澹たる光景を見て『おれも茲までは漕ぎつけたが、厄年には向ふし身上震ひを

するのか」と落膽せざるを得なかつた。すると今度は妻女が口を出して『旦那そんなに沈まないで下さい。此の地震から奮ひ起すやうにして下さい』と勵ました。默阿彌も此の一言に感奮して新しき努力を試みようと決心した。

半潰れにされた家も、今度は粹な普請に作り更へて、來るべき新生活を待つた。

此の地震では、劇場も燒かれた代りに、その爲めに一段落の着いた問題が一つあつた。それは默阿彌の轉機にもなつた事件である。卽ち年久しく訴訟沙汰になつてゐた森田座の再興が確定して、河原崎座が廢座するに決した事である。

河原崎座は、元來森田勘彌座の控櫓であつたが、かの默阿彌に目をかけた權之助は天保八年から經營してゐた。つまり座元の森田十代目の八十助勘彌が、借金の嵩んだ結果訴訟沙汰になり、終に腰掛紛失同樣にして逃亡したからであつた。所が明敏な權之助の手腕によつて座は次第に繁昌して來るのを見た森田側の者は、血統を引いてゐる板東三津五郎を十一代目の勘彌になほし手に入れようと訴訟を起した。これに對して權之助は策をめぐらし八十助勘彌を呼んで對抗せしめ、結局は自分の手に櫓を收めようと計つたのである。此訴訟沙汰が長延いて毎興行に面倒が起つてゐた。所が八十助勘彌が病死したのと、大地震の際に座が燒失したのとで、事件が餘儀なく落着したのである。卽ち權之助は去つて市村座の金主となり、森田座は萬難を排して復活することとなつた。

此の變動に伴うて、自然一大改革が行はれたので、默阿彌も森田座に居据る都合に行かなくなつた。が、これと同時に市村座から出勤を依賴して來たので、こゝに於て默阿彌は二十年來の境遇であつた、河原崎座に別れて市村座の人となつた。

座を更へたのは、一面默阿彌の新しい出發點となつた。やがて來るべき十年間の市村座時代は、實に默阿彌と小團次との形成つた、嚴興勃起時代であつた。

母を失つた家庭は、新しく設けた男女の兩兒によつて賑やかにされた。家庭も一通り整ひ、傾きかけた家運も差支へなく生活して行かれるやうになつた。一方作者としての方面から見ても、優に一人前の立派な狂言作者となつて、小團次との間には一脈の燦點をさへ作り、歩むべき路も柴門の霧を拂つて窺ふことができた。

安政の大地震は一口に〝世直しの地震〟と唱へられた位で、江戸全部に亙つて火の燃えるがやうに新しい活動を促す動機になつたのであるが、默阿彌に取つても〝世直しの地震〟となつた。默阿彌も長き二十年間の試練を經て四十の春を迎へたのである。まことに三十歳にして立ち四十にして惑はずと言はれた、孔夫子の語通りに進んだ人であつた。

才能も優れてゐたであらうし、出世の早かつた事實も認めるが、默阿彌の四十歳迄は寧ろ薄倖であつた。然しながら此の長き草廬の生活は、默阿彌を極點まで修養せしめたのである——その舞臺學に

於て、その人間學に於て、一切の準備は整つた。新生面は自ら展開されんとするの形勢を示した。

安政二乙卯年　（四十歳）

〇璃寛、吉三郎、竹三郎、友右衛門、與市、しうか、だんの介。三月六日しうか死す。〇五月「兒雷也後日」不入り。〇守田座再興の出入初まる。〇七月二十五日より璃寛はいり初日二ばんめ袖浦故郷錦。〇九月興行なし休座。再興の出入むづかし。〇二丁目（市村座）より出勤を頼まれ、九月二十五日（茶屋）山本の二階にて羽右衛門氏に逢ひ、出勤の約定なし、手附五十兩受取。〇十月二日大地震。〇守田座はいよ／＼再興になる。

（明治廿四年の手書に拘る『年代記下調』より）

第五　成熟期（其の一）

一、市村座に入る――小團次と同座す――『座頭殺し』――『鼠小僧』――小團次座頭となる――『黑手組の助六』――二、二人の手になる新運動――世話物――劇壇の一洗――『役者は小團次、作者は河竹』――藝壇の雙璧――三、新狂言の續出――三座の對抗――『縮屋新助』――助成者――菊次郎と共に三幅對――四、白浪物――『村井長庵』――『鬼あざみ』――惡黨と毒婦と――五、俠客物――時代物――淨瑠璃――清元と――六、脣齒輔車の關係――小團次の死――二人の功績。

一

安政三年から市村座に轉じた默阿彌は、其の三月興行に『せつた直し長五郎』（夢結蝶鳥追）を書いた。役者は此の際に彦三郎から改名した龜藏と、その彦三郎を襲いだ竹三郎とを上置にして、關三十郎、四世菊五郎、權十郎等であつた。旗本の阿古木源之丞と、非人の娘おこよとの戀を描いた新作で評判はよかつた。

小團次は七月に至つて同座し、これより專ら『新狂言を綴る』事となつたのである。第一の新作は『座頭殺し』(蔦紅葉宇都谷峠)で、これが大好評を以て迎へられた。

此の時に、役者も作者默阿彌も、共に其の技倆を發揮したのは、東海道鞠子の宿藤屋の場より宇津谷峠殺しの場と、居酒屋伊丹屋のゆすりとであつた。小團次の扮する二十歳足らずのいぢらしい座頭文彌が、市名を取りに京へ上る途中、東海道は鞠子の宿へ泊る。而して所持の官金百兩に目を附けて來た護摩の灰提婆の仁三をまきたいばつかりに、江戸の柴井町の伊丹屋重兵衛の勸むるがまゝに、早立をして宇津谷峠へさしかゝつた時、これも金策に困じ果てた身故に、文彌に迫り金を貸せと賴む。けれどもその金は、姉が身賣りまでして調へてくれた大切なもので、貸さうやうもないので殺して取る。これを提婆の仁三に見咎められるのである。

鞠子の宿の合宿で、諸國生れの侍や商人や百姓やが、寄つて集つてがや〳〵と罵り騷ぐ宿場の情趣は、恐らく作者の得意な寫實であつたらう。その滑稽と騷擾の舞臺は、一轉して宇津谷峠の寂しさとなる。何處までも正直でいぢらしい文彌は、重兵衛を怨みながら、助けを呼び立てながら慘殺される。重兵衛に扮したのは龜藏であつたが、これも慾心からではなく、切羽つまつた金の爲めに强奪するのであるから、絕えず良心の呵責に逢ひながら殺してしまふまでの徑路が、巧みに描き出されてゐる。提婆の仁三は小團次の二役であつた。やがて江戸に轉げ込んで、さうとも知らず立寄つた其の居酒屋

が、夫の重兵衛の伊丹屋と知り、宇津谷峠で拾つておいた煙草入を種にゆするのである。此處では又文彌とは全く趣を異にした性格を寫して、眞の惡黨になり果せて重兵衛を追求する。此の居酒屋の情趣も作者が親しく實地を研究した上になつたものであらう。細い線で浮浪人の晩餐を巧みに描き出してゐる、特色的な場面である。

此の作は成功した。寂しいものではあつたが、小團次の藝はよくそれに適してゐた。峠の殺しで文彌と仁三との早變りも噂に上り、業事師と地藝との調和、内容と技巧との溶和を明らかに示すやうになつた。此の作によつて新運動の火蓋は切られて燃え始め、翌安政四年には、其の地盤を堅めたものと見てよいであらう。即ち『鼠小僧』、『正直清兵衛』、『小猿七之助』と、かう代表者が三つまで提供されて、悉く效果を收めたからである。

『鼠小僧』は、正月から三月越し、百日餘も打續けたといふ『大出來、評判よく大々當り』を得た狂言で、江戸中の人氣を脊負つて立つの概あらしめた。闇夜の稻毛屋敷の辻番で、番人の與三兵衛を親とも知らで、稻葉幸藏實は鼠小僧次郎吉が對面をして遁れる場と、滑川の易者と化けた幸藏の宅とは小團次をして情趣豐かな藝を發揮せしめる事が出來た。此の作に於て特に注意すべき事は、明治の二名優たる、九代目團十郎（當時權十郎）と五代目菊五郎（當時羽左衛門）とが、一座して好對照をなしてゐる事である。

權十郎は、駿府二丁町の女郎屋の亭主文三となつて、「おぬしなどにこんな事をまだ言ふ株は來ねえけれど、親仁（海老藏）のせりふを聞き噛り死んだ兄貴（八代目）が似ぬ聲色、聞きにくからうがこれ花魁、どうぞ聞いてくんなせへな」と冒頭に置いた長ぜりふを書き込まれてゐる。一方の羽左衛門は、權十郎とは性來も違つてゐれば、賣出しもパッとしてゐた。滑川の幸藏内へ占卜を見て貰ひに來る、蜆賣の三吉に扮して出世役となつた。これは默阿彌と小團次が相談して書いたので、羽左衛門も熱心に實地を調べて演つたので、小團次の幸藏が喰はれたさうである。後に菊五郎が鼠小僧をよくしたのは、即ち此の頃のを見覺えてゐて、小團次の通りにしたのだといふ。此の時に權十郎は二十歲、羽左衛門は十四歲であつた。

　小團次が朴訥な正直清兵衛と、毒婦のお瀧とを演分けて好評を得た「正直清兵衛」は、次興行の五月に上場され、續いて七月には玉菊の追善を挿んだ「網模樣燈籠菊桐」が出來た。小團次は粹な江戶ッ子の巾着切り小猿七之助と、中萬字屋亭主勘兵衛とをした。七之助が卅年ぶりに江戶へ戾つて、女房のお熊を吉原の三日月長屋へたづねて來る一場は、作中の眼目で、此の頃の切見世、局見世の狀態を寫したもので、評判がよかつた。

　豐芥子編の『花江都歌舞伎年代記』續篇には、此の作の條下に次のやうなことが誌されてある。

『當新狂言大々當り、右玉菊大當りに付き、吉原中萬字屋彌兵衛方より菊五郎、小團次へ積物送り物數々あり

中萬字ゟ棧敷片側買切りにて一家親類其外出入のものまでも招き見物させ、其の日の馳走莫大の費用なり、扨又尾上梅幸けいせい玉菊に扮作し大當りに付き、ちかはる（隣春）大人より唱歌をものして贈らる。

いにしへの今様にならひて

秋風、小萩の葉に野べの松蟲うらみつつ、まねく尾花の袖みれば露の玉ぎく月のかげ。

又唯香以（深川谷）大人より文臺歌舞伎と題するものをものして河竹大人へ送らる。

河竹生の新作粒々みな辛苦なるを感じ戯れに役割を探題とす。

小猿七之助

ひよ鳥の番ひながらや盜み喰。

中萬字屋彌兵衛

義理詰に切られし菊の無心かな。

手代與四郎

かた袖をつかんで退かぬいなごかな。

所化教眞

手料理やむごひ西瓜の切刻み。

お坊吉三

南からつれてそれけり女夫星。

成熟期

河竹默阿彌

さくら川 善孝

鈴蟲や生きて居るかと晝の籠。

藝者 お三

似るものに似た匂ひそふ野菊かな。

島崎の抱 お杉

秋たつや杉もごろ寐の普請小家。

倉か野屋五兵衛

畑貸して手出しもならず渡り稻。

奥女中菊川(瀧川)後に御しゆてんお嶋

初涼しやの字の下の寐まき帶。

遊女 玉菊

終りさへ來猿ぬ菊の操かな。

夢三ケ矢翔

蜂の踏む草市あとの瓢かな。

網打七五郎

淒い目もこりぬ夜あみや盆知らず。

女あんまおなみ

露の香の花野な探る夜の業。　香貝獨詠

己の初秋

壽日釜　抹香社

河竹生の新狂言を祝す

星に逢ふ千もとの竹のなびきかな　西馬

つくり得し青に待たるゝ節句かな　湖十

人まねく燈籠も草のそよぎかな　乙芽

作道の立ちてはてなし當り稻　種員

書おろす手際見えけり星の影　秋翁

出來秋の入り帆つゞきや袖ヶ浦　善孝

作や遣ひ上手のとつ辨り　香以

當狂言日出度納、其後梅幸の衣裳白綸子に隣春（ちかはる）の畢繪の畫きしを旗となし、永見寺へ納め佛事供養念頃に勤められ、此の日も諸親類戲場の者迄も法席につらなりしと云々。」

これによつて見れば、此の時新作された小猿七之助にしろ、玉菊の部分にしろ、一方ならぬ騒がれやうであつたことが、ありありと想見される。また、默阿彌の新作が如何なる反響を喚起したかは、津藤の讃辭によつても窺ふことが出來るであらう。かういふ風に『追つかけ染』に出來る新狂言が皆あたつた。小團次の芝居を河竹の作によつて見よといふ聲は、必然的に起つたのである。

次いで翌安政五年三月の『江戸櫻清水清玄』（清玄と黑手組の助六）に於て、小團次は始めて座頭に上つた。最も座頭の位置に据つたのは始めてゞあるが、實は疾から座頭の役所はしてゐたのだ。彼には門閥がない爲めに、其の格に直れなかつたのである。阪東しうかや阪東龜藏等と一座すれば、假令實力は上でも、座頭の地位を冒す事は、閥を重んずる芝居社會では許されなかつたのである。二年前でさへ龜藏、彦三郎等と同座して、小團次は千本櫻に權太と忠信と知盛とをしてゐるのである。實力は座頭以上であつたらうが、その格に上つたのは此の時が初めてゞある。一方から見れば彼が座頭の正格に直つた事は、彼自身の地位の確められたと同時に、新運動の勝利を示すものではなかつたか。

『黑手組』も其の語りの中にある通り『御所望の世話狂言』であつた。小團次が、市川家十八番の『助六』を演りたいと主張したのを、默阿彌が適役でない事を說得し、其の代りに此の作が出來たのである。かの『助六』は調子の入る、見得澤山の芝居だから、柄は兎も角小團次にはあてはまらない、持ちきれないものであつた。小團次の役柄を十分に呑込んでゐた默阿彌は、彼れに切つて嵌めたやう

な、『世話の助六』を提供したのである。せりふの中にも『看板うつた鉢巻にゆかりはあれど附燒刄、例へて見りやお雪と墨、黒手組の頭分花川戸の助六とはおれが事だ』とあるのは、此の邊の消息を說明したものである。

猶此の際に一層の人氣を集めさせた事があつた。それはその頃今紀文と謳はれて花街、芝居を通じて全盛を張つてゐた、津藤をモデルに取つた紀國屋文左衛門が、傘に譬へて助六に異見する件があつた。紀文をば津藤の愛護を受けた權十郎が勤めたので、其の贔屓もあり、出來もよし、それやこれやで芝居全體の景氣にもなつた。

二

畢竟するに小團次は革命兒であつた。彼によつて成された新運動は、何の背景も門閥もなく、單に自己の立脚地を發見して、一種の新傾向的運動を試みたものだとも考へられる。而して彼れの藝術的才分を以て、默阿彌の給する材木と繪圖面とを辿つて、新しく建設せんとしたものは世話物の家であつた。卽ち小團次の寫生的、又は一歩を進めて言へば自然主義的劇術に據つて生れた世話物であつたのである。

小團次以前に盛名を擅にして、得意の『日招ぎの淸盛』其の儘の概のあつた、四世歌右衛門は、

時代物と所作とによつて、世話物には全然適さなかつた。例の海老藏も、寧ろ時代物に名調子を張り上げる方を得意とした人である。さういふ役者の下にあつた、當時の江戶歌舞伎は、どこまでも在來のお芝居式の芝居で、物語も人物も服裝も言語も動作も、架空的誇大的であつた。役者も盲從的に演じ、作者も補綴を事としてただ是れ足れりとして、只管に先人の跡を追うてゐたに過ぎなかつた。一般の觀客も多少見飽いてゐた。彼等とは何の交渉もなく、生命もなく腐爛せるが如き芝居には、少なからず倦怠を感じてゐたのである。

かういふ場合に、小團次と默阿彌との交歡によつて生れた新しき藝術は、惰眠の夢を破つて警鐘を鳴らしたのである。小團次と默阿彌とが、彼等を圍繞する江戶の日常生活の間から發見して、舞臺上に再現した藝術的要素は、時の人をして強い生命力を感ぜしめたのであらう。江戶中の人々は、始めて自己を發見し得る芝居に逢つて、魚の水につくが如くに馳せ參じた。

金ぴか物を捨てて、生世話についたのである。主人公も、錦繡爛たる超人的な英雄又は貴公子を去つて、凡人に求められた。鼠小僧のやうに、紺の腹掛、細のパッチ、白足袋に突かけ草履、尻端折りといふ平民が、主要なる人物を占めた。時代の活相が寫し出されたのである。從つて藝風も寫實的であつた。誇大な技巧にのみならされたる群集は、纖細巧緻の極、地味な無技巧的の技巧に成る藝風に對して、愕として目を見張つた。一作出る每に市人は新しき歡喜を覺え、それに伴うて出版される

問題の草雙紙を爭ひ購つた。二人によつて成されたる芝居は、見た目にはむさくろしかつたが、内には生命の實があつた。時代及時代の人との間に共鳴があつた。見た目には花やかで賑やかでも、生命の空疏なる舞臺が破壞されたのも理の當然であつた。

然しながら、小團次が石川五右衞門、佐倉宗五郎よりして、忍ぶの惣太、鼠小僧と進んで、新運動を確むる迄には、十年足らずの時間と努力とを要したが、撓まざる勤勉は無駄にはならなかつた。安政元年から五年に亘る三四年間に續々發表した、色彩の明らかな新しい芝居は、眞に暴風の如くに襲ひ來つて、一切を倒壞したといふおもむきがあつた。小團次の藝はキザだとか、ケレン師だとかいふ非難は、守舊家の間にこそ取沙汰せられたかも知れないが、それはほんの燒石に水で、到底新傾向に抵抗すべき有力な障害ではなかつた。

小團次が素晴らしい人氣になつた事は無論である。通常ならば開場して十日目位でなくては、賣切れ滿員にはならなかつたものが、小團次の芝居だと四五日目には賣切れるといふ有樣になつた。從つて狂言作者河竹（默阿彌）の名も、小團次と共に世上に聞えるやうになつた。當時流行のハイヨ節の替唄に、

にがほ豐國やくしやは小團次ハイヨ
とうじさくしやはのみなさん川竹ひゐきはたいそ〳〵

といふのが出來た。始め錦繪に出たもので、三升格子の着附に置手拭の權十郎が本を持ち、三味線を抱へた家橘が手拭を吹き流しに冠つて、讀賣りをして歩く見立て繪に此の唄が書かれてあつた。芝居町と言はず、茶屋と言はず大流行を來して、横町の子守兒までが口にしたといふ。また此の唄の物語つてゐるが如くに、小團次と默阿彌との藝術は、浮世繪師似顔繪師の豐國（五渡亭國貞、龜戸豐國）の持てるそれと、殆ど同時に燃え盛つたのであるが、更に此の三者が其の傾向位置を略ゞ同じうしてゐた事は、更に注目に價する。

座頭になつた頃の小團次は、眞に日の出の勢であつた。彼と片岡仁左衛門（八世）と嵐璃寛（二世）とは、恰も明治に於ける團、菊、左の關係、位置であつたといふ。人氣に於ても亦實力に於ても、小團次が死の前十年間は、一人も前に立つものはなかつたと言つてよからう。

それに就いて次のやうな話がある——嘗て彼がまだ米十郎と稱して、大阪の竹田座に修業を積んでゐた時分、座頭の嵐璃珏に恥しめられ、上草履で蹴飛ばされた事がある。彼は其の恨みの草履を懐にして座を退いたまゝ、二十年間の修業を積んで、座頭に上つた安政五年の春に、その璃珏が折よく隣町の森田座へ下つたので、小團次は昔日の恨みを返さんものと、妙見の靈像を拜ませるからと言つて自宅へ招き、かの古草履を示して、これが私の出世の守本尊であつた。言はゞお前さんは恩人だ、

就ては是れを改めてそちらへお返し申すから、これからはお前さんの守本尊にして、三座の座頭にな
つたらよからうと、恥しめたさうである。小團次はそれ程の役者になつたのである。
小團次の努力と對して、默阿彌の作者としての地位も上つた。下落せる作者の地位は、此の頃から
再び高められたのである。
それに就て、矢張りこんな話がある――坂東龜藏が或る日、師匠一寸來ておくんなさいと言ふので
部屋へ行くと、改まつた調子で『師匠お前さんは依怙贔屓をしない人だが、私にだけはどうもそれが
あるやうに思はれます』と口を切つたので、これはてつきり役不足だなと思つたから『然しお前さん
にはお前さんだけの、お役は見てある積りですが』と答へた。すると『いや、私ぢやない、お前さん
は小團次の弟子には好い役をつけなさるが、私の弟子の面倒は見て異れないやうに思ふのだ』と言葉
を足した。然し、默阿彌は動ずる色もなく『それは困ります。お前さんの弟子には使へるのが少ない
んですから』と、短刀直入にずつぱり言切つた『一體依怙贔屓と言ふのは、自分が愛してゐる爲めに
分不相應な過ぎた役をつけることで、腕のないものにはつけないのが正路だらうと思ひます。私の方
では身贔屓をして、分に過ぎた役はつけられないんですから、お前さんの力でもつとお弟子さんの面
倒を見てやつて下さい。さうすれば私も必ずお役を見ませう』と附け加へた。龜藏も呆氣に取られて
ゐたが『これはまつたくお說の通りです。弟子にもよく申しますから何分よろしく』と丁寧な口を利

いたといふ。

此の話に傳へられてゐる默阿彌の態度は、從來の作者の夢にも見られない、立派な見識だとあつて芝居中の噂に上つたさうである。小團次は先代の菊五郎等と同じく、有名な熱心家で弟子にもやかましかつたから、小半次、米五郎などといふ、身分は下でも使へるのが幾人もあつたのである。龜藏がそれを省みもしないで、一本突込む積りのが、却てやり返されたやうなものである。何しろ龜旦那とも呼ばれて、親方扱ひにされてゐる役者に對しても、屈從しないでよいだけの地位になつた事が分かる。

斯くの如くに、最早動かすべからざる地位を占めた小團次は、猶も默阿彌の新作を得て、慶應二年の死に至るまで新劇運動を續けたのであるが、二人の關係は眞に車の兩輪の如くで、相持の成功であつた、また不思議な事には、二人の閱歷から生活內容までが酷似してゐる。

作者默阿彌も青年時代より廿年間は、實世間、芝居界、舞臺上等の經驗の爲めに專らで、其の修得した總ての結晶體を求めて、而も未だ得られずに過したのである。小團次も亦其の先天的の矮少なる柄と上らざる容姿と秀れない音調とを、何處で如何に活用したらよいかを、三十年間の忍耐を以て摸索してゐたやうに思はれる。長い間認められないでゐた二個の才能が、茲で結托するに及んで、始めて而も同時に花咲き實を結んだのである。小團次は默阿彌よりも四つの兄だが、どちらも四十代の

分別盛り、男盛りで、成熟期に達してゐた。その二人がうんと馬力をかけたのだから外れつこはなかつたのである。小團次の特色も明らかになれば、默阿彌の技能も明白にされた。四人の内一人缺けても、これだけの效果は收められなかつたであらう。沙翁とバーベーヂ、近松と義太夫等の間に見るが如き、密接なる關係が結ばれてゐたのである。彼等と並べてまさしく藝壇の聯璧と稱すべきものであつた。

三

そんな譯で、急に人氣役者になつた二人は、脂がのつて盛んに新狂言を舞臺にかけた。

『黒手組』を演じた安政五年の十月には、海老藏が加入して『小春宴三組杯觴』に佐野の鉢の木と馬士問答とを書いた。馬士問答は、雪の降る諸宿で馬士の藤六が、時頼と知らずに時頼に向つて大氣焔を揚げ、鎌倉幕府の不行屆きを、醉に任せて詰り押問答をするのであるが、馬士の藤六と時頼と從者二階堂と三人の問答が『拔ける程よく三千兩と褒められた』とあるほど大出來であつた。藤六に扮した小團次は、あの長いせりふを格別の動作もなく、音樂の助けをも借らずによく言果せた。又其の長い訴へをぢつと立つて聞いてゐた海老藏の時頼が、顏は笠に掩はれながら如何にも耳傾けてゐるやうな、その態度、腹藝といふものが又無類であつたといふ。

翌年の春には、代表作の一つなる『鬼あざみ』が出來た。此の當時御金藏を破つて大金を盜み出した藤岡藤十郞を當て込んだ際物で、小團次が淸心後に鬼あざみ淸吉を、粂三郎が十六夜後におさよを演たのである。此の頃粂三郎は人氣も無く、廻合せで彼れの出る芝居がよくなかつた所から、小團次は默阿彌に『お前さんの工夫で彼を一つ活動さして貰ひたい』と相談をかけたので、大いに工夫を凝らした。そこで美しい粂三郎のおさよを、くり〳〵坊主にして見せ、それから毬栗になり、一つ竈の淸吉にそゝのかされ連立つてゆすりに來るといふ、破格な事を試みてそれが大評判になつた。殊に坊主頭になつても頭巾を冠つてゐて、幕切れにそれを取つて耻かしさうに別れを告げる所は、一種特別な情趣であつたといふ。此の芝居は大入り續きであつたが、御金藏破りを當て込んだ廉で、官憲の命により三十五日目に差止められた。

翌萬延元年の正月には、其の得意の作なる『三人吉三』を書いたが、世上の評判に較べて入りは少なかつた。五月には『後日の岩藤』に鳥井又助の切腹を書いたが、これも物は好かつたにも拘はらず不入りであつた。かう思はしくいかなくなつたには理由があつた。上方から先代芝翫の中村福助が下つて、若手の派手な賣出しに江戶中の人氣を集めて、素晴しい勢を示した。中村、森田の兩座を掛持して、見物を皆そつちへ吸收してしまつたからである。さすがの小團次も、たゞもう花々しいパッとした、若手役者のすさまじい人氣には、一時けおされない譯には行かなかつた。その爲めに二三回

の興行が不成績であつたのである。
七月に及んでは、いよ／＼福助から芝翫に改名する事となつて、又一倍の人氣が湧き立つて、兩座の間に挿まれた市村座は苦戰の狀態になつた。座頭の小團次は一方ならぬ心痛をした。若しも今度の狂言が當らなかつたらば、殘念ながら江戸の地をも離れようと心を定め、七月興行を以て關ヶ原と覺悟した。軍師たる默阿彌にはくれ／＼も挽回策を依賴した。

扨一方福助の人氣は益盛んで、贔屓先より贈られる幟は何本となく勇ましく立てられ、樽、蒸籠の積物は出來る、引幕は賑やかに飾られた。がそれに引きかへ市村座は引續いての不況にいとも沈んで見えた。默阿彌は兩座の景況をそのまゝ狂言の趣向に借りて、それが大當りに當つた。

その狂言は『切られ與三』を中に嵌めて『縮屋新助』を書いたもので、舞臺を深川八幡の祭禮に借りたのである。縮屋を選んだのは、小團次が越後からよく賣りに來る縮賣りに扮して、荷を背負つて出たいものだといふ注文を出してあつたから、それを當時の美代吉殺しの實說にあて嵌めたのである。

兩隣りの二座に立てゝある幟を祭禮の幟と見立て、芝居に八幡祭りをするとの趣向であつた。神輿を仕切場に飾り、芝居茶屋の前へは地口行燈を出し、名題も『八幡祭小望月賑』として初日を出して見ると、此の頓才的趣向が非常な效果を奏して、割れつ返るやうな大入り續きになつた。餘り景氣が

好いので、樂屋内へも祭りの趣向を凝らした藤棚が出來て、幕間には馬鹿囃しをして囃し立てる。いろんな催が始まる、揃ひの浴衣が出來る、鹿の子の肌脫ぎも出來た。座方一同役者までがたゞもううきうきとして、その賑やかさと言つたら再となかつたさうである。此の勢ひならば七月から九月までは打續けられると豫想されたが、八月の二十八日、猿若町一丁目の塗り屋の失火に座が類燒したので、それなりになつた位、芝翫の改名も何の景氣をつけることもなく、兩座は大の不入りに終つた。

　これは一つに默阿彌の功に歸すべきものであつた。窮餘になつた默阿彌得意の趣向的才能は見事にあたつて、小團次はもとより金主、座元まで大悅喜で其の勞を謝したといふ。

　默阿彌の名は此の頃よりいよ〳〵聞え、其の地位も玆に至つて高められて、狂言作者が芝居に於ける軍師として、明らかに認められるに至つたものであらう。三座の割振りに際して、默阿彌が名題役者二人に匹敵するものとして取扱はれたといふが如き空前絶後の榮譽も、此の頃から與へられたものと思はれる。

　改めて說くまでもないが、猿若町に引けてからの江戸三座は、相接してゐる點もあり、又一年定めの座頭制度にもなつてゐたから、自然其の間には激しい競爭の起るを免れなかつた。元祿の昔、大阪で竹本座と豐竹座とが對抗した事實もある。竹本座は義太夫を陣頭に立てゝ近松門左衞門が筆を執り

豐竹座は若太夫を擁立して紀の海音の作を仰ぎ、互に奇策をめぐらし苦心慘澹したといふ。江戸の三座も丁度さういつた狀勢(ありさま)で、相對抗してゐたのである。座の消長に關しては、座頭と立作者とが、一切の責任を負ふやうな形となるので、責任上互ひに勵み合はねばならなかつた。殊に三丁目の守田座と二丁目の市村座とは、いつも競爭の姿であつた。かの近松が『曾根崎心中』を新作して、豐竹座を壓倒したのは、恰も默阿彌が『縮屋新助』を書いて形勢を挽回したやうなものであつた。近松と義太夫とが脣齒輔車の關係を持して、突進したるが如くに、小團次と默阿彌とは互に助け合うていつも勝を制するので、他座は恐慌を來したのだといふ。

默阿彌が後年市村座のみならず他座へも出勤するやうになつてから、却つて樂しみが薄(うす)らいだと人に語つたのも、如何に默阿彌がさういふ點に留意して機智を弄したか、その邊の消息を語つてゐるではないか。

然しながら、どんな名優でも一人では芝居は出來ない。斯く小團次と默阿彌との芝居は持囃(もてはや)されたが、單に二人だけの力ではなかつた。小團次は無論座頭として舞臺一切を統一する地位に立つてはゐたが、彼の功を分け前した幫助者があつた、次に其の二三人を列記しておかう。

小團次の向うへまはつて、立敵(たてがたき)として最も多く附合(つきあ)つたのは關三十郎(三世)である。錦繪でみて

も分かる通り、幸四郎に似て鼻の高い、造作の大がゝりな顔の、押し出しの立派な、白廻しに巧みであつた役者である。

『鬼あざみ』の中の大盜人の白蓮實は大寺庄兵衛とか『御所の五郎藏』の星影土右衛門などをやつてゐる。藝風が寂しくて堅かつたから、小團次の作る情調を破壞するやうな事はなかつた。

また『鼠小僧』のお熊婆ァだの『座頭殺し』の伊丹屋重兵衛などをした龜藏、或は『髮結藤次』の神崎屋喜兵衛『腕の喜三郎』の神崎甚内などを勤めた團藏（六世）等も、同じやうに寂しい仕出かさない藝風の人であつた。

女形では尾上菊次郎といふ、天下一品の世話女房役者があつた。小團次、默阿彌と共に其の頃劇壇の三幅對と稱された人で、喜三郎の女房小礒『村井長庵』のおりよなどは其の傑作であつた。もと／＼小團次とは因緣の深い夫婦役者で、彼れの出世狂言の五右衛門にお瀧、佐倉宗五郎におみねを演じて既に好一對と謳はれてゐた。風采も上らず派手ではなかつたが、地味な藝は妙境に入つて寐しい生世話物の女房役者として、新運動を助けた第一の人であらう。

十六夜になり、お孃吉三になつた粂三郎（後の半四郎）は唯美しかつたゞけ、又『小猿七之助』の瀧川や『鼠小僧』の松山をやつた四代目の菊五郎（梅幸）は、溫厚な、ほうつとした人柄の好かつた役者で、共に小團次の藝風と衝突するやうなことはなかつた。

大當りを取つた『縮屋新助』の書下しは、萬延元年で、引續いて文久、元治、慶應の數年にわたつて、小團次中心の新作が續々發表された。吾等は此の章に於て多少の重複をも顧ず、それらの作物を類別的に記載し、傍ら共の特色を一應調べてみたいのである。

四

成熟期の作物中には、時代物も淨瑠璃もあつたが、それらは僅かで、江戸市井の現實社會に材料を求めた、世話物が大部分を占めてゐた。時代物でも、時代世話綯ひ交ぜの形を取つた作でも、世話の方が主眼になつてゐた。

小團次が泥坊役者と呼ばれ、默阿彌が泥坊作者（又白浪作者）と呼ばれた事は、噂に殘つてゐるがその如くに世話物の大部分は、盜賊を取扱つた所謂白浪物であつた。

何故盜賊物が題材として選ばれたかは明瞭でないが、第一には、當時の講談落語界に白浪物の實事譚が行はれ、廣く世の中に材料が知られてゐたといふ事がある。特に伯圓は一名を泥坊伯圓と言はれた位に白浪物を得意の演題としてゐた。次には、世話物の作柄として時事を材料に取つても、盜賊の事だけは、比較的差障りにならなかつた點もあらう。或は又作物としての性質上、探偵物と同じく波瀾を起し、好奇心を募らせるに便利でもあつたらう。或はそれと關聯して殺し、強姦、拷問といふが如

き強烈な刺戟を結出するに都合のよい故もあつたであらう。これらのさま〴〵な理由によつて、白浪物が續出したものと推測してよからう。

默阿彌の作に白浪的人物の見えたのは、そも〳〵の處女作からである。えんま小兵衞が片袖を種にして百兩金をゆすり、又は三位中將の路銀を奪ふなどに端を開いた以來、全生涯の作物にわたつて、世話物ならば大抵の場合其の影を發見せぬ事はない。小團次との楔になつた『都鳥廓白浪』には其の名題の示す如く、霧太郎となつて強盜をする松若丸がある。『やかましいやい、默つてゐなよ——何だと、どろぼうさ』と豪語した人丸お六は、『大日坊』の中の女賊であつた。然し白浪物ながら、其の動機と目的にはいろ〳〵あつた。判然とした區別も立てられないが、生來の本能的盜心から出たものもあれば、單に快樂を得んが爲めになつたのもある。或は御家再興の爲め、義理の爲めに、止むを得ず強奪するものもあつた。惡婆、毒婦もあれば胡摩の蠅、巾着切もあつた。

代表的傑作の一つなる『村井長庵』（文久二）中の長庵は、默阿彌の筆と小團次の藝とによつて遺憾なく描き出された惡黨の典型であつた。長庵は町醫で貧乏はしてゐたが、單に榮耀がしたいから慾心を起したのではない。生れつきの金錢慾の爲めに毒惡で殘忍無慈悲な所業をしたのである。彼は金の事を思ふと、弟であらうと姉であらうと、恩義あるものであらうと用捨はしなかつた。良心の痲痺し盡したふてぶてしい性格は、長庵の爲めに苦しめられる番頭久八の實直さと對照して、小團次によ

つて同時に舞臺の上に創造されたのである。全體が寂しい狂言ではあるが、力強い作と彼の至藝とによつて、大喝采を博した。

長庵の如きは、强盜とか白浪とか稱する以上の惡人だが、もつと單純で愛嬌のある白浪がある。その代表作は特色的に入組んだ筋立の『三人吉三』である。小團次の扮した和尚吉三は、吉祥院の所化上りで、『賽錢箱から段々と祠堂金まで盜み出し、到頭寺をだりむくり鼠布子のお仕着も淺黃と替り二三度はもつさう飯も食つて來た』盜賊で、此の和尚吉三が盟主となり、大川端の庚申塚で兄弟の約を結んだ弟分の二人は、お孃吉三にお坊吉三である。お孃は友禪入りの振袖に人柄作りの追落しで、お坊は五分月代に着流し小長い刀を落差しにしてゐる、武家お構ひのごろつきである。三人ともいづれ劣らぬ『小ゆすりかたりぶつたくり、押の利かねえ惡黨』で、百兩の金を枷にして巴の白浪を形づくる。これに勸善懲惡、因果應報をこめて、複雜した筋の末が自殺する事になつてゐる。

また鼠小僧次郎吉のやうな義賊もあつた。一篇中で辻番の場がよかつたのは、次郎吉がお元、新助の窮狀を見兼ねて救ひたさに盜賊をし、そのために親父の與三兵衞に對面はしても、さうと名乘つて明しもならず、『泥坊どの殺して行つて下され』と呼びかけられては、義理と人情に絡まれて悲痛の思をしながらも、當身をくれて立別れねばならぬといふ境遇を取扱つたからであらう。滑川内の場も同じ行き方であつた。忍ぶの惣太が梅若丸を殺したのも、御家の爲めに金が入用だつたからである。文

彌を殺す重兵衛が最後までも良心の呵責に逢つたのも、その爲めであつた。

『鬼あざみ』と『鑄掛松』（慶應二）とに描寫された、白浪の動機は最も注目に値するものである。只管に歡樂を求めたいといふのが動機で思ひ立つた白浪である。特にそれらが作の主なる興味であるといふのではないが、江戸末期に共通する、捨鉢な享樂的傾向を、如實に描いたものと言つて差支へない。

清心は極樂寺の役僧で、十六夜に迷つて廓通ひをした事が分かり、女犯の罪に問はれて追放され、十六夜と共に稻瀨川で心中したが、行德生れの海邊育ちだけに死にきれない。浮び上つて百本杭に捉まつたまゝ闇の中にぢつとぼんやりしてゐて、梅見戻りの遊山船から聞える賑やかな騷ぎ唄を耳にしふつと蘇つた人のやうに氣がつく。と、粹な淸元が洩れて……戀するも樂しみするもお互に世にある中と思はんせ、死んで花實も野暮らしい……これを耳にした淸心は心機一轉した。『然し待てよ、今夜の事を知つたのはお月樣とおればかり、人間僅か五十年、首尾能く行けば又十年二十年も生き延びてつゞれを纏ふ身の上でも金さへあれば出來る樂しみ、同じ事ならあのやうに騷いで暮すが人の德……是から夜盜家尻切り、人のものは我物と榮耀榮花をするのが德、こいつはめつたに死なれぬわえ』と發心し直して跡白浪と立去り、やがてゆすりになるのである。

鑄掛松も略ゝ同じ行き方である。鑄掛屋の松五郎は天秤棒を肩に當てゝ日がな一日齷齪と稼いでも

やつと喰ふがかす〲だ。同じ人間と生れても懐手をして金を儲け、年が年中遊んで暮す人もある。あゝ意氣地のねえ事だと、今の自分に愛想を盡かして愚痴をこぼしながら、夏の炎天をやつて來たのが兩國橋の袂で、汗を拭きながら橋の下をのぞきこんで惡い物を見た——下には涼みの屋根船がもやつてゐて、中で大浮かれに浮かれてゐるのを見てこなしあつて『かう見た所が江戸ぢやあねえ、上州あたりの商人體だが、濱ででもまうけた金か、切れはなれの好い遣ひぶり、あれぢやあ女も自由になる筈。あゝあれも一生これも一生』ト詰らぬといふ思入『こいつア宗旨を』ト決心して、鑄掛の荷を川へ打込み、高欄へ片肱かけて『——替にやアならねえ』と、卽ち『船打込橋間白浪』となるのである。

永井荷風氏は『紅茶の後』の中で、默阿彌の作が音樂的情調に富んでゐる事を述べ、『鑄掛松』は殊に勝れたる實例であると、次のやうに語つてゐる。

抑此の作の骨子とする事件の起因が兩國橋船遊びの絃歌であつて、中程の妾宅の場に下座の端唄を活躍せしめ、其の結末の自殺が、また隣家で彈く淨瑠璃の絲の音によつて、動作に現はし得ない感情を說明さしてある。自分はこの大詰の自害の場に於て、淨瑠璃『新版歌祭文』野崎村の出と三里灸の一段をあしらひ、次に夫婦が今生の別れの悲愁をば同じ野崎村の連彈に伴はせた處に、默阿彌翁が作劇の非凡なる手腕を見ると共に、幾度繰返しても盡きない藝術的感興を味はふ

のである云々と。

同じく歡樂を追ひ、情慾の滿足を追及するにも、殆んど執念其の物のやうな、巾着切りの小猿七之助がある。小猿は永代橋で盆の月夜の十三日に、年の頃は二十二三、女盛りの御守殿瀧川を見初めて『愚痴な事を言ふやうだが、男に生れた上からは、あんな女を一晩でも自由に出來たなら、ほんにおらア死んでもいゝ』と呟きながら、後の便に銀簪を拔き取り、直に跡追かけて屋敷を見屆け、そこの中間に住み込む。いつか一度は思を晴らさにやおかぬといふのでつけてゐて、或る大雷雨の晩の供に加はり行き、洲崎の堤で口說き落し、到頭望みを果すといふものである。『殺しておいて自由にする』とか『色のためには命も惜しまぬ』と言つたやうな、強い慾念を描いたのも時代の影であつた。

惡黨と毒婦も、此の時代の作によく現はれる。小團次によつて舞臺上に描かれた、惡黨の傑作に護摩の灰提婆の仁三がある。宇津谷峠で座頭の殺されるのを見屆け、拾つておいた煙草入の紋と書付とを種に重兵衞をゆするのである。あのいたいけなみじめな文彌を演じた小團次が、茲で溜飲を下げたのである。叺の中の書付をひろげて、

いくらこなたがしらを切つても、地藏の顏も三度形、此の飛脚屋の請取ぢやア知らねえとは言えめえが、跡先揃はぬ詞の綾、夢か現か宇津谷でいかに座頭を殺せばとて、人をめくらにした仕方、所は蔦の細道だがさりとは太へ膽玉、夜盜の上に人殺し其の兇狀も八重片喰、此の段口の上

らぬ内命替りの煙草入五十兩ぢやァ安いもの、默つて言直に買ひなせえ……江戸を喰ひ詰め旅へ出て護摩の灰をするからは、夜盗かつさき家尻切り、時代な文句は言度ねえが、暗へ所へも幾度かひゞ垢切の入つた骸、どうで始終は刀の錆犬の餌食に成るおれとうぬは一緒に這入る氣か。全體惡い了簡だ、譬にもいふ此の世の地獄素人と違ひわつちらは、行けば滿更羽目通りで干物の天窓を嬉しがり嚙るやうなこけでもねえが、婆婆にゐるよりは樂々と一疊敷の住居をして、髪は日髪にしつけその掛つた着物を着るやうだが、夫でも行く氣は少しもねえ、ましてお前は素人の事、爰ァ一番考へ物だぜ。オイ默つて居ては分からねえ、嫌とか應とか挨拶しろ。

と怒鳴り立てるのであるが、此の白などはゆすりの最も代表的な名ぜりふで、その諧調的な拍子の早かるべき形容ぜりふは、默阿彌得意の壇であつた。清心も鬼あざみ淸吉になるし、家橘(五世菊五郎)のために書下した『辨天小僧』もさうであつた。

惡黨に對して、惡婆とか毒婦、女賊の如き性格も默阿彌の特徵である。鼠小僧の養母になつてゐるお熊婆あは、切見世の女郎上り、海山千年の豪の者で龜藏が演じて殊の外出來がよかつたものだ。

忠臣藏五段目の後日として脚色した、『女定九郎』(慶應元年)も典型的の毒婦である。小團次が達摩返しの頭で藍錆の帷子、白縮緬の腰卷、黑繻子に八端の腹合せの帶といふ着附で、手紙を種に死んだ與市兵衛の婆さんをゆする『おや、おばあさん衙りに來たとはわつちの事かえ、よしてもおくれ、

おはもじながら是迄に泣かぬ勤めの螢茶屋撞木町ではとやにつき……夫から宿場をおてちんで、五十三次宰領なし京大阪を跨にかけ、達引事も達引が癪に障りやァ手負獅子鐵砲見世のおてんばも、穩せえありやァ喰ひつくまむしのお市と聞いて、見てくれもねえでゞふくだが、盗賊衒りをしねえのが、そこが水道の水の恩、ビク〳〵せずと五十兩耳を揃へて出しなせえな』と啖呵を切つた所は、矢張り見物をわけもなく好い心持にさせた。

小猿七之助の女房も瀧川から一轉して、御守殿お熊と名のり、水髮に黃楊の櫛、六寸巾の腹合といふ粋な拵へに變つて吉原の三日月長屋で、戶の開かつてゐる暇もない位名を轟かして、男をたらしながら枕さがしをしてゐる。正直淸兵衞と二役を演じた、居酒屋の亭主久七女房お瀧も、淸兵衞の金を盗み愚闇な亭主をそゝのかして慘殺せしめるといふ恐るべき女だ。惡婆と毒婦に通じた點は、意氣な傳法肌といふ事である。また奸惡で執拗で大膽で、切れ離れの好いといふ事である。

新作された作物の大部分を占める、世話物こそ最もよく當時の現實を寫した、一種の社會劇たる生世話物であつた。且つ其の材料も悉く當時の江戶に發見されたものであつた。行きづまつた化政文明の特色を帶んだ產物が、悉く取入れられてゐると言つてよい。士農工商の各階級の種々相に、花街、芝居。白浪では義賊、强盜から盛り場稼ぎの巾着切り、遊人もあれば毒婦もある。或は歡樂を追求して止まない本能主義者などが全作物に通じて橫行し、金と殺しと情慾とに纏綿して、活圖畫は展開さ

れる。其の一面には、長庵に對する番頭久八又は清兵衛、上總市兵衛のやうに、正直一圖な義理堅い篤實な朴訥な人物を按排し、彼等の所業を受けて悲哀のどん底までも深められて、地味で寂しい場面を有てる、世話場を織出すのである。

それらの要素は、默阿彌の豐富な內的經驗に因由する人生味、人情味乃至は三弦樂的情調に漂はされてゐる。卽ち骨格を掩ふ血と肉とは——假令それが個性的でなくして、類型以外に出でないものとしても——永久に生命をもつ程に、纖細に巧緻に又有機的に描き出されてゐるのである。

五

小團次といふ役者は、小柄で風采の上らない人で、由良之助になる貫目と品格には缺けてゐたが、扮裝が巧みなのと、器用で自由自在な表情力に富む藝の故とで、其の役は多方面であつた。立役も女形も實事も敵役も、善惡老少と言はず殆ど行く所として可ならざるはなきの才能を示したけれども最も多くその藝術的天分を發揮したのが、世話物であつた事はいふまでもない。が、俠客物や或る種の時代物にも才能を揮つた。從つて彼の爲めに作られたそれらの作もある。對象とする役者が多方面であつただけに、作者も亦多方面の開拓をなし、多種多樣の作が生れたのである。

調子もリンとしてはゐなかつたが、男達になれた。義に勇み節を尙び男一匹を以て自負する所の俠

客を主人公とする作が三四できた。彼れに取つては想ひ出の深い『黒手組』もその一つである。『茲江戸小腕達引』（文久三年）の腕のいゝ喜三郎は人入れを家業とする親分であつた。もとは劍士神崎甚内の弟子として、神影流の奥儀を極め、後仔細あつて破門され、右の腕の強いのを看板にして喧嘩に花を咲かせてゐる。これが師匠の諫言に腕を切り、向後人と爭はぬとの誓を立てゝ勘氣御免となるが、相弟子の大鳥逸平に耻しめられたを報ずる爲めに、誓言も破れかぶれになつて仕返しをするのである。小團次は此の清爽狷潔なる男達に扮して成功した。これと對して菊次郎の演た喜三郎女房小磯も、男まさりの女房振りに、傑れた技藝を見せたといふ。其の上此の作には當時賣出しの若手役者を網羅して、家橘が曙源太を、九藏か幻長藏を、三津五郎が前髪佐吉を、訥升が紅裏甚三を勤めていづれも人氣を呼んだ。

『御所の五郎藏』も、小團次の爲めに出來た作で、これには士分上りの男達を勤めて評判がよかつた特に最終の幕で五郎藏と妻のさつき（菊次郎）とが、自害して一人は尺八を吹き、一人は胡弓を彈いて落入るといふ、しんみりとした物哀れな場面は大層利いたと傳へられてゐる。此の場は後年になつて誰も手を出さず、假令やつても大不成功に終つた位のダレ場である。彼等はそれを持ちこたへるだけの力強い藝をもつてゐたのである。

時代物の一番有名であつて、殆ど唯一なものは曾我の生立を書いた『曾我の敷皮』（慶應二年）であ

る。曾我の祐經の遺子一滿、箱王が、母滿江に伴はれて、養父祐信の邸に生ひ立つうち、鎌倉殿に讒する者あつて召出され、由比ヶ濱なる敷皮の上にて處刑せられる事となつたを、諸侯始め畠山重忠の諫言によつて赦免となるまでを書いたもの。此の中、小團次は兩子の養育を一身に引受けた鬼王と重忠とを勤めて成功した。『忠實なる從者』なる言葉に盡される鬼王は、世話で運んで行く役だけにうつてつけの適役で、その別れに臨んではどんなに觀客の涙を絞つたか知れない。けれども二役の重忠は、小團次には少しく不適當な役であつたが、兎も角も器用にこなした、殊に賴朝公へ諫言の最中の頂點に於て、『夫のうまやぢの取沙汰にも……』と時代から世話に碎けて、輿論の喧囂を以て迫り、ついに意志を翻へさせる所の呼吸が、實に巧いものであつたさうで、これあるが爲めに重忠も生き、小團次も生きたのである。作者默阿彌の働きとしても、注目すべきものであらう。これが若し九代目の如き資質ある役者であつたならば、何も別に世話に碎かずとも名調子で押して行けるのだが、小團次はその質に缺けてゐた。そこを作者が呑み込んで、藝を補ふに作を以てしたのである。

小團次は最初江戸へ下つた時にも、『七變化』の所作を演じて評判を高めた位であるから、地藝の他に所作事を得意とした。從つて默阿彌が彼の爲めに作した淨瑠璃物も甚だ多い。增補の『左り甚五郎』のやうな眞面目なものがあるが、世話がゝつた滑稽淨瑠璃、狂言淨瑠璃が多い。『夜這星』は『日月星晝夜織分』(安政六年)の三段返し中の上の卷である。淸元、竹本、常磐津で、七夕に牽牛織女が天の

川で逢ふ所へ、御注進々々と『呼ばはる聲も高しま屋、とんで氣輕な夜這星』といふ清元が切れると『小間次々々』で場内が割れ返るやうな人氣であつた。とんで出た姿は一つ星のついた鬘、好みの拵へで欝金の褌を下げてゐるといふ、愛嬌たつぷりの形で、これから御注進をする『一つ長屋の雷が夫婦喧嘩で亂騷ぎ』に始まり、子雷と隣りの婆ァ雷が出て來てゴロゴロ言ひながら留める。留めるはずみに婆ァが倒れる――すると婆ァ雷が入齒の牙を呑み込んでつかへたので『苦しやといふになをかしく吹出し笑うて仲直り』になるまでを、亭主雷は亭主、女房雷は女房と夫婦喧嘩も子も婆ァも、それぞれ一人で踊り分けたのであつた。其の振りの鮮かさ、表情と言ひ無類の出來榮であつたといふ。

此の他『緣結び』に田舍の取上婆ァ茨木をしたのも好かつた。これらを外にしては、默阿彌が後年になつても絕えず作した如き、當時の流行を穿つた大切淨瑠璃やうのものが甚だ多い。例へば『吹矢』とか『寫し繪』の淨瑠璃の如きものである。

淨瑠璃物の事を述べた序に、忘るべからざるは、默阿彌と清元延壽太夫との關係である。太兵衛になり延壽翁となつた四代目の延壽太夫は、安政五年の十月に襲名したのであるが、此の太夫は默阿彌を深く信頼し、默阿彌も亦其の技倆を認めて、生涯に亘つて清元をよく芝居に用ひて、その流行を促すに與つて力があつたと言つてよい。又百を以て數ふる程の歲旦其他の淨瑠璃に筆を執つた程の關係を持つてゐる。其の結托の始めは、安政六年七月の『木幡小平次』にお花半七の道行を入れて『由緣

色萩紫』といふ清元を書き込んだのがそれであつた。其後は殆ど毎興行と言つてよい程清元を用ゐた。その中でも十六夜と清心が百本杭で出逢ふ所の『朧夜に星の影さへ二つ三つ、四つか五つか鐘の音もしや我身の追手かと、胸に時うつ思にて廓をぬけし十六夜が……』といふ文句のある『梅柳中宵月』だの『三人吉三』の櫓の場の『初櫓噂高島』の如きは、今でも清元の出し物にも、稽古にも使はれる位で評判がよかつた。

新内から脱化した吾妻路をば、『小猿七之助』の頃から始めて默阿彌が舞臺に用ひた『黒手組』の序幕に大評判を取つた『忍岡戀曲者』も書下しは吾妻路であつた。此の他常磐津、岸澤、富本などもよく用ひてある。

小團次の秀でたる所作に、清元の美しい咽を以てし、加うるに振附に花柳壽輔と、かう腕揃ひが揃つてゐたので、作者も新淨瑠璃を書くに張合があつたであらう。

六

默阿彌は後年人に語つて、これは少しダレはしないかと思はれる所でも、小團次は必ず見事にやつてのけた。またそんな所に限つて一倍力をこめたから見應へのするものになつた、と言つたさうである。かく小團次の藝はよく作者の缺を補つたし、默阿彌が小團次の柄を知りぬいて適當な役を適當に

書いて補つた事も前々に述べた通りである。つまり双方が相助け、また腕くらべをするやうな積りで勵み合つたのである。精力的な努力、熱衷、眞摯を以て、舞臺上に合作を行つたやうなものである。

默阿彌は小團次を失つて後に、小團次ならでは成功を望み得ざる作物の作られてあつたことを感じた。例へば『村井長庵』の如き、又は『三人吉三』の如きである。持に『三人吉三』の中に挿まれた『文里一重』の件は、是非とも小團次の如き役者を必然としたものだと言つたさうだ。小團次も亦適當な新作を得るに就いて、默阿彌に依賴する所が多かつた。小團次は手紙といふものを殆ど書かなかつた人だが、默阿彌へは書いたといふ。然しそれも僅か二三通に過ぎないが、いづれも作に對する重要な注文に限られてゐる。その一つに次のやうなのがある。

御たよふ(多用)の中へこゝろなく候へども二ばんめ三まくめの本はなはだ(甚)せりふ(白)ばんたむ(萬端)ふ(不)上りにつきとふわく(當惑)いたし候間是はどうかおまへ様のじきひつにてねがひ上候さもなくてはせつかく仕くんだきやうけんのくづれに相なり私しも水のあはになりじつ〳〵くやしくけんぶつのみやけ(土産)ばなし(話)もなき事なれば御きのどくに候へ共今一トたび御たんせいのほどねがひ上候かの人の手には中々およびト申候間くどふも〳〵共御手にてねがひ上候

以　上

米　升　拜

龜戸豊國筆錦繪

清元延壽太夫（先代）
市川小團次（四世）
河竹新七（默阿彌）

米升（小團次）の手紙
（一一六頁參照）

これによつて見ても、二人の間がどれだけの親密さで信頼し合つてゐたかゞ知れよう。

二人と舞臺との關係は、あだかも畫家が畫布に繪を描くやうなものであつた。默阿彌の作が畫家の精神であり、繪ノ具であるならば、小團次は卽ちその手であり刷毛であり、畫布は卽ち舞臺であつた。如何に其の畫家に天才があつても、純良なる繪ノ具があつても、その精神の命ずるがまゝに動く手と、微妙な神經の感觸を傳へて、調色し畫くべき刷毛とが缺けてゐたらどうであらう。又如何に熟達した技術と精緻なる筆とが賦與された畫家があつたとしても、其の根本の動力となるべき精神に於て缺けてゐたなら、單に街頭に曝される一個の看板描きとして、悪達者なる技術家として、終らねばならなかつたであらう。此の二つのものが合致してこそ眞の藝術は生れる。默阿彌と小團次との間には、略さう言つたやうな關係があつた。舞臺の上に現はされた、世話物なる躍動せる藝術は、さういふ離るべからざる二人の創作に相俟つて成つたものであつた。

二人の間は堅い結合であつた。小團次が他座へ出勤する事になれば、默阿彌を必ず伴つて行つた。二人は多大の苦心を費して創作に從事した。研究の爲めには幾度夜更しをしたか知れない。又默阿彌が哀れな世話場の本讀みをすれば、――小團次は泣いて傾聽し、滑稽の場には先立つて笑ひ崩れた。小團次といふ人は利かぬ氣の癇癖家であつたが、舞臺に立つては自ら演ずる性格に同感の餘り、ほん

とに泣く程情熱的であつた。然るに默阿彌は彼とは反對で、感情をば理智の奥深く藏してゐるはうだから、小團次の缺を人格上に於ても補ふに足つた人であつた。

斯ういふ狀態の下に行はれた、二人の飈興勃起時代は同時に又一つのものとなつて勃發し、窮極せる歌舞伎劇を一洗して、新生命を吹き込んだのである。而して其の根柢も確かめられて、最早動かすべからざるものとなつた曉に小團次は歿した。それは、かの『座頭殺し』の書かれた安政三年から、十年間を經た慶應二年の五月八日の事であつた。最後の興行は守田座で二月十二日からの『富治三升扇曾我』(敷皮と鑄掛松)で、これが評判がよくて死に至るまでも打續けてゐた。

其の死に關しては、次のやうな事實が語られてゐる。此の興行中に三座の名主三氏が、二丁目(市村座)の茶屋中菊へ出張して打出し後各太夫元、名題役者、立作者等が呼ばれて『近年世話狂言人情を穿ち過ぎ風俗に拘はる事なれば以來は萬事濃くなく色氣なども薄く』するやうにと言渡された、――天保度の御趣意以來二十年を經たので慘い殺しや色合が甚しくなつて來てゐたのであらう――。そこで皆々も承知の上調印をして引取り、默阿彌は歸りに小團次宅へ寄つて『扨御同然に世話物は勤め難し、時代物にても書かん』と話をして別れた。すると其の翌朝になつて、小團次が病氣だと聞いて行つて見れば『面體惡しくそれより床をはなれずして』、五十二歳を以て歿したのである。病根はまさしく世話物に對する申渡しであると、默阿彌も手記してゐる。恐らくは世話物が人情を穿ち過ぎるから

いけないとの禁令は、小團次と默阿彌との芝居に取つては、卽ち致命傷にも等しかつたであらう。もともと小團次は風邪に冒され易かつた位で、病身な神經質な人であつたから、少し病氣してゐた所へさういふ打擊を蒙つたので、鬱憂症のやうになつて亡つたものと察せられる。

　篁村曰。默阿彌翁此の御達しの趣意を傳へんと其の歸途小團次方へ立寄られしに、小團次は病床に平臥して『御免下さい此のまゝでお目にかゝります、一體今日呼出しの御達しはどんな事ですと問ひながら、翁の顏をぢつと見つめ、翁が苦々しげなる體にて卒然とは言出し兼ねし樣子を見て、やゝ身を起さんとせし故、翁はとゞめて、今日御出役の上（此時寺社奉行より役人出張し名主立合の上にて申し達しられたるやうに聞けり）、名主方も立合で、近來世話狂言と唱へ町方風俗を微細に寫し、また人情を穿つと申して盜賊遊女子などの心事に委しく立入り、餘りに濃厚に致し候は、見物をそれに引入れん樣にて却つて勸善懲惡の主意に背き候故、以來は其邊を省き世情其儘の事は芝居に取仕組まじくといふ御達しです……仕方がありません、時代物で何か目新しい事でも書きませうと言ふと、小團次の面色見る〳〵青筋張り、こめかみビク〳〵と動いて床の上へ起上り、「エ、そんな事ですか、それぢやあ此の小團次を殺して仕舞ふやうなものだ。ネエお前さんモツト人情を細かに演て見せろ、モツト眞個のやうに仕組めと言つてこそ芝居が勸善懲惡にもなるんぢやあ有りませんか、見物が身につまされないやうな事をして芝居が何の役に立ちま

す、私は病氣は助かつても舞臺の方は死んだやうなものだ。御趣意も何もあつたものぢやあねえあんまり分からない話だ』と身體をふるはして憤るを、マア是も一過の事でせういづれ御相談に上りますと、病の募るのをおそれて翁は私宅へ歸られしが、其の翌朝病氣重りたれば急ぎ來て下されと家人よりの使に、取る物も取敢ず小團次の許へ至れば、小團次は一夜の中に面も瘦せ目もくぼんで翁の顏を見て『どうも詰らねえ事になつたもんだ』と凄い笑を洩らせしが、これより病革りて死したるなり。小團次自ら云ふ如く、實に、此のお達しは小團次を精神的に先づ殺したるものなりと、翁も憮然として語られたりき。

嘗ては柳亭種彦を死に到らしめたのも官憲の干渉であつた。實際に於て小團次は有名な癇癖家、神經質の人であつたし、殊に病中ではあり、此の申渡しが死因とまで到らずとも、たしかに死期を早めたことは言ふまでもない。紀念すべき四代目市川小團次は、比較的早死にであつたが、其の功績は優に其の失を償ふに足るだけの意味深いものであつた。默阿彌との間に成された十年間の努力は、廿六種の世話物と五種の時代物と、十種の淨瑠璃とに結晶したのである。而してこれらの作物と、新生命に滿された劇術とを以て、歌舞伎劇に於ける寫實的、若しくは自然主義的劇術に基く世話物を、完成したといふ顯著な事業を永久に遺したのであつた。

然しながら、二人の努力になつた芝居は、必ずしも土臺から創始せられたものではなかつた。少くとも地ならしだけできてゐた所へ、十年間かゝつて見事な家を建てたといふ方が當つてゐる。劇術もさうなれば、作物もさうであつた。全然新規なものではない。江戸式生世話の藝風と劇作とは、江戸の通俗文學の起り始めと略〻時を同じうして、安永、天明頃からほつ〳〵芽をふいてゐたのである。『三月日お仙』を演じて、三田の三角なる切見世を舞臺上に始めて寫した、四世岩井半四郎は明らかに其の先驅である。次の時代の鼻高幸四郎は、自然と寫生とを尊んで厚化粧を嫌つた位で、生世話物を稍〻力強いものとならしめた。その一方に於ては、尾上松緑と梅壽菊五郎とは、相次いで生世話と怪談物の業事に地盤を堅めてゐた。それらが小團次に到つて一身に收められたのである。彼はその藝風を一層强め、擴大し、完成したのである。

之れに對して、江戸の世話物的作物は、先づ端を初代櫻田治助に發したものと見るべく、大南北に到つて地盤を堅くしたと言へる。南北は鼻高幸四郎と松緑の爲めに筆を執つた作者であつた。默阿彌は卽ち其の門に出でゝ、同じくその作風を强め、擴大し、完成したのである。二人の成した完成は、總收的であり、集大成的であつた。

小團次を失つた江戸の劇壇は、火の消えたやうな寂寞を感じた。

人もなくなつた。小團次の缺けた後に於ける守田座の興行は慘めなものであつた。重味があつて人氣もある役者が一

其の年の八月に追善の眞心を籠めた『孝悌譚六十餘集』が上場された。小團次の塡め合せに道具だけでも驚かさうといふので、土間を左右に分けて錦帶橋を見せようと長谷川一世一代の大道具大仕掛で、女婦役者で取殘された菊次郎が、加賀の千代となつて亡き夫を憶つて廻國するといふ、名趣向であつたが、とんと見物は來なかつた。

小團次の肉體は滅びたが、其藝風と新精神との影響は甚だ大であつた。次に述べんとする當時の若手役者には、大なり小なり、陰に陽にその感化を及ぼした。特に家橘（五世菊五郎）と九藏（七世團藏）とは、その藝風を信賴して小團次其のものを分け前したかの如き觀がある。彼も亦二人を愛して面倒を見、世話を燒いた。二人は他座にゐても、叔父さん〳〵と慕つて來ては如在なく教を請うた。彼れも自宅へ呼んだり、幕間などには、必ず呼んで小言を竝べた。家橘が羽左衞門の頃に勤めた蜆賣りの三吉と、九藏が『後日の佐倉』に勤めた百姓十作とは、著しく小團次に世話を燒かせたもので、出來もよく出世藝になつた。二人は小團次の花やかな一面と、地味な寂しい一面とを、それ〴〵別々に分け前して、明治の名優となつたのである。

第六　成　熟　期（其の二）

一、若手役者と――田之助と『切られお富』――二、家橘と――『辨天小僧』――權十郎と――劇界の推移――三、三座兼勤――劇壇の鳥瞰圖を成せる錦繪――四、家庭――子女と門弟。

一

默阿彌の四十歳から五十歳に亙る成熟期には、小團次の爲めに最も多く筆を執つたのであるが、單に彼の爲めばかりではなかつた。田之助、權十郎、家橘、訥升、九藏等の如き若手役者が、まさに新時代を作らんとして萠え出してゐたので、それらを對象として物した作もあつた。

數多い若手の中で際立つてゐたのは、澤村田之助（三世）であつた。藝も顏もよければ、人氣も遙かにぬきんでゝゐた、子役の間から評判が高く、萬延元年の一月守田座で立女形になつたのが十六歳であつたといふ。

默阿彌とは、文久二年から市村座で同座するのであるが、明敏なる田之助は一も二もなく默阿彌に近づいて、師匠々々と甘たれ始めて、作をして貰つた。『いろは新助』のいろは、『銘々傳』のおりゑな

どがさうで、やがて『切られお富』を書くに及んで、田之助を中心にした作が始めて生れた。而も其の評判が大層よかつた。

『切られお富』（處女翫浮名横櫛）は、元治元年に守田座で書下された。然しこれは三世如皐の新作に拘る『切られ與三』の趣向を裏返し、『鈍き手業に男物縫直したる女浴衣』と、語りの中にも斷はつてある通り、中心を置き換へ、別の筋立にして、所謂換骨奪胎、又は飜案とも言ふべき作であるけれども『切られ與三』と對して、作の出來も評判も共に遜色のあるものではなかつた。田之助はお富を演じ、兒の訥升が與三郎をした。

お富が藤ヶ谷の藤棚の下で、與三郎にめぐり逢ひ、積る話を辻堂の中で語り合ひ、その時誓に切つた小指と與三郎の小柄とを、海松杭の松が拾つて、旦那の赤間源左衛門に告げる。何喰はぬ顏で歸つたお富は、責められた揚句に三十三箇所も切りさいなまれ半殺しにされる。それを葛籠に入れて、河へ捨てに行つた蝙蝠安が、途中から氣が替つて助ける。命の親に仕方なくお富は蝙蝠安に身を任して薩埵峠の一つ家で茶店を出してゐる。其處へ通りかゝり、提灯の火を借りに寄つた與三郎はお富に再會する。此の時お富の切られた所はもう癒つてゐたが、顏から身體中疵だらけ『箱根から先に住居をすればとて、今では化物同然に替り果てたる姿』になつてゐた。お富は與三郎に顏を見られるのを恥ぢて『ハテ思ひがけない』と與三郎が顏を見ようとするのをお富が『エヽお恥かしうござりまする』

と袖で顏を隱す。田之助は此處のお富を演ずるに印銘の强い藝を見せたといふ。お富がそれだけの淫婦でありながら、絕えて久しき男に再會して、そぼろな裝に疵だらけの顏を見せるのがうら恥かしく、話の間始終處女の羞恥を忘れず、焚火に顏をそむけながら男とつもる戀を語る――といふ所に何とも言へぬ味を示したさうだ。

續いては、おきつの嫉妬に至妙の藝を現はした『笠森お仙』や、『孝女お竹』、『紅皿缺皿』、『契情の草履打』など、女を主人公とする作が默阿彌の手によつて出來て、いづれも評が好かつた。明治期に入つても『塵塚お松』、『敷島怪談』等の作がある。明治五年の舞臺お名殘りとして上場された『英國樓門の場』で、田之助の古今が別れを告げる所は、見物に淚を絞らせたが、此の作も默阿彌の趣向になつたものである。此のやうに默阿彌とは、緣も深ければ未來も長かつたのに、不幸にして惡疾の爲めに起つ能はざるの身となつた事は、田之助自身にも、亦作者に取つても其の天分をまつたからしめなかつた憾みがある。

默阿彌も後年になつて『此の役は田之助のやうな役者にさせたかつた』とこぼした事もあつたさうである。なんでも、默阿彌が作者部屋に居るのを田之助が見つけると、直にやつて來て――役者は作者部屋に上れない規定だから――腰をかけてゐて『よう師匠、何か書いておくんなさいよう、よう師匠何か書いて下さいよ。よう／＼』と口說いたものだといふ。田之助は何かすると、よう／＼と言ふ

のが口癖で、駄々ッ子が菓子でもねだるやうな調子でねだつては書いて貰つた。又彼には必ずその作を仕活すだけの頭があり手腕があつた。だから默阿彌も工夫を凝して、田之助が足を一本切ればそれで勤まる役を與へ、二本切つて歩けぬやうになればそれだけの工夫をし、胴だけになつた名殘りの際にも、ちやんとそれだけの工夫を凝して作をしたのであつた。そんな役者を殺したのは、重ね重ねも惜しい事であつた。

二

田之助に次いで派手な人氣を持つてゐたのが卽ち家橘であつた。默阿彌とはまだ羽左衛門の頃、市村座に移つた以來の馴染で、出世役の蜆賣り三吉を始として、絕えず何かと役を見てゐた。

文久二年の『辨天小僧』に到つて、特に彼を中心に取つた作が出來て、評判もよく出世狂言となつた。此の作の思立ちは五人男の錦繪からであつた。これよりも一興行前に、座の手代が或る日淺草馬道の矢大臣門の近くの繪草紙屋から豐國の畫いた、辨天小僧見たての大錦を買つて來た。それは緋縮緬の長襦袢に、緋鹿の子のかゝつたがつくり島田で、解き荷へ腰をかけ、拔身の刀を疊へさし、銚子で酒を呑んでゐるといふ畫面であつた。これを初めとして五人男が揃つたので是非芝居にしたいとの注文に應じて新作された。だから名題も『靑砥稿花紅彩繪』と付けたのである。默阿彌は唯〻一枚の畫

とか一つの事件を捉へて、一流れの狂言を案出した事もある。『野晒悟助』も家橘の爲めに書かれたものであるが、猶彼の特色は次の明治に入つて明らかにされる。

九代目團十郎になる河原崎權十郎とは、生れ立ちからの知己で、若太夫長十郎の頃の蝶々賣眼玉の長吉より『後日兒雷也』の兒雷也、それから『鼠小僧』の大黑屋亭主などと、相應な役は割り當てられてゐたが、彼の沈んだ、澁くてパツとしない、晩成的の性格はまだ人氣を集めるとまで行かなかつた。明治二年の『日蓮記』までは、中心となつて活動する作もなかつたが、明治に入つて、彼れは偉大なる天職を發見し得たと同時に、默阿彌の作にも他の時代物、活歷の一面を産む事になるのである。

市川九藏も小團次に愛されただけに、その出世役も默阿彌の作中にあつた。例へば『腕の喜三郎』の中の男達幻長藏とか、『明石志賀之助』(慶應二年)の中の朝霧といふ相撲取、或は『笠森お仙』でおきつを口說いて殺す若黨の市助などは、目覺ましい出來榮えであつた。又『鳩の平右衛門』のやうに彼を中心にした作もある。先代左團次は、小團次の死ぬ前年に江戸へ來たのだから、さう目立つた役もしてゐないが、『上總市兵衛』では、東金茂右衛門と蟻王とに扮してゐる。彼との關係も、次の明治に入つて密接となるのである。

何にせよ、小團次の死といふものは、天保、嘉永、安政に亘つて繁昌した人氣もあり腕もあつた、

老人株の一段落を告げたものと言つてよい。歌右衛門は疾く逝き、八代目は上方で自殺し、海老藏も敵役の友右衛門も去つた。上方役者で江戸を騒がした仁左衛門、嵐吉三郎、璃寛璃珏等も共に前後して此の世を去つた。跡に殘つたは龜藏と團藏と三十郎ばかりであつた。が、到底新作を以て開拓をなさんとするが如きは、これらの老人株には望めない所で、芝居の人氣も實質も、若手役者の上にのみ繫がれてゐた。

世も次第に進んで、大革命の明治維新が刻々に迫つてゐた。小團次によつて確かめられたる新精神を享けた次の若き時代は、東天に曙光を漲らして、一人の默阿彌に期待せんとしつゝあつたかの趣も見える。而して時代に伴うて、默阿彌の作風も一變しなくてはならなかつた。

三

いつたい默阿彌は尻の落着いた人であつた。一生涯を通じて、信義を重んじた謙厚な人であるから江戸ッ兒で江戸ッ兒らしくない沈着な所があつた。作者の生活に入つてからも、殆ど自ら座を轉じたことはなかつた。他の作者が二年三年で轉々するやうな時代でもそんな事がなかつた。河原崎座には二十年近くもゐた。廢座するに就いて市村座へ出勤してからは、そこに居据つて他を顧みようともしなかつたのである。

けれどゝ役者はさう〳〵續いて同座に留まる事は、許されなかつたので、小團次との間が密接になり、離るべからざるものとなつてからは、小團次の依賴を受けて、他座にも出勤し終に三座を兼勤するに至つた。守田座へ『スケ』として出たのは、文久元年の二月からで、時の立作者は狂言堂九安で四代目の櫻田治助になつた木村園治もゐた。慶應元年正月からは、中村座へ出勤した。此の座は瀨川如皐の持座であつた。

猶默阿彌の名譽として、特に記し置くべきは引幕を贈られた一事である。髮結藤次を書いた『和國橋』の時に、其の題材を自作の三題噺に取つた因緣から、次の章に詳說する三題噺の連中から贈られた。作者へ引幕の贈られた例は、二世瀨川如皐にあつたさうであるが、明治に入り生涯を通じて四方張も贈られた狂言作者は、蓋し稀なる榮譽を荷ふものと言つてよからう。

今一つ茲に小團次と默阿彌とを中心として、此の頃の劇壇の形勢を說明してゐる錦繪がある。其の錦繪の一つは柴井見物左衞門と號する人が評語を挿んだ、『石尊詣寄雲梯道』と題した三枚續きのものである。輪廓だけを辿つて大山を畫き、役者を大山詣に見立てゝある。右の方から順路を上るものと近路を急いで上る若手の人氣役者と、左の方を麓へ下りる年の寄つた下り坂役者とを畫いて、それに評者が獨語を言はせてあるものである。

頂上に樂々と座つて、扇であふいでゐるのが小團次で、『八代目親方が失くなつた以上はおれが茲に

座るのが當然だ』と言つてゐる。その隣りに『おいらも小團次と二人で茲まで上つた。落ちねえ用心してゐるせえか怖くもねえが、然し下から上るてあひは、嘸骨が折れるだらう』と言ひながら、正本を持つて控えてゐるのが默阿彌である。此の二人と列んでゐるのが彦三郎で、おれの手腕を認めるものがないから、上方へ行かうか名古屋へ行かうかと腕をさすつてゐる。菊次郎は一段下つた所、芝翫、仲藏、權十郎、九藏等は互に上らう〳〵としてゐる組で、女方の田之助は勢よく上る所、粂三郎は小休みをしてゐる。家橘は近道から上つて、もう頂上にも達しかけてゐるのに、福助に足を持たれて邪魔されてゐる。龜藏、三十郎、團藏、米十郎などは下りかけてゐる――とかういふ見立繪である。訥升が上方から來た年だから、文久元年頃の出版と想像されるが、此の頃の劇界なる大山の頂上に泰然としてゐるのが小團次と默阿彌、それに彦三郎、菊次郎等であつた事が示されてゐる。

これより少し後れて慶應の初年、左團次が江戸へ下つた頃にできて、これも『子供相撲』に見立てて役者の品定めをした、三枚續きの錦繪がある。横綱は小團次一人で『古今の稀者』だと註してある四本柱に坐つてゐる檢査役が、龜藏、團藏、菊次郎、三十郎の四元老で、彦三郎と芝翫、田之助と家橘、紫若と新車と言つた取組が、廻しを緊めて相撲つてゐるのである。而して此の間に立つた默阿彌は、袴を着けて軍配扇を持ち、行司の役に振られてゐる。

これらの錦繪は、どういふ人の案になつて版行されたものか明瞭でないが、默阿彌の性格から推し

でも、利己的な意味の含まれてゐるものと見るのは當つてゐない。小團次は派手氣な人で、隨分さう言つた人氣取りの方法を講じたとも傳へられてゐるから、その引合に出された事はあるかも知れないが、自らそんな卑劣を敢てする人ではなかつた。小團次死後にあつても、後段に述ぶるが如き錦繪の出版がなされた事を思へば、此の當時の劇界と默阿彌との關係交渉をば、世間が廣く認めてゐたものと、解釋して差支へないだらうと思ふ。これらの錦繪中に表はされた、狂言作者としては唯默阿彌一人を算ふるに過ぎない。それも或は山頂の人として、又は行司役として標徴されてゐる所から考へても、浮世繪師の豐國、役者の小團次と共に『當時作者はノウ皆さん河竹ヒヰキはたいそたいそ』と謳はれた事實を、明らかに證するものではあるまいか。

默阿彌が趣向の才に勝れてゐるといふので、世間に知られてゐたに就て、こんな話もあつた。淺草代地の抜道にあつた第六天の神主が、文久慶應の交とかに、黑船渡航以來の騷ぎに際して一通の建白書を奉つた事があるさうで、其の中には若し外國船が來たならばかうせよ、又敵軍が來たならばかうせよなどゝ、鐵砲のやうなもの地雷火のやうなものを列記し、猶其の仕掛けに就ては、當時芝居に河竹新七といふ工夫力の才に秀でた者があるとのことだから、其の者に命じたらよろしからうと附記してあつたさうだ。默阿彌がいくら趣向の才に富んでゐたからとて、妙な所へ引合に出されたものだがまあ其の位世間に聞えてゐたといふ例にもと、これは饗庭篁村翁が或る人から聞かれたと、著者への

直話である。

四

默阿彌が小團次と共に劇界に重んぜられたと同時に、其の家庭も以前に倍して繁昌した。嘗て安政二年の大地震に落膽した時、『旦那これから震ひ起して下さい』と、妻の勵ました言葉通りに、默阿彌は大地震から新しい活動を始めて、十年間に見事地盤を固めたのである。四十歳ごろまでは兎角痩ぎすであつたのが、それからは肥り始めて體質も一變した。頑丈な格幅になつて、精力的に働き得る健康が備はつた。緋縮緬の襦袢の胴の似合つた意氣な好みも、やがて澁い結城紬へ一點張りと變化するに至つた。

安政元年の『八月頃、足痛の爲め駕籠にて芝居へ通ふ』とある外、別にこれと取立てていふ程の出來事も病氣もなかつた。安政の六、七年と流行して何萬人の人を斃したコロリにも見舞はれなかつた此のコロリで篠田瑳助といふ作者が死んだ。瑳助は河原崎座以來二枚目にゐて默阿彌を輔けた、並木舍（五瓶）の門人で淨瑠璃などが一寸書けた人であつた。これがコロリに罹つて命旦夕に迫つてからどうしても默阿彌に逢つて後事を托したいと言つて、死にきれないので、家人の危むをも顧みず行つて聞いてやり、其の約を履んで未亡人の面倒をよく見てやつたといふ美談もある。

慶應元年には居宅全部が類燒に遭つた。それは三島神社前から出火して、雷門の燒けた十二月十二日の大火事で、注意深い性質とて前夜の中に形勢を見て取り、隣り近所の物笑ひをも構はずに立退いたので家財は一切無事であつた。そして更に新たなる次の出發點に資するかの如くに、第二の新宅を建築した。今度は前の地震で土藏に懲りて穴藏にしてあつたのを、やはり元に戻して土藏も建てた。

新しき家庭には尚二人の女兒さへ設けて、四人の子持となつた。門弟も大勢出來て、家庭はいつも賑々しく出入る人の絶え間もなかつた。

門弟は、立作者になつた以來慶應元年までに入門を許したのが、總計で三十三人もあつた。自分の持座なる市村座は悉く自分の配下であり、守田座へ出勤さしたものもある。二、三枚目どころの地位を履んで、立派に作の出來る者も二三人はあつた。竹柴の姓は安政二年三月に二人の門弟に與へたのが始まりで、安政四年からは門弟全部の姓と定めたので、番附面が統一されたやうな心持がする。これはもと默阿彌が芝浦なる『竹柴の浦』に育つた縁故と、河竹の竹とに因んで默阿彌の門業に通ずる姓としたのであつた。物故の後も其の習慣に從つて今日に及んでゐる。

第七　江戸末期の頽廢的傾向と默阿彌

一

『頽廢的傾向と默阿彌』などといふ題を揭げると、いかめしく聞えるが、抽象的の論議をなさんが爲めではなく、便宜上さういふ名を借りたまでである。實は——無論江戸末期の文明の枝に、花咲いた果實には相違ないが——單に、例の津藤及び其の一連と、默阿彌との關係、或は三題噺、繪合せ（興畫會）、遊食會等と默阿彌との交涉に就いて述べたい爲である。

默阿彌が二十歲前後の青年期に於て、茶番に勝れ、雜俳に得手てゐた事は既に述べた。而してさう

いつた傾向の才能が、作劇の上に及ぼした所も尠からざる旨をも説いた。然し其の純粋の才能は青年時代の茶番や雜俳に芽をふいたまま、芝居の人になつてからは發揮するの暇もなかつたのである。それが、凡そ二十年をへだてた、文久以後に到つて花咲くやうになつた。その邊の消息を、或は少しく本傳以外に亙るかも知れないが、それらに關する背景をも窺ふに足るだけに、綜合して見ようと思ふ。

二

此の「黒手組」の中に、助六に傘の異見をする紀文といふ人物があつて、此の役のモデルが津藤であつた事は、其の時にも附け加へておいたが、あれは作者が當時津藤の花街に於ける勢力をそのまま取つて寫したものであつたのだ。江戸の末に、芝居と花街とに對して非常な勢力を有し、又保護者の地位にも立つて、全盛を盡したものは津藤一人であつた。享保の昔、大門を三度までうつて吉原を總仕舞にさせたり、追儺の豆代りに小粒金を蒔いた紀文、又は奈良茂に對して、嘉永、安政の津藤はまさに好一對をなすべきもので、今紀文とも稱された所以である。

『花街に通客、芝居に見巧者、粋と崇め意氣と稱するもの、(十八大通の一人なる)淺草の文魚に起りて山城河岸の津藤にをはる』と、魯文も述べてゐる。まさしく彼は江戸最後の華麗を一身に負うて

哀傷的な生涯を辿つた人であつた。津藤の生れたのは文政五年で、江戸の新橋山城河岸、家は代々升酒屋であつたが諸家樣お出入で御金御用を達してゐたから、巨萬の富を藏してゐた。姓は細木、名は機藏（或は鱗）、幼名は子之助、香以と號し、鯉角又は李蠖と號した事もある。法號では壽阿彌を嗣いだがそれは後默阿彌に讓り、要阿彌、梅阿彌とも號し、方阿彌陀佛として明治三年に歿した。家代々の名前は藤次郎で、津の國屋と呼んだ所から津藤で通つてゐた。

香以からは祖父に當る津藤が、經濟家で家を興したのであるが、父は既に津藤大盡と稱された位で花奢風流に身を沈めた人であつた。仙烏と號して狂歌俳諧をもよくし、三代目の櫻川善孝や畫工の北溪、或は宇治一閑齋などといふ當時の名ある藝人を取卷にして、遊樂に耽つた事もあつた。また狂訓亭爲永春水とは親交もあつて、彼れの著『梅暦』の中へ千葉の俠客藤兵衛、千藤として描かれてもゐる。

斯ういふ父の長男として生れた香以も、その血を引いたものか、學ばずして狂俳に勝れ、書體俗氣を離れ、文才にも富んでゐた。年長じて北靜廬（梅園）に就いて老莊を學び、豪放磊落な性格を助長せしめたものと傳へられてゐる。まだ十七八歳の部屋住の間に父の放逸を見習ひ、料理屋、船宿と流して歩いたので、廿歳の時繼母の實家竹川町の鳥羽屋へ親類預けにせられた。けれども決しておとなしくはしてゐなかつた。私用にかこつけては抜け出し、途中で待受ける幇間連を連れて遊び歩き、折

折には竹川町に程近い、木挽町なる河原崎座へも足を運んだのである。
默阿彌と近附になつたのも、此の頃の事であつた。河竹新七になる前の柴晋輔の時代で『才名の高きを聞いて樂屋にたづね懇意を結』んだといふのが、天保十三年の三月で、津藤は廿一歳默阿彌は二十七歳の時であつた。二人が知己となつたに就いては他の一說がある。尾張町の袋物屋へ、默阿彌が煙草入を誂へに行くと、店頭に津藤がゐて『お前は河原崎座の見習さんだね』と言ひながら、代を拂つてくれた事がある。それが緣になつたともいふが、默阿彌が煙草を喫まなかつた事實や、見習時代と津藤の年齡との關係から見ても、亦前說が默阿彌の記憶によつて魯文が津藤を傳した『今紀文花廓花道』に述べられてゐる事實である理由などから推測しても、前說の方が正しいやうに思はれる。
香以は安政三年に父藤次郎を失つたので、これよりは誰憚るものなく、いよ〳〵駄々亂大盡の本性を露はして、日がな夜がな『家に風交の友を集へ、幇間藝妓を打招ぎ、風談笑話に送り、狂歌俳諧の筵を開き、歌案句作』に耽り、花街に、芝居に、その貲を盡すに至つた。金あれば散じ、物あれば投ずるといふ有樣だから、財產はどん〳〵減る一方であつた。家族や親類の者がいくら氣をもんでも無駄であつた。つひには新吉原江戸町玉屋の抱へ若紫の許に通ひ、全盛遊びをした上根引しきた。此の女は落魄してまでも貞節を盡した、お房といふ妻女であつた。
役者で贔屓にされたのが、海老藏父子。荒磯連といふのは、津藤が權十郎の爲めに設けた見連であ

つた。小團次も「御隱居々々」と呼ばれて贔屓にされ、相中（名題下）の米五郎、小半二、吉六、國五郎なども恩澤を蒙つた。後には新車、市藏、九藏、家橘等も其の家によく出入りした。何にしろ花街、芝居を通じて、中月代のでつぷり肥つた童顏の津藤を見知らぬものは流行社會の者にあらずとまで稱された。その全盛さが想ひやられる。遊女玉菊の追善と小猿七之助の狂言『網模樣燈籠菊桐』の時には、花美を極めた見物を七度までも催したといふ。此の時吉原の幇間連が、玉菊の芝居を見て喝采する聲が餘り騷がしいので、河岸端から苦情が出たとさへ默阿彌の手記に殘つてゐる。幇間で津藤の周圍を離れなかつたものに、善孝があり都有中があり米八があつた。名ある藝人の他、俳人作者にも値遇を忝うしたものが多かつた。卽ち梅の屋鶴壽、柳下亭種員、假名垣魯文、梅素玄魚、畫工の隣春、四方の梅彥、狂言作者の左交如皐及默阿彌などが算へられる。

彼等は時としては、大擧して吉原に遊び品川に遊んだ。殊に其の頃の品川は通客の遊び場所として繁昌したもので、引手茶屋の朝飯に帆立貝で蝦蛄を煮ようといふ、通な遊びを誇つたものである。津藤がよく行つたのは大野屋萬治を茶屋として、島崎、湊屋、土藏相模などといふ名ある遊女屋であつた。默阿彌も時としては其の中に混つてゐた。默阿彌は金錢にも堅い人であつたから、若し仲間に加はる時には、いつも津藤の母に賴まれて財布を預つて行つたさうで、祝儀萬端の切盛りを引受けたといふ。默阿彌も此の頃は三十代四十代の意氣な時代だから、品川へ行くにも、芝の中門前にある作者

仲間の家へ寄つて、白縮緬の褌に緊めかへて行つたなどといふ話も傳はつてゐる。ある頭立つた芸妓が默阿彌のいゝ人になつて、朋輩を羨ましがらせたのも此の頃であつた。

文久元年の十一月から市村座の紋番附の作者連名中に見える、肩にスケとした梅阿彌は津藤のことである。彼れが芝居界に崇められ、又文筆に親しんだ人であるから、默阿彌の好意によつて名前だけを出したものであらう。芝居を贔屓にした餘りに作者の中へ名前を出すといふ例はあつた事で、例の三升屋二三治も初めの間はさうであつた。香以は狂歌に何の屋を稱し、俳諧には梅の本を譲られた位だから、戯文、俳文をもよくした。特に其の序跋には氣の利いたものも殘されてゐる。又好事な人で自らも一中節を嗜なんだ所から、數寄を凝らして薄樣の紙に刷らせた稽古本や、贅澤な表裝の「一中節實事記」を作らせた事などもある。

同じ遊逸でも、父藤次郎には緊りがあつたが、香以には遊蕩兒の血しかなかつた。巨萬の富でも湯水の如くに浪費されて保つものではない。さしもに全盛を極めた遊樂も、六七年を經た文久二年には、山城河岸なる本宅を親類に托し、淺草馬道なる猿寺の境内に些やか住居を設けて逼塞し、生活を一新しようとした。けれども到底不可能事で、有るが上にも借財は嵩むばかり、質素も倹約も一向に出來なかつた。翌年にはいよ／＼城を開いて下總寒川に田家を求め、一子慶次郎とお房を伴うて白旗八幡前に閑居しなくてはならなかつた。淪落の極に達したのである。時に歳四十二。

韮野や露に氣の付く歳四十。

かういふ句が、寒川へ行つた時に詠まれた。歡樂の悲哀をしみ〴〵と覺えて醒めた時は、もう取つて返しが付かなかつた。里人は流れ來た江戸の人としてのみ見るに過ぎない程、寂しい生活に陷つたのである。江戸との交通は、稀に往き交ふ漁船に載せて書信を往復させる事が出來たばかり。彼は徐ろに敗殘の身を養ひながら、句作に耽るの外はなかつた。前に恩顧を蒙むつた取卷連中で、津藤を忘れずに來訪したものは殆ど無く、竺仙と默阿彌だけが落魄の居を訪れたに過ぎなかつたといふ。

詫しい寒川の生活は四年間で、江戸へ歸つたが、何の活動をも爲し得ずして、其處此處の親戚を飄飄として泊り歩いてゐた。淺草馬道の猿寺に居を構へて、守田座に出勤した事もある。偶々狂俳の群に入る事もあつたが、昔日の俤を偲ぶよすがもなく、明治三年の秋九月十日、蟬の聲の枯れると共に四十九歳を一期として逝いた。

　　おのれにも倦での上か破芭蕉。

彼れも自覺してゐたか、こんな辭世が殘されてゐる。魯文も言へるが如くに、實にや彼れは『放逸漫戲、花月を弄し春宵一刻千金を擲ち、快然として花街と劇場を郁郿の旗亭と定め』た、槿花の如き生涯であつた。

津藤の生涯に伴ふ默阿彌との交渉は、右に述べた通りであるが、其の内的關係に於ては一層深い、床しいものがあつた。

豪放な旦那風を吹かす人の常として、津藤も取卷のものによく渾名をつけた。役者の吉六に散蓮華とつけたり、染物屋の仙さんが背低であつたのを洒落れて筅仙とよび、それが立派な通り名になつたなどは有名だが、默阿彌をば『老兄』と呼んだ。いつも老兄々々と呼ぶので、或る人が此の人の號は老兄といふのだと思ひ込んだ事もあつたさうだ。此の渾名の如くに、默阿彌は事實に於ても老兄として、兄貴分として津藤に慕はれてゐたらしい。

默阿彌は本業を持つてもゐたし、外出を好まぬ人であつたから、津藤より默阿彌に音信した書簡は百通近くも保存されてあるが、そのいづれを見ても『老兄』であつた事を證明してゐるもののやうに思はれる。一から十まで默阿彌の性格と才とに信頼して、さながら親切な叔父さんに甘たれてでもゐるやうな樣子に見受けられる。元來幇間的根性の微塵もなかつた人だけにどうしても兄貴格として愛敬されてゐたのである。其の書翰中には芝居の事あり、私用に關した事もある、二人の間の内的關係を說明し得るやうな部分を、次に少しく拔いて見るのも一興かと思ふ。

例の『黒手組』の中へ、紀念として書込まれたのが非常に嬉しかつたと見えて、其の體を長長と述べ、扨私をモデルにしたといふ爲めに、何か苦情や面倒が起つたならば、其の時に私の書いた手紙を見せてはどうか、それに就ては御手數ながら、適當な下書を存念通りに書いて寄越してくれと言つて來たのがある。（然し其の書面は出來なかつたものか見當らない）また『散蓮華をば廓通ひの通客か俳諧師にでもなし下され度、吉六も衣裳に有りつき興悦喜仕るべく候はん、東榮などと致しては如何や』とも添へてある。果して吉六は此の時に牧冬映といふ俳諧師になつて、津藤から衣裳持物までそつくり贈られた。

又こんなのがある。『扨御穩居（小團次の事）三丁目（守田座）へ出勤にて、增補の佐倉と定まり候由定めて相變らず御工夫御座候事と遠察致し、今より樂しみ相待ちをり候、內々ながら穩居と若御兩人のところ、役振りは內聽致し度く云々。』若御兩人とは九藏、福助の事で、こんな樂屋落の內秘が早く聞きたかつたのであらう。又中には、御一泊ながら左の正本をお聞かせ下され度として、『正直清兵衛』と『赤垣源藏』とを並べて書いたのもある。後に下總の寒川に行つてからの信書中には、彼が上總市兵衛の法會に連なり、其子孫から大體の話を聞いて綴つたものを添へて、『此の筋にてお用ひか御座候はゞ御工夫新上候。發端のかゝりより落着の島歸りまで、何となく聞捨兼候一節も有之候まま是を師匠（默阿彌）の机にかけて、猶小さいの（小團次）が舞臺にしたらと不斗存付候。實に皮（舞臺）

にかかる日には御兩人に限り候事と存候、こは身贔屓ではあるまいと存候」とある。これに暗示を得たのか、其の後になつて『市兵衛記』が新作されてゐる。

「趣向の智慧」を老兄に借りた事は、甚だ多かつたらしい。『例の飾り景物に御座候、題は百美人の中袈裟御前にあたり申候へ共、久々休座歸り新三の事故……何分お智慧拜借、例の御名案御口添相願ひ初日に花を咲かせ申度候……別紙御覽下され度、前人未發の御新案お貸し下され度』などと洒落まじりのもあれば、或は狂歌の判者を依頼されたが、其の前に讀む文章を賴む、老兄が忙しくば、代りの仁を此使と共に寄越してくれと言ふやうなのもある。

短い津藤の手紙には『明晩は是非御光來下され度』とか、『一寸一會したいから其の相談に來てくれ』とかいふのがある。『昨日は御いで下され候も御粗末にて』申譯がないといふのがあるかと思ふと、此の手紙の返事は是非貰ひたいのだが、貴方は忙しいであらう、明後日使を差出すから、その時までに返事を作つておいてくれなどといふのもある。豪放な津藤が默阿彌に對する態度には、全く他と異にした所がありありと見える。

津藤も亦默阿彌に對して保護者のやうな地位に立つてゐた。時としては默阿彌の爲めには金も使つてくれたであらう。何かの催でもあれば默阿彌の名前で、それぞれへ贈り物をしてくれたこともあつた。彼の勢力によつて名聲を高めたといふ點も多少あつたであらう。けれども默阿彌は、普通の取卷

のやうに、金錢物品がほしくて阿諂追從する程卑しくはなかつた。假令津藤の言出した事でも、聞かれない事は聞かなかつた。
壽阿彌は長島劇神仙の別號で、津藤が一旦襲いで默阿彌に讓つたのであるが、默阿彌は一度もそれを自ら用ひた事はなかつた。又ある書翰中に、其水といふ號をつける旨を先刻承はつたが、歸路つくぐ〳〵考ふるに同音同字で損だと思ふから、喜水とか貴水とかしては如何と勸めたのもあるが、默阿彌は其水を以て押通した。又或る時津藤が大丸（呉服屋）へ行つて、何十反といふ結城紬の變り縞を出させてそれを少しづつ切取らせ、八丈の長襟をかけた接子の伴天を拵へて、得意然と着てゐた事がある。するとそれを見た誰も彼れもは、見事だ〳〵と褒めそやして、お下りを手に入れる算段をしてゐた。其の後默阿彌も行つたが、チロリと其の伴天を見ただけで、ぷすりとも言はずに何かの餘談に移つたが、それが無性に津藤の氣に入つて、どうしてもやらうといふのでくれたさうだ。これは持つて歸つたまま一度も着ずに仕舞つてあつたが、小團次が『相生源氏』の興行に、その話を覺えてゐてあれを着たいといふので津藤に斷つて、小團次へやつたといふ話もある。
零落してからも、默阿彌は何の變る事もなく津藤と厚誼を交へ、草鞋を穿いてわざ〳〵寒川をたづねた事もあつた。津藤もどんなにか嬉しかつたと見えて、以前には手紙の宛名も、河竹老兄、壽阿老兄　能進様、其水様などといふのであるが、寒川からのや歸府してからのには、河竹老師父とまでし

たのがある。

その最後の手紙は、次のやうに丁寧を極めたものであつた。

病氣の儀おたづね下され御深志御配慮恐入候二月十九日より不快只今までハツキリ仕兼候、全くは痔の募りし候のみか別に申分御座無候稀に日本橋を越ゆる事少し手ばりそれ故心ならずも御不沙汰申上居り恐入候いづれ涼風相立候はゞ久々にお伺可申上候。

此の手紙の上紙には『河岸旦那名殘の手紙、此の後便りなく九月十日歿す』と、默阿彌が朱書してある。

吾等は津藤と默阿彌との交誼を調べて行つて、此の末節に到り、ある哀傷的な寂しさに打たれてほろりとした事を忘れ得ない。

四

津藤の零落し始めた文久頃から、三題噺といふものが再興せられた。

三題噺は文化の初年に、下谷廣德寺前なる孔雀茶屋に落し噺の夜講のあつた折、元祖三笑亭可樂が辨慶、辻君、狐の三題を得て頓作したに始まつて、一分線香三題噺と呼び、一と頃雅俗の間にめでられたのが中絶してゐた。それが約六十年程を經た文久に到つて再興せられたのである。

同人中の山々亭有人の記す所によれば、先代の柳亭左樂は藝の上手な割合に、ぱつと引立たなかつた人で、それを氣の毒に思つた最屓客の金座役人に、高野氏（俳名花見又松花軒、醉櫻軒、或は櫻垣七五三丸）とか、長谷川某、和田某などといふ通人があつた。どうかして左樂に人氣をつける方法はあるまいかと有人等へ相談があつたので、左樂は氣轉の利く男だから、三馬の戯作に書遺された可樂のやつたといふ、三題噺をさせては如何かと申出でた。するとそれが採用されて、左樂に計ると左樂は存外な臆病者で、首尾よく出來れば結構ですが、下手をやつて味噌をつけては、取つて返しがつかぬ『皆さんでお慰みに二三回御催しになつて、十分調練した上で』と弱い音を吐いた。そこでそれも面白からうと、有人等自ら催主となつて連中を狩り集め、知人の宅で催したのが再興の端緒であつたといふ。魯文が物した『粹興奇人傳』の後叙にも『有人、玄魚の兩遊子去る歳白樂町なる松本茶亭の伏魔殿に、高座を開』いたに始まるとも述べられてある。つまり三馬の作物に見えた可樂のを眞似て、左樂へ入智慧しようとしたのが、後には高等茶番のやうなものとなつて流行を促したのであらう。

兼題とて與へられたる三つの題を、小器用にまとめて、一つの落し噺にすればよいもので、これも趣向的の頓才を要するものであつた。始めの間は、家族や知己朋友を集めて、小さな貸席位で試演してゐたのが、次第に時流に投じて大好評を得るに到つた。又一つは當時羽振りもよく、通人の多かつ

た、金座役人を後楯に控へてゐたのだから大仕掛になつたのである。從つて會場も文久二年の秋からは、日本橋萬町の柏木亭（今の常磐木倶樂部）へ持出すやうになつた。當時その麾下に參じて、三題噺連中の中堅になつた者には、有人、玄魚、魯文、それから綾岡輝松、落合芳幾、武田交來、福井扇夫及び如皐、默阿彌等で、これに黑人の左樂、圓朝、柳枝、むらく等が加はつて『粹狂連』といふ連中が出來た。

もとより素人の娯樂に出來たものだから、公開して席料などを取るやうな事はなく、知己の者ばかりを集め、甲子待と言つたやうな、物日に會を催したに過ぎない。けれども人氣はぱつと立つた。此の翌年には大傳馬町の豪商勝田某（俳名は春の屋幾久）が同趣味の連中を集め、粹狂連の向ふを張つて『興笑連』と名づくる一團を作つて互に相競爭して技を鬪はせ、時には連合して大會を開く事もあつたらしい。後には柏木亭も狹くなつて、兩國柳橋の柳屋を定席とし、每月廿一日をその會日として交々集會を開いた。二十一日と定めたのは、昔を偲ぶといふ所から昔（廿一日）をもじつたのだといふ。

三題噺の連中は、だん／＼氣乘りがして、先づ『粹興奇人傳』といふ小冊子を文久三年の春出版した。これは高野氏を中心とする粹狂連と、幾久氏を中心とする興笑連とが聯合して、兩連廿三氏の肖像と、小傳とに、その人の作つた短かい三題噺一篇宛を添へたものであつた。其主腦は、無論粹狂連

にあつた事を認める。續いて『春色三題噺』といふ、三冊一部の綸入三題噺集が、慶應へかけて二輯まで續刊された。又津藤の取卷の中にも見えた、狂歌師の梅ノ屋鶴壽の年回追善にも一冊出版された。それに伴つて三題噺連中の評判記やら、見立番附さへも出來た。

斯ういふ形勢になつたので、三題噺は江戸中の大流行とはなつた。所謂洒落れた人で三題噺を嚙らないものは、通人にあらずといふやうな事になつた。此のやうな機運に乘じて機敏なる商人の間には三題扇子、三題菓子、三題模樣の半襟などといふものがぞく／＼できて市へ出された。櫛から煙管、銘酒に到るまでも、三題噺に象つたものが一時流行界を風靡した。

同じく三題噺に關係した金座役人の中でも、頭目の高野氏に就ては今深く知る由もないが、長谷川金次郎氏に就ては、僅か調べ得たことがある。氏は矢張り金座御金改役て、松裏紅花舛と號し、明治十年八月、四十八歳で歿したといふ。『長日閑話』と題する隨筆が殘され、又『かくやいかにの記』といふ、江戸の戲作の典據を自分の讀書した中からや人に聞いた話などから考證して書きつけたものが殘されてある。後者の中の一つ二つを例に引くと、『八犬傳の中圓塚山にて犬山道節火葬の條は、「慶長見聞集」（寫本十一冊）の中に見えたるを假用せしならん』とか、『八犬傳芳流閣は兜軍記院本五段目を假用せしものならんとは河竹其水（默阿彌）氏の話なり』。或は『田舍源氏』の中光氏の命によりて、太郎高直が老女水原の部屋へ忍び、後に箭道の木太刀を用ゐ、同じ人を脅かす條は「姥佐久夏」（元祿年間印本）の中、吉原遊女花月を、武家富山某が花月の心底を試す條を

假用せしなるべし』などいふ類ひてある。

五

『春色三題噺』の序に、『其の種三粒を植ゑて花一つに開き、而も其の色品さま〴〵にして、長きあり、短かきあり、題に戀あり、神祇あり、佛あり、衆生あり、衆生あれば業果あり』とあるやうに、三つの兼題に因縁を持たせて、巧みに思付の好い趣向で、短かい落語にまとめるといふのが即ち三題噺の主意であつた。言はば毛の生へた口上茶番であつた。給仕者に開卷の催しあるやうに、前に兼題を配つて、定めの日に口演の會を開く。評者をおいて品定めの後に、これも趣向たつぷりの景物を高點者へ出したものである。

雜俳や茶番に卓越した者が、三題噺に其才能を揮ふのは言を俟たずして明らかである。即ち默阿彌は三題噺連中の第一人であつた。有人の追懷談中に、『河竹氏の噺は、脚色に無理もなく、且つ音聲も爽やかで、黒人も及ばぬ妙趣があつた』と述べられてゐる。文久二年の秋に出來た評判記には、實惡の部卷頭至極上々吉の位置に河竹其水が据ゑられてゐる。默阿彌は會毎に其の得意の才能を發揮して、いつも高點であつた。廿歲前後に茶番の司馬連中で牛耳を執つたがやうに、三題噺に於ても座頭株を占めたのである。

もと／＼洒落と趣向が生命だから、三題噺を讀んで見ると、當時の穿ちや樂屋落のこぢつけもあつて難解な節が多い。默阿彌の作で分かりのよいのを一つ例に引いて見よう。

（題）千本櫻、向島、らうのすげ替へ。

らうのすげ替へ向島を呼びながら通るを或る寮の下女聲をかけ、長煙管をすげかへてくれと出すを夫のすげ替兩手に取り見て『これは結構なおきせるでござりますが、御新造様のでござりますか。』イエそれはお妾さんのでござります。』へイそれではこなたは御別莊でござりますな。下女『アイ大和町のよし野の御別莊でござりますトいふにすげ替は煙管の掃除をしながら、『よし野さんの御別莊でござりますかイヤこれも御縁でござりますナ、お庭から堤を一目に千本櫻を御覽なされ、江戸と違つて靜かな所で、實によしつねでござります』オヤおつう洒落るらう屋さんだ。ホンに土佐坊ぢやないがお前の尻馬に乘つて言へば、土手の向ふが堀川だから一寸小船で川越をすれば、明日と言はず京の君になんでも彼でも用が辨じ、船都合のよいのが鳥居サ』イヤお前もなか／＼唯の狐ではない、爰は一番忠信の押もどしで、わたしが言へば先枝折戸の竹網代は龜井町と思つたら駿河細工の極みがき塀が大物の舟板で風除に椎の木を植ゑ、すし屋にあらぬ數寄屋搆へ窓から隅田川の川つらを見て鶯の初音を居ながら聞き、御殿にゐるより餘程よいが、おめかさんは何者だの』なんだか當てて御覽な』まづ堅さうなお宅だから、すし屋の口入で生娘か、ないし年

增のけだものかトンタ梶原の陣羽織だが內やゆかしきノ\だ『なんのお前さん大違ひさ、たかが宿場の女郎だはネヘ』『ヘエ惟盛ではない飯盛かへ、夫では大概お里も知れた、ト嘲しながららうをすげ替へ、モシ此の雁首の疵は先からでございますよ。ト渡せば取つて『アイそれは錠前を打つた疵さト件の下女はらうを見て『キヤノ\此のらうは大そういがんでる、能くすげ替へておくれな』『イエもうらうがございませんから權太來た時すげかへませう』『それでは仕方がない釣をおくれト百錢を出せば『廿四文で釣は眞平だト不肯ぶせうに釣を渡すを下女が算へて見て『オヤ新錢だと思つたら、文錢がまじつてゐるよ』『ハイ其の估せんは身替りでございます。

此の噺でも分かるやうに、兼題をそれぞれ十分に利かせ働かせて、それでちやんと筋が無理のないやうに通つて、巧く下られれば上乘なのである。

默阿彌の作でも『花火、後家、蛙茶屋』などといふ評判のよかつた作もあるが、何分にも此の五六倍もあらうといふ長いものだから、引用するわけには行かない。

此の流行は芝居へも及んで、如皐にも默阿彌にも、三題噺に材料を取つた新作ができた。如皐のは文久三年三月の『花暦三題噺』といふ大切淨瑠璃で、角書に『今世の流行は稚魁の粹狂連に櫻に競ふ興笑連、戀向に凝りて色は浮れ男』としてある。けれども最も著名なものは、默阿彌の『和國橋（文久三年二月）と明治三年五月の『魚屋の茶碗』とであつた。どちらも二番目狂言に出來たもので、評

判は皆よかつた。文久二三年頃の三題噺は、江戸中の人氣を集めてゐたと言つても、過言ではあるまい。

『和國橋』は名題も『三題噺高座新作』であり、四幕六場の世話物である。この作はこれより前に、『國性爺、乳貰ひ、髪結』といふ兼題で、默阿彌が作つて口演したのが評判よく、小團次も傳聞して是非やつて見たいといつてゐた。其の中文久三年の春興行に、隣町の中村座で、彦三郎の甘輝に權十郎の和藤内、田之助の錦祥女といふ立派な顔觸れの『國性爺』が出ることになつたので、それに對する策として、世話の國性爺で對抗して見ようとなつて、前の乳貰ひの噺を敷衍し、新作したものである。所が三題噺の流行といふ背景もあり、趣向も勝れてゐたので、これが大喝采で見事に勝つた。そこで、始めて三題噺が芝居に上つて評判がよかつたから、粹狂連は默阿彌へ引幕を贈る事となつた。默阿彌も、作者へ引幕といふのは異例だから、小團次と座元とに相談をしたところ、御贔屓から下さるのだから構はないといふので、有難く受けた。嘗ては八幡祭りの趣向に、三題噺的の手腕を以て勝利を占めた默阿彌は、茲に到つていよ／＼名聲を高めることになつた。川竹といふ銘酒さへ出來て贈られたので、諸方へ切手にして配つたのもこの頃のことである。

『和國橋』が後（明治三十年）に淺草座に於て、九藏（後の七世團藏）一座によつて演ぜられた時、饗庭篁村氏は次のやうに評した。引いて以て本文の補ひとする。

「……總ての趣向を近松の國性爺に取りしなり。初代種彦にも「唐人髷今國性爺」ありて佳作と稱せらる。默阿彌はそれを知れば一層世話に和らげて、碇綱の暖簾を染めかへした褞袍に和藤内が着付を利かすなど、例の行屆きたる仕組、仕出し下廻りなどの臺詞にも聊かも遊びなく、妙の又妙を極めしものなり。慌てた學者や麁相しい劇通が、これは茶番の手のこんだものだなど早口にいふは演劇の妙味を知らぬ故なり。謙遜なりし默阿彌翁もこの作は得意にて、これにつき話されしは、其の頃疱瘡江戸市中に流行せし故、疱瘡兒に泣を見る親々多く、殊に憐を其の所に感ぜられしならんが泣かぬ見物は無き程なりし、又その疱瘡兒の赤い手拭を紅の替りに用ふるといふが山なり。この作の中夜鷹蕎麥を子に喰はすることは實地にありしを用ひたるなり。翁或る寒き夜淋しき町を通りしに、汚なき身形の男ウソ〳〵と子を引つれて來かかりしが、子は荷を下し居たる夜鷹蕎麥を見て父やお腹が減つたからお蕎麥が喰べたいよと足ずりして泣くに、親は四邊を見ながら低き聲にて喰べさせてやりたいがお錢がないから堪へよと云賺し居るをみて其の男を呼び、失禮ながら私がこの子に振舞ひませうと錢を出して誂へ其の親にもすゝめ其の身も付合に箸を取りつく〳〵、父子の體をみるに、子は唯夢中に掻き込み父はオロ〳〵として咽喉へも通りかぬるやうなりければ、それを種にせしなりと。翁が如き作家の耳目に觸るゝ事森羅萬象皆材料ならぬはなけれど特に憐を感ぜられし事を取出されしなれば、見物ここに至りて鼻打かむも道理なり。」

『魚屋の茶碗』は明治になつてから、五代目菊五郎と仲藏の爲めに作したのだが、その起因は矢張りこの頃の事である。それには事實譚もあり、新になつた手續きやら、その時代の連中の模樣なども知るに足るから、魯文の『劇場繁昌記』の一節を引くのを便利とする。

文久三年正月七日、粹狂連長高野氏は、早春の發會を與笑連より先にせんと、噺初の相談かた／＼、有人、芳幾、魯文を誘ひ當時茅場町の居宅より、常に出入りする茶道の宗匠村田宗伯をも伴ひて、五人にて鎧の渡し場より傭れて仕立てし屋根船に同船し、東兩國の割烹店靑柳樓の棧橋に舟を繋ぎ、同樓に打登りて其の頃柳橋流行の愛妓二名を聘し、半日の宴に談話を交へ宗伯は其夜七種の茶の湯ありとて一歩先に席を辭し、殘る四人は夜に入りて、イザ歸らんと樓を下り、棧橋に繋ぎおる彼の家根船に乘移れば、藝妓樓婢は陸より送り、左樣ならば御機嫌ようと、紋切形の棄ゼリフをキッカケに、漕出す船は舳を向けて、兩國の橋間に近よる折もあれ、橋と船との險しき間へ、たよりドンブリ水煙り、すりや身投よと船頭の聲に、船中四人はびつくりし、高野氏は此の時早く、船頭身投なら助けろ助けろと呼ばゝりぬ。船頭はかくと見るより、突出す棹に舳を返せば、橋に近づく船の舷に、一沒一浮プク／＼と浮出したる死骸の襟先、手をさしのべて芳幾が其の半身を引揚ぐるに魯文も光れな手傳ひて、彼の腕首を引提へ朧氣ながら提灯の火影にひとしく死相を見やるに、年の頃五十前後の男、毬栗頭髮の身に着けたる衣服は單衣か袷かは夜目にいづれと分らねど、上に纏ひし黑色のひとへ羽織は空蟬のもぬけの殼の水浸し、襟首より刺靑の少しく見えしを察するに、當時幕府の茶頭家などか、やくざ隱居

のあまされ者か、疳毒などに痾みほうけ、身體不隨の所より一家親族には見放され、便る方なく入水せしものかとも想像せられぬ。此時船頭の言へるやう、此の死體すでに橋杭にて鼻柱を強く打ち氣脈全く絶えたれば、引揚ぐるとも甲斐なし、若し引上げて蘇生せずば、情が仇のかゝり合ひにて、多少の難儀は旦那方御一同のみならず我々も免れ難し、とく／＼放して水葬禮と促がし立てられ、高野氏も同船の芳幾、魯文も遺憾ながら、船頭の言ふがまゝに南無阿彌陀佛の聲もろともに手を放せば闇はあやなし、川下へ流れし果は如何なりしや。船頭は此時櫓を早めて、間部河岸より行徳河岸を横ぎりて、鎧の渡し場に船を留め、棧橋より打連れて茅場町へと歸りたり。同年同月十一日に、有人芳幾の兩子が當春例の三題噺の發會兼題配りとして、淺草寺内彩釋迦堂の奥地なる河竹其水子に至れる折、彼の身投一件を物語りしが、其水子の得たる兼題は「斗々屋の茶碗、山笑ひ、居合抜き」の三題なるより、直ちに連中の噂高き兩國の身投話を種とし、其時魯文、芳幾が引揚げし坊主の脊中に刺青ありしと、茶道家ならんとの鑑定を其のまゝに、斗々屋の茶碗に趣向を持込み、同月二十一日の發會に旨く三題にまとめて話されしが、此の趣向新なり奇なり、且は實傳に近しとて連外の評判年を追うて高く、爲めに河竹子に乞ひて夫の噺を狂言に仕組みては如何といふもの多きより、遂に維新の後明治二年猿若町三丁目守田座狂言二番目に、舊作の三題噺を新案に取仕組、名題は即ち『時鳥水響音』役人替名は花垣七三郎に訥升、船頭燕の久太に仲藏、下男友藏に左團次、七三郎妹お露に尾上多賀之丞、手代與兵衛實はまむしの次郎吉に菊五郎等なりき。劇中の役名に花垣七三郎とあるは、粹狂連長の高野氏の初號を花兄と云ひ、別號を櫻垣と呼びしに因み、七三郎は七五三丸の狂號ありしによつてなり。又其時中村雁八の役名に茶の宗匠東伯

とありしは、村田宗伯が宴席に一座せしも、船中の人數に加へたる作者の機轉なりし。

此の引用文を見ても分かるが如く、單に趣味の上ばかりでなく、實生活其のものまでが遊戲三昧の裡に送られてゐたらしい。又茲に、恰も八人が趣向を凝らして、屋外茶番を催したと同じやうな話もある。

文久三年十一月の事であつた。市村座で忠臣藏を出して其の大切に、『歳市廓討入』といふ富本の狂言淨瑠璃を默阿彌が書いた。これはモロ〳〵とよく言ふ口癖のある、高間鈴成が腡屋(茶屋)に居た所を大工連が引出し、先つ頃酒の爲めに恥しめられた敵を取り、日出度く引揚げるといつた趣向のものである。モロ直が腡部屋から引出されて討たれるのを、世話で利かした默阿彌お手の物で、評判もよかつた。是を見た三題噺の連中は默つてゐられなくなつて、輪に輪をかけた趣向を凝らした。

十二月の十七日の夕方に、贔屓よりとして、近邊の炭屋から櫻炭を二十俵ばかり持込んで物置の前へ積み上げて歸つた。いつたい誰からだらうと不審を打つてゐると、夜中にどん〳〵門をたたき太鼓を鳴らし呼子の笛を吹きたてて『開けよ〳〵』と叫ぶ者がある。門を開けると、どや〳〵踏み込んだのは、由良之助に力彌と見せた高野氏父子を先頭にした、三題噺の連中であつた。つゞく面々も、皆雁木と見ゆる模樣の紺半天、腹掛股引といふ扮裝で、手に〳〵玩具の槍、弓矢などを持つて押かけたのである。腰にした合印しの札を炭俵へ突き差し、入口から紙の雪を蒔きながら家内へ押上り、洒落澤

山の連判狀を讀み上げ、それ〳〵義士の討入によそへた渡りぜりふもあつて、結局は默阿彌を師直に見たてて料理屋の隅屋へ引立てるといふのであつた。默阿彌の方でもぬけ目なく、早速一箱の蜜柑を振舞ひ、引立てられて隅屋に伴はれ、徹宵の宴を張つたと、かういふのである。
默阿彌は幼少から酒と煙草は用ひなかつたが、さう言つた席へ出てもちやんと調子を合はせることができた。

三題噺の流行した頃、津藤は下總の寒川に獨居して、寂しい月日を送つて居た。嘗ては恩顧を蒙むつた者も、新しい保護者の下に參加して、津藤を忘れ果てたかのやうに見えた。彼も風の便りに三題噺の流行を聞いて、三題を組入れた句を友の許へ送つた。

笠、戀、雪。
笠森に戀のねがひや雪詣で。
犬、猿、小春。
小春野や犬の吠えつく猿田彥。
鐵醬、泥坊、水鳥。
鐵醬つけた歌盜人や雨の鶯。

六

然し三題噺は、文久から慶應へかけて、三四年間の流行を見ただけで、高野氏等が御一新の打撃を受けて、退轉すると同時にパタリと止んだ。唯柳亭左樂が其の流れを汲んで、高座に時折專賣したに過ぎなかつた。次に代つて遊蕩兒の群を魅したものは、『繪合せ』(興畫會)であつた。連中は略々同じ顏觸れながら、其の保護者は違つてゐた。今度は日本橋大阪町なる銀座役人の、辻某が其音頭を取つたのである。繪合せは、兼題によつて繪樣に趣向を凝し其の繪組を畫工に誂へ、出來上つたのを先づ一卷に仕立てる。一定の評者がそれを見て評點をつけ、五十點以上のものにはキいを加へる。やがて定められた會日に寄合ひ、開卷をして評し合ふ。高點者には是れも趣向を凝した贅澤な景物が出たもので、つまりは繪俳諧の一種で雜俳などと根を等しうしたものであらう。

其の繪の認め方は、兼題の物を畫中に現はさないで、その物をそれとなく利かせると言ふのにあつた。故事をもぢつても古歌の意を汲んでもよい。それを穿つて、なアる程と思はせるやうなものが上出來である。然し得て一人よがりのものが出來て、説明がつかなければ讀めないものになり易かつた。『寄月水』といふ兼題に、薄原と富士の遠見を描いて武藏野を見せ、月と水をば匿して『月に寄するの水』を利かさうといふ類であつた。三題噺よりも容易つただけに流行の範圍も廣ければ、壽命も

長かつた。

繪合せの卷が出來上るまでの手順に就いては、今これを知る人と云つては先づ魚河岸の尾虎の主人服部長兵衛氏以外にはあるまい。後日の爲めに聞き得た所を略記して置きたい。先づ最初に連中の所へ催主からちらしが來る。これには題と、〆切の期日と、開卷の場所と、月日と、選者の名前とが誌してある。それを受取つた連中は各題に對して、二樣宛の考案を作り、下繪をつけるなりとも、自身で行つて畫工に話してなりして、畫を畫いて貰ふ。畫工は多くの場合芳幾であつたが、芳幾が選者に廻つた時には、林静とか幾丸とかが描いた。そして大抵選者は四人であつたから、四枚とそれに後番として控へに取除けて置くのが一枚で、都合五枚になるそれが二樣の考案をするのだから、一人で十枚宛畫いて貰ふことになる。此の畫料は一枚一匁であつたから十匁宛の禮を畫工の方へ拂つた。美濃紙は催主の持で、礬水は畫工が引いた。畫工は其の繪の案者が何人であるかを堅く秘して、繪に添へて各選者へ配ると、選者は自分のつけた點の順序によつて、卷へ張込むのである。而して選者は卷に序文を書き、五十五點以上のだけへはキヽをつける、點は十點から五點増しで百點まで。扨開卷の當日になると先づ其の序文を讀み、それからキヽを讀みながら講評に入るのであつた。序文とキヽを讀むの名人は、默阿彌と有人とであつたさうだ。一方前に取除けて置いた後番は、別の卷に仕立てゝおいて、これへは各選者のつけた點を記入して、此の繪をば誰が何點につけ、誰は何點につけたと書い

ておいて、辻氏に見せるのださうである。辻氏は全體としての保護者(パトロン)であつたが、催毎には出席せず唯六月に橋場の辻氏の寮で催される、大會だけへ顔出しをしたといふ。

默阿彌も勿論前々からの關係上外(はづ)れなかつた。三題噺に於けるが如く、萬能ではなかつたが點者にもなれば高點を得た事も度々である。時には會場掛りなどを助け、開卷當日の席へ景物を飾るに、或は川中島に見立て、或は洗湯などに見立てて按配し飾り立てる事もあつた。すべてそんな趣向をするのが得意で、後年にも、芝居其の他の諸催しにはいつも依頼を受けて、飾り立ての下繪を工夫してやつたといふ。繪合せの開卷當日を芝居演初(しを)めの式に象(かたど)つて、捨役(すてやく)ばかりの卷(まき)を自ら讀んで大喝采を博した事もあるといふ。默阿彌の本讀み上手な事は、前々からの極め附で、此所へ集まる金銀座役人、豪商などから懇望されて、本讀みをした事もあつた。新狂言の開く前に披講した事もある。

此の興畫會の連中へ顔を出したものは、三題噺よりも多數で、殆ど當時の洒落(しやれ)た江戶の人々を網羅してゐた。戯作者、俳人、茶人、役者、狂言作者、豪商、役人などといふ種別で、男女老若の別を問はなかつた。波月亭花雪居士(はげつていくわせつこじ)の三年忌追善に版行された『隈(くま)なき影(かげ)』一卷は、興畫會が殘した誇るに足る紀念物であるが、これに載つたばかりでも、八十二人の多勢がある。此の册子はその時の題と、案畫と、その作者の小傳と自筆の句に添ふるに、その頃流行した作者の影繪を以てした。極彩色の大册で、慶應三年秋に成つたものである。歸京した津藤を先頭にして、有人と魯文が序跋を書いてゐる

る。江戸末期の文藝を代表する紀念物として、注目に値するものである。

繪合せが大仕掛な遊樂となつて表はれたのは、此の時だけかも知れないが、行はれてゐたのはずつと以前からであつた。恐らくは安永天明期の雜俳と起源の時を同うしたものではなからうか。默阿彌では『芳三郎時代』の時に述べたやうに、繪俳諧の開卷が屢々行はれた事が書殘されてある。嵌め繪繪直しの如きも略々同樣のもので、これらの進化したものが、繪合せに外ならぬであらう。繪直しといふのは、或る線又は點等を與へて課題とし、これを用ひて無理のない繪に直すものである。この繪直しに八代目團十郎が選評を加へた卷が一つ遺されてゐる。卷中に見受ける顏は、狂言作者の五瓶、南北があり、後の如皐もある。役者では若太夫時代の九代目、梅幸菊五郎、宗十郎、吉三郎等で、これに囃子方から茶屋、仕切場の者までも加はつたのである。調べて見ると弘化二年頃に、河原崎座の內輪だけで催したものらしいが、その時には默阿彌の新七が最高點の百點を占めてゐる。從つて其の卷が默阿彌の手許に保存せられたものであらう。(嵌め畫、繪合せ、繪直し等の卷は、最高點を取つた人に贈られる習慣であつた)。點者の八代目の評に、『卷中秀逸、新しき事初日の如し』とて妙有力、圓滿といふ二つの朱印が押されてあつた。

その後も璃寛(三世)と同座した折、彼が趣味に富んだ人で、諸方から繪合せや二字の點者を賴まれ、其のキヽや評語に困り、默阿彌へ『お智慧拜借』を依賴によこした手紙も殘つてゐる。すべてさ

ういふ風に、默阿彌一個人の生涯としても斷續してゐたものか、辻氏の企てによつて、色彩を濃くして花を開いたのである。

默阿彌が此の當時に趣向した繪合せの中で、殊に評のよかつたものを一つ二つ擧げて置きたい。一つは江戸名所の時に兼題を『待乳』と得て案じたもので、非常に好評なものであつた。繪は吉原の大門の扉の乳（大きな鋲）へ赤い胴拔姿に扱といつた新造が、夜目を忍んで來て待人をかけるといふのであつた。乳へ待人をかけてゐるので待乳を利かせたものである。待乳そのものが、意氣な聯想を作つてゐるだけに、畫組が廓で、新造が待人をかけるといふので、情趣があつて全く格當した思ひ付きであつた。又衣食住の兼題に衣を主眼にして、芝居の『暫』の隈取の押紙に、素襖の袖に入れて突張らせる袖の心とを描いたのが好評で、最高點を得た事もあつた。繪合せと言はず、次に述べる遊食會又は聯合せ、手拭合せ、扇合せなどに際しても默阿彌の趣向したものは、すべて難解なものが多かつたさうで、說明してくれてははアといふ方であつた。然し用ひられた材料は卑近なものが多かつたといふ。

三題噺も、繪合せ等の催しと前後して、天保頃或はもつと以前から、明治の初年までも一部の人に持囃された江戸趣味の一つに、遊食會（持ちより）といふ事があつた。見立茶の湯などから變化し

たもので、料理通や食通と限らず粋人通客の間に、よく催されたものである。單に料理した物を持ち寄つて、樂しむといふのもあつたらうが、多くは矢張り兼題に準へて、その題を利かしたもので、行き方は給合せなどと全く同じものであつた。

例へば『二十四孝の竹の子掘』なる兼題に對して、雪に寄する吸物と見立てて、笹の雪豆腐に薄葛竹の子と言つた取合せの椀を出すの類である。これにもそれぞれ評者があつて、點をつけキヽを付けた。例へば二十四孝のキヽに、『實に遊食家の氏をつぐ好氏（孝子）の腕前、別に嫌味なく淡泊專門な笹の雪に竹の子の薄葛、竹の子を掘出す苦心が見えて感心々々、判者孟宗やうもござりまもぬ。爰が遊食會中の大元帥々々』などと洒落まじりのものである。矢張り高點のものへは景物が贈られた。

右のやうに、兼題によそへて一品宛の料理を趣向する遊食會は、最も通常であつたが、好事家の中には同好の客を招くに、料理はもとより全體の膳部から座席の注文までに大趣向を凝らし、又は百花園などへ持出して、大掛りな遊食會を催したものさへあつた。

默阿彌も自ら好める趣向のものではあり、前々の關係から、その催しからも外れなかつた。

或時『女清玄』中の『隅田川渡しの場』といふ兼題を得て、椀盛を出した事がある。墨染の衣と見立てた鰈の三枚におろした上身、それに竹の子笠を利かした生椎茸、青味の蕨は枯蘆を利かせたものであつたが、殊の外評判がよかつたさうである。

斯うした趣向ものを外にして、當時同人間に頻々と行はれたものに、『惡摺り』といふ事があつた。三題噺、繪合せ等の連中とか、極くの通客の間に行はれた事で、同志中の樂屋落やら、惡口やら、皮肉やら、諷刺やらを、文句入りの戲畫にして、仲間内へ知れないやうに配るのである。內情や失策などを暴露して、悅に入らうといふ惡い洒落で、今のポンチ畫の一層露骨で具體的な、範圍の狹いものであつたやうに思はれる。

少し長いが、次に述べるやうな例もあつた。或る時、通人社會に知られた、出揚の扇夫が、權十郎を贔屓にした朧金屋の隱居に取入つて遊食會を開かうとなつた。夕方から本所の法恩寺橋向ふの別莊へ、思ひ〳〵の喰物を持つて集まつたのが、權十郎を始め、扇夫、玄魚、魯文、有人などといふ錚々たる顏觸で、今に膳部が出るか出るかと心待にして、茶を喫んだり世間話しをしながら、芳幾の持つて來た辨松の章魚の櫻煮位で我慢してゐたが一向に出て來ない。これは變だといふのでよく訊して見ると、隱居は扇夫に任した積りで寢てしまひ、扇夫は粹狂連長の高野氏の茶會でたらふくやつて來てゐると知れ、一番かつがれたのだと皆が氣が附いた。夜も更けて十時頃になつて一同が歸り仕度をして、ペコ〳〵の空腹を抱へて蹌けながら外へ出た。が何しろ舊の十一月で寒さは寒し、蕎麥屋一軒ない眞暗がりを蟲の這ふやうにして歸つたといふことがあつた。それを聞きこんだ一人が、忽ち惡摺りにして仲間内へ蒔き散した。名題を『成田散財大小不同損斷食堂之圖』として、扇夫が大童になつて

断食してゐる六七人の裸人形へ水をざあざあぶつかけてゐるといふ繪組のもので、惡摺りの傑作と稱された。『鳴久者評判記』の中では、實惡上々吉に載せられたものである。惡摺りといふものは大體がこんな調子の物で、樂屋落を捉へて悦に入つたものであつた。

始めは無邪氣な罪のない、惡口位であつたのが、次第に激しくなつて、終ひには一家の內情とか身分にも拘はるやうな事まで、暴露するやうになつて、弊害を生じたので、自然と立消えになつたが、これも明治の五、六年頃までは續いた。そして始めは極粗末な瓦版などであつたのが、精巧な木版で柾紙などへ刷られたものさへ出來たといふ。

仲間內での惡戯で、お互にあばき立てたのだから、誰一人として傷けられないものはなかつたが、默阿彌は一度もやられなかつたさうだ。それといふのが、一體惡摺りの題に取られるやうな失策とか妙に口立つ癖とか、又は意氣筋の色事に關した材料などが、てんで默阿彌にはなかつたからである。それほどに謹厚な人であつた。默阿彌には奇言奇行として錄すべき、逸話といふものがないと言つてよい。だから惡摺りに上されようもなかつたのである。けれども唯々一度銘々傳のやうにして、興畫會中の幅利き十六人を捉へて十六畫漢といふものが出來たが、其の中へは入れられた事がある。これは當事通人連に緣故の深かつた、畫工の柴田是眞が、李龍眠の十六羅漢を買入れたのが評判だつたから、それに准へて思ひ付いた惡摺りであつた。

其の見立ては、例へば魯文が貧乏で借倒しをよくやつたので、迦利古須選者として謳はれたり、駄洒落の名人の芳幾が、洒落發選者と崇められたやうな類であつた。默阿彌のは新羅婆裂選者となつてゐる。後に其の掛物を模寫縮像して綴つたものが出來たが、それには魯文の筆になつたと惡縁起が添はつてゐて、戲文の妙を盡したものである。默阿彌のは次のやうであつて、その人物、性行或は連中との關係が巧みに織込まれてゐる。

新羅婆裂選者は、舞臺山に新狂戲別傳を說法し玉へば、歌舞の菩薩も耳を傾け、許多の見佛凡眼を驚かせり、筆頭の妙智力神通自在にして、目前を變へる事釋迦八相を一ト目に見るが如し、業法のいとまには興書國に來り、書漢の中に列なれども、あせりて景品を得る事を要せず、唯披口說法を勤行として惡羅漢達の惡意に組せず、近く交はりて遠く退き劍呑經は開く事なき、勤身堅固の大書漢なり。

圖は菩提樹の下に端座して、左の手に筆を持ち、腕組みをしてぢつと考へ込んで、澁面作つてゐるといふ、羅漢に見立てた像であつた。

七

津藤と言ひ、三題噺と言ひ、繪合せと言ひ、遊食會と言ひ、惡摺りといふも、畢竟は同じく江戸末

悪摺、新羅婆裂尊者（一六六頁参照）

版行畫傳（一四七。三〇二頁参照）

期特有の趣味、色調に彩られたものであつた。同じ性質の根を分け萌した枝葉、集團に過ぎなかつた。且つ又其の中心人物となつた人々は、いつも同じ數人の通人に限られてゐたのである。語を換へて言へば、江戸文明に醉つて其の粹を享けた、頽廢的遊蕩兒の一群が、相を異にせる八笑人的生活を營んだに過ぎない。江戸の通客を自負し得る者で、此れらの倶樂部の洗禮を受けず、又いづれかの關門を潜らなかつた者は、一人もなかつたであらう。『隈なき影』に現はれた八十餘人の江戸ッ兒は、恐らくは其の全部であつたのかも知れない。凋落せんとする江戸趣味最後の華麗は、此の一卷に盛られたかの觀を呈してゐる。單に其の内容のみならず、數寄を凝らした體裁裝釘に於ても最後のものではなからうか。

一方江戸の世もいよ〳〵崩壞せんとし、黑船來り、井伊大老の頭飛んで、内外騷然たる安政、文久、慶應に際して、彼等は唯〻遊戲三昧に其の日を送つてゐたのである。彼等は趣味の下に集まつて、趣味の生活に耽り、喧しい田舍漢の弄する砲聲に顏を背けてゐた。江戸生粹の名殘りも、幸うじてそれらの人々によつて持ちこたへられたのである。

津藤以來、いつもさうした會に顏を出した者も少なくなかつたが、魯文、有人、芳幾、玄魚、綾岡、如皐、默阿彌などは、寧ろ御定連とも稱すべき頭目であつた。

魯文は明治二十八年に歿した戲作者の假名垣魯文のことであるのは言ふまでもないが、そのもとは狂言作者なる花笠魯介（はながさろすけ）の門人であつた。津藤が二十歳頃に預けられた竹川町の鳥羽屋に丁稚奉公をしてゐたので、津藤とは早くも相知の間であつた。默阿彌とは嘗て同じ寢釋迦堂の地内に住まつた事もあつて、早くから交際が結ばれてゐた。明治になつて、其の主宰した一人雜誌の『魯文珍寶』に默阿彌傳を物したり、『歌舞伎新報』を編輯したり、『西洋膝栗毛』なども書いた、所謂戲作者の殿將と稱せられてゐる人である。

有人は、後年『やまと新聞』にゐた條野（傳平）採菊翁の事で、同人連中では光つてゐた。綾岡輝松、梅素玄魚の兩子は戲文もよければ、手蹟がよくて版下などを引受けた。芳幾は畫工（ゑし）の一惠齋芳幾で、繪合せ其の他連中の間に行はれた繪畫は、大抵此の人の手になつたのである。猶此の他度々見受ける顏には、山閑人交來、福井扇夫、妙傳寺（西田菫波）、笠仙、角尾等。それに左樂、圓朝、柳楚談志（だんし）等があつた。

柴田是眞は丸山派に出でた畫工であるが、三題噺、繪合せ等の會にも出入したので、默阿彌とは此の頃からの知己であつた。其の藝術及び趣味に於て一致せるものゝあつた故か、交際も長く續ければ默阿彌は彼の筆になつた團扇繪や、摺物のやうな小藝術品までも愛玩してゐた。後に默阿彌の次女島が畫工としての修業を志した時には、これらの緣故上彼れの門に入つたのである。是眞は女の弟子を

入門せしめなかつたが、默阿彌との交誼上特に許諾したのだといふ。

又俳人の老鼠堂永機も、此の頃からの知己であつたが、さまで親密といふではなかつた。默阿彌にも俳句はあるが、それはたゞ義務的の役者の改名などに際して、扇面や摺物に載せたものだけに過ぎない。一つは默阿彌自身の趣味が、狂歌或は狂句の方が、より相應してゐたからであらう。

かういつた戯作者肌の通人が一團となつて、或は津藤、或は高野某、或は辻某などといふ金持の旦那を戴いて、日毎日毎に今日は何の會、明日は何の催しと遊樂に耽り趣向に耽り、倦じては花街、芝居と流し歩いてゐたのである。然し其の粹と稱し、通と呼ぶ中にも阿諛追從を事とする幇間的の風に流れて、果ては金錢物品に囚はれる場合も少なくなかつた。繪合せの開巻日にも、其の贄を盡した景物を目當に寄る者も少なくなかつたといふ。

默阿彌に取つては、津藤以來の十年間が第二の八笑人的生活であつた事は疑ふを要しない。けれども此の時には最早醒めてゐた。往にし青年時代の如くに、只管に歿頭することは出來なかつた。然しながら、一度強き酒や阿片に醉つたものは、意識しながらも魔の手に引き寄せられるが如くに、默阿彌も醒めてはゐたが、軈て中毒せる生活を離れる事も難かしかつたであらう。從つて其の連中の間に於ける、其の態度と地位とは、全く特異なるものであつたらしい。

『隈なき影』に、十三歳の若衆姿の初々しい影繪を留めてゐる、魚河岸の尾張屋の主人は――辻氏の

繪合せに毎會臨まれた人であるが、其の折の思ひ出話に——『默阿彌さんは全く飛離れてゐた方でした。眞面目で几帳面な方だつたから、默阿彌さんが見えると今までがや〳〵言つてゐた座敷内が靜まる位でした別に氣取つてすましてゐるではなし、除け者にされてゐるではなかつたが、全く別箇の人でした、會日などにも、他の人が大方集まつた時分に後れてお見えでした。茶を飲んで世間話しなどなさるやうな事もなければ、そんな事もお嫌ひで無口な方でした』と語つたが如くに、全く異つた風格を示してゐたらしい。

一つには其の人格により、又一つには狂言作者といふ本業を持つてゐたとの理由もあらうが、あらゆる誘惑から醒めた默阿彌には、最早遊蕩兒の群に入浸つて、第二の八笑人的生活を、そのままに繰返す事が許されなかつたものであらう。

第八　明治の初年

一、劇界の代替り――過渡期――二、左團次と――共に市村座を去る――『丸橋忠彌』――三、守田勘彌――新富座へ轉座――四、團十郎と時代物と――『日蓮記』――『桃山譚』――新歌舞伎十八番物――河原崎座と――『未だ早い』――五、『髪結の新三』――菊五郎と――新世話物――『三人片輪』――六、淨瑠璃、歌澤の攝取――『ざんぎりお富』――七、劇壇の獨占――錦繪に書かれた默阿彌。

一

默阿彌の作劇的生涯は、小團次の死によつて、自ら一期を劃し、作風の轉機ともなつた。がこれと同時に、時代も亦大なる旋回を遂げた、即ち慶應が明治となり、徳川幕府が滅びて王政が復古した。江戸が東京となつた。此の大なる時代の推移は、亦劇界の變轉をも促す事となつたのである。結局慶應に歿した小團次の死は、やがて默阿彌に取つても、劇界に取つても、時代其のものから觀ても、新舊兩時代の分水嶺であつた。

若手役者の出現は、前々章にも述べたが、明治二年に到つては、三人の新しく若き選手が座頭とな

つて、劇界の代替りを鮮明にした。河原崎權十郎は、權之助を襲いで市村座に、訥升は守田座に、家橘改め五世菊五郎は中村座に、それぐ座頭の地位を占めて陣頭に立つた。前の二人は同じく三十二歳で、菊五郎は二十七歳の壯年であつた。これに對して、默阿彌は五十四歳といふ年配である。年齢の關係から推しても、閲歴から見ても、團、菊、左もしくは明治劇壇との間柄が、どんなであり、又あるべきかが想像される。

默阿彌は其の時々の役者の藝風と、時代の習俗とに呼應して、芝居を書いた作者であるから、斯く役者も替り時代も移つた以上は、明治前とは別なる新作風をも示し、又其の題材の範圍も異つて來た。默阿彌に取つては、小團次の死より、其の新作風の固定せられるまで、即ち明治の前後十年間程は時代のみならず、默阿彌個人としても、最も顯著なる過渡期であつた。ここでは明治の初年より、同八年に守田座が新富町に移つて、新富座と改稱するまでの、大變換期に就いて述べたいと思ふ。

二

先代の左團次は小團次の弟子で、京阪地方を修業し廻つてゐたが、『養子に致度由を申越され』たので、元治元年に江戸へ下り、中村座、守田座と出勤してゐたが、其の二年目の五月に養父小團次に死なれたのである。時に年二十五歳で、これから彼は多大の辛苦を甞めることになつた。

名題役者にはなつてゐたが、何といつても未だ藝道修業が十分でなく、小團次の光りに掩はれてゐたのであるし、江戸へ來てからの地盤も、堅まつてゐなかつたから、養父の死は劇界よりも何處よりも、其の家庭に大なる代替りを持來らして禍をなした。死歿以來左團次が暫時休座する間に、誰も振返つて見る人もなくなつたといふ。さすが物に動ぜぬ豪放な養母琴女も、左團次を不便と思つてか、僅かなれど金子もあり、衣服持物も不自由せぬだけはある故、それを携へて故郷へ歸るようにと、離縁話を持ち出した位であつた。然し左團次は篤と考へた末、不肖ながら師命によつて、相續する事となつた以上は、便り少なき老母を忘れ、此の場を見捨てては歸られず、不器用にて役者が出來ずば、辻商人となつても、亡父の位牌所の絶えぬやうにしよう、且つは養父は氏も素性もなく、小柄で風采も揚らぬ身で、座頭までも登つたのは、一通りの苦心ではなかつたであらう。『我等も父に習ひ忍耐力、勉強心を發し、神に祈り佛に誓ひ、せめて亡父の百分の一の役者にでもならん』と決心し、其旨を告げて養母の志を飜させたのである。

かくまで窮迫せる場合には、訪れる人も途斷えたが、折々たづねたのは默阿彌であつた。默阿彌は再三再四勸めた――私がこれだけの作者になつたのは、小團次さんの餘徳に負ふ所も少くない。其の恩報じに、左團次さんをば必ず引立てるから芝居へ出してはどうかと。けれども養母は聞かなかつた十に八九は不評であらうと思ふ、それでは第一あなたにすまぬ。第二には亡父の名を汚す事になるか

らといふのであつた。然し默阿彌は、どうしてもそれをそのまま見るに忍びず、一方故小團次への情誼は、つひに最後の決心をなさしめた。慶應二年の十二月のある雪の日、押上なる詫住居をたづねて養母を說いた。今度は左團次さんを三年の間私の子の分として貰ひたいから、是非私に任して下さいと勸めたので、養母も厚く其の義心を謝して萬事は默阿彌に任せることとなつた。

（市川左團次履歷に據る）

かくて慶應三年の春から、左團次は市村座へ出勤する事となつた。その後は默阿彌も左團次の役を見る以外に、技藝の上の注意をも與へなどして約二年を經た。が、明治元年の八月に一問題が起つた其の時の興行は家橘が菊五郎を襲名し、『梅照葉錦伊達織』に仁木と小助とを勤めた時で、此二番目に大谷友右衛門（五世）の出し物として『葛の葉』が列べられた。默阿彌は此の役割りに、葛の葉は友右衛門、保名は權十郎で、與勘平をば左團次に振り當てたのである。然し此の當時はまだ〳〵藝が上達してゐなかつた故か、外側から苦情が出て、左團次では納まらず、菊五郎がすることになつた。つまり作者として割當てた、默阿彌の意思が通らない事になつたのである。左團次が容れられず、惹いては作者默阿彌の意見が容れられない場合に立到つたのだから、默阿彌は斷然引退する決心をした。

然し、どこまでも思慮深い默阿彌の事であるから、不滿の色を顏にも出さず、準備萬端を整へ、いざ初日といふ前になつて、左團次と共に出勤する事を拒んだのである。京阪へ行く積りであつたとも

傳へられる。勿論座の方からは、默阿彌に行かれては困るのだから百方手を盡したが應じなかつた。金錢に淡泊な默阿彌には、一服藥も何も効を奏さなかつた。其の興行には勿論出ず、其の後も暫時は新作もしなかつた。翌年の作者連名には、高弟勝諺藏を立作者の位置に直し。自分は肩にスケとして客座に退いてゐる。

左團次と共に引退いた默阿彌は、守田座へ迎へられた。座元の守田勘彌が、奥役の田中鶴三郎を使者に立てゝ、承諾させたのである。そこで左團次も同座へ出勤する事となり、翌年春の新作の『遠山鹿子』に、敵役の篠塚軍藤太を勤めたのが其の最初であつた。此の役は必ずしも成功したものではなかつた。けれども左團次としては、從前とは少しく異つた方面の役柄であつた。といふのは默阿彌も左團次の人となりと柄とを見て、これまでの女形や和事を止めて、立役、色敵の方が適當ではないかと考へたからであつた。果して左團次としては、其の方が適つてゐたのである。

續いて三月興行の『敷島怪談』の新作に、三浦屋の若い衆源四郎實は上總無宿の源四郎坊主といふ大役をつけた。無論荷の勝ち過ぎた役ではあつたが、評判はよかつた。二幕目の吉原三浦屋の場で、傾城の敷島を遣手のお爪と共に、枕捜しの罪に陷して、責殺す所があつたが、敷島が川之助、お爪が仲藏といふ、藝にかけてはやかましい名優揃ひなので、源四郎が頻りに責めてゐる舞臺の上で、皮肉な川之助と仲藏とが、毎日左團次に口小言を列べて惡態を吐いた。責める源四郎が責められたといふ

話がある。然しかういふ藝のよい役者に虐められたのが、左團次には藥となつたのである。

斯くして左團次は、次第に大役がつくやうになつて、翌明治三年の三月になつて『丸橋忠彌』が書下された。默阿彌も左團次を引受けてから、三年餘になつたので、試驗をするやうな心持で『慶安太平記』のどう眞中の眼目の場へ、左團次の一人舞臺をおいて見たのである。一座は訥升、芝翫、紫若仲藏といふ先輩ばかりであつたから、その事が分るや、役者の方から又もや苦情が出た。けれども默阿彌は、今度は是非やらして見たいのだから、好意を以て附き合つて貰ひたいと說き、訥升や仲藏を宥めて納めた。左團次にもよく其の旨を言ひ含めた。今度不評に終るならば、再び座を引かねばならぬ、さうすれば、江戶の地に留まる事も覺束ない。十分努力するやうにと警しめた。左團次も大決心を以て、初日を明けたが、仕合せにも評判はよかつた。左團次は初日の翌朝默阿彌の宅へ來て、あの舞臺ではどうでございませうと忠彌に就いての批評を求めると、默阿彌は頭を振つて、どうもまだいけないと言ひながら奥へ連れて行き襖をしめて、藝の訂正を出し、果ては默阿彌が自分で立つて、科に對する注意までも與へたと傳へられる。二日目の翌朝にもさうで、三日目にもさうして來ては注意された。五日目になつて始めて默阿彌が『左團次さん今日はようござんすよ』と言はれたさうであるが、其の時の嬉しさといつたら、口に盡せなかつたと後に話したといふ。

やがて二人の努力と、勉强とは明らかになつた。芝居中で左團次の忠彌が第一等の評判になつた。

今日でも、左團次と言へば忠彌を聯想し、忠彌を想へば左團次の忠彌が浮ぶ位に賣込んだ、その趣向は此處にあつた、一座した訥升には金井の浪宅、芝翫には有馬の溫泉と、それぞれの持場を書いてはあつたが、左團次の忠彌が四幕目、江戸城外の御堀端で水の深さを計る場面には及ばなかつた。此の場は前に仲藏の弓師藤四郎、後に訥升の伊豆守が出るだけで、殆んど左團次の一人舞臺であつた。役の性格と左團次の人物とが、よく一致適合して實に無類の出來であつた。忠彌の捕はれも、同じ作中に再三繰返される立廻りを避けて、非常に激しい寫實的のものであつた。これも評がよくて、左團次風のキビキビした立廻りの源になつたのである。お岩稻荷に大願をかけて、二十二日には斷食までした苦心は、効を奏して大成功であつた。卽ちまさしく唯一の出世藝になつた。翌年からは權之助の座頭に對して、書出しまで進んだ。

　左團次を引受けてから四年目に、書出しまで進ませ、立派な役者に仕立て上げたので、默阿彌は左團次を養母へ返した。此の出世に就ては、無論左團次の熱心もあつたが默阿彌の丹精に依る所が多かつた。默阿彌も小團次との情誼を、忘れない人になれたのである。勿論左團次にもそれだけの資格はあつた、柄がよくて、押出しが立派で、派手で、調子のよいといふ所もあつたからであらう。が、忠彌以後にも默阿彌は、彼れの爲めに絶えず儲け役を見て新作してゐる。假令中心にならなくとも、何處かで仕榮えのする役が付いた。『忠臣藏十二時』の小山田庄左衛門、『鏡山』の安宅鄕右衛門、『宇都宮騷

動』の石川八右衛門の如きがさうである。又『大盃』のやうに中幕様の出し物も出來た。左團次は後年その生涯の賜物として、第一は養母の恩、第二は默阿彌の恩、第三は守田勘彌の恩を蒙むつた、とかう算へてゐる。

左團次も亦其の恩義を忘れなかつた。默阿彌歿後にはよく遺族を訪問し、著作權に關する訴訟の起つた時には、一箇の座主として、他と獨立して聲援した事もある。

三

かの新富座を經營した、興行師としての守田勘彌は、明治劇壇に忘るべからざる名前であるが、默阿彌との關係には甚だ密接なるものがある。

此の十二代目勘彌は、もと市村座の帳元として敏腕を揮つた、中村翫左衛門の次男で、幼名は壽作と呼んだ。翫左衛門は才物で、芝居には役者も必要だが、作者も大切だと信じてゐた人で、嘗て默阿彌を市村座へ迎へたのも此の人で、そもそもの始めから、宿縁があつたのである。守田座の再興は確定したが、適當な人材の得られない所から、翫左衛門に經營を依賴した時に、養子として自分の子を貰つてくれるなら、との條件で承諾したのである。其の結果はやがて壽作が勘彌を襲ぐ事となつたのである。

然るに實父は文久三年六月に逝き、養父は同年の十一月に相次いで他界したので、當年僅に十八歳の勘彌は、獨力で座元の事務を見なくてはならなかつた。此の勘彌が才物翫左衛門の子であるから、默阿彌の技倆に信頼し、協同者となす機會を窺つてゐた。小團次が來た時に、スケとして默阿彌を迎へたのを機會に、守田座との深き緣故は、結ばれ始めたのである。明治元年の二月（田之助のために『傾城重の井』を書いた時）からは、番附へ載るにもスケが取れて、別格へ門弟と共に、作者連名を出すまでになつた。當時の守田座を支配してゐた作者は、狂言堂左交と四世櫻田治助とであつたから、默阿彌の對うに立つべくもなかつたであらう。

それかあらぬか、左團次の身を依頼した際にも快く承引したし、又例の津藤が明治三年に歸府した際にも、默阿彌が舊交を思つて、スケ梅森かういとして番附へ載せたのも、市村座ではなくして守田座であつた。斯の如くに、明治以降は殆ど守田座（後の新富座）に、默阿彌の主力が注がれる事になるのであるが、是れは卽ち勘彌の才と、默阿彌の技倆とが、其意氣と共に相投合して、信じ合つた結果に外ならぬ。默阿彌が第二の市村座時代、卽ち小團次時代に對する新富座時代といふ全盛を現出せしめたのは、無論役者も揃つた點もあらうが、其の最も大なる幇助者として、勘彌のあつた事を見のがす譯にはいかない。

勘彌は時勢の推移と劇場との關係を、早くも見て取つた。三座が江戸の一隅、猿若町にかたまつて

ゐるのは、非常の不得策である。先づ闘中に入る者こそ王たるべしと思つたので、明治二年の頃から決心の臍を堅めたのである。市中に適當な場所を得んが爲めに供も連れず、密かに物色して歩いた。すると其の間に、火災に遭つた島原が、今後市中に遊廓の許されない爲め、燒原になつたままでゐると聞き、直様手をかけ、新富町の地主とも計り官の許可を得た。而して時を移さず新築に取りかかつた。かくて猿若町での興行は、明治五年の五月を以て打切り、同年十月十三日に新富町の守田座として、開場式を行つた。狂言は一番目は『太閤記』で、二番目が默阿彌の『ざんぎりお富』であつた。

勘彌が開場式を擧げるまでの苦心は、一通りでなかつた、茶屋からも反對されたが、魚河岸からは猛烈な反對を受けて、一時は絶交しなくてはならぬやうになり、其の後援も望まれなかつた。然し大なる抱負と決心とを以て、敢て此の大改革を斷行したのは、勘彌の明であつた。現在に於ても舊慣を尊ぶ芝居界に於て、而も明治の初年に、斯る事を敢てなさんとするは、破天荒の企てであつた。幾多の困難を冒す覺悟ならでは出來ない事であつた。時には生命に拘はるやうな危險にも遭遇した。時の人は、唯目前の利を見るのみであつたから、何れも危んで反對した。けれどもいよ／＼成功して、薄暗い蠟燭の代りに煌々たる瓦斯の光りの輝き出づるのを見るに及んでは、夢魔から醒めた人のやうに、何れも驚きの目を見張り、暫くは憮然とし、やがて漸く感謝の意を表するに到つた。

勘彌は當時の覺醒せる人物の一人であつた。劇場裡にゐて、而も新智識を敏くも吸收した人であつ

た。劇壇の明治維新を行つたのは、殆ど彼一人の力と言つてよい。すべての纏綿せる情弊を一掃して時尚に適合する新しい芝居を起さうといふ堅い志を持つてゐたらしい。其の全部が其志圖通りに行かなかつたにしても、着々其の實を擧げようと努めたことは事實である。建築其のものの様式も全然新式にして、自分一個の創案により、長谷川勘兵衛と共に、繪圖まで引いたのである。また芝居の保護者たる魚河岸、新場と關係を斷つにも躊躇せず、三座の割振り制度をも破壞し、小は樽を徹し、客引とか『合羽』の如きをも廢したなど、革新され改良された點は、枚擧に遑あらしめぬ。要するに、劇界は勘彌の力によりて、また守田座の新富町移轉によつて、轉回されたのである。彼は劇壇の破壞者であると共に、新しく建設もしたる劇壇の恩人であつた。

其の勘彌は後年作者となつて、默阿彌の門に入り古河新水と號した位、默阿彌の後半生とは實に密接な關係があつた。作者としての默阿彌の轉機も、實に勘彌のなせる大革命に依頼する所が多かつたであらう。

四

默阿彌が明治前に作した八分までは、世話物であつたが、明治以後になつて時代物が生れ始め、兩者は略ゝ並行するやうになつた。さういふ形勢となつたには、第一に役者との關係があり、第二に時

勢との關係もあつた。

職業的脚本家の常として、當の役者を對象として書くのだから、小團次や家橘、田之助を中心とした時代には、世話物が多く、明治に入つて九代目團十郎と菊五郎とが、其の中心的優人となるに及んで、時代物と世話物とが並行するやうになつたのである。即ち一面から言へば、時代物は團十郎によつて引出されたかの觀もある。彼れの藝風と要求とを熟知して、時代物に新しき試みをなし、活歷にまで及んだのである。雜學にこそ長けてゐたれ、默阿彌とても、當時の狂言作者の御多分に漏れず、正式の系統的の歷史知識や、正式の有職故實は缺如してゐたところなので、王政復古時代の歷史劇としては、餘りに甚しく事實と矛盾するやうな失も折々あつたが、それは學者側から見た話で、舞臺上に於ては、尙依然として、成功した作と見做してよいものが幾らもあつた。

かくて權十郎は、養父權之助が橫死したので、明治二年三月に七世權之助を相續し、後三升となり而して九代目市川團十郎と改名するのだが、此の名前が變化して、やがて固定したと同樣に、其の藝風も、養父の死からは絕えず進步し、其の特色を發輝しつつ、六七年を經て團十郎となるまでに固定したかのやうに思はれる。默阿彌は彼れと呼應しつつ、又其の作者として、唯一の助成者であつた。

『日蓮記』は明治二年の十月に新作されたが、此の作の日蓮に扮したのが、そもそも九代目式藝風を暗示するの最初であつた。日蓮が伊豆の伊東を脫れて、相州米ヶ濱なる信者の家に忍ぶ中、北條氏の

手に捕はれて龍ノ口の難に遭ひ、佐渡に流される。佐渡は塚原の庵室に籠ること四年、その年も末なる雪の日に、徒弟日朗が赦免状を携へて來り、これまで世話になつた阿佛坊と千日女に別れを告げて、京に歸るといふまでの事を脚色したものであつた。藝と作とは評判がよかつたが、見物は入らなかつた。舞臺が一般に寂しいのと、龍ノ口で刀の折れると言つたやうな奇蹟を取入れなかつたが爲め、祖師の講中見物から反感を買つたのとで、不入りであつた。然し眼目の塚原庵室の場は、作も藝も共に、後年の活歷臭を帶んだものであつた。唯見る雪に掩はれた連山に取卷かれ、微かに北國の海を望む庵室にゐる日蓮は、殆ど何の動作もなく、寫實的であつた。學者的口吻を以て白鳥の說明や『一心慾見物』の說明をし、百姓夫婦の世話を受けながら粥を啜るのである。色彩としては龍神の誘惑といつたやうな、傳奇物語が添つてゐるだけで、寂しい澁いものであつた。一座の役者は例の三十郎、菊次郎、半四郎及後の阪東家橘等であつたから、日蓮の團十郎が作り出す空氣を攪亂もせず、まとまつた舞臺面を見せたであらうと想像される。

彥三郎が『團十郎は動かねえから困る』とこぼしたのは、團十郎の藝風を直截に評した言葉であるが、彼は身體の動作よりも、寧ろ重厚な科と名調子の自由自在なる白廻しとを以て、役の精神なり、情調なりを傳へようとしたのである。所謂腹藝であつた。實父の海老藏などにも、さうした傾向は認められてゐたが、彼れに到つてそれが明らかにせられたらしい。『日蓮記』に始まる歷史劇の多くも、

さうした藝風に應ずるものであつた。『竹中問答』や、後の『中山問答』のやうに、『生きた講釋』とまで非難された極端なものも出來た。

また彼れは此の頃から、市川家十八番物に倣つた、新歌舞伎十八番物を演じ、默阿彌の手によつて續續新作された。勇武絶倫の鬼將軍が、男泣きに泣くといふ斬新な場面を捉へた『桃山譚』（地震加藤）や、義經記の中へ出來た『義經腰越状』などがそれであつた。これ等を外にしては、小宮山內膳を書いた『恭風土記』があり『忠臣藏十二時』がある。特に好評を得たのは、明治六年三月に新作上場された『太鼓音智勇三略』であつた『濱松城內太鼓櫓の場』で、德川方が武田勢に追ひつめられ、意氣沮喪して殆ど討死と決した場合に、智略に富む酒井左衛門が、生醉となつて君を諫め將士を勵まし、勇ましくも太鼓を打つて氣勢を示し、圍みを解かしむるといふ所が殊によかつた。菊五郎との仲直りも人氣を集め、また彼れ自身も『節分や太鼓にあたる豆の音』といふ句を作つて、ひそかに期した通りに成功した。

越えて明治七年七月に、團十郎は芝の新堀へ河原崎座を新築し、開場に際して九代目を襲いだ。此の襲名は、もと彼れが河原崎家の養子となつた一條から、さま〴〵な事情を經て、さうなつたのだから、若し襲名に就いて苦情が起つたならば、外界の方は魚河岸の尾寅が引受け、芝居內や役者から起つたならば、默阿彌が引受けるといふ事に相談一決して實行せられた。して見れば、彼れの改名に際

しても、重大な關係があつたのである。其の翌年に、仔細あつて劇界を離れてゐた嵐璃鶴が、店を出し直すに就て、默阿彌が相談を受けたので口入をし、改めて團十郎の弟子となり、屋號も川崎屋、市川權十郎といふ立派な名前を許したのも、さういふ情實があつたからである。

河原崎座開場の第一の興行も、默阿彌の新作で、太平記の兒島高德や楠正成を書いた『新舞臺巖楠』であつた。茲に到つて、いよ／＼彼れの特色を明らかにして、自然を尊び寫實を重んじた結果、盡くなり過ぎた。時代よりも一歩先へ行つた姿で、評判は甚だよくなかつた。彼れはこれより前にも『眞田幸村』の時に、木無しの幕を見せたが、楠の時には又一倍であつた。即ち、二幕目の美作國境院庄の安在所の雨の闇に、團十郎の兒島高德が、無造作に上手から出て來て櫻の木を削り詩を書く、其處へ塗下駄をかたり／＼とさせて六條忠顯（訥升）が、繪笠を持つて出る。高德は書終つて悠々と向うへ入る。忠顯は詩を讀み、ハテ賴もしきといふ思入で頷き、見送ると言つた風の情景で、お約束の書面の見得などは、毛筋程もなかつた。

然し斯ういふ破格なやり方をして、團十郎は獨り悦に入つてゐたが、世間の不評を耳にして『まだ早いかな』と述懷したさうである。未だ此時には一般に了解されなかつたのだが、次の新富座時代に到つて、さうした傾向が一層明白になり、世間もそれを認めるに到つたのである。明治の初年には、團十郎も自己の天職を漸くにして捜し當てたばかりで、極端に趨り、作者默阿彌も亦一新方面を開拓

した間際で、適當な作が得られなかつたのかも知れない。

五

『髮結の新三』は、明治六年三月に中村座で、菊五郎の爲めに書下したものだが、非常に評判がよかつた。

故三木竹二氏は明治廿六年五月の劇評中で左の如く述べてゐる。

故默阿彌老人が咄定の方から種を取られしもの故、車力の善八が雌鷄すすめて雄雞時をつくるといふやうな事を、繰返していふなどは、今でも素的な場當りはすれど、ちとくすぐりに近くて受けにくし。しかし忠七をそそのかしておいて、うつてかはつてつらくあたり、源七を馬鹿丁寧にしておいて、ぐつとあとからさげすむあたりの新三が性根、又その上をこして、初手は飴をなめさせておいて、急に苦手を出してぐつと言はする大屋の手際などは、この社會の人情を模し出して妙し。取分け、例の五兩に十兩で十五兩だよといふ件、鰹の片身は貰つて行くよといふ件など、實に妙といふべし。

三題噺を脚色した『魚屋の茶碗』も、略ゝ同じ題材で、江戸の遊人根性を描いて、江戸ッ兒の胸を躍

らせたものである。此の兩作は菊五郎と仲藏とが中心であつた。此の他にも實錄の『小堀政談』或はめ組の喧嘩を當てこんだ『戀慕相撲春顏觸』などが、菊五郎中心に作られた。

田之助は『おしづ禮三』や『敷島怪談』に腕を揮つた以後、惡疾の爲めに舞臺に出られなくなつたから、明治以後に出來た世話物は、多く菊五郎中心であつた。

守田座が新富町に移つた翌六年の十一月に『東京日々新聞』といふ世話物が、二番日に新作された此のめづらしい、大膽な名題だけを見ても、其の時代を捉へた、新しいものである事を證明してゐるではないか。『御見物の眉を開く新狂言』だと、語りの中に默阿彌も其の抱負を述べてゐる。材料をば此の頃創刊された『東京日日新聞』の雜報から得たといふ趣向で、廢藩置縣の結果、明治の初年を通じて哀れなる一階級をなした浪人を捉へたものである。

此の作は彥三郎が中心で、大酒家で浪人者の鳥越甚内に扮したが、一般に評判立たず、唯左團次の人力車夫正直長次がよかつたに留まつたといふ。時代物に得意なる彥三郎にかういふ世話物などが適さなかつたのも一つの理由であらう。

翌年の七月には、同じ樣式の『三人片輪』が新作された。三幕八場で次のやうな筋である。

○深川佐賀町なる、搗米屋の店先きでは、夜の十時過ぎになつても、主人の仙右衞門が歸らないので、女房のおむつと息子の仙太郎とが、話も途切れて寂しく本を讀んでゐる所へ、裏の佐二

郎兵衞が來た。手に御布告書を貼りつけた板を持つて、隣り廻しに來たが、何の事だか讀めないと言ふ。それを仙太郎が學校所へ上つてゐるお蔭で、讀んでやる。『學校へは是非やるものだ』と感服して、佐二郎兵衞は歸る。仙右衞門は少し酒に醉つた氣味で歸つて來た。『今日はまだ三日だが、先ンの（舊）曆ちやあ廿日前に當ると見えて、月が上つた』などと呟きながら家へ入るが、近頃相場に負けたので、ぶつぶつ口小言をならべながら、酒の燗をつけさせ、妻子を奥へ追ひやり手酌で飲み、やがて手枕して寐る。そこへ『五十日かづら、そほろなる無地紋付の着流し、山岡頭巾を冠り、侍と見える扮裝』で、盗坊に入つたのが秋津豐である。生憎と、散ばつてゐた繩切につまづいて轉ぶので、仙右衞門が目を覺し、忽ちに取つて抑へて嚴しく問ひ訊す。秋津は士分の者で、浪人して零落したので、御扶持方は借財の爲めに奪はれ、今は貧苦に迫つて、母を養ふ飯米さへも得難くなつた詰りの、ついした出來心故、必ず改心する程に何卒許してくれと、平に詫入る。けれども邪險な仙右衞門は、容易に聞入れず、屯所に訴へ出なければならぬとわめき立てる。此の聲を聞きつけて仙太郎も起き出で來て、父を諫め、修身敎授の時に、先生が敎へて下すつた話に、フレデリック大王が、或る時お側の少年が居睡りしてゐるのに眼を付け、ふと見ると、衣兜から手紙が覗いてゐるので取つて見ると、それは母親から送金の禮によこした狀であつたので、王は少年の孝心厚きに感じ、其の罪も咎めず、却つて金貨を衣兜の中にそつと入れてや

つたといふ話を繰返して、父に盗人の孝心に免じ、罪を許してやつて貰ふ。秋津も其の志しに感じて、身分を明かす。するとそれがおむつの主筋で、乳兄弟だと分かる。

○二幕目は、久保町の牛肉屋で、四五人の者ががや〳〵と罵しり騒ぎながら、牛鍋をつついてゐる。その中に盛り場稼ぎのいかもの師天ぷら銀次が交つてゐる。此奴は數日前に新開町の洗湯の二階で、相づりの喧嘩をしてそのどさくさまぎれに、二階番のお園と出來てゐる絹屋の息子六三の蟇口と、安くふんでも二百兩の直打はある、藤鎖付きの金側時計とを盗んだ奴で、時計は仲間の奴にさらはれて河中に落したが、持つてゐた蟇口を來合せた屑屋に賣る。屑屋は往來買ひが出來ないから、住所を言つてくれと言ふので、銀次は牛肉屋の五郎七にして置けと言つて、五郎七には事後承諾にさせる。

次の場は、比丘尼橋の理髪床で、中窓硝子の障子で、棚には香水の瓶、苅込みの鋏をかけてあり青ペンキ塗りの西洋風の床店で、書生羽織の男が苅つて貰つてゐるといふハシリの舞臺面。玆へ先刻の屑屋が來て、此の蟇口を買つてはどうかと勸めるのを、主人の佐吉が見て思當り、妹のお園に鑑定させると、まさしく六三さんが盗られたあの品だと言ふ。賣主を確めると、五郎七だといふので佐吉は掛合に行く。其の跡へ、二人の惡漢に引き立てられて來たのが、盲目になつた仙右衛門である。折よく居合せた秋津が、今はある店主にもなつた身分故、合力して身の上話しを

聞けば、『斯く兩眼ともつぶれましたも年頃致す米屋の科、上より定まる一升の桝へ一升計らねばならぬ家業を手の先きで素人衆には見えませぬが、一斗の米を九升五合升目を盗む計り方』をし不正直をした罪で、かく天の御罰を蒙り貧乏の末、俄盲目になつたのだと懺悔する。秋津は舊恩を忘れず、十圓札を一枚惠み、女房のおむつに住所を告げて去る。仙太郎は五郎七の周旋で、ある測量技師に從つて北海道へ行つたぎり何の音沙汰もないので、仙右衛門も心配してゐた所へ、蟇口の一件を聞き、それでは彼奴が近頃よくある手で、異國へ賣とばしたのではないかと疑ひ、これも五郎七に掛合はうとなつて走り行く。所が、牛肉屋の五郎七は、瘖の閉ぢた故か口が利けないので、床屋の左吉に問ひつめられても返事が出來ず、銀次の事を明かしもならずに、困つてゐると、仙右衛門も躍り込んで來て、仙太郎の事を詰り、結局は二人して五郎七に繩をかけ、屯所へ引立てる。

○三幕目、芝新網の裏長家で、仙右衛門が身の因果を嘆いてゐる所へ、仙太郎が今はざんぎりかづら、洋服、靴、といふ姿で逢ひに來る。昨夕横濱へ着船して十時間の暇を得たから汽車に乘つてたづねに來たと言ひ、金をそつとおいて歸る。やがての事に歸宅したおむつが、息子に逢ひたいといふので、新橋ステンショへ來て見ると、發車後で、すご〳〵と歸途に、一緒に來た仙右衛門は築地の海岸まで來ると、秋津より惠まれた眞珠の効で、兩眼開き、又その時大雷雨にうた

れたので、左右の耳が聞えるやうになる。其處へ來合せた五郎七は、銀次の自首で萬事好都合に運んだと聞き、ほつと安心の胸なで下す拍子に疳が解けて、これも口が利けるやうになるといふ筋。三人の片輪がなほり、目出度く大團圓となる。

此の作に就いては作者の見た事實があつた。その頃はまだ默阿彌は淺草の地内にゐたので、二階の書齋から階下へ降りようと思つて、階子の口まで出ると、ちやうど米屋が米を入れに來てゐる。降り口に立つて見るともなしに見下すと、桝で量る度に、左の拇指を中に入れて、それだけづつ量目を胡麻かしてゐる。これを見た作者は、『米は五穀の隨一であるのに、こんな不正をするといふのは、冥加のつきた奴だ』と嘆息して、ふと胸に浮んだのが此の作の縱糸であつた。これに當時の世態を穿つ横糸を通して編み出したのが、此の『三人片輪』一篇であつた。

これらの『東京日新聞』『三人片輪』等の、所謂散切物は、前々の世話物とは全く異なつた社會を取扱つたものである。方法も形式も同じであつたが、材料にした世界が異なつてゐた。江戸の社會にあらずして明治の社會で、皮相ながらも新時代の世相の片影を捉へたものであつた。

以前にも大切淨瑠璃の中などには、寫眞の器械を持出して、寫眞の滑稽を見せる『寫眞の九一』があり郵便制度の出來た年には、それを直に取入れて、役者や作者を面喰はせた話もある。が、此の兩作に至つて、それら新文明の特產物が、剩す所なく芝居に輸入された觀がある。新聞紙、電信、煉瓦

堺の屯所、裁判所、異人館の峙つ神戸港、人力車。蒸汽船があり、牛肉屋、散髮屋が用ひられてゐる。小道具、持物に、シャップ、金鎖りの時計、紙幣、ラムプ、ブリキに入れた石鹸等が列べられる。英語を舞臺で使はせたのは、明治のごくはじめからである。

後年中川重麗といふ人が、シルレルの『ウィルヘルム、テル』を譯して出版した時、序文を默阿彌に求めたが、其中に『江湖を一つの演劇とせば、明治維新の新舞臺、王政復古の大仕掛に、金張附の御殿場もペンキ塗の冠木門と替る道具に來る年毎に、古きを捨てゝ新趣向の文明進歩に目先を變へ』といふ一節があつたが、此の語は轉じて、夫子自身の態度を自ら說明してゐるやうでもある。

また、單なる寫實にとどまるのであらうが、此の時分到る處に呼號せられてゐた、四民平等の思想も述べられてある。『武士も大小差さず權威を捨て、町人と貴賤上下のへだてなく』とか『武家も町人も、一體ではござりませぬか』などと會話の中にある。言葉にも『嚢中錢なし』だの『お頭さへも西洋風に開化なされて』だのと言はせて、見物人を悅ばせた。小學校の生徒に、フレデリッキ大王の敎訓談を、舞臺の上で復習させたなどは、明治六、七年の事としては、新らしい試みであつたと言はねばならぬ。

斯く默阿彌が年を次いで試みた、新樣式の二作は、共に餘り苦心の割合に世評は芳しくなかつた。『髮結の新三』や『魚屋の茶碗』には到底及ぶべくもなかつた。それは恰も、團十郎の試みた澁い時代

物が世間に迎へられなかつたのと、全く同様の現象にほかならぬ。

團十郎の藝が、まだ歡迎されなかつたのも、默阿彌の新世話物が、人氣に投じなかつたのも、それが時人の好尚にまだ適合しないので、理解されなかつたからであらう。時代物では役者の方が先で、新世話物では、作者の方が進んでゐたものと想はれる。二人ともに、此の冒險的の新方面開拓には、一應は失敗したと言ふ方が當つてゐる、けれども三四年を出ですして、團十郎の演じた『重盛諫言』や、默阿彌の書いた『孝子善吉』は世間に理解され迎へられた。それこれ思ひ合されるは、守田勘彌が新富町へ移轉する時に怨訴した芝居茶屋の女房が、開業してから悅喜したのと同じ事で、大變革期には有勝ちのことであつた。

六

唄物、淨瑠璃も前期を承けて、清元が最も多く、常磐津、富本、長唄等もあつた。仲藏の藪井竹庵が、義太夫の女師匠を手に入れようと思つて、忘れ薬を用ひての清元淨瑠璃『三國一國妙藥寄』は、その最も人に知られた作である。又其の頃の流行をそのまゝ取つた、輕い狂言淨瑠璃の中には、『唐人の宙乘り』、『寫眞の九一』、『熊遣ひ』などがあつた。特筆すべきは、初めて歌澤を取入れて、新たなる劇場音樂として用ひた事である。前に默阿彌が新

内から出た吾妻路連中を、始めて芝居に使つた事は述べたが、歌澤を作中に入れたのも彼の創意であつた。

明治三年に書下した『慶安太平記』の五幕目有馬溫泉の場に、芝翫の八右衛門と紫若の湯女との色合に『濡浴松藤浪』を使つて評判がよかつた。此の後『梅暦』にも用ひたが、『ざんぎりお富』の中に使つたのが、殊によく内容と一致してゐた。

『ざんぎりお富』は、『ほつれし髪をかきかへた浮名の横櫛』で、坊主與三とざんぎりお富が美人局をして、呉服屋の若旦那但馬屋清七をゆするといふ筋のものである。その發端が玄冶店の妾宅で、ふと通りかかつた清七が女中に水をかけられたのが縁の端となり、お富に座敷へ上げられ、一猪口呑みさした所を、坊主與三に見咎められるといふ場があつた。此處の色合に歌澤を用ひたのである。『風に寄り添ふ男へし女郎花』と角書があつて『黄色露濡衣』といふ名題であつた。『打水に殘る暑さも何處へやら、軒の簾に波うちて、暮れぬ先から月影を、宿す小庭のにはたずみ……誰をまねくかまねくか誰を、尾花の露のばら〳〵と、風に鳴子の切手の口……いつしか空も吹晴れて、雲間を洩れる月の影、ぞつと素肌に風涼し』といふ文句の切れで、お富と清七がぢつと顏見合せ、氣味合の思入になるのであるが、仇つぼい歌澤に伴うて、役者は美しい半四郎と、同じくやはらかい、ふつくりとした中村翫雀とであつたから、あつさりと意氣な情調を、舞臺に漲らすことが出來た。

けれども吾妻路に於ても同樣であるが、特に歌澤は本來が端唄から出た輕くて調子の低いものであるから、舞臺の音樂としては、永續的の性質を持たなかつた。それ故歌澤は、用ひても極く短かい間で、隣から端唄が聞えると言つた趣向位にとどまつたのである。

七

明治の初年は、實に日本全體、劇壇全體の革命期であつたと共に、默阿彌にも新作風の曙光のほの見えた時代であつた。

その七八年間に、默阿彌の出勤した座を算へて見ると、其の主力を注ぐ守田座、市村座はもとより中村座へも菊五郎の出勤に就いて行つた。明治六年に新築された澤村座へも行けば、河原崎座は勿論其の手中にあつた。而して其の各々に於て、相當の仕事をしてゐる。かうして默阿彌は殆んど東京の各座を獨占するの狀を示した。が其の事實を最もよく證明したものは、其の頃に出來た見立錦繪の『俳優四百四病』であらう。未だ六世團藏や鰕藏が生きてをり、半四郎の葉若時代の事であるから、多分明治三四年の出版であらう。

三枚續きの物で、お約束の木戶口に、『諸病治療 河竹其水』とした札が掛つてゐる。中央の机に、片手を置いて、座布團の上に乘つてゐる默阿彌は『役者療治法』といふ正本を開いて、顏を撫うてゐる。す

るとそれを取巻いた役者には、權之助、菊五郎、芝翫、九藏、廣次、左團次がをり、年寄株は一團になつて菊次郎、仲藏、三十郎等が居る。相中役者の吉六、門三、雁八などといふ連中が、下つた眼尻を上げて貰ひたさうな科をしたり、鏡と睨めツくらして、口を小さく鼻を高くして貰らひたいなどと呟いてゐる。權之助は煙草をふかしながら『もう身體は大丈夫だが、一トきりぱつと發しると好いとおつしやるが、兎角おれは賑やか嫌ひ故、藥も苦くねえ、澁いのにしてえものだ』と依賴してゐる。芝翫も『おれは記憶が悪いから共の積りで』と言つてゐる。左團次が『おらァ所詮こつちのものぢやあねえと思つたが、先生には御異見、お袋にまで諫じられ、そこで利かん氣になり藥を飲んだお蔭に大丈夫になり百まで生きさうだ。なんでも辛抱が肝腎々々』と述懐してゐるのも、彼れ自身を諷したもの。木戸の外には、田之助が足無しになつて出られないので、駕籠から半身出してゐる。附添つて來た兄の訥升が『お前の足をついで貰ふやうに願ふから、待つておいでよ』と言ふと、田之助が負け嫌ひの氣性を出して『イエ／＼、わたしは足がなくつても大丈夫だが、お前こそしつかりして、物忘れをせぬやうなお藥を、お貰ひなさるがよいわいなァ』と言つてゐるのも面白い。

つまり此の繪は、默阿彌が如何に役者の人を見て、芝居を書くの能力を持つてゐたか、又明治の初年にどんな地位であつたかをも、語つてゐるものであらう。小團次との場合にも、役者の缺を補ふに作の力を以てし、役者は又作の缺を補つてゐた事を述べたが、明治以後に到つては只管に役者々々の

入を見、柄を見、特徴を呑込んで筆を執るやうになつたので、自然かういふ錦繪が作られたのであらう。新作を獨占し、すべての役者を生かすも殺すも、其の筆端の、匙加減にあつたといふやうな有様がほのめかされてゐる。

また、此の時代より少しおくれて出版された、『東京愡橋名俳優競』を見ると、大關が菊五郎で兩國橋、關脇が宗十郎で京橋、左團次が江戸橋で小結、團十郎は勸進元で六郷の鐵橋、默阿彌は團十郎と並べて『差添、是より振出し日本橋』としてある。此の差添役として日本橋に見立てられた名譽も、默阿彌が此の頃に於て持つてゐた所と考へられる。

今後の活動が、主に團十郎、菊五郎を中心としての差添役であつたことを思ひ合すれば、此の番附もあながち不相應ではなかつた。

第九　圓熟期

一、新富座の全盛——歌舞伎劇最後の光輝——二、市村座時代との比較——成熟期と圓熟期と——三、世話物——菊五郎、左團次と——『孝子の善吉』——『霜夜の鐘』——『河内山と直侍』——四、時代物——團十郎と「活歷」と——『重盛諫言』——『茶臼山』——『重忠討死』——明治史の劇化——『西南戰記』——五、御家物——彥三郎と——『大岡天一坊』——『黃門記』と『鏡山』——半四郎と——六、西洋熱と默阿彌と——官憲との交涉——勸善懲惡——學海居士と櫻癡居士と西洋劇——七、趣味の變遷——『土蜘蛛』——淨瑠璃物——八、隱退して默阿彌となる——『忍塚』——一世一代——『島衞』——『引しほ』

一

守田座が新富町へ引けた時の座頭は、團十郎（當時の權之助）であつた。けれども彼れが魚河岸の反對に逢つて、一興行だけで去つた後は、彥三郎が座頭に据つた。其の間に新富座と改稱し、明治九年に燒失するに及んで、彥三郎は上方に去り、これより少し以前から彼れに一歩下つて出勤してゐた

六十三歳燕尾服の寫眞像

六十歳當姿の寫眞像

團十郎が再び中心となつた。明治十年の『黄門記』からは、團十郎、菊五郎、左團次、半四郎及び宗十郎、仲藏といふ名優揃ひの顏觸れが定まつて、此の顏の續く間は新富座が榮えたのである。

所謂新富座時代と呼ばれた、歌舞伎劇最後の全盛は、つまり新富町に引けてから、默阿彌が退隱する明治十四五年頃までの十年間に外ならない。何にしろ劇壇の諸葛孔明と呼ばれた大策士守田勘彌が敏腕を揮つて目ぼしい役者といふ役者を集めて、其の頃芝居と言へば、新富座一つ限りのやうな觀あらしめたのである。此の間に立つて役者は何度入替つても、相手變れど主替らずで、常に同じき軍師の地位を占めてゐたのは默阿彌であつた。默阿彌は大一座を控へて、修練し盡した狂言作者としての技倆を、縱横に精力的に活用したのである。役者が揃ひ、それに應じた作者があり、これを統一するに座元の守田勘彌は、興行師としてのみならず芝居全般に通じた敏腕家、と斯う三拍子揃ひに揃つたから、あのやうな全盛時代、黄金時代を現出せしめたのであつた。各の役者に取り、勘彌一個に取つても亦默阿彌自身に取つても、それが眞の黄金時代であつた事を想はしめる。

新富町の十年間は、實に純粹なる歌舞伎劇の最後の光輝であつた。歌舞伎劇に於けるすべての藝と藝風及作物とが、渾融せられた時代と言つてよからう。然しながら其の最後の光輝中には、同時に、他の新しきものが暗示された。即ち自然主義的劇術に因由する『活歷』が化育され、文士學者が侵入してさまぐの感化や影響を及ほし始めた時代だからである。

四

默阿彌はいつも坦々たる路を歩んだ人であるから、一度名を成した後は、絶えず順境に置かれたのであるが、殊に際立つて華やかな時代が二つある。前の市村座時代と此の新富座時代とである。前者は小團次、菊次郎を中心とした四十代の成熟期である。役者も作者も脂膏が乘つて噛み合つてゐた。先輩又は同輩との競爭心もあつて、共に相並んで、刻苦しい向上心に滿たされてゐた。それに對して後者の方は、六十歳前後の、言はば圓熟期であつた。自由自在な餘裕ある作劇術、技巧を以て、顏揃ひの大一座を動かしたといふ趣がある。一生懸命の代りに、悠揚迫らざる、努力的な縱横自在な筆致が示されたのである。

兩者の間にはさういふ相違はあつた。例へば前者の陰晴たる險しい『座頭殺し』、『村井長庵』に對して、これは何處となく悠揚とした、明るい平野のやうな『黄門記』、『鏡山』を有してゐる。花ならば、彼れは寒風を劈いて魁した梅花で、此れは陽春を飾る櫻花の爛漫であつた。藤葛を潜り谷間を分ける奔湍の、やがて濶大な綠野の汪洋たる大河と變形したといふ氣味が見える。

其の以前、默阿彌が淺草に轉居して間もない三十歳頃に、ある人相見が默阿彌を卜して、六十歳代には運の開ける方だと豫言したさうであるが、果して其の言は當つた。新富町へ轉座した年が五十七

歳で、新富座と改まつたのがちやうど六十歳である。此の前後から七十二三歳までの默阿彌は殆ど獨步の境を示す黄金時代であつた。

而して對手として立つべき作者が一人もなかつたのである。夫の好老爺櫻田左交は、明治前から樂隱居の身分に安住してゐたが、明治十年の八月七日に七十六歳で歿した。其の弟子の四代目櫻田治助は漢方醫の出で、筆が堅くて狂言作者に適せず、後には新聞記者に轉じた。綿密で根氣のよい瀨川如皐は、中村座に居たが『切られ與三』や『うはばみお由』のやうな傑れた作は其の後出來ず、明治以後には新眼を開き得ずして、次第に時代と沒交渉の姿になつてゐたのが、これもやがて十四年の六月廿八日に七十五歳で歿した。

作者界が斯ういふ狀態であつたから『狂言作者と言へば默阿彌を聯想せしむる』に至つたのも無理ではない。新富座を中心として、三座又は四座を兼勤した此の頃には、大小の脚本、淨瑠璃を合せて平均一年に十種、或は十種以上の精力的多作をなしてゐる。數量の上から見ても、蓋し稀な活動であつたかも知れない。其の取材の範圍も、白浪や生世話以外に及んで、時代、世話、所謂御家物、各種の淨瑠璃、所作にまでも及んで、殆ど歌舞伎劇の各様式を、茲に總收したかの如き觀を呈したのである。

新傾向に冒險した時代物も圓熟した『活歴』といふ樣式を成し、明治社會を扱つた新方面の世話物

たる『散切物』も十分にこなれて、時の人の趣味に合致し、悦び迎へられるに到つたのである。

三

明治以後の世話物は、菊五郎を中心としてこれに左團次、それから仲藏後には松助などが其の主要人物に扮した。時代物の中心となつた團十郎や宗十郎とは、藝風や趣味の相違もあつて、世話物には大した關係を持たない。

默阿彌は根が世話物作者だけに、時代物は時勢や役者に依る所も多かつたが、世話物は自ら進んで書いたのだから、得意としたのは無論其の方面にあつた。『散切物』は即ち默阿彌に依て創められ、また完成せられたものである。假令形式は新しからず、永久の流行に堪へなかつたとは云へ、見逃すべからざる一團の作物である。況や前期を受けて、漸くにして時尚と合致し、觀客をして亦讀者をして熱狂せしめたものも、少なくなかつたのである。此の『新富座時代』に作られた世話物の中で、特に明治を舞臺にした作が六七種ある。明治十年に『女書生繁』と『孝子の善吉』とがあり、『高橋於傳』、『岩龜樓の龜遊』が出來、十三年に『霜夜鐘十字辻筮』と『木間星箱根鹿笛』とがあつて、その翌年には更に『島鵆』を加へる事が出來る。

『女書生繁』は、作者が或人から、近頃武州熊谷在に男裝した書生がゐて、女に懸想せられた事があ

つたといふ話を聞いて、思ひ立つたもので、これを悪車夫が見顯はしての經緯を書いたのである『高橋お傳』は、情夫の爲めに他の男を剃刀で殺し、金を奪つて與へたといふ、當時の實事譚を脚色したものであつた。此の二作は後の『花井お梅』などと對すべきもので、明治に彩られた傳法肌の女、毒婦を描いたものであつた。

『孝子の善吉』は默阿彌自身が横濱へ行き、實地に觀察した材料に據つたものである。海岸通りの道普請へ外役に出た懲役人共が、大勢して働いてゐた。そこへ七歳ばかりの少女が馳せて來て、人相の惡い男に縋りつき『お父さん早く歸つて下さい』と泣き出した。すると其の男は邪險にも、うるさいと言はぬ許りに振拂つた――。此の光景を目撃して立案されたのが、五幕十二場の世話物一篇となつたのである。それ故作中でも四幕目の『横濱海岸道普請の場』が眼目で、又そこが殊に見物を深く感動せしめた。

親孝行な善吉が、孝心故に親の罪を負うて所刑され、名も北向の虎藏といふ者と一つ鎖りに繋がれて外役に從事してこづき廻されてゐる。其處へ善吉の一子卯之助が逢ひに來て役人の情けで積る話に涙をこめ、果ては親の寫眞を取出して、幾度か詫をする事などがある。虎藏はうるさい、やかましいやかましいと言ひながら立上つては善吉を引きまはすが、やがて我慢の角も折れ居眠りをしながら、二人の眞情の籠つた話を耳にしてふつと悔悟する。

……餓鬼の時から根性はつむじと共に曲つた虎藏、盗みはしねえがかどわかしゆすりかたりに幾度か惡事千里に搜されても、風を喰つて逃歩き、親の首へも繩をかけ不孝な奴と言ひ死に、親父が死んだ其跡は、只せへ甘へお袋に、小言を言やアなぐりつけ、蹴たり蹈んだりした事も、惡いと心付かざれば、耳やかましく聞いてゐたが、年に似合はず目から鼻へぬける利口なお前の息子が、其の口に因る者の子程親に受けたる恩深く、孝行せねばならぬといふ其の一言が肝に應へ、是れ迄盡した親不孝、濟まねえ事をして來たと今日といふ今日目が覺めて、親父の死んだ其の時にも、唯一滴の涙さへこぼした事のねえおれが、其の子の勝れた孝行に、初めてこぼした此の涙、是れが心を改めて誠の人になつた證據だ。

と慚愧の涙を流して、後悔するので、これを聞いた傍の四人も改心するといふのである。善吉は菊五郎で、左團次が虎藏であつた。上だつた懲役人野毛の重右衛門は仲藏で、共に出來がよかつた。

此の作は其の名題も『勸善懲惡孝子之譽』と据ゑたやうに、懲役人の改心を取扱つてあつたので、淺草本願寺のある住職が『獄內說教の種本に用ひ』た所が、罪人に悔悟した者が出來たといふ。また『島衛』を布教師が材料にして說教した時にも、茨城縣とかの殺人犯が悔悟したと、禮狀を寄せた事があつたといふ。

『霜夜鐘十字辻筮』は、『歌舞伎新報』の第五十號（明治十二年十一月）から連載されたものである。

二三號前から豫告が出たり、挿繪を掲げ、見巧者連からの投書を希望したり、盛んに愛嬌を蒔いておいて掲載し始めたが、中味も面白かつたので、急に新報の賣行が增したとさへ言はれた。役者の投書に擬して出た題は六つで、

梅幸（菊五郎）に宛てた『巡査の保護』
霞仙（宗十郎）に宛てた『士族の乳貰』
秀鶴（仲　藏）に宛てた『按摩の白浪』
璉升（左團次）に宛てた『天狗の生醉』
牡若（半四郎）に宛てた『娼妓の貞節』
團洲（團十郎）に宛てた『楠公の奇計』

といふのであつた。『此の兼題を一つに結び』つけたのが、即ち『霜夜鐘』一篇であつた。

作者の序言に、『素より缺少き智慧袋、遣ひ減らし窪みし硯に摺墨の曲りを直す勸善懲惡、聊か教への端にもと意に思ふ半分も燒はまはれど才は足らず、唯ゝ愚度〳〵と長くなりしは所謂下手の長談義』と諦めて貰ひ度い云々、と斷つてあるが、長談義所ではなく讀者を悦ばしたので、一二三號も休載すると、矢の催促が新報社へ舞込んだ位だといふ。魯文は其の合本の序詞に、『當時を摸す寫眞鏡は此の辻篇を的とせん』と述べ、又武田交來はその草雙紙の序に、『實に活歴史の名にそむかず、能く穿ちたる

人情世態』と述べてゐる。何しろ當時の寫眞であり、流行を穿つたものだつたから、なか〳〵の評判であつたらしい。上場と前後して、二三種も正本製風の草紙が出版せられた事に徴しても想ひやられる。

舞臺にかけられたのは十三年の六月で、芝居としても勿論よかつたが、讀物として歡迎されたほどには行かなかつた。最初から連載する讀物として執筆されたものだけに、狙ひ所が違つて居て、各々の場がとり〳〵に面白過ぎた弊もある。舞臺上でも兼題に見立てた役者通りに演ぜられたが、其の中の傑作は仲藏の按摩宗庵の白浪が第一で、菊五郎の巡査杉田薫もよく、左團次の讃岐金助、半四郎の娼妓もよかつた。默阿彌が巧みに役者を使ひこなす手腕は、此の六名優六様の見立樣が、ぴたりとはまつた動かぬものであつたのを見ても分かる。

作中、士族の乳貰ひは、哀れな姿で乳呑兒を抱へて、筆を賣りに來た士族を。又下谷の芋坂で路傍に蓙を布いて、三味線を彈く母と子とは、自分の家へ出入する、紙屑買の妻子をモデルにしたものであるといふ。

然しながら、もと〳〵讀まれる爲めといふ事を念頭に置いた、修辭本位の作だけに、其の詞藻中には、情趣の豐かな美しい形容白があつた。その中でも特に呼物にされて、聲色使ひの飯の種にもなつたのは、序幕上野の三枚橋の闇に、僞盲目の宗庵が、豪家の手代與七を手拭で締め殺し、七十圓入り

の紙入を奪ひ、につたりと思入あつて、

宵に呼ばれた茅町の尾張屋といふ米屋から、療治を仕舞つて歸りしな、頭痛を揉んだ其の時に天窓へ使つた手拭を、そつと袂へ入れて來たが、國の土産か有松染、金に鳴海の幸先よく失れが今夜の役に立ち、賣つたら五十か六十の古手拭で七十圓、濡れ手で安房から上總を見晴らし、八十日の苦役をして汚れた身體の垢を落し、仕舞湯よりも溫つた此のほとぼりのさめぬ內生れ故鄕の九十九里漁場へ行つて一稼ぎ、百と二百の資本を拵へ日歩でも貸して暮さうか。

といふのがある。また二幕目の下寺通り原中で、讃岐金助がおむらを口說いて、

……そんなに愕く事はねえ、菊屋橋で俥屋が切れた草鞋を履換へる、其時ちやうど新堀から出合頭に提灯の明りで思はず見てびつくり、ぞつと素顏の中年增、其面ざしは覺えのある金瓶樓の小紫、以前に替る權妻風にふつと發つた煩惱から、直に菩提の寺町直り、跡からつけて行つた所寒さに一ぺい呑ましてくれと、ねだる酒手に途中から下りた所も車坂町、鬢のほつれか櫻香の軒にかくれて拔いた簪、安くふんでも四五十圓、金目な物を拾つたと正直ぶつて返したは、其の金足に引替へてこつちは渡金の僞物、地金を出しやァ天狗小僧金助といふ、惡事は五分でもすかねえおれだ。六分あまりの差込みを、玉に使つて寺跡へ喧嘩を機會に連込んだは、お前を此處で慰む氣だ、三つ蒲團にやァ寐飽きたらうが、まだ草原で下駄を枕に野天の勸めの味は知るめえ、ち

つと夜露で冷たからうが、是も喰の種だから、野暮は言はずにしつぽりと昔を出して天上の雲間の星でも算へて居ねえ。

といふのなどは、默阿彌式の名白と謳はれてゐる。

『霜夜鐘』に續いて、八月に上場されたのが、『木間星箱根鹿笛』で、これは雜誌には出さなかつたが芝居としては好評で、後の『島衞』と共に此の期の世話物中出色のものであらう。此の作では、左團次の扮した惡漢九郎兵衞の神經病が呼物で、『神經病の二番目』と呼ばれた。若濶九郎兵衞は士族の果で、貧苦に迫つた所から、妻のおさよをば小田原の海老屋へ女郎に賣り、おさよから金を貢がせてゐた。九郎兵衞は其後據婦の山猫おきつと呼んで、『容貌も好いが度胸もよく切離れのいい苦勞人』を情婦にして流し歩く中、また金の盡きた所から、わざとしほれたふりをして來て、おさよに金子百圓を借り出させる。一方のおきつも茶商新三郎をおびき出し、九郎兵衞と構へて、箱根の三枚橋地藏堂の前で金を捲き上げる。と、おさよは後で九郎兵衞の不身持を聞き、追かけて來て、矢張り地藏前で慘殺せられる。此のおさよ殺しが、木間洩る星の光に照し出されて凄く、遠くに鹿笛が聞えるといふ畫面なのである。それから九郎兵衞は、東京へ上り弟の家へ厄介になつてゐる間におさよの祟りで發熱し神經病になり、村正の刀を振廻して自分もそれに突かれ、おきつをも切るといふに終る。神經病としたのが新しく、普通の怪談とも違つた面白味を描き出したので、それが評判になつたのである。

『島衛』に就ては後に述べるが、すべてこれらの新世話物は、前章にも例證した通り、當時の世態を寫すと共に、流行を穿つのが主眼であつたから、刻一刻と輸入せられる新文明の特徴が、悉く丹念に拾はれてゐる。世態、風俗、人情と言はず、書生言葉、漢語交りの新造熟語などが、盛んに取入れられた。從つて明治の初年にあつて最も傷むべき、零落した士族に對する同情や、新文明を謳歌し、享樂せんとするの傾向やを、遺憾なく書現はしてゐる。或は、默阿彌一個としては、西洋文明を敢て歡迎しようといふのではなかつたかも知れないが、社會公衆の叫びを代表し、時代と並行せしめようとは、常に心がけてゐた所らしい。而して、在來の歌舞伎劇的要素とはかけはなれた、新しい言葉や世態や時事問題等を、どし／＼舞臺に應用して、些の不調和をも——少くも其の當時にあつては——感ぜしめなかつたといふのは、默阿彌の才筆に俟つ所が多かつたのではないか。

　單に明治を舞臺とした作以外、江戸を世界とした、豐潤な作物も出來た。團十郎を中心に取つた世話物は、前にも『島の德藏』のやうに寂しいものはあつたが、よりよく彼れに格當した、『河内山宗俊』『湯殿の長兵衛』等が此の期に作られた。仲藏が田舍漢のゆすりで別趣の味を見せた、『傷織大和錦』もある。

　蓋し、闊達な町奴氣質を遺憾なく發揮せしめた長兵衛と宗俊とは、世話物に於ける團十郎の傑作であらう。増補の『河内山』(天衣紛上野初花)に新しく生れて、菊五郎の演じた直侍は、夫の新三に詰

して、いなせな江戸ッ兒の、他の艶麗な一面を寫した人物であるが、宗俊と直侍とを巧みに織分けて各の役者をして不滿なからしめたのである。『延命院』も此の頃の作で、曉星右衞門と馬吉とが同じ筆法で書き分けられてゐる。いづれも兩名優の世話物に於ける特技を、同時に鮮明に描いた新作であつた。

扨、此の圓熟期に出來た同じ世話物ながら、明治に材料を求めたものと、江戸に求めたものと、共のいづれが優れてゐるかは玆に論斷する限りでないが、吾等は江戸情調の溢るゝ作に、却つて恒久的の生命を感じる。而して共の多大な努力の餘になつた、明治式の世話物には、皮相的の開化振りと言ふが如き譏りを免れ得ない所もあつた。

四

此の期の時代物には、左團次や我童を中心にしたものもあつたが、新富座に上場された作の多くは團十郎が中心であつた。

活歷といふ言葉は、九代目團十郎とは切つても切れない程密接な熟語で、共の藝風をよく言表してゐるが、これは彼れが明治十一年の十月に『延命院』の中幕に默阿彌が新作した『二張弓千種重藤』に實盛を演じた時に造られた言葉である。此の作は一幕二場で、秩父庄司重能が義朝の遺子を匿ひ居

る事を訴へられ、源家に因み深き齋藤實盛が、其の首を受取りに來る。實盛は重能の一子重保を身替りに立てたのを、承知で、贋首を持歸るといふ筋のもので、遊い物ではあつたが、世評は可成によかつた。團十郎は實盛で、立烏帽子、水干、白の大口袴といふ扮裝で故實を質した上で用ひたものであつた。此の中幕の劇評を、例の南洲を洒落れて團洲と呼んだ魯文が、『假名讀新聞』へ書いた其の中へ『活歷』といふ新造語を初めて使つたのである。『活きたる歷史』といふ意味で用ひたので、これが即ち活歷の濫觴とはなつた。

篁村曰。活歷といふことは活歷だけにては語意をなさず、正しく活歷史といふべし、これは、松田道之、依田百川氏等が演劇改良論を唱へ、時代物は『活きた歷史ならざるべからず』と主張されしを、魯文等始め其の改良のあまり學者臭きを悅ばぬ者が、『活歷』と縮めて侮蔑の意味に用ひたるなり。

何にしても活歷といふ言葉が、此の時代に造られた事實は、即ち團十郎の特色が明白になり、また其藝が成熟に近づき、明治の初年には『未だ早』かつた藝も、世間に迎へられるやうに歩び合つた事を表明してゐるのではあるまいか。然しながら、彼れの活歷熱も寫實熱も、その世評の高いと共に大分高かつた。極端にはしつた結果、却つて不調和を來したやうな弊害もあつた。其の著しい例の一つは、明治十四年六月の『夜討曾我』に於ける、宗十郎との衝突である。此の作はその前明治七年に、

矢張り團十郎の五郎に宗十郎の十郎で、默阿彌の書下したものであるが、十四年の二度目の時には、團十郎の故實調べの主張から、前回に兩人ともに素足で討入りをしたのが事實に反するといふので、五郎の團十郎だけは、小手脛當、腹卷、草鞋といふ扮裝をした。それにも拘はらず、宗十郎も一癖あつた人物だけに、彼の言葉などは耳にも入れないで、元通りに素足に袴の股立で舞臺に現はれたのである。其の爲めに世評がやかましくなり、つひに宗十郎は中途から舞臺を休んだのである。此の衝突に於ける兩優の主張の是非は暫く措いても、さういふ現象が兎も角問題となつた事は、彼れの起した運動が次第に其の主張を伸し、地盤を固めた反證にはならう。明治の初年に發芽した活歴といふ藝風が新富座時代に十分推敲された事は、何人も是認する所であらう。

其の團十郎の主張に應じて、時代物の新作を敢て試みたものは、當時にあつては唯々默阿彌一人であつた。時として文士、學者、又は紳士顯官の助言に、耳傾けた事もあつたが、それらの要求を容れて、舞臺の上に團十郎の主張を明白ならしめようと努めた事は、嘉永、安政時代に花を咲かせた歌舞技狂言の作者としては、大なる勇氣と努力とを要したに相違ない。

默阿彌の此の間に於ける、活歴的作物として算ふべきものには『中山問答』があり『大石城受取』があつた。新十八番物としての『吉備大臣』や『重盛の諫言』の如きは、作、藝共に好評であつた。自由思想家とも見られる、荏柄の平太を描いた『星月夜見聞實記』や、宮内局と德川家康とを書いた

『茶臼山』の如きは、寧ろ史劇といふ稱呼に應はしい作であつた。『三河後風土記』に據る『松榮千代田神德』に於ける若き家康は、團十郎に適當でなかつたが、『茶臼山』の大御所樣は、打つてつけの性格であつた。

活歴式の時代物には、尙團十郎以外我董の爲めに『義重忠士礎』（重忠の二股川に於ける討死）が出來た。これは十一年の十一月、都座で書下したものであるが、初日に默阿彌が舞臺を見てゐて、幕になつてから頭取臺に腰を掛けて、樂屋へ歸る役者を待つてゐた。（何か小言を云ふ時には、頭取座へ上つて誡めるのが、古くからの習慣であつたといふ。團十郎なども、曾て舞臺で自分の相手をする、下廻り連の役者に大劍突を喰はせた時にも、頭取臺に上つて待ち構へてゐて樂屋へ入つて來た所をどなり散したさうである。）そして默阿彌は榛澤六郎に扮した役者を呼んで、その役の性根から扮裝、妙に赤く塗り立てた面の拵へまでも、全然解釋違ひなる旨を注意し、『私はさういう積りで書いたのではない』と說明し、なか／＼いつもに似合はぬ手酷しい訂正を出したことがあつたといふ。此の話は、默阿彌も徒らに盲目的に囚はれて進んだのではなく、活歴的の精神を、多少なりとも了解してゐたことを語つてゐる。

また、所謂時代物風とは無論違ふが、明治史を劇化した作物もある。此の頃に在つては時事であつ

たらうが、後から見れば一種の史劇になつて來る。大切淨瑠璃などにも、其の意を寓したものもあつたが、眞面目に一流れの脚本となつたのは、『明治年間東日記』と『西南征記』とである。前者は彰義隊と其の末路とを描いて、明治元年から八年までの戰爭譚を材料にしたもの。後者は西南戰爭の終つた、十一年の二月に新作されたものであつた。

注意深い默阿彌は、官憲の交渉を懼れて、容易に時事問題の爲めに、筆を執らうともしなかつた。が、一方に勘彌がゐて、機會さへあれば出來るだけ官邊に近づき、又芝居の地位を高めようと努力してゐたから、時事を捉へて、世間の注目を惹かん事にも腐心してゐた。そこで西南役の時も、默阿彌は好まなかつたのであるが、彼は人を介し策を盡して直接に山縣、大山等の諸公の許可を得、材料も當時の名士、關係者から給して貰つた。夫の西郷に送つた勸降狀なども手に入れ、東奔西走し材料を集めて默阿彌に托したので、やつと安心して筆を下したのだといふ。

際物の事とて人氣に叶ひ、大入り續きで八十日餘も打續けた。此の時に默阿彌のつけた名題は『西南雲晴朝東風』といふのであつたが、いかにもよくつけた目出度い題だと、檢閲係りの役人から贊辭を呈されたといふ。又自分もいつたい作の名題をつけるには、いつも苦んで、思ふ通りに行つたのは少ないが、これだけは會心のものであると語つたさうである。

五

明治維新も一面より見れば、大きな御家騷動だつたからといふのではあるまいか、新富座の全盛時代には『御家物』が大分新作された。

彦三郎を主にして、菊五郎、左團次等に書下した中で著明な作に、『宇都宮騷動』と『大岡天一坊』とがある。柄と音調と容貌と、かう三拍子揃つてゐた彦三郎の事だから、就いて傳ふる事は甚だ多いが、その一つは、舞臺の空氣をガラリと變へて、パッと轉換させる際に、力ある藝を示したといふ事である。上の二作に於ても、其の彦三郎の特技に觸れた場が眼目で、また評判がよかつた。

『宇都宮紅葉釣衾』の本多上野介（彦三郎）が、謀計を洩らした大工の與四郎（菊五郎）に、其の實を白狀させんと責め、奥殿に於て自ら詮議するのであるが、與四郎がなか〳〵白狀せぬところから策を構へ、ねんごろに理を諭すので、つひに包みきれず與四郎が庄屋藤左衛門の娘に洩した旨を白狀するや、上野介は面に怒りを發し『勞れ果てたる與四郎をはつたと蹴倒し土足にかけ……チエヽ殘念や口惜しや……』と殘念がる。其の刹那の呼吸といふものが無類であつたといふ。

『天一坊』では、大岡越前守を勤めたが、これも實に彦三郎に切つてはめたやうな適役であつた。六幕目の返し大岡邸切腹の場で、越前守が最早吟味の日限も今日を以て切れるから、其刻限には切腹し

中讓する覺悟をなし、父子がその支度を整へ、訣別の言葉を交して打沈んだ折しも、思ひがけなく二人の使者が立歸り、證人までも連れて來たので、越前は顏を輝かして『おお能ぞ詮議致して參つた、遠路の所太儀々々』と待詫びた返事を聞き、證據の上つた事を知るや否や『おお、皆のものも悦べ〳〵』と立上る。その悦喜に轉ずる呼吸、舞臺全體の情調を一變させる工合が、何とも云へぬ鮮やかさであつたといふ。

此の作は、伯圓の講釋を基礎として、脚色したものであるが、作中で特に評のよかつた、四幕目の無常門より吳服橋外までと、今の大岡邸の切腹の場とは、講釋には無い場面であつた。兩者とも默阿彌が新たに創意を以て書加へたもので、却つてその場が利いたのである。默阿彌が講釋、落語及讀本合卷等に據つて作する場合には、いつもさういふ工夫を加へたのであつた。

此の他彥三郎の爲めには『黑田騷動』『伊達騷動』等がある。團十郎の加はつた時の『天草騷動』などもさうであつたが、新富座が燒けてから彥三郎は上方へ歸り、間もなく四十六歲で沒したのは惜しい事であつた。

彥三郎の大岡樣と一對をなした適役は、團十郎の水戶黃門であつた。『黃門記』も默阿彌の筆になつたものである。書下しは明治十年十二月で、いろんな事情で座に大改革を施してゐた頃、守田勘彌は牛込早稻田の松本順氏の邸內に、潜んでゐて策を回らし、竹柴其水を使者として默阿彌とひそかに打

合せをした。役者は團、菊、左及仲藏、半四郎の顔で狂言の新作を依頼した。それからも無論秘密の間に、どんどん取掛つて出來上り、內讀みをば人目を忍んで、向島なる長命寺の奥座敷ですませたが、これが即ち『黄門記』であつた。一方座方から世間一般は、いつ開場になるか測り知られず、座の運命さへも案じられて暗澹たる疑惑の雲に閉されてゐた。すると、これも秘密の中に出來せしめた看板番附を携げ、突如として開場する運びになり、而かも新作物でこれ〳〵と分明したので、一般の驚愕は一通りでなかつたといふ。勘彌のやり口はすべてそんな風に機敏だつたのである。

初日が開くと、芝居の評判も大きによく、四幕目の小石川傳通院で、黄門様が仲藏の演じた按摩玄碩の訴へを、お取上げになる所が殊によかつた。其の他菊五郎の河童の吉藏、左團次の魚屋久左衛門など、それ〴〵によかつた。團十郎は此の時にも本無しの幕切れを能舞臺鏡の間で見せた。

『柳澤騒動』も、團十郎の扮する出羽守、井伊掃部守、出羽屋忠五郎等を働かせるやうに出來たもので、柳澤家を憚つた故もあるが、裏表、時代世話の仕組みで、評判が頗るよかつた。加賀騒動の『鏡山』は、名優揃ひ相持の狂言で、御家物の代表作であらう。これは全體にわたつてよく、特に、鏡山の紅葉狩に小田大炊と佐渡守とが、猩々舞の傳授に事寄せ、密談を凝らし、其の歸るさ安宅郷右衛門に槍をつけられるといふ場面は、詩趣も豐かなら藝もよかつた。團十郎の小田大炊と宗十郎の佐渡守とは、いづれ劣らぬ家老役者、菊五郎の大月藏人はいかにも奸智に長けた才物その人らしく、左團次

の勤めた郷右衛門の勇ましさ。仲藏の大月叔父百姓大六は、もとより天下一品のものであつた。顔揃ひの役者を適所におき、而も十二分に各自の特技を揮はしめた、此の作の如きは、新富座の全盛を聯想せしめ、作者としての默阿彌を想ふに、恰好なものと言はねばならぬ。故三木竹二氏は此の作を次のやうに評してゐる。

鏡山は規模の大なる通し狂言にて、加賀騷動に胚胎せり。全齣に就いても難ずべき處少なきものなり。尤妙なるは大月邸の場と紅葉狩の場との二齣とす。大月の邸にて姦雄の藏人と豪宕の大炊との性情相映射する處描き出して眞に逼る。大炊が酒を乞ふに擬して談笑の中に諷刺を寓し、何々大月の心肝を刺す狀、藏人が毫も怒氣を顯はさず、恭謙其の意を迎ふる體、これより農夫大六を呼出して樸直の諫をなさしむる段、いづれも妙なり。這般の布置對話の詩趣を含蓄せる泰西大家の筆に譲らず。

新富座以外では、我童の爲めに書下した『根津宇右衛門』。我當が出世藝の一つとなつた、猫の乘りうつる召使お仲を描いた『有馬の猫騷動』も新作されてある。

これは些し餘事に亙るが、御家物と關聯して忘るべからざる、女形の八代目岩井半四郎の事をちよつと述べたい。

半四郎は、かの默阿彌が小團次と結托してゐた頃の粂三郎である。其の以前『鬼あざみ』の十六夜が廓を拔けた胴拔姿に、手拭を吹流しに冠つて揚幕から出た所を、石部金吉の默阿彌と小團次が見て『あれなら迷ふ筈だ――寺を開いたつて構はねえ』と、嘆ぜしめた程のあでやかさであつた。其の藝よりも以上に美しく、愛嬌のある目が際立つてよいので、水の垂れるやうな艶麗を見せた人である。無論世話女房といふ柄でもなく腕もなかつたが、坐らせて置く三千歲のやうな花魁や、圍ひ者などには持つて來いの役者であつたといふ。特に愛妾何の方といつた風の、傾國の美女になつて御家騷動を惹き起すには、此の上もない得難い女形であつた。默阿彌の作では、世話物にもよく用ひられたが、御家物には半四郎のお蔭で、效果を揚げられたものがある。『柳澤』の內室おさめの方と、裏で行つた出羽屋忠五郎の女房のおりう。『有馬』の愛妾お卷の方。『鏡山』の愛妾で、大月藏人に通ずるお秀の方などは其の好例である。

半四郎の歿後の事、或る人が九代目團十郞に十八番物の『鳴神』を演じてはと、勸めた時に彼れが首を振つて『大太夫(半四郎)が亡くなつては、雲の絶間をさせるものがないから出來ません。どうも外の役者ぢやア墮落せられませんからね』と答へたといふが、全く其の言葉通りであつた。御家物が續いて新作されたのも、半四郎がゐたからとの理由も一つはあつたらう。

要するに、御家物といふ一種の形式は、時代と世話の混交が許されるのだから、作中の人物も、藝の範圍も、多種多様となり得る可能性がある。從つて、彥三郎や團十郎又は宗十郎のやうに、柄と調子と容貌と三拍子揃つた、貫目のある時代物に得意な役者――それから、菊五郎や仲藏のやうに技巧的な、いかにも藝らしい藝を見せる世話物役者――或は、左團次のやうにパッとして明るい、濶達な男らしい役者――又は半四郎のやうに美しい役者――と、かう腕揃ひの役者が大勢居た場合に、それぞれの特色を發揮させるやうに使ひこなすには、此の御家物のやうな作柄が、都合よかつたといふやうな點もあつたであらう。或は大時代の歌舞伎式と、新しい活歷などの間を、連鎖するやうな性質もあつた故かして、此の頃にはこれに類する作物が特に多かつた。

六

江戸の往昔は、士分の者が芝居を見る時には、茶屋へ大小を預けて、手拭を米屋冠りにして棧敷へ入つたものだといふが、明治の社會には、通人の山內容堂公を始め、公然と馬車を木戸前へ横附けにする貴顯の方も多くなつた。玆に劇界と政府、又は一般社會との間に、一層直接の交涉が生ずる事となつた。

劇界に於ても、眼の開いた勘彌が大改革を施して、ドシ〳〵新しい方法を講じたが、明治政府も亦

新智識の吸收に焦慮したのである。啓蒙時代の常として、大使、留學生は盛んに西歐諸國に派遣され志ある者は洋行して來て、昨の田舍書生は忽として燦然たる金モールに、豪氣な御羽振りを利かせるやうになり、極端な西洋熱、改良熱は、社會全般を通じて唱道された。此の西洋熱は、江戸といふ不思議な文明が釀した情調を、遠慮なしに攪亂した。特に芝居の如きは、江戸の花であつただけに、猶更其の影響を蒙むつたのである。ロンドンやパリーの王室劇場を見、其の劇場の內容と地位とに關して刺擊されて歸朝する、所謂開化した新人は、芝居に向つても其の步調を取つて、改良策を講じ始めたのである。

芝居は一般社會と立離れては、意義を全うしないものだけに、その新文明と隔絕する譯にも行かなかつた。此の際に芝居の內の者で、その中介者として調和を計らうとしたのが、矢張り守田勘彌一人であつた。彼は努めて官吏に近づき、新智識に富める文士學者の意見に傾聽せんとした。西洋に於ける芝居の地位まで引上げ、役者を紳士の列に加へんとして、彼はどの位骨折つたか知れない。

明治十一年の六月に、新富座が新築落成した開場式の時に、俳優一同、座方一同、作者までも、洋服出立で舞臺に列び、式辭を朗讀するといふ洋式に則つたのは、其の極端なまた有名な話である。殊に洋服嫌ひな默阿彌にまで燕尾服を着せ、靴を穿かせて、生涯に唯一度限りの洋服姿を見せたといふが如きは、實に奇妙な現象である。勘彌は此の例を見ても分かる如く、狂熱的になつてゐた。新設備

新傾向の爲めなら、あらゆる犧牲を拂つて顧みなかつた。米國大統領グランド氏や、獨逸皇孫の來遊した時には、外賓として招待した。殊にグランドの傳記を、狂言に脚色んで上場したなどは、何といふハイカラな事であつたらう。矢張り招待した布哇の國王から、座長としての勘彌へ贈られた、緋羅紗の引幕などに徵しても、其の事實が證される。夜芝居を興行したり、英文の筋書を作つたのも、此の頃の事である。

一方に於ては、芝居の地位を高め、品位を保たんが爲めとあつて、嚴重な取締りが開始された。嘗ては小團次を死に致らしめたやうな、穿ち過ぎる人情劇は勿論防遏される事になつた。風敎上に差支へるが如き、慘忍、野卑、淫猥などが特に注意された。敎部省が設けられてから、興行師としての勘彌と、作者としての默阿彌とが喚ばれて、作物選擇又は新作上の注意を與へられた。其の結果は次のやうな白が『女太閤記』の中に見える事となつた。

凡そ芝居の狂言や淨瑠璃も、敎への道、善を勸めて惡を懲し、一部の主意は立つてをれど中には色氣の事が多く、何の事やら譯知らぬ娘子供に其の道を敎へるやうなものなれば、近頃芝居の狂言も、見惡い事はなるたけせず、十年あとゝはサラリと變じ、又淨瑠璃も、其の通り家元衆はいふに及ばず少し心のある師匠は、なる丈け文句の色氣をなほし、心中ものや道行などを、敎へぬ師匠もあるさうだ。……ほんに今では狂言も、親子で顏を赤めるやうなそんな見惡い狂言は、新富町ぢやあ演やあしれえ。

此の作は、明治九年九月に默阿彌が書下したのだから、此れより前にそんな注意があつたものと見てよからう。『事を凡近に取りて義を勸懲に發す』と古作者も述べてゐる通り、勸善懲惡なる事は以前から、どの作者も大摑みには心得てゐたでもあらうが、其の名の下にかくれて、實は勸惡的デカダン風の鼓吹に資したやうな形跡もあつたが、此の年代邊りからは、一層意識的に、勸善懲惡の思想を作中に注入するやうになつた。明治十年を境として後の世話物には、特にそれに應ずる脚色を敢てしてゐる。『孝子の善吉』でも、『霜夜鍾』でもさうである。風敎上から見て、芝居の格は引上げられたかも知れないが、其の爲めに芝居としての面白味、情趣は次第に稀薄になり始めた。

役者で改良熱を受けたものは、殆ど團十郎一人であつた。彼れの尙古癖、高尙癖は益々助長せられ活歷も亦それと共に、いよいよ確固として來た。文士學者の間にもだんだん改良熱が高くなつたが、先づそれらと握手してその指導に傾聽せんとしたのも、團十郎のみであつた。從つて黑人以外の一般人と芝居との關係も密接になつた。是れを具體的に示したのは十二年十二月の新富座興行であつた。此の時の一番目は『赤松滿祐』で『人間萬事金世中』がその二番目であつた。双方共に默阿彌の新作であつたが、第一は依田學海氏から、勘彌を經て、殆ど全部の筋書を提供せられ、やかましい干渉を受けたもの。第二は、當時池の端の御前と呼ばれて、全盛を咲かせた、福地櫻癡居士から材料を供せ

られて綴つたものである。始終撓まず、硬論を持して劇界に貢獻した依田學海氏と、後に團十郎と結托して歌舞伎座に據つて、狂言作者となつた櫻癡居士とが、同時にかかる重大なる關係を、劇界と結んだ事は注目すべきである。卽ち此の前後を以て、文士學者と芝居との、最初の接觸と見てよいであらう。松山美談を書いた『大石城受取』も、通人の軍醫總監松本順氏が、材料を提供したものであつた。

然し、かうして學者側から與へられた材料と指定に基づいたものは、默阿彌の手を經たに拘はらず、成功したものが少なかつた。學者側の意見や指導に依賴し、又は尊重し過ぎた結果であらう。それは兎もあれ、これらの現象は、やがて演劇改良の諸會を生むの動機となつた事は爭はれない。

西洋熱の芝居に及んだ一例として、今一つ見逃すべからざるものがあつた。それは矢張り十二年九月の『漂流奇談』が純粹な洋劇を一幕挿む目的で、特に工夫された作であつた事である。百聞は一見に如かずといふ譯で、西洋人の芝居――異人芝居が横濱にあると聞いて、早速かけつけたのが、勘彌、默阿彌、團十郎、仲藏等で、(半四郎はどうしても行くことを肯かなかつたといふ)七月の事であつた。それからいろ／＼話の結果、あの洋劇を分からないながらも、何とかして興行させたら必ず人氣を集めるに相違ないといふので、默阿彌に『師匠何とか工夫して下さい』、『よろしい』と一決したので、外務省の許可まで得、劇中劇の趣向にして一幕見せようとなつた。勘彌は莫大な費用をも顧ずに興行

させる事としたのである。

默阿彌も、大いに凝つて名案を立てた。帆船で清水港から下田へ行く途中、暴風に遭つて、太平洋に漂はさるゝ事十二三日、いよいよ沈沒と定まつた時に、英國船と米國船とが來て、親子の船頭が別別に救ひ上げられる。程經て英京ロンドンに落ち合ひ、芝居を見ての歸るさに、互ひに死んだ者と思ひ込んでゐた親子が、ひよつくり對面するといふ筋であつた。その見に行く芝居として、洋劇を嵌めこんだのである。役者は團十郎に仲藏、半四郎といふ顏で初日を出すと、前景氣の賑々しさは何處へやら、すこたんと失敗したのである。『キーキー聲の唐人が交つてゐるからいけない』と、かういふ惡評を受取つた。見物は西洋人の役者が出て來て喋舌ると、其聲やら身振やらををかしがつて、むやみと笑つたのである。悲しい歌を唄つても、しんみりした話の眞最中にも、笑ひこけたのださうである。番附面の名前から想像すれば佛蘭西あたりの旅役者らしく、歌劇團のやうなものであつたらしいが、これも『未だ早い』かつたのであらう。

然し此當時にあつて、純粹の洋劇を見せようといふのは、非常に時代を見越したやり方であつたに相違ない。また、默阿彌の趣向になつた作其のものも、暴風雨に始まる沙翁の『あらし』を想見せしむるやうな仕組みで、洋風の事物、全く異つた新しい言動を、夢想の裡に自然らしく見せようとした作であつたし、西洋の地理や地名を知るには、洋行歸りの官吏に就いて訊したり、時の東京府知事の

松田道之氏に話を聞いたりしたもので、決して拙い見るに堪へない作ではなかつたが不評に終つた。これらも西洋熱の芝居に及ぼした、極端な例の一つであらう。默阿彌はそれら新時代の事象に對しても筆を染めこそすれ、斥けるやうに頑迷ではなかつた。

七

吾等は本章及び前章に於て、明治維新以來、次第に昂じ來れる演劇者流と外界との接觸、乃至劇界の動搖に就て、時々指摘はして來たのであるが、此處に改めて一項を設け、吾等が多大の敬意を拂ふ坪内博士の所論に準據して、其の根本思潮の大方を述べておくの必要を感ずる。

惟ふに、明治劇壇の大變動を由來せしめたには、複雜な動機と理由とがあつた。明治維新、王政復古の革命は、一面から見れば武人又は武士肌の復活であつた。元祿期より文化文政に到る江戸時代は假令將軍政治の下にあつたとはいへ其の實力は末期に及んで益々衰へ、眞の文化は都會の市民、平民の手中にあつた。これに對する明治時代は武士の復興――特に、都會趣味とは緣遠い田舍武士の復興ではなかつたか。斯くの如く社會に於ける實力所有者に大變動があつたのだから、歌舞伎劇の新愛護者となつた、明治新社會の上中流が、江戸時代の好尙と衝突したのはむしろ當然であつた。加之、新舊兩者の間には、其の根本的內容に於て、著しい相違があつたのである。即ち新社會の理想は改新進

取、傾向は實利的、現實的、合理的であつたに對して、舊社會は一般に頽廢的にして夢幻的、情意的であつた。趣味好尙の上に大なる扞格を生ずるのは、止むを得なかつたであらう。

尙、他の大なる理由は、當面の江戶、殊に末期に於ける歌舞伎劇そのものの狀態にあつた。もともと江戶の歌舞伎劇は、第三章にも述べたやうに、狹い江戶といふ都會に於て、吉原と並んで平民最大の歡樂境、慰藉機關として、可なり自由に發達したのであるから、其の趣味が卑俗でもあり、荒唐でもあつたのである。それが次第に年月を經て洗錬され、一種のロマンチックな味ひを、馴致したのであつたが、遂に維新前に到つて、爛熟し頽廢の極に達した。而して作も藝も、殆んど墮落するに至つたのである。卽ち『目先の變化と場受とを主とし、脚色の支離も落想の無稽をも厭ふ事なく、過去をも現在をも、虛をも實をも混淆して、頓智思附を縱にし木に竹を接ぎたるが如き、寄木細工の如き、迷途の如き、幻燈畫の如き作意を主とし、又後年には生世話物、卽ち寫實的なる社會劇も追々に發達するに至りしが、煽情的なるもの其の多數を占め、遊女、盜賊を主なる人物となせるもの、怨靈の祟り惡漢の欺騙、狡猾の戀愛等を主眼となせるもの、乃至野卑、猥褻、殘忍なる場面、科白の夥しき』ものであつた。斯くの如く、デケーデンスの狀態に到達してゐた歌舞伎劇は、それ自ら到底普遍的なものではなく、又勿論新代の好尙に適するものでもなかつたのである。

かかる事情、因由の下に置かれたる兩者の間には、必然的に衝突は避け得なかつた。新好尙は舊好

尙に成れる劇の性質を非難し始め、それに應じて座主、役者、作者等は、百方適當なる措置を執る事に努めたのである。ここに於てか梨園と社會の進歩分子とは因となり果となつて相響應し、脚本の上にも、技藝の上にも、明らかに轉化の兆を現し、新代も亦これにより彌々舊劇の陋雜を意識し、最初は談論に、次には新聞紙上に、或は脚色の滅裂を難じ、或は著想の野卑荒唐を刺り、「所謂演劇改良論」の盛焔を揚ぐるやうになつたのである。

吾等も、前に時代物が先づ革新的傾向を帶んで表はれ、新富座時代に至つて、「活歷物」なる一種の新史劇とまで化育せられた事を述べた。卽ち革新の端は、史劇の改善に發したのであつた。然らば何故に先づ時代物より改良の第一步に轉じたのであらうか。それには大略次の如き理由が算へられる。

一、德川時代に執つた政策上より、近世史を劇に仕組む事を禁じたりし反動とも見るべく。

一、維新の復古的活動が社會に歷史智識を普及せしめて、國史劇に興味を抱かしめしにも由るべし。

一、改良論者の多數が勤王愛國を理想としたりしにも由るべく。

一、劇の新保護者たる貴族、顯官、紳士等が概して地方出の人々なりしが爲め、主として江戶の町家社會を寫したる、興味の範圍狹少なる「世話物」を解せず、又好まざりしにも由るべく。

一、此の機運に乘じて嶄然頭角を現はせる、九代目團十郞の藝風が抽んでて時代物に適したり

しにも出るべし。

史劇の改良に資したる動機はこれらを以て盡されてゐるが、その革新の徑路は、明治十年前後より其の兆を示した、演劇改良の諸運動の主張に嚮導されたものである。而してその改良意見は略二面よりなつてゐた。卽ち一は、主として舊劇の道德的調子を非難したもので、其の猥褻と殘忍と野卑と沒主義とを除き、代ふるに忠孝と節義と高雅優美とを以てせんとした。二は從來の脚色のあまりに荒唐無稽なると、其の扮裝科白の不自然なると、歌曲分子、器樂分子の非寫實的なるとを惡んで、及ぶべくんば全然寫實的ならしむるか、尠くとも、西洋劇の如くならしめんことを主張したのであつた。之に加ふるに、維新の王政復古が、一面有職故實學の復活でもあつたことを想へば、活歷劇が何故に史實に原づかうとし、高雅ならんとしたか、故實を重んじたり、寫實を尊んだかが明白になるであらう。

時代物は、斯くして革新の緒に就いたのであるが、明治社會の實寫ともいふべき、生世話物に至つては、猶其の十分一の效果をも收め得なかつたのである。で、默阿彌は此方面にも一指を染め試みたのであつたが、時の檢閱所なる教部省の旨意を體して、主として露骨なる卑猥や殘忍を避けることにのみ留意したが爲めに、肝腎の劇としての感興は薄くなるばかりで、明治新社會を寫した作としては頗る淺薄なもので、新時代からは餘り認められなかつた。蓋し其の取扱つた形式にも內容にも別段斬新なところはなかつたのである。

演劇改良の諸運動や、企畫や、經過等に關しては、尙後章で述べる積りであるが、其の根本動機は大體ここに採錄した範圍を出ないものであつたといつてよい。

八

斯く見來れば、明治の大變革も十餘年を費して、新時代が優勝となり、其の結果新好尙に應ずる活歷が生れたのであるが、略々これと同樣な關係で生れた他の新しい一つがあつた。それは新形式の所作（振事）の出現である。卽ち能曲に出發した『土蜘蛛』の新作上場された事であつた。明治十四年の六月、菊五郎の祖父三代目梅壽菊五郎の三十三回忌追善をするに當つて、默阿彌が綴つたのであるが、其の由來に就ては『時事新報社』編の『尾上菊五郎自傳』に、

祖父は暗闇に蜘蛛の精をやつた事がありますから、何か蜘蛛の事をしようと、守田と本所の師匠（默阿彌）に相談しました所が、堀越の方には本行を直した勸進帳があるから、いつそ本行の土蜘蛛をやつた方が、高尙で（今の時世にはまつて）よからう、といふのでさうする事になつて出來たものです云々。

と語られてゐる。けれども此の能曲同樣の所作を敢て新作したには、時勢の然らしめた以上に、尙他の理由も存してゐたらしい。其の一つは能が明治の初年には上流よりも却つて下流に親しんだといふ

事である。明治以前に於て、能も歌舞伎劇と同じく頽廢の極に達し、此れの隱潰えんとしたに對して、能は乾からびんとしたのであつた。然るに維新の爲めに從來の眷顧たる上流社會に忘れられ、一時は殆ど衰滅に瀕したのである。それが爲めに能樂に從事してゐた人には生活の必要から、維新以後復活の曙光を認め得た明治十二三年頃までには、屢々市中の寄席へ藝人格として現はれ、能及び狂言を演じたこともある。或は下谷の廣德寺などに、演能會の催されたのも度々であつた。無論その爲めに、寄席が大入りになるといふではなかつたが、餘程通俗化されたのは事實である。默阿彌も熱心なる鑑賞者の一人であつた。これらの事情から、武家の式樂として位を取つてゐた能が通俗化され平民化されたので、時世の要求を參酌して、『勸進帳』以上に能臭味の高い『土蜘蛛』が生れたのであらう。

尤も默阿彌には、これより前にも、所作事の作はあつた。例へば『隅田川の狂女』であるとか、『連獅子』の如きはあつたが、在來の常套を脱しないもので、『土蜘蛛』に至つて、面目を異にした所作、振事的作物になつたのである。『土蜘蛛』は心ある人々からは『能七分、芝居三分ともいふべき』ものだと非難されたが、一般評はよかつた。時代の好尚にも適つてゐた。菊五郎が新古演劇十種を企て、團十郎が新歌舞伎十八番として『釣狐』、『紅葉狩』等の所作を加ふるやうになつたのは、此の作に端を發したのである。

『土蜘蛛』は長唄であるが、淨璃瑠としては此の外にもあつた。狂言淨璃瑠中では、矢張り清元が最も多かつた、三千歳、直侍の『軒の雫に袖濡らす思入谷の別莊に』『忍逢春雪解』は、默阿彌の作中でも傑れたもので『島衛』の中のお照と望月の『色増栬夕映』（俗に雁金）などと共に名代の清元である。

また、大切の狂言淨瑠璃などに時世相を穿つ事は、前前からのしきたりだが、殊に此の時代の急速な變り方に作つて、その取材の上にも新しい流行を絶えず取入れた。瓦斯燈が點ぜられた時には『意中闇輝瓦燈』ができ、百人藝や百面相が流行すれば、直に捉へて舞臺に上せた。次の期に入つてからも『共進會』、『茶リネの曲馬』、『憲法發布』、『風船乘り』などが新作された。

九

默阿彌は嘉永、安政の往にし日より、倦まず撓まずよく働き、よく書いた。かくて明治十四年に六十六歳の壽を迎へて、退隱する旨を發表し　年の十一月に二代目河竹新七としての一世一代を書納め目出度く引退し、名も古河默阿彌と改めたのである。

退隱しようといふのは、かねてからの志願であつたが、いよいよ決心したと聞いた某氏が、身體も壯健故、もう二三年は勤めてもよからうと勸めた時に、次のやうに答へたと『歌舞伎新報』に誌され

てある。

成程お説は御尤なれど、元來狂言作者は戯作者と違ひ、專ら世の流行を穿つが職分故、所詮老年になつては勤まらず、自然と筆に艶がなく兎角流行におくれ勝ちなり……故人鶴尾南北翁は、七十六迄新狂言を綴りて世に流行せしが、是は稀なる名人にて中々我等の及ぶ所にあらず。老いては子に從ふといふ譬もあれば、跡は門人に讓り疾より隱居致す心で、昨年向島の花屋敷へ初代河竹新七の碑を建て名を閉ざし記念碑も殘せば、最早や之れにて思ひ置く事なし。是れよりは、隱居仕事に一幕宛も書いて助ける心なれど、成べくは世の苦をのがれ生來好な芝居故、六二連か水魚連へでも加入して、平土間で見物したいが此の上の願ひ……

であると、かう決意した次第を語つてゐる。

退隱の準備として、門人に座を讓つたといふのは、二三年前からの計らひで、市村座をば竹柴金作に、猿若座をば同篆造に、春木座をば同銀藏に、新富座をば進三、幸二、金作の三人に任せようと、ぼつ／＼實行してゐたのである。

他の一つなる先、初代河竹の碑『忍塚』を建立しようとの考は、明治前からの宿願であつたと見えて、津藤の手紙中にも、唯好以、忠甫などといふ作り名を列ねて『しのぶ塚の裏へほり入れ候時は此の内の名でほり込む積に候』とある。それが津藤の生前には、果し得ずして目論見までに留つてゐたらしい。然るに座元としての、守田勘彌の事情にも鑑みて、引退を決意したので、その前年までに出

來せしめたものである。

もともと默阿彌が河竹新七を襲名したのは、左交等の勸めに基いたので、單に番附面に途絶えてゐた名前を、相續したに過ぎなかつたのである。別に其の血緣ある遺族もあつた譯ではなく、又尋ねても一人の緣者さへ見出されず、先代の菩提が何處にあるのか、それすら湮滅同樣に歸してゐたのである。すると或る日、代々の菩提寺の源通寺へ、年回の法要に默阿彌が行き、其の折の雜談中に、住持から先達唯念寺地中の南松寺を訪ねた時に、そこの住職が『あなたの檀家に河竹新七といふ狂言作者があるさうだが、その先代の河竹新七さんの墓は、當寺にあつて今は無緣同樣になつてゐるが……』と言ふ話があつたと聞かされた。默阿彌は此の話を聞いて早速南松寺へ行き、調べたところがまさしく初代の墓なので、厚く法要を營み、それから忌日忌日の香華から盆暮の布施物までも怠らず屆け、ねんごろにとむらつてゐた。

其の後、維新後に到つて市村座の仕切場の一人から、一包みの正本を贈られた中に、初代河竹自筆の『垣草戀寫繪』の淨瑠璃が出たので、此れを自ら淨寫して根方に埋め、場所も因みある隅田川の畔なる梅屋敷（百花園）に、根生川石の碑を建て『忍塚』と名づけた。明治十一年の春に取掛り、十三年の末までに竣工したのである。其の碑面には、

隅田川よ二面よと歌舞伎にも淨瑠璃にも世にもてはやさるゝ忍賣りは、安永四とせ中村座の春狂言に初代中村

仲蔵お勸め、前の河竹新七が作なり。そが正本を或人より贈られて久しく秘藏せしは、名を嗣者の幸ひと悦びしが、此度こゝに埋みて昔し忍ぶの塚と名づけ其の故よし記しつくるは、隅田川の流れ絶えず傳へて二面のふたつなき功績を後の世に遺さむとてのわざになむ有りける。明治十三年三月　二世河竹新七記

と誌された。書は富當遠事高林二峯氏、石鐫は松仙芝といふ者であつた。

十四年の十一月興行には、默阿彌一世一代の口上看板が、新富座の前へ飾られた。狂言作者の口上を座元が述べたといふ事は、絶えて聞かない榮譽であつた。其の全文は次の通り。

一御區中樣益々御機嫌克被遊御座恐悦至極に奉存候随而狂言作者河竹新七義追々老年に及世之流行に遲れ候迚四五年前より退身致度と申出候得共作者無人之折柄今四五年相勤候樣申延候所早くも其期限に至り是非々々今年者退身致度と再三之願難默則願ひに任せ當狂言を一世一代と仕り退身爲致候且新七義は天保五年五世鶴屋南北門人になり勝諺藏と名乘り作者見習に出勤し其後故有りて河竹新七之名を嗣ぎ弘化四年人々の進めにより立作者と相成今年迄三十五年間書綴り候新狂言御評判に預り候も全く御贔屓樣方の御蔭にて今般目出度退身致し候は作者冥加にかなひし事故當人は心魂に徹し厚く御禮奉申上候猶當狂言も拙作ながら書納めに候得ば悪き所は御見流被下御評判宜鋪願上候又は一座之俳優も舊來之馴染に共々力を盡し相つとめ候へば何卒新狂言初日より被仰合賑々鋪御見物に御來車の程偏に奉希上候。　座長守田かん彌

此の一世一代の書納めとして、新作したのは、白浪作者の名に背かぬ「島衛月白浪」で、五幕九場

からなる世話物であつた。前の六月興行の二番目に新作した『古代形新染浴衣』に發端を見せた强盜明石の島藏、松島千太の二人の行方から結局までを、描いたものである。さすが白浪作者の書納めだけに、作中の主要なる人物を五人までも盜人にしてある。これに就て、作者は後年次のやうに斷つてゐる。『賊の狂言の作納めに脚色たる物なれば、主なる役は賊にして後改心をなす事になしたり、されば賊でなくもがなのお照までも賊にせしは、白浪作者の一世一代、賊を主とせし狂言故、例の描き條立も、多年御愛顧蒙むりし好劇家の諸君方よろしく見免し願上候。』と。

發端の際の語りに、『おそのが親の福清は、聟より借りし千圓の金をその夜盜まれしが、賊は明石の島藏と松島千太、二つに分けて朝霧に島隱れ行く島藏が、二度の出逢ひは秋狂言』と斷つてあつたので、此の先きはどうなるかと、見物の方も好奇心を募らせたものである。卽ち『島衛』は其の後を受けて、『若葉の闇に奧山から西と東へ別れたる』千太は、銀行家濱崎千右衛門と名を更へ、麥藁のシャツポ、單羽織、袷の着流しに駒下駄といふこしらへで、奧州は松島なる兩親をたづねようと、白川宿まで來て辨天お照に現を拔かして逗留中、伯父に逢ひ兩親の亡つた事を聞き、東京へ引返す。『扨島藏は霧深き旅路に幾夜明石潟、三歳ぶりにて磯右衛門お濱に廻り大津繪の、心の鬼も忽ちに發起なせしは伜の片輪、惡の報いは早手の難船』に遭ふ。さすが兄分だけに、强盜に入つて福島屋清兵衛の足を切つたと同時刻に、伜の岩松の足に怪我をして跛者になつた事を知つて悔悟し、金を調へ返

じた上で、自首して出ようと決心して東京へ戻り、千太と二度の出逢ひをする。千太は惡心未だ去らず夫の辨天お照一條から望月輝に恨を持ち、『夫婦を殺して有金を殘らずさらつて上方へ、高飛びする了簡』になり、島藏に加勢を頼む。

然し、島藏はとくに改心し、明石屋島藏と呼んで、酒屋の亭主になりすましてゐるのだから、千太に異見し、改心して堅氣になれと勸めるが、聞き入れない。そこで加勢に頼まれる相談旁々九段の招魂社鳥居前へ、夜の十時を合圖に二人は會した。千太は先づ望月を殺さうといふ動機を物語り『嫌でもあらうがコレ兄貴、一役助けてくんねえな』と頼むのを島藏は聞かなかつた。彼れは悴の片輪になつた次第を語り『親の因果が子に報ふと世の譬にも言ふけれど、かう覿面に報ふ物かと心がついて、惡事はすつぱり止めにしたから、それは勘辨してくれ、手前も好い加減に止めたらどうだと止めるが血の氣の多い千太はます／＼言ひ募り、果ては島藏を不實だ、臆病者だと罵り、惡く留めだてすると貴様も殺すぞと切つて掛るのを、島藏が取つて組伏せ猶諄々と說得するので『堪忍強き島藏が異見も秋の小夜風と共に身にしみ惡黨の、千太は夢の醒めたる如く、善に返りて兩手をつく』に到る。この改心が大詰の五幕目であつた。此の幕切れの白に『……氣も荒浪の引汐に……忽ち善（前）に返る浪……』といふ所があるが、これは多分後に述べる、浪頭の巴に『引しほ』とした摺物を利かしたものでもあらうか。

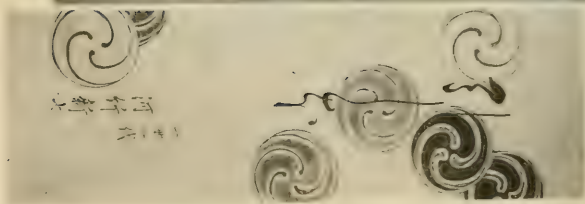
招魂社前の一場こそは、篇中の眼目で、また默阿彌の最も力をこめた場であつた。島藏に扮した菊五郎も、千太に扮した左團次も、亦極めて成功した技藝を示した。後に名古屋で、明治式の江戸世話物を演じて此の場に到り、滿場水を打つたるが如く靜まり返り、始めて江戸の新世話物に感嘆したといふ話さへある。その位に特色的で力强い作であつた。又元來此の作は、書納めと名のついた物だけに、始めから門弟の助筆も借らずに一人で書いた上に、全部の本讀みも唯〻一人で濟ませて、些しの撓みをも見せなかつたといふ。殊に此の招魂社前を讀んだ時の如きは、巧みなる讀手が又特に注意を拂つたものだから、さながら舞臺の上に其の光景を見るがやう、唯もう並みゐる座中いづれも首をうなだれて、咳一つするものもなかつたと傳へられてゐる。

默阿彌の一世一代の披露と、書納めの狂言とに餞して、六二連と歌舞伎新報社とから、一張づつの引幕が贈られた。

また名納めのしるしとしては『引汐』と名づくる摺物が出來た。三題噺頃以來因みの深い畫工の柴田是眞翁が、引き汐に橫這ひの蟹を描いたもので、それには次のやうな自述の狂文と狂歌とを添へた。

幼き頃竹柴の浦邊に育ちし由縁にや、濱の眞砂の盡せざる彼盜人の狂言を、員多く脚色しゆゑ、白浪作者と言はれしも、素より智惠の淺瀨にして深き趣向のあらざれば、沖を越したる功しなく、唯長しほの長々しくも、硯の海に年を取りしを、算ふれば早五十年、額によする漣に磯馴の松の腰も曲り言の葉の老いさびぬれば、玆らが

一世一代摺物　引汐

（包装紙）

汐の引時とて、引いはひしてまた元の、涙の素人に歸るになん。

河竹其水

腸のなき愚かさに直な道知らで幾年橫に這ふ蟹

然し此の摺物も、ほんの身祝ひのしるしとして、内輪の極く親しかつた、仲間内だけへ配つたに過ぎなかつた。默阿彌は交際のよかつた人だけに、諸方の花會へも、必ずいやな顏をせずに、よく附け物をしてあつたのだから、若し名納め會でも花々しく催したならば、忽ちにして、盛んな會になつたであらうと、それを勸める人もあり、中には名義だけを二千圓で貸しては如何などといふ人もあつたが、仰々しい事を好まぬ、名聞嫌ひな默阿彌は、顧みようともしなかつたといふ。

花も花なれ、默阿彌の退隱する際には世間から等しく惜しまれて引いた。『東京ふりがな新聞』には『近世狂言作者の名人と呼ばれたる河竹新七翁は今度の狂言を以て退隱さるゝは如何にも惜しむべき事なり』と述べた。『繪入新聞』の原鹿閑人は『無類大極上々吉の卷軸に位する翁が、身を退きて陶朱公が顰みに倣はるゝは、おのれが甚だ遺憾とする所なり』と述べてゐる。此の『繪入新聞』の記事に對し『讀賣新聞』の北古二氏は『河竹其水氏隱退を惜まぬ』といふ一篇を掲げた。『マア理窟をお聞下さい』といつた書出しで、故人小團次と菊次郎の二人へ、今の河竹氏を加へて、三幅對と評せられ、作者に妙ならざるはなかつたけれども、『斯程名擧ある作者と雖も、ソコガシハヤタといふ迺道は必ずな

き能はず』それが三幅對時代には眼立たなかつたが、

今の俳優は氏の作に遠く及ばざればソコガシバヤダを隱すを得ず。今は見物に我慢をさせるのが追々はげしく其の口惜しまぎれ（デモあるまいが）つまりアラを見出すなり。然るに氏の退隱後は、作者と役者が片荷づらず穴埋められの穴埋めつ、丁度好い加減になる事必せり。拙生は河竹氏の退隱を（實は惜しいが）惜しまぬの不埋窟斯くの如し。ア丶骨が折れた。

とかういふのである。要するに默阿彌の退隱は、少くとも厄介物が居なくなるといふやうに受取られはしなかつた。

默阿彌といふ名は、藤澤山遊行寺から、明治十四年十一月二十五日に贈られた阿彌號である。隱居してもとのもくあみになり、默するとの意にかなつたものであつた。

また、摺物に載せられた狂歌は、明らかに退隱を意味してゐるが、これと殆ど同時に出來て同じやうな感想を述べた狂歌に、左のやうなのが殘されてゐる。摘錄して此の章を終らうと思ふ。

古桶の箍もゆるみてもる水に、もとへ戻らぬ老をかこちつ。

尾を卷いてこそ〳〵逃る犬作者、批をば打たるる株はのがれつ。

第十　默阿彌時代

一、劇界は退隱を許さず――三世河竹新七と其水と――老成の域――二、千歳座の開場――『筆賣幸兵衛』――『四千兩』と『加賀鳶』――音樂の活用――死神と狂亂――『戀闇鵜飼燎』――際物――三、時代物の圓熟――『高時』――其の作歷――『伊勢三郎』――『華山と長英』――四、所作事――『紅葉狩』――新古演劇十種――『戻り橋』――左團次――節附と振附と――五、演劇改良會の設立――天覽劇――演藝矯風會と――默阿彌の態度――交友――六、歌舞伎座成る――『春日局』と喜壽――眞の退隱――未完物二種。

一

前にも述べた通り、默阿彌と改めて退隱した以上は、各座から實際に退く積りであつた。既に二三年前からの心組みで、市村、中村、春木の三座は門弟に讓つてあつた位で、新富座からも引かして貰ふ考であつた。然し劇界は、老體とは言ひながら矍鑠たる默阿彌の隱栖を許さなかつた。特に勘彌は默阿彌を離さうともしないので、多年の恩義上にべもなく去る事もならないので、止むを得ず新富座

だけへは、出勤しなくてはならなかつたけれども、自分はスケの名義で客座に遁れ、立作者の地位は竹柴金作に與へた。默阿彌は門弟の爲めには、悦んで進路を開けてやつた人である。

斯くて明治十七年の四月に到つて、第一の高弟たりし竹柴金作に、三代目河竹新七を嗣がせそれと同時にスケの默阿彌は通し、紋番附の下段へ頭取と列べ、『作者』として載せられた、また此の時に新富座の立作者の地位に進めた第二の高弟竹柴進三には、明治廿年三月に俳名の其水を與へて、いよ〳〵隱居株を明白にしたのである。

然しながら、默阿彌を飽くまで信賴する勘彌、菊五郎等は、猶强ひて筆を取らしめた。默阿彌自身もその健康、想像力ともに衰へず、作劇上の冒險をも、敢てなすの勇氣があつたので、默阿彌時代を成す十年間にも、少なからざる製作があつた。

作柄も、年を經るに從つて老熟して來たので、世話物にも、活歷式の時代物にも、優秀な、渾然たる藝術品をなすものが認められる。

二

團、菊、左と並稱された三名優が一座して、默阿彌の新作によつて其の特色を同時に明らかに見せたのは、明治十八年に久松座が改築されて千歲座となり、勘彌の經營に移つた際の第一回興行であら

う。
一番目の時代物は、團十郎、左團次を中心とした『千歳曾我源氏礎』で、二番目は菊五郎中心の『筆賣幸兵衛』であつた。左團次は碁盤忠信に於て、勇壯活潑で花やかな得意の技能を揮つた。其の大詰五幕目へ、中幕風に置かれた『山伏摂待』は新歌舞伎十八番と銘打つて、團十郎が佐藤嗣信の母教信尼に扮して、義經、辨慶を接待し、旗揃へをするといつた、寂しい澁い活歴的作物の標本であつた。菊五郎は自分畑の世話物なる筆賣幸兵衛で、息もつかせぬ手腕を示し好評を得た。

此の時の『筆賣幸兵衛』は、菊五郎の爲めに新作された世話物中での傑作であるが、默阿彌時代が菊五郎を主なる對象としてゐるだけに、此の他にも勝れたものが書下されてある。舊時代に題材を求めた『新皿屋敷』及び『浮世清玄』などが算へられる。名題こそは、舊來の作に准らつたものであるが全部新作で『幸兵衛』と共に、默阿彌時代を飾る、代表的世話物である。小團次時代の『鼠小僧』『小猿七之助』或は『村井長庵』等と、對峙するものであらう。『新皿屋敷』は三幕九場からなる二番目狂言、世話物である。芝片門前の魚屋宗五郎の妹蔦が、所望されて磯部家の妾となつたが、不義の汚名を着せられ、有らぬ罪さへ言上げられて惨殺される。それを聞いた宗五郎が承知せず、酒の力を借りて玄關へ暴れ込んで訴へに及び、やがて邪正明白になると言ふ筋のもので、菊五郎がお蔦と宗五郎とに扮した。中でも宗五郎の生酔は見物の胸を躍らせ、嘆息をつかせた程の至藝を見せた。また、默

阿彌が生醉の心理狀態を描破して成功したのは、ちやうど『筆賣幸兵衛』の狂亂に效果を收めたのと同じ行き方のものであつた。

芝の魚屋へ、お蔦の召使つてゐた女が尋ねて來て、事の顚末を物語る。宗五郎は其の間一言も口を利かないで、ぢつと聞いてゐて『コレ堪忍しておくんなせえ、今の話を聞いちやァ酒でも吞まにやァ居られねえ』と、酒を飮み始める。實は此の宗五郎は、親仁の白の中にもある如く、『不斷魚屋風情には珍らしく理窟を言ひ、道を道と立てる氣性が、酒を吞むと打つて替り、藪に馬鍬の不理窟のみ、恩も義理も忘れてしまひ、度々無法な事』をするので、願をかけて禁酒してゐたのが、餘りの話に茲で破れたのである。二升樽が明いた頃には、大分醉がまはり、其の樽を下げたまま人の立つて留めるのも聞かばこそ、『今は禁酒も破れかぶれ、酒の力で玄關へ』躍り込み、亂暴を働き取り抑へられる。取抑へられてからも、泣きつ笑ひつ怒りつし、果てはぐたぐたになつて、『ままよ三度笠橫たに冠り、旅は道連夜は情、コリヤコリヤ』と手拍子をかしく打ちながら、都々逸を唄つて寐入るまで、菊五郎の微妙な藝も申分なかつたが、その刻々に移り行く情緒を、寫實的に細かく描破してある作もよかつた。

故人となつた依田學海氏は、默阿彌を始め時の狂言作者を、手峻しく攻擊した急先鋒であつたが、ある時三木竹二氏に向つて『作者なんて默阿彌や新七のやうな馬鹿がなれるんだもの……では、君は何が好いと思ふのか、え、幡隨長兵衛に魚屋宗五郎だつて。さうさね、あの宗五郎が段々生醉になる

所は、あの筋は立つてもあゝは書けないねえ、やつぱりそれでは天才か』と言つた由が、雜誌『歌舞伎』の第九號へ三木氏によつて記載されてあるが、急激で頑固な依田學海氏が、かういふ賛辭を呈したといふ事は、此の作の價値を想はしむるに足るであらう。『筋は立つてもあゝは書けない』といふ一語は、直ちに移して狂言作者としての默阿彌の價値、手腕の全部を、適當に言表した意味深い評言のやうにも思はれる。

『浮世清玄廓夜櫻』は、菊五郎が生靈をして見たいとの希望を容れて、其の時代物の『清玄』を世話で行つた、美しい詩のやうな作で、『新皿屋敷』と同じく評判がよかつた。兩作ともになぞらへた趣向のもので、一篇の筋も人物も在來の作とは、不即不離の關係になつてゐる『皿屋敷』の皿が茶碗になつてをり、『清玄』に於ける入間家の息女櫻姫が、吉原入間屋の抱妓小櫻になつてゐると言つた風の、三題噺的才能の餘になつた作であつた。けれども其の作は、全く獨立した新作として鑑賞するに値ひする。

上に述べた世話物は、三幕からなる二番目物であるが、九幕といふ通し狂言の世話物に『四千兩』（十八年）と『加賀鳶』（十九年）とがあつた。二つながら千歳座で、菊五郎と九藏とを中心にして書卸され、同じく好評を得たもの。舞臺も同じ江戸なら、色調も同じやうな作であつた。

御金藏破りの富藏（菊五郎）と藤十郎（九藏）とを描いた『四千兩小判梅葉』は、此の前後から劇

界と密接な關係を結び始めた、田村成義氏から根本の材料が提供されたものである。其の往昔『鬼あざみ』の時にも諷した、藤岡藤十郎の一件書類が氏の家に在つて、それを土臺にしたのであるが、それもほんの骨子に過ぎずして、殆ど全部創案になつたものと見て差支へない位のものであつた。

此の作では、熊谷宿の饂飩屋なる吾家へ、富藏が暇を告げに立寄る世話場もよかつたが、他の一つの眼目は、傳馬町の御牢内であつた。江戸時代の御牢内をそつくり寫したもので、牢屋内の狀態から習慣から、一種の慣用語、儀禮などまでが、悉く取入れられたもので、今から見れば、其の時代の牢内生活を描いた、唯一つのものとなつた。此の場を書く爲には、いかに默阿彌が浮世學問に達してゐたからとて、牢内の事情までは分からないので、或は屋根屋の彌吉といふ親分を介し、或は入牢して牢名主までも勤めた、經驗のある人々の話を聞いて、苦心の末になつたもので、よく出來た場である。また此の時に牢内の情調を漂はすに、適當な音樂も合方も得られないので、あれこれと試みて非常に困じ果てた末、嘗て御牢内の裏手には鍛冶屋があつて、其の音が聞えてゐたとの事を聞いて、トッテンカチノ\といふ鍛冶の音を合方に使つて適り、よく御牢内の空氣を作り得たなどといふ、言はば苦心談めいた事もあつた。

『加賀鳶』の作歴に就いては、十八番物の『助六』代りに世話の『黑手組』を書いたと同じやうな話がある。これより前小團次信仰の菊五郎は、是非とも『村井長庵』を演たいと言つてゐたが、默阿彌は

其の不適當である事を說いて、沙汰止みになつてゐた。そこでその溜飲を下げる爲に作られたのが『加賀鳶』であつた。長庵どころを按摩の道玄で行き、正直一途で篤實な久八の代りとして、いゝ、いなせな加賀鳶の梅吉が書きこまれた。赤羽橋の重兵衛殺しは此れにあつては、御茶の水土手の百姓殺し。さておそふを欺す長庵の宅は、本郷言日長屋の道玄宅と相對せしめたのである。それに菊五郎の望みを入れて一代目梅壽菊五郎の演じたといふ死神を加へて、道玄と死神とを主題として企てられた作であつた。

『加賀鳶』には果して成功した。道玄がよく、九藏の加賀鳶松藏もよかつた。松助の鳶の者五郎次もよく、特にその五郎次に取りついて入水せしむる、死神は評判になつた。然し尙一段と注目すべきは、其死神の出る場へ、淸元の淨瑠璃『岸柳朧人影』を取入れて、それが十分に舞臺上の效果を收めた事である。幽靈の出る場へ、寂しい竹本でもある事か、いきな淸元を使つたのは前後に例のない事であつて、默阿彌にして始めて活用し得たものと、黑人筋から評された。

斯く音樂を用ひて成功した場面には、他にもこれと好一對をなすべきものがあつた。それは夫の『筆屋幸兵衛』で、貧家の世話場で悲嘆の最中に陽氣立つた、冬を餘所なる淸元『風狂川邊の芽柳』を、諧謔的に用ひた事である。幸兵衛が、母に別れた二人の子を左右に抱へて、浪々の身のその日／＼に迫る貧苦に得堪へず、果ては頑是なき子を刺殺し、己も自害せんものとおつと我子の顏を見つめて涙に暮れる――と、突然チヤチヤチヤンチヤラスチヤラチヤチヤン……と船の騷ぎになつて『吹けよ川

風あがれよ旅中の小唄の顔見たや、彈く三味線も波立ちし……』といふ、思ひきつて陽氣で、いゝ、いきな淸元を、而も延壽太夫の玉を轉がすやうな美しい咽喉で語らせたのである。途方に暮れた幸兵衞は、此淨瑠璃を聞くにつけ『身の盛衰と貧福とは言ひながら、かうも隔てのあるものか』と、いよよ悲嘆の涙にかきくれ、終に狂亂するのである。これも凡作者が眞似たらば、舞臺をたゞ打壞すであらう、容易になし能はざる所であると取沙汰せられた。伊原青々園氏は『歌舞伎』誌上で此の點を次のやうに述べてゐる。

　氣が狂ひ出してからをかしい動作をする底には無限の悲哀がこもつてゐる。……床のチョボで愁嘆があり、泣き崩れると、突然淸元で側の三味線を彈き出す、此の一瞬間が自分には言ふに言はれぬ快い感じがした。それから始終義太夫と淸元とが、入違つて、悲しいとをかしいとの矛盾を縫つてゐる。音樂の力でこれほど舞臺のエフエクトを收めた所に此の作の價値はある……仕舞ひに念佛を淸元で語らすのも、みじめな感じを融和して好い心持である。

と、此の外默阿彌の創造した舞臺美、詩美には——準樂劇の常とは言ひ條——三味線によつて助けられた場合が多かつた。

『芽出柳綠翠松前』は、明治十六年正月に新作され、柳生と松前屋五郎兵衞を絡ませたものである。此の時仲藏の扮した大久保彦左衞門は天下一品の出來で、數ある彼の當り藝中の白眉であつた。左團

次の但馬守も、二役多助と共に評判がよかつた。作中の四幕目は、柳生又十郎が彦左衛門の口入で、父但馬守と試合の上勘氣御免となる眼目の場で、作者の技倆も見えれば、役者の藝もよかつた。

講釋にある通りの筋で、又十郎に不義の行跡があつて、父の勘當を受け諸國修業に出で、丸目藏人の許にある事三年間にして、心貫流の指傳を授けられたので、それを土産に駿河臺なる大久保邸を訪れ、御老侯の他には御口添へを願ふものもないからと、取りなし方を頼む。そこへ次男刑部の忌日とあつて、廣德寺へ參詣に行つた戻り道、久しく大久保の老爺の憎まれ口も聞かぬから、如何かと但馬守が立寄る。氣は若いが二人共に白髮の老人、それに親しい仲ではあり膝を交へて、遠慮のない家常茶飯の話に入る。彦左衛門は、これから又十郎の詫をしてやらうなどといふ氣色は、顏にもおくびにも出さなかつた。

但。兎角今の者共は容體ぶつて、四十から眼鏡などをかけるけれど、手前などは今日まで眼鏡などはかけた事がない。

彦。眼のよいのは何よりの仕合せ、それに手前などはまだ一本も齒のぬけたのがないから、堅餅などを、ばりばりと噛れるて。

但。それは何よりお羨ましい、齒が惡くなつてからは、何を喰つても味がない、シテ耳に遠くはござらぬかな。

彦。チト聞え過ぎて困る程で、臺所で家來が惡く言ふのが直に聞える。

但。其の勢ひではお寐間のお伽も定めて若いのがござらうな。

などといふ打解けた色氣のある話に入つて、兩人がハヽヽヽと大笑ひに笑つた後で、彦左衛門が思入あつて、又十郎の勘當を許してやつてはくれまいかと――四方山の話から突として切りだすまでの呼吸は、實に巧みに描かれたものであつた。自然、不自然等の議論は措いて、意味深い閑談の休息を構へて、當面の問題に突進しようとした按配は、默阿彌の舞臺技巧を想はしむるに足るかと思ふ。仲綾と左團次との藝も、特に此處がよかつたのだといふ。

『芽出柳』は、半ば御家騷動を取扱つたやうな作で、『河内山』などと、脈を同うする世話物であつた又左團次の木崎の久藏が好評であつた『金看板』も、材を江戸時代に求めた物であるが、明治を世界とした作も無論あつた。然し新富座時代程に力の籠つた作はない。

『戀闇鵜飼燎』は、『霜夜鐘』の轍を踏んで、『歌舞伎新報』の第二百六號（十五年三月）から連載されたもので、十九年に至つて舞臺にかけられた。役者の都合上、新たに序幕が書き足されて、八幕十七場の大物にまで完成されたが、結果はあまりよくなかつた。一寸評判になつたのは二幕目の、隅田堤の身投げで、小松が米屋の文三と連立つて來て、文三が先へとび込んだので死に後れ『かう獨り殘つて見ると借金故命を捨てるのは、開化の世界に開けぬから、此處へ羽織と履物を此の儘置いたら身を投げて、誰も死んだと思ふは必定、追手のかかる氣遣ひなければ』と、毒婦の本性を顯はした小松は

一先立退かうとする。それを呼び留めて、渡小屋から出た月の宵の熊藏との掛合などが噂に上つた。その小松が笹子峠の辻堂で、三匹の狼に食ひ殺される慘たらしい場面は、最早當時の人には堪はれずして、氣味惡がられ、顔を背け袖を顔に當てたといふ。

然し作者は、此の狂言心中をする小松が、菊五郎によつて演ぜられたが爲めに、出來榮えは十分であつたらうが、あの纖細な目鼻立が餘りに明敏な爲め、手に手を取つて舞臺に現れた始めから、巧みに巧んで連出した毒婦のやうに見えて、作意とは副はない致物があつた。——田之助にもがな——と人に語つた事があつたさうだ。小松も初めの中には、ほんとに初心な娘と見えなくては面白くないのであらう。而して恰も『三人吉三』のお孃吉三のやうに突如として毒婦に變り、觀客、讀者をしてあつと言はせたかつたのであらう。

猶此の外にも、濱町河岸の箱屋殺しと謳はれて、有名であつた花井お梅の實事譚を脚色したのもあり、磐梯山の爆發した際に、時を移さず『音聞淺間幻燈畫』として、噴火當時の慘害を劇化したのも此の頃である。朝鮮問題の起つた時には『朝鮮長屋』といふ世話物で事件を利かした事もあつた。がすべて當て込みの趣向が利かなく通じなくなつてゐたので、どうも面はしい結果が得られなかつた。

上に述べた世話物の作は、揆を同じうして菊五郎が其の中心であつたと言つてよい。菊五郎と默阿

彌との關係は、小團次とのそれに亞ぐ密接なものであつた。田之助が甘へるやうにして、作をして貰つた事は述べたが、菊五郎もをさ〳〵彼れに劣りはしなかつたであらう。あらゆる種類の役柄を、演じ盡してしまつて何か變つたものを變つたものをと注文しては、默阿彌に筆を執らしめたのである。團十郎は時代の波に押されながら、外界の思潮に耳傾けながら進んだに反して、菊五郎は外界には頓着せず、寧ろ自家の趣味にもとづいて、自己の藝術を擴張しようと努力したかのやうに思はれる。で、其の趣味も、默阿彌と略〻一致したものであつたから、從つて作物にも凝つたもの、江戸情調を主にしたものが選まれた譯であらう。或人が明治以後默阿彌の傀儡となつたのは、菊五郎であると言つたが、作物との關係から見れば、或はその位であつたかもしれない。個人としても亦菊五郎は、一も二もなく默阿彌を慕つてゐた。いなせな江戸ッ兒氣質で、物に熱心な凝性といふ所は、默阿彌と似てゐたゞ何くれとなく默阿彌張りに、默阿彌風にと心がけ、崇拜的の眼を以て畏敬してゐたらしい。また面白くない事でもあつて、他と睨み合つてゐるやうな場合でも、默阿彌が口を利いて、和解した事もあつたといふ。一寸一つ工夫物を賴むにも、趣向の智慧を借りるにも默阿彌に依賴した。物事に几帳面な所から糊の付けやうまで、默阿彌風にしなくてはいけないと、小言を言つたさうである。

三

前期を受けて、團十郎の活歷に應ずる新作も出來た。文士、學者の說が次第に行はれ始め、亦團十郎自身も覺醒し、歌舞技劇との調和を計らうとするやうになり、『默阿彌時代』の中頃からは圓熟の境に進むに到つた。

守田座の移轉について、他の二座も次第に市中の繁華へ出て來たが、中村座も淺草鳥越に新築して十七年十一月に開場した。その第一回の興行に際して書下したのが『高時』であつた。此の作は其の前年の一月頃から、團十郎の爲めに發企された『求古會』の評議の結果、團十郎の注文によつて、默阿彌が執筆したものである。求古會といふのは黑川眞賴、關根只誠、松岡明義、川邊御楯等の諸氏を始め、默阿彌も同志の中に算へられてゐたのであるが、時々團十郎の宅に集つて、彼れに適した狂言を相談し合ひ、活歷を應援するといふのが目的であつた。

名題は『北條九代名家功』で、書下しには上の卷が高時の田樂舞、中の卷は本間山城守が大舘次郎を討つの件で、義貞の稻村ヶ崎に於ける太刀流しが下の卷になつてゐた。此の中で評判のよかつたのは、剛頑な高時が超人的な天狗に飜弄されるといふ、作意にも成功してゐる『高時』の部分だけであつた。作者は求古會の期待に背かないやうにと心がけたので、書いてゐる間も又書上げてからも、『どうも芝居にならなくていけねえ〳〵』と、こぼしぬいたさうである。

『伊勢三郎』は、初めの名題を『學源氏陸奧日記』と呼んで、『高時』と共に、新歌舞伎十八番中に加

へられたものである。左馬守義朝に大恩ある、信連の子伊勢三郎能盛は、いつかは源氏を再興なし、其の御味方せんものと、上野國夜鼻宿に身を潜めて、切り取り強盜を事としてゐる所へ、兒臺の義經が熊坂長範の手を免れて迷ひ來り、一夜の泊りを求める。三郎やがて義經と知り、陸奥なる秀衡が許まで御供せんと出立するに終る。一幕一場限りのものであつた。『作の品格が高く』『默阿彌が進んで書いた、改良劇として知られてゐる。能曲を歌舞伎に移したといふ行き方で』『セリフ萬端高尙にて、花やかは人物の出る順序などまでも、幕明きを掃舞臺にし板付の仕出しもなく、竹本を地謠と見せ、又に演じ終りたるは、目新しかりき』とは、當時の六二連の評語であつた。

尙此の外にも、討死に臨んで白髮を染めた『髮染の實盛』。浮島ヶ原で義經と賴朝との對面する件を書いた『會稽源氏雪白旗』又び謠の筋に據つて多田滿仲を書いた『二代源氏譽身換』等も出來た。これらは悉く團十郎中心の、傾向を同じうした中幕物であつたが、長篇の作もあつた。それは『崋山と長英』、『關ヶ原』の二つである。

崋山と長英とを絡ませて、西歐文明輸入の先驅者、理想家を描いたのが『夢物語盧生容畫』であるその材の多くは、藤田茂吉氏の『文明東漸史』に仰ぎ、これに崋山の後嗣小崋畫伯の談話や、田村氏の家に存してゐた記錄等を參照して、勘彌の希望により、新作されたものである。六二連は此の作を評して『殊に狂言が時世に適り劇場嫌ひの大先生までも見物しなければならぬやう』に出來てゐる

と言つた。深い内面的の意義までを、作の中に盛ることは望まれなかつたが、團十郎は崋山に扮し、沈欝にして藝術家肌の革命家を、巧みに舞臺上に表現し、左團次は血の氣の多い一轍な町醫者長英に扮して成功を得た。二種の全く異なつた性格は、二人の優人に極めてふさはしいものであつた。此の時の中幕に新作された、九紋龍と魯智深の『雪のだんまり』も、派手で評よく、此の頃から團十郎は活歴の圓熟時代に入るのだとは、『市川團十郎』の著者伊原氏の言說である。

此の興行は、默阿彌に取つて尙一つの記念を殘した。それは此の時の大切、狂言淨瑠璃の中で披露した『やまと新聞』社から作者へ、當り的を染めぬいた引幕が贈られた事である。そしてこれは默阿彌へ贈られた第四の引幕になつた。

『關ヶ原神葵葉』は、所謂活歴の十分に熟したもので、默阿彌時代の代表的史劇である。これは例の松本順氏が、その家藏の隨筆中に『勝つて兜の緒をしめろぢやに』と、神君の仰せられた事をそのままに誌した所があつて、その白を團十郎の大御所樣に言はせて見たいと、話のあつたに基づいたのである。その故もあつてか、團十郎の德川大御所が一等の出來で、二役の細川奥方の自害もよかつた。大御所樣は黄門公と同じやうな役柄で、成功した團十郎の老役であつた。菊五郎は藤堂高利と石川三成、左團次が鳥居彥右衛門と湯淺吾助とに扮した。

此の興行中に、或る日芝居茶屋から默阿彌へ使者が來て、藤堂公が此の狂言の作者に逢ひたいとの

旨を傳へた。默阿彌は小膽な人だつたから、又前の長英で横槍が出たやうに、どうせ好い事ではなからうと思つたので、代理の者をやると、執事がゐて、先祖の藤堂が大功を立てるやうに書いて下すつたのは、家の名譽である、これは謝意であると言つて、三方へ載せた目錄を渡されたことがあつたさうだ。

團十郎の活歴は『夢物語』前後から、まさしく時代とも折合ひ、又團十郎の藝そのものも圓熟の境に入つたと認められてゐるが、それに伴なつて默阿彌の史劇も、明治以後廿年を經て漸々に成熟したのである。改良說の盛んに唱へられた、此の時代とも共鳴ある作物を提供したのであつた。明治の史劇は、『伊勢ノ三郎』（十九年）、『關ヶ原』（二十年）の頃までに、一先づ完成せられたものと見てよいであらう。勿論此の活歴の圓熟完成に就ては、第五節に述べんとする依田、福地の諸氏を始めとして、文士、顯官の指導もあり、亦改良會等の影響を蒙むつた事も少なくないが、兎も角もそれらの主張を容れて、舞臺の上に適用した實行者は——此の頃に至るまでは、殆ど默阿彌一人であつたと言つてよいかと思ふ。廿二年以後には、團十郎と櫻癡居士との提携が成立して、新しき行程に入る事にならうが、その橋渡しだけは默阿彌が濟ませた事になる。

四

『土蜘蛛』が、時代の趣味を代表して生れた、新所作事であることは前に述べた。而して此の作の迎へられた結果は、續いて此の種の新作を要求し、能模様又は狂言模様の所作事が生れる事となつたのである。

團十郎も其處に留意して、明治十五年三月の春木座に於て、狂言に出發した『釣狐』(長唄)を演じ、また能曲に出發した『船辨慶』(長唄)を試みたが、前者は寫實癖に祟られた衣裳が邪魔をして、不評に終つた。けれども次の『紅葉狩』には成功した。此の作は前に出來てゐた物の全部を、默阿彌が改訂し、これに時代の趣味を參酌して、常磐津、長唄、竹本を用ひて面目を新たにしたものである。以上三つの所作事は新歌舞伎十八番物の中に算へられて、いづれも默阿彌の筆になつたものである。

菊五郎も『土蜘蛛』の跡を趁うて、略ゝ同型の所作事を續いて上場した。『茨木』(長唄)は羅生門で渡邊綱に切取られた腕を、その惡鬼茨木童子が姿を伯母にやつして來り、奪ひ去るもの。『戻橋』は後に出來たものながら、娘小百合に化けてゐる惡鬼を見顯はし、腕を切取るまで。後者は始め常磐津に書いたもので、菊五郎の請に任せて舞臺に演じ好評を得た。『石の枕』から脱化した『一つ家』も菊五郎が老婆いばらをつとめた。これらの諸作は『新規に高尚の物ばかりを集めようと思つて』企てられた、新古演劇十種の中に加へられてゐる。

凝り性の菊五郎は、仕掛物、工夫物を悦び、又それを輕妙に演出したから、上に算へたやうな所作

事にも成功したが、『土蜘蛛』、『茨木』、『戻橋』等に於ては、亦其の相手役となつた左團次の功も沒してはならぬ。蜘蛛を退治する平井保昌、惡鬼に向ふ渡邊綱等の如き、荒事めいた役は、左團次が巧みに演出したところのものであつた。
加之に、斯の始き所作物に等閑視すべからざる節附には、近代の名手なる杵屋正次郎或は常磐津式佐があり、又振附には、花柳壽輔、藤間勘右衞門等のあつた事を忘れてはならぬ。

五

維新より明治廿年頃までの、新日本の思潮を大ざつぱに見ると、明治五、六年頃から盛んに唱道された歐化主義は、急速な發展を遂げた爲めに、やがて極端に趨り、反動的、自覺的に排外熱起り、明治廿一年頃よりは、特に國粹保存論さへも唱説されたのである。演劇改良の諸運動も、略〻それに似た經路を取つて表はれた。
明治劇壇には、必然的に動搖を來し、必然的に演劇革新、又は改良説等の起らざるべからざるの狀勢をば既に繰返して述べた。又劇部の內外を論ぜず、有志、顯官、文士、學者等が絕えず注視を怠らず、また力說しつつあつた事をも述べた。卽ち事實に於ては、明治十年頃を出發點として、演劇改良の實は着々擧げられてゐたものと言つてよい。ただ規約を設けた團體を組織するに到らなかつたに過

ぎなかつた。それが明治十九年八月に到つて演劇改良會が設立せられて、其の運動を明確ならしめたのである。此の會の主唱者で、會長を兼ねたのは末松謙澄氏で、外山正一（ゝ山）、藤田茂吉（鳴鶴）等の諸氏はその有力なる幇助者であつた。尙賛成者に朝野の名士を網羅して、政治家の井上、伊藤、大隈、西園寺の諸公、實業家では澁澤、大倉、安田の諸氏、學者には穗積、和田垣、矢田部等の諸氏が算へられた。これに作者としての技能ある依田學海、福地櫻癡の二氏が加はつてゐた。顏觸れによつて自ら示すが如くに、官吏的學者の若干、就中、洋行歸りの新學者の組織したものであつた。從つて其の唱道する所も、純粹なる歐化主義に彩られた改良說であつたといつてよい。同會の目的として揭げた法三章によれば、『演劇の陋習を改良し』、『脚本の著作を榮譽ある業たらしめ』、且つ『演劇其の他音樂會、歌唱會等の用に供すべき一演技場を構造する』等の三事項であつた。彼等は此の主旨に原づいて、口に筆に盛んに意見、主張を發表して一時すばらしい勢であつたが、實際演劇上に及ぼした效果は、比較的僅少であつた、といふのは、其の主張が現在の演劇に應ずる策としては、餘りに學者的理想的であつたからである。然し乍ら演劇史上に忘るべからざる二つの功積を殘した事は特記すべきであらう。卽ち天覽劇といふ空前の擧が成されて、河原者とも稱されて卑しめられてゐた、芝居の地位の引上げられた事と、依田學海居士と川尻寶岑氏との合作になつた戲曲『吉野拾遺名歌譽』の發表されて、少くとも形式上に於て前例なき程に、高雅なる戲曲の濫觴をなした事とであつた。

改良會の熱心なる主唱者の一人であつた、井上侯が麻布鳥居坂なる邸内にしつらへた、八窓庵の茶室開きに際して行幸を仰ぐ事となり、其の餘興に芝居を御覽に入れたのである。邸内に舞臺が出來て一切の準備は團十郎と勘彌が取計らつて整へた。明治二十年四月廿六日、聖上の行幸には『勸進帳』、『高時』等。翌廿七日には皇后陛下の行啓で『寺小屋』、『伊勢三郎』、『土蜘蛛』等。又其の廿九日には皇太后陛下の行啓があつて『忠臣藏』、『六歌仙』などが續いて演ぜられた。役者は團、菊、左、芝翫等、殆ど當時の劇壇の粹を集めたものであつた。此の際に默阿彌の作が、三つまでも其の選に入つたのであつた。

『吉野拾遺名歌譽』は、學海居士が川尻寶岑氏から舞臺技巧の幇助を得て、明治廿一年に發表された新史劇である。此の作は、當初よりの改良說に適合するやうに描かれた、古典的理想的な作で、これに活歷風の（皮相的ながら）寫實主義の衣をかけたとも評すべき、更に在來の時代物とは、脈を異にした新しい作物であつた。此の作出づるに及んで英雄なり烈婦なりが、始めて、幾分か其の人らしき內容のある言說を吐露するやうになつたとも言ひ得られる。殊に主なる人物の科詞を行るに、太平記式の典麗な文章を以てしたのは、此の作の特異點であつた。脚本を上品に、高尚にといふ當時の注文は此の作によつて表明され、少くとも一時は新史劇の標的となつた。で、かういふ意味から見て、此の作は時代を劃するに足る作であつたと言つてよい。

演劇改良會の組織された當時、會には幾分の同感は有しながら、所謂改良意見には不同意を唱へた人々があつた。即ち坪内逍遙、高田早苗(半峯)、饗庭篁村の諸氏であつた。高田氏が『忠の化物、義の化物めきたる理想的人物を排し』、坪内氏が『人情の眞を寫すを先にして、技葉末節の寫實を後にすべし』と、唱へたなどがそれである。これらは必ずしも國粹主義に立脚して、改良會に反抗したといふ譯ではなく、此人達の本來の主張であり、嗜好であつた。改良會の主唱者は多くは洋行歸りの人々で、日本劇に精通せるといふよりは、外國劇崇拜の人々であつた。それ故、彼れをば揚げ過ぎ、此れをば貶し過ぎたる氣味があつた。而してこれらに反對論を唱へた人々は、比較的公平であつたと言つてよい。即ち本邦劇の長所を知つてゐたから、改良會が他の極端に趨らんとするを抑へ、我劇の長所を保存しつつ進歩を計らうとしたのである。

かくて演劇改良會は、二三年を出でずして頓挫を來したが、改良なることは時代の要求であつて、何等かの方法で繼續すべき必要があつた。此處に於て岡野紫水氏の奔走で、後に日本演劇協會と改稱した演藝矯風會が生れたのである。會長は土方伯で、文藝委員としては、岡倉覺三、依田學海、高田早苗、坪内雄藏、饗庭篁村、森林太郎、森田思軒、關根正直、尾崎紅葉の諸氏があつて、默阿彌の名も此の中に發見される。技藝委員には團、菊、左を始め講釋師、落語家をも交へ、演習委員としては田村成義、守田勘彌の諸氏が控へてゐた。此の會の主張は略〻前述の坪内博士等のそれと同じく、又

特に實行に重きをおかんとして、數回の試演をも催した事は記憶せらるべきである。

これより前、坪内博士は明治十八年に『書生氣質』と『小說神髓』とを發表して、文壇に一時期を劃せしめ、小說を戲作の範圍より離脫せしめたのである。(謙遜なる博士自身では、決してそれが、特に自覺的に、敢てなされたものではないと言つてゐるが、自然に、それだけの價値は賦與さるべきものであつた)。又尾崎紅葉を中心とする硯友社も十八年に創立され、長谷川二葉亭の『浮雲』も二十年に出版された。森鷗外博士の翻譯に拘る『埋木』、及びカルデロンの戲曲『ザラメヤ村長』等も、これらと前後して發表せられた。つまり眞の明治文壇は明治十八年を以て出發したかの觀がある。これと聯關して、演劇改良會の設立が明治十九年で、文壇的背景を有する演劇協會の設立が廿二年であつた事を思へば、明治廿年前後に至つて稍〻成形せんとせる國民生活に應ずべく、文壇の革新と殆ど同時に劇壇にも動搖の顯著に及ぼし始めた事を知る。

默阿彌一個に取つても、明治十年以降の改良的言說が、さま〴〵の影響と動搖とを促した事は明白である。

演劇改良會の趣意書中にも『脚本の著作をして榮譽ある業たらしめ』とあり、又『本邦近時の脚本作者を見るに、其人は一も學術文章の士なく、徒らに陳腐の思想を左右彌縫し』とあるが如くに、狂

言作者を無學無識と非難し、其の作物は猥雑野卑を極めたるものであると攻撃した勢は、なか〳〵盛んであつた。無一庇無二と稱する人が末松氏の改良説を駁して著した小冊子『演劇改良論駁義』にも『……これらの學力なき人物によりて作られたる、演劇に向つて、閑雅の優美のと注文するは、途方もなき了簡違ひといふべし……兎に角今の作者がいけないといふ一事は大賛成なり』と言つてゐる。末松氏の意見に反抗せんとした人ですら、さう言つてゐる。尤も事實に於てもさういふ非難は、或點まで眞相を摘發したものであつた。彼等の間には、些細なる字句の誤用、例へば『違勅解諭は朝敵同然』と書いて物笑ひになつたり、史實又は故實に關して無智を表白したやうな場合も、尠少でなかつたからである。

これらの攻撃が、特に默阿彌一個に對してなされたものではなかつたが、何と言つても狂言作者は尙彼れによつて代表されてをり、其の上、本來用心深い默阿彌のことであるから、いよ〳〵愼重の態度を取り、輕々しく作物を發表するのを躊躇したらしい。然し一面當時の默阿彌の位置を思ひやれば此の用心も至極もつともであつたと思はれる。默阿彌の製作殊に時代物の製作が、此の頃から次第に減少して來たのも、一つはかういふ事情によつてであらう。而して改良會の生れた、明治十九年の十二月に發表された『伊勢三郎』及び『關ヶ原神葵葉』等は改良説を參酌して作られた物だといへる。

明治十九年の十一月に、默阿彌は攻撃ならぬ一通の忠告書を、公開狀の形で受取つた。それは此の

月の讀賣新聞へ、四回に亙つて載つた朧月庵主人（坪内博士）の『河竹默阿彌翁に告ぐ』と題する一篇である。其の要點を抄出すれば凡そ三箇條になる。

第一、世間の好尚に媚る勿れ、下等にも上等にも媚る勿れ。翁の老練の天才を以てして、これこそ人情の極意なるべし、これこそ現今の世態ならんと暗に感得せし美妙の廉のみを、着々其の著述に寫し出し、これを劇場に上して見よ。

第二、脚色の奇を求むる勿れ。脚色は狂言の方便なり。脚色のみを重んじ、肝腎の人情世態を、さながら附屬のやうにするは演劇道の眞面目にあらず。故に脚色は見物を倦ましめざるにとどめ強ひて奇を求むべからず。又例の勸懲とか高尙とかいふをかしな邪魔物も放り出して、勝手に思ふままに人情を舞臺に躍らしめるやう綴り出されよ。

第三、外形を重んずる勿れ。演劇の美術たる所以は、正に彫刻と繪畫とを壓して無形の理を示すにあり。然るを萬端を外形主義、錦繪流儀にて、序幕から結局まで殆ど錦繪で堅めたるが如きあり。これ實以て意氣地なき次第なり、繪よりは立優りし身でありながら繪工の眞似をするとは何事ぞや。一芝居の中せめて二幕位は、到底繪にもかけぬ、偶像にても出來ぬ……何とも形容し難い美妙の人情の極意を寫して、生な美學者の膽玉をエグリ、ギャツと言はせ感心させて貰ひたし。

これら三項目の外に『勸善懲惡は本義ならねど、誨淫導惡は本義に違ふ』故に、淫猥を避け風俗を

柔らないやうとの添書きもあつた。坪内博士の直話によれば、此の忠告書は勿論默阿彌への忠告書ではあるが、その半面は、演劇改良會の主張へ反對を述べたい爲めでもあつたといふ。道理こそ具體的に反對を唱へてはないが、反抗的の氣勢は忠告、説明と同時に隨所々々にほのめいてゐる。此の忠告を默阿彌がどう感じたかは明かでないが、歡び受けたには相違ない。それは後の博士との交誼によつても證據だてられるのである。

之を要するに、改良運動の諸會に對する默阿彌の態度は、不鮮明であつたと言つてよい。然し、矯風會に於ては、自分も文藝委員になつてゐただけに、こんな話もある。國文學者の小中村清矩氏が、演習用として一つの淨瑠璃を書いたが、實演するには一度專門家の默阿彌に見て貰ひたいとなつた。が、さういふ事は餘り好まず、殊には學者の書いたものではあり、斷つたのを、篁村氏等が傍から口を添へて、修訂を依賴したので承知し、隨分大膽に朱を加へ、自分の意見を朱書きにして送附した事もあつたさうである。努めて學者の意見にも傾聽し、自分も試みんとの勇氣を備へてはゐたが、自分には全然新しい事柄であるから、進んで提案し、又は異論を挿むが如き事は更になかつた。それに他の一つは、守田勘彌の態度にも牽制せられた形跡がある。最初には熱心なる歐化主義者の勘彌も、次第に學者の唱へる言説が、あまりに理想的で、空論に過ぐるを知つて冷却し、後には却つて疎外せんとするやうになつた。それ故改良會に對しても、勘彌はもうあまり敬意を拂はなかつた。明治十九年に

作者として默阿彌の弟子格となり、古河新水と名のつてからは、默阿彌張りの世話物を書くに至つたのである。(作者としての勘彌は後にも述べるが、座元にして作者になつた事は演劇史上珍らしく、又特筆すべき出來事であつた)。卽ち義理堅い默阿彌は勘彌の手に於て退隱して以來は、何事をかなさんとするに際しては、屢〻勘彌の許諾を求めるやうにしてゐたからである。或は、若し勘彌がもつと改良會等の內部にあつて活動したならば、默阿彌ももつと仕事をしてゐたのかも知れない。

默阿彌と改良說との交渉は、略〻上述したやうであつた。吾等は次に此の機を利用して、明治文壇に關係深き文學者と默阿彌との關係をざつと述べて置きたい。無論演藝矯風會の席上で一面識を得た人などは多かつたらうが、特に取出して擧ぐべきは幸堂得知、饗庭篁村、坪內逍遙の三氏であらう。此の三氏以外には、一時浮世新聞に據つて辛辣なる批評をなし、戲作風の譚語の著述をも公にした伊東橋塘(專三)氏があつた。今も現存せられてあるが、『伊東祐親義心錄』(伊東祐親)と題する脚本等を版行するに當つては、默阿彌に閱を請はれたやうな事もあつた。

(追記。伊東氏は大正三年十月、六十四歲にて歿せり。)

默阿彌が故幸堂得知(本名は鈴木利平)氏と知己になつたのは、恐らく明治の初年からであつたらう。前身たる銀行員時代に、住所が同じ淺草の馬道であつた緣故から、屢〻來往して芝居の話に耽り

或は共に近郊を散策したこともあつた。饗庭篁村氏とは明治八九年以來の交際で、氏が得知氏の宅を訪問された時、默阿彌もちやうど行つてゐて、知己になつたのであるといふ。それ以來親密なる交誼が結ばれ、氏の關係せる讀賣新聞へ脚本を連載せしめ、或は『狂言百種』の刊行を勸めたなど、默阿彌を文壇に紹介したには、氏の力が與つて多いのである。氏も亦得知氏と同じく酒客であつたから、酒のいけない癖に燗の上手な默阿彌と、終日語り暮されたことも度々であつたといふ。篁村翁は、實に劇部以外の文士で、親しく交際し、而も現存する唯一人ともいふべきである。

坪内博士は前に抄出した默阿彌忠告書の中に於ても、末松氏藤田氏等の狂言作者攻撃に對して、たえず默阿彌を辯護してゐた。其の頃は一面識もなかつただけに默阿彌はよけい嬉しく感じてゐたらしい。博士に默阿彌が面接したのは篁村翁の紹介で、柳島の料理店橋本に於てであつた。博士は其の後も絶えず篁村翁と共に、默阿彌並に默阿彌劇を陰に陽に疵護された事は、蓋し尠少でなかつた。特に默阿彌の歿後明治三十四年に『辨天小僧』の著作權に關する訴訟の起つた際は、博士の詳密に論斷證明された、鑑定書によりて落着を告げ、兼ねて、默阿彌の著作物も、確然たるを得たのである。單に默阿彌一家の知音たるのみならず、一面より見れば博士と篁村翁とは、文壇に於ける默阿彌及び默阿彌劇の知音でもあつたのである。（追記。篁村翁は大正十一年六月二十日六十八歳にて逝去された。）

六

櫻癡居士は、其後ます〳〵劇界と直接の交渉を深めてゐたが、特に團十郎は深く居士の博識に信頼するやうになつたので、やがて居士は自ら劇場を經營し、その座の狂言作者となつて、理想の實現を企てた。實業家なる千葉勝五郎氏の帮助を得るに及んで、木挽町なる歌舞伎座の建築に取りかかり、明治廿二年十一月に開場式を擧げた。

然し、直接興行の手腕としては、依然として勘彌に俟たなくてはならなかつた。それこれの關係で默阿彌自身では、櫻癡居士があり、三代目の河竹もあるのだから、行く事を好まなかつたが、勘彌の請によりスケとして出勤し、顏寄せに大名題を讀んだ。默阿彌の作『黃門記童幼講釋』は居士の修訂を經、『俗說美談黃門記』となつて、開場式の狂言に上された。居士は演劇改良運動の當初から、狂言作者を無識無能として蔑視してゐた一人であるから、開場式の狂言には默阿彌始め、從來の狂言作者の作などを選みたくはなかつたのである。ところが、金主の千葉氏がどうしても、團十郎に『黃門記』をさせなければいけないと、主張したので、居士は止むを得ず默阿彌の作を添削し、作の內容の荒唐、無稽なるが故にとの理由で、名題をも添削して『俗說美談』の四字を冠らせたのであるといふ。

其後默阿彌は自ら進んで、歌舞伎座に筆を取つた事もないが、菊五郎の依賴によつて『戾橋』『箱根

山曾我初夢』などを書下した。最後の作として、廿六年一月に演ぜられた、『奴凧』も菊五郎の請ひに任せて綴つたものである。同座の作者部屋を司つてゐた櫻癡居士も、所謂博識家ではあり、相當の經驗も有する作者ではあつたが、役者と舞臺との實際經驗、劇作上の技巧に關しては、生れながらの狂言作者默阿彌に一籌を輸せざるを得なかつた。それ故居士は時として、その稿本を示して默阿彌の校合を求め、朱黃を求めた事がある。かの居士の傑作と稱せられる『春日局』は、居士が改良會勃興當時に作して、默阿彌に示し、再三の書狀を以て、忌憚なき訂正を加へるやう懇請せられたので、修訂を施したものであつた。

一時は東京の劇壇を代表した新富座も、明治廿三年以後は、勘彌が種々なる事情の爲めに退くの止むなきに立及び、座も次第に世間から忘られるに到つた。默阿彌も勘彌の退身と同時に、關係を斷ち番附面から名前を除いた。また歌舞伎座の方も、二十四年の三月を名殘として、名を削り、一切の出勤を謝絕した。これで劇界との直接關係を眞に遁れて、晩年の閑日月を、縱にせんとの希望を遂げたのである。

明治二十五年には、七十七歲の春を迎へたので、誕生日の二月三日に、喜壽の祝をして目出度く引退する事となつた。これを聞き傳へた歌舞伎新報社は、『老功を以て聞えたる狂言作者の大陰君、演藝協會の文藝委員、本社の特別寄書家として』盡瘁したるの功勞を厚く謝して、此の擧を祝福した。

斯くて默阿彌は、親戚故舊の親交あつた間だけへ、心ばかりの配り物をし、それに添へて次のやうな戯文と狂歌も出來た。

去年箱根の七湯へ、初めて行きし野暮者も、今年喜の字の七々に、姿も老に化物仲間、一つ目三つ目の友にさそはれ、雪女郎の消えし頃、山向うへ遊びに行かんと、五十七年作者を勤め、よごせし硯の海坊主、種も趣向も切れ筆をさらりと西の海へすて、此の節分の誕生日に、目出度しりぞく事となりて、

氣のきいた化物はとく引きこむにろくろ首程野暮にのびたり。

默阿彌　七十七翁

また、人の求むるがまゝに、白火を出さぬ守札になるといふ『火之用心』、又は、初縁同志で七十七歳まで生延びた人に㐂字を書いて貰つて、七月七日の午前七時前に呑めば中風が發しないといふので、そんなものを薄様へ認めたのも此時であつた。

七十七歳で、二度目の眞の隱退をした以後には、前にも誌した、狂言淨瑠璃の『奴凧』を菊五郎の爲めに綴つたのみで、劇場との緣は斷つたが、『歌舞伎新報』の誌上へは筆を取つた、『傀儡師箱根山猫』を廿五年の六月から掲載し始めたが、未完のまゝで歿した。此の以前にも、同じ誌上に載せて、完尾せず又上場もされなかつた讀物がある。それと併せて次に記さう。

『歌舞伎新報』は、明治十二年に刊行されてから、毎月十號づつ發行して來た、劇壇唯一の記錄であり、今から見れば、相當に貴重な雜誌でもある。それが廿二年の四月には、千號に達したのである。その時の紀念附錄として、魯文の勸めによつて默阿彌の執筆したのが、『千社札天狗古宮』といふのであつた。千といふ數に緣を持たしたもので、語り代りの角書にも、『鐵色凄き千手院に、昔士族の三島お千が、千貫樋の千人切。星影凄き千住畷に、今同心の松島千太が千日參りの千人塚』としてある。此の作は、序幕と二幕目の大半とが、掲載されただけであつた。何でも社員の一人が、默阿彌の氣分を損ねた事があつて、續稿を拒絕したのださうだ。その社員も人を介し手を更へて詫びたが、許されず頑として稿を續けなかつたのだといふ。默阿彌はさらに不服を言つたり、ぶく〳〵小言などは言はなかつたが、一度怒りを發すれば、決して許容しなかつた。掲載された分の物語は、大凡次の如きものであつた、

　箱根山中で、雷に打たれて氣絕してゐる旅人の、百圓入りの胴卷を、盜み取つた天狗小助が、古宮の前まで來て中を改め、逃支度する所を、同じ盜賊の十吉が認めて奪ひ合ひ、共に谷間に落ちて組伏せられ、あはや殺されようとした時に、組敷かれた十吉が述懷するのを聞き意氣に感じて許しやり、二人は小指を切つて、血を啜り合ひ、改めて義を結び、三島在なる玉縄大盡の土藏破りを計る。一方三島お千は、福住の客舍に於て、夫の清見清と巧んで、雷雨にかこつけ、玉縄

大盡の當主と一つ蚊帳に入り美人局をしかけ、後に玉繩大盡の婚禮の席へ暴れ込み、三百圓の肴料を貪る。

三幕目以下は、略梗概として腹案されてゐたまでで、作としては完成されてゐないが、大體の意圖だけは窺ふことが出來る。それによると、

お千は其の金を携へて、郷里三島なる父を訪ふ。父左太夫は今日明日をも、測り知られない程の大病であつたが、お千の身性に就て細々と異見し、兄に讓るべき品であるが行方も知れぬ浮浪漢だから、其の方に贈ると言つて、短刀を與へられる。お千が暇を告げての歸途、三島在の馬士に夫の淸が敲き殺された事を聞き、かの短刀を以て馬士共を切拂ひ、淸の首を取返し埋めに東上する。話かはつて十吉は、小助と共に首尾能く千圓の金を盜み出したが、分配の際に爭論し、小助を殺して逃げる。其の夜の明方に、嘗て明石の島藏の異見によつて改心し、一念發起なし名も誠心と改めた今同心の松島千太が通り掛り、見れば往昔佃の懲役場で、見知越しの小助の死骸なので、厚く回向をなし、後日の證據にと守袋を持歸る。猶其の時路傍に落散つてあつた、十吉の千社札をも拾ひ取る事がある。かくて十吉は其の金を以て、淸水港から宮へ行き、津島屋で豪遊を盡す中、探索方に知られ捕はれんとして落延び、千太が千住に庵を結んでゐる故に、其處を賴り匿つて貰ふ。その夜千太の回向する位碑が、小助のだと知つて愕くを見、千太は十吉にかの千

社札を突きつけ、罪を責め自首して出ろと勸め改心させる。此處へお千が路に迷つて來て、一夜の泊りを求め休息中、同じく小助の位碑を見つけ、兄なる小助は十吉に殺されたものと判明し、敵討に及ばうとするを千太に留められ、說得の上兩人共自首する事になる。

改心した千太の後日を書いた所から見れば、『鳥衛』の後段を書かうと企てたものらしい。人物の配合から見れば、菊五郎にお千と十吉とを、左團次に小助と千太とを演じさせるやうな心組であつたらしい。

此の作の狙ひ所が、勸善懲惡に存した事は、『當千社札の狂言は、前にも申上げし通り、相も變らず惡黨多く、ゆすり衒りや盜賊の脚色も末に改心なし、皆善人に立還り目出度く打出す大切まで、五幕續きの世話狂言』と斷つてあるのを見ても知れる、始めは五幕の豫定であつたが、二幕程綴つてから七幕に分かつ豫定に變更されてゐる。

次の『傀儡師箱根山猫』は、其の序詞にも斷つてあつた通り、『此の春目出度芝居を退き作者地獄の苦を忘れ、先極樂の身となりしに、四五日以前關根只好氏態々私宅へ來られて、世事の噺しの終りて後、扨歌舞伎新報は最初よりして老人の關係深き因みもあれば、霜夜鐘のやうなものを何か脚色て貰ひたし、と頼みの詞を半聞かず、浮世に後れし老衰、殊には隱居の甲斐なければ、平に御免を蒙むり度しと再三辭せしに聞入れられず、夫の能辯に勸めこまれ、終に脊負ひこむ事となりて、昔風の狂言

を』三幕に綴る豫定であつた。この作は前年の夏に、娘等と共に箱根、江ノ島の方へ旅行した時に得た想と、久しい以前からの腹案とを、結び付けて着手したものであつた。

○江ノ島の岩窟道で、金滿家の一人息子十三郎が、神奈川の藝妓小六の惡俥夫に虐められるを見て、助けたが緣の端となり、其夜大磯の濤龍館へ連の者と一緒に泊める事となる。それを知つた宿の主人が、あの女こそは『根が傀儡師の飴屋の娘で山猫』とまで謳はれ、海道筋で名高い、三途のお六といふ惡婆だと聞かされて愕く。露見を悟つた小六は、片肌脫ぎになり、朱入り花車の刺靑を見せ、しめし合せた鬼九兵衞と共にゆすりに掛るを土地の男達虎藏に急所を抑へられ、五十圓の酒代で歸る。

此の作の方は、これだけの序幕しか揭載されなかつた。『これから佛七兵衞や、孝女お三の筋にかかれど、蚊が薄らぎて凉風の立つまで暫し御猶豫願ひ……前に千社札の立消えあれど、今度は蚊遣の煙になさず、末迄御覽に入れます』積りだと、申譯はしてあつたが、完尾しないで歿するに到つた。遺された筋書によれば、

孝女お三は、竹細工師で、人からは佛々と綽名されてゐる位の、佛七兵衞の娘で、濤龍館に下女奉公をしてゐたのである。七兵衞が大病になつてから、夜な〳〵井戸端で水を浴びて、病氣快癒の祈願を籠める。その志が仇となり、後にお六、九兵衞が仕返しの積りで濤龍館へ盜賊に入

つたに就いて、お三が嫌疑を受け實家へ下げられる。七兵衞は苟にも疑はれしは、汝の惡しき故だと責め、お三は自害しようとする。これを軒下に忍んで聞いてゐたお六が出て止め、その盜賊は吾等夫婦の仕業であつた、話を聞けばお三は妹であると分かつたと、懺悔の果てにお六は自害し七兵衞は世を果敢なんで出家する。

物事に着手して中途半端で止めるやうな、放縱な性質ではなかつたが、一つは、感情上の衝突で途切れ、一つは死の爲めに時間が與へられずして未完のままで終つた。兩作ともに同傾向の世話物で、人物の配り方から見れば、菊五郎と左團次、それに松助及色男役としての家橘等を腹に置いて、筆を執つたものと推測される。

第十一　晩年と死

一、明治以後の私生活――類燒――轉居――權次頭と金さん――建築圖案――二、著作の出版――『河竹正本狂言畫』と『狂言百種』――其の序文――三、圓滿平和なる家庭――娘等の死――箱根へ旅行――四、死の準備――發病――病中――死去――遺言――墓と碑――五、死の反響。

一

『ろくろ首程長くのびたり』と自嘲して、元老の株をも免れた後の默阿彌は、極めて平安にして幸福なる餘生であつた。

茲に吾等は、その晩年から死歿に到るまでを述べるに先立ち、明治以來全く閑却されてゐた、彼れの家庭的私生活の方面を見ておく必要がある。

雷門の燒けた三島樣前の火事に、默阿彌の住宅が全燒に遭つた事は、明治以前の所に述べたが、其の折に新築した意氣な好みの家は、明治六年三月十日の午前六時に再び全燒してしまつた。此の時には、垣一重隣りの料理屋から出火したので、前の時には下婢の古下駄までも搬出されたのに、今度

は急火でさうも行かなかつた。此の際には、直にも新築に取りかかれたのだが、もと／＼官有の公園地で何時取拂ひを命ぜられるか分からないから、九月まではほんの土藏へさしかけた位の、假普請に住つてゐたが、やがてそんな憂ひもないとわかつて、急に新築に取掛つた。

元來あの邊は人家の立こんだ所で、近火でもあれば類燒は免れない土地であるから、其の後にも、全燒のやうな半燒に遭つて、新宅にした事もあつた。何年頃か定かでないが、默阿彌になつてから、新宅祝ひの返しに添へた鰹節の袋に『紅白の梅か歌ちんの鳥の子と松の小節にかへる竹の葉』と詠んで、摺らせたこともあつた。

本所へ轉住したのには、明治廿年三月、七十歳の折である。馬道の家は三代目の河竹新七に讓り、未だ開けない、本所の南二葉町に地所を求め、葦原であつたのを開發して池溝を穿ち土藏と家を建てた家は狹い平家造りであつたが、四疊半の書齋を別にしつらへ、庭園を廣く豐かに廻らした、閑日月を送るに恰好な住居であつた。

此の時の轉宅工事の地形を引受けた、鳶職に『赤坂の權次頭』と呼ばれた、其の頃巾利きの鳶頭があつた。ずつと前元治慶應の頃からして、不思議と默阿彌を慕つて『師匠々々』といつて訪ねて來た男である。芝居は餘り好まなかつたが、默阿彌の作の『語り』をおほかた暗誦してゐたといふ人で、默阿彌の生前に其の手紙や書散したものを集めて、二枚折の屏風に仕立てた事もあつたといふ。嘗て

初代河竹の追善に、『忍塚』を建てた時にも、此の頭が一切引受けてくれたのである。昔の町奴とか男達とは、こんなかと思はれるやうな風采で、應揚な煙草の喫み方をしながら、何かと咄しを聞くのが樂しみで、折々來たさうである。默阿彌にはさういつた方面の贔屓が、もう一人あつた。それは今でもその後嗣が、淺草でとり屋を營んで繁昌してゐる金田の、金さんであつた。本名は金八で、夫の『音聞淺間幻畫』の序幕へ出る團十郎の演じた俠客權八は、即ち此の金さんを拜借したとの事である。もとは貸元の親分で、今も吾妻橋の袂にある寄席の東橋亭を開いた人であるが、默阿彌は此の金さんとも親密であつた。默阿彌は權次頭や金さんとは、全く毛色を異にしてゐたが、肌が合つてゐたかして折々連立つて散策した事などもあるさうだ。默阿彌が夕方にぶらりと出かけて話しこむのが、いつも金田の金さんの所であつたといふ。

家の新築に就いては、もう一つ附記して置かねばならぬ事がある。それは家を建てるにも又は茶室好みの書齋を建てるにも、これは其等の事ではあるが、必ず自分自身で綿密な繪圖を引いて建てさせたといふ事である。默阿彌は一生涯の中に、家を四度新築し、土藏を二つ建て、井戸も二本掘つたといふのだから、男一人前としては、立派な事業を爲遂げた人であるが、それらの設計圖案は、いつも自分の工夫で作成した。時には起し繪圖にまで作つたこともある。單に必要ばかりでなく、興味を持つてゐたのであらう。結構布置といふ點に於て、其の戯曲が特に卓越してゐるが如くに、默阿彌自身

も何くれとなく、工夫を凝らし、繪圖面を引くと言つたやうな事が道樂でもあつた。だから現に保存されてゐる繪圖も、何十枚といふ程の數に上つてゐる。頭腦がよくて、實際的な工夫の才さへもあつたから、時には黒人跣足の事もあつたさうだ。屋根の水取りをつけるに大工が困つて、訊しに來た事もあつたといふ。

默阿彌の作中には、自分の趣味嗜好といふものを、あからさまにさらけ出した個所は甚だ少ないが、此の普請、新築の繪圖に關しては、それが明らかに指摘される所が一つある。『孝子の善吉』の中、二幕目の善吉裏住居に於て、親甚兵衛との會話中に書込まれたのが、即ちそれである。善吉は紙屑買ひをしてゐるのだが、或る日常得意の大掃除に出ツくはして、好い買物をしたので早く歸り、あなたにお目にかけたいものがあるとて、反故の中から大きな繪圖を出し親父の前に擴げながら、

今日或る所で一と纏めに買つた破本の其中から、數寄屋大工が念を入れ圍ひの繪圖も好きな道、及ばぬ事と思つても昔を忘れぬ物好み、かういふ家が出來たなら嘸よからうと煩惱の、起し繪圖さへ出た中に、目に付たのは此の繪圖面、親仁さま定めて見覺えがござりませうな。

ト繪圖を渡して見せると甚兵衛びつくりなし。

ヤヽこりや神奈川に居た時分、何萬兩といふ金を積んであつた盛りの時、箱根ゐきつての米問屋と人にも謳はれ見世藏から座敷を建てた其の時の、慥にこれは普請の繪圖。

默阿彌も善吉と同じく『囲ひの繪圖も好きな道』で、むしろ普請道樂、繪圖道樂であつた。本所の家を建てる前にも家人に告げて、默阿彌の隱宅ならば、もう少し見榮えのする、この位な家は作るのだが、何にしても老年で、我亡き跡の女世帶に差支へぬやうにするのだから、さう思へと言つて、所謂『默阿彌としての隱宅』なるものの繪圖を別に見せた事もあつた。

獨り家の普請のみならず、全體がいかにも行屆いた人であつたから、家相、方位などに就ても（其の辭退に一度口にした事さへなかつたが）ちやんと心得てゐた。出來上つた家の間取りにも井戸の有り場所にも、扨は又移轉、棟上等の年割、日取に到るまでも、方障りになるやうな箇所はなかつたといふ。

二

劇作を他にして、晩年の事業の一つとも見るべきは、著作の出版であつた。

尤も其の作で刊行せられたのは晩年と限る譯ではない、ずつと以前、小團次時代にもないではなかつた。當時の習慣として、評判のよい當り作の新狂言は、詳しい筋書やうの草雙紙に仕立てられたものだが、それは前々から出版されてゐた。『鼠小僧』『三人吉三』等二十餘種の新作は、興行毎に上梓された。これには自分自身に執筆したのも、一二ないではないが、多くは門弟に綴らせたのである。

諺藏、濤治、金作等の筆になつたものもあれば、嘗ては能晉輔と稱して門弟となり、後種員の門に入らしめ、柳水亭種淸とも稱した、合卷作者八功舍得水の手に綴られたのも多かつた。（與行毎に版行された草雙紙に關しては、卷末に附した著作解題を參照せられたい）。

明治以後には、此の草雙紙式に出來たものは、僅少で、彥作や交來等の述作になつた『松榮千代田神德』や、『霜夜鐘』などがあつたに過ぎない。

以上は、いづれも繪入版本とも稱すべき類ひであるが、活字によつて印行された最初のものは、『霜夜鐘』であらう。合本になつて歌舞伎新報社からも發兌されたが、間もなく、兎屋本の體裁の下にも出版された。『濾闇鵜飼燎』も、歌舞伎新報社から合本の體裁で、明治十九年に出版された。

他に叢書體に續刊されたものに、二た通りある。一つは明治廿年の十二月廿八日に公布された、版權條例に應じたもので、二十一年の四月から『河竹正本狂言盡』と名づけて矢張り歌舞伎新報社から續々出版した。四六版型の氣の利いた體裁で、表紙と裏は勘亭流で正本に倣はせてあつた。『大盃』、『四千兩』、『加賀鳶』など、時の當り作を手始めに、百番續きに全著作を發行する計畫であつたが、これは六七部で中絕した。

他の一つは、明治廿五年の四月から『狂言百種』として、春陽堂から篁村翁其他の文士達の勸めによつて出版したもので、これには『村井長庵』、『三人吉三』、『島衞』等の代表作ばかりを輯めて刊行

したが、第八號までで中止して、それなりになつてゐる。此の際默阿彌は第一號の卷頭に、

……今や演劇盛んにして、名高き學者の先生方が、新奇を競ふ脚本は梅見の雜客に異ならず、美々敷意匠の條立に金時計の光有る脚色の改正、臺詞の高尚、此處に三組彼處に五組續々出版ある中へ素より野鄙な世話狂言無學無識の手になれば、僞物の拙作な平生着のまゝ、修正の洗濯もせず出版せしは、嗚呼肩身の狹き事にこそ……

と卑下して斷つた序文が掲げられた。所謂改良劇の呼聲の高かつた當時には、默阿彌は御座なりでなく、眞實斯う感じてもゐたらしい。

『狂言百種』の方は、菊判で表紙に彩色繪があり口繪があつた。特にその表紙の圖案は、内容をとりどりに暗示するやうな、趣向になつた畫組で、默阿彌自身に下繪をつけたものである。『三人吉三』のなどは、自分が意匠して、一度は仕切場へ市の飾り物として出陳された『判じ物』の繪組を、其のままに用ひたものださうである。

此の他、文藝新聞と許されてゐた『讀賣新聞』へ、廿一年の正月から、『鼠小僧』が續き物として掲載された事がある。其の時には春の屋主人（坪内博士）の紹介文が附せられてあつた。なかなかの長文であるがその中に、『そも〳〵河竹翁は我國の人情博士なり、其の臺詞の富麗なると其の脚色の面白き事とは措いて問はず、其の人情の曲折波瀾を描き出すの巧なる事前後に比類すべき人尠し。世人動もすれば、近松を以て英の院本の大家たるシエイクスピヤ氏に比するものあれど、主人を以て之を見れ

ば、近松は寧ろ文章家にして物語歌の作者なるに近し、沙翁と並べ稱すべきものにあらず。若し我國の最上の作者を以て、天下第一の作者に比する事を得ば、我河竹の默阿彌翁こそは、我國の沙翁と稱すべけれ』といふ一節がある。默阿彌を賞揚して紹介せられた調子の高い文章であつた。其後『髮結の藤次』も同紙上に連載された。

三

家庭はいつも和樂の極、圓滿の限りであつた。賢母良妻としては理想に近い、妻女の嚴しい教育によつて、子女は次第に成長し、よく睦み合うた。

然し、其の間にも老少不定の暗い雲に閉された事もある。其の第一の不幸事は、明治四月五月に、末女のますが、十三歳で夭折した事である。妻女の祕藏兒で、美しくて愛くるしい娘であつたが、疳の募りで奪られた。第二は次女のしまが、廿二年の十一月に、廿八歳であたら花の盛りを散り行いた事である。默阿彌が此の次女に別れたのは七十三歳であつたが、自分の生葬ひを出すのだと言つて、十二月の廿四日に盛んな本葬を出した。劇場中見送らぬ人とてはなく、葬列が十餘町に及んだ、派出派出しいものであつた。恐らくは質素な默阿彌が、仰々しい事の仕始めで仕終ひであつたらうと言はれてゐる。

此の二つの不幸事を除いては、實に平安なる家庭であつた。妻女を始め一家中默阿彌を敬愛する事にのみ意を用ひた。『四十餘年間夫婦顏を赤めて相罵りしことなく、其兒等も相爭ひし事なし、一家の內風波常に穩かにして、春光の煕々たりし事想ひ見るべし』と『早稻田文學』記者も其の傳に述べたのは眞實であらう。默阿彌が七十歲の春を迎へた時、妻は密かに子女を誡め『七十歲になれば古稀と謳はれる程で、餘命の程も計り知られない、尙一層心を盡して仕へよう』と申合せをしたので、それからは一段と目立つて、孝養專一を心がけたといふ。家內中は默阿彌一人を取卷き、あだかも手車に乘せてほい〳〵言はないばかりであつた。然しながら其の和氣靄々たる中にも、几帳面さがあり、儀容の亂れざるものがあつた。默阿彌が家庭の內でいくら駄々をこねようと、我儘を言はうと、無理を言はうとも、竈將軍として崇め奉つたぎり、蔭口一つきくものもなかつた。

『俺の家なんざア芝居にや書けねえなア』と、さも滿足らしげに口にし得た默阿彌は、眞に家庭生活に於ても、幸福な人であつた。家庭の事情や繫累に煩はされる事もなく、意見を異にする子女の爲めに、壓抑された事もなかつたのである。恐らくは文學者の生涯としては珍らしい程多幸な、また平和な晚年を送つたものと言つて差支ないであらう。

いつたいに默阿彌は佛事にねんごろで、どんな目下の者の葬式でも、好んで見送りに立つたことは劇場中で有名な話である。それ故祖先の年回などを忘れたことはなく、親戚、故舊に拘はらず、一度

交際を結んだ人であれば、その命日なども明細に誌しておいて、絶えず留意して弔ふ事に心がけてゐた。遺されてある過去錄、『草葉の露』に就いて見れば、戒名、俗名、命日が記載され、其の上に、何年がどの年回に當るといふ注意まで、朱書して貼りつけてあるのを發見する。それほどに丹念でもあつた。初代河竹の跡をたづねて、建碑した事は誌したが、明治十六年には亡父の五十回忌に相當するので、其の法要を營んだ事がある。その際は配り物に添うるに、是眞の下繪になる『五十の浪』と命名した模樣を竺仙子の手にかけて染め上げた浴衣を以てした。すると此の浴衣の型は默阿彌の歿後、妻の琴が姑の五十年忌をとむらふに、再び用ひたといふ事である。嫁が姑の五十年をとむらつたなどは珍らしい話だと噂されたといふ。(因みに予が好んで本書の表紙に用ひた圖按も、即ちその『五十の浪』である。)

默阿彌と旅行とに關しては、今迄に一度も述べた事がなかつた。否述べたくても旅行と稱すべきものが、一つもなかつたからである。友人や門弟と連だつて、一日二日の散策や成田詣や、或は藤澤山詣などは、時折あつたかも知れないが、それとて一年に一度ありやなしで、特別に記載すべき印象をとどめた事もなかつた。そのむかし廿歳の見習作者時代に、甲府へ二箇月がかりで行つたなどは、天にも地にも一度限りで、また旅芝居へ出たのも其の一回だけであつた。而して一生涯に唯〻一度の遊

山旅ともいふべきは、明治二十四年に實行された箱根江の島行きだけであつた。

七十六歳の高齢ながら、シヤン〳〵とした默阿彌は、老後の思ひ出に、長女の糸と共に門弟の竹柴其水を伴れて、それも僅か一週間位にわたる旅行をした。これより前脚氣を病んで癒り、床上げをした折の口上の中にも『脚氣といへる病を煩ひ、噂になしし箱根の湯治も、ついに小田原相談となり云云』とあつたやうに、箱根行きは、兼ねての志願であつた。箱根より西へ行きたいとは思つてゐなかつたらしい。

それは九月の事で、默阿彌は例の通り結城紬の單衣へ、ついにしめた事もない兵兒帶を、旅中便利だからといふのでぐる〳〵巻きにし、洋傘を持つた形は、到底芝居の人、狂言作者といふ風體ではなかつたさうで、土木の請負師に見立てられたといふ。箱根へ行つて小涌谷を見物して休んだ茶屋の女房が、是非一泊せよと勸めた時に、注意深い默阿彌は首を振つたさうである。『あんなに始終ふつ〳〵と噴き出してゐるんだから、何時燃え上るか知れやしねえ、おらァこんな所で死ぬなァいやだ』と言ふのである。然し道中は、父と長女に取つて思ひ出の深い旅行であつた。駕籠に搖られながらも、立場茶屋に休んでも、見る物事にふれて、其の情景によそへて狂言の話なり、傳奇的な譚話なりに想像を凝らし、或は名題をあゝかうかと拵へて興がつた事もあつた。現に或る立場に休んだ時、三毛猫がゐたので、『おや〳〵こんな恐ろしい山中にも、可愛い猫がゐます』と、娘が不審がれば、『山猫だらう』

と父が笑つて答へた。その時に想を浮べたのが、やがて『傀儡師箱根山猫』に化けたといふやうな事實もある。或は『箱根山美人大膽』だの『塔之澤恨電光』などと、名題ばかりが記念に殘されるやうにもなつた。

四

默阿彌は一種の直覺的悟入力を備へてゐた人で、其の死と關聯しては、奇蹟めいた逸話が傳へられてゐる。

明治十四年（六十六歲の折）の或る日であつた。どうかした機會に『おれは長命をしても七十七まで生きてゐたい』との旨を口にしたので、側の者が氣にして、何故さうかぎるのかと質したらば、『七十七以上に生き延びれば、戰爭に出逢ふであらう、而も西南役のやうなのとは違つて、外國と始まるだらうから』と答へた事があつた。その當時には別に氣にも留めなかつたが、日清戰爭が始まり、後にぞ思ひ知られけるといふ結果になつたのは一奇である。

それからちやうど十年を經て、死ぬ前年の七十七歲の春四月の事、或夕長女の糸を呼んで『おれは來年は逝くから、その積りでゐてくれろ、長年の間よく仕へてくれたから、心得の爲に言つて置く』と告げたので、悲しみながらも母と兄にその旨を傳へておいた。その後といふものは、默阿彌は死後

の憂なきやう、家事一切の整理に心を費し始めた。

先づ五月には、幼時より業を異にして別に家を立ててゐた長子に對して、財産の分與をなし、六月には家督を糸女に讓つた。默阿彌と糸女とは、あだかも沙翁と、その愛娘にして同じく家督を讓られた、スサンナとの間の如き關係で、愛しもすれば、又作者としての家も遺して行つたのである。『猶それよりは、暇ある毎に藏書、記錄類を取調べ、書類は一々小箱小袋に收めて其上に標目、說明を付け死後の差支へなきやうにと、用心殘るところもなく』、寒暑風雨を問はず、土藏の中へ硯と筆を携へて行つては、こくめいに調べ上げた。家人が箱根の湯治や日光の紅葉を勸めても、一向見向きもしなかつた。『十二月に入りては無沙汰見舞なりとて、日々知己の人々を訪問し、寒さをも厭ふ色なかりき……後に此の事を聞きし者、いづれも口を揃へて、默阿彌こそよく死期を知りけれと評し合』つたといふ。

斯くて、殆ど一切の用事も仕果てて其の年を送り、七十八歳の春も迎へた。元日、二日の雜煮も祝つて、三日の朝に發病し、床に在る事廿日餘り、月の二十二日に大往生を遂げたのである。病症は輕微な腦溢血であつた。

次に誌す病中記は、嘗て其の當時『早稻田文學』誌上に掲げられた、糸女の病中日記に據つて抄出したものである。

三日。　朝食後左の手先動かずなる。醫師の診斷を受けて安臥し、左の手にエレキをかける。

四日。　醫師の命により面會を禁ぜらる。

五日。　『誠に寢るは大義なものなり。此の間に二番目物の腹案を得たり』とて、團四郎坊主の梗概を話す。卽ち百姓の忰と生れ、やがて旅役者となり、吉原大黑屋の遊女高砂に馴染みを重ぬる中、高砂は幼少の折遭ひし水難の節別れて行方知れずなりたる妹なりと悟り、書置を遺して去り、出家する。後俠客の群に入りて團四郎坊主三吉と名乘り、花川戸にある間に、人妻となれる高砂に逢ひて話し合へば、誠の妹にてはなかりしと判明したれば、改めて兄妹の約を結ぶ。安政時代の事とすべしと語る。

六日。　此朝氣分少しく惡ししとて、一日すや〳〵と眠る。

八日。　體溫三十八度以上となる。午後二時頃左の如き辭世を詠む。

　　去年の暮より卒中を病みて、　　　默阿彌

　花の咲く春をば待ちしかひもなく片枝よりして枯れし老梅

十日。　機嫌よろし。午前十一時頃糸に筆取りさせて次の如き『雀踊り』の替唄を作る。

「千代の始めの一月に、左りの手足が引つりて、ちゞめたるのが初發ぢやへ。白鵞白矮鷄などすゝめ贈る連中が、「チヽサテ合點ぢや、アリヤサ、コリヤサ、卒中でせへ、よい〳〵。

此の唄にて、しめり勝ちなる室の內さざめく。されど『此の編笠が葬式の役にたつか』と洒落交りに言へば又打しめる。

十三日。　ただ寐てゐるのは、まことに徒然なり。寐言を考へたりとて口述して曰く、

日を重ね訪ひ來る人もおふみ路や、逢ふ事ならぬ床の山、今は片身もきかざれば、寢返りさへもならぬ坂や、兒手柏の二面、こその暮より病まぬ前は、都の花を見ん物と思ひし念も月ヶ瀨の梅さへ今は後れたり、及ばぬ事と思ひ寐に、葡萄酒の醉めぐり來て、うつら〳〵と心よく波にただよふ鷗の如くいつか眠りに筑波山、このもかのもの床ずれを、厭ふ蒲團の紫やかすみたなびくしののめを、待つに嬉しき明がらす、朝日の影を見るにつけ、又今日の日をいかにせん、苦勞のたえぬ事なりし。

二十一日。　朝の間に、一つ忘れたる事あり、歌舞伎座を見物して、諸所へ遣はすべかりし年玉、禮金などをおくらざりしとて、氣にかけたれば使を出し、歸るに及びて安心する。

二十二日。　午前九時頃に、『扨今日こそは別るべし、午後までは保つまじ』と告げ、『一葉の遺言書を認め置きたれば、骨寄せの日に、親戚門弟の集れる所にて開くべし』とて、あとは靜かに念佛を唱ふるのみ。午後四時少し過ぐる頃眠るが如くに歿しぬ。

默阿彌は、つひに一度も聾せず啞せず、口一つ動かす苦痛もなく、眞に燈火の消ゆるが如く長夜の眠りに就いたのである。

葬式は廿四日に密葬が營まれたが、其翌日開封された遺言書に、『本葬を出し候へば一日の日を費やさせ、且つ天に風雨の憂ひあり若し風雨の節に出合候はば、諸君の晴着を汚させ誠に無益の事故本葬は出し申間敷事』とあつたので、假葬だけにとどめた。

墓は代々の菩提所たる、淺草北淸島町（御添地）の源通寺に建てられ、法號は釋默阿居士。源通寺は其の後明治四十一年に、府下中野町柏木に移轉したので、從つて默阿彌の墓も現今では、郊外柏木に移されてゐる。

默阿彌の歿後、長女糸は生前の約を果し、且つは亡父に對する追善、手向けにとて、獨力を以て一基の碑を建立した。場所は嘗て默阿彌が初代河竹の追善に、『忍塚』を建てた、向島の百花園で、位置も相接し列べて、『きやうげん塚』と名づけて三回忌までに竣成せしめたのである。其の碑面は次のやうであつた。

二世河竹新七俳名は其水、晩に古河默阿彌と改む。壯年より演劇作者となり、古稀の齡を踰えて明治二十五年の春喜の字の祝賀なしけるに、明るとし料らずも病の爲に身まかりぬ。其一生の間に書綴りたる新作の狂言凡そ三百餘種ありて、古來の作者に珍敷事なれば其名を續ける門人等、師の女とはかり名を後に傳へむと石をたてゝ狂言塚と名け、初代の名殘の忍塚になぞらへて、しのぶ文字を書附ける事しかり。

明治二十七年十一月　　女　吉村いと子

三世　河竹新七
門人　竹柴其水

五

默阿彌の長逝に就ては、劇場社會は勿論一般文學社會からも悼惜せられた。而かも新派劇すら未だ勢力を扶植せず、又文學者を中心とする劇壇の新運動も著しからぬ時代に、此の世を去つた默阿彌は死所を得たものと信ぜられてゐる。花も花なれ、惜しまれて散つた默阿彌は、更に他の新たなる生涯を辿り始めたのである。

次に其の反響として、『早稻田文學』に抄錄されてゐるものを基礎として、新聞雜誌に表はれた、世評の一般を記載しようと思ふ。參考に資するまでで、是れを以て價値を裏づけようと希ふものではない。

報知新聞――狂言作者と云へる名詞は、河竹默阿彌の五字を代表せるかと迄敬重せられたる斯道の泰斗なりしに……今日の劇場にて演ずる在來の狂言は、大抵多少翁の筆を加味せざるものなく、近來稀なる大家なりしに今や翁逝きて劇界轉た落寞たるを覺ゆ。

日本新聞――文學社會一將軍を失ふ……翁作者の業を執る事五十餘年、老練巧緻之を前代に求むるを得べからず

……今や文學大いに開け、狂言著作の事亦世人の注意する所となる、而して此の一大家を失ふ豈痛悼に堪へんや。

毎日新聞――翁の名は、亦舊時の如き冷淡なる意味を作へる狂言作者を以て迎へられず、寔に我文學界の老手として、彼を拜し我國のドラマチストとして外人に誇る世の中となれり。彼が靈想神筆になる所の脚本は……文學界特に人なき彼の社會に取りて、惜むべき限といふべし。

國民新聞――舊日本の演劇作者として最後の大家たりし温恭なる河竹默阿彌翁は、行年七十八を以て歿せり……弘化嘉永の春、文久、元治の秋東都の劇壇に一種の光りを放ち舊日本棹尾の詞平を失ふ。

坪内博士に主宰されてゐた『早稻田文學』は逸早くも詳傳を掲げ始め、改進新聞には關根只好氏が『河竹默阿彌翁を弔ふ』と題して數日に亙つて詳傳を物し、『歌舞伎新報』、『やまと新聞』、『愛新聞』等にも傳記逸話の類が掲載された。特に讀賣新聞は、次のやうな弔辭を掲げると同時に、追悼の詩歌俳句を募るの擧を企てた。

近松以來の第一人、近代の大家と呼ばれたる脚本家河竹默阿彌翁は……遂に長逝して、天上の司劇官となられたり、嗚呼翁の後を承け、斯道の牛耳を執る者は誰ぞ、吾人指を屈するに及ばずして、先づ長嘆に堪へざるなり。

と。而して讀賣新聞社の擧に應じて各地より投書せられた追悼の詩歌狂俳の類は、豫想外に多く集つた、三都と限らず諸國の人々によつてであつた。新聞紙の一角へ十日間位載せても載せきれないとな

つて、一括して遺族へ贈られた。

思ふまゝ生かし殺せし筆をもて、などとめざりし君が命を。

ぢつと泣く世話の世界も引拔いて、名を金ピカに殘す大詰。

仰ぎ見しお江戸の花は跡なくて、涙の種に殘る言の葉。

こんな狂歌がその中に見えてゐる。『亡くなつてからも舞臺で物を言ひ』などといふ川柳も見えてゐる。

これらの新聞記事や現象やは、實に默阿彌に取つて此の上もない榮譽であつた。此のやうな反響を喚起したのは、少くも默阿彌の死が、最早なす事もなき、老朽せる大木の自然に音もなく倒るるが如くに、それほど時代と沒交渉なものでなかつた事を、語つてゐるのであらう。

狂言百種の發行されてから間もない事。ある時奥州南部の釜屋藤兵衛といふ人から默阿彌へ郵書が屆いた。何だらうと思つてあけて見ると、「わたくしは性來芝居が好きて、殊にあなたの筆になつたお作は私の最も嬉しく拜見する所です。それ故お作を出版なさるや否や直に傳手を求めて購ひ耽讀しました。是非出京して一度お目にかゝりたいのだが、わたくしも最早老年の事故其の望みも果されません。就いては職業柄手づくねながら鐵瓶を一個作り差上げます。御書齋用と思つて小形のをお贈りします、お手元

にお置き下さらば此上もない仕合です。次に私からお願ひ申すは、御寫眞を一枚頂戴したい、それをせめてもの心やりにしたい。」といふ意味であつた。やがて二重箱の小包が着いて無事に着したのは、「默阿彌寮茶」と刻した銀象嵌の鉉のある五寸徑位の丸い鐵瓶であつた。默阿彌からは禮物に添へて寫眞を贈り、其後も音信してゐたが、先方も歿したかして程なく途斷えたとのことである。意外な所に意外の贔屓を持つてゐた。

第十二　その人物

一、容貌、態度――健康の權化――二、實際的、常識的の人――體質――氣質――三、芝居社會と――文學者と――『近く變はりて遠く退く』――金錢と――名譽と――宗教心と――四、用心深き事――几帳面なる事――舞臺に大膽、世事に小膽――五、衣食住の好み――江戸ッ兒――唐棧ごしらへ――嗜好――菓――猫――六、家庭と――門弟と――表裏のない人――七、思ひ出(糸女)八、勤身堅固の大書漢――人物と作物――勸善懲惡と默阿彌の體得。

一

默阿彌の新作物で、淸元の獨吟などに彩られた、世話物を見た藝妓が『あんなに意氣な芝居を書いた作者さんは、どんな仁だらう』と噂しながら、樂屋へ役者を訪ねに來た時に作者部屋を覗いて、『あれが作者の河竹さんだ』と側の者に敎へられて、二度びつくりしたといふ話がある。

默阿彌は裝身こそは意氣であつたが、決して、見るから惚れ〴〵するやうな優男ではなかつた。四

十歳前の若い間こそ瘦せぎすで、八寸丈を着る程に、身長の高いすらりとした形で、『猪牙筈』と呼びならはされた程に意氣で、緋縮緬の襦袢の胴へ、金糸にぴか〳〵光る玉蟲色の丹後縞の着流し、散髷の雪駄といつた裝の事もあつたであらう。けれども晩年に及んでは、から朴訥で篤實な老爺になつて唐棧ごしらへの地味な澁い好みと變つたのである。

今吾等が手にし得る、默阿彌の肖像には二通りある。一つは明治前に描かれ、版行されてゐるもので、他は寫眞像である。

先の『粹興奇人傳』や、錦畫に描かれた三四種のものは、いづれも四十前後のである。どれを見ても、無愛相な、利かない氣の、口を堅く結んでむツつりとした面付に出來てゐる。にこにこして愛嬌のある顔立とは、まるで違ふ。殊に惡摺りの『十六畫漢』の中に描かれたものは、特色を誇大した印象的な戯畫だけに、猶更むつかしい面構へに見受けられる。相者に見せたら、苦虫噛潰し相とでも言ひたげな澁苦相で、眉根に八の字を寄せた險しい眼付、一文字にきつと結んだ口元へ、鼻の兩側から垂れる法令が深い皺を刻んでゐる。盤石の上にがつしりと結跏趺坐した愼重な態度は、或は默阿彌の眞想を穿つたものかも知れない。

寫眞の第一は、明治八年（六十歳の時）に、丁髷のままで、正本を手にしながら寫したのがある。これは伊井蓉峰氏の父君故北庭筑波氏の撮影に成つたものである。その次のは明治十一年の新富座新

築落成式の時のであつて、これが大嫌ひの洋裝（燕尾服）であつたのは、妙な對照である。もはや髷も除れて半白の頭髮は少し禿け始めてゐる。これらの寫眞像を見るにつけても確かめられるのは、全盛時代であるに拘はらず、別に得意の色も失意の色もなく、依然として、無愛相な險のある顏立だといふ事である。きつとした口は、あだかも堅く強い意思を表はすかのやうに結ばれ、其の角はいよいよ深く溝つけて下つて來てゐる。その男らしい唇邊と對して、冒すべからざる光りを湛へてゐるのは、大きくなくとも睨みの利いた、怖い眼である。鋭い注意力と、絶えず燃燒して熄まない、心情と勇氣との表明でもあらうか、斯うぢろりと眼鏡越しに睨まれると、縮くれ上つたものだとは、今でも昔語りの末に出る一つ話である。耳はまことによい、大きく立のびた耳で、芝居中で三世中村仲藏の耳と好一對と稱へられたといふ。廓輪の豐かさと、口邊から頤にかけた下停の豐かさとは、自らこせつかない才氣と、記憶力と、それから晩年の幸福、家庭の圓滿などを偲ばせる。

其の後の二三の寫眞も、いづれも晩年の事だから似たり寄つたりで、大した變化もない。ただ廣やかで頭腦の明晰さを示す額の面積が、增えて來たことと、何處となく圓かな、翁顏になつた位のものである。概して晩年になればなるだけ、險しい相貌も柔かく、豐かにおつとりしたとはいふが、それでも、なか〳〵に男らしいしつかりした容貌である。今の（二世）左團次氏や、（六代目）菊五郎氏の話にも、ほんの子供心のうろ覺であるが『怖い閻魔さま』のやうに記憶されてゐるとの事である。

中野源通寺の墓

しのぶ塚
（二三四頁参照）

狂言塚
（二九一頁参照）

明治の初年まで、氣のきいた髷を戴いてゐた頭は、頼朝公と呼ばれた位に大きかつた。結髪した卅歳前後までは特に頭でつかちで見つともないので、妻の氣轉で身幅を廣くして、だぶ〳〵の着物を着せて見恰好をよくしたとの話もある。それが四十歳以後になつて、開運すると同時に肥り始めたのである。七十になつても面差こそは翁になつたが、體には病氣一つなかつたといふ。明治九年（六十一歳）の九月に上野公園の大佛下へ出來た體量計にかかつた時、十六貫三百目あつた事が記録されてゐる。むつちりと肉の付いた、廣やかな胸幅と堅くふくれてゐる下腹とは、沈着と强健とを指示してゐるかのやうに見えたといふ。

靜坐法の權威岡田氏の説によれば、眞の健康體は、四十歳頃から肥り始めるのだといふが、黙阿彌に於てもそれは眞理であつた。さういふ段取で進んだ、黙阿彌の身體は實に健康の權化であつた筈である。生涯を通じて病氣と言つてはほんに算へる程で、持病といふものも先づなかつた。それ故にこそ、夫の驚くべき量的な、精力的の勞作にも堪へられたのであらう。——黙阿彌は二晝三晩徹夜しても平氣であつた。ただ眼球が赤く充血するだけであつた。二座三座を控へて矢の催促をうけながら、午前と午後と夜分とを、各〻に振り當てて、事務家のやうに執筆した事もあつた。馬琴の几帳と筆まめと作物の量的なのは有名であるが、をさ〳〵黙阿彌も、彼れに劣りはしなかつたらうと想像される。

二

默阿彌は常識の圓滿に發達した、世間的の人であつた。其の性格も考案も、靈的夢想的神秘的ではなくして、實際的、現世的、經驗的であつた。

『彼はよく無形の應報(卽ち勸懲又は因果應報の理の如き)をも冥想したりき。然れども彼れの同感と冥想とは、到底現身と現實とを』離れる事は出來なかつたのである。抽象的の事象に導かれて歩む人ではなくして、具體した個々の事實を基とし、それを通觀した上で、心學者風の理想を打ち立てて進んだ人であつた。

體質を見れば、肥滿して營養の屆いた多血質である。活力に富んでゐて、精緻であつた。なまぬるい事も大嫌ひであつた。けれども過激であつたり、粗暴な言動などは、生涯を通じて見られず、只管に謹厚であつた。地金は花のやうに感じ易い、江戸ッ兒なるにも似ず、克己、自制に富み、執着も可なりにあつた。感情の爲めに溺れるなどといふこともついになかつた事で、妻子の愛に惑溺もしなければ、人に狎れ又は他をして狎れしめもしなかつた。豪放、洒落な所、社交に圓轉滑脫を示す所謂才子肌の所などは先づなかつた。鋭角的な知力を以て——假令肚の中には在つても——江戸ッ兒風の滑

稽、諧謔を弄するやうなこともなかつた。また日常はいたつて嚴格で、几帳面で、ムキ眞面目であつたから、從つて操守堅固であり、恭譲を失はなかつた。

然し、舞臺上の總てには大膽、機敏であつたに反して、世事には甚しい臆病者であつた。表沙汰の事柄とか、役所向きの用件などには、から意氣地がなかつた。其の主智的ではあるが内に熾烈な感情の潜められてゐた所や、又は習慣を容易に變じない保守主義なところ、氣むづかしいところ、或は工夫力に秀でて、意匠に巧みな點などから推せば、神經質の素質も十分にあつた。常識に富んでゐて、それで空想にも秀でてゐる。若い頃には多血質と神經質とを等分に、後には神經質七八分といふ人であつたやうに想像される。ほんやりとして間の拔けたといつた風の面影などは、欠にも見せなかつた——あだかも、その作が五分も隙かない、穴の明かない構造であつたが如くである。唯々舞臺の上の變化と面白さと饒舌とに比して、その人物は、いつもながらに無口で、きちんとしてゐたのである。

父のむッつりとした温厚さと、祖父の江戸ッ兒氣質と、母の篤實と謙譲とを承けついだ、複雜な性格が卽ち默阿彌であつたのである。

三

上に述べたやうな默阿彌と、其の關聯せる世間との交渉はどんなであつたらうか。

『早稲田文學』の『默阿彌傳』中の緒言には、次のやうな事が述べられてゐる。

　彼れや其の爲人謹嚴篤實なりき、夫れ唯謹嚴篤實なりき。是をもて醜繁蝟集せる梨園の中に立ちて能く其の濁に穢されず、超然として常に其の獨を謹み、所謂人情を重んじ所謂義理を尊び……此の流俗に阿らざるを得ざるべかりし文人をして、能く卓然として保持せしめ云々。

と、この評語は遺憾なく彼れを圍む芝居社會と、默阿彌との間の消息を語るものではないか。無節操で杓子定規の行はれた社會、金と名譽とに眩惑されつつある社會の中にのみ住してゐて、默阿彌は一人漬されなかつたのである。然し默阿彌個人の色調は全然際立つてゐたが、其の爲に周圍と衝突したり、憤激して孤立したりするやうなことはなかつた。不即不離の間に調和して進むだけの融通はきいた。無論、その淸廉な律義な生活狀態を、死ぬまで押し通し得たには、鞏固な意思と、淸濁併せ呑むの寛大さとを要したことであらう。けれども默阿彌は、熱狂的に其の社會を愛してゐた。芝居を愛する餘りに、自己の住居を他へ轉じようとも思はなかつたであらう。

芝居界を他にして、默阿彌が交はつたものに、三題噺、興畫會等の如き一群があつた。津藤を始め魯文、有人、玄魚などといふ、戲作者肌の人々によつて作られた世界がそれである。默阿彌の態度は此の世界に出入しても同じであつた。酒色に溺れて身を崩したり、利慾に迷つて節義を失つたこともなかつた。『粹興奇人傳』中にも、『此仁平生友人と共に遊里におもむく事ありとも、酒席にのみは連な

れども鴛鴦のふすまを共にせず、女色に溺れぬ性質なり』と語られ、『隠なき影』には『要用の外他行せず……行状堅固にして云々』とあり、又悪摺りの羅漢像の註には『あせりて景品を得る事を要せず……悪羅漢達の悪意に組せず、近く交はりて遠く退き、剣呑經は開く事なき勤身堅固の大畫漢なり』とあるなどは、皆さういつた交友に對する默阿彌を説明してゐる。

特に『近く交はりて遠く退く』と評したのは、默阿彌の社會的態度を、的確に評説し得たものとの推賛の辭を惜しまない。芝居界に對しても戯作者の群に入つても、文士學者と交はるにも、要するに默阿彌は此の態度を持して實行してゐたのである。然し何人と交はるにも几帳面ではあつたが、いやに角ばつてはゐなかつた。いつも變らない、朴訥な直な平易な交はり方をした。けれども近く交はつて遠く退いてゐたのだから、一生涯を通じて、眞に親しく胸襟を披瀝して、奥底なく交はつた友達とては一人もなかつた。恐らくは、妻子の愛に溺れ、又は白い歯も見せなかつた位だから、心から氣を許して家人に對したことすらもなかつたであらう。賑やかなるべき世界に住んで、而も孤獨な寂しい生活を送つた人であつた。

話は變るが、默阿彌は無慾で、金錢に淡泊な人であつた。

芝居にはよく居直るといふ事があつて、役者でも、作者でも給金等に不滿足な場合に、何かの事故

を言ひたてにして居直る事がある。それが默阿彌には一度もなかつたさうだ。よし又金錢上でなくとも、不滿があつて手を引くにしても、それには必ず相當の理由もあり、熟慮に熟慮を重ねた上で行つたから、一旦決心して口外したことは、決してひるがへさなかつた。ましてや一服藥をいくら手重く盛つたとて、利く術もなかつたのである。

自分の給金などに就いても、嘗て自分から申出て、要求したことはなかつた。『俺は俺だけだ。俺の價値しかないのだ』と、かう默阿彌は家族の者に言つた事もある。さういふ點に於ても『芝居に唯一人の人だ』と、勘彌は稱してゐたといふが、金錢の爲めに動かされない人で、手腕があつたのだから、芝居界からは寧ろ薄氣味惡く思はれ、大切に取扱はれてゐたやうな趣もないではない。明治前の市村座や新富座の全盛時分に、『此處いらで師匠が斷をついたら……』と蔭で默阿彌の智慧の無さを嘆じた向きもあつたさうである。こんな譯故貪つた惡錢といふものがなかつた、其の上文人に往々見るが如き、蓄財的手腕にも卓れてゐなかつたし、況や富籤の類を買ふが如き、射倖心などは更になかつた。切れ放れもよく、交際上の義理を缺かすこともなかつたので、家を守るに足るだけの財產を持ち妻子へ若干の手當を遺したに過ぎない。生涯を富まず、而も窮せずに暮した。其の方面から見れば、實に平板に一生を送つた人である。

名譽を自ら求めた事もない。謙遜で、己惚れの少ない默阿彌には、虛榮心がなかつた。見ともない

自家廣告がましい事を敢てしたことも聞かない。懇意な講釋師や落語家が、高座で追從ごころに名を指すのさへ厭がつてゐた。

斯く名利に淡い默阿彌は、好んで施しをもした。『隈なき影』に「よく門人を撫育し積善陰德を旨とす」とあるやうに、門弟などの窮迫した場合には、よく面倒を見てやつた。夫の篠田瑳助の死後に、女房の氣が狂つてからも生活費全部を負擔してやつたとか、桑治といふ有望な門弟が病んでからは、勘彌と共に、死ぬまで厚く世話をしてやつた等のこともある。實地の見聞によつて作の材料を得たやうな場合には、禮心に必ず若干の金を惠んだとの事である。

又話は變るが、芝居界には、花柳界等と同じく緣起を重んじたり、信心に凝る人が多いが、默阿彌にはそんな樣子が少しも認められない。堀ノ内の御祖師樣へは、每年春になると一度參詣して御みくじをいただいて、其の年の警戒にしたといふ話は傳はつてゐるが、その他に成田の不動樣を信心したとか、稻荷を信仰したなどといふ事實もなかつた。

唯、因果應報の理だけは堅く信じ、それを以て處世の方便、信條としてゐたらしい。

四

これも『早稻田文學』誌上に載せられた傳記中に、默阿彌の特性として次の四つが擧げられた。

第一は、勤愼にして用心深き事。

第二は、萬事に嚴密にして規律を尊びし事。

第三は、利慾に心を動かさざりし事。

第四に、義務、世間への義理を重んぜし事。

此の中第二と第四は、要するに、廣義に於ける几帳面てふ事に外ならぬであらう。實にや默阿彌は飽くまでも思慮に富み、用心深く、亦几帳面であつた。其の程度は偏癖と言つても差支へない程に、特異なるものであつたやうだ。第三の利慾に心を動かさなかつた事は既に誌したから、あとの二つを逸話交りに述べようと思ふ。

前の章にも誌した通り、壯年から七十歳までの住居は、人家稠密な淺草で數回の火災にも遭つたから、火事といへば直に跳び起きたが、其の際の用心に特別の地圖が出來てゐた。スワ火事といふと、好い格幅の割合に軀の輕い人であつたから、自分が先立つて物干なり屋根なりへ上つて、四方を見渡し其の地圖を擴げるのである。すると自分の家の西の隅の庇の先は何處に當るとか、前の料理屋の屋根の左り角なれば何處であるとかと、めぼしい動かぬものを標準に取つて、夜中でも方角を取損はないやうに、考案された獨特の繪圖であつた。それ故出すべき見舞を取落したり、面目ない思をするやうなことはなかつた。

毎年元日になると新たに遺言狀を認めて、前のを燒却したとも傳へられてゐるが、マサカの用心にかうした注意をも怠らなかつたものであらう。

子女を誡めるにも、夜眠るも好いが、心を眠らせてはいけないと言つた。默阿彌は眞夜中でも一聲呼びかけられれば『何だ』と必ず確かな聲で返事をしたさうである。總じて人間は油斷してはいけないと、折にふれて言ふのであつた。家の外へ一歩でも踏み出したらば、四方から打つてかかられるものと覺悟して用心しろ。人ごみへ行つても外を歩いても、心に油斷がなければ身體に隙がなくなる。さうすれば掏摸に物を取られる譯もなければ、銀簪などをぬかれる筈もないであらう。人力車に乘つたらば、顚覆されるものと思つてゐよ、よし顚覆されても、怪我を免れるであらうとも言つてゐた。自分でも外を歩く時には、其の通りの心がけで、物を持つにも、右の手はいざといふ時の用意の爲めに明けてあつた。

一擧一動をも苟にしない思慮深い、無口な性質であつたから、輕口や洒落な言動を、表面に表はすといふ事が皆目なかつた。常識に富んでゐて、癖とか缺點のなかつた人だから、戲作者狂言作者、又は名人肌の人に見受けるが如き、傳記を賑はすやうな奇言奇行、瓢逸な話草などは殆んどないと言つてよい。

然し入念の極、思慮深い結果は、世事に對して小膽にも臆病にも陷らせた。時には傍から見て焦つ

たい程に物案じするやうな事さへあつたといふ。

新富座で『崋山と長英』を書下す時に、以前千歳座の田村成義氏から一度話の出た題材なので、一應其の許諾を得て、着手したのはよいが、その作に表はれた長英の遊女に關する件が、彼れの名譽を損ふものだとの故障を、官邊の一人から挿まれた時の如きは、蒼くなつて震へたといふ。掛合事には拙劣な默阿彌が、勘彌に對つて一日も早く芝居を中止して貰ひたいとまで申込んだ。其の實は若干の金を包んで渡し、一二箇所の訂正をして濟んでしまつたのであるが、さう言つた苦情や面倒を非常に厭つた。だから御家物に手を着ける時には、注意に注意を重ねて、槍を突き込まれないやうにした。『鏡山』の加賀の大領を、名君として書いたなどが其の一例である。

芝居界で、舞臺にはひどく大膽で度胸がよくて、世事俗事に臆病風をふかしたのは、默阿彌の外に九代目團十郎があつた。團十郎が甞て『扇屋熊谷』を演じた時、土間の七八位で一寸した喧嘩が始まつたのに大層愕いて、鬘も外さずに、強い熊谷が芝居裏の茶屋へ眞先に逃込んで蒼くなつてゐたといふ話がある。興味深い相似點ではあるまいか。

油斷がないだけに、注意力も鋭敏であつた。さすが時流を穿つ世話物作者とは言ひながら、時の流行、風俗などに就ては、一刻も注視することを忘れなかつた。女の髮の結振から衣類の流行り廢り、穿き物、持物などに到るまで、よく知つてゐた。流行言葉の研究などの爲めには、自ら頭巾目深に身

を忍ばせて、黄昏時の酒場の雜沓に立交つた事もあつたさうである。

几帳面も、默阿彌の眞骨頂であつた。二十歳頃に書殘された日記や茶番集を見ても、如何にも手蹟に、キチンと淨書されてゐる。書損などは一つもなく、ましてや棒を引いて、くしやくしやと消した箇所などは一つもない。潔癖のさせる業でもあつた。一から十まで曲つた事や物が大嫌ひ、四角四面にちやんと整頓されなくては、氣が落着かなかつた。

祝儀包みが澤山に入る時に、十が、二十でも、包み上つて重ねて見て、一分一厘違はずに、本の角でも積重ねたやうに、揃はなくては納まらなかつた『不器用だなア』と苦い顏をして言つた。一つ一つ分けて出すのだから、そんなでなくともと側からは考へても、そこが癇性で心持が惡いのである。で、水引をかけると自然きちんと格好よく行かないから、紅丈長を用ひた。それも上物好きだから、別誂へにして、表に光澤を出して、裏打の薄美濃紙に丁字引をしたといふ、至極念入りなものであつた。

紙撚をよつても、一束にする時とんと小口を揃へて、其の兩端が切つたやうに揃つてゐなくては、『不器用な奴だ』を繰り返した。疊の合せ目なども、板の目のやうにきちんと合はさつてゐなくては納まらなかつた。

萬事がさういつた風にやかましかつた。書齋の中に本一冊散はつてゐた事もなければ、物一つ有る

べき場所から飛び出してもゐず、曲つてもゐなかつた。机の上には裸の硯と筆と墨とがあるだけであつた。また早い話が、正本（臺本）を訂正すにも、棒を引いて消して横へ小さく書入れるなどは禁物で、色合も同じ半紙を、その直す部分だけの長さ大きさに角に切り、糊をつけるにも、何時でも剝がれるやうに薄糊で、而も四方の縁だけへ指の先で丁寧につけて、爪で擦つて張込み、それへ訂正の文句を書入れるのである。筆は心のあるのを用ひた。尖の方のほんに五厘か一分程も下して、それだけへ墨をつけて使ふ限りで、穗の切れた筆を見ても、その他の部分は眞白で、汚れてもどうもしてはゐなかつた。正本を入れる紙袋も、肌なみの股引式に動きも取れぬやうなきつしり一ぱいの大きさで、何部積んでも、不揃を積んだやうになるのを好んだ。

かういふ性質は、又轉じて默阿彌をして舊來の習慣をあまり變ぜしめなかつた。自分の趣味がさうさせたので、別に反抗的でもなければ、頑固でもなかつたのであるが、流行物を一般に好まなかつた體裁上から備へはしても、好んで用ふるまでは至らなかつたものが多い。洋服を嫌ひ、洋食を好まず、外套などはついに着なかつた。歿するまでも書物をするのに、洋燈を用ひずして、薄暗い行燈の下で筆を走らせたなども其の一例であらう。

五

默阿彌は生れだちからの江戸ッ兒であつた。人前へ出れば、思慮深いといふ性質の爲めに、肚の底の、燃ゆるが如き江戸ッ兒氣性は掩はれてゐたけれども、衣食住の好み、趣味などになると、爭はれない江戸ッ兒の地金を發揮した。

結城紬に古渡り唐棧といふこしらへが、江戸ッ兒の粹な好みの中心であつたが如くに、同時にそれは默阿彌の着物の好みであり、又生涯の表明でもあつた。表まさりの裏小袖とか、意氣で高等でお人柄、又は底いたりと言つた風の趣味が、即ちさうであつた。鰶の腹のやうにぴかぴか光つたものなどは、晩年に於ては殊更厭がつた。黑羽織に窮屈袋の袴を着用に及んだのは、實に止むを得ない場合だけであつた。物は上等でも地味でけば〳〵しくないといふ所に狙ひをつけて、仕立は勿論大いにやかましかつた。

身體は肥滿してゐたが、少食であつた。四十歳頃からは食量を定めて、三度、二椀づつ喰べたといふ。器物好みで、見事な大きな錦手かなどの茶椀の中へ、ちよんぼり盛るのが慣はしで、その又盛り方が多くていけず、少くていけず、厭な顏をした。早飯、早糞、早走りと言はれた江戸ッ兒の一員だけに、ほそ〳〵口の中で嚙んでなどゐなかつた。上等の茶を度每に入れさせ、のつけから茶漬にして、銀の箸でちよ〳〵と突ッついて、さら〳〵さつとかつ込んだものである。

膳の上も、料理屋から取つた、お座なりのものなどでは氣に入らなかつた。つまり美食家なのであ

らう、凝つてゐてもさらりとした手料理を、それも好い器物へ、恰好よく盛つたのでなくてはいけなかつた。然し其割に好き嫌ひはなかつた。矢張り河原崎座時代の若い頃には、クサヤの乾物が好きな方で、これも贅澤者の海老藏がその徒黨で、わざ〳〵取寄せたのを、樂屋難儀に部屋で燒かせて、『師匠の所へ持つてつてくんねえ』と言つたのが、度々であつたさうである。けれども六十歳過ぎには、若い時に猪が好物でよく喰つた故か、ほんとに其の報いで齒が拔けたので、クサヤや葭町の一文揚げを、味淋と醬油で附燒にして喰ふなどといふ自由が利かなくなつた。

食事時の飯は澤山喰はなかつたが、間の物はよく取つた。それも例の通りごて〳〵した蒸菓子などは好まないで、輕いさらりとした物に限つてゐた。果物では葡萄、柿などをも好んだが、取分け栗は大好物であつた。秋になつて栗のある間は、絶え間もなく諸方から貰ひ、それをいろ〳〵按配して喰べた。本を讀んだり執筆の間にも、ほつ〳〵拾ひこむので、胸が支へたり胃を惡くした。あれほどに節制的な人でも、栗には勝てなかつた。栗時になると、家人がお腹をこはしはせぬかと心配して、金生丸といふ胃の持藥を用意して置いたさうだ。

其の住宅も、四谷丸太の柱に、腰張りの根岸壁といつた風の、茶室好みの柔らかい好みのものであつた。室内の裝飾なども質素で、けら〳〵した、ややこしいものなどは一つも置かなかつた。襖も塗縁でないだけに、是眞の額も似合うといふもの。然し例の通り上物好きだから、木口も選めば職工も

吟味した。庭なども築山に泉水、噴水といふ好みではなくて、自然な山形で、気に入らうといふのであつた。

骨董道楽とまでは行かなかつたが、道具類は好きであつた。火鉢、煙草盆、用箪笥、違棚の如きをば、目に付いた好もしいのを買つて来たこともあり、腕を見込んだ指物師に注文して造らせた事もある。皿、小鉢、蓋物なども、一寸道具屋の店にあつて面白いものならよく買つて来た。それに就いてこんな話もある。維新前後のことででもあつたらう、或る日默阿彌が外から帰つて来ていふには、「いくら金を出しても俺のほしいものがあるが、どうも自由にならねえものだから仕方がねえな」と言ふ。何かと問へば、先達西隣りへ大島から越して来た米屋の戸袋を見て来ねえといふ。どんな立派な板かと思つて行つて見れば、元の古家から持つて来た板と見えて、二箇所にある戸袋の杉板が、長年の風雨にさらされて、見事な木目の洗ひ出しになつてゐる。そんなにほしければと、長女の糸女で大家さんを仲介に立てて申入れた、先方の米屋では、新しければ其の方が結構だとの返答に、早速に出入の大工を呼んで、そつと剝がさせ、米屋の戸袋は檜の新板で張り替えた扨てその六枚の板をば、半分を書斎のささらこ下見に用ひ、残り三枚は茶室の網代天井を下して落し天井に使つたのである。かういつた風に、道具類でも、唐木などのかち〳〵と堅いはうの好みではなかつた。

今一つの道楽は張交物を蒐集した事であらう。嘉永、安政の昔から明治廿年頃に到るまでも、丹念

に集めた張交物は、なか／＼な量になつてゐる。つまり、瓦版の讀賣、諸國名産物の上包み紙、由來書、或は時事を題材にして版行された、千種萬樣の小出版物――諸番附、見立繪等。又は諸商店の廣告、引札の類、扨は團扇繪、凝つた模樣の手拭等に到るまでの、面白いと思はれ、珍らしいと思はれた、さま／＼の小さな散逸し易い、ちよいとしたものを、何くれとなく輯集して置くのが道樂であつた。死ぬ前に至つて『此の張交物を整頓して、帖に仕立てられないのが殘念だ』と、こぼしたさうである。

默阿彌には、こんな目立たない嗜好や道樂に限られてゐて、他にはこれと言つて殆どなかつた。遊藝も極く若い、八笑人時代に少しはかりちよつかいを出しただけで、凝つたものはない。碁、將棊等の勝負はもとより、酒も煙草も幼少から手にしなかつた。ただ／＼筆を持つて机に對ふのが、何よりの樂しみであつたと言つてよい。物の嗜好とは少し方面は違ふが、默阿彌は風が嫌ひであつた。春先に大風でも吹いて、砂埃りでも立たうものなら、一日中いらいらとして、仕事も手に着かなかつたといふ。

此の外に、强ひて道樂めいた事を今一つ求めれば、動物を愛した事である。犬も飼つたが、特に猫を愛した。主人に傚つて家人が又た動物を好んで、一時は十數匹の犬猫が、家中にぞろぞろしてゐたこともある。歴代の猫中で、最も恩寵を忝うしたのは、太郎といふ牡猫であつた。此奴は千匹に一匹

といはれる、眞正の烏猫で、全身の毛から爪尖まで眞黒といふ逸物で、肥つた大きな胴體で、のそ〳〵と歩き、人語をも辨へたといふ變り物であつた。首には緋格子の博多織をくけた輪がかかつて、いろんな守札が入れられてをり、好い音のする鈴と、迷子札がぶらんこと下つてゐる。焼沙魚と章魚の足とが大好物であつて、毎日のやうに備へられた。人からも「太郎ちやん」と言つて、土産に貰つた。默阿彌が呼べば、胡床の中で香箱を作つたり、肩の上へ跳び上つたりした。御秘藏の猫で通つてゐたから、火事でもあつて一寸見えなくなりでもしようものなら、人一人居なくなつたよりも、大騒ぎをしたこともある。此の猫が死んだ時には碑が建つて、糸女が狂歌を詠んで彫りつけた。

　十九年わづか二日の初夢を見果てぬ猫の名も太郎月。

明治十九年の一月二日に、太郎猫が死んだからである。

六

藝術家の家族は、往々にして犠牲に供せられるともいふ。けれども默阿彌の家にはそれがなかつた一つは默阿彌の思想生活が、所謂穩健な心學談に立脚したもので、實生活とも並行してゐたから、空想的で思索に富む狷介な藝術家に見るやうな、矛盾が少なかつたといふ點もある。又一つには、默阿彌が謹み深かつたとの理由もあらう。けれども他の大なる一つは、默阿彌を手車に乗せるやうにして

仰いでゐた、誠實なる家族の從順、孝養心にあつたことをも忘れてはならぬ。

もとより物分りのよい人だから、何もかも心得てはゐるし、慈愛深くもあつたが、前述の通り容易に感謝しない性質で、地金は江戸ッ兒であつて、兎も角も神經質な作者だから、——如何に自制力に富んでゐたからとて、家庭に於ては、なか／＼氣むつかしやの、やかましいかたであつた。妻子が後に評したるが如くに、「奉公の味を知らなかつた」だけに、我儘な所もないではなかつた。性急で、少し激すると江戸ッ兒口調になつて「おいら知らねえぜ」と、透徹してはゐないが、底力のある聲で言ひ放つたまま、口を利かなくなつたこともあつたらう。けれども默阿彌の妻子は、蔭ひなたなく從順に誠心を以て仕へたのである。いくら苦虫を噛みつぶしてゐたとて、衝突の起らう筈もなく、反目も、軋轢も、絶えて見られない幸福な家庭であつた。

自分は早起きで、夜寢に就くのはおそかつた。夜は十時限りで、下婢を始めはた／＼と寢させ、自分は十二時、一時までも机に向ふのが常であつた。下婢どもの居眠りを見るのが、大嫌ひであつた。髮のほつれたり、亂れたのも大嫌ひで、くづれかけてでもゐれば、「髮結を呼びにやんねえ」と聲をかけたといふ。髮もきちんとした島田だの丸髷だのに結ばせた。銀杏返しや水髮などでゐれば、一も二もなく叱りつけられた。

然し、いかにも主人らしい主人であつたが、また一面には、詩人らしい、大きな赤兒のやうなとこ

ろもあつた。或る時醫者の勸めで、餘り夜起きをしてゐるから、藥の爲めにお酒を一猪口でもよいから飲むやうにと言はれたので『では飲まう』と言ふので、夜の十時頃に一二杯すすめた。するとやがて大きな欠をして、眠くなつたので寢てしまつた。と、其の翌日酒を勸めた妻子が、大目玉を喰つた『嫌ひな酒なんぞ飲ませたから、仕事が大變おくれた』と、大不足であつたといふ。又、常が丈夫だつたから病氣などになると、大變な騷ぎをした。ほんの少し風邪でも引いて、頭痛でもすると、やれ頭が破裂しやしないか、それ遺言をしたいから筆と紙を持つて來いとか何とか騷ぎ立てるのである。餘りに騷ぎが烈しいので、醫者に内々で聞いても、別に心配な事はないと言はれるのであつた。それで家人が少しでも輕いやうに傍から言つて、宥めようものなら却々機嫌が惡かつた。そんな駄々ツ子のやうなところもあつた。人前に出れば謹厚であつたが、家庭にあつては、抑へてゐる感情が時々爆發したこともある。

默阿彌が門弟に對する態度は、ぞんざいでも横柄でもなかつた。肥つてゐる爲め有名な暑がりで、夏などは褌一つでゐることが多かつたが、浴衣も引張らないで逢ふ程構はなくはなかつた。嚴しいことは嚴しかつたが、又自分の經驗に省みて、同情も深ければ、察しもあるので、芝居が休んででもゐればそれだけの手當てをしてやり、年の暮にもなれば、手附を前渡しにしたこともある。又、一方溺れ

ない人だつたから、依怙贔屓といふものが更になかつたので、皆一樣に畏敬してゐた。仲間の苦情が出來たり、黨派割れのするやうなこともなかつた。歿後に到つても、打續いて一門が繁昌してゐるといふのも、一つは默阿彌の人格の及ぼした結果であらう。

門弟の教育と言つても、是れと取立てていふ程、秩序だつたものもなかつた、先づ最初には院本を讀ませるのが御定法で、それから手習をさせ、書拔淸書をさせ、やがて作者の課程にまで進ませた。然し、質問されない限り、特に作法などを教へもしなかつた。先づ無干涉主義であつたと言つてよい志のある者が脚本を書いて來れば、始めには、其の缺點を忌憚なく摘出して、皮肉な攻擊をする。次には其の好い所を取出して褒めるやうにして、將來の勵みにした。晚年になつて『狂言作者心得書』が作られたが、これも單に法式上の心得だけで、脚本作法などには言及してゐない。然し此の心得書は、默阿彌が生涯に門弟へ遺した、作者に關する覺え書の唯一なるものであり、且つ狂言作者なるものの楷梯と、其の職分とが、一讀して了解し得る體のものでもあるから、參考の爲め、左に其の全文を引いて置く。

一、立作者は太夫元（座元）、座頭と相談の上、世界を極め狂言の筋を立て、座頭へ話し、一場づつ筋書をして二枚目三枚目の作者へ、其の人得手の場を渡し、狂言に仕組ませ、橫書出來の上讀合せをなし、同じせりふある時は、どちらか省き一直しなして淸書をさせ、正本となすなり。

一、立作者の書物は、大名題、(顏見世ならば)だんまり、大詰、二番目淨瑠璃なり。

一、立作者は、二枚目作者を伴ひ、座頭の宅にて狂言の內讀をなす。座頭一座の役を聞き、役不足のなきやう相談をなし、立作者添削の上、表向きに二階にて本讀ありて、一座へ狂言を聞かすなり。

一、立作者大名題を書き、小名題(俗に四枚)は二枚目作者書く。顏見世寄初の節、三階に於て來年の惠方へ向ひ立作者大名題を讀み、二枚目小名題を讀むなり。

一、立作者淨瑠璃を綴り、のり入(紙)へ自身に淸書なし、三太夫(富本、常磐津、淸元)の家元へ狂言方持參なし、家元に讀みきかせ、本を渡す。狂言方へ祝儀として金百疋蕎麥を馳走なすが例なり。

一、立作者は名題淨瑠璃は必ず書くべきものなれど、四代目南北翁は淨瑠璃不得手故、始終二枚目作者に書かせしなり。

一、立作者は看板、番附の下繪自身に畫く人もあり、外に畫心ある者あれば差圖して畫かせるなり。

一、立作者は狂言方見習等を宅へ寄せ、書拔きをさせるなり。

一、立作者は總浚ひの節三階へ出席なし、一日の狂言を一見なし、せりふなどの誤りを正し、又

はたれる所を其の場の役者に相談をなし直すなり。初日の内棧舗にて見物なし、惡しき所を直させるなり。

一、立作者は初日より出揃ひまで日勤なし、仕切れぬ幕の長短を計り、不殘出揃ひし上は次興行に掛る故、日勤はせぬなり。

一、立作者は作者中の給金を表(方)より受取り、それ〴〵へ渡すなり。昔は立作者仲間の天窓をはる（給金の上まへを取る）事ありしが、近年はなき事なれど、かゝる事ありては仲間の用ひ惡し。たとへば五分の拂ひの節は、給金高故立作者一分足し、六分になして拂ひ、又は手附金延引の節は立替へて遣はすやうなれば、自然と用ひらるゝなり。

一、貳枚目作者は、立作者の相談相手にて、萬端引受け多用なるなり。書物は小名題（四枚目、狂言は顔見世ならば、四立目の淨瑠璃、五立目の世話場、又は二番目を書くなり。

一、貳枚目作者は、本讀前に、立作者より相談なき名題役者へ役の柄を噺しに廻るなり。

一、貳枚目作者は顏見世、寄初の節、小名題を讀むなり。

一、貳枚目作者は、役の納まり兼ぬるを扱ひ納めるなり。初日の内は日勤、出揃ひ後は三枚目と賴み合ひ、出勤をせぬ事あり。

一、三枚目作者は萬端二枚目同樣にて、書物は三立目、二番目序幕なり。初日より日勤にて、用事

日記の一部（四七四頁參照）

作者心得書（三一八頁參照）

ある時は狂言方の筆頭に頼むなり。
一、狂言方とは四枚目、五枚目の作者にて、稽古を引受けてなすなり。此の稽古をなす者は、本讀の節作者の傍にて本を聞き、一日の筋を能く覺え、我が稽古をなす場は其の前に一遍本を讀み我に解せぬ事あらば作者に能く聞き置くべし。役者に問はれて答への出來ぬは、恥かしき事なり。
一、狂言方は稽古中、其の役者の覺え憎きせりふへ印を附け置き、初日に早く附けてやるがよし舞臺へ本を持出でせりふを附ける時は、成丈け見物へ知れぬやう、役者の蔭か道具の蔭へ身をよせてせりふを附けるなり。
一、狂言方幕明きの木は、能く板付きの役者を見て幕を明け、幕切りは早く舞臺へ廻り、幕引きの者を見て、舞臺上手へ裏向きにしやがみ居て、何とやらして木頭のせりふと一緒に立つて、チョンと打つなり。前より立つてゐて打つは見ぐるし、ぶざまなるものなり。
一、狂言方は正本の清書、せりふの書拔きをするが役なり。稽古中役者の直し出し時は、其の作者へ屆け、ゆるしを受けて直すなり。
一、見習は、諸事萬端見習ふなり。稽古中狂言方の傍に居て、其の場へ出る役者を呼び集め、稽古中書拔にせりふ拔けて居る節是を書入れなど致し、稽古の仕樣を見習ふなり。此の內誰の稽古の仕樣がよし誰のは惡しと、能き人を見習ひて稽古を覺え、狂言方となるなり。

一、見習ひは初日に衣裳、小道具の附師帳に記しある品を、衣裳方小道具方に代りて役者の所へ配りしものなり。又名題役者の所へ幕間の聞合せに、幾度となく行くものなり。是は見習ひに限らず、狂言方も聞合せに行くなり。

一、見習ひは初日幕明きて舞臺上下に一人づつ裏向きに控へゐて、小道具等不足の時は樂屋より持運び、稽古人の小用を足すなり。此の内に初日の出しやう、役者へせりふの附けやうなど見習ひて覺ゆるなり。

一、見習ひは、芝居休日中立作者、二枚目作者の宅を廻り、業用の使は素より、俗用の使をなす共の折は立作者宅にて食事をさせ、小遣ひを遣はして遣ふなり。

一、見習ひは、商家の丁稚同樣にて、昔の給金は一興行鼻紙代として金一分か二分なり。實に馬鹿々々しき事ながら、稽古を覺え、狂言方となり又作者となり、人に用ひらるゝを望みにて、一生懸命に出精なして立身をするなり。

一、見習ひは、作者の筆取りを初め、正本の淸書かきぬきを覺ゆるが專一なり。

右は故人三升屋二三治、中村重助、並木五瓶、五代目南北等の敎示なり。

此の心得書中には洩れてゐるが、見習ひ時代の或る者は內弟子といつて、立作者の宅で下男同樣の勤めをしながら、入門してゐるものがあつた。で、默阿彌の宅には一時に二三人もの內弟子の居た事

がある。けれども、作者としての業を抱へてゐる間は、決して家事上の用向きに混同して使ふやうな事はなかつた。それに就いて門弟の一人清吉氏は、『師匠に叱られし話』として、追憶談を書いてよこしてくれた。

明治六年に新開場の河原崎座へ出勤してゐましたが、何分淺草の師匠宅からは遠いので、兄弟子爲三と共に、興行中は芝居の樂屋へ泊つてゐる事としました。慥明治九年の一月興行で、團十郎が休みまして、狂言は宮本無三四で安興行の時、十二時頃から雪が降り出して大雪となり、翌朝になつても止まず、客足も惡く據ろなく興行を休みました。そこで前日よりの大雪故、金作さん（三世河竹）を始め八名程前夜より部屋に泊り居り、芝居が休み故部屋で酒宴が初まりました。見習は用が多くてまご〳〵してをりました。午後になつてフト考へまして、師匠の內へ雪かきに行かうと、部屋の連中へ斷り、表へ出ました。私が十九歲の時、面白半分大雪の中を淺草の地內へやう〳〵四時頃に參りますと、何に歸つたと師匠は納まらぬ顏付、雪をかきに參りましたと申しますと、おこられました。『雪をかくには町內の鳶職もあり、出入の職人もある。興行中弟子が雪などかきに來るには及ばぬ、芝居が雪で休みなら上役の者が部屋で酒でも吞んでゐるだらう、其の用でも達してやるのが見習の役だ。早く歸れ』と大立腹。傍にゐたおかみさんや、娘御お二人の詫言で、其の夜だけ師匠宅へ泊り、翌朝早くに芝居へ歸りました。……其の後雪が降り

ますと、おかみさんや娘さんに叱られぬ用心をおしと、からかはれました。○師匠は内弟子でも芝居へ出した以上は、興行中などに内の用もさせません位堅い人でありました云々。

默阿彌は芝居の作者部屋へ行つても、無口で、默り勝ちできちんと坐つてゐるので、皆が窮屈がつたもので、中にはにゆうと出て行く者さへあつた。よし酒が始まつてゐて、遠慮なしにおやりと言はれても、誰も口にせず無駄口も叩かなくなつたさうである。そんな時には氣を利かして、默阿彌の方で外したといふ。新富町時代になれば、ずつと間隔も遠くなつて來たから、部屋へ行つて一通り用件を濟ますと、取散ばした火鉢の掃除などを必ずしたさうである。煙草の殻や灰のかたまりを丁寧に除けて、明茶椀に集める。そして炭取を持つて來て、なるべく細かい炭を、一つ／＼火箸で挿んでは綺麗に積上げたものだといふ。火をおこすのが名人であつた。

もと／＼裏表がなくて、どんな場所へ出ようとも、老若童幼を問はず、誰に逢つても、同じ態度で交際した人であるから、劇場に對しても、世間一般に對しても、變りはなかつた。空世辭など言つたことなく、特別に機嫌の惡かつたこともない。友達にしろ、強ひて求めはしなかつたが、イブセンのやうに『友達は費えな贅澤なものだ』などといふ氣はなく、一旦交はれば義理堅くて、中絶するやうなことはなかつた。

几帳面だとは言ひ條、徹頭徹尾の切口上一點張ではなく、其の中に世話に砕けた、柔かみがあり、嚴格といふのも取すましてゐるばかりでなく潤があり、朴訥で飾り氣がないので、一寸づきの惡い譯でもなかつた。何事によらず段取がよく、按配に巧みだつたから、少し調子がつき出すと話が面白かつたといふ。鑿庭氏や故人になられた幸堂氏の話にも、酒は飲まなかつたが、酒の燗をしながら相手をし、座談をするのが巧みで、何とも言へぬ味であつたといふ。默阿彌の座談は能辯でも多辯でもなく、早口でもなかつたが、江戸言葉を盛んに使つて、時には古名優の聲色も交へながら、段取よく運んだものださうで、趣味に富んでゐたさうだ。三題噺以來の經驗に徴しても、座談や譚話術に長けてゐて面白味のあつた事は爭はれない。

七　思ひ出（糸女）

前に門弟と父とのことがありましたが、それに就いて思ひ出したことがありますから、ちよつと附加へておきませう。

父はその人の技倆を試す積りでさうしたものですか、門弟から何か見て貰ひに持つてなど參ると、最初に恥しめるやうに叱りますので、皆びつくりするのが例でした。これはわたくしが實地に見聞きしたことですが、故人の金作が始めて（明治八九年の頃）『啡倉重四郎』といふ作を書いた時に、父の所

へ持つて行つて見て貰ひますと、やがて呼びつけまして、こんな事をしてはいけない、ここは誰それの作のどこを盗んだのだらう、ここは俺のあの作の彼處をそつくり持つて來たのだらう。こんな盗みやうをしてはいけない、盗むなら分からないやうにしなくてはいけない、と一々指してほんく言はれたものですから、金作も冷汗びつしよりになつて歸つて行きましたが、其の次に來た時には、父は丁寧に、かういふ所は、かう直さなくてはいけないとか、これではまだ足らないから、かうしろとかよくとつくりと敎へてやつてゐたのを記えてゐます。

また、ある弟子が圓朝さんの譚を脚色んで來た事がありました。此の時にも始めは大小言を頂戴してひき退りましたが、次に來た時には、名人が作つた譚などを脚色むのは非常に難しいもので、脚色したとても、よく原の筋をこはさないやうに、そして又譚と芝居とは違ふから、出て來る人間の取捨もしなければならない。もとく脚色んだとて、それが自分の作になつてしまふといふ性質のものではないのだから、なぞとしんみりと言聞かせてゐました。で、父自身も圓朝さんの譚などへはなるべく手を付けないやうにしてゐました。

それから私が後年になつて、警視廳の檢閱がやかましくなりましたので、父の著作に修訂をした事があります。さういふ時は私が書きなほした所を、父に見せましたが、それが若し床のある箇所でして、不出來で長過ぎる事があつたとしますと、やがて「お糸ここへ來ねえ」と申しますから、おそる

おそる前へ行きます。するといきなり「いつたい此のチョボの中人間はどうしておく積りだ」と大小言ですから、「長うございましたか」と聞きますと、「もつとつめて直して來い」と申されます。で、私がそれを書き改めて持つて參りますと、今度はチョボの長短に就いてすつかり教へてくれました。子役があつたらかう、一人舞臺であつたらかうしろなどと手を取るやうにして教へてくれました。白なども讀んで見て、「これでもよく筋は通るが、此の文句をかう上へ持つて行つて見よ、ずつと口調がよくなる」、同じ文句でも、位置だけをぬきさしして變へて見ろと言はれました。セリフの口調もよくなり淨瑠璃の文句でも、さうすれば節がつけよくなるものだと言はれました。

何でも、始めにはつッぱねておいて、もう一遍自分の力でやらして見て、それから教へてやるといふやうであつたと思はれます。

近頃になつては時世も變りまして、正月のお芝居の初日は大抵元日か二日か三日ぐらゐ、時によると前年の大晦日などといふ事もございますが、以前は七草前に初日を出すやうなことはありませんでした。私が覺えましてからも、小團次などは十五、十六の宿下りは相手にしないといふ見識で、それが濟んでから初日を出しました。

そんなわけ故正月は、氣もゆつくりと遊び暮すことが出來ました。新作の時にはさうでもありませ

んでしたが、在來物で間に合はせる事に定まつてゐる時には、十四五日までといふものは、父も母も入交りで賑やかに送りました。家の者と弟子を呼び集めまして、雙六をしたり、歌骨牌を取つたりしました。かるたの時には父がいつも讀手でして、すら〳〵と分かりよく上手に讀んだのがまだ耳に殘つてゐます。景物には父の方からは帶、紙入れ、腰下げなどといふ男持の品物、母の方からは花簪とか頭へかける布とかいふものが出まして、これへ到來物の菓子折などを加へて賭けてくれました。さうして男が女物をとつたり、女が男持ちの物に當つたりするのが興を添へました。なんでも、弟子が五六人づつも每日押じかけて來ました。こんな時には、平生の怖い、きびしい父にも似ず、無邪氣に皆の笑ふのを見て悅んでゐました。

　これが若しあべこべで、新狂言の時ででもあらうものなら、書物の邪魔になるといふので、それこそ家の中では大聲に話一つもしないやうに、靜かにしてゐなくてはなりませんでした。

　父が猫を愛したことは前にもありましたが、もう少し細かしい事などを附加へておきませう。私の所では人樣に差障りがあるといけないといふので、犬や猫に人間の名らしい名はつけませんでしたが、太郎だけは父の秘藏で特別になつてゐて、太郎公々〱と呼んでゐました。此の猫は家に飼つてあつたちいといふ熊猫に生れた子で、その時に限つてお腹が大そう大きいので、何匹生れるのかしら

と思つてゐましたが、生れたのは唯の一匹限りで、而も頭の尖から爪先まで眞黒な、眞正の烏猫でした。爪黒の烏猫は火難除けになり、生業繁昌のまじなひになり、勞症のやうな病氣をなほす功もあるといふので、世間で珍重しますから、盗まれないやうに大切に育ててゐました。殊に一匹兒は家相にとつて、此上もない吉事だなどと焚付けられたものですから、いよ／＼大切に育ててゐますと、大きな圖體になつて、大人が抱いても、膝からすべり落ちる程になりました。父が太郎公々々と呼びますと、鷹揚にのた／＼と行つて、胡坐の中へ入つて香箱をつくつたり、御飯時でもあると肩へなど上つたこともありました。

この太郎が人様にお話するのもをかしい程贅澤な奴でして、鰹節などで御飯を喰べた事は先づありませんでした。魚も本場ものと場違ひとを喰べ分けた位です、魚河岸の尾張屋さんのお話に、『河竹へ魚をやるんなら、場違ひをやつてくんなさんなよ、太郎猫に嫌はれると外聞が悪いから』と、若い者に氣をつけさせるとおつしやつてでした。何しろ本場ものの新しいのだと、ぺろ／＼喰べますが、通常の魚屋の店にあるものなどは、てんで見向きもしませんでした。宅へ來つけの魚屋が、鮪のどてをいくつも持つてゐる時には、一片づつそいで太郎にやつて見て、喰てくれた方のは晩までおけるが、ふうんと横を向いてしまふのは、早くはかないと腐ると申した位です。時によつて他から太郎へといふので、お魚をいただいても、喰べないでお氣の毒な思ひをしたこともあります。魚が氣に入らない

と御飯も一日中喰べずにゐて、生鷄卵をわつて、コチン〳〵だよと言つてやると、それを嘗めてすましてゐるといふ風でした。

太郎が父の秘藏だといふことは門弟の間にも、亦近所にもよく知れわたつてゐました。それに就いてこんな話もあります。一度宅が半燒になつたことがありました。いよ〳〵火が間近になりましたので立退く事なり、七八匹の猫どもをば、行火や籠の中へ押しこんで行つて見ると、太郎がゐません。けれども一時も早く立退かねばなりませんから、仕方なしに置いて行く事にしました。すると私共の立退いたあとへ、一人の弟子が駈けつけて來ました。すると太郎だけがうろ〳〵してゐたので抱いたまゝ、故人の金作の家が近所でしたから持つて行つて、女中に渡したのださうです。然し猫の方では見慣れない人の手へわたつたので、ぴよいと手をひつかいたまゝ跳び出してしまひました。やがて火事はをさまりましたが、太郎猫の行方がかいもく知れません。金作は師匠の愛猫を失くしては相濟まん、燒けてしまへばそれまでだが、一旦自分の家まで連れて來られて、居なくなつたとあつては申譯がないといふので、蒼い顏をして近所をたづねて歩いたさうですが、『ああ、あの太郎猫ですか、一向見かけません』といふばかりで、三日間といふもの知れませんでした。その受取つた女中などは、申譯がないから、いよ〳〵ゐないとなつたら投身するといふ騷ぎだつたさうです。やうやく四日目になつて見つかつたので胸なでおろし、父は『知らなかつたが、氣の毒なことをした』と、禮をやつた

ことなどもございました。

猫では右の太郎を愛しましたが、犬では明治になる前に飼つてありました三太といふのが祕藏でございました。大きな白犬で、父にはよくなついてゐました。をかしいことには、父が芝居に參る途中を送つて行くのです。家を出て劇場の樂屋口へ行くまで、後になり前になりして、尾をくるりと卷き上げていそ〳〵と附いて行つて、父が樂屋口へ入つて『御苦勞』と聲をかけると、とつとと歸つたさうです。父が『御苦勞』と言はないで、『歸れ』とか『もういいよ』などと言つたのでは歸りませんで何でも『御苦勞』と――それも樂屋口で――父の口から言はなければ歸らなかつたと申します。

父は子の年でしたから、鼠は家内中のものが愛してゐました。猫にも同じ朋輩同志だから取つたり追つかけたりしてはいけないと、よく言聞かせておきましたから、猫のお椀の御飯粒を鼠が喰べてゐても追はうとはしませんでした。鼠には餌として普通の御飯をお盆へ盛つて、毎晩十時頃に鍋棚へ上げてやりました。棚の上の壁には三四箇所も穴が開けてあつて、そこから頭をちよこ〳〵出してゐました。十時頃にがた〳〵と騷ぎでもしますと、『未だ早いよ』と言ひますと、ぴたりと靜まつておとなしく待つてゐました。父は鼠が餌を喰べてる所を見て悅んでゐました。親しい客でも來ますと、『頼豪阿闍梨を一つ御覽に入れませう』と言ひながら、手燭をつけて案內して見せました、が鼠も慣れてゐるので、別に逃げて行きもしませんでした。正月の十一日には鏡開きをしますが、その時には六寸の

お備餅一つを鼠の分として棚の上へ載せてやりますと、あちらからもこちらからも集つて來て喰べました。父はその態を悅んでゐたのです。さうして飼はれてゐるのですから『お前たちも恩を忘れなければ、鼠は四相を悟るものともいふから、火事のある時には立去つて知せよ』と言付けておきましたその故か、現に一度などはすつかり居なくなつて、二日程御飯も何も喰べなくなりましたから、當るも八卦當らぬも八卦だと申して、家財を片付けましたが、二日目に半燒になつたので、皆して顏を見合せて驚いたこともございました。鼠を飼つたなどと申して、ペストでやかましい今日だつたら大騷ぎでございませう。

父に就いての思ひ出は折にふれて伜に話しました、それは傳の中へ編みこんだのださうですから、こんなつまらないことだけ、思ひついたまま添へ書きにいたしておきます。

八

默阿彌の作物の中には、實經驗に根ざしたものは無論あつたが、それらの作にしても默阿彌自身の生活內容によつて、どの位な深さまで彩られたかは、今茲に明言されない。またさまざまな人生の哲學的意義を隱約の間に感得せしむる作者もあるが、それらに對する考察は他日の自由なる、より深き

研究に讓りたい。唯ゝ作中へ明らかに表示されゐるのは、默阿彌自身の體得、意思によつて、作物中に注入された勸善懲惡、因果應報の思想だけであらう。『彼は德操高く常識に富みたれば……因果の理を說き、勸懲を諭すが如き傾向ありしは、當時の文學及演劇の常套にして寧ろ厭ふべしと雖も、彼れはそれ以外に、眞に人生の光明と正義の勝利とを其の作中に歌ひしものならん』(伊原氏『近世日本演劇史』)と論斷せられ、又『七十餘年間の閱歷と實驗とは、彼れをして實に此の理を瞑悟せしめ、適用せしめしものなり』(『早稻田文學』)とも言はれてある。從らに盲目的に、作中の人物をして口にせしめただけにとどまらず、『それ以外に』、根本義たらしめんとした點が認められる。新富座時代の所でも述べておいたが、明治十年前後からは、特に意識して劇作の根本方針と考へてゐたやうである。

然し、默阿彌の性格全部と作物の調子全體とを、二つの印象にまとめて比較し、これを眺めた場合には、其の兩者の間には、著しき類似點を發見するのである。

人としての默阿彌は、まさしく『勤身堅固の大雜漢』であつた。所謂善なるもの、惡なるもの、醜なるもの、あらゆる世相に掩はれた人生の內容をつぶさに經驗し、複雜極まる浮世の浪に揉まれて、酸いも甘いも澁いも嚙み分けた上に築かれた、頑丈な大城廓であつた。卽ち實社會を通じて組上げられた、精巧なる大常識が默阿彌の性格なのであるが、默阿彌の作物を一貫する風格色調も、さうであつたと言へよう。其の時々の實際社會、平民社會を對象とし、精緻綿密な注意によつて、五分も隙か

ない天才的技巧を以て、有機的に織成されたものであつた。あだかも、彼れが常に愛用した堅實で耐久的な、結城紬のやうな手觸りの作物が多かつた。

作者としての默阿彌は、實際に於て歌舞伎劇を飾る偉大なる殿將であつたが、對社會に於ける私人としての默阿彌も、亦一個の『よく出來た作物』ではなかつたらうか。

第十三　雜　　記

作癖――筆蹟――綺心――本讀み――作者としての見識――日日雜筆――報條――尺牘。

西洋の作者の中には、冬の間に想を構へて夏季に筆を執つたなどといふ話もある。けれども默阿彌には別にさういつた作癖はなかつた。芝居の興行に應ずる爲に、職業的に筆を取つたのであるから、作劇の時間も定まつてゐなかつた。悠々として書いたこともあれば、急場の間に合せたこともあつた。

作を仕上げるまでの習慣も一定ではなかつたらうが、櫻田左交のやうに、下書も草稿もなしに縱本（臺本）へぶツつけに書きくだすが如きことは一度もなかつたであらう。先づ材料のあるものならば大體の物語の會得された上で、段取をつけ場割をつけて仕組むのである。（芝居道の通語として仕組む（脚色）といふのは、作を書くといふことである）。全部自家の創案になる作ならば、構想、筋のまとまつた上で、同じ手順を履むのである。門弟に助筆せしめる場合には、其の助筆させるべき場の梗概を書いて渡し、出來たものに自分が眼を通して訂正し統一をつけるのである。

いつもさうばかりとは限らなかつたらしいが、最も多く自分の興味を惹きつつある、眼目の場から

筆を下したさうである。斯くして出來た第一稿をば十分に推敲するのである。綿密なる注意を以て、役者と舞臺上に於ける呼吸、長短、其の他さま〴〵な條件とを考慮して加筆し、自身にそれを淸書した。時としては、此の第二稿をもう一度練り、訂正して、淨書することもあつた。つまり第三稿を以て、全く出來上つたものとするのである。かういつた手順はいつも几帳面に履行したといふ。然し僅かに殘されてゐる草稿によつて見ても、第一稿、第二稿にしても、決してさう讀分け難いものではない。訂正された箇所も少なければ、文字も辿つて讀めないことはない。ただ讀み分ける術もないのは第一番始めに、興の浮び、想の湧くがままに、大體の物語を定め、段取を定めた覺え書である。小さなくしや〳〵とした、殆ど字性も分からない劃のない文字で以て、蚯蚓がのたくつたやうに、もじやくじやと書散したもので、如何に默阿彌の手蹟を讀慣れた、門弟にも家人にも、知らない國の文字同樣に讀難いものであつた。十字の中で一字讀めるか讀めない位、亂暴な早書きのものであつた。此の紙片は作の完成と同時に、草稿と共に燒却したり、拂塵にしてしまつたといふ。僅かに其の災厄を免れた覺え書を、それに據つて出來た作と對照して讀み較べても、先づ讀めない字の方が多い。

自分の手許で完成したものは、半紙を橫二つに折つた帳面になる。卽ち橫書きである。原本なのである。門弟の助筆した部分も、橫書きの形式で屆けられる。まとまつた原本の橫書きは、舞臺で使用する縱本にせられなければならぬが、その場合には門弟に淸書させた。原本までは必ず自分で淨書し

草稿の一部・猫根山猫第二稿（二七三頁參照）

ては訂正し、淨書した。どうかして眼を煩つて筆の取兼ねる時だけは、止むを得ず門弟や、娘の糸女に筆取りを命じた事もあるが、それは到つて稀であつた。默阿彌は作の數から言つても、量から見ても、なか〳〵の精力的多作を示してゐるが、その割に速筆ではなかつた。三代目の河竹を襲いだ金作は有名の速筆で、五日要するものでも三日で書上げたさうである。訂正に十分な注意と努力とを拂つた默阿彌は、そんな早業には行かなかつた。その替り稽古にかかつても、役者の仕勝手の惡い爲めや舞臺の長短の爲めに、また訂正すといふことは殆どなかつた。机に對つてなほす間は、いつも口の中で低聲に、もにや〳〵讀誦ながら筆を入れたさうである。默阿彌の白が流暢で音樂的であるのは、聞えた事實で、彼の作中の白ならば端緒さへ記えてゐれば、自ら後が出て來ると役者が告白したに徴しても分かる。つまりなほし方も意味からは行かないで、耳に響き、口に出した場合の、音調を尊んだからであらう。默阿彌の淨瑠璃は詞調が節奏的で、節附をするに容易かつたといふが、口の中でもにやもにやと口ずさんで見て、筆を加へたからであらう。默阿彌は本を讀んで記憶するには、必ず音讀するを要したとの事だが、あの恰好のよい耳の感覺は、一種異常な靈覺を持つてゐたやうに思はれる。

默阿彌は、自分の作が舞臺にかかる時でも、放任主義であつた。一切役者に任せぎりで、餘程特別の場合でなければ、注文を出した事もない。最も道具、衣裳、鳴物等の誂へは皆作者の誂へによるのだから、注文ばかりであるが、役者の演出に對しては殆んど容喙した事はなかつた。それ故前の小團

次時代には、作者の心持通りに演出された舞臺もあつたであらうが、其の後には、自分の滿足するやうに演出してくれたのは稀であつたと語つたといふ。明治十年に新富座で書下した『女書生繁』の三幕目、神保別莊の場は、竹柴其水氏が稽古したのださうであるが、初日に棧敷で見て樂屋へ來て、此の幕は思つた通りによく出來たと悦んだことがある。其水氏の話によれば、彼自身も意を用ひて、木から幕の工合もうまくいつたし、役者の藝もよかつた。それに下座の三味線彈き、幕切れの鶯笛など も凝つて、熱心にしてくれたので、師匠の腹で想つたやうな、舞臺になつたものだらうといふ。

田村成義氏曰。默阿彌さんは時折かういつておいででした。狂言作者と言つたつて、別にむつかしいものではありません。手紙の書ける人ならば必ず狂言が書けます。然し、舞臺を知らないで書けば詰らない狂言になるだけで、ただ書く分だけなら、手紙が書けさへすれば出來る事ですと、これは何だか皮肉なやうにも聞えますが、折にふれてはそんなお話が出ました。

默阿彌はそもそもの初めから、ただもう芝居が好きで入つただけに、其の筆蹟も芝居風一點張りであつた。ほつほつ書きで、草行の御家流などはちつともいけなかつた。だから所謂筆蹟としては、極めて拙い手書きであつたらう。自分でもそれを承知してゐたから、表向きの文字を書くのを厭つてゐた。報條などに下書のまま使はれて、苦い顏をしたこともあつたさうだ。然し芝居風の字はなかなか

好かつたのだといふ。成程默阿彌自身の淸書した正本や横書きを見れば、几帳面で箱につまつたやうな字の形から、墨のつぎやうまで見事なやうに思はれる。

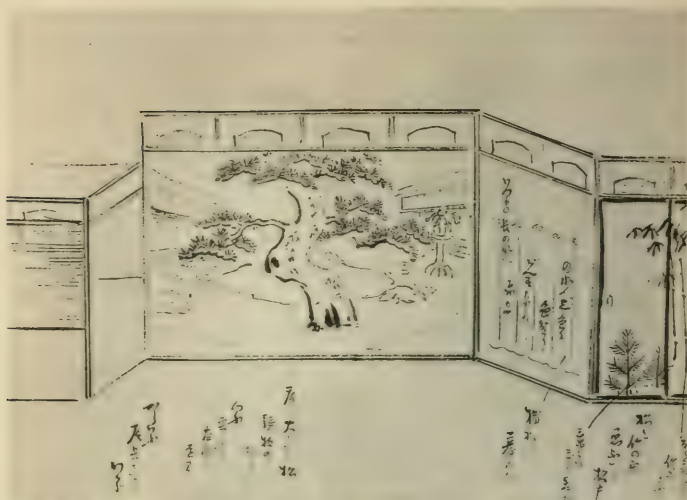
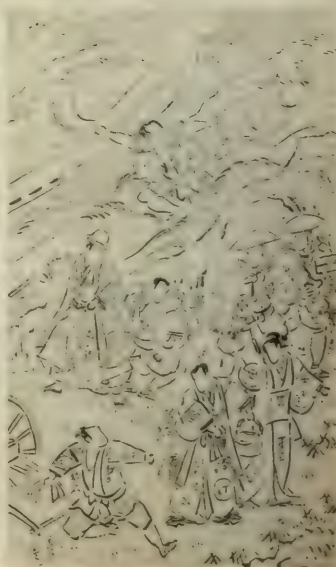
二十歳前後の貸本屋さん時代の茶番集を見ても、丸い芝居流の字で書いてある。河原崎座に入つてからは、座附の茶屋で、帳元を兼ねてゐた川島といふ人が、勘亭流をよく書いたので、其の人の筆蹟を學んだのださうで、勘亭流はよく書いた。提灯屋のやうになどらない字で、ふつくりとした、いろけのある手だと評されてゐる。細字もよかつたので、河原崎座頃の番附や繪草紙『あふむ石』などには默阿彌の手になつた版下がある。中年のは柔かくすら〳〵として手綺麗であるが、晩年のは一層特色的にもなり、枯れきつた淡泊な趣のある、勢の素晴しくよい筆蹟になつた。

江戸の戯作者には往々にして見るが如く、默阿彌も繪心のあつた人である。誰に習つたといふこともなく、單に名人（五代目）鳥居淸滿の筆意を獨りで學んだ位に過ぎないが、『甲州記』等に見る寫生畫によつても證明される如く、繪畫的才能は自然に備はつてゐたものであらう。芝居は元來繪畫的要素を必要とするものであるから、默阿彌に構圖的才能のあつた事は、劇作をも助けたのである。

位置按配を見るのが上手で、邸宅の繪圖面が引けた事は述べたが、番附の下繪も巧みであつた。現今ではさうでもないが、以前には看板と番附及び道具帳等の下繪類は、立作者の重要な務めの一つで

あつた。出來なければ恥であり、資格に於て缺くる所ありとされてゐた。今茲で同じ番附の下繪ながら、如皐（三世）のと默阿彌のとを比べて見ると、如皐のは輪廓から人形の姿態は勿論、衣裳、襖の模様までも綿密に描かれて、時としては彩色したものもあるが、默阿彌のはずつと粗い線で、而も印象的である。そんな細かい所までは、畫いてもなければ指定もしてない。けれどもそれらの人形の力の入れ方、心持の要點は却つて明白に看取される。畫工に言はすれば、默阿彌の方で畫くはうが、細かしい所の工夫をする餘地が與へられてあるので、樂しみもあるし、作者の希望もよく了解出來て、下繪としては彼れよりも優ると云つたさうだ。その行屆いた繪組は、全然有機的なもので、手一つ足の蹈ん張り方まで、動かすべからざる姿態の變化を示してゐるものであつた。畫工の鳥居が次のやうに言つたことがあるといふ、『默阿彌さんの看板の下繪は、何層倍かに割を取つてそのまま擴げれば、看板に掲げられる位だ』と。（竹柴昇翁氏の直話）

看板や番附ばかりではなかつた。著作を出版した時にも、其の挿繪の下繪は悉く自分の工夫であつた。最も廣く行はれた狂言百種の表紙も、自分が何度か工夫して畫工へ繪を送つたものである。『霜夜鐘』等が歌舞伎新報へ載る時にも、自身で挿畫を畫いて送つたのである。三題噺前後以來流行した繪合せ、聯合せ、扇合せ、手拭合せ等の趣向も、自分で意匠したのを下繪にして、掛りへ送つたものである。それに應ずる景物を飾るにも、一度繪にしてそれから取掛つたものらしい。畫工になつた次女

舞臺裝置依頼圖

河庄の看板下繪

島衞第一第二幕看板下繪
（三四〇頁參照）

の島が構圖の際に、默阿彌の智慧を借りた事もあつたさうである。

寄席や料理屋へ贈るビラの下繪も、自分で畫いた。九代目が紫扇と號した頃の手紙に、今度柳橋から引幕を贈られるに就て、意匠を望めと言ひ越されたが、何卒あなたの御工夫で明日午前までによろしく願ふと言つて、頼まれた事もある。守田勘彌へ平尾贊平氏から贈る引幕の相談を受けて、意匠してやつた事もある。其の他かういつた風のことがいくらあつたか知れない。

特に注目すべきは、役者が舞臺上で用ふる衣裳の工夫を凝らして、新作と舞臺との調和に成功したことである。野晒悟助が尾花に骸骨を描いた着附で出るのは知れ亙つた型であるが、あれは慶應元年の書下しに菊五郎(五世)が『師匠何とか工夫して下さい』と言ふので、默阿彌が工夫して出來た下繪を染めさせたもの。又『伊賀越』の備前町夢の市藏が、瘧をふるふ時に着る褞袍は、鼠地に午蒡縞を出して、其れに備前蝶と菊とを大きく染めたもので、これも默阿彌の工夫になつた評判のよかつたものである。意匠物や工夫物は菊五郎に求められてしたものが多いが、田之助の爲めにもあつた。又妹脊山のお三輪の振袖は十六むさしの模様と定つてゐるが、これも默阿彌が始めて猿藏の爲めに意匠したのが好評で、それから定例になつたのであるといふ。

默阿彌の『本讀み』も有名である。本讀みといふのは、正本即ち臺本を、役者の前で披講する事で

ある。これも狂言作者としては、重要な務めの一つであつた。何にしろ臺本となるべき作の内容を、役者から座方全部へ讀んで聞かせるのだから、其の巧拙如何によつては、惹いて作の佳、不佳に拘はり、舞臺上の效果をも左右する。それ故最も微妙な、刹那的技術を要したものであらう。

默阿彌の本讀みを聞くと、其の役を振り當ててある役者の――聲色といふではないが、何處となしに其の面影と風韻とがあり、其の上白の活殺が自由自在で、舞臺の上の情調までを、彷彿させる事が出來たさうである。聞いてゐる役者が自分の持役に釣りこまれて、あの所こそは儲けるに違ひないと思つても、本讀みに魅せられた爲め、喰ひこむやうな事もあつた。熱心な小團次の如きは、その本讀みをぢつと聞いてゐて、或は泣き或は笑ひつし、その後で注文を出したといふ。又よく出來てゐる場ながら、門弟の一人が讀んで通過しなかつた時に、默阿彌が翌日になつてそのまゝ手を入れずに讀んで、一も二もなく納得したといふ談柄もある。

本讀みの巧みな由を傳聞して、外部からも依頼する人があつた。夫の津藤も折々所望したらしく、『本よみ會』を毎月二十一日に催ほし、場所は『河岸三涯に於いて、河竹其水出席』などといふ報條を、版に彫らせて配つた事さへある。芝居狂の多い其の頃の事だから連中各自も眞似ごとをして、己惚れてゐた事もあらう。其の後も繪合せの席上で望まれて讀んだこともある。が、特に記念すべきものが二つあつた。

其の一つは明治十年二月のことで、守田勘彌を介して、依賴して來た歐人があつた。それは大藏省に顧問として勤仕中なる、オーストリア國の貴族で、男爵のアレキサンデル、フォン、シーボルトといふ、日本通の芝居好きであつた、出嫌ひの默阿彌が、日本の名譽と感じてか二つ返事で承諾して、其の邸へ行つて聞かせた。慘酷なのや淫猥のあるものを避けて、『曾我の敷皮』を讀んだのである。シーボルトに其の味が呑みこめたかどうか知らないが、大層悅んで、洋食でも和食でもといふので、鰻を馳走になつて歸つたことがある。歸りがけに謝禮をしようと言つたが、それは固辭し、望み通りに脚本一部をば自身に淸書して贈り屆けた。シーボルトは其の後幾千もなく、故鄕なる母の訃音に接して歸國したが正本を携へて行つたさうだ。其の脚本も、今頃は、何處かの博物館あたりに、何人にも了解されずに、珍藏せられてゐる事だらうと思ふ。

他の一つは、死の前年の十一月八日に、神田一つ橋にあつた官報局の官邸で、局長の高橋健三氏の好意によつて、饗庭、坪內、幸堂氏等十數人の前で讀んだことである。前文部大臣の奥田義人氏も聽衆の一人であつたさうだ。これは當時の早稻田專門學校の講師達によつてなされた、演劇硏究の一つなる朗讀法の參考にしたといふのであつた。此の時には『上總市兵衞』の船別れから世話場、赦免までを二時間も續けて讀んださうで、あと〳〵までの語り草に殘されたのは、默阿彌の光榮である。

正本と限らずに、すべて本を讀むのが巧みであつた。家にゐて院本を讀んだ事もあるが、正本の讀

み方とも違つて面白かつたさうだ。又氣の向いた時などには『八笑人』などの輕文學を讀んできかした事もあつたが、これは自分の經驗もあり、すつかり呑みこんだものだけに、實に面白かつたさうである。

門弟の中に繁造と言つて、中村座の立作者にまでなつた、才はじけた男があつた。或時何かの差障りで默阿彌が自身に行けなくて、本讀みに代理として遣はしたことがあつた。其の際役者の方に何か不謹愼な振舞があつたので、讀みかけた本を持つて默つて歸つてしまつた。何處へ行つたのだらうと捜して見たが、一向に分らないので宅へ行つて逢つて訊すと、『今日は私であつて私でない、師匠の代理である。繁造に對してなら構はないが、師匠の代理として行つたものに、あゝいふ眞似をされては師匠に濟まないから御免蒙むる』と言つて應じない。仕方なしに詫を入れて、無事に本讀みを濟ませたことがあつたといふ。その時に繁造の氣色を損じた不謹愼といふのは、役者が座布團を辷るべきを、辷らなかつたとかいふのであつた。此の話に就いて見ても知れるが、狂言作者なるものの地位が默阿彌の力によつて著しく高められ重んぜられるに至つたことは、前々からも述べた通りである。別に尊大ぶりも見識ぶりもしなかつたが、默阿彌は作者としての地位を自覺し、見識を持してゐた。徒らなる世評に惑はされ、役者の奴隷となつて、屈服するが如きことはなかつた。

これも昇翁氏の直話で中村座にあつた事實であるが、默阿彌が留守の間に、奥役の居る場所が生憎なかつたので、座方のものが無斷で作者部屋の片隅を一疊敷程板で區ぎつた。すると默阿彌が來て見て『誰があんなものを拵へたんです』と頭取を詰つたが、表方がしましたとか何とか言つて、ごまかした。『こんなものを拵へるなんて、作者部屋の法を知らない奴だ。こはしちまいねえ』といふので、即座に取除けさせた。けれども表方からも何の苦情も出ず、奥役もにゆうつと何處へか消えてしまつたといふ。默阿彌は曲つた事に對しては、一歩も容赦しなかつた。

市村座が猿若町から下谷の二長町へ移轉して、開場した時の事であつた。その開場式の興行に、始め三日間は役者から座員一同が舞臺に列んで、挨拶する事となつた。時の立作者は三世河竹新七であつたから、スケの默阿彌は式場には出ない。その第一日に默阿彌は前へまはつて見て、納まらなかつた。式が終ると直に部屋へ來て、新七に『お前明日から式に出ちやいけない、誰か何とか言つたらば私がいけないと命じたと答へなさい』と言ひつけ、すた／＼と歸宅した。さあ此の事がひろまつてやかましくなつたので、一體誰が定めた席次だらうと調べて行くと、勘彌と九代目の方寸から出たものと判明したが、相手が默阿彌と聞いて有耶無耶にしてゐた。一方座方からは默阿彌の所へ詫びながらに行くと、『立作者たるべきものの置きどころが、まるで間違つてゐる』からだと知れたので、翌日からは座主と座頭の次ぎに振更へて、式に參加する事を許して貰つた。そのお蔭で河竹は目につく場所

へ列んだが、見物からは、座主でなし座頭でなし、役者でなし、金主だらうと鑑定されたさうだ。

こんな話はまだ他にもあつた。新古演劇十種の中の『一つ家』を菊五郎に書下した時、二三の贔屓連が、其の名題を見て、芝居には向かないやうだ、矢張り『石の枕』の方が好いやうだと注意したので、菊五郎も其の氣になり、默阿彌へ使者を立てたが默阿彌は聞かなかつた。『石の枕』は一中節の名題である。さうすれば新作ではないやうに思はれる。兎も角も私が熟考の末でつけたのだから、變更は出來ない、以來は作者の附けた名題等を直す事などは、御無用だと言つて下さい』との返答をした。謙遜な默阿彌も、作者としての立場に關しては、好い加減な返事をして見脱しはしなかつた。

默阿彌には、廿二三歳前後から、其の時々の出來事を斷續的に書きつけた『雜記』とした小形の手帳が何冊か遺されてゐる。が、日記體に毎日々々の心覺えを誌したのではなく、又馬琴のやうに細かしい事まで、こくめいに誌した興味のあるものでもない。尤も『甲州記』だけは明細な面白いものだが、以後には一つもあんなのはなかつた。ただほんの自分と世間とに起つた目ぼしい事件、世態等を何等の註釋も意見も加へずに、と書き留めたものに過ぎない。然し明治廿四年の二月に着手して、廿歳から七十歳までの略年譜やうのものを作つたのがある。下書のままで完成されてはゐないし、極めて簡單な自分一身の年代記に過ぎないが、傳記を調べる吾等に取つては好都合なものであつた。

遺稿といつた風のものは、先づ皆無と言つても差支へなからう。彼れの作物は多くの場合求められて執筆したのであるから、發表されずに終つたものは先づなかつた。ただ淨瑠璃に二種程あつた。その一つは、手蹟から想像すれば明治前の稿と思しい『女時頼』で、權十郎と新車だけの役割が、示されてゐるが、上場はされなかつた。作も決して傑れたものではない。他の一つは、明治廿年前後ので、一中節にもある『自然居士』を淨瑠璃にしたものだが、これも上演はされなかつた。筋書類にしても、狂言にしようと立てた腹案の物では、明治を舞臺にした世話物の筋書だけが一つ二つ殘されたのと、『ハムレット』の梗概を、誰に聞いたものか走り書にしたのに、里見義賢等一族の役名を當てはめてあるのが目につく。飜案して仕組む意思であつたかも知れない。

一生涯を通じて、只管に劇作に從事した人で、狂歌や俳句も集をなすに足らない。戯作としては、その往昔『天日坊五十三次』を書いたのと、種員の跡を受けて、安政六年に『雨夜鐘四谷怪談』といふ合卷の、第五、六二冊四卷を書いたにとどまる。隨筆風の考證と見るべきものには『歌舞伎新報』に揭げた『勸進帳年代記』と『助六年表』とがある。菊五郎(五世)の爲めに、彼れ一人の年代記を編んだ『千代見草』等があつたに過ぎない。

尙見脫すべからざるものに歲旦及祝宴、追善の唄、淨瑠璃と引札(報條)との二つがある。每年の

稽古始めに、新曲を出したいといふので書いたのが歳旦で、これには縁故上清元が最も多數で、常磐津、富本等にもあつた。

文久元年に出來た、清元の『廓双六』の如きは評判の好い歳旦であつた。祝宴や追善に際して、新作した淨瑠璃等をも引包めると――何分にも短かい端物が多いので、一々保存されてもゐないから、確實には分からないが、二百種にも上つたらうと想像される。

引札は一種の戲文、又は狂文の類ひであつて茶屋、料理屋、寄席、溫泉其の他各種の飮食店商店等の開店披露或は賣出しなどの口上を、柾紙四つ切り、六つ切り位な大きさに摺つて、門毎に配つたものである。新聞廣告といふ機關も、洋紙に活版といふ便利なものもなかつたので、知名の文人に依賴して「主人に代つて述ぶる」の文を作つて、それを版行し、趣味のある引札として撒いたものであつた。魯文は連中の中でも、殊に輕妙で巧かつた。有人、玄魚、如皐、香以山人の津藤などもよく書いたが默阿彌のも尠からずあつた。現に保存せられてゐるだけでも、二百種に近い。輕妙洒脫な點は、魯文に及ばなかつたかも知れないが、達意の文に趣向を凝らし利かした面白味に於いては、優るとも劣りはしない。左に一つ二つ其の例を引いて御覧に入れる。

丼おかめ茶漬報條

冬至は一陽來復して。日出度周の正月に。厄拂ひめく引札も。土地の纏の駒に因。將棊づくしの

狂文さへ。下手の考へ長〳〵しく。先駒組に並べ立、一つ二つと御披露申は。名におふ南傳馬町二三の間へ通から。東へ半町入王の。茲に新手の新見世なる井茶漬の主人といふは。其の名も銀や金之助。顏がおかめに似たるとて。おかめ茶漬と名づけてはと岡目の助言を家號に呼。冬至梂の見世開。扨色品の員〳〵は。手に何〳〵と申さずとも。皆御存の蛸の足。沙魚の甘露煮海老の佃煮。甘いもあれば辛いもあり。成丈お口に合やうに。飛車取追手の桂馬の兩點。されど高飛の高直は售ず。下直上るを一本香車。是は妙手と御意に入り。端の歩を突手のない程。詰將棊のぎつしり詰り。込合時も先手後手なく。御誂に待なしに。二歩の重なる事はあるとも。聞そんじは致さぬ意。唯角行の定座の左利一寸一合擲しやうき。相手はしやの御酒の義は。石田の堅く御斷。野暮なる事を御承知にて。四時對馬の絕間なく。番數繁く御來駕あらば。箱に入れたる駒員の。しじふは立派な店ともなり。歩も金となる繁昌を。將棊盤の隅から隅まで。御贔屓願ふ口上も。主人が賴をかひつかみ。さらりと記しおくになん。　河竹其人（水巴の印）

南傳馬町二三の横町

佐　野　屋　金　之　助

來る霜月十日見世開
當日亀景さし上申候

竹柴其水氏の話によると、これは文久時代のものだといふ。京橋の本材木町七丁目を持つてゐた、

二番組のせ組の鳶頭久次郎といふのがあつて、その忰の金之助がおかめのやうな面付だつたところから『おかめの金太』と綽名されてゐた。それが南傳馬町二丁目と三丁目の横町へ、おかめ茶漬といふ今の酒場を始めた。其の時の開店口上がこれであつた。まだ其水氏が默阿彌の弟子として入門しない以前の事だつたが、纒印の將棊を利かしての文句は、當時京橋邊に於て大した評判であつたといふ。ここの髪結床かしこの湯屋で『どうも素敵もねえ引札ぢやアねえか』と取沙汰された。現に春木座の立作者ともなつた、故竹柴銀藏の如きは、さういふ評判に誘はれて、默阿彌の弟子になつた位である。

默阿彌はもと／＼芝居の人で、芝居流行の世の中だから、芝居の趣向を借りて引札の文句に使つたのも少くない。杵屋源次郎といふ人が煙草屋を開業した時に、『嫗山姥』を利かした引札も有名であつたし、次に引く葉茶屋の關岡の開店に、『勸進帳』を取入れたのなども評判よかつた。

宇治　信樂　諸國
御煎茶所
松濤軒　關岡

市川家の十八番勸進帳に因みある。辨慶橋に程ちかき。此家の號も安宅の關岡。主人は富樫に異ならず。宇治と諸國の煎茶のくさ／＼。色と香氣の義經を。作り山伏同やうに、僞と本場の吟

味をとげ。價は限りの關を越。秤目安く差上升れば。安宅の文字も空しからず。されば龜井町の近きは素より。駿河町の遠くよりも。わざ〳〵御用を仰せつけられ。日にまし店も賑ひて。賣出なせし去年の暮より。勸進てうど丸一年。新調ならぬ新舖も。老舖に等しくなりし故。こたび辨慶に退れざる。釣鐘のある金物店。本宅で手廣に商ひいたせば。判官贔屓に花主かた。彼延年の舞扇。さす末廣のするゑ長く。絶ずお求め下さるやう。主人に代りて願ふになん。

河竹其水（水巴の印）

關岡

小傳馬町三丁目大門通

極月廿七日
廿八日賣出し

當日龜景差上候

大體右のやうなものであつたが、默阿彌はいつも書いてやる時に、注意を與へた。別に謝禮などには及ばない。引札さへ呉れればよいが、紙は上等のにして貰ひたい。駿河半紙や西洋紙は困る。活字などは餘り用ひられない時代だが、勿論活字などは最先にお斷りであつた。從つて筆耕は梅素玄魚のをと注文し、洒落れてすら〳〵と氣取つた、かな書などは好まなかつた。漢字交りの楷書で、假名付きの、萬人に讀易いやうにとの注文であつた。彫りをよく、摺りをよくとの注文も、必ず附け加へたといふ。さもあるべきことである。

默阿彌の書翰は、其の態度や言行の如くに、無口で、要領を得てゐて、達意の文に留まり、何等の修飾もないのが多い。尤も情熱とか洒落氣のある手紙も、三題噺の連中とか、津藤などへは書いたかも知れないが、殆ど現存してゐない。が又一面から想へば、默阿彌は生涯を通じて、衷心を披瀝するが如き友を持たず、又必要ともしなかつた人であらう。また其の境遇上、ある親友へ手紙でも書いて慰めとするやうに生活に轉々したこともなかつた。そんな譯で、わざと趣向した面白い手紙はあつたらうが、情熱の迸つた手紙などは書かなかつたかも知れない。

左に方面を殊にせる三四家へ宛てた、彼れの書翰を錄して此の章を終りたい。

〇

拜啓陳者今般御安心の地ゑ御轉居奉祝賀候。過日御報御座候時分より風邪にて引籠り居り、御返事も不申上失敬御宥免被下度候。一昨日出之尊書昨朝郵便箱より取出し拜讀致候。兼〻御噺の本讀會御新宅拜見旁々參館致し、皆々樣の讀方伺ひ候は何より之事、何事をおいてもと存候得共折惡しく親類内に取込み御座候故、昨日片附候心に而參り談判致し候所折合不申、今日午后三時より一同集會致し評定可致と極り何分にも拔兼候は、小生が伯父故、山名所柄になき勝元兼帶大弱りに御座候。夫にいまだ風邪も拔兼候得共、是は薬といふ後立御座候故押て參館致し候心得之所、右野暮用にて何分にも參館成り兼候間御斷り申上候。右用事片附候はゞ推參いたし可申、御

様子承り坪内君尊君の御本讀伺度存候。先は右申上候艸々頓首。

十二月廿一日朝　　　吉村新七拜

饗庭様　梧下

（十二月は明治廿四年の十二月。封筒の宛名には西豊島郡西大久保村三百四十九番地とある、饗庭篁村氏の其の頃のお住家(すまゐ)であつた。『御安心の地へ』とあるのは、向島邊の水地から移られたからである。本讀會は矢張り此の當時盛んに行はれてゐた、早稲田專門學校の坪内博士始め、諸家の計畫になつたものであつた。）

○

大暑の節に候得共益々御清榮奉祝賀候。陳者業用の繁きと、老人の引籠り勝に而、意外の御無沙汰御宥免被下度候。先達而は初松魚活鯛御投惠下され難有、其御禮にも參上不致候内、又々御祭禮御揃並に團扇手拭頂戴致し、重〱難有奉存候。今日暑中御伺旁々御祭禮御祝に參上可致之所當節新富町秋狂言並に二丁目本鄕の助を頼まれ、年寄之重荷汗のみ出て弱り居り候。何れ近日參上いたし、得花看、種々之御禮可申述候。爲御祭禮御祝、暑中御伺に粗品呈上御笑納被下度候。先は大暑御厭御凌可被遊候。艸々可祝。

八月六日　　　其水拜

角尾様

（言ふまでもなく、魚河岸尾張屋の主人角尾(かくを)氏へ宛てたもので、御祭禮は水神の祭禮。二丁目は市村座の事本鄉は春木座のことであるから、明治十四年の八月六日に認めたものであらう。）

○

過日笠仙樣御出になり、熱海御出立の御噺し承り、とりあへず參上いたし候所、御出掛の際御邪魔致し恐入候。其節も進三え御傳言雖有存候、同夜拙宅え座長御出になり、種々御噺の末、元我等失策ゆゑ無是非事ながら是程困りし事はなしと、ほと／＼歎息被成候。世の盛衰とは申ながら以前の事考へ候と實に御氣の毒に御座候。豫而御斷りに候へ共、座長帳元の賴みにより、一封さし上候。御立腹は御最に候得共、生涯絕交致し候わけにも行兼候へば、行く／＼御勘辨被成候思召御座候はゞ、舊來交際深き座長並に今般御詫に參り候帳元え花をもたせ、御勘辨被成候やう共／＼願上候。右書報の電信承り候へば、小生においても大慶に存候。實に顏の拵りし仲裁人と存候へ共、是といふ人なく、殊には世間へぱつと致し如何かと存候。篤と笠仙樣伊三郎と御相談被下御勘辨の程願上候。先は右申上度。艸々可祝。

四月二日　　　　新七

寺島樣　貴下

（推測によれば、菊五郎と守田勘彌とが衝突し、折合ひがつかないので、勘彌の依賴で默阿彌から菊五郎へ

勘辨してやつてはくれまいかと熱海へ言送つたものである。明治十八年の四月二日であつた。文中の笠個子は津藤以來の笠個子で、予が還暦の祝をした時に默阿彌が趣向を凝らして送つた手紙がある。洒落た凝つた側の例として次に掲げる。）

○

此頃世間の不景氣に、すこしも感ぜぬ繁昌は伊勢音頭の拍子よく、ヨイ〳〵能き事のみ重り、來る年〳〵に一萬度の拂ひもあれば儲けも有りて、朝熊の山の高き程幾萬金の黄金を積み、家號の金屋も名詮自稱、福々然たる笠個翁は一見に等しき二人の令息、岩より堅き性質にて、內宮外宮の內外の評よく、得難き寶を得られし上、人生定めの境ひといふ五十鈴川を疾越えて、御影參りの流行とか聞く今年は六十一年目に、子供に還る御祝ひも御師の暦の年月速く、八十末社も忽廻り御洗米の米の賀や百味の百迄長壽は受合、何か己も祝さんと思ふ折から、七百餘歳齡ひを保つ延命の菊の名におふ菊幸氏が、貢の當りに彼地に准へて御祝ひ申印ばかりに、御宮參りの犬張子を呈し升ればにこ〳〵と、笑うて御受納下されかし。

時に明治十六年祝月、千歳飴の最甘き片言交りの祝文を、曲り形りに綴りし者は、産れ替つて當年八才、八級生徒におとりたる

河竹默阿彌［其水］

（狂歌が別に添つてゐた――）

竺 仙 樣

老いてます〳〵盛んなるは昔の地性の能ゆゑなるか、
としふれどいとも丈夫な伊勢木綿、百世はをろか千代の松坂。

（全體を伊勢音頭の趣向て運んだもの。犬張子も『お伊勢參りの犬』に准へて『犬張子の首へ麻苧にて耳白の小錢を五錢結附、木札と見える黄土色の紙の袋へ、一圓廿錢札を入れ錢共一圓廿五錢（五百疋の意か）になる右の袋へ『天然商太物商』と書き、裏へ『賀竺仙翁。其水、明治十六年一月』と記して贈つたのである。

○

今日は當り振舞目出度大慶不斜候、就而は彌三郎（與役）さんより、此度は一切御苦勞相掛ぬ事故御心配に不及との事に候得共、一切表にて致し候事に御座候得ば、貰ひ捨にいたしてよろしく候得共三階にて致し候事に御座候得ば、わづかばかりの事にて外聞惡く候間、囃子の方聞合せ囃子にて遣はし候はゞ、

壹 圓　　我 等
半 圓　　河 竹

兩人分立替御遣し被下度候。當り振舞には前々より酒席恐入候故、參り不申病氣の體にて御斷り

被下度候、くれぐれも外御聞合被下度御頼申候。艸々可祝。

我等見習に出し頃、當り振舞度々御座候。其他二三治より承り候に、當り振舞の正客は作者ゆゑあいさつに不及とて包み物遣し不申、我等立作りに成り氣の毒故百疋遣し蹟けいこ致し候者五十疋づゝ、見習はなし。然し左樣な事當時存候者なく候故、わづかな事にて笑はれぬやうにお取計らひなさるべく候。

六日　　地　内

進　三　樣

（これは門弟へ送つた手紙の例である。進三は竹柴其水氏の前名。明治廿年十月新富座で『三府五港』の興行大入りにて、當り振舞をした時に注意を與へた手紙である。地内は默阿彌の事で、まだ淺草の寺地内に住つてゐたからである。二三治は狂言作者の三升屋二三治の事。）

○

拜啓、未得御面謁候得共、益々御多祥奉祝賀候。陳者今般御先祖御贈位之趣、結構成る事恐悅奉申上候。右御祭に付御祝宴之御催御座候而御招待に預り、小生身に取り大慶至極難有奉拜謝候。御當日に參上可致之所、此程よりの時候に感じ持病之疝癪發り步行難成引籠り居り候間、乍失敬參上成兼候故御斷り申上候。尤小生事本年七十七に相成り、益々老衰致し、目はうとく、耳は遠

く、足は悪く、意に任せぬ身と相成り候。何れ其内参館得拜眉御詫可申述候。頓首再拜。

六月八日　　　　默阿彌

山縣君　梧下

（山縣君とあるのは、親戚續きの家で、山縣大貳の後裔にあたる、明治二十四年十二月正四位を贈られたから、その祝賀に招かれた時のものであらう。頓首再拜の文字だけが一寸出來が悪かつたので、見合せにして反故として遺されたのであるが、『摺々老衰云々』は默阿彌晩年の十八番で、少し遠慮したいやうな場合には、いつも病氣とか老衰とかで遁れたものであつた。）

默阿彌の趣味は何によらず地味で、御大層らしくないものであつたが、書翰箋にしても封筒にしても、至極平民的であつた。卷紙は極く薄手な雁皮紙ばかりを用ひた。奉書だの唐紙だのは用ひなかつた。封筒も質素極まる安手な、藁紙製のものにすぎなかつた。たゞ一つ竺仙へ宛てた、祝ひ物の趣向の手紙は、物が物だけに半截の奉書へ認めてある。

第十四　總　收

一、默阿彌の一生は長い一續きの戲曲——幸福なる大團圓——

二、作者としての態度。

一

顧れば、默阿彌が七十八年の生涯は、實に默阿彌自身の戲曲の如くに、段取のよい一つの傑作であつた。其の江戶に生れて、江戶にのみ育ち、江戶にのみ生きて、江戶に終つた江戶ツ兒の一生を長い一續きの戲曲のやうに見なすのも、あながち無理なことではない。

生立から二十歲頃までの八笑人的生活——卽ち最も自由なる耽溺生活は卽ち序幕である。默阿彌をして人生を理解し、其の天職を探らしめた、そも／＼の端緒であつた。

二十歲から南北に師事して、作者部屋の人となつてから、小團次と結托するに到る二十年間は、或は不幸に襲はれ、或は勞苦する所多かつた二幕目である。單に一篇の筋、物語を運ぶ爲めに稍ともすれば倦怠をも催さす場面ではあつたが、此の時代こそは默阿彌をして、より深く社會の實相を悟らしむると同時に、舞臺に關する知識を殘りなく感得せしめた、貴重な沈默時代である。人間として及び

作者として立つに必要なる、二様の仕込み——筋の賣込み——武裝をば十分に整へたのである。詩人的の天禀は、此處に到つて遺憾なく化育された。何時でも機會さへあれば、火蓋を切つて戰鬪に從ふだけの能力を、充足し得たのである。

三幕目の眼目は、即ち安政の大地震に幕を開けて、慶應に終る小團次との結托時代であつた。如何に花やかに、然しながらしんみりした力瘤の入つた、見所の多い幕であつたかは改めて言はずともである。前二時代に感得し、運んで來た戲曲は大なる展開を遂げて、つひに一篇の眼目たる、異例なる頂點にまで成熟したのである。此の新生命に滿ちたる、革命的の世話場によつて、全戲曲の價値も定められた。而して默阿彌が作者としての立場も、亦動かすべからざるものとなつたのである。

方向を轉じて明治に入る前に引返しの小幕があつた。劇界に交渉深き津藤等及び三題噺、興畫會などと默阿彌との密接な關係である。默阿彌の地盤を固めるにも與つて力あり、又戲曲の光彩となり一層效果深からしめた道行淨瑠璃の一場といふ趣があつた。

次の四幕目は、强い秋の日光に色增す紅葉を偲ばせる、全盛時代である。世も明治と改まり、主として守田勘彌の努力によつて劇界も面目を新たにした。彥三郎、團十郎、菊五郎、左團次及び宗十郎仲藏、半四郎等の名優を、縱横に活躍せしめた、新富町時代が開かれたのである。三座もしくは四座を兼勤して、獨占獨步の圓熟時代は、即ち第二の眼目であつた。斯くする間に、女房の小團次に別れ

てから、十五年相立ち申候て六十六歲になつた。世の中も大分變つて自分も新樣式な世話物と、時代物とに手をつけて、橋渡しだけは濟ましたから、跡は悴に當る門弟どもに世を讓り、『茲らが汐の引時』とて隱退した。惡人滅びてお家は安泰、此の上は勸善懲惡の見せしめに、白浪物の書納めと、一世一代に『島衛月白浪』を書いて諸人に示し、一先づ切上げ、名も默阿彌と改めた。

　これで大尾すべきであつたが、世間からは後日譚の催促が出た。即ち默阿彌時代の十年間が、五幕目の大詰として描かれて、完結したのである。菊五郎中心に出來た世話物は、江戶情調に溢れ、活歷も團十郎の藝術と共に、圓熟の境地を示した。新富町時代より引續いての歌舞伎劇最後の華麗は、又默阿彌最後の光輝であつた。斯くて『五十七年作者を勤め、汚せし硯の海坊主種も趣向もきれ筆を、さらりと西の海へ捨て』て、七十七歲の春、節分の誕生日に目出度く打出し、其の翌年には『老梅の春をも待たで』散行いたのである。

　又と望むべくもあらぬ、其の人物と作物とは、役者からも、見物からも、名殘りを惜しまれた。劇界のみならず、一般社會、文士學者からも等しく哀悼されつつ閉された幕切れは、默阿彌が如何に幸福な人であつたか、また其の生涯が、實に恰好な時に生れて恰好な時期までを劃した、生の戲曲其のものであつたかをも語つてゐる。加ふるに、其の結婚も、家庭も、幸福であつた。いつもながら無愛

想な、むツつりとした面付の默阿彌は、其の後半生をまことに多幸な中に送つた。

斯くの如くにして生涯を送るまでに、默阿彌の筆に成つた作物は、總計で三百六十種程あつた。而して其の内譯は左の通りである。

- 時代物　計九十種
  - 所謂時代物（ダンマリを含む）……四十一種
  - 新時代物（活歴風の）……十八種
  - 準時代物（御家物の或物）……三十一種
- 世話物（生世話、白浪、俠客等を含む）……百三十種
- 唄、淨瑠璃　計百四十種
  - 狂言淨璃瑠
    - 作中に含まるゝもの……四十八種
    - 獨立せるもの（對面を含む）……七十九種
  - 所作事（振事劇）……十三種

通計三百六十種

七十八年間の生涯は長かつたが、眞に筆を執つて從事したのは後半だけである。其の間にこれだけ多量な、又傑れた收穫を後世へ遺し得たのは、默阿彌の精力的勞作、刻苦精勵の賜物であつた。何等の道樂もなく、道草も喰はず、ひたすらに――狂言を作りに生れ出たかのやうに――孜々として倦まなかつた結果であらう。

二

淺學なる吾等は、未だ茲に作者として默阿彌、及び作物全體を通觀しての審美的研究、或は評說等を發表するに到らない。或は時代と作物との關係、他作家及他の作物との關係、交渉。作物と其の典據、材料等との比較考證等、傳記以外に獨立すべき問題の數多遺留されてあることを思ふ。尚これらに就ては、他日を期して闡明したい考へである。が、唯一つ默阿彌が、どんな目的で芝居を書いたか默阿彌の作者としての態度がどうであつたかを、簡略に說明しておく事は、生涯と作物とを正當に理解する資になるだらうと考へる。

作劇に對する默阿彌の態度は、純粹で徹底したものであつた。沙翁や近松にしてもさうであるらしいが、その筆を下すや、後世の讀者を對象とはせずして、自己と時代を同じうせる見物人のみを、常に眼中に置いたのである。讀まるべく企てられたものではなくて、公衆の前に劇場内で上演さるるものとして、作られたものであつた。それ故默阿彌も、公衆の好嫌を熟知してゐた。絶えず公衆の脈管に手を觸れて、反應ある刺激劑を、處方の中に加へる事を忘れなかつた。公衆の求めんと欲するものは、先んじて與へられた事さへあつた。時代の流行、好尚は默阿彌の作の題材として最も應はしいも

のであつた。それを行る性格と脚色とは、演ずべき役者に當てはめ、演ぜらるべき劇場に應じて、考量し、作せられたのである。

自分自身に下されんとする名譽や、光榮は些しも顧みる暇さへなかつた。その目的は唯〻眼前の成功、公衆の喝采にあつた。三日二晩徹夜して勞作しても、初日がどんと景氣よく明いて、大入りになつて、見物が悦べば、それでけろりと疲勞も忘れるのであつた。

興行師に親切であり、また役者に親切で、能く其の人に適應して筆を執り、而して見物に親切で忠實であれば、滿足せんと欲した作者の一人である。卽ち默阿彌は、徹底したる、農夫の眞面目さを以て耕した眞の狂言作者であつた。『それ故、今日になつても其の作品は、吾々に向つて『舞臺』に關する幾多の專門的智識を與へると同時に、又一面に於ては、丁度以太利亞十六世紀の美術家の作品に見る如き、單純にして忠實なる藝術の職人と云つたやうな、少くとも藝術に對して Pretentieux（他所行き）でない、誠に懷しい謙遜の態度を窺はしめる』、と評せられてゐる。

默阿彌の作物は必ずしも創始的ではなかつたかも知れない。また世界的でもなかつた。或は自己を基調とする所の藝術でなかつたかも知れない。然しながら、尙默阿彌の藝術に、何等かの價値なり、力なりを認めない譯には行かない。歿後――恰も猫の眼の如くに、變轉極まりなき時代に於て、二昔

を隔てても、尚依然として、今日の舞臺に使用されつつあるのは掩ふべからざる事實である。『書き流しですから其の場限りと思つて下さい』と謙遜した、生世話物にも葬られないものがある。生前より今日まで、毎月毎年星移り時は變るが、各劇場に演ぜられる興行物を統計して見ると、略〻其の三分の一が、默阿彌の作である事に變りはない。

> 嗚呼、天稟の詩人河竹默阿彌が一たび退隱せしより以來、我劇場は古家の中を行くが如く毫も生氣なきにあらずや。是れ豈故らに舞臺主義を唱へて、詩人の肘を掣すべき秋ならんや。
> （森鷗外氏著『月くさ』に收められたる「再び劇を論じて世の評家に答ふ」より』

第十五　遺族及門葉

一、未亡人琴女――その内助の功――長子と次女――長女糸――糸女と默阿彌――二、門弟――勝能進――三世河竹新七及び其の作物――竹柴其水及び其の作物――其水と默阿彌――古河新水――其の他。

默阿彌の歿後は、未亡人の琴女と長女の糸女が家庭に取殘された。けれども用意周到な故人のことだから、質素ながら安んじて生活されるだけの、工夫と手當とがしてあつた。

琴女は默阿彌の歿後十年を經て、明治卅六年四月十七日に七十九歳の壽を保つて歿した。戲作者や狂言作者などの配遇によく見るやうな、あさましい苦勞や、末路の憂目にも遭遇せず、琴女は貞淑にして、亦幸福な一生を送りおほせたのであつた。而して此の妻女こそは、まことに『夫の冠』であつたのである。琴女が深く夫を敬愛し、其の御殿下りであつたにもかかはらず、几帳面に、巧に家政の切盛りをなし、あらゆる家務に從事して器用でもあり、敏捷でもあつたことは、已に前段にも述べておいたところである。默阿彌もまたよく妻女に信頼して、一切を委せたために、安心して

筆を執ることが出來たのであつた。恐らくは中年から始まつたあの多作も、一つは日夜家事に心を勞さないで机に向ふことの出來た賜であつたらう。

默阿彌は多忙であつた上に、元來が無愛想なむツつりであつたから、交際といふ上からその缺を補ふ爲に、妻女は一方ならず心を用ひた。默阿彌が歿して、其の傳記があちこちに傳へられるに及んで、妻女は茶人大源の女であると分かり、それを聞いて目を見張つたものが多かつたといふ。知らないで交際つてゐたものは、誰でも料理屋の娘か藝妓上りであらうとばかり考へてゐた。――それほどに交際上手な、人をそらさぬ女であつた。いつもいつもにこやかな顏を見せて、ちやら／＼しないで程の好い愛敬を振りまいてゐた。平生子女を誡めて、『折角たづねて來て下さる方に厭な顏を見せては濟まないよ。』と言つてゐたさうである。で、『師匠の家はおかみさんがゐなからうものなら、間の惡い家だ。』とは、劇場中での評判であつた。妻女は若い時分から頭痛持で、天氣でも惡いと猶更ひどく惱んださうだが、激しく痛んで人に頭を叩かせてゐる時でも、客が來たと聞けばすぐに頭を擡げて出で迎へる――ともう痛みも忘れて、別人のやうな晴れ／＼しい笑顏を作つて心持よくもてなす。客が歸るとまた堪へ難ない惱みに復るといふ程に、交際を重んじてゐた。默阿彌の方は少し書き物にでも取掛つてゐると、客に接しても落着かないでいら／＼するので、妻女が氣轉を利かして中座させ、『主人はいつも考へ事ばかりしてゐますので』と、其の場をうまく繕ふやうな事は度々であつた。

似た者夫婦とは言ひながら、默阿彌の几帳面な所、嚴格な所などは、琴女にあつてもそのままであつた。子女の教育にも其の影がよく見えてゐる。

子供を愛するにも愛し方が違つてゐた。喋々しく可愛がるやうな事はなく、寸分の怠慢をも些少なる過失をも、許さなかつた。その長男を十二歳で商家の奉公に出した年の冬、つひ近所まで使に來たからと、初めて實家へ立寄つたことがある。雪の降る日で凍てつくやうに寒い日であつたが、彼女は閾を跨がせなかつた。定まつた宿下りがあるのに、主人へ斷りもせずに立寄るなどとは聞屆けられないといふので、どうしても頑として寄せつけなかつた。それを見るに見兼ねて、弟子が主家まで送り屆けたといふ。けれども正當の宿下りに來れば、二三人の弟子をつけて勝手放題な遊びに耽らせたといふ。さういつた風に几帳面で、曲つた事が大嫌ひであつた。娘の一人が幼い時何か氣に入らないことでもあつてふくれ面をした。すると鏡を持つて來てさしつけ『さあ此の鏡に映るお前の顏をよく御覽なさい、どんなに見ッともないか知れやしない。ふくれ面をしたり怒つたりすると、かういふ見惡い容貌になるのだから以來をきつとお愼しみなさい。』と堅くいましめたといふ。また娘二人が年頃になつてからは、他日婚嫁した場合を慮つて木綿着物を數年間も着せ、あらゆる仕事をさせたさうである。

家庭の中には、時として三四人もの若い下婢があり、作者志願で內弟子になつてゐる若い男も二三

位づつゐたこともあるが、妻の取締りが嚴重であつた爲めに、一度も男女間の間違ひの起つたことはない。召使の女もきびくした若い女を選み、又仕込むのが巧みであつた。だから『河竹さんへ勤めた女なら見合ひをしなくとも大丈夫だ。』とまで信用されて、嫁入りした者も少くなかつた。こんな譯で芝居道に携はる家ながら、嚴格で几帳面で――寧ろ不自然な程に、堅い家庭であつた。

至極さばけた闊達な性質で、よく默阿彌に仕へて、かりにも嫉妬騷ぎをするなどといふこともなかつた。尤も默阿彌も、中年からは、ぴたりとあらゆる道樂を止めた人であるが、それでも津藤等の關係から、時とては吉原や品川へ出かけたことはあつた。さういふ時には特に意を用ひ、人中へ出るのだからといふので、襦袢まで着換へさせた位、さうして夜は歸宅するまで帶も解かずに裁縫をしながら待つてゐた。又ある時にはこんな事もあつた――餘りに默阿彌が外出もせず、何の道樂もなく、机にばかり對つてゐるので、氣分勞れで病氣でも起るといけないから、氣晴らしに妾を置いたらと勸めた事もあつた。ちやうど其の頃次女につけてあつた清元の師匠に延榮といつて、ちよつと小意氣な、色の淺黑い氣の利いた女があつたので、それを勸めたところが、『おらァそんな暇がありやァ、こんな忙しい目をしやァしねえ、』と笑つて取合はなかつたさうである。

默阿彌には四人の子供があつた。男は長男の市太郎一人で、あとに妹が三人あつた。けれども市太

郎は、早くより志を立てて商人となつたので、これには父祖代々の通り名の勘兵衞を讓り、商家としての家を嗣がせた。勘兵衞は默阿彌の生前にも、亦歿後にも、よく其の家事上の用務を幇けて蹉躓なからしめた。

次女の島女は、默阿彌の藝術家としての血を承けてか、畫工として身を起した。生れだちから器用で手藝にも勝れてゐた、さうして中年からは柴田是眞の門に入つて修業し、數年ならずして、是眞の十哲にも算へられた程に上達が速かであつた。其の作品もよく師の畫風と筆力とを嗣いだもので、將來甚だ有望であつたのに、不幸にも中途で腦膜炎の爲めに夭折したのは、くれぐも惜しい事であつた、雅號は本名のまゝ島女と呼んでゐた。諸種の席畫會や展覽會に出品して賞牌を受けたこともあり、宮內省の御用を蒙つて、東宮御所のお杉戶を畫いたこともあつた。明治何年かの共進會に田家機織の圖を出陳して宮內省の御用品となつた事もある。殊に其の時の構圖が隣り柿の木の機家で、いかにも狂言作者の出らしいと取沙汰されたさうである。嘗ては昭憲皇太后の御前で、揮毫の榮譽をも荷つたことさへあつた。

末女ますが十三歲で世を去つた事は、前に述べたから此處には繰返さない。

七十七歳の默阿彌

默阿彌妻琴女

長子勘兵衛

島女が默阿彌の血の一半、綺畫的の要素を承けついだものとすれば、其の作者としての一半を遺傳したのは、長女の糸であつた。
糸女は大正十三年十一月二十四日、七十五歳にして歿したが、默阿彌並に默阿彌の作物に對しては種々の密接なる關係を持つてゐる。糸女に就ては、本卷中別に『河竹糸女が事』として、その略傳を記述しておいたから參照せられたい。

二

默阿彌が弟子入りを許したのは、立作者になつた天保十四年十一月に河原崎座へ出勤させた豐島大菊に始まつて、明治十四年に一世一代をしたまでであつた。それから後は弟子入りを志望するものがあつても三世河竹の許へ赴かせたが、强ひて入門を求めた最後の竹柴晋吉氏までを算へると、生前に總計で四十七人の入門者があつた事になる。義士の人數ではないが、默阿彌の手記によれば偶然にもそれだけの人數に上つてゐる。蓋し狂言作者としては前後に類のない多くの門弟持であつたらう。
竹柴の姓を用ひたのは安政三年以來で、其の後は默阿彌の門葉に通ずる姓と定められてゐた。門弟のまた門葉も多數で、歿後までも河竹社中などと稱されて一派視されてゐた。殆ど都下の劇場として其の番附の作者連名中に、竹柴の姓を見ざるはないといふ有樣で今日に及んでゐる。

一口に『作者は道樂者の捨て所』だと唱へられた位で、放蕩などの結果、芝居が飯よりも好きだといふので中年から身を劇界に投じたものは、大抵囃子方か作者になつたものである。それ故默阿彌の門弟には各方面から出た人が網羅されてゐた。旗本や漢方醫の果てがあり、戯作者や俳人から入つたもの、又は札差しの主人、商人出のものもあつた。

四十七人の門弟中に、默阿彌の分身とも言ふべき、名前を讓與されたものが四人あつた。卽ち勝能進と三世河竹新七と竹柴其水と古河新水とである。

勝能進は、安政元年八月始めて河原崎座に出勤して繁河長治と呼んだ。淺草諏訪町の提灯問屋の主人であつた。後默阿彌の前名諺藏を襲ぎ、慶應二年に至つて勝の姓を與へられた。立作者の地位に上つたのは明治元年市村座に於てであつたが、故あつて明治五六年の頃阪地に下り、江戸の作風を移殖してゐた。其の後初代以來の俳名能進を許し、金作に三世河竹新七を嗣がせると同時に河竹の姓をも許した。明治十九年の十月廿六日に六十二歲で歿した。能進の作には講談、落語、合卷、讀本等の脚色物が多數であつたといふが、何分にも、早くから江戸を離れてゐただけに、明確な事實は分からない。然し默阿彌第一の高足で作者としての才分も相當にあつたらしい。小男で肥滿してゐたから、達摩達摩と呼ばれてゐたさうで、提灯屋の出であるだけに𣘺亭流がよくかけたといふ。

三世河竹新七(是水)は、天保十三年神田に生れ、幼名を菊川金太郎と呼んだ。後猿若町なる小間物

屋に奉公して芝居を好み、遂に默阿彌の名を慕ひ、豐芥子の紹介により内弟子として作者になり、竹柴金作と稱した。三木竹二氏の傳ふる所によれば、安政二年の『五十三次の天日坊』の狂言を見て、世にこれほどの名作者もあるものかと感歎して入門したのだといふ。明治五年市村座に於て立作者の地位に進み、各座に出勤してゐたが、明治十七年新富座で三世河竹新七を襲いだ。其の後も市村座、歌舞伎座等の立作者を勤めてゐたが、三十四年の一月九日六十歳で歿した。歿すると同時に、生前の意思とあつて其の遺族は河竹新七の名目を默阿彌家に返納した。三世河竹は幼少から落し噺に巧みで踊りの當てぶりが上手であつた如くに、機智に富み、趣向の才もあり、輕くてさら〱とした作風で非常な速筆であつたといふ。作物には創作物もあつたが、講談、落語等を脚色した作が多い。次に其の著作を年代順に列記して置く。

夏雨濡衲輿（女團七、櫻田治助原作）。明治六年七月市村座書下し、（以下同斷）。
忠臣藏年中行事（忠臣講釋）。同十年五月春木座。
政談雞畦倉（大岡政談畦倉十四郎）。同十年十月同座。
櫓太鼓成田仇討（瀧見山大八）。同十年九月同座。
六歌仙狂畫墨塗（滑稽所作事）。同年同月同座。
門松寶双六（尼子十勇士）。同十一年一月同座。

廿四時海上新話　（鳥追お松）。同年五月同座。
通俗西遊記　（西梁女國）。同年九月市村座。
紀文大盡廓入船　（紀文）。同年十一月同座。
佐野系圖由緒調　（佐野善左衛門）。同十二年二月同座。
鹿兒島銘々傳記　（鹿兒島銘々傳）。同年四月同座。
萬石取茶入墨附　（越前福井騷動）。同十三年四月同座。
風便佃新聞　（理作流罪）。同年八月『歌舞伎新報』掲載。
嵯峨奥妖猫奇談　（鍋島騷動）。同年十月市村座。
北雪美談時代鏡　（時代鏡）。同十四年二月春木座。
弓張月源家鏑箭　（大島の爲朝）。同年三月市村座。
御殿山櫻木草紙　（坂下事件）。同年五月同座。
盛糸好比翼新形　（新比翼塚）。同年六月同座。
關ヶ原東西軍記　（關ヶ原合戰）。同年九月同座。
女夫浪江島新話　（生島新五郎）。同十六年一月春木座。
橋供養梵字文覺　（遠藤武者）。同年五月市村座。

墨川噂高樓（八犬傳毛野。）同年六月春木座。
濱千鳥眞砂白波（石川五右衛門）。同年十一月市村座。
雲雀山駒浪松樹（中將姫）。同十七年二月春木座。
音鈴川大岡政談 同年同月同座。
鎭西八郎英傑譚（琉球の爲朝）。同年四月市村座。
邯鄲諸國譚 京太郎仇討）。同年六月春木座。
東叡山農夫願書（佐倉宗五郎）。同年七月市村座。
上州織侠客大縞（國定忠次）。同年七月同座。
高野山苅萱實記（苅萱傳記）。同年九月春木座。
稗史眞書太閤記（太閤記）。同年十月市村座。
新舞臺越後立讀（越後騷動）。同年十一月猿若座。
花見時眞書太閤記（太閤記）。同十八年五月市村座。
三世相緣本阿彌（相撲長右衛門）。同十九年二月同座。
浮世又平名畫譽（繪師又平傳）。同年十一月同座。
籠釣瓶花街醉醒（佐野次郎左衛門）。同二十一年五月千歲座。

武藏鐙譽大久保　（川勝の件）。同二十年十一月市村座。

唐人髷今國姓爺　（和作屋、初代種彦原作）。同二十二年二月『歌舞伎新報』揭載。

千宗易悟道棗前　（千利休）。同年五月『歌舞伎新報』所載。

蔦模樣血染御書　（大川友右衛門）。同年十一月千歲座。

前太平記擬玉殿　（將門合戰）。同二十三年四月市村座。

聖世德大赦恩典　（青木彌太郎）。同年同月同座。

黃金花陸奥朝夷　（朝夷巡島記）。同二十四年四月同座。

金平法問諍　（長兵衛喧嘩）。同二十四年六月歌舞伎座。

伏見街地震夜話　（蛇の目鮨清藏）。同年十月市村座。

復讐高田馬場　（中山安兵衛）。同年十一月歌舞伎座。

新曲吉野琴　（紀貫之）。同二十五年一月『歌舞伎新報』所載。

鹽原多助一代記　（鹽原多助）。同年一月歌舞伎座。

怪異談牡丹燈籠　（牡丹燈籠）。同年七月同座。

菊慈童　（長唄所作）。同年同月同座。

仕立卸薩摩上布　（菊野殺し）。同年九月同座。

賤嶽眞書太閤記　（七本鎗）。同年十一月市村座。

安政三組盃　（都築藤吉郎）。同二十六年一月歌舞伎座。

榛名梅香團扇繪　（安中草三）。同年七月同座。

新門辰巳小金井　（慶應水滸傳）。同二十七年七月市村座。

鈴音眞似操　（ダアク人形所作）。同年同月同座。

粟田口鑑定折紙　（粟田口）。同二十八年一月新富座。

紫紐僞神道　（神道德次郎）。同年九月『歌舞伎新報』所載。

指物師名人長次　（名人長次）。同年十月新富座。

神代杉常總奇聞　（天狗松若）。同二十九年七月市村座。

池廼端恨意趣斬　（高岡幸十郎）。同年八月『歌舞伎新報』所載。

捨小舟萬大注連　（捨小舟）。同三十一年一月歌舞伎座。

羽衣　（羽衣の所作）。同年同月同座。

赤格子血汐船越　（三都勇劍傳）。同年二月明治座。

江戸育御祭佐七　（御祭佐七）。同年五月歌舞伎座。

鏡池操月影　（江島屋騷動）。同三十二年十二月歌舞伎座。

成田道初音藪原（藪原檢校）。同二十三年一月歌舞伎座。
闇梅百物語（百物語所作）。同年同月同座。
和睦論菖蒲戰記（喧はんか菖蒲由來）。同年三月明治座。
星合露玉菊（玉菊燈籠）。同年七月春木座。
清正誠忠錄（加藤毒饅頭）。同二十七年三月明治座。
葉武列土（ハムレット）。同二十三年中脫稿せしも上場せず。
龍　　女（龍女玉取）。同二十八年十月國華座。
新清水花趾所染（女清玄）。同十九年四月市村座。
娘鉢の木（お秋の傳）。同十一年三月同座。
惠方曉田萬吉（不動萬吉）。同三十年二月同座。
伽話舌切雀　明治三十一年七月歌舞伎座。
粂の仙人　同二十九年七月市村座。
殺生石（玉藻前、玄翁和尚問答）。同三十五年九月同座。

竹柴其水氏は弘化四年十月京橋本材木町六丁目の材木商の家に生れた。始め守田勘彌の手に附いて

守田座に出勤し、熨斗進三と稱したが、後默阿彌の門に入つて明治六年四月から竹柴進三と改め、其の後新富座で立作者の地位に上つたのが明治十七年。同廿年に默阿彌の俳名其水を讓られ各座に出勤してゐた。其の後長らく明治座に在つて盛んに新作を上場してゐたが、數年前引退して今猶健在である。本名は岡田新藏といふ。默阿彌歿後は三世河竹と併稱されて、東京に於ける所謂狂言作者を代表した二頭目で、其の作物には師色以外に自己の創意に拘はるものも含まれてゐる。

千石船帆影白濱（仙石騷動）。明治二十一年六月新富座。
土佐半紙初荷艦（土佐の萬次郎漂流譚）。同年九月同座。
那智瀧誓言文覺（文覺勸進帳）。同二十二年三月中村座。
富山城雪解清水（佐々成政）。同二十三年三月新富座。
神明恵和合取組（め組の喧嘩）。同年同月同座。
皐月晴上野朝風（上野戰爭）。同年五月同座。
一刀流成田掛額（松田の仇討）。同二十四年十一月市村座。
石橋山源氏旗揚（頼朝伏木隱れ）。同二十六年十一月明治座。
遠山櫻天保日記（遠山左衛門之丞傳）。同年同月同座。
伊達模樣好織分（伊達騷動の中法印の件）。同二十七年一月同座。

東花園四郎坊主　（市川團四郎の傳）。同年三月同座。
甲州流武田幕張　（武田の落城）。同年五月同座。
織姫繻子綠色糸　（織姫神社由來）。同年同月同座。
會津產明治組重　（會津戰爭より日清戰爭まで）。同年十月同座。
日本晴朝鮮新話　（毛谷村六助の豐公仕官）。同年同月同座。
身延詣甲斐融轉　（俠客甲斐融轉）。同二十八年一月同座。
三羽烏山城名所　（安田作兵衛）。同年三月同座。
新日本兩港大漁　同年同月同座。
男達廓夜櫻　（夢の市郎兵衛）。同年同月同座。
奉迎會各區旗風　（日清戰爭凱旋）。同年六月同座。
歌神德雨乞小町　（雨乞小町）。同二十九年四月同座。
金紋先箱譽鎗持　（鎗持勘助）。同三十年十月同座。
箱根細工車指物　（車善七出世鑑）。同三十一年一月同座。
樊噲門破　同年同月同座。
名高秋田義民傳　（義民傳之助の名譽）。同年六月同座。

三人片輪　同三十年十月同座。

三十年祭上野盛　同年同月同座。

山田長政擧軍配　同三十二年一月同座。

難波六郎　（布引瀧より龍宮まで）。同年四月同座。

名慕薩摩踊　（薩摩棒打）。同年六月同座。

夢物語笹碑　（増訂高野長英）。同年九月同座。

櫓太鼓出世取組　（横綱谷風の名譽）。同三十二年一月同座。

忠孝義筑紫仇討　（筑紫市兵衛の仇討）。同年三月同座。

花盛隅田賑　（ラム酒の賣出し）。同年四月同座。

鎌倉山浦櫻再咲　（範頼一代記）。同年九月同座。

伊豆産慶應奇聞　（佃島懲役場譚）。同年同月同座。

蒲冠者後日聞書　（範頼切腹）。同三十四年一月同座。

祖先光輝磨鉈切　（俠客横須賀蒲平の傳）。同年同月同座。

福之神　同年同月同座。

染模様五枚揃衣　（五人男）。同年三月同座。

和田合戰誠忠錄（朝比奈切通し譚）。同年三月同座。
水澤瀉曠着唐犬（唐犬權兵衛）。同年十月同座。
濱松城記錄聞書（半僧坊靈驗記）。同三十五年一月同座。
西東戀取組（力士小柳不知火仇討）。同年三月同座。
日本晴露領雪解（近藤重藏）。同年六月同座。
吉野山狐忠信（源九郎狐故郷戻り）。同年同月同座。
天保山眺望大鹽（書換大鹽平八郎）。同三十六年四月同座。
開帳淺草產（とんだりはねたり）。同年同月同座。
秋色櫻上野早咲　同三十七年一月同座。
僞鍍金蓮華組上（一心太助蓮華往生）。同十一月同座。
染模樣御好織分（十二人男）。同四十年六月同座。
墨塗女（滑稽淨瑠璃）。同年同月同座。
淺妻船島根一蝶（英一蝶）。同四十年作。
鼠宿殘猫塚（怪猫傳）。同年作。
西東楓色時（十人男）。同四十一年九月歌舞伎座。

享和春雨岡紀聞（おつま八郎兵衛實記）。同四十三年一月明治座。
三途川地獄新街（滑稽淨瑠璃）。同四十年三月同座。
七字鐘身延雪夜（時代、世話の日蓮記）。『歌舞伎新報』所載。
訂正御國入源九郎狐（三人生際）。大正元年作。
相馬の旗揚　大正元年作。
千貫樋三島お仙　大正二年作。
新刈萱露母子草　同年作。
神田櫻ヶ池（お玉ヶ池の故事）。大正三年七月作。
百組出世鳶（鳶の者出世鑑）。大正四年三月市村座。
元祿薩摩侍（義士討入、泉岳寺切腹）。同年十月明治座。
鐘曳鎌倉權五郎　同年十一月新富座。
滑稽人魚劇　大正五年八月作。

尚其水氏に就ては特に記すべきことがある。默阿彌は、もと／＼門弟に對しても、常に公平無私でよく師父たるの態度を持してゐたから、其の歿後に至つても、門弟等は大師匠の未亡人と女とを、直接又は間接に慰問し若しくは保護したのであつたが、就中其水氏は默阿彌生前の依賴によつて、著作

權法の發布以來其の作に關する雜務を一手に引受けて、些の懸念なからしめたのみならず、絕えず遺族を訪れて其の相談相手となつてゐた。劇場裏に於ける默阿彌の保護者として、又其遺族の忠實なる顧問として、かくの如き人を得た事は默阿彌一族に取つて甚だ仕合せであつた。

古河新水といふのは、かの守田勘彌のことである。勘彌はもと〳〵作意や舞臺上の智識に富んでゐた。舞臺に雨を降らせる工夫をしたり、或は合方や鳴物に就ても新しい意見を提出したりして、效果を收めた場合が少くなかつた。明治十年以來、演劇改良の運動が起つて以來、此の人が作劇上に默阿彌を幇助した事の小少ならぬのを忘れてはならない。だいぶ作意のあつた人であるから、時事問題を捉へた際物、例へば『西鄕隆盛』、『滿二十年息子鑑』（徵兵の狂言）の如き、或は少し堅い『長英と崋山』の如きは、いづれも勘彌が大體の方案を立てた上で、默阿彌に筆を執らせたものであつた。後明治十九年十月二十八日に改めて弟子入りをし、古河新水と命名して貰つた。新水の最初の作は、明治十九年十二月新富座に上演した、文珠九助（文珠智惠義民功）で、相當の評判を取つた。その後碁盤割（堪忍袋緒截糸柳）、『三府五港寫幻燈』（二十年十月、新富座）、八丈島の爲朝（名大島功譽弓勢）等が發表された。いつも自分の立案したものをば、必ず默阿彌の所へ持つて來て相談をかけ、いろ〳〵注意して貰つた後に作つたといふ。太夫元としての長い間の經驗はあつただけに、作者としても確か

に一ぱしの手腕を持つてゐたといふ。其の上熱心で、作にかゝると少しの暇でもあれば、机に向つてこつ／＼書いてゐたさうで、執達吏や借金取が居催促に來てゐても待たして置いて、平氣で筆を取つたといふ。新水は弘化三年に生れて、明治三十年の八月、五十二歳で歿した。

默阿彌が生涯に自分の名前を分與したのは、以上の四人に留まるが、尚門弟中には立作者になつた者もあり、種々の作を發表した人もあるが、特に誌すのはわざと以上にとゞめ、此處では單に默阿彌の門葉全體を列記して默阿彌傳の最後の頁を飾りたいと思ふ。（但し順序はいろは順にて、名前頭字の同じ場合には、次の音の順を採つて排列した。）

故人の部

竹柴伊三郎　竹柴六太郎　竹柴 半藏　河野 半七　佳津 東八
竹柴 豐藏　竹柴 富藏　竹柴 輛三　竹柴 重三　竹柴 瓶三
竹柴 瓶三（栗原）　竹柴歌女次　竹柴 甲平　竹柴 勝三
古川 耕作　竹柴 米造　竹柴 由次　豐島 大策　竹柴 濤治
竹柴 竹三　竹柴 常治　竹柴 能金　勝 能進　竹柴 華七
竹柴夜具平　中川 彌吉　島田 安次　竹柴 安藏　竹柴 安三
竹柴 萬治　川口 源次　竹柴 諺藏　竹柴 舩造　吉住 文三

竹柴古芝　竹柴權七　竹柴桀治　竹柴永助　竹柴瀧七
柴　山治　竹柴作郎　竹柴左吉　竹柴山造　竹柴喜三次
竹柴吉藏　竹柴銀藏　竹柴勇三　寶　結三　竹柴正吉
竹柴雀郎　竹柴繁造　竹柴壽作　竹柴新三　能　晉輔
河竹新七（三世、もと竹柴金作）　古河新水（守田勘彌）　竹柴進助
竹柴百三　竹柴瓢助（四方梅彦）　竹柴彦作　竹柴扇二

今人の部

竹柴晴三　竹柴鳳二　竹柴豐作　竹柴重香　竹柴絲葉
竹柴金松　竹柴龜三郎　竹柴鷹二　竹柴竹三　竹柴爲三
竹柴素文　竹柴楳三　竹柴信三　竹柴老松　竹柴光葉
竹柴鷄三　竹柴顯三　竹柴鴻作　竹柴榮太郎　竹柴永造
竹柴燕二　竹柴蝶三　竹柴傳造　竹柴定吉　竹柴左七
竹柴三叟　竹柴喜代松　竹柴喜三次　竹柴其水（もと進三）
竹柴金祿　竹柴金瓶　竹柴金作　竹柴金三　竹柴秀一
竹柴秀也　竹柴秀葉　竹柴秀吉　竹柴七藏　竹柴昇翁

竹柴　雀造　竹柴　支葉　竹柴　新作　竹柴　晋吉　竹柴　清吉

以上　（大正三年末調べ）

第十六　補遺

故默阿彌老人と私（坪内逍遙）――作者より見たる名優（竹の屋主人事饗庭篁村）――默阿彌翁の事ども（關根默庵）――亡父のはなし（糸女）――舊師追懷談（金松、爲三、蝶三、傳造、金作、龜三郎、其水、秀葉、秀吉、七藏、昇翁、晋吉、清吉）――俳優の思ひ出（歌右衛門、仁左衛門、羽左衛門、源之助、左團次、錦之助）――金魚屋の叉手（長谷川勘兵衛）――默阿彌翁の肖像書（田村成義）――思ひ出草（服部長兵衛）――全集の出版（伊原青々園）。

（默阿彌に關してこれまでに新聞や雜誌の上に書かれ、論じられた逸話や評論は甚だ多く、こゝに一々書出すわけには行かぬ。が、その中でただ一つ特に輯錄しておきたいのは、雜誌『歌舞伎』の第百七十五號即ち大正四年一月一日發行の「默阿彌の卷」に收められたものである。これは默阿彌傳を出版した翌春編輯者の發意によつて作られたものであるから、傳記の中に含まれてゐない逸事や性行が多く、殊にそれが多方面の人々によつて述べられてあるだけ、多種多樣の興味津々として盡きないものがある。わたくしは、今度の改訂に際して是非それを抄錄して拙著の補遺としたい旨を『歌舞伎』の主筆たる伊原青々園氏に申出で、快諾を與へられ、

ついで各筆者諸先生も抄録の許可を與へられた。この一章はつまり『歌舞伎』の默阿彌の卷から抄出して成立つたのである。從つて掲出の順序も前通りになつてゐますが、小生が任意に抄出したことは深くお詫びをし、又快諾を與へられた方々の御厚意に對してはここに御禮を申添へます)。

故默阿彌老人と私　　逍遙

(前略)明治十九年の八月に、其頃の顯官、學者、紳士中の洒落者の一團が――今の末松男爵、澁澤男爵、穗積博士なぞは其發起者仲間――演劇改良會といふものを興した。

さうして盛んに西洋各國の演劇及び其劇場組織を推稱して、劇の向上を說き、口を極めて日本在來の劇の野卑陋劣を非難し、狂言作者を一概に無學文盲であると罵り、其作を頭下し取るに足らぬと罵倒した。それから此趣意を宣傳するために、特に小冊子を出した改良會員もあれば、『報知新聞』なぞは其社說欄で以て狂言作者攻撃を試みた。此改良會の最も大きな旗章は英雄烈婦本位の理想主義であつた。今になつて考へると、此改良會の主張の裏には改良會自身も十分には意識せず、反對した私自身も心附いてゐなかつた一種の必要があつたのだが、此際私が暗雲に野次馬を乘出した當面の動

機は、河竹默阿彌の辯護と非理想主義の唱道であつた。すなはち丁度其頃は、私は馬琴崇拜の舊夢から醒めかけて頻りに彼れの勸懲主義や理想小說を攻擊してゐた時であつたから、賴まれもせぬのに長長と默阿彌の辯護をしたのは、一面からいふと、自分の主義の正當防衞でも宣傳でもあつたのです。二つには、何事につけても官僚黨のすることを氣に入らなく感ずる時の青年精神の餘波でもあつたので、言はば客氣の沙汰なのである。先日も其際の文章を(讀賣新聞所載の)河竹繁俊氏に見せられて、眞面目だか駄洒落だか分らぬ其文章のだらしなさに、殆ど三むかしも後の今ながら額に手を加へざるを得なかつた。だから、其の文の中で、頻に知己らしく「翁よ〱」と呼掛けつつ、饒舌を弄してゐたものの、間接にすらも如何いふ利害關係もなく、又曾て知合にならうとも思つてゐなかつたのである。

ところが、こんな幕外の仕草をも、謹嚴な義理堅い老人は、大眞面目に感謝してゐたらしく――私の方ではそれつきり其事は忘れてゐたのだが――先方では其時以來私の名を記憶してゐて、その何年後だかに饗庭篁村君の仲介で、柳島の橋本で、三人はじめて會見といふ一寸とした一場が演ぜられたさて其時にどんな話をしたやら――老人が生眞面目に肅然と坐つて、言葉尠なにしてゐたのと、饗庭君が大分醉はれたことだけは記えてゐるが――其他は更に記憶にない。義理堅い老人は、其數日後、わざ〱眞砂町の拙宅へ禮に來たが、其際も改まつた辭儀口儀が主で別れてしまつたものらしく、更

に何の記憶する所もない。つまり老人は謹嚴な寡言家、私は世間知らずの書生あがり、年齡の距離も遠いので、話の附穗がなかつたのであらう。それでも、たつた二囘ぎりの會見ながら、其人格の堅實で、何事につけてもまめやかな、注意深い、謙遜な、信頼すべき、あゝいふ社會には極めて珍らしい人柄だといふことだけは流石に直覺的に深く感じたので、家人等に繰返し／＼其噂をしたのを今も微記えてゐる。これは多分明治二十一二年の事であつたらう。

それより後の關係は、ずつと飛んで明治二十四年の十一月に、故高橋健三君が老人を其官邸へ招いで脚本の朗讀をさせた時である。老人が本讀上手といふことは豫て噂に聞いてもゐたし、丁度雲庭君關根(正直)君其他と早稻田で朗讀研究會といふものを興し、其頃文科の學生であつた土肥(庸元)水井(一孝)なぞといふ諸氏を相手にめい／＼思ひ／＼の工夫を試みてゐた際であつたから、參考の爲、喜んで招きに應じて其席に列なつた。同席者には故鈴木得知君も故陸實君もをられ、四五の夫人連も列席であつた。多分此會は雲庭が高橋氏に勸めて催させたのであつたらう。老人は特に此會に出る爲にとて義商を新規に作らせたといふ程で、二時間餘り『上總棉小紋單地』を讀んだ。御覽の通りの總義商でそれに調子も低くなりましてといふ斷り附であつたが、何十年來の練磨を經た自然の寂びに一種の藝術と見做すべき程の面白味があつた。假聲らしくは讀まぬのではあつたが、肩書の役者の名から白へ移る間に、いつとなくほかすやうにうつすりと色が附いて、女となり、男となり、老人となり、

菊五郎や半四郎が髣髴として浮上る其淡泊な味が面白かつた。或は白からトガキへ、トガキから白へ又はトガキから淨瑠璃へ、淨瑠璃からトガキへと讀移る讀み癖、殊に淨瑠璃を少しも味を附けず、素直に講釋口調を和らげたやうな息で讀流すあたりが耳に殘つた。老人に逢つたのは、多分此會が最後であつたらう。(最後の病中に見舞にいつたのを微かに記えてゐるが、其時病床で面會したかどうだか例の健忘性で記憶してゐない。)

　明治二十六年の病歿に對しては、各新聞が共に深き悼惜の意を表した。私も同じ心を致す爲に、「早稻田文學」誌上に翁の略傳を載せることにし、宅の書生で當時早稻田の文科にゐた奧泰資に吩咐けて其未亡人と其女の糸子を訪問させて、いろ〳〵材料を貰ひ、不完全ながら『古河默阿彌傳』と題したものを數號に亙つて揭載した。稿は奧が起したが、折々私も手傳つた。吉村家とは其頃から大分親しくなつた。義理堅い老人の遺風は、其儘に未亡人と其女とに傳つて、其以後少くとも年に二度づつは必ずのやうに無沙汰見舞の折目正しく、其都度何十年も前の野次馬の禮まで言はれるので、折々挨拶に困つたことであつた。それからまた何年か經つて『辨天小僧』の興行權問題といふことが起つて、私は裁判所へ鑑定人に呼出された。それは三十五年の六月である。誰れ知らぬ者もない辨天小僧の作者が疑問の的となつた法廷の尋問を餘りといへば奇怪だと不平に思つたところから、當面の必要以上に、嚴密な長い證明を試みて、鑑定書の中へ暗に判決然たることまで書込んでしまつた。これは言ふ

までもなく吉村家とは沒交渉の仕事であつたのだが、裁判果てて後、これがまた同家と私とを前より
も接近させる緣となつた。其頃かと思ふが、或はそれよりも前かも知れぬが、お糸さんから、作者と
しての默阿彌の跡をも斷絶させたくないから、相應に學問のある養嗣を世話して貰ひたいといふ賴み
を受けた。（中略）で、心に掛けながら長し短しで大分の年月を過したが、どうしても私に緣があつた
のか、明治四十四年まで持越して竟に其約を果すこととなり、今の繁俊氏が翁の跡を繼ぐ人となられ
た。（下略）。

私と故人との關係はまづざつとこんなことである。作者としての故人の功績や資格や才や其作の價
値等に關しては、野次馬時代にも論じ、『早稻田文學』でも折々語り、今度の詳傳の序にも述べておい
たから、今は何もいひません。

作者より見たる名優　　竹の屋主人

見物より見たる名優、座方より見たる名優、俳優より見たる名優、種々見るうちにも一代の大作家
默阿彌翁のごとき作者から見た名優はどうあらうと、一時拙者少し開き直つて默阿彌翁に向ひ、貴君
が始終提携したとか、或は切斷されない情實があるとか、又は永く同座した關係とか、夫是なしに一

番俳優が上手であつたとお思ひなさるは誰でしたかと聞いた事がありました。斯う聞く腹の中では是はなか／＼むづかしい事で、五十年來の經驗が長いだけに大勢の俳優に附合つて來たのだから、彼か此かと選まれるに迷はれるであらう。小團次かナ、海老藏かナ、梅壽の菊五郎かナ、夫とも女形にあるかと思索して少なからぬ興味を以て其の答へを待つたところ（此問題を其前に四方梅彥翁に向けたところ、一人では困る、二人づつにしてくれと云はれ。先のは幸四郎と三津五郎、後のは菊五郎と海老藏と答へられたり）。翁は卒然と『それは名人關三です』と躊躇なく云はれて、夫は如何してと慌てて問ひ返すのを待つ樣に莞爾とせられたり。意外なのに一寸面喰つて、僕は自分の掛けた係蹄に自分が掛かつた樣に、夫は如何してです、名人關三とは私等の知つてゐる鼻の高い關三の前の似顏繪で見ると眼のパッチリとした三代目關三十郎ですかと膝を進めて問ひ返したが、其時すでに翁の口から『名人』を冠せて關三を指されたので、少なからず驚いたのでした。翁は其の關三の舞臺に親切であつた事を說かれたが、永木の三津五郎と杜若半四郎と此優は俳優中の稀物でしたらう、座頭役と云ふ事も少なく、藝が地味でしたから前の二優と併び稱せられないでせうが、演る事は上手でしたよ。此優に就いて私の話があります。まだ見習ひを脫け立て、此優の幕切の拍子木を打つたんですが、此優が立役で花道へ掛かる、曲者に聲を掛けると、曲者は礫を拾つてエイと投げ付ける。此優は傘をパラリと開いてそれで受ける。此傘のパラリが木の頭でチョンと來る、後チョンチョンで幕になるのです

が、初日に此幕が濟むと部屋へ呼ばれて、彼の幕切のチョンが少し呼吸がはづれる、お前さんは私が傘をパラリと開くのを見てチョンと木を入れるからパラリとチョンの間が出來る、明日は構はず曲者がヱイと來たら私が身を引いて傘を開く、私の呼吸でチョンとやつて、パラリとチョンが一所に合ふ樣に遣つて下さいとの事なので、其翌日は其の氣組で、曲者のヱイを自分が受ける心持でチョンと入れると旨くパラリと一所に合ふと關三は幕の閉るまで舞臺に莞爾と立つてゐて、木を打つて仕舞つた私の方を見て、パラリチョンが旨く行つたねと悦ばれたが、イヤ木の打ち方はむづかしいもので、釜は夫から拍子木の打ち方、此のパラリチョンの呼吸で海老藏の『白石噺』の大黑屋總六の「間夫に逢ふのは」で、灰吹を叩くを木の頭「引け過ぎが宜からう」の幕切で褒められた事などを話されましたが、夫等は餘談だから省きますが、默阿彌翁が名優と感じたのは三代目の關三であつたとは（まだ作者に出立の頃で、知己の感が深かつたと云ふ事も有りませうが）意外の事で、此の關三の藝風も何はれ、また、初代柳亭種彥が氣持の能い捌けた役を此優の似顏に作つた其の意氣も察しられるでは有りませんか。英雄能く英雄を知る、關三默翁の爲めに知己たるのみにあらず、默翁また關三の爲め知己と云ふべしです。

默阿彌翁の事ども

關根默庵

（前略）。翌明治十四年五月猿若座に『馬場の大盃』を出し、十月春木座に『幡隨院長兵衞』を脚色し、九月市村座に『關ヶ原軍記』を書かれ、此春の新富座で出された『增補河內山』は極めて評判が好く、日數六十二日間興行し、六月は『夜討曾我』に中幕が『土蜘蛛』、十一月は一番目が『後日加賀騷動』を脚色し、二番目は翁が一世一代白浪物の書き納めといふので『島衞月白浪』を書卸し、十一月の末から十二月へ掛けての興行でしたが、古今稀有の大入で、每日滿場殆ど立錐の餘地がない位な盛況で、此興行には六二連と歌舞伎新報社から引幕一張づつを翁に贈られ、自分は古河默阿彌と改めましたが、蓋し緘默を旨として何事にも口出しをしないといふので默の字を用ひ、若し又出勤するやうな事もあれば、所謂元のもくあみと成るといふ心なのです。此時の摺物は是眞翁の畫で、盤に引汐の模樣、約三百餘枚を配つたと云ふ事で、各座長、俳優若くは常磐津及び淸元の家元等、總て芝居中の人のみで、常には親密の交があつても、演劇に關係のない人へは決して配付しなかつたといふのは、花會などと唱へて摺物を配り、金錢を集める惡弊の多いのを慨いたわけで、五十年間一回もそんな催しはなかつたから、此折もその趣意に基いたものです。

亡父及び三世河竹が事

糸女

父は平生が用心深くて几帳面な事も、改めて私が申さずとも今以て人樣がよくさうおつしやいます從つて家内などもいつもきちんと片付いてゐなくては機嫌が惡うございました。母は裁縫がよく出來ましたから、父の留守と見ると布を取ひろげて積り物などをいたしました。ある時などは運惡く母がまだ取片付けない間に父が戾つたことがありまして、父は非常に機嫌が惡く、いきなりそこにある布を緣側から庭へ投り出した事もあります。『裁縫などしてとつちらかしては困る、いくらでも仕事屋を呼んで來さすからよしてくれろ』と言つた事もありました。

書齋などもきちんと片付いてゐました。机の上に本一冊出てゐず、筆一本曲つておかれてないと言ふ風、物がそこいらに積重ねてあつたり、曲りなりにおいてあつたりするのが大嫌ひでした。書齋はいつも四疊半と定まつてゐましたが床には細物がかかつて、籠には手づから投入れにした花が活つてゐました。芝居の書割の通りにきちんとして、何一つ出てゐないといふやうでした。それ故書齋の掃除は私か妹の島かの引受けで、下婢などの手にかけさせた事はありませんでした。

食事に就いては別に好嫌ひといふものがありませんでしたが、贅澤の骨頂とでも申しませうか、並

通の料理屋のこつてりとした物などはいくらあつても箸をつけませんで、凝つてもさらりとした手料理を好みました。食事の世話は殆ど私が一人で致しましたが、極くの小食でありましたから、まことに工夫甲斐、拵へ甲斐のない程しか喰べませんでした。酒は一滴もいただけませんでしたが、喰物は酒飲のやうな嗜みでありました。菓子や菓物などもさしたる選好みはありませんでしたが、これもこてこてとした重い菓子などは好みませんで、私が職人から教はつて拵へたやうなものが好きでした栗は何より好物でございましたから、栗は或は煮たり或は菓子に拵へたりいろいろにして喰べさせました。

一

三世河竹になつた金作はもと猿若町の入口にあつた澤村屋といふ小間物屋に、小僧をしてゐた人です。作者志願になつて亡父へ手引きをしたのは、藏書家、考證家として名の通つた豐芥子さんでありました。宅へ參つたのは十六歳で、兩親をば其の頃流行つたコロリの爲に一週間許りの間に失ひ、姉の丹精を受けながら內弟子となつたのでございます。それから一年半程は今の書生同樣に働いてゐて、時には子供の守をしたり、使に出かけたりして、其の間々に讀書をしたのです。その頃五人男などと言はれて、百三、彌吉、半七、重三などと共に金作も交つてゐました。

同じ子供を遊ばせるにも他の者はどんどんがたがたと大騷ぎをして相手をしたのに、金作だけは性

來がおとなしい人でして、靜かに遊ばせました。時には部屋の隅の方へ集めて自分が落噺をして聞かせました。(其の頃から金作は頓智がよくて落話や作り話が巧うございました。)やがて見習となつて芝居へ出勤するやうになりましても、ほんの小僧上りの十六七で、帶も長久に結べないので、亡母が向うを向かせておいては締めてやつたと申します。

　父は作者修業の者には、初めに必ず丸本を讀ませたものですが、偖其の讀んだ本の梗概を言はせて見て其の人間を試驗しましても、なか／＼段取よく記えてゐて話せるものは少いものなのですが、金作は丸本を讀んでもちやんと答がついたと申します。かうしていつはしの作者になれる見込みはだんだん明らかになつたに就きまして、又ここに一つお話がございます。それは、金作の十八歳の時でありました。此の頃流行つた扇合せの催に、父がある時その景物を虹に見立てて縮緬を出す事に趣向を定め、緋や鬱金や淺黄の縮緬を集める事になりました。所が他の色のは近所の呉服屋で皆買整へられましたが、淺黄色のだけが濃すぎる爲めにどうしても好いのが目つかりません。そこで金作に見本を持たせて大丸まで買ひに行かせましたが、大丸にもありませんでした。そこで金作は機轉を利かせました。大丸まで來て無いものならば何處を搜したつて有る筈のものではない、然し今日中に整へて行かなければ折角の師匠の趣向は形なしになるであらうと考へましたので、そこいらの呉服屋で地合を調べて白縮緬を入るだけ買つて、(行きにもうちやんと其の心組で見て參つた)石町の紺屋へ來て、こ

れ〳〵で大至急入用なのだから、染めて火で乾せてくれろと頼みました。紺屋でも妙だとは思ひましたが、造作もない事なので直にそめて、かわかせてくれました。一方家では、金作が朝早くに出かけたまゝ晝過ぎになつても歸らないのでどうした事かと案じてをりますと、やがて歸つて來て見本通りの、地なら色合まで寸分違はぬものを出したので、よくこんなのがあつたと言つて問ひただすと、かういふ譯で仕上げを待つてゐたので遲くなりましたと答へました。父も褒めてやりましたが、後に母に向つて「金作は十八だが感心なものだ、あれだけ機轉の利くものならばきつと後來作者としても秀でるに相違ない」と告げましたさうです。果して金作は、父が見抜いた通りあれだけの作者になつたのでございます。

序ですから附加へておきますが、河竹新七の名前は、三世が歿しました時に、未亡人のおとくよりこれは故人金作の生前の遺言でありますが、河竹のお名前返上致したいと申出ましたので、前に仲に立ちました花柳の伯父さん（故壽輔）に屆けた上で受取りました。從つて私もそれ以來、門弟等の依頼もあつたので、吉村糸を河竹糸と名のるやうに致したのでございます。自然亡父が晩年に古河默阿彌と稱しましたのをも河竹默阿彌と呼ぶこととしたのでございます。この事は後日の爲め申添へておきます。

舊師追憶

○

竹柴金松

(前略)……一旦思止つた私は二十歳を越えてから、作者志願再發となつたが、豫て伯母が亡師のお宅へ出入りすると聞いたので、直に志願の中入れを伯母に頼んだ。スルト數日の後、伯母の返事を聞取つた私は、落第とあつて落膽した。

『ナニ、狂言作者になり度、それは了簡違ひだョ、假令讀み書きが出來やうとも、それで成れるものではない。それに弟子も澤山あるし、マアお斷りをする。當人に會つたら、能くさういつておくれ。』

師匠が斯ういはれたといふので、伯母も繼穗がないから困つたとのこと、聞けば師匠といふお方は、徳行寡言で、世にいふ芝居者とは違ふ、それに一旦斯うと口外されたことは、再び變ぜぬといふ性質であると承知して居つたから、まだ拜顔せぬ前から、畏れて居たので、押しての懇願を躊躇したが、さりとてこのままには過されず、ままョ勇氣を鼓して伯母に泣きついた。で、又候厚顔にお願ひしてくれた、ところが今度は斯うであつた。

『この間もいつた通り、劇作といふものは直に出來ず、最初は拍子木を打つことを稽古してから、正本を以て役者に狂言の稽古を敎へるので、却々面倒なことがある。局外から見ると面白可笑しい生業

の樣だが、さうでない、成つてから辛抱が出來ぬより思切つた方が當人の利益だからね。』と體よくお斷りだと、伯母も匙を投げた。デモ私は斷念られなかつたから、自棄氣味半分で矢鱈に安芝居を見て氣を慰めたが、これが尚且煩悶の材料となつて遣る瀬がない。「狂言方といふものは、氣が利いて居る幕開きや幕切れに、カチ〳〵と、拍子木を打つンだが、裝容が好いネ。古唐棧か何かを着流して博多帶を「カンダ（結びを脊筋より左りに寄せて角立てる）に締て、白足袋に草履で、行ッてみたいな。ありやァいはゞ號令だ。さうして初日なぞには、脚本を持ッて役者に敎示へて居るヨ。成駒屋なぞは記憶が惡いと見えていつまでも後背へ附いて居るヨ。河竹がいふのはアレだネ。」

こんな熱に浮されて、どうかして拍子木の稽古でもと思つて、木切れを造へて自家で無暗に打ッたので、近所隣りからお小言を頂戴した、これではならぬと、三河島田圃へ行つて打ッてゐたのを、或る日農夫に見つけられて劍呑みを喰ひ、また巡査に咎められて逃出したこともあるが、その中に自分では熟練した氣で、素人茶番へ手傳にいつたりして木を打つたので、この位に出來れば、この由をまたも伯母へ話してその志願の熱心なところを申入れようと、膽太くも又手を煩はした。

『素人が拍子木ばかり打つたとて、何んの役にも立たないが、それ程熱心なら、直に座へは出せぬが、兎も角も自家へ當人をよこしなさい。』このお言葉を伯母から傳へられたから、天へも登つたやうな心持の私は、伯母と共に即日伺つて、初對面の禮儀やら、再三失禮したお詫やら、宿願の叶つた御

禮を述べた。これが明治十四年の暮であつた。それから師弟のお盃を頂戴して、翌年の春三月から新富座へ出勤を許された。が、それまでは毎日師匠のお宅へ通つて雑用をいたしました。

○　竹柴爲三

私は明治になる少し前から七八年の間も、師匠のお宅に内弟子として御厄介になつてゐました。師匠はお宅においでの時も外におでかけの時も別にもう變らない几帳面な方でしたから、内弟子として始終傍にをりましても、これといつて珍らしいお話の種もありません。新富座へ出るやうになつてからの事でした。師匠はいつも部屋へおいでになると、火鉢を綺麗に掃除なすつて灰の塊などをば一々拾つて明茶碗などへとりました。それから炭取を引寄せ、細い炭を積上げて火をおこして下すつたのを覺えてゐます。或時、谷齋（尾崎紅葉山人の父）といふ、彫刻師で奇人で芝居の方へ出入りしてゐた人が部屋へ來て、平生煎豆の好きな人だつたので、師匠が克銘に拾ひためて隅の方に置いてあつた灰の塊を、手に掴んで口に入れて大笑ひになつたやうな話もあります。

又こんな事もありました。新富座の作者部屋の隣り、頭取座の下は今でも二疊敷程の廣さの空室がありますが、將棊の流行した頃で、作者仲間五六人が師匠の留守を幸にその中へ持込んでさしてゐました。すると師匠が部屋へ來られた。見ると幕の受持の者が一人二人居るばかりなので、今日は大層

無人だと不審がつてゐられる。中にゐる連中はグウの音も出す譯に行かず冷汗をかいて眼ばかり見合せて閉口してゐました。すると師匠の方で感づかれたものか、にゆうツと立つて棧敷の後方へ行つて物の十分か十五分も芝居を見て戻られた。その間にあわてて飛び出したやうな滑稽もあります。

師匠が世話物を書く爲めに、其の時々の實地を研究したことはかくれもない事です。其の爲めに、極くお若い時分、女郎屋へ行き、わざと居殘りになつてゐて調べたり、田町のどぜう屋へ身裝を更へて師匠が上りこんでゐた所へ、先代の音羽屋（五世菊五郎）がこれも研究の爲めに裝を更へて行つてぶツつかり、師匠が『私はかうして來ても分からないが、お前さんは人の目に立つといけないからもうお止しなさい』と異見をしたといふやうな話もきいてゐます。

○

七十四翁　竹柴蝶三事　鷺　伴　翁

河竹の流れの末に遊びしも、數年なれども光陰は矢よりも早く、翁の翁たるにて古き事どもいひ出しては人に邪魔がられ、年はとつてもペンで書く１２３知らざれば、年寄の長居はおそれ花の山と秀鶴氏の發句むべなるかな。されども生延し甲斐には、今度の法莚につらなる事うれしく、功なり名とげず身退かず、今は最早七旬を四つまでこしたるに、昔とつた杵柄ならず舞扇持てば忘れもせず、四五の社中に助けられ、三番叟は舞へども年の悲しさは、烏飛ならず雀歩行きに等し、最早彼の岸に至

り、夫々の知己にあはん事を樂しみ暮すのみ。
生きて居るばかりぞ冬の蟇

○竹柴傳造

師匠が淺草から本所へ移轉なさる前に、一時本所内の番場といふ所へ假越をしてをられたことがありました。たしか其の時分の事と記憶してゐます。私がまだほんの作者になりたてのころ、脚氣の重いのにかかつてどつと床に就いてゐました。すると或る日どなたか見舞に來て下すつたやうでしたが其の時にゐた山出しの下女が取次いで言ふには、何だか田舍の老爺のやうな方で木綿物を着てゐる方だといふので、とんと當が付かないので母が出ましたが、母も師匠の顏を存じないものですから、どなたでとおたづねしますと『吉村新七です』とかと、本名をおつしやつたが、これも分からず、私は寢床の中でそれをきいて『それは大師匠樣に相違ない』と申して御案内しますと、果して默阿彌だつたので大きに恐入りました。わざ〳〵見舞に來て下すつて、手厚いお見舞物まで下すつて、やさしいお言葉をかけて下すつたのがいまだに忘られません。何にしてもあゝいふキチンとした方は先づございません。今に至るまで何處へ行きましても大師匠の批を一點でも打つ人がないんですから。(後略)

○　竹柴金作

私が斯道へ入る導きをして貰つたのは故人假名垣魯文翁でございました。實は私が翁の未亡人のおためとは遠縁の親類仲だつたので幼少から出入りしてゐました。終には新富町七丁目の佛骨庵へ起臥するやうになり、直前の新富座へは毎日のやうに出這入をしたので故人の竹柴彦作さん、今の秀葉さん、其頃の瓢藏さんなどとお馴染になつたので、是非其劇の中の人となり度く魯文に話した所賛成して下さいました。丁度其折（明治二十四年の五月）新富座が『御所模様萩葵葉』の七卿落の狂言の時默阿彌師匠が佛骨庵を訪はれた時、初めてお目にかかりました。其の時のお話は粋狂連の三題噺、津藤さんの豪遊の事、同氏が北廓の失策、梅素玄魚さんなどの故人の噂など數々ありし後、私を引合せ此男は私の遠いい引掛りで狂言作者が志願ですがこんな書生に出來ませうかと洒脱口調でいふと、師匠は至極嚴正な口振で、イヤ好きならきつと出來ませうが、まア辛抱が肝腎ですな、とおつしやつた詞は今に耳の底に殘つてをります。其時モシ出勤するのなら河竹（三世、先代金作）を頼んでおやんなさいとのお指圖でしたので、其後、二十五年の六月、魯文翁の紹介で弟子入の手續きをしまして、其十一月の市村座の興行に作者見習として出勤するに就き、師匠同道で本所のお宅へ改めて伺ひ、市村座の二日目に作者部屋でお目に懸つたきり、翌年一月黄泉へ赴かれましたから私は都合三度しかお

詞をかけて戴けませんでした。が、辛抱が肝腎といふ御教訓は十分に服膺してをりました。

私の師匠（三世河竹新七）がまだ二十四五歳の血氣の頃、若いものには有勝の不平心から江戸ばかりは日が照らぬと上方筋へ志し修業の爲とは口實で、大阪へ行つて作者道の天下でも取る心持で、鼻息荒く無斷旅行と出かけ、先づ志す大阪へ着いて見ると西も東も知らぬ人ばかり、殊に目的にして行つた某の芝居師も、江戸で逢つた時の口前とはまるで相違して、まァまァゐるならゐて見なされ何とかならうといふ體裁、其上土地が違へば自づと作者の仕事も違つて來るので、勝手は分からず、馴れるに連れて取扱も面白くなくなり、何となく故郷がなつかしくなつて來ると矢も楯もたまらない。歸り風が立つて來て、僅か十四五日の滯在で逆戻りとなる始末も江戸つ兒の性來、往き大名の歸り乞食、二分に足らぬ路用を命の綱として中仙道を下つて來る道中も隨分と難儀を重ね、駒込の追分へ來たら、全くの無一物になり、重い足を引ずつて實家へ轉がるやうにして歸り、人を以て前非後悔の趣を申し立て歸參の詫びを入れた所、早速に師匠の傍へ呼ばれ、若氣の血氣を戒められた上、事なく詫は叶ひしが、其時が眞味に沁み、教訓は四十年來忘れた事はないと、襟を正して屢々語られました。

○

竹柴亀三郎

師匠は風が大嫌ひでありました。又風の吹く日には非常に機嫌のお悪いのが例でありました。私はもとの金作さん（卽ち三世河竹）の所にゐた事がありますが、師匠の所へ用事があつて出ようとしても、傍のものが『今日は風が吹くから、きつと師匠の機嫌が悪いからお延ばしなさい』といつて止めるのを何度も聞いた事がありました。

○　竹柴其水

明治二十一二年の頃でした、小金井の櫻時。芝居を打上げたら小金井へ連れて行つてやるとの事で樂しみにしてゐました。前に手筈を定めておいて、朝の九時頃までに淀橋の團子屋へ寄集まる事にしました。

扨其の日になると淺草方面から師匠に金作、繁造等。新富町方面からは彥作に私などが集まりました。几帳面な師匠の事故皆々定刻通りに集まつたが、故人になつた奧役の斧丸定次郎だけが來ない、三十分も過ぎてそろ〳〵師匠が焦れ始めた頃にやつて來て、「寢すぎて……」とか何とか言譯をしました。勢揃ひが出來たので俥をつらねて靑梅街道を小金井指して出かけました。すると晴れてゐた空合がだん〳〵惡くなつて、小金井へ着いた頃には今にも泣出しさうな天氣模樣になつた。何でも早く晝飯を濟まさうといふので、ある家へ上つて誂へました。所が今日と違つてまだ開けない頃の事とて支

度がなかつたと見えて、手間のとれる事〳〵畑へ芋掘りに行つたのかとぶつぶつ言始めた位、やつと出來て來たのがどうかと思ふと、その不味加減といふものがありません、いくらお腹が空いてゐても喰べられないといつた代物、師匠始め顏を見合せて閉口してゐると、やがて斧丸が得意顏に俥の蹴込から取出したのが躍金樓の料理でして『少し位後れてもかういふ用意をして來たのですから』と、今度は大いに效能を述べたてて栗のきんとんだの、白魚の信田卷といつた風のものを取出したので、やうやうほつと息をつきました。一方天氣は益々怪しくなつたので、そこ〳〵に歸りかけ、皆々外へ出る、師匠は勘定を濟まして一番後から出て來ました。するとそこの女中が『忘れないで又來て下さいよ』と言ひながら、人もあらうに師匠の背中を打つたので、皆々門で大笑ひ、師匠はにや〳〵と苦いお顏をしておいででした、――そんな譯で歸途、着いたのが四時頃ででもありませうか、どんより曇つて來たのがぽつり〳〵と降り始め、到頭本降りになつてしまひました。歸りには路をかへて府中から六社樣へ出て、新宿へ出る積りでしたが、雨はますます激しくなるに、そろそろ日暮れ近くはなる。路と來たら兩側の高い桑畑から流れよる水が往來へ溢れて、俥も何も動かない仕末、車夫も難澁だらうといふので下りて歩き始めました。從つて路が一向捗らぬ、兎角する中に、いよ〳〵はつたりと暗くなりました。何處まで行つても路は惡し雨は降るに、灯の用意はなし、駒下駄に洋傘尻端折りといふ出立なのだから考へても見て下さい。師匠はもうこんなにならうとは思ひもかけなかつたので

すから、又もや焦れ込んで、眞先へ立つてすたすた行く、肥つてゐる久保田彦作などは疲れてしまつて歩けないといつて泣面をする、日はとつぷりと暮れてしまふに方角さへも不確なので、行先々で道を聞いたり、空腹を抱へて煮賣屋で駄菓子を頬ばつたりして、やうやくの思ひで新宿へ着いたのが、どうでせう午後の十一時過ぎといふのです。皆へとへとに疲れ切つてしまつて、これから又二三里も俥を走らせる勇氣は出ないので、新宿へ泊らうと一決して、師匠に申上げると、師匠は納まるどころか「泊つて來るならお前さん達勝手に泊つておいでなさい、私は何時になつても歸ります」といふのでとつとと歸られる。師匠が歸るといふのに泊る譯にも行きませんから皆歸りましたが、夜の十二時過に歸宅された事だつたでせう。大困難をしただけにいつまで經つても忘れません。淀橋の團子屋で師匠を失策り、小金井で失策り、新宿で失策つたといふので、まことに面白をかしい散策でありました。

○　竹柴秀葉

(前略)。元來師匠は見榮を飾らず、慈悲善根を積むを以て樂とせられた方だといふ事は、僕等に增給其の他物品を與へられた時でも、密かに蔭へ招き、人の見聞する所では必ず禮など言ひなさんなと注意されたのを見ても分かる。陰德家であつた事も知れる。或る時、人力に乘らうとして門弟が掛あ

つてゐるので、どうしたのだと聞くと、門弟は手柄顔にこれ〳〵に負けさせるのだと答へると師匠が制して、決して車代などは値切りなさんな、萬一落されても苦情は言へず、まして汗水流しての勞働者には目をかけてやるものだと戒しめられたといふ。又師匠の戒しめられた語に、作者は最も罪障の深いものである、狂言を脚色するには筆先一つで人をも殺せば、人をも騙すといふあらゆる罪を造らねばならぬ、それ故昔からどうも作者の末路が好くない、お前達も此の業に就く以上は隨分罪亡しに慈善事業等に盡さねばならぬと言はれた。僕がそれ以來害を及ぼさざる限りは、決して生物の命を取るまいと誓つたのはその故である。

それから師匠にたつた一度ほめられたのは、見習に出てすぐ道具替りの木を打つて、俳優の呼吸と合つたと褒められた事である。今時の見習は作者部屋に入れば直に大作でも書かせて貰へる氣で居るが、なかなか僕等は二三年間は拍子木の稽古だけにも費やしたものであつた。時には向島で盛んに打習つてゐて警官に叱られた事もあつた。僕は一つには成田屋にゐる頃、新十郎氏等と共に毎晩、夜廻りをして拍子木を打つてゐたのが、餘程足しになつてゐたのだらうと思つてゐる。

○

竹柴秀吉

(前略)。興行前一順の出しものが決定して、本讀みも濟み明日からいよいよ稽古にとりかかるとい

ふ時になると、其芝居に屬して居る作者に受持ちの場が決定る。その時私の持ち場が翁の作物であると、なんとなく歡喜を感じて身内の血が湧きあがるやうな氣がする。それから例の如く下調べをする時は肅然と襟を正さないわけには行かぬ。一度讀む所でも二度も三度も繰り返す。これは他の臺本を調べる時のやうに、腑に落ちぬ個所があつたり、文句がぎごちなかつたりして疑問的にするのではない。韻文のやうな華麗な臺詞や、傳奇的であつても、のんびりとして無理のない脚色を、感激的に繰り返すのである。かうなるともう下調べといふことは無くなつて興味的になつてしまふ。作物が人を引き附ける力があるのである。さて私共の經典である翁の臺本を前に据ゑ、稽古をする時には、名狀しがたい力強さを覺える。俳優がよた臺詞でもいはふものなら、遠慮會釋なく突こんで修正する　この時はなんだか故人が臺本から拔け出て私を激勵するやうな氣がする。俳優も他の時のやうに反問もせねば臺詞を修正してくれとも言はぬ。それはその筈である、翁の作物に依つて舞臺ではかく動くべきなりかく言ふべきなりと、傳統的に敎訓せられた俳優であるからである。

○　竹柴七藏

私はもう今では生業を更へたので作者を退いてはをりますが、生涯に一つの恩といふのは默阿彌の恩でございます。門弟の列に加はつたのも、ずつと後の事でありますから、別にこれと申す程のお話

もありませんが、嚴格ではあるが慈愛深いお方だと今以て思つてをります。

私は嘘僞やごまかしの大嫌ひな人間な爲めに、時には作者仲間の中で衝突して休んで病氣してゐた事もありました。その時に師匠から端書が參りまして（今もチャンと保存してありますが）頼みたい事があるからとおつしやつたので伺ひますと、夏の事で暑中伺の手拭を配つてくれろと、俥までも支度して下すつたので、私はいそ／＼と用事をすましてお暇しようとすると、おかみさんが優しい言葉をかけて下すつて頂戴物などしました。そんな風ですから何があつても師匠の爲めに、師匠の爲めにと思つて、勵み忍耐するやうになつたのであります。又ある時などは、師匠が私の稽古した場を棧敷で見ておいでゞして幕の後樂屋へ來られ、物蔭へ呼んで、あれだけの場がお前に出來れば立派なものだ、感心だと言はれて、御心附のものを戴いたやうな事もありました。勉強しないではをられなくなるのでございます。

○　竹柴昇翁

明治十一年の十一月、中村座が都座と申した頃に我童、權十郎一座で以て、重忠が二股川で討死する『義重忠士礎』といふ時代物を師匠が書かれました。其の時の初日に師匠はいつもの通り棧敷へ廻つて見てゐましたが、幕になると直ぐに樂屋へとんで來て頭取臺の所で舞臺から歸つて來る役者

を待つてゐました。どうしたのかと思つてゐますと、やがて榛澤六郎に扮してゐた新十郎さんの通るのを呼びとめて『何です、お前さんの其の扮らへは、そんな赤面にぬりたてて、衣裳だつて私の話しておいたのとは違ふではありませんか』といふのを冒頭にして、改めて役柄と役の性根とを說明しまして、大小言を出された事を覺えてゐます。つまりこの作は活歷で通常の時代物とは違つた作なので、それに合ふやうに師匠が注文しておいたのに、面のこしらへから衣裳、科、萬端がまるで違つてゐたので、小言をおつしやつたのでありませう。めつたに叱るとか小言をおつしやつたことのない師匠ですが、人は皆怖れてゐました。この時ばかりはほんとに師匠が怒つておいでのやうでした。

それから、これは全く別の事ですが、畫工の鳥居さんがよく私に申した事があります。師匠は看板や番附の下繪がよくお出來でしたが、鳥居のいふには、師匠の書いてよこしなすつた看板の下繪は、それをいくついくつの大きさに引延ばせば、其のまま位置や畫面をかへないで使ふ事が出來ると褒めてゐました。當節は看板や番附の畫は皆昔のを引照してこしらへるのですが、昔は立作者が畫かねばならなかつたんですから、大變でした。

○　竹柴晋吉

丁度師匠が亡くなられる前年の事で厶い升た。當時一部好劇家の中に六二連と云ふ一團がありまし

て、私も其中の一人となり其時分の芝居は殆んど缺さず見物して歩きましたがだん〳〵好が高じて來升と遂に自分も斯う云ふ芝居を書いて演らして見たいといふ考へが起り、いつそ狂言作者に成らうと決心をしました。で母親に此の事を打明け升と聞き入れません。聞き入れないからと云つて其まゝ思ひ止る事も出來ず、自分勝手にやる所迄やるからと申し升と、母親は先廻りをして親戚に當る井桁屋の主人を賴んで師匠のお宅へ遣しました。――此井桁屋の主人と云ふのは大層新助贔屓の人で、やはり私達の連中でした――其用向はどんな事か知りませんでしたが、兎角し升と翌日師匠の許からお手紙が參りまして、何時々々に來いと云ふ呼寄狀なのでムい升。

其處で私は考へました。成程親は有難いものだと嬉し喜んで二葉町のお宅へ伺ひ升た。其行く時の心持つたらムいませんでした。いよ〳〵師匠のお書齋へ案内されました。で、其時師匠の拵へを申しませうなら、まづ唐棧の袷に茶獻上の帶、足袋を召さず素足と云ふ粹な姿でムい升た。扨いよ〳〵師匠が口を開いて說かれたお話は何うかと云ふと、意外にも狂言作者に成るのは思ひ止れと云ふ御意見なのでムい升。是には私も驚きましたが、と云つて初對面の師匠に向つて其れでも斯うですからとお言葉は返されません故其日は其まゝ歸つて來升たがさあ家へ歸つて來て母親に不貞腐れをいひ升た。自分の希望が叶はない位なら、是から後は何うとも勝手にするからと甚だしく冠を曲げ升と、流石は女親だけに我が折れたと見えまして、それ程思ひ込んだ物なら改めて師匠へお願ひして見ようと云ふ事

になり、ぐるりと風向が變つて公然入門のお願を致し、たうとう希望が叶ひ再び師匠のお宅を伺ひました時は、もう前の樣などじは踏みません。晴の對面ですから、諸事に心を付て例のお書齋へ通されました。其時床には確か交山とか云ふ人の文句は忘れましたが書の幅が掛つて、其前に白木の三寶へ師範狀が供へてあり升た。そこで吉例通りお料理が出て、師弟の盃事を致しました。其れから僅か五十日餘りで師匠に亡くなられましたので、師弟關係の短かつたのは誠に遺憾に思ひ升。

○　竹柴清吉

明治十八年頃、三月。猿若町市村座へ堀越寺島が出勤の時、中幕に新古演劇十種の内の『一つ家』を師匠が書きました。五代目の老婆茨、娘が今の梅幸が榮三郎時代、松之助が兒形で後觀音になる役五代目も十種の物が殖ゑたと大悦び、そこで五代目が名題の『一つ家』といふに迷ひ初め、贔屓連の竺仙老人や其他二三名に話をすると『一つ家』といふより『石の枕』とした方が字のすわりがよいといふ事になり、是を師匠に『石の枕』としてはいけませんかといふ使にわたくしが參りますと、師匠納まらぬ顏付にて『石の枕』は一中節の名題でお名まで用ひたやうで新規にならず、まして十種の内にするのだからいろ〳〵考へた上で附けたのだ、以來作者の方で附けた名題をなほす事御無用と、よく寺島にさう言へと大怒り、わたくしははふはふの體で立歸り右の話をしますと、そりや惡かつた、

噺師匠が怒つたらう、あした詫に行くと言つて、其の夜は五代目も心配の體でした。當今は作者の方で附けた名題が、主任者に納まらず直す事の方が多し。

また、私が寺島附の頃の事、五代目は新狂言は勿論、時代物でも、渡海屋の相模五郎の引込だの、扇屋の姉輪の這入なぞに當込みのせりふを言ひたいと師匠に賴む。尙遊び事にも餅番だとか酒番だとか手拭合せ、聯合せ、口上茶番、遊食會など、總て趣向の物には、かならず師匠に趣向を拵へて貰ひました。

明治十七年六月の興行、千歳座にて加賀騷動、中幕布引、大切七人男七人女の時、寺島氏の役大月傳藏、實盛、男達といふ、此の興行の中頃に胃積病にかかり、五六日病氣して再勤する。千秋樂の後百日程看護婦を附け自宅にて養生する。毎日土藏より古物類を出して見てをりました。ここへ別懇の三遊亭圓朝氏が見舞に來て話の中五代目に向ひ、君に見せたい物がある、僕の內に應擧だの探幽だのの畫いた幽靈の軸が百幅ばかりあるといふゝと、直に見たくなり翌日圓朝氏宅より右の軸を送り屆けられると、早速病室へ一幅づつ毎日掛けては眺めてゐました。其の中全快して秋興行より芝居へ出勤するやうになつたが返却するのが後れて、到頭其年の十二月も十八日頃になつて急に返す事になつたが、扱餘り後れて只菓子折位を附けて返すのも智慧がないといふので、默阿彌さんに賴んで言譯の書面を添へ、何ぞ趣向の品をやりたいから考へて下さいといふので、暮の忙しいのにわたくしが二葉町

へ使に行きました、すると、師匠が明日取りに來いと言はれるので、翌日になつて伺ひますと書面の下書を渡し大晦日に返せとおつしやつた。其の手紙の文言はこんな風でした。

拜啓此間は御所藏の數幅の幽靈、長々と拜借難有存候。遠寺のかねて音に聞きし諸名家の筆何れも凄き出來にて、ぞつとする物多く、幽靈家の我等さへ後ろ見らるゝ心地して障子へあつる風の音もどろ〳〵のやうに聞え、火入の香の煙りすぎ、掛焔硝かと思ふ程幽靈に感じ入り候。扨今年も今日限り明日を廿三年と戸板返しの大晦日、暮れなば提灯掛取も來るべし、先づ拜借物の幽靈は御返上いたし候。御禮になまぐさき風の魚類と存じ候へ共、遠路故おんぼう堀の流山せうちうにかへ古味淋呈上いたし候。扨一年は夢の暮、又來陽日出度拜顏可致候。早々可祝

藥に飽きし　小平の梅幸

四つ谷に近き　圓朝雅兄

といふのでした。寺島も大きに悦び「難有え難有え」と言ひながら師匠からの差圖通りにしました。『四谷に近き』と宛名の上へ四谷怪談にかけて書いたのは、此の頃圓朝さんが、内藤新宿裏町といふ閑靜な所に住つてゐたからです。

俳優の思出

○

中村歌右衞門

默阿彌さんとは年も違ひますから、つひさう面と向つてお話しをした事もありませんでした。尤もわたくしが名題披露の時に內へ來てくれましたが、まことに氣さくな好いお爺さんだと思ひました。あの松島千太の狂言を脚色れた時、わたくしに福島屋淸兵衞の娘といふ役を書いてくれたのです。それは內へ泥坊が這入つたので零落し、その娘が明石の島藏が出してゐる店へ醬油を買ひに行くのですが、大家に育つた娘といふので氣まりが惡く、德利を前掛の下へ隱して、店先を行つたり來たりした擧句に思ひ切つて『おしたぢを一合』と云つて買ふのです。それを當時市中の藝者衆が『おしたぢ一合』と云ふ白の眞似をしたもので、中村福助の賣出しは、この『おしたぢ一合』の買出しにあつたのですから、默阿彌さんのたまものと云つても好い位なものです。

それから菊五郎、左團次に書卸した女書生妻木繁の狂言で、繁が男と女の口調を分けて云はせる白の書き方なぞは、實に旨いものだと思ひました。

それに默阿彌さんが外題の附け方の旨いには感服の外はないので、あの『木間星箱根鹿笛』なんぞは、どうしても物凄く聞えるではありませんか。外題でも一寸お客は引き付けられますからね。

どつちかと云へばあの人は時代物より世話物作者で白浪物が旨かつたし、つらねや掛調などは得意のやうに思はれます。

本讀は聞いた事はありますが、その本讀が上手で、その上手と云ふのは、本讀をしながら、それぞれの役者の顔を見てゐて、これはあの人に氣に入らないと思ふと、卽座に役を好くして聞かせると云ふ事なのでした。

〇　片岡仁左衛門

たしか猿若町の市村座でしたか、有馬の猫騷動のお仲と殿樣を身分に合はないわたくしに默阿彌さんが書いてくれましたが、一座は我童と半四郞なんかでした。

其時わたくしのお仲が猫の狂ひで最初に怪我をして大千住の名倉へ通ひますと、每日一座の下廻に途中で逢ふのです。これが矢張名倉へ通ふのぢやありませんか。それをどう云ふわけかと云ふと、火消と小野川との立廻りを當時立師の上手と云はれた彥三郞の弟子であつた坂東つきぢが付けたもので力立の舊弊な面白いものであつたのです。それで每日一人二人は怪我をしない事はなく、千秋樂までには大抵怪我をして名倉通ひであつたのです。

誰も知つてはゐますが、故人左團次が豪くなつたのは默阿彌さんのお蔭でしたし、兎に角親切な優

しいお人で、異見をされた事もありました。

さうしてあの人の本讀を聞いたら、誰でも役をぐづ〲言へないのでした。

市村羽左衛門

わたしが十七八の時分、本所の壽座で亡くなつた團藏さんが盛綱で、わたしが御注進に出ました、其時默阿彌さんに將棊盡しの文句を拵へて貰つた事がありましたが、ちよつと今は思ひ出せません。

小さい時分には今の梅幸と寺島へ養子に這入つて後に出た榮次郎と三人で、まだ默阿彌が馬道にゐた時分よく遊びに行つたもので、あの花川戸の東橋亭へ竹澤藤次や養老瀧五郎の手品などが掛かつた時は、默阿彌の內へ宿り掛で見に行つた事を覺えてゐます。

澤村源之助

わたしがまだ淸十郎時分でした。新富座で默阿彌さんが『日本晴伊賀報讐』の狂言を書卸された時一座の端くれにゐたわたしに、あの備前町夢の市藏の內へ出る子守のお民をあとで書いて下すつたのです。

あの役は只臺所で赤ん坊を脊負つて、子分達の話を立聞きしてゐるのですが、ほんやりとしてゐる

わけにも行かないと思つて、其時分子守が好く遣る『錢車』と云つて綿を付けて廻して糸にしては段々と卷いて、心金の打毬になる。あれを遣つてゐたらどうか、あれを遣ればいづれ見物が目を付ける、さうして若しみんなの障りになつてはとも思ひ、默阿彌さんに伺うでせうと相談を掛けましたら、それは好い思付きだ、好いでせうと許を得て遣つた事がありました。

○

市川左團次

わたくしが默阿彌さんに初めてお逢ひしたのは私が十二の折確か明治二十三年頃だつたかと思ひます。實は其れもはつきり覺えて居ると云ふのでは無く印象も朧げで寫眞でも見ればどうかかうか面影が思ひ出されて來ると言ふ程度の記憶に留まつてゐるのです。それに用事でも出來た場合、父はいつも自身に本所のお宅へ出向いて行くのが常で、從つて宅へお出でになるのが稀であつた爲め自然お目に懸る機會が少なかつたのです。それに生前父が私達によく申しますには、未熟な自分が兎に角にも世間樣から團菊左と呼ばれるやうになつたのは、默阿彌さんと一つには養母のお蔭であるから、自分の死後と雖も決して本所の師匠のお宅に對して無沙汰やお交際を缺くやうな事があつてはならぬからと殆んど口癖のやうに私達に申して居りましたので、默阿彌さんを非常に德として居りましたから用事が出來れば必ず自らお伺ひして用を達してくるので、從つて私がお逢ひ申す機會が少かつたので

す。

○

木村錦之助

私のまだ幼年時代に、九代目と先代の左團次が、新富座で『高野長英』『伊勢三郎』『紅葉狩』などを出した時分に、一體誰が恁んな狂言を書くのだらうかと云ふやうな、懷疑心やら好奇心やらで其當時私の宅が裏木戸に近かつた所から、能く彼の狂言部屋を裏木戸の窓の外から覗いた事もありましたし、或は小さな胸を躍らしながら、態々奈落から用ありさうに昇つて行つて部屋の中を見ますと、丁度眞向に坐つて居たのが師匠だと敎へられた時には、一種の敬虔と恐怖の念に襲はれて薄暗い舞臺裏へ這入つては泣きも入りたいやうな心地に成つた事もありました。

それに亡父が先代(左團次)との關係上能く本所のお宅へ出這入りして居りましたが、何時の事だつたか一度、私も亡父に伴はれて御伺ひした事がありました。それが私の常々憧憬して居た、狂言作者の權威者とも云ふべき、故人との最初の會見でもあり、又最後の對面でもあつたのでありました。其時は只チヨコナンと父の傍に坐り、兩人の對話を物珍らしさうに聽き惚れながら、時折嚴々しい老人の顏を見ては、何だか日頃の望みを達したやうな喜びに震へて居ましたが、亡父が私の方を顧みながら『此子は役者の悴に不似合な讀書が好きで困りました』と笑ひながら翁に物語りましたが、其實、

役者の子に不似合なのを衷心から滿足して居たのぢやなかつたらうかと、後日に成つて亡父の其時の言葉の意味を種々に解釋した事もありました。翁は亡父の言葉を凝と聽きながら、傍の本箱から半紙十帖許りを出して來て、『そりや結構だ。之を遣るから一生懸命に勉强しなさい。』と手づから私に下さいましたが、私も狂言作者といふものに憧憬して居た時でもあり、あの時に渡りに船で御弟子に成つて居たならば、今頃は何處かの作者部屋にごろ〳〵して居るのかも知れません。

其後も翁と亡父との交際は永く續きましたので、翁より送られた手紙などが大分ありますが、中には軸にして大切に保存してあるのも御座います。數ある手紙の中で亡父の名を襃めたものがありました。それは木村才助の才助を、今日で申さうなら姓名判斷ですね、即ち才は才智の才で、助は才を助くるといふ意味に解する事が出來るといふ文意であつたやうに思ひますが。何しろ其當時立作者の一人から斯樣な手紙を貰ふと云ふのは、決して輕々しく見逃す事の出來ぬ異例であるし、又如何に其の交誼が深厚であつたかといふ事も證據立てられるので御座います。

翁遺物として山城河岸の津藤香以の持つて居た手箱を貰ひましたが、其手箱は翁が平素正本箱に使つて居たやうに思はれるのです。何故と申せば能く津藤の前で本讀みをしたといふ事實も聞いて居りますので、其の手箱を前にして華麗なる時代の幻影を浮べますと、今紀文とも謳はれた御大盡と、隆名一世を風靡した、狂言作者とを主客にした、彼の色街の豪奢の體などが翁の一番目物と連鎖されて、

箱の中から繪卷物のやうに現はれて來るのでございます。

金魚屋の叉手

十四代目　長谷川勘兵衛

私と默阿彌とは、長い間一つ劇場で毎日顏を合せては居ましたが、向うは作者、此方は大道具と、稼業がガラリ變るから、是れと云つて噺すやうな逸話もありません。マア、私の知つて居る所では、沈着いた眞面目な人とでも云ひませうか、それで江戸兒だけに俠氣もあり、人を使ふのに小言を云ふよりは煽動て使ふと云ふ悧巧な遣口でした。

昨今、私の住居は今戸にありましたが、幼稚の時から中年までは、向側の河岸つきに住居をして居まして、此處の離れ座敷から、御約束の春先なぞは川越しに向島の櫻花を眺め、夏は川風の涼しく、四季の景物に事を缺かないので、酷く此の離れがよくて時折書家の文晁さんなぞも見えたさうでした。常浚ひに作者狂言方の人達が此の座敷で、新作物に書抜きの淨書に、始終入込んで居ましたから、此の時代には默阿彌も來られた事はあります。思ひ出したらお噺もありませうが、差當つては思ひ出せません。

晩年には淺草から本所の南二葉町に引移つて、退隱祝ひの披露目をした後は、住居の默阿彌が書齋

としてあつた、奥の離室に終日引籠つて、世間から遠去て居るやうに見えましたが、それで居て私達なぞより世間の事に詳しかつたのでした。

新富座で上野の戰爭の書下しの時、先代菊五郎が例の凝り性から大詰に天野八郎が捕物になる金魚屋の場の大道具と小道具を少し調べたいから棟梁一緒に行つてくれと頼まれまして、菊五郎と同伴で先に默阿彌の住居を訪ねますと座敷へ請じ、默阿彌は一葉の紙を手にして、嚴と型の通り寒暖などの挨拶のあと、菊五郎が金魚屋に就いての咄を初めますと、默阿彌は皆まで聞かず、笑顔をしながら、私等二人を迎へた時に持つて來た一葉の紙を開きますと、それは金魚屋が孑孑を採りに出る時の扮裝を詳しく描いた書で、その人物が持つて居る竹の叉手までが綿密に誌してあるので、今更のやうに、默阿彌の博聞强記とやらに感服した事がありました。

默阿彌は菊五郎に對つて、お手紙であつたから二三日内には見えるだらうと思つて、今朝これを描いておいてよかつた、と金魚屋の事に就いて種々な咄が二人の間に取交された末ゑ、是れから、割下水へ行つて金魚屋の實地檢分をしようと、菊五郎が私に云ふのを聞いた默阿彌は、金魚屋も近所の道具になりさうな家を選つて頼んでおいたからと、お弟子の案内で近くの金魚屋へ連れられ、細に見物さして貰つたので、大變に得る處がありました。

默阿彌は道具帳を書くのが旨いものでした。只道具帳とのみ云つたのでは、素人衆には解りますま

いが、芝居の開場前に狂言が決りますと、一日中の狂言の大道具の下書のやうな物を、場割の數だけ一場毎に一枚の石州へ狂言方が書いて、大道具の手に渡ります。大道具は之を土臺にして大道具の屋臺物、書割なぞを拵へるのですが、默阿彌の引いた道具帳は、石州一枚の巾が舞臺の間口一パイに嵌りまして、上下の見切り屋體の巾まで舞臺の寸法に叶つて居ますから、直に使ふ事が出來るのです。之を思ふと、死後までも持囃される人の心懸けはまた違つたものと見えて、一枚の道具帳のうへにすら、日頃の綿密な整然とした氣質が自然天然と現れて直に使へるのですが、性質ばかりではなく、默阿彌は、新富座にしろ、市村座にしろ、中村座にしろ、三座の舞臺は間口から、幕吊り、糶の穴、廻しの間數なぞを、平素沈默のあひだに、ズーと細い注意が行き屆いて居て、舞臺の上は何事も鵜呑にして居たのでせう。最前に噺した才りの又手と同じ格なのですから、實に豪いものです。

默阿彌翁の肖像畫

田村成義

早いもんですねえ。默阿彌さんもお亡くなりになつて、もう二十三年になられます。なんだかそんなに月日の立つたやうには思はれません。尤も其筈です。わたくしが遣つてをります爲事に就いては默阿彌さんの物を選んだり、又これを讀んだりして、始終頭を離れませんから、さう思はれるわけな

んでせう。

それに就いて何か話をしろと云ふ事ですが、既に明治三十九年中の「歌舞伎」第七十四號（三十七頁）第七十六號（四十七頁）第七十七號（百十一頁）第七十八號（二十六頁）の『無線電話』に室田武里の名で聞き得た事を出して置きましたから、今更取り立てゝお話をする事もございませんが、默阿彌さんは芝居道の人としては、實に得難いお人であつたのです。第一人間が正直で、その正直も成りたけ人の目に立たない所に正直があつて、又一切相手方に尤を附けるお人で、さうして金錢上の慾に薄く又門弟を勞り、始終芝居の爲めになる事のみを心掛け、また新聞も何もない時分には、姿を窶して諸方へ入り込んだり驅廻つたりして、日々の出來事を見て、それを狂言の筋に入れるやうに心掛け、さうしてその役者の長所短所を見て脚色をし、いつも看客を面白がらせて、芝居には利益を得させた事は數限りないやうに思はれます。こんなわけで守田勘彌が豪くなつたのも、團十郎、菊五郎、左團次が豪くなつたのも、その半面は默阿彌翁の力で、心掛けなり才筆なり實に得易からぬ作者だと思はれます。それなればこそ作者で度々引幕を貰つたやうな事があつたのでせう。今の俳優がお客に無心を云つて引幕を貰つたり、月々に掛錢を賴んで緞帳を拵へるなぞとは、天地霄壤の差があります。

且又生前同翁が引き立てを受けた先々代河原崎權之助の事及び七代目團十郎、先代小團次等の美談をよく引話にして門弟は申すに及ばず、諸俳優に對し薫陶を爲したるは如何にも奥床しくてまるで

淘宮の先生とでも云ひたいやうです。其癖餘り學問をなすつたお方ではないさうですから、實に不思議に出來たお方だと思はれるのです、

ちよつと、お話をいたしますが、先年同翁が七十七の祝をなすつた時、久々でわたくしの宅（銀座三丁目の横町）へ來られて種々のお話のあつた中、わたくしの方から『近頃素人で狂言を書く方が幾らも出來て來ましたが、その出來たものが割合に面白くないやうに思はれます、これはわたくしに分からないのかも知れません、お師匠さんはどうお思になります』と聞きました。するとわたくしに對し『あなたはどうお思ひです』と問ひ返されましたから、そこでわたくしが『學問は兎も角、昔の作者は物知りが面白いやうに嘘を書いたので、今のは本を讀んでゐても世間の分からない人が、努めて本當を書くのだから面白くないのぢやありませんか』と云ひました。すると默阿彌さんが『そこが馴れでせう、手紙の書ける方なら、どなたにでも狂言は書けませうが、併し舞臺が明るくなくては面白いものは出來ますまい』と言つて口を結んで笑つてゐられたのが、今でも目に殘つてゐるやうです。

もう一つお話をすれば、默阿彌さんのお内に同翁の畫像がある筈です。これはわたくしの知つてゐる畫工に芝永章といふものがありまして（中橋狩野永徳の門人）其男にわたくしは家内の祖母の畫像をかいて貰ふやう頼みました。すると畫工のいふのには『すぐ見てかくよりか寫眞を引き延ばしてかいた方が好いでせう、なぜならば、これは筆より好く似てゐるといふのが目的なのですから』と云ひ

ました。そこでわたくしも其意に任してかいて貰ひましたところが、本物と間違へる位に好く出來ました。

すると或日これは五代目菊五郎が見まして『わたしが今日までの役者にして貰つたのは、先代の小團次と默阿彌さんであつたのです。惜しいかな小團次さんの寫眞は無いから爲方がないが、幸ひ默阿彌さんのがあるから、これを是非二通り、この畫工に書いて貰つて一通を默阿彌さんの所へ一通を自分の內へ取つて置きたい』と云つて書かせましたが、これも非常に好く出來ましたから、多分寺島から同家へ送つた事と思つてゐます。

思ひ出草

尾寅事　服部長兵衛

默阿彌さんとは、私の亡りました父が至つて御心安く致した關係上、私もよくお目にもかかり、親しく御話も承はりました。

宅と默阿彌さんとの間のことと申しても、急にあれこれとお話も湧いて來ませんが、世間に知れてゐる事では、先づ九代目團十郎の改名に就いての事でせう。あの時には前に芝翫附のオクリで後に團十郎のオクリになつた政八の宅が淺草の象潟にありましたが、そこへ默阿彌さんと亡父とその頃の權

之助とが集まつて、改名に就ての相談を遂げたのです、そして芝居道から苦情が出たらば默阿彌さん（其の頃は河竹新七さん）が引受ける、新場や川通り組合からの苦情や、借財の方をば一切亡父が引受ける事に決まつて、始めて九代目團十郎を襲名する事となつたのです。借財といふのは、其の頃は名前に附累いて來る借財がよくあつたからです。

もう一つのお話は先代芝翫のおかみさんの事です。御存じの方もありませうが、あのおかみさんはおみちと言つて吉原の茶屋五兵衛尾張（尾張屋五兵衛）の娘でした。これが芝翫と一緒になる事となりましたが、何分にも其のころの芝翫の人氣といつたら飛ぶ鳥も落ちるやうな素晴しい人氣、若し今夫婦になつたと弘まつては、人氣にさはるから三年間待て、三年經つたら夫婦にするといふ約束をさせ念の爲めに兩方から約定の書附を取つて、それを亡父が預かつてゐました。が、其の間に五兵衛尾張の女將（卽芝翫の妻女）に不屆があつたので絶交同樣になつて途切れてゐました。年經て母が歿したので芝翫は詫に來たのです。そこで亡父は河竹さんを仲に立てて其れを許し、前に兩方から入れてあつた書附をば河竹さんの手を經て返し、もと通り出入をさせる事にしました。

全集を出版したい

青々園

私の大伯父が死んだ時、東京へ遊學して居た其の子――と言つても私よりは十以上の年長者が――『歌舞伎新報』を持つて歸りました。其れは十號だけ一とぢになつて居ましたのを見せて貰つて、面白いと言つたら土産に殘してくれました。其れが『歌舞伎新報』といふものの在る事を知つた最初で、さうして芝居の筋書といふものを讀んだ最初でした。確か團十郎、宗十郎が新富座でした『夜討曾我』と、高助の一座でした『關原東西軍記』が載つて居ました。私は其れを非常の興味を持つて讀みましたが、右の十號しかないので其れきりに打絶えて居ました。

後に中學校へ入つてから、矢張私の遠緣に當る友達が芝居好きで『歌舞伎新報』を購讀して居たので、久しぶりに其れを讀む事が出來ました。それは百號以上續いて居たと覺えて居ます。

其うした事情で默阿彌翁の作は飛び〳〵筋書で知つて居ましたが、其の作者の名が私の頭へ始めて響いたは坪内博士が『讀賣新聞』へ『鼠小僧』の脚本を載せて、其の首めに默阿彌翁を世間に紹介する文を御書きになつた時からでした。其れから私が今從事して居る『都新聞』の附錄や六二連の評記や『歌舞伎新報』やで筋書を讀むうちに、春陽堂から『狂言百種』が發行せられたので、始めて脚本の全體を知る事が出來ました。

其のうち私が高等學校の學生である傍ら『二六新報』へ劇評を書く事となつたのが明治二十六年の冬でした。默阿彌翁は其の年に物故せられたので、私が文筆を執るやうになつたと丁度一足違ひだつ

たのです。

でも、翁の作品や其の傳記や逸事については此の後も絶えず注意を拂つて居ました。故老の四方梅彥、坂野積善、條野採菊、西田菫坡、落合芳幾、そんな故老から翁の事を澤山聞かされました。津藤が大勢をつれて豪遊する時、いつでも紙入を預かるのは默阿彌翁であつた事、そんな仲間に入りながら決して不品行でなかつた事、江戸に生れながら山の手は不案内なので、今後の狂言には山の手の場を出すからとて山の手見物に出られた事、『紅葉狩』を團十郎に書下した時、團十郎が本讀みを聞いて居るうち、舞の間が短いといふと、紙入から續足しの文句を出して、自分もさう思つたが堀越は舞の長いのを嫌ふからワザと短かくして置いたと言つた事、其んな逸事を此等の故老から聞きましたが、多分繁俊君の著はされた傳記に詳く載せてありませうから省きます。

默阿彌翁の作を讀んだり、見たりする毎に、思出すは團十郎菊五郎の晩年の振はなかつた事です。團菊の振はなかつた主な原因は此の人が死んでから好い脚本家が無かつた事です。『芳哉義士譽』や『山中平九郎』や『護持院原仇討』のやうな脚本では、團菊といへども所詮その伎倆を示す事が出來なかつたのです。さう思ふと同時に故菊五郎の演じた『鼠小僧』(晩年なのでない)や『直侍』や『雪駄直しの長五郎』やがあり〳〵と眼の前に浮んで來ます。

近頃になつて、默阿彌翁の作が若い役者や若い文士たちにも悦ばれるやうな傾向のあるのは當然の

事です。さうして傳記の出版につゞいて其の全集とか傑作集とかいふやうなものが公けにせられたら劇文學の爲めは非常な幸福だと思ひます。

第十七　日記

繪入日記(甲州記)――雜記體日記――最晩年の日記。

(嘗て雜誌『新演藝』へ再度にわたつて默阿彌の日記を揭げ、「早稻田文學」誌上へは「最晩年の日記」を載せたことがある。此の章は即ちそれで、その時に附した說明もそのまゝに置き、單に字句を訂したのみで採錄した。各誌編輯者が轉載を快諾されたのを謝します)。

繪入日記 (甲州記)

一

日記といふものは、種々な意味から見て趣味のあるものです。馬琴の日記や、俳諧寺一茶の日記は世上に汎く知れわたつた日記の秀逸なるものとの定評があり、また是れ等と對して、芝居の方面では初代仲藏の『秀鶴日記』だの、三代目仲藏の『手前味噌』の如きは、立派なまた有益な歷史的記錄として、價値を認むべきものであります。

ここに『綸入日記』と私が名づけた默阿彌の日記は、それほどに纒つたものではなく、斷片的ではありますが、さま〴〵な點から記念すべく、また面白いものだと思ひますから、摘錄しようと思ひ立ちました。

私は屢人から、次のやうに訊ねられたことがありました。『默阿彌といふ人は、几帳面な克銘な人であつたから、綿密な日記が遺されてはなかつたか』と。實は、私も、必ずや精細な日記を書くべき人であると信じてゐましたが、現存されてゐるものは二通りだけに過ぎません。而してそれが全部であつたらうと想つてゐます。

その一つは、天保六年の六月に、甲州へ行つた時の日記で、他の一つは極く晩年、死ぬ前年の冬、卽ち明治廿五年の十月から十二月末までの日記であります。あまりにその間が懸け離れてゐるやうですが、その間隙を充す爲めには、『意覺』(こゝろおぼえ?)又は『雜記』と題して小形の帳面へ、ちよい〳〵した時折の要事を日附にして心覺えの爲めに記したものが何冊かある。けれどもこれは嚴密な意味の日記ではありません。何故晩年へ來てぽつりと二三ヶ月精密な日記が遺されたかは判然しませんが、長女なる糸女の話によると、中年以後は、其の家庭向きに起つた出來事、――例へば、訪客の出入、人名、家人の訪問先きや大體の用件、贈答品の覺え等の日記は妻女に一任し、後には糸女の役目であつたといふ。おそらくは糸女が病氣か何かで附けられなかつたので、默阿彌が代りをしたも

のではなからうかと思ひます。

此の二つの中の前者、即ち青年期に於ける甲州記といふ日記は、晩年の家庭日記風とは異つた、別趣の、印象的興味を以て書かれた旅行記だとも言へませう。殊にその説明を補ふ爲めに寫生畫を挿んであるのが、吾等の興味を惹く所以なのです。これを繪入日記など勝手に呼んだのは、猩々曉齋などの繪日記とは少し趣が違つてるからです。

分量から言へば、普通の半紙を横に二つに折つて、またそれを縱に二つ折りにしたお粗末なものへ細字で認めた八枚ばかりのものに過ぎません。表紙には『天保六未六月』、『甲州記』としてあります。

天保六年といふと、默阿彌が廿歳の時で、その前年の暮に、五世鶴屋（孫太郎）南北の弟子となつたのですから、狂言作者となつた第二年目に當ります。その六月に三世（梅壽）菊五郎の實子なる、三代目尾上松助の一座に加はつて甲府の龜屋座といふところへ行つた時の、往復の懷日記なのです。

因みに、默阿彌が旅芝居へ附いて行つたのは、此の見習時代の此の時だけ、たつた一度限りで死に到るまで嘗て其の後地方へ出たことはありませんでした。甲府の龜屋座といへば、地方の劇場としては、其の當時可成名の聞えた座であつたといふ。

私は、左に、その全文を讀み易くする爲に、句讀を附し、括弧をして寫生畫の說明やら日記文の解說やらを添へて、他はありのままに寫し取つて見ませう。

二

甲州記

十九日。丑。宵より小雨降り、一日降るも七つ過ぎより天氣、四つ半（十一時）頃出立。

◎濱町よりごじゆいんが原（護持院ヶ原）、番町通り市ヶ谷御門を出で、四谷裏通り成子より鍋屋横町へ拔け、堀の内（御祖師樣）へ參詣す。中食、しがらき、堀の内千部にて參詣おびたゞし。（濱町には師匠孫太郎南北の住居があつたから、そこに皆なが勢揃ひして出かけたものと見えます。）

◎妙法寺表門より向うへ入り、水車を右に見て廣き道を辿る、多摩郡和田村なり。

◎武州一の宮、大宮八幡へ參詣す。別當、大宮院、別當の家、大門前より半町程前にあり。門傾き家くづれて、殊のほか大破に及べり。二の鳥居、一の鳥居、三の鳥居は石にてくづれ、柱一本殘れり。笠木も脇にくづれてあり、惣門紅殼塗りの塀、惣門まで一の鳥居より一丁半ほど。兩側は杉林、木の間につゝじ、丈六七尺程の木あり。門を入り右の方神樂堂、左の方鐘樓堂。本社は賴朝公建立の由。

彫物さいしきにて、笹龍膽の紋付、拜殿の内正面に額有り。(額の見取圖があつて)、額丈二尺五寸ほど巾一尺八寸ほど、縁黑塗り、眞鍮金具、地は金地、繪は枯木に白斑の鷹。慶安三暦七月十五日とあり本社拜殿とも苔むしたる態神さびて凄し。

◎此のけいだいに近道あり。

◎門前杉田新田より八幡のけいだいに附五丁程行き、三ツまたあり、左の方へ附いて行く、右の方に地藏尊(地藏堂の繪あり)此の臺石に、右大宮杉田新田、左り府中道と記し有り。

此の脇に髮結床あり、其の向う細き道へ入る、壹筋道をまつすぐに行けば杉林あり。左側にせうゆ庄左衛門といふ大盡あり。門構へに垣根あり、三丁程内に油をしめる音聞えたり。此の大盡の垣根に附き廻り、左へおりる小道あり。壹丁半程行く、傍示杭有り。右萩久保、觀音、左大宮道と記しあり。尤も高井戸よりの道しるべ。それより三町程行く、上高井戸升屋といふ蕎麥などいろ〳〵を商ふ家の傍へ出る。府中まで三里九丁。

◎烏山にて休む、此の茶屋にて泊り屋を聞きしに、府中まで三里半あるといふ。近くの泊りは布田に龜勇といふが有りと教へければそれへ赴きぬ。左側に庭のよき立場あり、二三丁先に水車あり。

◎金子。立場にて中食す。こゝにて泊りを聞きしに國領に橋本といふ家を教ふ。

◎國領。橋本を聞きしが立場にて泊りはせぬといふ。其の家の向うに鶴屋五郎左衛門といふ泊り屋

あり、此は橋本の本店の由なれど、さむしき家なれば布田へ行かんと急ぎぬ。
◎下布田。左側、龜屋繁右衛門泊り、七ツ時。鶴屋を止して龜屋へ泊りしもをかし。
廿日。寅、一日天氣、晝時より曇る。
◎龜屋の先に御朱印地あり、日蓮宗にて蓮愛寺領といふ。
◎上布田。下石原。上石原。府中、日野まで二里九丁。女郎屋四軒有り。
◎六社明神へ參詣す。惣門の額に日本七福神の圖あり。猿太彦大神、いつくしま大明神、いなにし大明神、あわしま大明神、三輪大明神、惠比壽大神、鹿島大明神。
◎府中より二丁程先に左側に水車有り。
◎谷保村。米の粉の燒餅あり、あんに砂糖なし。左の方に天滿宮あり。
◎芝崎村。立場有り。名物は鮎のすし、あべ川餅。
◎日野の入口、坂をおゝ左へ曲り流の板橋二ツ渡る。此の邊一面の河原砂利場にて日野原といふ、砂利の間に小草あり。
◎立川。武の玉川の川上なり。舟渡し壹人前十文。舟を渡り番小屋にて渡し錢を五文と思ひ三人前十五文渡せしに、番小屋の親仁三人前とは何の事、壹人前十文づゝ、なんで三人前だと咎めければ、孫太郎一人前なり、今跡より二人前出ると言ひて行きぬ。我等跡より錢を出し、いくらやらんと言ひ

しに、親仁二十文にてつりやらんといふ。我れ師の出せし十五文に錢をたし二十文にして出せしに、親仁腹を立て、分からぬ奴かな跡へ歸れといふ。我れ了簡ちがひの趣を言ひ、二十文出してつりを取り、あやまりて行く。あたりまへの渡し錢を出してあやまるもをかし。

（これで此の一行に師の孫太郎南北の加はつてゐた事が分かる。渡し錢の事で親仁との掛合など面白い。日野から立川を見た繪が入つてゐる）

◎日野。八王子へ一里二十七丁。宿はづれより兩側畠にて、一間程の砂利場の道、どこまでもまつすぐに走る。行きて立場あり。

◎八王子。大戸へ一里、女郎屋あり。入口に永福稻荷といふがあり、左へ曲り是より家續き右側の徳利龜屋喜右衛門泊り、九つ半。（龜屋の目印しの繪あり）。

菅笠は積りて雪と見え。富士道者の日をおどろかし。わらぢは山に重りて、大山詣の肝を消し、

旅人を守りて神も宿るらん

此の正直の徳利龜屋に　　桂花園

此の夜六つ時比に、梅五郎岩五郎等着、二人に關手形を書いてやる。（桃花園とは何人か明白でありません）。

廿一日。卯、朝より天氣、晝よりくもる、七つ時分より雨降る。

◎龜屋より馬を賴み、大戸觀音拔け道へかゝる。大戸まで二里、大戸までの賃錢、案内三百文、馬に三百五十文。（八王子より大戸へ行く道の分岐點の圖がある）。
◎小門宿。上野原宿、右の方に慈高山正法寺、此の向うに朱塗りの鐘樓堂有り。
◎大法村。左の方に日蓮宗、理諦山。これより右へ〳〵と曲り。右の方に富士の社有り、石の鳥居石段あり、本社は石の宮、坂を上り後ろに江戸見える、それより上に笹原にて高尾山見ゆる。（高尾山の遠景あり）。
右之方曲り角に赤き鳥居あり、額に俵名社としるしあり。此の先きに石の鳥居あり、秋葉大權現。寺田村より坂道、坂の上より江戸見ゆる。相原村。俗に大戸といふ、あん内村まで一里半。賃錢二百文。
◎大戸觀音。（大戸觀音の繪圖あり）。觀音の垣根に付いて行く。
◎椚木田村、俗にあん内村。こゝに立場三軒あり、十日替りにて商賣す。立場の向ふに安如寺といふ寺有り。此の邊四方山にして谷あり村あり。小原迄二里半、賃錢三百文。あん内村より山を一つ越え又山にかゝる。岩山にて極く難所なり、山へ登りては谷へおり、山の高さ何丈とも覺えず。此の山の峠半ばよりチギラ村なり、武藏相模の國境。遠山を見晴らし絕景の地なり。（絕景の圖あり）。
◎坂を下り右の方に月讀大明神。石の坂あり、鳥居、本社ともに木地。牛鞍大明神といふもあり。

(本社の圖あり)。三つ目の坂を上れば小原。左側の小松屋勇右衛門にて中食す。
◎與瀬。左の方角屋といふ家へついて廻り二瀬越す。(瀬。川を描ける繪ありて)、此の川、猿橋の末にて桂川といふ、此の川上を又渡り古野へ出る、俗に二瀬越といふ。舟渡し錢四文。
◎關野。相州甲州の境。小川有り。上の原まで三十四丁。小猿橋といふあり。名物は赤飯。鮎のすし。上野原、宿の入口に關所あり、手形に不及、鶴川まで十八丁。此の邊祭禮の行燈あり、諏訪の祭といふ。左側、七つ時大ちとせ屋作右衛門泊り、七つ過ぎより雨降る。
廿二日。辰。五つ時分より小雨ふる。四つ半時分よりくもる。
◎鶴川。丸木橋あり、是より山道永峯といふ。野田尻まで一里六丁。野田尻より犬目まで山中路なき所座頭ころばしといふ坂あり。犬目より大鳥澤まで一里十二丁。右の方に諏訪明神の社あり、淀屋へ番附を賴む。(廣告の爲めに下げて貰ふ爲めであらう。此の時の番附の下畫は默阿彌が書いたといふことは他に見えてゐます。見習作者としては重寶がられてゐたことが知れる。)
◎猿橋。駒橋へ廿二丁。名物雜煮餅、一ぜん十六文。(猿橋の繪ありて)、此橋長さ十六間、水際まで卅三ひろ有といふ。往來石ばかりなり。
◎駒橋。大月まで十六丁。大月の町はづれに橋あり、左の方は富士山道なり、大月より花崎まで十九丁。花崎より初狩まで一里半、初狩との間に眞木といふ所あり、眞木の太郎へも番附を賴む。

◎上初狩。八つ時、丸角屋忠右衛門泊り、殊の外寒く、ゐろりにあたる。
ヽヽヽ廿三日。巳、雨ふり、八つ時より天氣。
◎中初狩「あみだ海。白野。黒沼。笹子峠の極難所に座頭ころばしといふ所有り。峠より五町程下に甘酒屋有り、それより下に跡月晦日の荒に大石大木崩れしとて大道に澤山有り。(荒れ模樣の圖あり)。
◎石和。舟渡し十二文、鰍澤の川上、これより身延への舟あり。
◎甲府。八日町柳町、緑町を通り、甲斐屋町の龜屋與兵衛座へ着。芝居向名主の家へ泊る、松助の宿也。(甲府、龜屋座近傍の町の地圖あり)。
ヽヽヽ廿四日。此の日本讀み、孫太郎琴絲とけんかする。(琴絲とは何人なるか詳にせず)
ヽヽヽ廿五日。稽古。ヽヽヽ廿六日、稽古、此の日常磐津八文字さん方へ同居。ヽヽヽ廿七日、つけ立。
ヽヽヽ廿八日。大入、のり込みを見こし、大詰所作三まく、(此の意味がちよつと不明ですが町廻りの代りとしてこんなことがあつたと見える。)此の日を顔見せといふ。目をまはせし人三人有り。
ヽヽヽ廿九日。天氣、初日。ヽヽ朔日、ヽヽ二日。
ヽヽ三日。天氣、大入。寄席の太鼓を打つ。『前がまばらで、後が雜みます。太鼓につゞいて前へ前へ』と呼ぶ。是にて見物前へ〳〵と出る。

四日。五日。六日。七日、大雨暴風雨。八日。川留にて見物うすし。九日、同。十日、雨ふり、十一日、天氣、十二日、雨ふり、十三日、十四日、十五日、十六日、天氣、見物うすし。十七日、千秋樂日延の掛合出來ず、夜八つ半に出立。（囃子方の六郷新三郎と同道出立の由が他書に見えてゐる。）

十八日。鰍澤、是より舟にのり破木井へ着、六里。舟賃一里十二文。此の川谷水にて水勢早くおそろしき難所なり。（富士川である。）

◎天神瀧。屛風岩、梅の木澤山にありて三月花ざかりの由、早川、此の落合なんじよ。破木井八つ時に着、身延山へ四十五丁。

◎身延山。參詣す。本堂のわきにて新平喜之助金三郎に逢ひ、それより同道にて下向す。（三人は何れも芝居仲間なるべし。）

◎大野。井げた屋宗右衞門泊り。

◎十九日。朝舟に乘り岩淵まで行く。舟下りには二時にて行き、上りには鰍澤まで四日にて行く由上りには引舟。（曳舟の時人足の履く草履の圖あり。）

◎釣橋。釜ヶ淵といふ、ごく難所。（釜ヶ淵の略圖あり。）

◎芝川。富士の谷水にて、此の水下二丁程にて陸へ上り、舟は綱にて水に從つて流るゝなり。他の舟を待合せ、互に力を合せ舟を流すなり。（芝川より富士山を眺めたる圖あり。）

◎岩本。吉原。原。沼津。長門屋泊り、質屋なり。

廿日。三島。箱根。小田原、松本屋泊り。（松本屋の目印しとおぼしく、瓢簞の圖あり。）常磐津若狹太夫の宅なり。此の家にていゝづみ（飯泉？）の道を開き渡しを渡り、いゝづみ觀音へ參詣す。門前より右へ曲り眞直に行く。猿橋の下なる川あり。船渡し賃は一人前二十四文なり。（詳細なる道路の圖あり。）

廿一日。國府津へ出る。餘の宿ははぶく。四つ時分より雨降り。藤澤、煙草屋庄右衛門泊り。

廿二日。朝天氣。江戸へ着。目出度江戸入り。

三

以上の如き龍頭蛇尾なもので、非常の面白いものだとは言へませんが、繪入になつてゐて、然もそれが手際よく描かれてゐるのが目につきます。然し、活字に組んでしまへば、古びて蟲ばんだ紙やら實際の手跡やら寫生畫などは親しく啫られませんから、興味は減殺されませうが、默阿彌の廿歳といふ若い折に畫かれ、また同時に最も古い日記を發表するのは、共にわたくしも歡ばしいことでございます。

私は三四年前の夏、曝書の折に此の『甲州記』を發見した時には、實に言ひ知れぬ歡喜に胸の踊つ

たのを忘れ得ません。私はその一枚一枚を多大の期待と懐しさとを以て繙しました。——晩年にはあんな怖らしい、苦蟲を嚙みつぶしたやうな默阿彌も、此の時分にはどんな若々しい面付をしてゐたであらう。豫て望んでゐた芝居國の人になりたての、花やかな心持を抱いて、旅芝居へ出て、役者や作者仲間と共に甲州街道を道中して歩いた。そして毎夜寢に就く前に、旅籠屋のほの暗い行燈の下で、矢立を取出しては此の日記を樂しみにして附けたでもあらう。——それにしても、文字も後年の彼と同じく几帳面であり、寫生畫も草卒の間になつたものとしては結構なものではないか、學ばずして繪心のあつた事が分かる……。などと、そんなことを思ひながら、其の當時特に默阿彌に就いて詮索的興味に滿たされ、好奇の眼を注いでゐた私は、一種の感激に包まれて、夏の半日を送つたのを覺えてゐる。

雜記體の日記

一

嚴正な意味に於ける日記といふものは、前の繪入日記以外にはないのである。が、例の石塚豐芥子の隨筆集『街談文々集要』に見るが如き、途上の見聞を日錄風に書き留めたものも少しばかりある。ここにそれを抄錄して見ようと思ふ。抄錄と言つたのは、その中には、閲讀した雜著の序文、跋文、

或は其の書中の一節を拔萃してある箇所もあり、其の當時流行した小唄の類ひを筆錄してあるやうな部分も尠くはないから、特に默阿彌の其の頃の生活に交渉のあるもの、それから時代の面影を捉へて筆錄したものなどだけを抄出しようと思ふからである。

年代は天保の七年から八年にわたるもので、まさしく前の『繪入日記』(天保六年)の次を受けたものである。『雜記』と題して半紙を四つ折にした帳面へ、細字で克銘に認められてあるものである。天保七年は默阿彌廿一歳の時であるから、廿一歳から廿二歳にわたる間で、廿歳の折に一度劇場裡の人となつたが病氣の爲めに退いてゐた頃の事。父はもう歿してゐたが、困りもしない家のことだから、病後の靜養旁、氣の合つた友達と往來して暢氣な月日を送つてゐた。それだから、此の日錄中には茶番の事も出れば、折句、冠り附、狂句の如き雜俳に關したものも出る。何れも此の頃の默阿彌なり、社會狀態の一面なりを語つてゐるものである、それらに就いては、時に註解を加へることとして、早速本文に取りかかる。

二

○(天保七年)二月十六日より芝泉岳寺にて開帳あり。高輪の茶屋中揃ひの暖簾を掛け、茶屋女の前垂も皆揃ひなり。暖簾の地薄藍にて、下方に附けたる雁木を白く拔き、鷹の羽と二つ巴の紋所とは丹、

紫にて染め、前垂の方は地薄藍にて、同じ二様の紋所及び子持筋とも白。(見取圖あり。)

○土橋亭りう馬といへる咄家、泉岳寺の開帳に就き、とんだ靈寶を工風し、高輪大佛の地内にて興行せんというて、已に其の趣向を話したるを寫しおきぬ。(として寫生圖が出てゐる。本尊が定九郎で脇士に與一兵衛と勘平とを置いたもの。)

○二月廿五日泉岳寺の開帳へ詣る。地内の商人皆忠臣藏に本づきておかしき名數多あり。天川屋伊吾餅といふ粟餅、大星力豆、いろはじるこ、夜討そば、手柄餅等。

此の日田町にて菓子賣を見る、二十三人にて形は雁木の四天を着し、黒木綿の芝翫頭巾を冠り、傘をさし、掛矢の中へ菓子を入れ、其の呼聲左の如し。

音頭「おつと呑みこんだ。皆々「チツト呑みこんだ、音頭「御ひいき買つておくれ。皆々「おなじく。音頭「菓子屋も首尾よく賣つたりョ云云。(挿繪に二つ巴の紋とむさしやと印した番傘。芝翫頭巾の形、四天の脊中に現はした忠の字。及び。掛矢を畫いて、此の蓋明かりて、中へ菓子を入れると說明してある。)菓子は松風に類したる物也。

○靈寶の中に、吉良殿の長刀あり、女中長刀にひとしく、わづか金壹分位の値打あり。あまりにをかしき故爰に誌す。いかゞして吉良殿の長刀泉岳寺にありしや、もし義士が分捕にせしものか不知。

○大石が守り本尊摩利支天の畫像の水引御戸帳へ、二つ巴の紋付けしは何事ぞ。こは竹田出雲が大星

由良之介の役名を考へし時、人形遣ひ吉田文三郎由良之介の役に當り紋所に困り、已が紋の二つ巴を附ける、それより後世今に到り二つ巴を附ける事とはなりぬ。因みにいふ、大石が紋は上り藤に大の字なりとある人の語られき。尚、由良之助の役名の前は大岸宮內にて勤めし由。

○先にしるせし忠臣藏の菓子賣り、いかゞの事にや有りけん、晦日の朝江戸橋にて召捕られしと風聞あり。

○追記。菓子賣一度お咎めを蒙りしが、衣裳を改め、又々商賣す。四天の印の雁木を黑に染め、傘の二つ巴を丁子になほし、四天の脊中の忠の字の內へ櫻を摺込み、黑木綿の頭巾をせず手拭を冠る。高輪七軒茶屋其の他見世物商人迄鷹の羽、二つ巴、雁木の印差留められ、殘らず印を附なほす、二つ巴は多く丁字になほす、其の中に雁木を筍になほせしがありき。由良おこし、力彌團子、天川白酒、祇園名物おかる、一文字屋製かるやきなり。

（此の件は泉岳寺の開帳に就いての見聞である。開帳は祭禮と共に江戸年中行事の一要素で、老若男女、遠近を問はず盛んに參詣して步いたものらしい。默阿彌は此の當時は泉岳寺と同じ芝の宇田川町に住居してゐたから、自然參詣にも度々行き聞睹する所も多かつたであらう。大石の守り本尊の御戸帳に二つ巴の紋を附してあるのを非難したり、吉良の長刀に不審を打つたなどは鋭眼とも言はうか。開帳の取締り方もなかなかで、時の警視廳のやかましかつたことを

想はせる。忠臣藏に因んでか忠臣藏の小道具として列記したものが見える、現今とは違つてるのかも知れないが、參考の爲めに次に併記して見よう。)

○忠臣藏小道具

初　段。　銀杏の葉。
二段目。　切松、草履、目鏡、茶臺。
三段目。　たもとの重り、みけんの血紙。
四段目。　かほよの切髮。
五段目。　所書、鐵砲玉、和中散、はんごん丹。
六段目。　身賣りの證文。
七段目。　おかるが文、目鏡、同かんざし、石、釣り燈籠。
八段目。　親子の菅笠、杖。
九段目。　本藏がいとま狀、小柄。
十段目。　去り狀、了竹が藥箱。
十一段目。　義士の辨當箱。

以　上

三

○五代將軍樣の御時、御能御上覽ありしが、觀世太夫道成寺を勤めしに、鐘に入る鬼女の支度をなし紅をぬらんとせしをり、紅なかりしかば小指を喰ひ切り、其の血しほをぬりていでしが、眞事に其の勢ひおそろしかりしとなり。

○中村仲藏いまだ中役者なりし時、忠臣藏の狂言にて定九郎の役に當りし者病氣故、狂言作者櫻田治助仲藏に替りを勤めよといふ。仲藏達て辭退いたせしかば治助立腹の體にて、貴樣も役者ならずや此の役ぐらゐが勤らずば舌を喰つて死なれよと言ひしかば、仲藏此の言を心外に思ひ、然らば勤むべしとて請合ひ、それより觀音へ立願し、もし定九郎の役見物の請惡しかりなば、櫻田を刺殺し其の身も腹かき切らんと思ひ、本身の脇差を差し、工風を凝らし、破れ傘に黑小袖を着、本水を浴び、花道より出し所、見物一同じやく\の聲やまざりしとかや。是より仲藏次第に立身して、後年櫻田が一言を有難く思ひ厚く謝せしとなん。つひに定九郎の型は仲藏の風をまなぶと杵屋某の語れにき。因みにいふ、此頃迄定九郎の役は中役者の勤めしものにて、多くはどてらにて山賊の拵へなりき。

○谷村虎藏（後年上阪なし大谷友右衛門）稻荷町なりし時、中上ますと花道へ來る、舞臺は白裝にて何事ぢやと言は

れしが、虎藏ハット言ひて絶句なし、舞臺へつか／＼と來り、小聲にて忘れましたと言ふ。白猿行け、虎藏ハッとといふて引返す、見物は密談ならんと思ひ、穴も明かざりしとかや。白猿樂屋へ入りて虎藏が頓智を賞美す。

○杵屋藤吉某氏と共に江戸を駈落いたし、八王子へ志す途中にて、絹賣に相宿せんといふ、絹賣兩人が形りを見、怪しみて早足に急ぐ、兩人跡より追かけしかば、やがて駈出して見えずなりぬ。兩人も是非なく、ある茶屋の世話にて、とある宿屋へ泊りぬ。あくる日八王子の喜三郎といふ者を頼りて行きぬ。喜三郎兩人を湯に入れんとて隣の宿屋の風呂へ入らしむ。兩人風呂へ入りしに、かたへの座敷にて噺しするを聞けば、昨日高井戸にて若きごまのはい二人に出合ひ、相宿せんと言ひしをやう／＼に言ひぬけ、定宿へ泊りしが、さて／＼怖き目に逢へりと言ひけり。兩人風呂より出て、出逢頭に噺せし者に行逢へり、これ昨日の絹賣りなり、絹賣膽をつぶし、其夜の中に此宿を立ち、とある宿へ泊りぬ。

（これらの逸話には、他の隨筆にも見えてゐるものあり、仲藏の定九郎などは殊に著名な話であるが、人に聞いて默阿彌が書取つたところに面白味もある。）

○溪々舍高雨大人茶番集の叙。

溪々舍主人は。予が莫逆の友なり。性素より茶人にして生平の茶譚に、お臍で茶をわかすをかし

みあり。また唐茶を嫌ひて。和茶々々とにぎやかなる事を好み。よく茶番にゆきわたりて。爰の月待かしこの日待。チツト承知のスケをも勤め。茶飯の席に茶な事を吐けど、人を茶にせぬ名人氣質。嗚呼洒落たるかな。一個の茶番師と稱すべし。

時天保七季丙申彌生。茶番の趣向に倦みし夜もすがら。茶釜の澁茶を硯に受けて。むちや〳〵ちやを認しぬるも。茶にうかされしわざならんと、ゆるしたまへ〳〵。　　芳々

（默阿彌が廿歳前後の十年間位は『八笑人』的の生活であり、亦その間には口上茶番であるとか狂歌・狂句の如き雜俳に親しんだことは詳述しておいたが、其の頃雅號として芳々を用ひてゐたのである。高雨といのは其の八笑人仲間の一人であつたものと見えて、日記中にも散見してゐる。茶番の盛んに催されたことは次々の摘錄によつても看ることができる。）

○某月五日、柴井町土屋にて茶番を催す。兼題番組は左の如し。

遠からん者はしやぎりの太鼓の音にも聞け、近くば寄つて目にも見よかし茶番の番組。

兼題　四季遊山盡

春野。梅。櫻。汐干。涼。網。蟲。月。茸狩。紅葉。雪。

○七日、高崎屋細工場にて茶番の催しあり。

○十六日、露茂庵發會阿民樓にて開卷。高點東は白水樓、西はよし〳〵、魚交樓。

○廿七日、白水樓催し、景物の見立驛路。高點東は眞仙樓、西は桃園。

（此の開卷とあるのは茶番ではなくて、次の項にも見える繪俳諧であつたらうと思ふ。繪俳諧といふのはハメ畫に類したものであらうと思ふ。而して默阿彌は天性趣向の才に秀でゝゐたから、總て趣向の物、例へば茶番、三題噺、ハメ畫、繪合せ、手拭合せ、聯合せ、或は景物の見立等の如きは、彼の大いに得意にした所であつた。次に茶番の例や狂句等の例を摘錄して見よう。）

○題は『扇箱』。扇もいろ／\ございますが、當時流行の扇を御覽に入れます。（ト菊五郎と半四郎の錦繪を出して）是が重ね扇に三つ扇でございます。模樣はどちらも日の出でございます。尾上の松には鶴も巣籠り、梅我の美名は龜井戸に名高く、たけ（竹、他家）に眞似の仕人もございませぬ。いづれおとらぬ一對の扇、此の扇にはお箱がいかい事あります。

○題は『足の弱い藝妓』。足の弱いけいしやでございますが、是は江戸けいしや故ぬりませず、ほんの木地でございます（ト下駄を出し）、まだ此の頃出ましたばかり故、どろ水にはしみませぬ。兎角足の弱いせゐかころぶころぶと申します、御連中樣も足をおつけなすつて御覽じませ、もしころんだらおなほしなされませ。

○題は『役者盡し』。役者を兩三人御覽に入れます。此の趣向もさる人のさしづをうけまして、どうし

たらよからうと云はりましたら、幸四郎と申します故（ト皮づゝみの鮨を出し）、お景物に斯樣なものを差上ます。皮づゝみが一つ故市川の縁もござりませうか。ちよつと結びを解きまして中を三升といたしませう、是れは鮨でござります故壽美藏でござりませうか。此の鮨屋には何にもござりませず、玉子の鮨が八銅で、のりが四くわん（芝翫）だと申します。もうちつといいのはないかと申しましたら（ト海老の鮨を見せ）、此のゑび（藏）が親玉でござります。

○題は「七變化」。此度上方表より罷下りましたる七變化にござります、先づ三番叟にきぬたを御覽に入れます。上の一字を取りますと御酒のお肴となります。上の二字を取りますと田舍の景色となります。上下の二字を取りますと、槍持となります。中の一字を取りまして下より讀みますと、淸水の景色となります。下の一字を取りまして、上より讀みますと吳服屋になります。右の七變化首尾よく相勤めますれば、今一度大切を御覽に入れます。下より讀上げますればいよいよ正體を現はしまする。

○折句。　つちや

築地なる茶所にあつまるやくわん連。

しやか。

しわいやつ安見世ならと開帳し。

ととと。

となられて戸惑ひなどととぼけてる。

鳥追のとる編笠に年が知れ。

とろ／＼と鳶も洒落てとまるむぎ。

○余が裏の厠に犬が落ちければ、

煩悩い犬なればこそこい故についおつこちとなりにけるかな。

折しも雪降り出でければ、

ふる雪のなぞにつもりしくり言もいはで消え行く犬ぞはかなき。

四

（天明の大饑饉と天保の凶荒とは江戸時代に於ける二つの著明な饑饉であるが、あだかも此の日誌の書かれた天保七、八年は其の項點であつた。その爲め默阿彌の『雜記』に現はれた、饑饉に關するさま／＼の事實は、通常人たる吾々にも興味があるのみならず、史的事實としても或は貴重なる材料たるを失はないものかとも思ふ。）

○（天保七年の）八月より米高直にて、世の中おだやかならず。上にも御慈悲のあまり神田佐久間町へ

お救ひ小屋立つ、但し日數百日限り、

白米　百文に就き　四合
麥　同　四合五勺
引割り　同　五合
小豆　同　四合

○榊原米でしくじり大目附。この狂句は北御奉行大目附に役替へありし時、世上饉飢にて米高直故に仔細ありしなり。（米價調節問題で失策をしたものと見える。）

○油一合　六十四文、但し一合以上賣らず。

大屋には店だてられておのが身も
　ちいさくなりてお小屋にぞ入る。

此の歌は神田佐久間町にお救ひ小屋立ちて、貧者を入れられし時なり。

○（武士のきらずを喰ふを見て）、太刀は鞘おさまれる御代の饉飢なれ、きらずで餓をしのぐものゝふ。

○來る年の豐を知らす賤ヶ家へ
　しづかに降れる今日の白雪。

○お救ひの饉飢沙汰をば矢部にして、

諸式を安く駿河手はじめ。

これは御勘定奉行矢部駿河守様が諸國米の御調べありければなり。

○(天保八年の)二月頃より白米に餅米を等分に入れて賣る。(餅米の方が餘計になり安價になつたのである。)

○三月になり段々諸式高直になり、芝邊は五日頃より米の小賣は少々は賣らぬ家多くなり、白米は餅米ばかりなり。百文に付き、餅米ばかりならば四合五勺、餅米等分に入れしは四合、うるちばかりは三合五勺なり、麥四合五勺、大豆四合五勺。

○此の頃は、餅まじりの米を搗きて、薄くまるくのしてミツに入れ黄粉をつけて賣るあり、一つ八文團子はきらずと米の粉を等分に入れて作り、うどん粉にて焙ける品皆きらず入りなり。それ故にきらずは味噌漉しに一ぱい三十二文となれり。

○大鹽(平八郎浪花の亂)徒黨の者の人相書辻々へ出る。

○白米兩に一斗八升、小賣三合五勺。

諸式高直に就き、お救ひ米去年より兩度まで下され候所。又々此度江戸中へ二萬俵お救ひ米下さる。一人前男女老若共一升八合宛なり。但し組々名主玄關にて渡され候事。

○世上暮し兼ね候て、非人に相成候者多分有之候に付き品川板橋千住新宿へお救ひ小屋建つ、但

しお代官掛り。

○『豐歳氣湯』價六十四州、（效能）第一米相場逆上引下げ諸國のつとめをゆるめ、人氣を治め、上は健にして下々の痛をよくやはらげ、家賃滯りなし、諸國しめうりせんぎによし。但し二百十日風雨を忌む、其外差合なし。

本　家　調　所　京都百ニ三升諸國下ル町　安井米穀
賣　認　め　所　諸式次第ニ下ル町　嬉屋萬作
取　次　所　大阪安堵寺町商賣サカイ筋　福吉屋喜太六

土用中は夕立相添へ申候

○四月一日より御趣意米を江戸中に賣る。但し玄米一人前二合宛にて代は二十八文。白米は小賣三合但しこれは餅まじりにて、うるちばかりは二合五勺、麥四合、小豆三合五勺、大豆五合五勺より六合、油は一合五十八文。

○各人見立落首。

大内も米の直段は高つかさ、定めて茶がゆ關白殿　（公　家）
智仁勇備はる程の大將は、家中の扶持も斗いづめなり　（武　家）
木の皮や草の根掘りて此ころも、くわないと聞く民ぞ悲しき　（農　家）

不作にて定めし腹もひえい山、皆托鉢に傳教大師　（天　台）
一物も無しと悟りし宗旨さへ、本來食ふに困りこそすれ　（禪　家）
法然と言へど今年も凶年で、此法事さへの至十念　（淨　土）
茶ばかりで高まの腹はへり通し、せめてかゆでもきこしめせと申す　（神　主）

○開帳

粥の國腹へり郡下難儀村饑飢山困窮寺本尊涙如來、御丈ケ二合五勺、五十年目開帳、

一　麥飯上人喰兼の名號

一　きらず山はつくわうの御利益

一　ほんほちの具足百二十領

一　諸色高倉院御製御色紙

　　腹へりし人の心を詠むれば
　　　民のかまどはうるさかりけり。

一　油高直大納言に仰せ有りて、小町々々に詠歌とありければ、よみける歌に、

　　膳の上ありし昔に替らねど
　　　米喰ふ人の内ぞゆかしき。

一　豐年上人より飢饉僧都へおくりし短冊の御歌に。

　豆小豆麥やお芋とへだつれど
　　まじればおなじかて飯の德。

一　最府中將隅田川にて詠じたまふ御歌に、

　直を聞いていざ米買はん百文に
　　二合五勺はありやなしやと。

一　御救ひ小屋出入りの御印紋。

　そも／＼此御印紋は、かたじけなくも仁惠上人一流三合の御當にて困窮飢渇の人を救ひたまふ所の御印紋なり。一度願ふ輩は百日の間安樂世界に暮し、飢をまぬかるゝ事疑ひなし近う上らず遠くより御覽あられませう。

一　當時第一の靈寶米のおまんまなり。

○葺屋町の盆狂言に九藏、羽左衞門、榮三郎などにて(二番目に)山莊太夫を勤めしを見て、

　からき世に連れて芝居も小つぶなる、
　　役者がなせる山莊太夫。

(まだこれらのほかにもあるが、長くなるし、大抵かういつた調子の物であるから此の位にし

て、最後に二三此の當時の出來事やら途上瞥見記ともいふべきものを摘記して此の項を終る。)

○さる頃、八丁堀に遠藤三清と言へる醫者あり、何事かお調べの筋ありて大番屋へ召上げられし時、番屋にて酒肴を取り寄せ家主などにふるまひければ、皆々醉ひ臥したる隙を見て繩を解き行燈へ一首の歌を書きて逐電せしとぞ、

繩ぬけて見れば遠藤へ行く程に
　　あとでゆるりとたづね三清

○近き頃木挽町三丁目に行き倒れの坊主あり、辭世の歌あり。

こゝも旅又行く先きも旅なれば
　　一寸こゝらで一と立場せん

○今年(天保八年)夏の始めより、屋臺見世にて燒酎を賣れる人、又夜るはぜんざいを賣れる人多し。

○此節のはやり物。砂糖豆、わらび餅、燒き鮨、きらず團子、玉子まんじう。

○田舍じるこの始まりは葺屋町の角。菓子屋にてしるこを始めしは藏前の船橋屋にて、一膳十六文より六十四文まで。

○元來三四年以前に三十間堀の藤井といふにてしるこを始めしより、一般の菓子屋餅屋にて商ふに至りしなり。

以上のほかにも、此の當時流行した、トッチリトン、一中くづし、都々逸などを採錄したのもあり、又自作の物もある、これは自ら獨立したものとも考へられるから、此の邊で一切りにしておくことにする。）

晩年の日記抄

（はしがき）

「默阿彌全集」の前身たる「默阿彌脚本集」の刊行を計畫してから、各卷へ附ける口繪や挿繪の材料を、また改めて搜し始めた。が、嘗て默阿彌傳をまとめる時に、殆ど書庫の中のあらゆる場所を搜したのであつたが、又その外にも多少の材料を見附けることができた。その中に、偶然にも極く晩年の――絕筆と稱してもよい、一冊の日記を發見した。

それは明治二十五年十月から、その年の十二月までのものですなはち歿する前年――と言つても、つい前月と前々月とその前の月の、三ヶ月にわたるものであつた。

元來、默阿彌の附けた日記としては、ごく若い時代の二十歲前後に甲州へ行つた時の『甲州記』と

題した小冊子と、その時々の重要事項のみをちよい〳〵と書記した數冊の手帳の外にはないことゝのみ思つてゐた。長女たる糸女にそのことを聞いても、『冬の間は身體の弱い自分に替つて附けその以外は自分が附け』、糸女の前には默阿彌の妻女が日々の出來事を附けてゐたとのことばかりで、その冬の間附けたといふのは不幸にして眼に觸れなかつたのであつた。それが、今日に至つて始めて、而も偶然に發見して、自分は非常の興味をそゝられた次第である。

讀んで行つて見ると、その日記はその日〳〵の出來事、來客の出入、物品の贈答等の記錄であつた、その間に些の主観をも交へないものである。馬琴のやうにその人の考へ方や、心情の吐露されてゐるものではないが單なる外面的の生活記錄としては、實に精細なもので自分としても亦、生前默阿彌を知つてゐた人々の、想像せんとした所のものであつたといつてよい。

殊にその日記の當時は『狂言百種』の刊行に從事してゐた頃なので、それに關する事柄のあるのが『脚本集』を校訂し編纂してゐた、自分に取つては一種の感慨に堪へなかつたし、又坪内先生や饗庭篁村翁などの前で『本讀み』をした時の事も含まれてゐるし、それから尙默阿彌を死にまで導いた腦溢血の發病當時の輕微な症狀なども、書留められてあるので、先づ、眞の意味に於ける默阿彌の絕筆と見るべきものであるし、かた〴〵自分にとつては、よけいに、外の材料を搜し出した時よりも嬉しかつたのも無理はない。

そこで、全部をこゝへ書きぬくわけにも行かないから、ほんのかど／＼を抄出し、その中の記事に就いて註解ながら、默阿彌に就いてのことを思ひ出すがまゝに、書いて行つて見ようと思ふ、いはゞ日記抄を土臺にて、默阿彌の生活や家庭の狀態やら逸話やら、或は交友關係などをお話ししようといふのであります。その積りでお讀み取り下さるやうに願つておきたい。

尙、この日記は、引用した部分によつても判斷できるが、その日／＼、就寢前とか又は早朝とかに一日の出來事を書きしるしたものではなくして、まだこの外に別の手控えがその時々に端紙かなどへ記されてあつて、それが二日とか三日とか溜めて淸書されたものらしいことである。これは仔細に見て行くと、その時の墨の色なり、筆勢なりでもさう想像されるし、いつたいにさうした習慣であつたと見えて、今の糸女なども、さういふ丹念なこくめいなやり方をしてゐるやうである、おそらく日記を淨書してゐた人は澤山はあるまいかと恐入つてゐるのである。が、默阿彌といふ人にはさういふ丹念な綿密なところのあつたことは、去冬演藝畫報の誌上で、默阿彌の囘顧錄を蒐集された中へ、自分も述べておいた通りである。寧ろ、默阿彌といふ人物から推測すれば不思議でも何でもなくて、その方が當然なくらゐであらう。殊に、その日記中へ、一要件毎又殆ど一固有名詞毎に、その傍へ朱でくるりと、小さな丸をつけてあるのを見ては、いよ／＼恐れ入つてしまふ。これは多分附け終つてから讀みなほして見た時に附したものか、或は手控へと

對照して遺漏誤脫の有無を調べた時の印しかとも思はれる。どうした故かは明らかにしないが何しろちやん〳〵と朱の丸のついてゐるのは、奇觀でもあり、面白いことである。で、抄出ついでにその丸をも原物通りに附しておくことゝした。（句讀だけは僕の施したものである）

十　月　（明治二十五年）

一日　北風天氣、朝花柳へ芳次郎の病氣見舞に行く、一圓玉子の切手持參。大阪の新井半治氏に花柳の宅にて逢。名倉氏へ藥取りに遣る。製本屋新報持參。岡田へ歌舞伎座釣狐上るり横書き、右名題道具附持たせやる。坂野看板の下繪を賴みに來る。金子大磯行きの事にて來る。午後南風に替り、少し暑くなる、夜に入り曇る。

（花柳は踊りの師匠の花柳のこと。新井半治は多分まだ存命であらうと思ふが、大阪に於ける劇界の有力者であつた人。名倉氏とあるは三年ほど前に歿せられたかゝりつけの醫士で、名利から全く離れた開業醫らしくない醫士で、明治の初年に德川家達公や河村清雄氏などと共に洋行して來た、風格を異にせられた方であつた。製本屋云々は、歌舞伎新報を十號宛合本にこしらへさせたことで、その製本せられたのが今も殘つてゐる。次の岡田とあるのは竹柴其水のことで、當時默阿彌は劇界から全く隱退してゐたから、その頃歌舞伎座へ補助の狂言作者として出勤してゐた其水の許へ、釣狐の上場に

際して持たせてやつたといふのである。坂野は其の頃歌舞伎座に關係してゐた積善老人のことであらう。金子といふのは、默阿彌からは義弟にあたつてゐる金子源藏氏のことで、一時「歌舞伎新報」の編輯人兼發行者(?)になつてゐたことがある。これから大磯へ行くことになるのである)

二日　北風曇り。其水より寺島へ淨るりの本讀をせしはがき來る。朝製本屋に千號の綴ぢなほしを賴み、春陽堂へ校正を六日まで見合せくれと斷り、七號三人吉三と極める、五號よく賣れし由。岡田へ行く留守にて妻へ賴み、用書附にして賴む。歌舞伎座へ下繪屆ける。晝より南風に替る。山形の延壽太夫より手紙來る。聖天町西方寺の住寺高尾年回配り物の風呂敷緣起を持て禮に來る金子來る、大磯濤龍館よりはがき來る。

(其水は竹柴其水、寺島は先代菊五郎のことで、多分默阿彌の最後の作と稱されてゐる奴凧の淨瑠璃のことではなかつたかと思ふ。春陽堂へ校正を斷つたといふのは、無論狂言百種のことで、大磯へ誘はれて行くことになつたので、その歸宅するまで待つてくれとのことであらう、その几帳面な性行がこんな所へも現はれてゐる。三人吉三は現に狂言百種の第七號として出版された。延壽太夫といふのは先代の淸元延壽太夫で、默阿彌と提携して淸元を隆興せしめた延壽翁のことで、この人は手(蹟)をよく書いた人である)

三日　北風曇り、金子同道にて大磯へ行く。新橋ステンションへ七時過に行く。程なく關根氏來り送ひ、高燕氏來り、八時の出車にて大磯へ行き、ステンションより車にて濤龍館へ行く。中川氏いまだ伊豆より歸らず、四人にて終日雜談をなす。留守(宅)へ共水より郵便來り、吉本の家內來り栗を貰ふ。市太郎泊る。

(關根氏とあるは、今の關根默庵氏の先考只誠翁のことで、高燕氏は六二連仲間の高須高燕氏のことで申合せて同行したのであつた。留守宅のことが書入れられてある。栗は默阿彌の好物として人が皆知つてゐたので、丁度秋のことでもあり、所所に栗の到來したことが記されてある。市太郎とあるは、默阿彌の長男で、つい三年前に歿した人。幼少から商業を志したので文字には緣がうすかつた。)

四日　北風曇り、濤龍館にて蕢前湯へはひり、午後鴫立澤虎が石を見に行ぶら／＼と歩く。當時大磯に藝者五十人ほどある由。虎子饅頭を賣る菓子屋の日除ケに御別莊用達と記しあり。濤龍館の表に玉乘りの見世物あり、夜興行にて一週間ぐらゐ持つ由。夜に入り晴、待宵の月を見る。留守中高島屋の車夫脚氣にて淺倉氏を問に來る。高島屋家內口上を賴みに來る。製本屋本持參、團子の粉を挽く。市太郎泊る。

(高島屋は先代左團次のこと、淺倉氏といふのは、回向院前にあつて、脚氣の大先生として一頃有名

であつた醫師）

五日　北風、天氣。朝湯へはひり九時前に立、濤龍館より返しに虎子饅頭を貰ふ。ステンショまで番頭若い者送り來る。中等にて新橋にて下りる。高燕氏は直に宅へ歸る。後三人にて人力にて竹葉へ行き晝飯を喰べ、關根氏に別れ三時前に宅へ歸る。

（大磯から歸つたのである。竹葉といふのは言ふまでもない鰻屋の竹葉）

六日　北風、天氣。關根氏禮に來る、藤村の菓子持參。田本の老母しんじよ持參。關根氏芝居由緒書狂言類聚、夏の富士、日本一四冊貸す。製本屋新報持參、千四百號不殘揃ふ。午後金子禮に來る花柳寺島へ行きし歸り、淨るりへ丑之助を出しくれと賴まれて來る、市太郎來る、太田筆耕料取りに來る。

（淨るりへ丑之助を出してくれと賴まれて來たといふのは、奴凧の淨瑠璃の中に、今の六代目菊五郎その頃の丑之助を出してくれるやうにと、言傳を賴まれて來たといふので、寺島は無論先代菊五郎のことである、それから、太田筆耕料云々といふのは、狂言百種の原稿を書く爲めや、正本の淸書を依賴してあつた人のことでその人に筆耕料を拂つたといふのである。）

七日　北風、天氣。朝歌舞伎座淨るり直しいたし、花柳へきかせ寺島へ持たせやる。都手に魚川岸角尾へ不味侯會席附の本贈り、春陽堂へ原稿紙取りにやる、今日地境朝鮮矢來拵へるに附き市太郎終日來る、平山龜澤町一丁目廿一番地金井しげ方へ同居なすよし屆けに來る。春陽堂より原稿紙三百枚來る。朝鮮矢來十二間出來上る、夜に入り、金子來り高燕氏の勘定持參。

（歌舞伎座の淨るりをなほしたといふのは、昨日の依頼を早速果たしたわけであらう。魚河岸角尾云云といふのは。今も繁昌でゐる魚川岸の古い魚問屋の服部氏尾張屋寅吉氏のことで、今でもさうであるが、江戸趣味その物のやうに高い趣味の人で、わたくしの作つた默阿彌傳の中にも述べてあるが、幕末の繪合せ、遊食會等其の他音曲類、道具の類、茶道等に造詣の深い人でその人に不味侯の會席附の本を贈つたといふのである。何か茶話の折に一見したいといふことになつたので、それを贈つたものと見える。默阿彌の手に不味侯に關するものがあつたのは、相當因緣のあることである。といふのは默阿彌の妻女の父なる人は文化文政時代では相當に聞えた茶人であつたからである。生業は茶器、道具商で、性は伊藤大和屋源兵衛と稱したところから、大源として通つてゐた。茶をよくしたところから、松平不味侯の若殿月潭樣といふのに、お茶の指南をしてゐたといふ。月潭樣といふのは不味侯の次男であるといふ。不味侯存生中にも指南に上つてゐたので、不味侯の自畫自贊になつた物なども、所藏してゐたやうなわけで、月潭といふ方から、大源へあてた書狀があるのも、その故である。從

つて會席附の如きも妻女の關係から默阿彌の手に來てゐたのであつたらう。春陽堂の件は勿論狂言百種に就いてのことである。朝鮮矢來云々の件は、家の普請に就いてのことで、この時より五年ほど前に淺草の舊居から、本所の二葉町へ轉住して、まだ出來ずにゐた外まはりの垣根をこしらへたといふのである。平山とあるのは平山彌五郎氏のことで、今の竹柴晋吉氏のこと、この年に默阿彌の許へ入門したのであつた）

十五日　北風、天氣。岡田より柳盛座へ貸興の頼みの葉書來る。八時頃より數寄屋町事務所へ行き百種六號より十號迄願書を頼み、登記印紙六圓張る。春陽堂へ勢力の原稿と口畫八號口繪表紙の下書とを渡し、南翠宅へ酒切手持參にて先頃の禮に行く、只好氏居合せ面會なす、銀座田村氏へ同様禮に行く、櫻田町久保田米僊子の宅を尋ね切手を持ち禮に行き、初めて面會なす。うつりに鶴を書いた扇を貰ふ。十二時過ぎに歸る。留守へ神戸岩田氏より松茸一籠屆く。平山より小鴨のたゝきを貰ふ。柳盛座比戸へ酒井太鼓の本一流れと亡妻の香奠一圓持たせてやる。常磐津國太夫の會當日忘れ今日持たせやる。午後四時に新皿屋舖の校正秀英舍工場へ郵送なす。坂野歌舞伎座の禮持參、夜に入り金子來り、久しく咄して歸る。

（岡田は竹柴其水のことで、默阿彌の脚本の取扱人をしてゐたので、柳盛座へ「酒井の太鼓」の脚本

を送つてくれと葉書が來たので、後に持たせてやつてあるのである。それから登錄云々は狂言百種の出版屆をしたことであらう。狂言百種の表紙繪や口繪に對する下繪の書いたのもおいて來たといふのである。南翠氏は須藤南翠氏のことであらうが、何の禮であつたかは判明しない。只好氏といふのは、今の關根默庵氏のこと。銀座田村氏は田村成義氏のことである。）

十七日　午前より雨降る、左團次居並びの相談に來る。秀英舍より校正來る、ケンチンにて茶飯をたく。十時より薄日出で後曇り。金子來る。二時過ぎ熟柿を食し湯へは入り、夜食に松茸を餘計に食し胸へ支へ氣分惡しく、夜に入り木脇樣に診察を願ひ服藥いたし、宵より寢る。琴も同樣にて右の藥を兩人にて呑む。夕方より雨降出す。

十八日　北風、雨寒し。今朝は氣分よろし、高島屋へ使をやり、居並びの下書を屆ける。春陽堂より三人吉三間合せの郵便來る。

（居並びの相談といふのは、番附の位置のことであらう。ケンチンで茶飯を炊いて供養をしたのは、前にもあつた義父大源の祥月命日にあたつてゐるからであらう。）

十一月

十二日　北風、曇りばら〳〵降り。朝出火見舞に行く石切川岸向ふまで燒けのこる。花柳勝次郎燒る花柳より浮世繪展覽會の切符を吳れる。淸吉寺島の使に來春の相談にて逢ひたいといふ賴み、午後より上野松源樓にて催す浮世繪展覽會へ行き見物なす。春の屋幸堂耐氏に逢ひ直に歸る。夜七時より岡田より寺島へ行き。田村氏來り相談なし、夜十一時三十分に歸る。春陽堂より本來る。

（此の日はまめに歩いた日である。石切川岸といふのは柴田是眞氏の家のことで、その向う側まで燒けて是眞氏の宅は殘つたといふのである。淸吉は今も市村座の狂言作者たる竹柴淸吉氏。この時の浮世繪展覽會の催主が小林文七であつたことは末尾の餘白に記されてある。そこで逢つたといふ春の屋氏は言ふまでもなく坪内先生、幸堂氏は故幸堂得知翁である。春の相談で寺島へ行つたといふのは、春興行のことで、五代目の菊五郎が逢ひたいから行つたといふので、來合せた田村氏は田村成義氏であらう。）

十三日　北風朝曇り、追々天氣になる。春陽堂より原稿催促のはがき來る。秀英舍へ三幕目原稿郵送なす。夜に入り幸堂氏來り壽を祝ふ眞綿持參、神田橋内官報局長の賴みにて本讀を饗庭氏より

の頼みにより、幸堂氏右を頼みに來り、明日行く約束をなし七時頃歸る。岡田より慈善會問合せのはがき來る返事をやる。

（幸堂氏が來て壽を祝ふといふのは、默阿彌が七十七歳になつてゐたからである。その次の本讀みの件は、去冬の『演藝畫報』の誌上で、饗庭篁村翁が『默阿彌翁の本讀み』と題して述べられた、あの本讀みに關することで、その日取もいつであつたか、わたくしにも明白でなかつたが、傳記をつくつた時には十一月八日と推定して書いておいた、がこの日記によつてそれが誤りであつて、十月の十四日であつたことがたしかめられたのである。

十四日　北風、天氣。朝金子來る、郵便局へ原稿を出しに行く、原稿のはしとぢてあれば本と見なして三十日まで二錢、六十日四錢なり。午後二時半より幸堂氏の宅へ參り、同氏同道にて神田橋官報局高橋□□□の宅へ參る、坪内饗庭兩氏夫人同道、その他二三名來客ありて本讀をなす。後酒宴となり十時過ぎに先方を出十一時前に歸る。午後留守へ秀英舍校正來る。石切川岸龜太郎氏火事禮に來る。

（本讀みの行はれた場所が神田橋の官報局の官邸であつたことは記されてあるが、肝腎の主人の名前は忘れたものか明けたまゝになつてゐる。が、これは饗庭翁の話の中にもある通り、その當時の官報局長高橋健三氏のことであつた。この頃坪内先生などは、既に朗讀會なるものを始め、研究されてゐる

たので、特に興味を以て聽かれたのであつたといふ。尙この前後の經緯に就いては篁村翁の回想錄を少し引用するのが便利と考へる。

『……久しい前のことで、久保田彥作さんといふ人は、雜誌や新聞に關係のあつたところから、早くから知人であつた。その人の曰く、河竹默阿彌さんの本讀を聞いて御覽なさい、それはうまいものですよ、狂言が生きて役者の氣込みが違ひます。尊とい寺は門からといふが、芝居の當り不入りは本讀みにありと言つてもよいくらゐで、今はそんな古風なことは尊みませんし、また聞く人を感動させるやうに本式の本讀みをよくする作者もありませんと、自分も卑下の中へ入れて河竹さんの本讀を賞した、が、それは弟子師匠の間柄でさうもあらうと思つたが、默阿彌さんと寧ろ反對側の四方の梅彥翁も予に對して河竹翁の本讀は本物です、一度聞いて見たまへとすゝめられた。チョキがゝりの我輩さう聞いてはたまらない、早速默阿彌翁に願ひ奉ると……わたくしは今は芝居を退いて、おもてむき舞臺へも關係しませんから、式だつて本讀はいたしませんし、それに此の齒がいけませんので、いづれ入齒をして一度は坪内先生とあなたへ本讀みの型ばかりでもしてお聞かせ申しませうといふ約束が成りたつた。……その時の本讀は『上總木綿小紋單地』といふ上總市兵衛の正本で、先代小團次の當り狂言で默阿彌翁が壯年時の作であつた。この狂言を僕は舞臺で見たことはないが、名人小團次出演以來あまり出ぬものであつたらしい。(然し默翁が會心の作であつたことは疑ひない。)諸人その達辯、快辯

出場の人物の人柄から年の老若まで想はせて、實に『芝居を見るより、たしかに面白かつた』僕は、多年の望みもかなつた嬉しまぎれに、少しはしやぎ過ぎたかも知れないが、坪内君はしめやかに靜聽せられたさうだ。その本讀の形式と緩急の工合は、今こゝに言へないが、なるほどこれを聞いて役者各自が引受けて、その役に就いての精神も人物も動作も自然に分かるであらう、仕ぐさも工夫も是から附いたであらうと感心した……』

丁度本讀のことが出たから、ついでにもう一つ、默阿彌の本讀に關する逸話を併せ述べておかう。それは明治十年二月のことで、時の守田勘彌を介して本讀みを依賴して來た西洋人があつた。大藏省に顧問として勤仕中のオーストリアの貴族で、アレキサンデル、フォン、シーボルトといふ男爵であつた。大の日本贔屓で、日本語も自由自在、それに日本の芝居が好きであつたが、どこから傳聞したものか、默阿彌の本讀みを懇望して來た。その時には普通『生立曾我』とか『曾我の敷革』と呼ばれてゐる、曾我の五郎十郎の幼年時代のことを書いた物を讀んだといふ。シーボルトといふ人に本讀みの味が分かつたかどうかは知らないが、兎に角さういふことがあつた。そしてその後シーボルトの望みに從つて、生立曾我を默阿彌自身淸書して贈り、歸國の際に持歸つたといふことだが、その正本は今何處にどうなつてゐるものかしらぬ。

ぜんたい、本讀みといふものは、饗庭翁の文中にもある如く、決定した狂言を一座の關係者全部に

披講する爲めに、狂言作者が朗讀をすることを言つたもので、今日上場さるゝ新作の多數の如く、一度雜誌に載つたり出版されたものならば、何人でもそれに就いて研究することができるのであるが、往時の如く活字といふものもなく、脚本といつたらば座附の狂言作者の手によつてのみ提供された時代にあつては、上場と決定した脚本なるものは、狂言作者の手によつて作られ、手書された一部きりの正本よりほかならないのであるから、それを披講するといふことは如何に重要なことであつたかが想察されよう。全部の役者や囃子方が、狂言の筋を知るのも、亦自分の割あてられた役柄や、作その物に於ける地位や役目を知るのも、亦他の役、人物との關係を知るのも、全部それによつて了知せしめるのであるから、今日とは譯が違ふ。(今日でも稿本によつて新規に上場される場合は、同じであるが、)つまり本讀によつて各役者に狂言を理解せしめ、各自の役柄を呑み込ませねばならないものであつた。であるから、舞臺の空氣なり、各人物の性格や、年齡、恰好の如きは、すべて本讀みによつて會得せしめるべきなのである。然し、狂言作者の本讀みなるものは、所謂聲色とは物が違ふ、不即不離の間に心持をそこへ漂はせるにとどまつてゐるのでそれに扮する役者の口跡を眞以たり、舞臺の上のやうに調子を張つて讀むのではないので、無論首をふつたり、身振をすべきものではない。そこの呼吸が非常にむづかしいのださうである。)

二十四日　西北風、午前一時過ぎより雨降出し、朝市太郎來る、雨替町の墓參りに行くといふ。九時三十分より聞成寺へ行く、佐次兵衛のみ外親類來らず、十時過より追々來集ありて十一時經初まる、同寺隱居へ天竺德兵衛咒文註解の禮に風月堂一圓の菓子切手を禮に送る、來會者は米久、石田、倉田、茅丁倉田。深川倉田、長谷川、我等なり、寺にて精進料理馳走、料理は菊屋橋八百善なり、菓子は榮太樓にて美事なり、四時前歸宅、夕方に夕日出で、夜に入り天氣になる、留守中信州飯田へ行きし淸元延壽より手紙來る、四方の山もはや雪のよし。極寒の如くにて寒さに困るよし。聞成寺より法話といふ雜誌五册貰ふ。

（雨替町といふのは親戚のことであるが、その記事の簡明であることや、料理引物等に對して興味を以て記してゐるところに、默阿彌の一面が現はれてゐる）

十　二　月

六日　北風、天氣。朝名倉氏へ郵便を出す、坂野へ斷りの郵便出す。午後神田橋內高橋の御新造過日の禮に來る、鰹節箱白めいせん一反貰ふ……

（これは多分先日の本讀みのお禮に、高橋氏の夫人が見えたのであらう。）

八日　午後、曇り。朝豐を家根龜へやる。鳶二人大工二人植木二人で物置の地形なす。豐手傳ふ。植木屋霜除け、三時過より雨ぱら〳〵降出す、四時過に建前、暮合に建て仕舞ふ。坂野より葉書來る。春陽堂より八號原稿催促のはがき來る。三時過に角尾氏椀盛三人前持參、夕飯に椀盛食す。捨藏の鹽梅のよし極うまし。市太郎終日手傳ひ、夜に入り雨降る。午後家根龜瓦師重郎を同道なし來る、物置の瓦を頼む。大工等へ手拭二つづつ遣はす。夜中秀英舍より校正來る、夜に入り雨止む。

（此の日には、以前あつた物置を取りこはして、母家とは少しはなして建てたが、その建前をしたのである。極く小さい物置だから、簡單に出來上つてしまつたのである。）

廿一日　北風、晴。春陽堂よりはがき來る、越後屋へ菓子をあつらへにやる。伊東専三氏來る、ころがき土産。金子歌舞伎新報のことにて來る。越後屋より菓子特參。早晝にて今戸磐瀨氏へ栗の禮に行く、菓子特參、梅彦忰の見舞に行く、菓子土産、根岸森川思軒へ過日の禮に菓子持參、幸堂氏來る、饗庭氏のあとへ引越すとの咄し。高橋建三氏の宅へ禮に行く、菓子折持參、上野横丁山崎へ出産の悦びに行く一圓鰹節切手、水近江へ一圓酒の切手。留守へ竺仙子禮に來るみやげばかとはしら。今日冬至故屋根へ水を上げる。隣り垣根のつくろひ出來上る。

湯殿あらかた出來る。

(伊東専三氏といふのは、明治十年以降戯作風の才筆を揮つた、伊東橋塘氏のこと。越後屋といふ菓子屋は今も尚一つ目にあつて、イキなほんのりとした菓子で有名の家で、本郷の藤村と相對したものとされてゐる。今戸磐瀬氏といふのは、醫士であつて通人であり、劇通であつた磐瀬淺々氏のことである。栗は默阿彌の好物であつたから、時々到來したことが書かれてある。森川思軒氏とはどんな交際があつたのか判明しない。高橋建三氏方へ禮に行つたことが見えてゐるが、默阿彌の義理堅い、又物などを貰ひぱなしに出來ない氣質がよく現れてゐる。)

廿六日　北風すこし曇り、天氣。今朝左りの手しびれ足もだるき故木脇氏へかゝる、中氣下地故エレキをかけて貰ひ、丸薬を貰ひ歸る。今日朝より疊屋來り座敷表替をなす。爲三より備頼みのはがき來る。夜十二時頃雨少々降る。

(これが默阿彌の發病の第一日と見てよからう。丁度一ヶ月を經た、翌年の一月二十六日に歿したから、腦溢血の最初の症候であつたと言つてよからう。この容體が續いてゐて、翌年一月三日にぐつと重り、それからずうツといけなくて二十六日に歿したのである。木脇氏といふのは、近所のかゝりつけの醫師である。爲三より備頼みのはがきといふのは、門弟の竹柴爲三氏が、門弟仲間から師家へ備

へる鏡餅のことを依賴して來たといふのである。これは今以て繼續してゐる每年の嘉例である。）

三十日　北風、天氣。後藤猪太郎氏より壽の字賴みの郵便來る。屋根豐を大工多吉の葬式へ代りにやる。木脇氏へ行きエレキをかけて貰ふ。市太郎寺參り、所々買物を賴む。名倉氏へ禮を持たせ虎吉をやる。豐川社へ祈禱料を持たせやる。龜澤町のブリキヤ勘定を取りに來る、直に渡しやる。ガラスの醬油入を同人より貰ふ。山造の母來る。午後いと淺草へ行き、河竹へ寄り觀世音待乳山へ參詣なし歸る。久保田來る、越後屋切手。升三備と鮭。靑吉福神漬持參。賢治備砂糖持參。守田より備來る。川崎屋より玉子折來る、關根只好氏より草鞋行脚といふ本郵便にて屆く。

卅一日　北風、天氣、風なく寒さゆるむ、極おだやかなり。榮次郎より使來る、玉子持參。植忠花持參、拂渡す。鳥越中村へ玉子折持たせやる。木脇氏より屠蘇貰ふ。午後いと寺參り、歸りに榮次郎へ土産三圓遣はす。木脇氏へ元日二日の藥價を取りにやり藥價を拂ふ。信三備砂糖持參、甲平同斷使にて持參。牛乳屋拂取りに來る。

（日記はこれで終つてゐる。そして三十日と三十一日の兩日だけは、右側に附してある朱書きの丸のないまゝになつてゐる。これで見ると、やはり二日位づつ溜めておいて書いたもので、次に書く時に

前の分だけづつ朱書きの丸を加へて、おさらひをしたものではなからうか。果してさうであるかどうか斷言できないが、何にしても、丹念な綿密なやり方には恐入つてしまふ。

三十日の分にある壽の字といふのは、七十七歳だといふので、壽の字を色紙や絹地へ書いてくれとの依賴なのである。いととあるのは、長女糸女のことである。河竹とあるのは故三世河竹新七のことで、久保田は久保田彥作のこと、守田は守田勘彌のこと、關根氏は默庵のこと、榮次郞は役者の尾上榮次郞。他は何れも門弟のことで、歳暮の祝儀に來たのを書留めたのである。)

先づ日記抄はこのくらゐにしておくことにする。芝居からは隱退はしてゐたが、尙どんな風に關係を保つてゐたか、又交友狀態が如何樣であつたか、晩年が如何に忙しい生活の中に終つたかも大凡想像することができる。

河竹糸女略傳

河竹糸女が事

小生が母糸女に別れたのは、日尚淺いことで、ここにその生涯の委曲を盡すことは覺束ない。ちやうど本書の改版に從事中であつたので、母の事どもを默阿彌傳に添へておきたい衷情より、思ひ浮ぶまゝに記したもの、次の一篇である。首尾整はず、遺漏誤脱も免れまいが、匆卒の稿とてお見許しを願ひます。

生立

糸女は默阿彌の長女として、嘉永三年の八月二十日に生れた。その頃默阿彌は、既に芝から淺草へ轉住してゐたから、淺草區馬道町二丁目十二番地、正智院の地內に於て呱々の聲を上げたのであつた。馬道二丁目は、淺草廣小路から觀音堂へ向つてはひる、所謂仲見世の東側裏にあたつてゐる。『いと』といふ名は、默阿彌の妻女即ち母の命名したもので、『い』はいろはの頭字だから、緣起のよいやうに『いと』と附けたのだといふ。

糸女は生得まことに虛弱であつた。早產の故であつたと傳へられてゐるが、生涯病身で終つたといつてもよい。五町以上の道をひろつて歩いたこともなく、背丈は決して低いはうではなかつたが、體

糸女寫眞像（五十歳）

糸女筆蹟

正本表紙見返しの役割・日記の一部

（五一〇頁參照）

重が十貫目に達したことはなかつたといふくらゐ、羸痩してゐた。けれども養生に注意したのと、規則正しい生活と、胃や心臓が丈夫で、氣力がたしかで、所謂シンに丈夫な所があつたから、七十五歳の壽を保てたのであつた。それも、倘乳癌にさへ罹らなかつたなら、まだ數年は保たれたであらうと思ふ。

糸女の母は子供の躾に就ては嚴重であつたから、身體がひよわいからといつて、あまやかしはしなかつた。母自身も松平出羽守樣へ御奉公に上つてゐたこともあつたが『男でも女でも他人の中へ出て苦勞をし、奉公をしなければ、ほんたうの一人前にはなれないものだ』といふ考へを持つてゐた。尤もその當時にあつては、奉公をすることは中學校や女學校へ上ると同樣な、缺くべからざる子女の教育ともなつてゐた。けれども糸女は、あまりに身體が弱くてかぼそいので奉公には出さなかつたが、『奉公に出ない代りに、奉公しただけのしつけを私がする、嫁にやつても、先方の姑に禮を言はせるやうにする』と口に出しても言つたといふ。いかにもきびしい躾方であつたので、糸女が八九歳になつてから、此の母は繼母ではないかと子供心にも疑つて、親戚の伯母に涙ながら聞訊したことさへあつたといふ。そのくらゐに嚴重であつたらしい。

默阿彌の妻女は、默阿彌をして眞に後顧の憂ひなからしめ、四十歳以後に於て量質ともに勝れた、澤山な仕事を成さしめた程の、器量人であつたから、何一つ出來ぬといふことがなかつたといふ。從

つて、裁縫から禮儀作法、來客の應接、料理の仕方、下女下男の使ひ方、殆ど家庭の主婦として間然する所のないやうに、女としての勤めを、ピシ〳〵と教へ込んだのであつた。糸女も亦それをよく遵奉して、實によく行屆いた、一個の完全な人物になり果せたのであつた。而も、糸女はいつまでも、この母の恩を忘れなかつた。事毎につけて『これはお母さんが、かうして教へて下すつたのだ。せめてもの御恩報じに、私はかうしてお前達にも話すのだ』と、吾々によく說明して聞かせた。『私のお母さんといふ方は、物を教へて下さるのに、一度は懇に手を取つて教へて下さるが、それを忘れでもすると、なかなかお許しにならなかつた。何でも出來ないといふことはない筈だ、お前は手も二本あるね、指も五本づつある。それで出來ないことはない筈、さあやつてごらんなさい。よくさうおつしやつた。』とわたしに話したこともある。糸女は長女であつたから、猶更理想的に教育しようと考へたのではなかつたらうか。（糸女の母のことは本書三六六頁に尙詳しく述べてあります。）

糸女の生立つ頃は、まだ富本の盛んな時であつた。糸女の母も富本は相當に許れたといふ。そんな關係から、糸女も七八歲から富本を習ひ始め、富本音羽太夫に就て習つた。身體はひよわかつたが、頭腦は極めてよかつた、（默阿彌の頭腦を繼承したものか、晚年に至るまで、頭腦は極めて明晰で、記憶力に富んでゐた。）富本の師匠音羽太夫も、河竹新七の娘だといふので、特に糸女の爲に意を用ひた

せるもあらうが、富本を習得すること極めて速かであつたといふ。咽喉も立派にふッきッて、リョのきく、力の籠つた太い音聲で、何を語つても子供のやうでなかつた。殊に『三人上古』のやうに、複雜な語り分けを要するものも得意であつたといふ。

糸女が十二歳の時、師匠の音羽太夫は江戸を去つた關係上、富本を止め、一中節を習ひ始めた。初代宇治紫文齋の妻女である初代の倭文事名人お靜といふ、當時既に七十餘歳の老齡であつた、老師匠に就て習ひ始めた。此の名人お靜と糸女との關係は、糸女自身が晩年に誌した『名人お靜の噺し』といふ一篇に詳しいから、それに讓る。(此の一文は大正八年の四月『日本及日本人』誌上に掲載されたので、此世に殘つた記念として後に附載しておきます。)

父母兄弟と

糸女の同胞は四人であつた。長男である兄は商人となり、吉村家代々の家名を嗣いで、吉村勘兵衛と稱した。妹は後年柴田是眞の門に入つて繪畫を學び、是眞の十哲とまで稱された島女である。(島女のことは、本書三七〇頁に述べておいた。)次妹はますと呼んだが、これは明治五年に十三歳で歿した。

糸女の兄勘兵衛は、幼より志を立てゝ商人を志望したので、文筆上の業體は糸女が繼承することに

なつた。幸ひなるかな、糸女は幼少から馬琴京傳等の戯作を愛讀し、好んで文章を綴ることさへあつたので、默阿彌存生中も種々と手助けをなし、又死後に至つても默阿彌の著作物を保護するに都合がよかつた。糸女と父默阿彌との事に就ては、前版の默阿彌傳中に述べたことがあるから、それを爰に引用しておきたい。

島女が默阿彌の血の一半、繪畫的の要素を承けついだものとすれば、其の作者としての一半を遺傳したのは、長女の糸であらう。

糸女も島女も共に兩親の性質を承けて、頗る几帳面であつたが、島女はむツつりとした沈着寡默な父の性癖の方を多く承け、糸女は輕快な怜悧な母の世才をも遺傳し得た趣が見える。で默阿彌は其の性行上糸女を殊に愛してゐた。糸女も亦『十六歳より佛門に入り一生夫を迎へず』に、兩親を此上ない大切なものとして、孝養を盡したのであつたが、父默阿彌に對しては、特に、殆ど崇拜的の敬愛を捧げてゐたらしい。

藝術家には往々にして見ることがあるが、自己に最も接近した家庭の間に、熱心な——多くは異性の——同感者を得て、一種靈妙な刺戟と奬勵とを受けて、制作力を活潑ならしめる場合があるニイチエ、ワーヅワース等と其妹との關係などがその一例である。默阿彌と糸女との場合も、多少それに似通つたあるものがあつた。

糸女は幼少から讀書が好きで、草雙紙や合卷等を好み、殊に馬琴物の愛讀者であつた。十五六歳の頭からは母の手傳ひをする傍ら、父の言附で種々の寫し物をしたこともあつた。それに父の系統を引いて、頭腦が明晰で記憶力がよかつたので、合卷、草雙紙等を讀んで、其の筋、物語の要領を書取つたり　或は講釋師に斷つて毎晩寄席へ通つて續き物を筆記したりして、父に材料を供したこともあつた。糸女が今でも一つ話のやうにする思ひ出は、二十五六歳の頃に始めて『筆取り』をさせられた時の事である。それは明治九年の三月、中村座で稿下した『鎌倉山春朝比奈』であつた。折ふし默阿彌は充血性の眼病で、眼を使ふことができず、何かの都合で門弟にも來て貰へず、困り果てた結果、お鉢は糸女に廻つて『おれの言ふセリフを書取つてくれろ』といふことになつた。最初は覺束なくも筆記したが、父の口授が早くて書取れなくなつたり、知らない字が出て來て苦しんだ擧句が、冷汗でビッショリになり『困じ果てゝは打ち泣くめり』と嘆じながらも馬琴の筆取りをしたお嬢さんを、つく〴〵思ひやつたといふ當人の話。

此の後は、折々『筆取り』の役を命ぜられた。糸女も亦、日常の世間噺にも氣を附けて、面白さうな、題材になりさうなものは一々書留め、又書物を讀めば其一節を書取り、新聞紙を見ても其の心得で、時には雜報を書き拔いたこともあつた。而して、一定の手箱の中へそれらの書き留めたものをば、何くれとなく入れておく。と、時折默阿彌に閑暇があると、『何か溜つたか』と言

つて明けて見、使へるものなら役に立たせたこともあつた。默阿彌の助手といふ程でなくとも、たしかに一刺戟とはなつたのである。

そんなわけで、默阿彌とは傾向を同じうしてゐたから、自然愛されもしたであらう。けれども、默阿彌といふ人は、あらはに面上に悦びの色を輝かして子の愛に溺れ、ほた〳〵悦ぶやうな人ではなかつたから、どこまで行つても『怖いお父さん』であつた。然し、衷心から愛された秘藏子であることは、家人以外にも知れわたつてゐた。門弟にせよ、出入りの者にせよ、何事かしくじつて、默阿彌の勘氣を蒙むつた場合に、詫をして許して貰ふには糸女に限つてゐたといふ。まだ糸女は幼少から病身であつたから、風でも吹いたり雨でも降り出さうものなら、どんな用事があつても彼は外へは出さなかつた。又病氣で寐てでもゐると、默阿彌は外へ出てゐても、始終沈んだ顏附をしてゐたといふ。幾歳になつても、まるで十三四の子供でもあるやうに思ひなしてゐたのであつた。

默阿彌が晩年に及んでは、長子が業を異にしてゐるので、糸女が當然作者としての家業を繼がねばならぬことになつた。で、一層丹精を怠らず共の道の修養に努めた。明治二十年の末、著作權法が勅令で公布されてからは、始めから所有者を糸女にして登錄を出願した。其の取扱人は竹柴其水氏であつたが、糸女は同人を助けて、見も知らぬ活版屋を訪問したり、不慣れな校正までもみ

づからした。其の後脚本の檢閲が峻嚴になつて、風俗壞亂の虞ある箇所の修正を餘儀なくされた時にも、糸女は自ら筆を取つて、再三の添削を施した。今日各劇場で使用される默阿彌の作（現行の臺本）は、殆どすべて糸女の修正を經たものといつてよい。

脚本の改訂が相當に出來るといふことは、やがて、狂言作者としての能力を立證するものであるといつてよい。明治十二年の三月、市村座に上演された『二正權妻梅柳新聞』は『お若伊之助』から脱化したもので、糸女が書いて默阿彌が補訂したものであつた。もし初から作者としての修行を積ませて、門弟同格に敎へこんだなら、或は立派に狂言が書けたかも知れなかつたが、生得病弱であつたのと、母の禁止に逢つたのとで、父母の存生中は思ふやうにならなかつた。

默阿彌の歿後、家人は時を移さずに墓をしつらへ、翌年には向島の百花園へ『狂言塚』を建立した。其の以後今日まで、糸女は女の身一つで、よく一家を維持し、門弟の誘掖に努めたのであつた。

父默阿彌は、明治二十六年一月に歿したのであるが、その以後は母の晩年をいたはりながら、只管默阿彌の著作を保護することに腐心した。糸女は生涯夫を迎へず、兩親の世話をして來たのであつたが、明治二十八年には、前々から信仰の厚かつた、湯島靈雲寺の住職智龍和丈に就て、母と共に得度

を受け、『智妙』といふ名前を授けられた。師の智龍妙辨の頭字を取つて、附與されたものであるといふ。

糸女の母琴は、明治三十六年四月に歿したが、その後は實兄たる勘兵衛並に故竹柴其水等の幇助を受けつつ、亡父の著作の保護、家門の維持、門弟の誘導等に專らであつた。其の間には、『辨天小僧』に關する著作權侵害の訴訟を提起して、勝訴したこともあり、又は『茶臼山』の無斷改作事件に就て福地櫻癡居士を難詰した事などもあつた。『辨天小僧』の裁判は、明治三十四年のことで、前後三ヶ年にわたり、大審院まで持ち出されたが、第一審、第二審とも勝訴で通り、首尾よく父默阿彌の著作權を一般斯界に確認せしめた訴訟であつた。まだその頃は著作權なるものに就て少しも理解されてゐなかつた、普通版權と稱されたが、ハンケンとは何處のケン(縣)かと揶揄され勝ちの時代であつた。深川座が『辨天小僧』を敢て無斷上演したのを訴へ、三年にわたり法曹界の問題となつてゐた。恐らくは、版權著作權に關する最初の最大の裁判事件であつたらう。坪内博士が周到明快に論證せる鑑定書を調成されたのも此時である。一方から見れば、此の裁判は單に、默阿彌の著作を保護せるのみならず、著作權法を徹底せしめ、著作權の意義を一般人士に認めしめるに、大いに與つて力あるものであつた。

大正八年九月に東京作者睦會なるものが生れた。これは東京在住の狂言作者を會員とし、狂言作者

相互の親睦扶助、作道振興を主眼とした會で、その時には推されて會長になつた。

明治四十四年の十一月、默阿彌存生中より交誼を賜はり、且著作權問題に關して恩義を蒙むつた坪內逍遙博士の媒介によつて、繁俊を養子とし家の後嗣となした。

大正十二年の大震災には、不思議に一命を拾ひ、爾來澁谷の假寓に靜養中であつたが、同十三年十一月二十四日午後四時、固疾たる乳癌に感冒を併發し『功成り名遂げた人』として長逝した。享年七十五であつた。

日常、性行

默阿彌が生涯を通じて身を持する事極めて謹嚴で、几帳面であつたことは『默阿彌の人物』中に詳しく述べた積りである。糸女は、その父默阿彌を、慈父とも師宗とも尊敬し、殆ど絕對無二の思慕憧憬の的としてゐたのであるが、そのせゐか、糸女も亦身を持すること極めて謹嚴、方正であつた。几帳面であつた。綿密であつた。義理堅く、折目正しく、終始變ることなき沈着な日常であつた。ただの一日でも半時でも、心の遊んでゐない、人が側にゐやうがゐなからうが、行住坐臥きちんとした愼しんだ生活であつた。『少し暢氣になれ〳〵と言はれるが、わたしはさういふ心持にはなれない。このか

が性に合つてゐて、自分の氣に濟むのだから。』よくさう笑ひながら言つた。尤も、生涯夫を持たずに終り、又父母亡き後の二十餘年は、ほんとうに女の身一つで、內外の家事を處理して來たのだから、おのづから端正、謹嚴にならざるを得なかつた事情もあつたであらう。默阿彌の歿後に剃髮式を受けたのも、又嗜好として唯一の道樂であつた、一中節をピタリと癈したのも、修身齊家といふ、健氣な精神に根ざしたものであつたと思ふ。

糸女は實際しつかりとした人であつた。理性の勝つた人であつた。膽のすわつた男性的な性格の持主であつた。忍耐強くもあつた。女々しく愚痴をこぼすなどといふことは、極めて稀であつた。大正十二年の大震災には、ほんの小さい葛籠を助けたきりで、あらゆる家財を燒き盡したのであるが、さして愚痴をこぼさなかつた。晚年に及んで、夫の悲慘事に遭遇した母の心事には、察しきれないものがあるが、事每に愚痴をこぼすやうな事はなかつた。物のあきらめ、思ひ切りは、時として男子も及ばなかつた。すべて濟んだ事に就いて、兎やかう言ふことは好まなかつた。而して、假令立腹することがあつても、容易に表面へ現はしたり、後々まで口へ出して、愚圖々々と言ふやうなことはなかつた。

然しながら、たゞ謹嚴で、しつかりとした人物であつたばかりではない。その一面には、極めて率直な、ざつかけない、さばけた、洒落な所もあつた。親戚始め、一般の人は、ただもう几帳面で

堅ッくるしいばかりの性格とも考へてゐたらしかつたが、その半面には、極くざつくばらんなところがあつた。『わたしは强情でも頑固でもないが、ヘンコといふのだね。ヘンコといふ癖があるだけ、一旦言ひ出したことは、變替へない、融通のきかない人間だからいけないよ。』そんな風に自分から言つて、笑つたこともあつた。

座談は巧みで、趣味に富んでゐた。悠揚迫らざる、落着いた態度で、順序よく靜かに話してくれる昔話には、何ともいへない、引入れられる味ひがあつた。本來記憶がよかつたから、明治四十三年の大洪水に逢つた時の話などは、何月何日に水が追々につき始めて、何日には床上一尺二寸まで上り、滿水の中を盥に乘つて親類先へ立ち退いた。それから何日を經た何月の何日に歸宅して、後仕末をし始め、いつ〳〵までにすつかり片附いたと、長物語りをするのが、いつも同じで、正確なものであつた。

けれども、座談は巧みで面白かつたが、心にもない世辭を言つて、人の機嫌を取つたり、わざとらしい、歯のうくやうな座なりを言つて、悦ばせるやうなことは殆どなかつた。儀禮的に行屆いた話はしたが、追從輕薄がましいことは更になかつた。いつも、正直な心の持主であつた。

家事に就ても注意深く、綿密であつた。遺言狀なども、時折必要に應じて書改め、震災前などは、此の衣類は誰れに、これは彼に遺物として遣はすやうにと、札紙まで附けてあつたのをおぼえてゐる。日記なども三四年前までは、丹念に附けてゐた。

人は冥利といふことを忘れてはいけない『お母さんといふ方は、實に冥利のよかつた方だつた。物を吝嗇にするのと、冥利のいゝのとは違ふ。わたしも冥利に盡きると怖いから、物を粗末にしたり、榮耀や贅澤な眞似はしません。』――よくさういふ事を言つた。まつたく、半紙一枚無駄にしなかつた。冥利を重んじ、物を粗末にはしなかつたが、たしかに吝嗇ではなかつた。慶弔其他所謂附合ひ事には、可なり切れはなれがよかつた。自分でも、それを多少の誇りとも感じ、家名に對する義務とも思つてゐたらしい。

從つて、自分一身のための榮耀とか贅澤といふことは、全くしなかつた。自分が家を支配するやうになつてからも、時の流行によつて着類を新調したり、持物、履物だのに、きらびやかな眞似をしようとしたことは、絕對になかつたといつてよい。ただ家門の維持のためにいそしんで、そんなものを顧みようともしなかつたのである。また、陽氣がいゝからといつて、氣の合つた者と始終出歩いたこともなければ、そんな打ち解けた友達も、先づなかつた。家庭の主婦としては、飽くまでも節制的であつても、一個の社會人としての面目を全うせんとしてゐた。――それが母の心ゆかしであつたらし

い。

糸女は自分も得度を受けたくらゐで、神佛に對して敬虔な念を絶えず持つてゐた。父母の爲に追善供養を營むは元より、母方の實家たる伊藤家の爲にも、供養寄進する所甚だ篤かつた。湯島の靈雲寺、藤澤の遊行寺、深川の心行寺等に於て、大施餓鬼を修行し、法要を營んだのは、何回といふ數を知らない。また、默阿彌の歿後には邸內に伏見稻荷を勸請し、或は成田山、新井の藥師、堀の內の祖師、弘法大師等をも信心する所深かつた

糸女が乳癌を煩ひ始めたのは、大正十年であつた。大正十年の七月、左りの乳首の下方に五錢白銅程の大きさの堅いシコリがあるのに氣附いた。乳は女の急所でもあり、痛くもなく赤く腫れてもゐないシコリであるからといふので、近藤次繁、原勇三、竹內薫兵等諸博士の診斷によつて、『惡性に變化すれば、癌になるものだ』といふことになつた。切開して取り去るのが、最もよい療法だといふことに一致はしたが、刀を當てることを生來好まず、それにもう七十二歲の老齡でもあつたし、いつたい病弱なのであるから、手術をすることは見合せ、ただ成行きを注意してゐたのであつた。

然し、その翌年一ぱいは、さして、成長もせずにゐた。ただ左りの肩や背中が凝るぐらゐの容態しかなかつた。が、その翌年――即ち大正十二年に至つて、癌として顯著な發達をし

始め、七八月の交には小さな潰瘍さへ形成するやうになつた。それと同時に、身體ぜんたいは著しく衰弱し始めたのであつた。

九月の大震災の時には、實に九死に一生を得たのであつたが、不思議に傷害といつては全くなくて濟んだ。あの時には、大震後三時間ほどして、火災の近づくに及んで本所から深川方面に避難し、河中にあつた船によつて危ふく一命を拾つたのであつたが、衰弱中の身體を、一層衰弱せしめたことは言ふまでもない。

大正十二年の十月中旬、災後一ヶ月半にして、避難先きの龜井戸から、中澁谷の假寓に引移つた。震災によつて全燒したこととて、手廻りの道具其他萬端不足勝ちながら、靜養に怠りはなかつた。が昨大正十三年に入つてからは、病勢は一層進行し、乳首も見分け難いほどに潰瘍して來た。所謂癌の本體が、苺か柘榴の實のやうに露出し、追々に擴大し始めた。その成長は加速度的に早くなつた。然し糸女は四年前、發病當時から死を覺悟してゐたから、決して落膽もしなければ、意氣銷沈もしなかつた。ただ『父母にも孝を盡し、神佛をも信じ、眞直な道を踏んで來たのに、どうしてこんな病ひが發したものか、業が深いからなのであらう』と、宿命の恐ろしさをしみ〴〵と歎じたのみであつた。母は私を助手にして、自らガーゼを取り換へ、消毒し、アネステヂン軟膏を貼附する事を繰返した。『普通の女だつたら、氣落ちをしてしまふだらう。』さう言つて平常と異る所はなかつた。何といふ氣丈なこ

とであらう——さう考へて默々としてゐるのほかはなかつた。何もかも明らかに分かつてゐるだけに何とも慰める術がなかつた。

追々に迫る死病と戰ひながら、母は元氣であつた。——病氣を知らない人は、平生と變らない談話の調子と元氣に、恐るべき癌腫に惱んでゐるとは、想像もしなかつたであらう。七月に入つて、相州酒匂海岸の松濤園へ出養生に行つた。澁谷の家は少し手狹でもあり、暑中床の上に寐たり起きたりしてゐるのは、凌ぎ兼ねるからでもあつた。

酒匂の松濤園には、明治二十四年の開園當時、父默阿彌及び其水と共に宿泊したこともあるが、その後五六度も出養生に行つた所なので、園主大村氏を始め古い馴染なので、自分の家にゐるも同じ氣安さだと、よく自分も言つてゐた。『去年の震災で、此世からなる地獄へ落ちた思ひをしたが、かうして松の間を通つてくる風に吹かれてゐると、ほんとうの極樂だ、これがほんとうの地獄極樂だ』といつて悦んでゐた。けれども、病勢は進む一方であつた。左りの腋下に轉移してゐたのが、ぐん〳〵と成長して血管を壓迫し、血行を緩漫ならしめる結果、赤ン坊の腕のやうに腫れ上つて、鈍痛さをおぼえ、時として發作的に激しい神經痛を訴へるやうになつた。

酒匂に上華寺といふ時宗の寺がある。この寺の先住は、默阿彌に『えんま小兵衛』の材料を暗示した御水亭種清事櫻川智俊であつた。その關係から智俊和尚の後嗣たる六郷氏とも親しくし、松濤園に滯

在中は、毎日たづねて來てくれた。と、その六郷氏から、その上聾寺の御本尊たる阿彌陀如來の御像が、震災の爲に御首を殘して粉碎されてゐることを聞いた。糸女はいかにも勿體ない、お情ない次第であるから、多分のことはできないが、叶ふことなら御修覆を申上げたいと申し出た。寺の方では、世話人始め檀方一同に話したところ大悦びで、早速その申出を受けて修理にかゝることになつた。糸女は自分の後世の爲と、震災の時に溺死した孫の菩提を弔ふ爲にといふ意味で寄進をなし、十月の初めに出來して開眼を濟ませ、歸京した『阿彌陀樣を一體御修覆申し上げた、その功德によつて、どうぞ早くお側へまゐられるやうにお願ひしてまゐりました』と、歸京してから人に話してゐたが、やはりさういふことになつてしまつた。

十月の初めに歸京して間もなく發黄になつた、癌の內服用藥カルチノリヂン（松村博士創製）は、注射藥ほど發熱の虞れもなささうなので、早速取つて來て一ヶ月程持續した。その結果は多少膽液の分泌を輕減したらしく、少しく明るい心持を懷くことかできたが、その時旣に餘病を誘發してゐたのであつた。

○

十月十二日夕刻、いつものやうにガーゼの取り換へをしてゐる內に、甚しくではないが、出血を始めて、三時間ほども止まらなかつた。結局二三醫師の意見を問合せて、安靜にし、ぢつと抑へたまま

臥床することにした。けれども、その爲めに、二三時間胸をはだけ勝ちにしてゐたので、風邪を引き込んだのであつた。翌日からは靜かに床に就かせたのであるが、來客でもあると、話し好きであるから、起き返つて話しをする。とう〳〵三四日を經た十六日の夕刻からは、三十九度以上の高熱を發し肺炎に近い容態になつた。

平生から醫師は注意してくれてゐた。『癌としては、最もよい場所にできてゐるから、直接生命に拘はることなしにゐるが、癌から生ずる毒素によつて、體内の諸機關は悉く衰弱してゐる。どんな餘病でも、輕いちよつとした躓きがあつても、如何樣な危險に陷らせるか測り知られない。』と、果してさういふ場合が押し寄せて來た。種々の手當も效を奏せず、就床僅か八日間にして、二十四日午後四時に、幽明境を異にしたのであつた。注射は前々から、決してするなと言ひ附かつてゐた。注射の代りに、呼吸が困難になつてからは、酸素吸入を施し、幾分か苦痛を和らげるに役だつた。

死の前日の、二十三日の早曉に、どうも容態がおもはしくないので、醫師を迎へたことがあつた。それによつて氣附いたかも知れないが、今度は助からないと覺悟をしたらしく、その朝勞の三五郞と私とを枕頭に呼んで、改めて長らく世話になつた禮を述べ、二三言ひおくべき事を言ひおき、最早これで心殘りはないと言つた。その夕方には、湯島靈雲寺の和丈鈴木宥巖師をお迎へして來てくれといふので、早速先方へ願ひ出で、鈴木師は二十四日の午前十時頃に見えた。その時母は鈴木師に向つて

『どうか三日のうちに樂にしていただきますやうに、御祈念を願ひます。』と請うた。鈴木師は約一時間にわたつて、懇ろに續經をなし、不動尊に祈念を凝らされた。(後に知つたのであるが、その經は大般若經中の第五百七十八卷目、理趣分といふのであつたとのことである。)祈念の終つた時にも、母は起き返らせて、『まことに有難うございます。』と、笑みを含んでお禮を述べた。――不思議にも、その御經に導かれたるがやうに、それからはさしたる苦痛もなく、安靜にしてゐたが、四時間程後には、眞に眠るが如き大往生を遂げたのであつた。

○

死の當日に僧侶の讀經祈願を請ふたといふが如きは、故人の死を修飾せんとする作爲の如くにも考へられるが、眞實上述の通りであつたことは、深く神佛に信心厚かつたとはいへ、寧ろ不思議である。

母は常に談笑の中にも言つてゐた。『私の所では、父も母も靜かな臨終であつた。妹の島はお迎への蓮臺を拜しながら大往生を遂げた。わたしだけが七顚八倒の苦しみをして死に耻をさらしたくないものだ。』と。また『こればかりは、いくら願つてもさうは行くまいが、なるべくは眞夏、暑中には行きたくないものだ。どれだけ人樣に難儀をかけるか知れない。陽氣も寒からず暑からずといふ時にしたい。それから命日がお彼岸にあたるやうになれば、此上はない。』とも言つてゐた。が、それらのことが悉く生前の希望通りになつたのも、奇といへば實に奇である。

無論、震災當時行方不明になつて別れたよりも、どんなに順當か分からないが、慾には、何をおいても刊行中の『默阿彌全集』の完成まで、ほんたうの顧問として存命してゐてほしかつた。全集は第三卷まで出來たのを見て行つた。(第三卷以後もう何冊か出來て來たが、書店から屆けられても、最初に見て貰ふ母がゐないので、張合が少しもないのは致し方ない。)然し、震災後劇壇も追々復活し、又默阿彌の著作も從前通り世に行はれ、又經營者側からも、相當の敬意と同情とを拂はれたのを見て歿したことは、母の最も滿足とした所であつた。『これでわたしは、默阿彌の所へ行つても、立派な土産話が出來る。有難いことだ。』さういふことも、口に出して言つた。

葬儀は十一月二十七日の午前十一時出棺、親戚門弟一同打揃ひ、正午から中野の菩提所源通寺に於て營み、午後一時から二時までを告別式といふことにし、生前御交誼を賜つてゐた方の御燒香を願つた。文壇知名の諸先生、重だつた劇場關係者、何れも遠路を意とせず御參列下すつたには、母も嬉しく御禮を申し上げたことであらうと思ふ。

糸女の書いた狂言

母糸女が默阿彌の晩年に、助手又は祕書のやうな役を、時として勤めたことは前に述べた。妹の島女は繪師として凡庸ならぬ技倆を示したが、讀み書きは甚だ不得手であつたといふ。母が生來健康で

あつたなら、もつと文筆の上で世間へ發表もしてゐたか知れない。が二十歳前後から肺患に罹り、默阿彌の歿する四十餘歳まで、藥餌に親しまなければならなかつたから、まとまつた作といつては殆どなかつた。『佐賀の夜櫻』『佳谷兄弟の仇討』などといふ實錄物を、講釋師の口から聞き取つて、讀物風に梗概を認めたものが三四册あつた。ザッとした筋書は十種の餘もあつたであらう。『佳谷兄弟』の方は半紙で六七十枚もあつて、チョボ入りで、正本製のやうにさへ綴られてあつた。

わたしが母の側にゐるやうになつてから、いつであつたかハッキリ記憶にないが、一幕の『世話場』の稿本を示した。それは母が南北の合卷『怪談岩倉萬之丞』から思ひついて書いた脚本であつた。今から思へば、臺本にして三十二三帳、演技時間にしたならば、一時間ぐらゐは優に要する、床の竹本——チョボ入りのものであつた。さうして、それは三幕ほどの內の一幕だといふ話であつた。私は思つた、折角さういふ眼目の幕が出來てゐるのならば、一流れの作にまとめておきたいものであると。實際書いて書けないことはないのだから、是非まとめて下さるやうに、大いに勸めた。さうして、それは母のためにも、亦默阿彌の爲にも有意義なことであるから、是非何とかしてまとめるやうにと、折があれば母に勸めてゐた。まだ、その頃は母も六十四五歳で、元氣であつた。その世話場の一幕を、わたしが見てから、どのくらゐ間をおいてからだか判然しないが、やがて一流れの狂言にそれが

まとめられた。即ち『怪談淀川霧』といふ三幕物、引返しの幕ともに四幕の世話狂言が出來上つた。母が丹精した『横書き』の稿本を、竹柴其水に内示し、其水の助言によつて數ヶ所を訂正した。(數ヶ所訂正したのみで、臺本として上演できるものになつてゐた。)而して、それを立本といふ普通の臺本に、其水をして清書させたのもあつた。

『怪談淀川霧』の略筋を言ふと、岩倉萬之丞といふ旅役者に思ひをかけた、大阪のおきや浪花屋のお北が、萬之丞にそゝのかされて出奔する。後にお北に萬之丞から惡性の病毒を受けて、どつと病床に就いてしまふ。一方萬之丞は旅芝居に出て、越後柏崎の大名の家老、柳川外記の娘と戀仲になる。外記は二十年前に主家の若君が米山の奥に湯治中、山津浪に逢つて行方不明になつた時、若君の守袋を拾ひ取つて、窃に所藏してゐたので、その守袋を證據として萬之丞を若君に仕立て、主君に對面せしめ、時機を見て後日相續人に取極めようといふ御家横領の策を立てる。この事を風の便り聞いたお北は病中半狂亂となり、越後へ行くといつてふら／＼と家を駈出し、あやまつて淀川へ陷り、溺れてしまふ。お北の亡靈が柳川外記の邸へ現はれて怪異をなし、結局萬之丞は亂心して柳川の娘を斬り、柏崎の市中へ出て、通りがかりの人を斬つて騷がせる。それを土地の俠客花車の長吉が、子分を大勢連れて來て取り押へる。萬之丞は悔悟して、刄を腹へ突きたてるといふまで。――演技時間にすると三時間位はかかるものであつた。

材料のせゐか、草雙紙風のものであつた。二幕目がお北の世話場になつてゐた。

母自身の話によると、五代目尾上菊五郎丈が存生中、いろ〳〵話の末に、岩倉萬之丞の話をすると「そいつァおもしれェねえ、是非仕組んで見てくんねえ、どんなにでもして、きつとやつて見せますから。」といふので、書き始めたものだと言つた。お北と花車の長吉と二タ役を五代目が勤め、お北の世話をして、後に萬之丞の見現はしをする又助といふおちいやを、今の松助丈にといふ積りで書かれたものであつた。然し、この作と限らず、外のもさうであるが、存生中は上演してくれるなと平生言つてゐたので、誰にもあまり見せなかつた。門弟の一人竹柴晋吉氏は、ずつと前にお北の世話場だけ見たこともあり、又多分竹柴其水からも話を聞いたかして、故田村成義翁に話したので、『無線電話』の中に此の作のことが入れてあつたと記憶してゐる。（雜誌『歌舞伎』百六十四號參照）

その次に出來たのは、『弘法大師獨鈷の靈水』といふ一幕物であつた。これは江戸名所圖繪から思ひついた材料であつた。一幕三場の中幕物で、たしか甲州の山中でのことであつた。早魃が續いて水が涸れた。村人は遠くの山の中まで行つて、辛うじて湧き出る清水を、少しづつ汲み溜めて運ばなければならなかつた。そこへある貧僧が來て、水をくれといふが誰もくれない。と、一人の篤志な人が來て、水を差上げるからと我家へ案内し、厚くもてなす。貧僧は此の土地が昔山崩れに逢つて水源が

壊され、夏になると水の爲に村人が大變難儀する物語を聞き、その篤志家の裏手の大岩を獨鈷で打つて水をどう〳〵と湧き出でしめる。貧僧まことは弘法大師にして、水を惠みくれたる人の奇特にめでて、村人の難儀を長くお救ひになつたといふ筋。

これは時間にすると四五十分間で濟むものであつた。爐邊で貧僧に山崩れや地辷りの話をする所にチヨボを用ひ、澁團扇を使つて物語をさせるのが趣向だと言つてゐた。挿繪にした日記によつて見ると大正六年の末に、數名の門弟の前で私が本讀みをしたことが知れる。けれども、母が『横書き』に作り上げたのは、もつと前のことであつた。

もう一つ『養老瀧屏風交張』と題した、一幕だけの極く短い世話物があつた。篤の者の孝行を養老の瀧の話しへ持ち込んだやうなもの。親父が利かない酒呑み、息子が孝行者で篤實なものといふ取合せで、親父に酒を呑ませたい〳〵と思つても思ふやうにならない。そこへ出入り先きの旦那場（酒問屋）のお孃さんが、息子の孝行なのに思ひをかけ、人を介して緣談を申込み、上酒を四斗樽へ一本土産に持たせてよこす。その時親父は晝寐をしてゐて、養老の瀧で孝子が酒を汲む夢を見て起きる。そこへ酒を運び込まれたので、これからは今見た夢の通り、酒が腹一ぱい呑めて有難い、これも悴の孝行故だと悦ぶ。親父が養老の夢を見たのは、枕頭に立てゝあつた二枚折に、養老の瀧の繪が張交に

してあつたからだといふことになる。――目出度い、輕い二番目ものであつた。

〇

母は、これで三つ出來たが、春夏秋冬に材を取つて、『四つにするまで其のうちに書かうかね。』などと言つてゐた。春は『養老の瀧』で、孝行息子を花見に仲間が誘ひに來ても、斷つて行かないといふ所があつて、春の舞臺になつてゐた。夏は『獨鈷の靈水』、秋は『淀の川霧』とかうなつてゐた。冬の分の腹案としては、三美人といふもの〻事を話したことがある。甲州あたりの雪路で、惡漢が美人を誘拐する所などがあつた。が、これだけは具體的にならずにしまつた。

然し、まことに殘念とも、惜しいとも例へやうもないが、以上三種の母の手稿本は、默阿彌の稿本と同所においてあつて、一昨年の震災の際に燒失してしまつたことである。(母はそれだけ丹精したものながら、やはり災後一度も愚痴をこぼさなかつたが。)私は、母が百歲の後には、默阿彌の娘の書いた狂言として、一度は發表したい積りであつたが、それも畫餠に歸した。

(尙思ふがま〻に書添へておくが、糸女の作つた稿本が全く失はれたのを、斯く列記して見ると、何となく母の生涯を修飾せんとするものの如くにも見られるが、これは全く事實である。現に大正六年の十一月二十二日には、數人の門弟は朗讀された『弘法大師』を聞いてゐる。せめて、母が丹精した狂言を脚本として傳へられない埋め合せに、記憶してゐるま〻を書きつけたのである。)

母は默阿彌歿後一時本姓吉村を名乘つてゐたが、三世河竹新七の遺志により河竹姓の返戻されてから、河竹糸として默阿彌門下を繼承することになり、爾來婦女の身ながら門葉の爲めには相當盡す所があつた。死去當時門弟として算へられたものは、左の五十三名に上つた。

竹柴二作　竹柴鳳二　竹柴豐作　竹柴東吾　竹柴重香
竹柴蟹助　竹柴金松　竹柴兼三　竹柴龜三郎　竹柴鷹二
竹柴竹松　竹柴竹三　竹柴爲三　竹柴鯛二　竹柴素文
竹柴梅松　竹柴楳三　竹柴光葉　竹柴保二　竹柴鷄三
竹柴顯三　竹柴源作　竹柴福造　竹柴文作　竹柴鴻作
竹柴榮太郎　竹柴燕二　竹柴傳造　竹柴朝次　竹柴定吉
竹柴左七　竹柴作郎　竹柴山造　竹柴喜三次　竹柴金祿
竹柴金瓶　竹柴錦葉　竹柴金作　竹柴金三　竹柴三千三
竹柴秀一　竹柴秀也　竹柴秀葉　竹柴松作　竹柴雀造
竹柴支葉　竹柴春鶯　竹柴壽作　竹柴新葉　竹柴晋吉
竹柴薪助　竹柴彥三　竹柴清吉

（いろは順）

（附錄）名人お靜の咄し

此の一篇は糸女の手稿に拘るもので、大正八年四月『日本及日本人』誌上に一度掲載されたものである。自分の一中節の師匠の思ひ出の記である。（四八九頁參照）

○昔名人といふと、ちよつと變つたところがございまして、よく名人かたぎなどゝ申しました。一中節の宇治を開いた初代紫文齋の御家内お靜さんも、名人お靜と呼ばれた方で、普通の方とは違つたところがありました。そのお靜さんの事に付き、何やかやとりまぜて、思ひ出すまゝに書留めて見ませう。

○お靜さんは眼涼しく鼻高く細おもて、中肉中ぜいの美人にて、諸藝に勝れてをりましたさうです。けれども紫文さんは美人だからお愛しなすつたのではないので、お靜さんの藝を見込んで御いつしよになられたのだと申します。紫文さんは文を作りお靜さんは傍から手をつけてこしらへ、此の御兩人の爲めに宇治の一派が開け、今日に至ても尙榮えてをるのであります。

○お靜さんは、若い時髷は島田くづしばかりに結び、外の髷に結つたことはないさうで、順講の時は島田くづしに黑の裾摸樣前帶といふこしらへ、まるで菅原の千代がひとりまざつて居るやうに見えたと申します。いつたい人に遠慮すること、諂ふことなどが嫌ひで、自分の思ふまゝを通してをられま

した。順講に出ても三味線は手に取つたことなく、唯その座にすはつて居るばかりですが、名取りの御師匠さん達がこれを見ると何となく氣がさし、うまくひけませぬ、或はその爲めにひき損なつたりして、一同恐入つたと申します。もしかその場の都合で、どうかしてお靜さんが毛氈の上へ上ると、それ家元さんのお三味線だ、早く聞きませうと、一座こぞつて耳をすまし聞いたと申します。
○お靜さんが三味線をひくと、どんな淨瑠璃の出來ない方でも不思議によく聞かれます、又氣に向かぬ時に無理に彈いて貰ふと、その人は一段語れず、中頃にて、けふはのどの工合が惡いから、これで御免を蒙むると云つて毛氈からおりたと申します。それはつまり三味線に妙を得てゐたので、生かすも殺すも自由自在になつたのだと申します。お靜さんの三味線は、眞にぞつとする程うまく、聞入つてゐるうちに人々が恍惚として仕舞つたと申します、三味線ばかりでなく淨瑠璃も紫文さんより上へ出るとも下ではなく、實に妙なりし由にて、その頃の人が名人お靜と呼んだのださうです。
○これまでは人様にお聞きせしお噺しにて、これより先きは私入門してからのお噺しであります。母は一中節が好きでございましたから、師匠えらみをしてゐるうち、共頃はもう淸壽といつておいでのお靜さんのことを聞き、名人と呼ばれるお人に入門させたいといろ〳〵手づるを求め、仲立を以つて先方へ申入れると、切角のお賴みだが隱居して弟子は一切とらぬことだし、一中節は子供の習ふものではなし、子供の弟子は大嫌ひ、御免を蒙むると手もつけられぬ返事でありましたが、母は却つて面

白い御氣質だと尙も賴み入れたので、外の家ならどうしてもいやだが、河竹の娘なら仕方がない、まあ本人を連れて來て御覽なさい。然し前にお斷り申しておくが、三段稽古をして見て氣に入れば長く敎へるが、氣に入らなければ三段でお斷りしますといふ權幕でありました。

その時師匠は七十歲、私は十四歲でありました。七十歲の老體なれど美人の果とて若々しく人柄のよい隱居でありました。初對面の時も、連れて行つた母には何の咄しもせず、私に話しかけ、富本を習つたさうだが、段物は習つたかのといろ〳〵聞きました。あとで聞くと、私に口をきかせ聲の出所を調べたのださうです。

私は七歲の時よりほつ〳〵母が手ほどきをいたし、八歲の時音羽太夫の所へ稽古に參りましたから十三までには富本も段物をよほど上げてをりました。そこで、師匠は段物を習つたかと聞きましたので、今まで富本で老若の詞を語りわけ、又泣く物笑ふ物もあり、こまかきふしをのどをまはし覺えたる事故、これをふはりとした一中節になほすには一通りの事ではなほらぬ、先づ飛びはなれた語りにくい物を始めて見ようといふので、始めての手ほどきに廓の壽を敎へられました。今まで富本ばかりやつてゐたものが、まかりいでたるものはといふ狂言ことばから始まる淨瑠璃に出逢つたので驚きました。二段目は家ざくらでしたが、どうしても勝手違ひなのでうろ〳〵して夢中で上りました。三段目の駒の泪になつてから、これで斷られて、駒の泪ではない別れの泪になりはせぬかと、母も心配し

てをりましたが、或日師匠の方から參られまして、あのお糸さんを今日からわたしの孫におくんなさい。他人で仕込むのはいやだ、孫ならわたしの勝手放題、まあ仕込んで見ようと思ふからさう思つて下さい、然し三段ばかり上つたゞけだから、出來る出來ないは請合へませんと申しました。萬事がかういふ行き方の氣質でありました。こんな風で、私は孫分といふことになつて、弟子入りをいたしました。

師匠は前にも申した通り、弟子は一切斷りましたが、古くからの、のがれられぬお弟子が十一人ございました。みんな立派な旦那方御新造達でございます。師匠がその後淺草から根岸へ移つてからは、皆さんが稽古においでになるに隨分お困りでございました。師匠は身體は勝れて丈夫で煩ふ事などなく腰もまがらずすつきりとしてをりましたが、我儘で、起きてゐるのが嫌ひ、冬は炬燵へ入り寐てをり、夏は涼しき所へ仰向けに寐てゐるのが癖で、稽古と食事の時だけ起きてをりました。旦那方が稽古においでになると、師匠は寐てゐてぢろりと見て、おいでなさいといつたぎり起きません、氣に向かぬ時は、それなりグウ〳〵と高いびきで寐てしまひます、私は一週間位づゝ泊つてゐて稽古に參りましたから、子供心にもお氣の毒に思ひ、何かさらつていたゞきたいと三味線を持出し、その座をごまかしてをります、其中目が覺めると起きなをり、お稽古にかゝります。それも二度ぎりで、出來ても出來なくても構ひません、三度濟むと御免なさいと寐てしまふ。それで厭なら來てくれぬ方がいゝと

いふのであります。その樣子が失禮だか無禮だか私には分りませんでした。唯心の內で、藝も名人となればごうぎなものだと思ひました。三度稽古ではありましたが、稽古上手で、自分がうまく語つて聞かせるといふのではなく、ほんとのふしを語り分けて敎へましたから、どんな方でも受取りが早く旦那方もみなよくお出來で、中には旦那藝でない方がいくらもありました。

○師匠の所へ私が泊り込みで稽古にまゐつたと同じやうに、師匠の方から來た時にも泊り込みで來てくれました。氣に向くと女中を連れて朝の內に出て、お參りなどをして宅へ參られます。表の門から入り草履を脫ぎ、入口へ仰向けに寢て仕舞ひます、母や下女がそこは端近ですから、此方へお出で下さいといつても平氣なもので、もう少しかうやつておいてくれろと中々動きません、其儘にしておくと自分勝手に起きて來て、おつかさん今日はと挨拶して、それから直に、晚にはおつかさんうまい物をこしらへて下さいといふ。其頃宅の隣りに甲子屋といふよい料理茶屋がございましたから、こゝの料理を喰べてくれると何にも困ることはありませんが、師匠はうまい物を喰べ飽きた人故、口取りだのてり燒だのといふと見もいたしません。惣菜のうまい物、駄物でうまい物を好みました。母が手料理で八頭のおいもを二つに切り、出しづゆと味淋にて茄であげ、ちよつと薄下地に煮あげ、上へ鴨のそぼろをのせるとか、又車ゑびをむしつて載せるかして出しますと、おいしいねといひながら、お皿を手に持ち、御飯も喰べずに一皿直にあけてしまひ、お替りと申します。或はいゝ大根を千六本にして

出しづゆで煮込み、そばづゆを作り、大根をおそばのやうにして喰べるのが好きでありました。いつたい食物は贅澤ばかり言つてまことにむづかしく、御飯のたきやう、糠味噌香の物ときては大變にて、一種ちがつた何處にもない糠味噌でした。うまいの何のと是は實にお話しになりません、何でも糠を出しづゆでといてそれへ麹だの味噌だの種々なものを入れて拵へたのださうです。師匠の家にはうまい物戸棚といふのがありまして、その戸棚の中には八百善直傳の何々、菊仙の菊味、又多賀袖の何々といろ／＼なうまい物がございました。喰べ物についても、むづかしい人でありました。

自分が氣に向かぬと幾日でも他行いたしません、氣に向くと毎日でも出歩きます。いつも出る時は無地の着附紋縮緬の被布、鼠絹のパッチといふこしらへ、女中のお春どんは銘仙の小袖に帯を丸くしめ、丸髷でたち、私は小娘のこしらへでいつも三人連れ故、一寸見れば旗本の隱居が孫と下女を連れて歩くやうだと申されました。外へ出ると、今日は何が喰べたいと聞きます、お腹がいゝなどゝ申しますと氣に入りません。喰べたくなくとも何々がいゝと申しますと、其のもよりの見ともない所へ立寄り、言ふなり次第私とお春どんに喰べさせます、二人であゝおいしかつたと言ふのを樂しみにしてゐました。

師匠は利口發明揃つたお人であつた故か、いつたいに利口ばつた人が嫌ひ、馬鹿は尙嫌ひ、誠に氣むづかしき人にてみんな困りました。お春といふ女中ももう四十近く忠實な人で、此人は地はほんや

りとして愛くるしき氣前故、それが師匠の氣に入り娘のやうに愛してをられました。私も父母のそばでほうつと育ちました者故、利口だの賢いのと言ふわけには參りません、唯ぼんやりしてをりました。それが師匠の氣に入つたのでございませう、或時人に話すのに、わたしはこの娘のやうな二人を相手に日を暮らすと腹の立つことがなく、まことに安樂世界です、それ故此の二人は秘藏ですと話してゐました。

藝は名人お靜と言はれた位ですから、淨瑠璃にしても三味線にしてもうまい所は、數限りございませんが、淨瑠璃の方で申さうなら、かるい物でどうしても人の眞似の出來ない、うまいところがございました。先づ、三度笠の『寢ますながらに送られし』とか、椀久の『たどり行く』駒の泪の『ほうれい』若葉萬歳の『袖なし羽織たづな帶』など、これらはまつたく無類で、誰にも師匠のやうにはできませんでした。私は富本出でございますから、咽喉は一寸自由に使へましたから、いろ〳〵にやつて見ましたが、唯器用で咽喉が廻るといふだけで、イキになつてしまつて、中々師匠の眞似はできません、とう〳〵氣に入らず仕舞ひございました。父（默阿彌）も時として稽古を聞きに參り、稽古が濟むと、今のところをもう一度聞きたいと賴んで聞かして貰つたことも度々ありました。

また師匠の三味線は撥もあざやかでございましたが、指に妙を得たお人です、チンとかツンとかひきますと、指の方にうなりのやうな響があります、それが爲め露のしたゝるやうにうまく聞えます、

ゝゝ賤機帶の前彈などをひきますと、皆さんがほうつとしてほれ〴〵と聞いておいでになります。前彈が濟むと皆さんがムウと溜息をおつきなさいました。又掛聲のうまい事は無類で、どんな出來ぬ者でも師匠の掛聲に逢ふと、それにつり出されて語られた位でありました。それに語る方へのどのつゞくやうに彈きますから、語る人が皆うまく聞えます、たとへば鉢の木にしましても、鉢の木を切つて二上りになり、櫻の所などは三味線のお蔭でフワリと語られたことを覺えてゐます。

昔の一中節は面白くないものとなつてゐました。咽喉がころ〳〵かへると師匠はいやがつて、あれはお淨瑠璃ではないと申されました。咽喉がよくてもころりと言はせず、唯ふはり〳〵と丸く節を語るのが一中節の本分ださうでございます。私などは富本出で、のどを使ひつけてをりましたから、實に困りました。師匠に少しも氣に入りませんでした。一年三ヶ月目に網島を習ひ、その折師匠がやうやくお前ののどが不器用になつて、大きに聞きよくなつた、なる丈咽喉をアテにせず丸く節を語るのをお忘れでないと言はれました。のどの廻らぬ者がのどを廻すのもむづかしいものですが、廻る咽喉を廻さぬのも、隨分やりにくいものでございます。

師匠はよい旦那方のお弟子が十一人ございまして、それに自分が有福でありましたから、藝人ではありますがお金ではとんと動きませんで、自分がいやだと申したらどんなお家からお招きを受けても老衰を言立てにして上りません、然し死ぬまで老衰といふ氣はございませんでした。唯日々自分の思

ふ通りに我まゝに一生を送られたのであります。
其頃月順講といふのがございました。それは毎月お弟子達の家で催すので、廻り順講とも申しました。前申した十一人のお弟子に私がはひりまして十二人、丁度一年に一度づゝ廻るやうになりました。正月六日が弾初めで、皆さんが師匠の家へおいでになりまして、お淨瑠璃がございます、其の時は師匠の名取りの女のお師匠さんの、自分の名を譲りし倭文さんを初め、桂子（紫）、おさく、おみねなどゝいふ立派な方もおいでになり、お淨瑠璃が仕舞ひになりますと、廻り順講のクジを引き何月は誰の家、何月は誰の家と定めますので、廻順講にはおごりッこなしの申合せ、晝の中より集り、茶菓子は心任せ、夕膳は三品と限り、夜に入りて壽司、是より他に出す事は無用として、氣安く一日遊ぶことゝしてありました。まことに好い定でありました。月の番にあたつた家では、おいでになる方だけに今申しただけの御馳走を用意しますが、その翌月はこちらが行つて御馳走になるのであります、夕膳は三品ときまつてゐましたが、どこのお家でもお椀にさしみ口取りなどゝいふありふれた三品は出來ません、皆さん方がいろ〳〵御工夫をなされて思ひがけないおいしい物が出ました。それ故に皆さんが夕膳を樂しみにしました。
三味線ひきはやはり倭文、桂子（紫）、おさく、おみねさんなどでありました。三味線が皆よろしかつた故旦那方のお淨瑠璃も皆よく聞かれました。私もその中へザコのトゝ交りにひいたり語つたり、

ほめられたり叱られたりいたしました。師匠は自分の順講でありながら、やはり彈きません、傍の方へ寐てゐて惡い所があるといけないと聲をかけ、よい所がありますと、ヨウとほめます、實に勝手氣儘な師匠でありました。

流派としての順講は春と秋と年に二度づゝありました。その時には女の師匠さん達は皆白襟紋付、太夫さん方は羽織袴で、極く靜かな、人柄のよい拵へでございました。お淨瑠璃が始まりますと座中一同形を改め、お茶も煙草も上りません、謹んでゐて聞終れば一同有難うございますと、挨拶があるといふ風故席上水を打つたやうでございました。さうですから語る方でもひく方でも、少しも油斷ができません、實に心配でございます。師匠は老體故順講へ出るのをいやがつてをりましたが、御子息二代目紫文さんの爲めに出席いたしましたが、三味線は手にとりませんでした。すると、ある時の順講にさる旦那が、お靜の三味線で語つて見たいといふので申入れると、老衰いたして三味線はひけません、御免を蒙むるといひましたが、その旦那の方では、どんなでもよいからひいて貰ひたいといふと此の一言が氣に障り、ではどんな三味線を彈きませうといふので、旦那は何も知りませぬから悅んで毛氈の上へ上り見臺を控へる。師匠は何をお語りなさるときくと自然居士を願ふといふので、師匠はフンといつて三味線を取上げひき出しましたが、然らば旅僧の御ねむり覺しあら／＼語り申すべしと物語の前まで語りますと、旦那は頭を下げ、今日は甚だ咽喉の工合がわるく何分息苦しき故是にて御

兔を蒙むるといふ、師匠は左様かねと言つて旦那より先へおり、會釋もなく師匠だまりへ來て、年はとつてもまだどんなでもよい三味線はひかぬ、サア糸さん歸らうと私の手をとりすた〱と歸つてしまひました。何でもその爲めに座が白けて困つたさうでございます。まことに氣むづかしいお人でありました。その夜家へ歸つても師匠は別に不機嫌でもなく、着物をきかへて寐そべり、何かうまい物でも喰べようかねと言つた風で、あとまでぐづ〱言つてなぞをりませんでした。然しその翌日はその旦那が、昨日はお氣の毒だつたと八百善の折詰などを持つて詫びに來るといつた勢ひでありました。程經てその時の事を話して、あれはどういふ彈き方なのでございます、今日は私が語れなくなるやうに彈いて見て下さい、私は息がつまつても終ひまで語りますと申しますと、師匠は笑ひながら『赤兒も三年立てば三つになると、だいぶ生意氣になつたね、ひけならひくが、お前が負けたらどうするね、わたしが負けたらお前の好きな撥を上げよう』『デハ、私が負けましたらお好な梅干を持つて參ります』『わたしと戰ふといふのはえらいが、梅干がをかしい、其の料簡ではまだねんねえだ、サア何を語るのだ』『成丈三味線の少ない物にしませう』『そんな卑怯な事があるものか何にするのだ』『では殺生石を願ひませう』『だいぶ大きな物を持ち出したね』とこれより師匠は三味線をひく、私は語り出しましたが何の替りもございません、いつもの通り語りつゞけてまゐりました。すると二上りになり〱晝は淺間の夕煙り――と丸く語らうと思ふと語れません、〱また立ちかへり夜になりて、とこゝまで語る內節

が自由になりません、またをかしな聲になります、私はこゝだなと心を落着け一生懸命になりました
が息がつゞきません、ふはりとおとさうと思ふと三味線が邪魔になり、早めようと思ふと三味線が邪
魔になり、どうすることもできません、その內胸はどき〳〵して息苦しく、目がくらむやうで語れま
せんから、本箱へ頭をつけ、『おばあさんお免なさい』と詫びる。師匠は笑ひながら梅干かねと言ひな
がら三味線をやめる。私は汗をふいてほつと息をつきました。私は師匠に愛されてをりましたから、
淨瑠璃を語つても生かしてばかりをられました、殺されたことがありませんから、どうしたらあゝい
ふ風に語れなくなるのだらう、側に聞いてゐては三味線は別に替りはないが、不思議な事だと思つて
をりましたので、師匠にためして貰つたのでありました。どうも三味線にかけては名人だつたのでご
ざいます。

此の師匠の若い時、諸流家元會といふことがあつたさうです。その時（お靜の頃でありませう）師
匠が三番叟の掛聲をして諸流の家元をおどろかし、また三味線で鈴の音を聞かしたので名人の一人と
言はれた話を父が聞いて參り、ある時師匠に向つて、その事を話してその折の話しを聞かして下さい
と言ふと師匠は笑ひながら、名人などゝ言はれると冷汗が出る。あの時はわたしのほんとうの藝では
ない、一座をごまかしたので、後で考へると恥しかつたと笑ひながら話してくれたことがあります。
金主があつて諸藝の家元、一流の藝人を集めた會ができて、河東、一中、長唄、富本、常磐津、清元

新内、義太夫その他家元が集り、朝の四つ頃から始まる。皆其人のおハコの物ばかり、何れを何れと分け兼ねる面白さに、わたしも耳を澄まして聞いてゐたが、番組がいつか自分の所へ廻つて來たのでこゝでわたしが考へた。この諸流儀の面白い後で一中節の長どうは持ちきれぬと思つたから、先代を下座敷に呼びその事を話し、出し物は短い三番叟にして、おゝさへの所へわたしが本行の掛聲をします、又あそこの合の手も少しかへて彈きますから、その積りでと打合せをし、それから座に着き語つて行つて、〽一トさし舞ふ萬歳樂、こゝの所でわたくしが本行の掛聲を入れ、〽おゝさへ／＼悦びありや、わが此所より外へはやらじと思ふと、此中本行の通りにあしらつてゐて、是から合の手になるこゝへ常の合の手の中へ鈴の音に聞える手を入れて彈いたのが、わたしの運のいゝので大そう皆さんの氣に入り、ヤンヤと言はれたので、全く腕を見せたといふのではなく、面白い後に面白くないものが出て座を立たれると名折になるから、人を立たさぬアクビよけにしたのだ、ごまかし藝はするものでない、一度でこり／＼しましたと咄しました。

父は師匠が藝を誇らぬに感心して、あなたはさうおつしやるが、其の三番叟からお名前が高くなつたとの事、就いてはお願ひですが、それを一つお聞き申したい、どうか聞かして下さいと申しました。師匠はにこりと笑つて、遊藝嫌ひのお前さんが聞きたいといふのは面白い、聞かせませうといふので私に語らせて始まりました。私はどんな事に出逢ふのかと半夢中で語り出し、〽おゝさへ／＼へまゐ

りました。すると師匠がイヤーホウーといふ掛聲が常とは變りまして、何だか改まりました。私は胸がドギリとしましたが、〽わが此所よりほかへはやらじと思ふ、とは語りましたが踏度も覺えぬ仕末、師匠は半間でも平氣にてあしらひ、それから合の手になりました。常と別に變りはないのですが撥數が少しふえてをりました。其の撥數の多い所で節を搛るやうな音がちよい〳〵聞えます、實に妙といふのでありませう、父も母もすつかり感服いたしまして有難うございましたと禮をいふと、父は師匠に向つて『おばあさん、實に憎い節ですと申しますと、『もう干大根ですから駄目です、おつかさん夕御膳は何ですといつた風でありました。で父が今の三番叟はお弟子の内へお讓りになりましたかと聞くと、イヤ讓りません、藝事といふものはどうも崩れ易いものだから、次第に間違つたものになると後年わたしの恥故、誰にも敎へないし、一生の内のごまかし藝として濟ませばいゝのだから後へは殘しません、可愛い糸さんでもこればかりは敎へぬ、一生に一度と思つてゐたが二度になつた、あははゝゝゝと笑ひました。

慶應三年の初秋の頃から、師匠は何となく元氣がなくなりまして、好きな外出もせず、打臥し勝になりましたが、さりとてこれといふ病氣のあるわけではなく、唯うつ〳〵としてをりましたから、私とお春は心ならず、今一度全快あるやうにと神信心をもいたし、泊りぎりで日夜看病をいたし、何

事も打忘れて、しめり勝ちの日を送りました。

樹々の紅葉もいつか染め、秋の野末になく虫も聲うらがれしあはれさも、今は我が身にめぐり來て、十月中旬より師匠はまつたく打臥しぎりとなる。家元御夫婦や娘聟の巳野さんの御夫婦、倭文、桂子、おみね、私などが詰めきり、枕もとにをりましたが、すや／＼と寐てゐた師匠が眼を開きまして、『糸さんはゐるかえ』と云ふ、『はい、こゝにをります』と、師匠の手を取つて涙ながら申しますと、『あゝわたしはもういけない、もう間もあるまいが、それに就き此世の名殘にお前の淨瑠璃が聞きたい』と申されたので、此の意外な言葉に私は何と返事をしたものかと、たゞおろ／＼泣いてをりますと、家元はこれを見て『糸さんに語らせるなら、私がひきませう』と申しますと、『いやお前ではいけない、わたしが彈く。』この一言には一座顏見合せ言葉なし、師匠は『春や起しておくれ』と身を動かして起上らうとしますので、お春どんが扶け起し後ろから抱くやうにしてゐました。家元は三味線をとつて調子を合せました。私はたゞもうはつとして手をつかねてゐますと、師匠は面やつれのした顏をむけて、『サア糸さん、此世のひき納めだ、何にしよう、開運がよくできたからあれにしよう』と、三味線を受取り膝の上へ載せました。私は悲しくなつて泣入るのを、家元始め皆々に言はれましたので、是まで深い御恩を受けたこと故安心をおさせ申すやう語らねばならぬと、泣く目を拂ひ本箱に向ひました。一座の人々も、首をうなだれるほかはありませんでした。〽……鎌倉山の春の空長閑き花の朝ぼらけ

――と、開運をこれまで彈いた時に、師匠は三味線の手を止めまして『あゝ大儀だ、是でもう思ひ殘すことはない、糸さんお忘れでないよと、三味線を放しました。

ぺこちやこと上り下りし三味線も
糸のふるさに切れておしまひ

といふ狂歌をよみましたので、巳野さんが、おばあさん辭世ですか、面白いといふと、にこりと笑ひました。それから皆してしづかに床の上へ寐かせましたが、それからは一言も口も利かず、藥も水も呑まず、刻々に樣子が惡くなり、其夜は皆と夜伽をいたしましたが、明くる十月二十五日の朝の四つ半頃、眠るが如くに大往生を遂げました。又今更のやうに悲しくなり、女達はわつと聲をあげて泣く此時巳野さんは、アヽ名人の別れは辛きものとうつむく。家元さんははら〳〵と落涙して顏をそむけた。これにて師匠に別れる。師匠は七十四歲、私は十八歲。

略年譜及著作解題

注意

一、年譜中○印を附したるは自家に關する行實にて、△印は參照的事歷なり。

一、解題中□印を附せしは脚本にて、㊀印は狂言淨瑠璃、淨瑠璃所作事等なる事を示す。

一、著作解題の大部分は、既往三ヶ年にわたりて雜誌『歌舞伎』に連載したるものなれど、悉く改訂、增補し、書下し上場の年代順に列べしものなり。されど何作中に含まるゝ狂言淨瑠璃の或もの、又は純粹の補作と見るべきもの等にはまま省略せるものあり。

一、予が解題を作りしは、單に其の內容の奈何のものたるかを指示するにとどまる。梗概として見んか、そのあまりに簡にして索漠たらんことを虞る。

一、解題の索引は末尾に附したり。

一歳（文化十三丙子年、紀元二四七六年、西暦一八一六年）。

○二月三日、日本橋通二丁目式部小路に生る。

△九月、山東京傳歿す（五十六歳）。

二歳（文化十四丑年）。

△英船浦賀に來る。

△十月、司馬江漢歿す（八十二歳）。

三歳（文政元戊寅年）。

△四月、松平不昧公歿す（六十八歳）。

四歳（文政二卯年）。

△七月、狂言作者二代目並木五瓶歿す（五十二歳）。

五歳（文政三辰年）。

○六月、祖父由次郎歿す。

△瀧亭鯉丈著『花暦八笑人』の初篇現はる。

七歳（文政五午年）。

△一月、式亭三馬歿す（四十八歳）。

八歳（文政六未年）。

△四月、太田南畝（蜀山人）歿す（七十五歳）。

△八代目團十郎生る。

九歳（文政七申年）。

○一月二十三日、祖母きく歿す。

○芝金杉通一丁目へ轉住し、父質屋を始む。

十歳（文政八酉年）。

○十一月、妹かね歿す。

△十一月、勝俵藏改めて四世鶴屋南北。

△一月、浮世繪師初代豐國歿す（五十七歳）。

十三歳（文政十一子年）

△十一月、三升屋二三治河原崎座に於て立作者となる。

十四歳（文政十二丑年）。

△十一月、酒井抱一歿す（六十八歳）。

○柳橋にて遊樂中を發見せられ、勘當分となり『八笑人的』生活を始める。

△種彥の『田舍源氏』初篇現はる。

△五月、松平樂翁公歿す(七十二歳)。
△六月、鹿杖部眞顏歿す(七十七歳)。
△十一月、鶴屋南北歿す(七十五歳)。

十五歳（天保元寅庚年）。

△三月、宿屋飯盛(六樹園)歿す(七十八歳)。

十六歳（天保二卯年）。

△八月、十返舍一九歿す(六十七歳)。

十七歳（天保三辰年）。

○貸本屋となる。
△三月、七世團十郎海老藏と改名し、悴海老藏八代目となる。
△爲永春水の『梅暦』完成さる。
△九月、賴山陽歿す(五十三歳)。

十八歳（天保四巳年）。

△十一月、篠田金次改めて三世並木五瓶。
△十一月、二世瀨川如皐歿す(七十七歳)。

十九歳（天保五午年）。

○七月三日、父市三郎歿す(五十四歳)。
○九月、茶番集『朝茶の袋』を書く。

△一月『八笑人』第四篇追加の巻まで十二册成る。以後の第五篇三册は一筆菴英泉及び與鳳亭枝成の制作せるもの。
△水野越前守忠邦御老中に任ず。

二十歳（天保六未年）。

○三月、市村座へ出勤。前年の末五世鶴屋(孫太郎)南北の門に入り、勝諺藏と名のり番附へも載る。
○六月、尾上松助一座に從うて甲府の龜屋座へ行き始めて番附の下繪と道具帳とを引く。十九日に江戸を出立し八王子、猿橋を經て甲府に入り、歸路は富士川を下り箱根小田原を經て七月二十二日江戸に歸着す。
○九月の興行前に一興行全部の書抜きを一人にてなす。
○九月興行中に風邪を引き、やがて傷寒となり、芝居を引く。
△十一月、中村座に於て松島半次改めて三世櫻田治助となる、これ後の狂言堂左交な

り。
△十一月、四世中村重助市村座にて立作者となる。
△天保通寳鑄造せらる。

廿一歳（天保七申年）。

○大病後にてはあり、姉の意見につき芝居に出勤せず。
○九月二十四日、姉さよ歿す（三十歳）。
△四月、六世岩井半四郎（梅我）歿す（三十八歳）。
△『江戸名所圖會』四十年餘を費して完成せらる。

廿二歳（天保八酉年）。

○二月七日、同じ芝内の宇田川町に轉宅す。
△十一月、孫太郎、五代目南北を襲名し河原崎座の立作者となる。
△大鹽平八郎浪花に亂す。

廿三歳（天保八戌年）。

○一月、河原崎座へ出勤す。
○三月、糴足しの『琴責』の稽古をなす、これ稽古の始めてなり。
□五月、『序開き』を書き、七、九と續けて書く。看板番附の下繪も書く。
○十一月の顔見世興行に、『無本にて稽古をなし頭取に褒められ給金上る』。
△五月、五世松本幸四郎歿す（七十五歳）。
△十月、後の九代目團十郎七代目の五男として生る。
△崋山、長英等國事を痛論す。

廿四歳（天保十亥年）。

□一月、二立目を始めて書く。
○六月よりしつを煩ひ芝居を退く、番附面にも十月より其の名を遁す。
△九月、二世關三十郎歿す（五十四歳）。

廿五歳（天保十一子年）。

○一月、河原崎座へ再出勤、立作者は五瓶及び二三治。
○三月、『勸進帳』の初興行にせりふを暗誦し

無本にて初日を出し、海老藏に賞せられ、次第に認めらる。

□五月の興行より簡短なる補綴をなす。

□九月、繪草紙の繪を書く。

○九月二十三日、舍弟金之助死去(二十三歲)自身實家の相續をなすべく餘儀なくせられ師に名を返し芝居を退く。

廿六歲 (天保十二丑年)。

○一月、時の立作者中村重助の請に應じて河原崎座に再々出勤。四月の番附より勝諺藏に代ふるに柴晋輔を以てし、位置も二枚目となる。

△五月二十九日、四世中村重助歿す (三十五歲)。

△西澤一鳳江戶に來る。

△八月、『八犬傳』九輯、百六册完結す、三十八ヶ年を要したり。

廿七歲 (天保十三寅年)。

□始めて三立目(今の序幕)を書く。

△三月、水野越前守の嚴令出づ。

△六月、海老藏奢侈の故を以て罰せられ、江戶十里四方御構ひとなる。

△三座移轉を命ぜらる。

△二月、大阪の狂言作者奈河龜助歿す (七十九歲)。

△二月、怪談物の講釋師林屋正藏歿す (六十二歲)。

△七月柳亭種彥歿す(六十歲)。

廿八歲 (天保十四卯年)。

○河原崎座も淺草猿若町の三丁目に移轉し五月より興行を始む。

○十一月、斯波晋輔改めて二世河竹新七となり立作者の地位に上る、時の座頭は中村歌右衞門。但し立作者なみに寄初に名題は讀みしが、實權は櫻田左交にありき。

△七月、爲永春水歿す(五十四歲)。

廿九歲 (弘化元辰年)。

□此の前後より一幕二幕の脚色或は補作を紹

えずなす。
△此の春大阪角座に於て、海老藏の門弟となれる米十郎改名して四世市川小團次となる
△六月、後の五世菊五郎、十二代目市村羽左衛門の次男として生る。
△歌川國貞豐國を襲ぐ龜戸豐國なり。
△瀧亭鯉丈歿す。

三十歳（弘化二乙巳年）。

□七月『裏表忠臣藏』に四段目の裏、宗十郎の主役なる世話場を書く。
△大谷友右衛門江戸に下る。
△四月、八代目團十郎親孝行に就き御褒美を戴き、人氣出初める。

卅一歳（弘化三丙午年）。

□春より名題を書く。
○十一月、茶人大和屋源兵衛の次女琴（二十一歳）と結婚す。
△三代目菊五郎改めて梅壽となる。
△九月、美圖垣笑顔歿す（五十八歳）。

卅二歳（弘化四丁未年）。

□一月「伊賀越」の五幕目に『孫八の世話場』を脚色して好評なりしといふ。
□五月、一番目に五幕目を脚色し、大切へ甚五郎の所作と和歌三神『時鵆雛淺草八景』（常磐津）とを書く。但し何れも補作同様の作にして注目に値せず。
○十一月より眞の獨立をなし、立作者としての職責を果たす。
△四月、五世岩井半四郎（杜若）歿す（七十二歳）。
△十一月、小團次市村座に下る。

卅三歳（嘉永元戊申年）。

○一月長男市太郎生る。
□十一月、小團次菊次郎河原崎座に來り、其のだんまりを書く。
△三升屋二三治は春の市村座を名殘りとして退隱。
△八月、長島壽阿彌（二代目劇神仙）歿す（八

十歳）。
△十一月、中村座に於て藤本吉兵衛改名して三世瀬川如皐となる。
△十一月、馬琴歿す（八十二歳）。

卅四歳（嘉永二酉年）。

○四月十七日、母まち歿す（六十四歳）。
△四月、三世梅壽菊五郎遠州掛川にて歿す（六十六歳）。
△四月、葛飾北斎歿す（九十歳）。

卅五歳（嘉永三戌年）。

○長女糸生る。
△十月、長英自殺す（四十七歳）。
△海老藏は文恭公七回忌に際して前年の十二月赦免せられ、今年三月江戸へ下り御目見得。

□三月、岩戸の景清――難有御江戸景清。一場のだんまり。悪七兵衛景清が平家の重寶小烏丸の短刀を携へて、江ノ島の岩窟に潜み、源氏調伏の祈願を籠めし爲め頼朝は病み、天日爲めに晦くなる。これを追捕はんとして鎌倉の面々が岩窟前に集まつて神樂を奏する。景清やがて出で來り遁れる。役者は海老藏（景清）、彦三郎（時政）、九藏（重忠）、鰕十郎（和田義盛）、菊次郎（和田の妹朝日）、粂三郎（秩父の妹衣笠）、松緑（千葉之介常胤）、猿藏（江間小四郎義時）等。『琵琶の景清』に準據した作で、海老藏が江戸の舞臺へ再び出現したのを、明暗を司る日輪の岩戸出現に譬へた趣向であつたが、評は餘り芳しくなかつた。

卅六歳（嘉永四亥年）。

△八月、中村座に於て瀬川如皐作『東山櫻荘子』（佐倉宗五郎）上場されて好評。
△齋藤月岑著『聲曲類纂』六册梓行。

□十一月、えんま小兵衛——舛鯉瀧白旗。二幕三場からなる世話物。遊女若菜屋の若草が浮世屋伊之助と駈落ちして向島へ道行と洒落る、其の後へ落延びて來た平家の公達三位中將と呉羽の前とが、病に惱む折しも通りかゝつた佛師屋えんま小兵衛は、百兩金を奪はんとして二人を河中に突き落す。此處へ落合つた修行者西念、伊之助等がそれ〲拾ひ物をして立別れる。翌日小兵衛は、隣り合せの西念の家に若草伊之助の忍びゐるを發見し、おどしつけた上その所持の百兩を捲き上げる。其の腹癒せに切り込んだ伊之助の血と、傷いた若草と小兵衛の血とが、混合するのを見て、血緣なる事を知り、筐の印籠と犬の字の痣との符合するを知つて親子と判明する。兩人は双生兒であつて、畜生道と分かり自害する。而して二人の首は三位中將重衡と呉羽の前との身替りに役立つ。小兵衛も自害し、重衡卿をば同じ平家の殘黨たる西念實は主馬ノ盛久が守護して落延びる。役者は海老藏(えんま小兵衛實は越中の次郎盛次)、八世團十郎(伊之助、梶原)、九藏(西念)、粂三郎(若草)、長十郎(蝶々賣りの目玉の長吉)及び國五郎、奥山等。『年々歳々有りふれた隣同士の世話場をば仕組をかへて地獄、極樂』にした所が、當りを取つて大好評であつた。

卅七歳(嘉永五子年)。

◎一月、岩崎と瀧六の髪梳を補綴した富本淨瑠璃『月柳廓髪梳』を書く。

△一月二十一日、五世南北歿す(五十七歳)。
△二月、四世翫雀歌右衛門歿す(五十七歳)。
△九月、海老藏一世一代の『勸進帳』興行。

河原崎長十郎改めて權十郎。

△此年より役者の入替り春になる。

△十二月、西澤一鳳歿す(五十一歲)。

□一月、滿玄五人男――戀衣雁金染。三幕八場よりなる世話物。浪花の浦に足搦へをした雁金五人男が、定家の色紙をたづね出さんとて鎌倉へ下り、思ひ〳〵に姿を更へ、しがない暮しを立てながら、色紙買入れの金子調達に苦心する。「ゆすりかたりやぶつたくり」を盛んにした學句、市右衛門夫婦は、妹としらずして願禮を忠義の爲めに無理殺しにもなし、色紙を手に入れ露木殿への歸參が叶ふ。役者は海老藏(庄九郎)、團十郎(千右衛門)、九藏(平兵衛)、璃寛(市右衛門)、条三郎(文七)、及び奥山、廣五郎、長十郎(萬歲)、男女藏等。

□七月、兒雷也豪傑譚話(初日)。五幕十五場からなる時代物。美圖垣笑顏の合卷を脚色したもの。兒雷也の生立から妙香山の術讓り、藤橋のだんまり月影屋形の騷動、八鎌鹿六邸の膺懲を經て、國分寺山門の場に於てまさに捕へられんとするに終る。役者は團十郎(兒雷也)、九藏(畑作、富貴太郎、仙素道人)、璃寛(高砂勇美之助)及び条三郎、高麗藏、奥山、長十郎、國五郎等。人氣者の八代目が車輪になつて演じたので評よく、半道外の名人奥山が、八鎌鹿六で大當りを取つたをかしみの場も呼び物であつた。

卅八歲(嘉永六丑年)。

△三月、中村座に於て瀨川如皐作『與話情

△六月、米國使節ペルリ浦賀に來る。

浮名橫櫛』(切られ與三）上演されて好評。—

□二月、しらぬひ譚(初日)。七幕十二揚からなる御家物。菊地貞行の父秀行に亡ぼされた大友宗麟の娘若菜姫始め殘黨が、當主に仇せんとするの企を聞き、貞行故意に男色に耽り身を持崩し、油斷させて彼等を討取らんとする。これを忠臣鳥山豐後が諫める事あり、其の一子秋作は乳母秋篠の祈願によつて武力に勝れ、許嫁の照葉を逐うて呼子浦に到り、漁師鰭九郎實は龍藏寺高朝が家臣小島渦丸を討取るまで。役者は彥三郎(大友刑部、豐後、鰭九郎)、璃寛(貞行、秋篠)、しうか(青柳春之助)、璃珏(秋作)、竹三郎(照葉)等。柳下亭種員の合卷『しらぬひ譚』を脚色したもので大成功であつた。これが好評だつたので『御撰樣の御誂に後仕入の夏物』として、同年四月に『しらぬひ譚』後日狂言(八幕十三場)が出來た。この方は合卷の十五編までを脚色したもので、太宰少貳經房が小女郎蜘蛛に迷ひ遊樂に耽るを、忠臣の鷲津六郎、七郎の兄弟が面を冒して諫めたが、御採用のなきまま野遊びに托し小女郎を切つて捨てんと決心し、老母眞柴に別れを告げて出立し、途中にて捕へられ、矢部川原に於て斬罪に處せられる事となる。これを初日の方に現はれた、秋作と白縫大盡の若菜姫とが助けようとする。一方鷲津の若黨であつた伊助の女房お露が、如何にもして助けたいと兄の頓念を說き、八ッの鐘を一時早めて七ッに撞かせようとするが、惡漢の頓念が慾に迷つて聞入れず、遂に爭ひ互に深手を負ひながら、お露は水盤を打つて鐘に響かせ目的を果すに終る。役者

は彦三郎(頓念、眞柴)、璃寛(お露)、璃珏(六郎、秋作)、竹三郎(七郎)、しうか(若菜姫、綾機)等。

□九月、怪談木幡小平次。三幕七場からなる世話物。お人好しの小平次が、箱根の湯治場で親の爲めに難儀してゐるおつかに逢つて救ひ出してやり、やがて夫婦となる。三年を經て、おつかは惡漢佐九郎と通じ、謀し合せて小平次を慘殺する。それを恨んで小平次の亡靈現はれ、仇討をする。役者は璃珏(小平次)、彦三郎(佐九郎)、しうか(おつか)及び竹三郎、長十郎、和三郎等。後に小團次の爲めに潤色したのよりも成功したもので、璃珏の小平次が評判好かつた。

卅九歲（安政元寅年）。

○小團次と眞の、最初の、接觸をなす。

○八月、『天日坊』の好評に作うて、默阿彌綴ろ、國芳畫くの合卷と、玉塵園雪住綴ろ、芳虎畫くの草雙紙出版さろ。

△一月、三座とも類燒。

△八月、八代目團十郎大阪にて自殺す（三十二歲）。

□三月、忍ぶの惣太——都鳥廓白浪。三幕三場からなる世話物。(都鳥汀松若なる草雙紙出づ種淸綴る國貞畫く)。吉田家譜代の家臣吉田六郎が、往昔腰元と不義して露見し東へ下り、隅田堤に細き烟を立てて櫻餅を鬻ぎ名も忍ぶの惣太と改めてゐる。主家吉田家には其の後御家騷動があつて、當主松若の行方が知れず、御家の系圖と都鳥の印紛失せる爲め沒落する。御家の重寶をたづねて班女御前と共に東へ下つた幼君梅若丸をば、惣太が金子調達の目的で御主とも知らずに締殺す。松若は霧

太郎と稱し强盗の首領となつてゐたが、やがて女裝し花子と稱し遊女になつてゐる。惣太も花子を多分松若丸と見當をつけ、身請せんとまで話が運んだ所で、事件が行違ひ、終に惣太は申譯の爲め命を棄て、松若は元に歸つて御家を再興しようとなる。役者は小團次（惣太）、しうか（花子實は松若丸）、友右衞門（寄席の丑市）、及奥山團之助等。始めに在來の作を補綴して小團次納まらず、二度日の訂正を施して尙納まらず、遂に全然新規に書換へて小團次に悅び迎へられ、上演して成功した苦心の作であつた。（本傳を參照せられたし。）

□八月、五十三次天日坊——吾孺下五十三驛。七幕十五場よりなる世話物。天一坊を鎌倉の時代に引直したもので、お三婆ァの殺し、常樂院の密議から詮議、召捕まで。天一坊は木曾義仲の落胤で、當時天下を治めつつある賴朝に恨みを抱き、同じ木曾又は猫間の殘黨で、强盗の地雷太郎及人丸お六と共に天下を覆へさんとする。然るに百姓久助實は大江廣元の爲めに見顯はされ召捕はれる。小團次（天日坊、隼人妻賤機、百姓三作、猫石の怪）、璃珏（久助、伊賀之亮、地雷太郎）、友右衞門（赤星大八、孫右衞門）、しうか（人丸お六、傾城高窓）及び竹三郎、權十郎、奥山等。

四十歲（安政二卯年）。

○十月二日、大地震、三座とも類燒。
○河原崎座廢座と決し守田座再興と決す。市村座よりの交涉ありて其方へ出勤することゝなる。

△三月、坂東しうか歿す（四十三歲）。
△七月、三世並木五瓶歿す（六十七歲）。
△十月、藤田東湖壓死す（五十歲）。

□五月、（河原崎座）、兒雷也後編譚話。十幕十五場からなる時代物。初日は兒雷也中心であつたが、此の方では同格に書かれた大蛇丸と綱手とが加はる。越後米山寺に於ける大蛇丸の生立から兒雷也との出逢ひに始まり、蛞蝓丸の短刀紛失、行方詮議、仇討等を絡めて、結局は近江の琵琶湖で三人が出會して三竦の大見得に終る。若太夫權十郎（兒雷也）、嵐吉三郎（大蛇丸）、（仙素道人）、竹三郎（月影深雪之助、綱手）、璃寛（高砂勇美之助）等。笑顔の作を嗣作した種員の筆になる『兒雷也』の第十一編より廿編までを脚色したものであるが、『初日』ほど成功しなかつた。

四十一歳（安政三辰年）。

○四月、次女島生る。
○七月より小團次と同座しこれより新狂言世話物續出す。
○三月より竹柴姓を門弟に冠らしむ。

△三月、坂東彦三郎改めて龜藏、竹三郎改めて五世坂東彦三郎となる。
△八月、三升屋二三治歿す（七十二歳）。
△九月、梅幸改めて四世菊五郎となる。

□三月、せつた直し長五郎――夢結蝶鳥追（同題の草雙紙出づ。種清綴る。芳幾畫く）。四幕十二場からなる世話物。旗本の阿古木源之丞が、非人のおこよを花水橋の袂で見初めたのを、ちやうど雪駄を直してゐた長五郎が取持ち密會させる。後長五郎は密會所なる梶井主膳の宅を脅し、終に主膳を切殺す。其後長五郎は小手柄牛次の女房で女賊の熊坂お長と密通し召捕はれる。これに一番日におかれた時代物の筋を絡ませて、千葉家の重器放駒の香盒詮索を入れてある。役者は龜藏（長五郎）、

彥三郎(源之丞)、三十郎(下駄の市、梶井主膳)、菊五郎(お長、おことよ)、及び權十郎、花助、羽左衞門、村右衞門等。彥三郎の改名狂言で評判がよかつた。序幕の花水橋の見初めは花やかで美しかつたといふ。

□五月、巳の吉殺し――梅雨濡仲町(同題の草雙紙出づ。種淸綴る、國貞畫く)。三幕六場からなる世話物。(役名小さんになつてゐるが)巳の吉は意地で賣出した深川藝妓である。その間夫に笹野半次郎に召使はれてゐる船頭の金五郎といふのがある。所が巳の吉には以前から古手屋の甚三郎と腰拔武士の大島伴藏とが執心してゐる。浪々中の半次郎は主家の重寶葵下坂が手に入れば、歸參が叶ふ事となつてゐるが、その刀は廻り廻つて甚三の手に渡つてゐる。甚三は此の刀を枷にして巳の吉に迫るので、從ふと見せかけて刀を奪ひ金五郎に贈る。甚三はその處置を恨んで鐵砲洲の闇に巳の吉を慘殺する。役者は龜藏(甚三郎)、彥三郎(金五郎)、菊五郎(巳の吉)等。

□九月、座頭殺し――蔦紅葉宇都谷峠(同題の草雙紙出づ。種淸綴る、國貞畫く、又「座頭殺宇都谷峠なる草雙紙出づ。種久綴る、國貞畫くなり)。五幕十二場からなる世話物。文彌は芝の片門前に住む、廿歲足らずのいぢらしい座頭であるが、姉のお菊は自分が文彌の守をしてゐて誤つて石の上に落し、盲目にした身の詫に、身を吉原に沈めて百兩の金を調へ、市名を取らせに京都へ發足させる。文彌がやうやく東海道は鞠子の宿まで來て、三日も附狙はれた胡麻の蠅提婆の仁三をまきたい

ばつかりに、伊丹屋重兵衛の勸めに任せ夜明を待たで出立し、共に宇都谷峠にさしかかる。重兵衛は主家尾花の爲めに百兩金を才覺に出た途なので、文彌の金が欲しくなり、慘殺して奪ひ取る。これが祟つて重兵衛は女房には病まれ、後又仁三の爲めに脅迫されるので、鈴ヶ森へおびき出して殺害し自分は召捕はれる。役者は小團次(文彌、同亡靈、仁三)、龜藏(重兵衛)、菊五郎(姉お菊)、羽左衛門(妹おいち)等。講釋に據つた作。鞠子の宿から文彌の殺しが評判で、小團次が文彌と仁三とを早變りに勤めて成功した。

□十一月、鞍馬山。だんまりにて一場。鞍馬山の東光坊に預けられてゐた牛若が、平家に一太刀恨みんとの志から武藝修業をなし、木の葉天狗を相手に立廻り、牛若を捕へんとして來た平家の家臣を打すゑる。役者は小團次(天狗實は天明太郎)、權十郎(牛若丸)、菊五郎(僧正坊實は峯尾)等。

四十二歲(安政四巳年)。

△一月、我童改めて八世片岡仁左衛門となる。

△米國使節ハルリス將軍に謁す。

○五月より、後に三世河竹新七となれる竹柴金作入門し、その名番附に載る。

□一月、鼠小僧――鼠小紋東君新形。(同題の草雙紙出づ。種清綴、國貞畫く)。義賊鼠小僧次郎吉は長寬二年八月四日庚申の日に、足輕與三兵衛の悴として生れたのであるが、庚申の生れの者は盜賊になるといふ所から、水子の內に守袋を添へて棄てる。これが女賊のお熊婆あに拾ひ上げられ、自

然に盜賊の修業を積みやがて高名になる。此の作はお熊故に難儀をする若菜屋新助を救はん爲めに、鼠小僧が稻毛の屋敷から百兩の金を盜み出して惠むに始まる。ところが此の金は極印附で、新助は召捕られ、一方稻毛の辻番與三兵衛は手引をしたとの疑で拷問に遭ふ。そこへ次郎吉が自首して出で無實の人々を助ける。役者は小團次（易者左膳實は鼠小僧次郎吉、又稻葉幸藏）、龜藏（お熊婆）、菊五郎（お高、松山）、權十郎（與之助、遊女屋の亭主）、彥三郎（新助）、與六（與三兵衛）、羽左衛門（蜆賣り三吉）等。講釋に據つた作。大成功の芝居で百日餘も打續けた。辻番で與三兵衛との出會が好く、滑川幸藏宅の世話場が好かつた。後者へ出る蜆賣りの三吉は五世菊五郎が羽左衛門時代の出世役となつた。

□五月、正直淸兵衛――敵討噂古市。（同題の草雙紙出づ、種淸綴る、國貞畫く）。七幕十五場からなる世話物。伊勢國古市在窪田村の百姓淸兵衛はぼくであつて、三千人の村中太神宮樣の御氣に入るのは、彼一人だらうと言はれた程愚直な男であつた。或る年伊勢へ上げる太々講の金五十兩を、庄屋の眼識で托せられ、それを納めに出立する。大酒するだけが惡い癖だから、くれ〴〵も途中で飲むなと誡しめられたのを破つた爲め、五十兩金をば居酒屋の亭主久七と女房のお瀧に盜まれる。淸兵衛は仕方なく〳〵、村の衆へは申譯に娘を賣つて金を償ひ、自分は東海道へ出て、蟻が塔を積むやうにして稼ぎ溜めたが、長煩ひをして非人とまでなり下る。そこを見込んだ久七夫婦は淸兵衛を慘

殺する。古市の遊女となつた娘のお梅へは清兵衛の亡靈が事の次第を告げるので、目出度く敵討をするに到る。役者は小團次（清兵衛、お瀧）、龜藏（武太夫、幸八）、菊五郎（白菊、お梅、おしげ、）與六（庄屋久七）及び彥三郎、權十郎、羽左衛門等。講釋に據つた作。清兵衛殺しが一篇の眼目で成功した、此處でも小團次は清兵衛とお瀧との早變りが巧みであつたといふ。

□七月、小猿七之助と玉菊――網模樣燈籠菊桐（同題の草雙紙出づ、種清綴、國貞畫）。七幕十五場からなる世話物。巾着切の小猿七之助は深川大島町の網打七五郎の長男であるが、永代橋で見初めた御守殿瀧川（書下しは菊川）を附狙ひ其の屋敷へ仕込む。或る大雷雨の晩お供の中に加はり行き、洲崎の堤でとう／＼口說き落す。瀧川は七之助の情を知つて女房になり、後吉原の三日月長屋に身を沈める。七之助の親父七五郎も身性が惡く、七十兩の大金を酒屋の手代で瀧川の許嫁なる與四郎から奪ひ取り、窮死せしめた爲め、其の怨靈に祟られて三年越し病んでゐる。七之助は一旦親父に逢つて別れを告げ、上方へ逃げようと西方村まで落延び、旅裝を整へに立寄つたその庵の主が與四郎の父であり、又二日程前に大川端で殺した小坊主の師匠でもあると判明し、廻る因果の恐ろしさを悟り、出家せんと發心した所を捕へられる。

□玉菊の方は、小團次と菊五郎の爲めに新作せしものにて、役者は小團次（猿之助、七之助、中萬字屋の亭主彌兵衛）、龜藏（七五郎、與四郎親）、彥三郎（與四郎、新之丞）、菊五郎（瀧川、玉菊）

等。兩方とも講釋に據つた作であるが、殊に『小猿七之助』の方には獨創の寫實が多く含まれ、又成功したものであつた。

□十月、大工殺し――糸時雨越路一諷。(同題の草雙紙出づ、種清綴る、國貞畫く。)二幕四場からなる世話物。越後の大工喜藏が女房おそよと共謀して、『金がほしさに馴合間男、根こそげ取つた曉は、夜明も知らずぐつすりと寐てゐるところを取ッつかまへ、間男呼はりした上でお定まりの七兩二分、首代取つて突き出す』美人局を、京都の圓山でしてゐる。その內あやの次郎三がおそよに引つかかり、おそよが却て此の男に迷ひ、亭主を鑿で殺して次郎三と夫婦になるといふ結末。役者は龜藏(大工逆目の喜藏)、菊五郎(おそよ)、彥三郎(次郎三)等。瞽女の小唄に趣向を取つた新作であるが、あまり好評ではなかつた。

四十三歲(安政五午年)。

○一月、三座燒ける。

○三月より小團次座頭の正格になほる。

△七月より森田座の森を守と改む。

△七月よりコロリ流行し斃れたるもの甚多し。種員が五十二歲にて歿し、浮世繪師の廣重が六十三歲にて歿したるなど皆然り。

□三月、黑手組の助六――江戸櫻清水清玄。(同題の草雙紙出づ、種清綴る、國貞畫く)。一番目に清玄を置いたから斯う名題は附いてゐるが、『黑手組曲輪達引』として知られてゐる。三幕七場からなる世話物で新作であつた。近吉の番頭權九郎が新造の白玉を盜み出し、道行と洒落る積りでくすねた

五十兩が、廻り廻つて助六が揚卷の身請の時に用立つた。然し其金には極印が打つてあつたところから、助六に嫌疑が掛り召捕はれる。助六が淺草觀音堂の前まで來た時、白玉と情夫の牛若傳次が自首して出て、助六は許され、權九郎が召捕はれる事となる。役者は小團次（助六）、菊五郎（揚卷）、三十郎（白酒賣り、新左衛門）、權十郎（牛若傳次、紀文）等。講談に據つた作。小團次の助六、權十郎の演じた津藤をモデルに取つた紀文の傘の異見等が大好評で成功した。

◎序幕の『浮氣な風に白玉が、廓を拔けて落椿』忍岡戀曲者（吾妻路）といふ道行淨瑠璃も評判がよかつた。

□五月、赤垣德利の別れ――假名手本硯高島。一幕二場の御家物。赤垣源藏が討入の前日兄鹽山與左衛門へ別れを告げに行き、留守と聞きて兄の小袖を借り、その上に甥を坐らせ置きて別杯を汲み、翌朝討入後高輪の大木戸に於て別れを惜しむ件まで。役者は小團次（赤垣源藏）、菊五郎（鹽山妻おさみ）、三十郎（與左衛門）等。講釋に據つた作。

□十月、鉢の木――小春宴三組杯觴（後明治九年冬新富座にて靑砥藤綱の件を增補せる際には初深雪佐野鉢木。）二幕四場からなる時代物。時賴感ずる所あつて出家し、二階堂信濃守を連れて廻國に出で、下野國諸宿にさしかかり雪の夕暮に馬方の藤六に賴んで佐野まで乘せて貰ふ。此處で藤六が出家では乘せられないとか、歸り馬だから高貨だとかの問答がある。此の問答によつて源左衛門常世

の境遇と人格を知り一夜の宿りを頼み入れ、常世の述懐、盆栽の梅松櫻を焚火にするの件があつて、曉方に時頼と名乘り三ヶの莊を贈る。役者は小團次（藤六、常世）、海老藏（時頼）、菊五郎（妻白妙）、與六（二階堂）等。講談に據つたものである。諸宿の馬士問答は醉に任せて喋舌り散らす藤六、これに耳傾ける時頼、二階堂共に出來よく三千兩と褒められたさうで、成功した。

四十四歳（安政六未年）。

○三女ます生る。

○九月、河原崎座以來の二枚目作者篠田瑳助歿す。

□『雨夜鐘四谷雜談』（戯作）の第五篇上、下二卷四冊を梓行す。種員の計畫を嗣作せるものにして、畫工は梅蝶樓國貞版元は錦昇堂なりき。

△三月、海老藏歿す（六十九歳）。

△七月『木幡小平次』の興行の際より四世清元延壽太夫（後の延壽翁）と接觸し始む。

□二月、鬼あざみ――小袖曾我薊色縫（同題の草雙紙出づ、種清綴る、國貞畫く。）六幕十五場からなる世話物。鎌倉なる極樂寺の役僧清心は、大磯の遊女十六夜と馴染みたる科を以て、廿五歳の春由比ヶ濱に追放される。十六夜も清心の胤を宿して二月になる身とて、廓を拔け出し、由比ヶ濱に來合せ、行き暮れた二人は入水する。女は氣絶したまま押流されて、川下に四手網をおろしてゐた金貸白蓮に助けられやがて妾となる。清心は行徳育ちだけに沈みきれず、岸に上がり舫の騒ぎ唄を聞いて氣が變り、同じ人と生れたら榮耀榮華をするのが得だと考へて惡心を起す。これからは鬼薊の

清吉と改め人の口にも上るやうになつた。一方十六夜は清心が死んだものと思ひ込み、菩提の爲め尼となつて廻國に出で箱根で清吉に逢ひ、二人して强請をして歩く。後に白蓮の所へ來て、彼れが大寺正兵衞といふ大賊であり、又十歳の時神隱しにされた兄と知れ、惡事の手始めに殺害した若衆は、十六夜の弟と判明する。廻る因果の恐ろしさに二人は自殺し、白蓮はやがて捕はれる。役者は小團次(淸心後に淸吉)、三十郎(白蓮實は大寺正兵衞)、粂三郎(十六夜後におさよ)及與六、羽左衞門等。講釋物と實說とに據つた作。由比ヶ濱から淸元の(梅柳中宵月)に送られる稻瀨川の道行、或は白蓮宅へゆすりに行く場などが特に成功した。時代物の方は八重垣紋三(權十郎の役)を中心にした御家騷動でこれも好評であつた。

◎二月、輕業――蝶々翼輕業。常磐津にて時の流行の輕業を舞臺に上せた一場物。小團次(口上言ひ、ひよつくり俵藏)、權十郎(輕業太夫)等。

□四月、泣男佐兵衞――牡丹記念海老胴。一幕一場の時代物、海老藏の追善に出來た作である。和泉國不動ヶ瀧に於て正成の家臣泣男の作兵衞が、遺孤正儀の阿呆を癒したいと祈誓を籠めてゐる。此處へ足利家から使者が來て首討つて渡せよと迫られるが、阿呆の故を以て追返す。やがて正儀正氣となり弔合戰をなさんと決心するまで。役者は小團次(佐兵衞)、權十郎(正儀)等。

□四月、音羽丹七――種々薩陲誓掛額。富本と吾妻路にて一場。丹波屋七郎兵衞が吉原兵庫屋の抱女

音羽に現をぬかし勘當を受け、終に粟島の鈴振りとなつて來り、朋輩の此里の厚意にて音羽に逢ひ、心中せんとして助けられ、此里に金を惠まれ歸る。役者は權十郎(丹七)、粂三郎(音羽)、歌女之丞(此里)等。

□七月、小幡小平次——小幡怪異雨古沼(同題の草雙紙出づ、種清綴る、國貞畫く)六幕十六場から なる世話物。旅役者小幡小左衞門の弟子の小平次が或時東海道薩陲峠へさしかかり、師の女房お塚の癪に惱むを介抱する。おくればせに來た夫の小左衞門が姦通だとわめき立て誤つて崖から海中に落ちる。お塚はそれを機會に意氣地なしの小平次と夫婦になる。然し小平次が奥州地を三年も旅稼ぎして歸つた時には、小左衞門の弟と密通して子までなし、あまつさへ邪魔扱ひにされた擧句、綾瀬沼で慘殺される。怨死した小平次の亡靈が現はれてお塚を取殺す。役者は小團次(小平次、同亡靈)、粂三郎(お塚)、三十郎(小左衞門)等。

◎清元の山繭色萩紫は小平次の筋以外に絡ませた、お花半七の道行淨瑠璃であつた。

◎九月、夜這星——日月星晝夜織分。常磐津、清元、竹本にて三場。第一『七夕の星』では牽牛織女が天の川で出逢つた所へ夜這星が飛んで來て、雷の夫婦喧嘩を注進する。第二『祭禮の月』では、祭禮の手古舞の稽古最中へ牛方の九郎作が來て罵りわめき、色男だと自稱して女郎買の物語りをする。第三『宮島の日』では、宮島の造營成り今日式を擧げんとせるも、日輪西海に沈まんとする

を見て、清盛が招き返す。役者は小團次(夜這星、牛方、清盛)、粂三郎(織女、踊師匠お君、祇王)、權十郎(牽牛、手古舞升吉)、彌左衞門(手古舞竹松、兒天女丸)等。小團次の夜這星が最も好評であつた。

△七月、中村福助改名して芝翫となる。
△八月、三座類燒。
△大老井伊直弼櫻田に刺さる。

四十五歲(萬延元申年)。
△三月、花笠魯助(豐島新造)歿す(七十六歲)。
△六月、四世菊五郎夫婦歿す。

□一月、三人吉三廓の初買――(同題の草雙紙出づ、一瓢(梅彥)綴る、國貞畫く、)六幕十二場からなる世話物。以前は吉祥院の所化であつた、盜賊の和尙吉三が盟主となつてお坊吉三お孃吉三と共に三人吉三と呼ばれ惡事を働いてゐる。和尙吉三の妹おとせが十三と畜生道に落ちて、和尙の忍ぶ吉祥院へ來て、父傳吉の敵討と木屋の御家再興に入る百兩金の調達とを賴む。すると、入組んだ筋をたづねて行くと、其の傳吉を殺したのは、お坊吉三で、百兩金を奪つたのがお孃吉三だと分かり、二人は申譯の爲めに自殺しようとする。和尙は惡黨の義理として弟妹等の首を以て、二人の身替りにして、落しやる事とする。然し其首を鑑定するものがあつて、和尙は捕はれ、二人はそれを助けんとして捕手に圍まれる。然し兩家の立つやう望を遂げて三人は刺違へて死ぬ。◎淸元の『初櫓噂

高島』は、和尚吉三を救ふ爲めに木戸を開けるべく、櫓の上の太鼓を打つ場に用ひられたもの。又作中の挿話として、通客木屋の文里と新吉原丁字屋の抱へ一重との戀物語りを、梅暮里谷峨の『傾城買二筋道』に據つて書入れてある。◎吾妻路連中の『夜鶴姿泡雪』は丁字屋の別莊に病んでゐる一重の所へ、零落した文里がたづねて來て死目に逢ひ、又文里の妻おしづが一重の見舞に來る件へ用ひられた淨瑠璃であつた。役者は小團次(和尚吉三、文里)、權十郎(お坊吉三)、粂三郎(お孃吉三、一重)、三十郎(土左衛門傳吉)等。默阿彌が自ら會心の作として許してゐたものださうである。人物、事件の間へ非常に複雜な關係を持たした因果譚の白浪狂言であつた。二幕目庚申塚の三人吉三の出逢ひは、美しい抒情的な場面で評判がよかつた。

□三月、骨寄せ岩藤——加賀見山再岩藤(同題の草雙紙出づ、一瓢綴る、國貞畫く。)六幕十二場からなる御家物。在來の『加賀見山』(鶴屋南北作)に、鳥井又助が惡人の爲めに計られ正しい奥方を誤つて暗討にしたるを悔いて切腹するの一幕を補うたのである。◎此の際の大切に附けた常磐津の『拙腕左彫物』も、例のおやま人形の淨瑠璃を補綴したものであつた。役者は小團次(又助、岩藤の亡靈、甚五郎)、三十郎(望月彈正)、權十郎(大領、おやま人形の精)、粂三郎(妾お柳、中老尾ノ上)等。

□七月、縮屋新助——八幡祭小望月賑。(同題の草雙紙出づ、一瓢綴る、國貞畫く。)六幕八場からなる

世話物。毎年夏季になると江戸へ出て來る縮屋の越後新助が、深川八幡の祭禮に赤間源左衛門から喧嘩をふつかけられる。命もすでに危くなつた所を深川藝妓のお美代が挨拶して助ける。源左衛門は其代りにお美代を口說き　果ては間夫の穗仕新三郎の新の字を腕に彫つたのを詰られ返答に支へた。これを見て新助が出て難を救ひ、お美代は俺の情婦だ身請までしてあるといふ。やがて此の救ひの言葉が動機となつて、新助はお美代に思ひをかけるが聞入れられず、あれこれと金は費やし、荷は失つて歸鄕もならず、村正の刀を手に入れたのが祟つて狂氣し、お美代始め二十四人を慘殺したが、末にお美代は五歲で分かれた妹と判明するので自分も腹を切つて果てる。役者は小團次（新助）、粂三郎（お美代）、三十郎（赤間源左衛門）、及び權十郎、羽左衛門等。舊說を根據としての創作。先代芝翫が兩隣りの座をかけ持して、非常な人氣の爲め市村座がけおされて居た時、兩座の幟を祭禮の鏃と見立てた、深川祭禮の趣向が當つて大成功をしたもの。

四十六歲（文久元酉年）。

○二月より小團次守田座出勤に付兼勤す。

○山城河岸の津藤及びその一連との交際深し。スケ梅阿彌として二月より市村座の紋番附に載りしは津藤のことなり。

△一月、四世大谷友右衛門歿す（七十歲）。

△三月、歌川國芳歿す（六十五歲）。

△十二月、石塚豐芥子歿す。

◎二月（市村座）、魁若木對面。富本にて一場。鎌倉長谷の觀音の三十三間堂に弓初めの式がある。

共處で幼少の曾我兄弟が祐經に對面し、杯を貰ふ。五郎三方を踏み割り、狩場の切手二枚を得るに終る。役者は芝翫（祐經）、龜藏、團藏（近江、八幡）、新車（舞鶴）、權十郎（五郎）、羽左衛門（十郎）等。◎假宅粟餅——契情春粟餅（常磐津にて一場）。深川洲崎の假宅前へ粟餅の曲搗が來て賑やかに囃し、これに鳥追が加はり地廻りが來などして睦月を目出度く祝ふ。役者は芝翫（粟餅屋あん太郎）、羽左衛門（同きな七）、新車（女太夫）等。後者は時の流行を穿つたもので評判がよかつた。

□二月（守田座）相生源氏高砂松。（同題の草雙紙出づ、五柳綴る、國貞畫く。）四幕十二場からなる御家物。木曾義仲の遺子義高が賴朝を恨み、折あらば附狙ふのを重忠が察知して警戒する。義高が賴豪阿闍梨の妖鼠術を受けて變幻出沒するに對し、忠臣の正忠と、女房にして重臣の子息の乳母葎戸との忠死によつて、子の年月揃ひし血汐を得て、かの黄金の猫に威力を添へ、義高の謀計を妨げる。役者は小團次（唐糸、正忠、阿闍梨）、菊次郎（早瀬、葎戸、）市藏（義高）等。馬琴の讀本に據つたもので、默阿彌は正忠の住家から重忠旅館までの二幕を書いた。

□五月（市村座）、稻田幸藏及びいろは新助——轡音纒染分。（同題の草雙紙出づ　梅彦綴る、國貞畫く。）八幕十一場からなる世話物。道中双六の書換にいろは新助を綯交ぜにしたもので、由留木家の重寶黄金の轡をば、御家横領を企てた當主左衛門の叔父彈正が、稻田幸藏をして盗み出させる。此の寶紛失の申譯に家老は切腹し、左衛門も東山殿への申譯に切腹する。然し、やがて事露顯して徒

黨は幽閉され、寶を持つて遁げたる幸藏は丹波與作に捕へられる。いろははは幸藏の妹で大磯に在る中に與作の弟新助と馴染を重ねつひに道行をする。二人は後に由留木家の若殿及び奥方の身替りになる。役者は芝翫(幸藏)、龜藏(彈正、江戸兵衛)田之助(いろは、小櫻、重の井)、羽左衛門(新助)、新車(小萬)、權十郎(與作)等。

◎五月(市村座)、六社祭り——漆布露玉川。淸元にて一場。色法印の奇妙院が六社祭りに晒女を捉へて口說く、其處へ鵜籠を脊負つた善玉、惡玉が來て弄ふ。役者は芝翫(晒女)、權十郎(奇妙院)等。

□五月(守田座)、因果小僧——龍三升高根雲霧。(同題の草雙紙出づ、五柳綴る、國貞畫く。)二幕三場からなる世話物。因果物師野晒小兵衛は年老いてから惡事を止め隱居してゐる。忰の六之助も因果小僧と渾名される大盜人で勘當分になつてゐる。これが品川福島屋の抱へお園と契り廓を連出し小兵衛の家に落合ひ捕はれんとするを、親父が罪を負うてやり兩人を逃がす。役者は小團次(小兵衛)、菊次郎(お園)、市藏(六之助)、及び九藏、鶴藏、菊四郎等。

□七月(市村座)、東驛いろは日記。(同題の草雙紙出づ、梅彥綴る、國貞畫く。)六幕十五場からなる世話物。義士五十三次とも稱されたもので、千崎彌五郎とか、不破數右衛門とか、矢間重太郎等が次第に江戸へ下る趣向で銘々傳を列べたものであつた。此の內おりえ、重太郎の件、佐藤與茂七の件などが特に好評であつた。◎花園の『夢結露轉寢』は、おりえ重太郎道行で、此處へ出る飴屋(羽

左衛門勤む）が「本町二丁目の糸屋の娘、姉は廿一妹は二十……」の替唄「今度二丁目（市村座）の飴屋の息子、兄は十八、弟は十五、兄貴見たさに橋々越えて云々」を唄つたのが評判であつた。役者は芝翫（數右衛門）、權十郞（重太郞、彌五郞）、田之助（おりえ、力彌、お谷）、羽左衛門（與茂七、猫石の怪）等。

◎七月（市村座）、廓俄色實秋。清元にて一場。義士五十三次の大切府中の二丁町の場で廓の佼に桃太郞と乙姬が昔噺を振事で見せ、終ひは雀踊りで賑かに舞納める。役者は芝翫（桃太郞、船頭）、田之助（乙姬、女船頭）等。

□八月（守田座）、光然の祈りと入水――櫻莊子後日文談（同題の草雙紙出づ、五柳綴る、芳虎畫く。）「佐倉宗五郞」を補足した一幕二場のもの。宗五郞の叔父光然が子供の命を助けようと佛光寺に於て祈念を凝らしてゐる所へ百姓の十作が來て、願書も容れられず慘殺されたと知らせるので、餘りの非道に珠數を切つて魔道に落ち、やがて難波沼に入水して果てるまで。役者は小團次（光然）、菊次郞（お峰の亡靈）、九藏（十作）等。九藏の十作は小團次の指圖によつて成功し出世藝の一つとなつた。

□九月（市村座）、鍜引。一幕二場からなる時代物。攝州摩耶山の觀音へ病氣快癒の祈願を籠めんと伏屋が代參し、蛭卷の長刀と名鏡とを携へ行くを、番場の忠太が奪はんとして鏡を谷間へ落す。谷底には、非人に身を裝した景淸と、梵論字に化けた三保谷國俊とが焚火してゐて、落ちて來た鏡を

奪ひ合ひ、長刀は折れ、鏡は國俊の手に入る。役者は芝翫(三保谷四郎國俊)、權十郎(惡七兵衛景清)等。

四十七歲(文久二戌年)。

△一月、守田座に於て三世櫻田治助改めて――狂言堂左交となる。

△木村園夫改めて四世櫻田治助となる。

□三月(市村座)、辨天小僧――青砥稿花紅彩畫。(同題の草雙紙出づ、梅彥綴る、國貞畫く。)又の名題は『辨天娘女男白浪。』五幕七場からなる世話物。辨天小僧菊之助は鎌倉雪の下の呉服屋濱松屋の悴であるが、十二の時迷子になりやがて日本駄右衛門の手下となり他の三賊と共に白浪五人男と謳はれて强盜を働く。ある時現在の親の內とも知らで衒りに入つて父子と分かり、又嘗て信州路で殺した信田小太郎は故主と分明して、いよ〳〵我身の惡業を悔い、終に極樂寺の山門に於て捕手に圍まれながら立腹を切る、役者は芝翫(南鄉力丸、青砥藤綱)、團藏(濱松屋幸兵衛)、三十郎(日本駄右衛門)、權十郎(忠信利平)、羽左衛門(辨天小僧菊之助)、粂三郎(赤星重三)、新車(小夜衣お松)等。五世菊五郎の辨天小僧は極附のものであるが、此の時が其の書下しで非常に好評であつた。

□八月(市村座)、血達摩と若草伊之助――月見曠名畫一軸。(同題の草雙紙出づ、梅彥綴る、國貞畫く)。七幕十一場からなる御家物。惡臣等が御家の重寶達摩の一軸を盜み出したのを大高主殿(大川友右衛門)が水中(火中)の難を冒して無事に取返す。若草伊之助は向島で心中して死んだのであるが、

落雷の爲めに蘇生し名も半四郎六、團十郎七と改めて盜賊になり、美人局をして惡漢鬼藏を陷れて怨みを買ふ事などあつて、終りに捕はれ自害して果てるまで。役者は芝翫（主殿）、團藏（萩原主膳）、三十郎（鬼藏）、粂三郎（若草後に半四郎六）、權十郎（伊之助後に團十郎七）等。

◎八月（市村座）、竹之丞追善――法四季紙家橘拙。富本、清元にて六場。春、夏、秋、冬に別れてゐる。鞍馬山の谷間で修行してゐた牛若が師の僧正坊より祕傳の一卷を授けられる件と、忍ヶ岡の花盛りに酒を汲む鳥さしと樽拾ひを見つけ、木の葉天狗が舞下りて踊り狂ひ酒を貰ふのが春。大磯仲之町にて祐成と喜瀨川が久しぶりに逢つての口說は夏、燈籠祭りに紀文が寂しく彈ずる琴の音に釣られて玉菊の靈が現はれ物語りをするのと、藏前の閻魔堂で願人坊主が練り步いて囃すのが秋。冬は夫婦が池に雌雄の鴛鴦が來て踊り狂ふ。役者は羽左衞門（木の葉天狗、祐成、玉菊、願人坊主、鴛鴦の精）、芝翫（僧正坊、鳥さし、紀文、願人坊主、鴛鴦の精）、竹松（牛若丸、樽拾ひ市太、喜瀨川）等。

□八月（守田座）、村井長庵――勸善懲惡覗機關。（同題の草雙紙出づ、並木舍五柳綴る、國貞畫く。）又の名題は『村井長庵巧破傘』。八幕十一場からなる世話物。毒惡なる長庵は其の義妹を吉原に沈めて得た五十兩の金が欲しさに妹聟の重兵衞を赤羽根橋で殺害して奪ふ。そしてその罪を鹽冶浪人藤掛道十郎の所業だと傘を種に構へて言ひ落す。此の爲めに道十郎は牢死し妻女のおりよは子供を

抱へて一方ならぬ難儀をする。此處にまた長庵の爲めに苦しめられてゐる質屋伊勢屋五兵衛の養子千太郎と、伊勢屋の手代の久八とがあり、これが又道十郎とは主從の關係で共に長庵を怨む。其の中やうやくにして人入れの忠藏が證人として現はれ、長庵を罪に服さしめる。◎岸澤の『恨葛露濡衣』は小夜衣、千太郎の道行淨瑠璃である。役者は小團次(長庵、久八)、菊次郎(おりよ)、鶴藏(三次、吉兵衛)、市藏(忠藏)等。寂しくはあつたが、作にも力が籠り小團次の藝にも熱があつたので大成功の芝居であつた。又作としても默阿彌自身會心の一作と考へてゐたらしい。

◎十月(守田座)、緣結び――神有月色世話事。清元、岸澤、竹本にて二場。出雲の大社に神々集まり男女の緣結びをなすに、愛染明王の主張で、好いた同士は心中し易いから好かない同士を取結んだがよからうとなる。と、淺草境内へ諸方から寄り來る道行の組々が皆釣合はないものばかりで、種種な滑稽を演じる。矢張りこれではいけないとなり、粂の平内が來て元へ戻すといふに終る。役者は小團次(取上婆茨木)、菊次郎(傾城瀧川)、鶴藏(愛染明王、講釋師石川)等。

四十八歲(文久三亥年)。

○前年あたりより三題噺復活されて都下の流行となる。

○二月自作の三題噺を脚色して『髮結藤次』を上演す。三題噺の粹狂、興笑兩連より此擧を祝して默阿彌へ引幕を贈る。

△二月、後の五世菊五郎市村座に於て羽左衛門改めて市村家橋となる。

△二月、八世片岡仁左衛門歿す(五十四歲)。

△四月、四世嵐璃寛歿す(五十二歲)。

□二月(市村座)、箱根の對面――新年對面盃。小林の朝比奈が手引によつて、幼年の曾我兄弟雪の日をも厭はず、箱根なる鴫立澤に於て工藤の行列を待ち、聲を掛くれば工藤の奥方梛の葉にて、兄弟へは狩場の切手を與へ不思議の對面をなす。役者は小團次(朝比奈)、菊次郎(梛の葉)、家橘(箱王)、訥升(一萬)等。此の對面の時の行列に、人數が雪の爲めに赤合羽を着たのは、櫻川の變を利かせたものであつた。

□二月(市村座)、和國橋――三題噺高座新作。(同題の草雙紙出づ、諺藏濤治綴る、芳幾畫く。)和國橋の袂で髮結を渡世にしてゐた藤次は大酒飲みで家を潰し女房おむつはその父親の爲めに神崎屋喜兵衛の妾になる。藤次は主人の佐野屋幸治郎が百兩の金に困るのを見兼ねて神崎屋へゆすりに行き、此處で國性爺の紅流しを和で行つた所を見せる。後におむつは神喜の實妹と判明し目出度大團圓となる。役者は小團次(藤次)、菊次郎(おむつ)、團藏(神喜)、訥升(幸治郎)、家橘(巾着切り竹門の虎)等。自作の三題噺を潤色した作。隣の中村座で彥三郎、權十郎、田之助の眞正の國性爺が出ると聞いて、世話の和で行つた國性爺を上場對抗して勝利を得たものである。

□四月(市村座)、傘張武助――花卯木伊賀兩刀。一幕二場にて『伊賀越』の第五幕目へ書足したもの。渡邊志津摩が親父の仇敵又五郎を尋ね廻る中、眼病を煩ひ春日の里に侘住居をしてゐる。其處へ父親に勘當された傘張の栢榴武助が詫に來るが、詫料に持參した大切の密書を誤つて嚥下す。切割

いて取出さうにも不死身故それも叶はず困却の所へ、正宗の寶劍を得て腹を切り密書を捧げ忠節を盡す。役者は團藏(主膳)、訥升(志津摩)、家橘(武助)等。

◎四月(市村座)、江口西行――戀計文珠智惠輪。富本にて一場。大象に乘つた江口君と西行法師との戀物語があつて、引拔きになると放下師と茶屋娘になる。來合せた角兵衛獅子の仁八は獅子舞を舞ひ、放下師は手品を遣ひ、金輪の藝者や當て物を交へながら踊る趣向。役者は家橘（江口ノ君、放下師渦八)、訥升(西行、茶屋娘おきの)、九藏(仁八)等。

□六月(市村座)、三平世話場――皿屋敷化粧姿視。一幕二場で『皿屋敷』の大詰へ三平宅の場と水車の立廻りとを書足したもの。お菊の夫船木三平を頼つて逃れて來た花園姫と若殿の行方が知れ、御家の重寶大内布の守袋が手に入り家督相續が叶ふといふ結尾である。役者は菊次郎(松月尼)、家橘(嗣六、お菊の亡靈)、九藏（三平）等。家橘が勤めた亡靈の布晒ぬけと水車の立廻りが呼物になつた。

□八月(市村座)、腕の喜三郎――茲江戶小腕達引。(同題の草雙紙出づ、諺藏壽治綴る、國貞畫く。)三幕四場から世話物。劍客神崎甚内に仕へてゐた喜三郎が、召使のお磯と不義をし勘當される。音信不通に十箇年經てから神崎の娘お照を救つたを機會に詫を入れるが許されない。右の腕の强いを賴みにして喧嘩を賣り、俠客の頭分と立てられてゐるやうな奴は許せないといふのである。即ち喜三

郎は向後人と爭はぬとの誓を立て、其の證據として右腕を切つて始めて許が叶ひ、神影流の奧義をも傳授される。其の後師家を辱かしめた相弟子の大島逸平を討取つて仕返しをする。役者は小團次(喜三郎)、團藏(甚内)、菊次郎(お礒)及び訥升、家橘、九藏、三津五郎等。講釋に據つてはゐるが殆ど創作と稱して差支ない。小團次の喜三郎の惡からう筈はなく菊次郎のお礒も其の當り某中出色のものであつた。喜三郎の子分四人を當時賣出しの若手揃ひで勤めた事も、人氣を集め成功した芝居であつた。

□八月(市村座)、赤栗毛――竹春比虎溪三笑。(又明治十三年一月新富座書下しの甲州街道と共に『綴合新著赤栗毛』とも呼ぶ)。二幕四場からなる世話物。水口の宿端れなる松原にて宿屋の客引きに用ひてあつた磁石を喜八が盜んで來て、鐵の粉を田舍姿に振りかけ吸付かれて困つたり、武術修業者の鐵扇を吸寄せて追立てられたりする。赤坂の宿では、酒屋の辨慶にさしてあつた鮎を盜んで持つて歩いた爲めに、千枚稻荷のお狐に化かされ、果ては稻荷の宮に引き込まれ、狐拂ひの法印までが、狐に化かされて痴愚を盡すといふ物。⊖清元の『露尾花野邊濡事』は姉妹に化けた狐が、湯治喜多を引張つて來て嘲り物にする狂言淨瑠璃である。役者は小團次(喜多八)、團藏(彌次郎兵衛)及び家橘、訥升、九藏等。

◎十一月(市村座)、歲の市――歲市廓討入。富本にて一場。歲の市に淺草雷門前の茶店へ來た大工

の棟梁由右衛門が、遺恨のある神道者高間鈴成事もろ〱先生に復讎せんとて待つ所へ、料理屋の隅屋に飲んでゐたのを子分が引出して來るので、あれこれと責める。結局鈴成を恐入らしめて引上げるといふ趣向の物。これは此の時の『假名手本忠臣藏』の大切に新作したものだけに、討入、本望、引上げを世話で利かしたものであつた。役者は小團次（鈴成）、團藏（棟梁）、菊次郎（お高）、及び家橘、訥升、九藏等。

四十九歳（元治元子年）。

△左團次江戸へ下りて小團次の養子なる。
△粂三郎改めて紫若となる。
△十二月龜井戸豊國歿す（七十九歳）。

□二月（市村座）、御所の五郎藏！——曾我綉俠御所染。（同題の草雙紙出づ、諺藏濤治綴る、國貞畫く。）御家物の『時鳥殺し』と絡んで六幕十一場からなる世話物。時鳥はもと茶の湯の師匠一齋の妹娘さらなみである。淀の夜船で喧嘩に出逢ひ人混の中へ迷ひ込み、五郎藏の母お杉に其の娘卯の葉と間違へられて連歸られ、虐待に堪へず家出し鮑田村の地藏堂で淺間巴之丞に見初められ妾となり全盛を咲かせる。所が淺間家の後室百合の方が時鳥を憎み毒害せんとして果さず終に惨殺せしめる。五郎藏はもと淺間家の臣須崎角彌といふ者であつたが、袖の渡りの櫻時に侍女のおつぢと不義をなし主家を離れ俠客となつて御所の五郎藏と改めた。其後貧の爲めにおつぢは身を苦界に沈めさつきと呼んでゐるのを、侍女の頃から戀慕してゐた星影土右衛門が身請までせんといふ。それを見兼ねた

逢州（時鳥の實の姉にて忘貝と呼んだ）が土右衛門を連出す。五郎藏はさつきの苦心を悟らず一途に恨み誤つて逢州を殺す。さつきも翌日五郎藏宅に來り因果を語り合うて二人とも自害する。役者は小團次（百合の方、五郎藏）、菊次郎（さつき）、三十郎（土右衛門、お杉）、家橘（時鳥、切平）、三津五郎（逢州）等。種彥の合卷『淺間嶽面影草紙』に據つたもの。小團次の五郎藏、家橘の時鳥等が殊に評よく成功した作であつた。

◎二月（市村座）、吹矢――柳風吹矢の糸條。富本、淸元にて一場。此の頃流行の吹矢を穿つたもので、吹矢が的に當るとすうつと共的が上つて、代りに浦島太郎だの、桃太郎だの、舌切雀、さては定九郎、お菊の蟲、玉藻の前だのが跳び出して滑稽稽瑠璃につれて踊る。曾我の對面を趣向として嵌めこんでもある。役者は小團次（工藤、浦島、大黑）、家橘（五郎、雷、船頭）等。

□七月（守田座）、切られお富――處女翫浮名橫櫛。（又三保浦松月橫櫛とも呼ぶ。）（草雙紙及最初の名題は『若葉梅浮名橫櫛』にて、五柳綴る、國貞畫く。）赤間源左衛門の妾お富が與三郎と通じた廉を以て源左衛門に三十三所も切りさいなまれ、川に棄てさせる。と棄てに行つた蝙蝠安が途中から變心してお富を助け、薩埵峠へ連れて來て女房にする。三年の後與三郎に再會し與三郎の寶刀詮議に黨して、蝙蝠安を殺し身を沈めて二百兩の金を調達する。程經てお富は父丈我から與三郎とは實の兄妹、安藏は主人であつたと明され自害する。◎淸元の『秋色於富與三郎』は安藏を殺してからの道

行淨瑠璃である。役者は芝翫(赤間源左衛門)、田之助(お富)、訥升(與三郎)、九藏(安藏)等。瀨川如皐の傑作『切られ與三』に對して作つたもの。然し殆んど面目を異にしてゐて創作と稱して差支へない。田之助を中心にした作の最初で、成功したものである。

□八月(市村座)、鳥目の上使――一谷凱歌小謠曲。『義軍記』を補綴した時代物で一幕二場。木曾義仲の娘笹鶴姫を範頼が戀して渡せと迫るが聞き入れぬ。即ち首討つて渡せと鳥目の上使根の井行親を差立てる。根の井はもと木曾の家臣で、折がなあらば仇を報ぜんと思ひゐる者故、姫の身代りに己が娘を討つて復命するといふまで。役者は小團次(根の井)、菊次郎(千壽の前)等。

□十月(守田座)、孝女お竹――身光於竹功。三場からなる世話物。左插流の槍術を極めた橋本次郎右衛門が浪人となり、貧に迫り娘お竹を奉公に出す。其の奉公先で五十兩紛失したに就てお竹に嫌疑が掛かる。又一方次郎右衛門は他から借りた五兩の證文に入筆せられて、五十兩拂はねばならぬ事となる。孝心深きお竹は此の兩方の責を負つて身賣りせんとするを、其志に感じて奉公先の主人が引留め金を惠む。後に次郎右衛門は、その所持の左插流の傳書を狙ふ惡漢に殺害されたに就て、お竹は忠僕彥助と共に天王橋に於て仇討本懷を遂げる。お竹大日如來の由來である。役者は田之助(お竹)、三十郎(次郎右衛門)等。田之助に書下して成功した作の一つ。此の頃お竹大日如來の開帳があり、天王橋にあつた仇討を當てこんで書いたもの。

□十一月(市村座)、小〻〻禮三――小春穏沖津白浪。五幕十場からなる世話物。遠州生れの盗賊日本駄右衛門が、甲州猿橋在で人となつた小狐禮三と、紀州和歌浦に育つた船玉お才との兩白浪の爭ふを留めて仲裁し、三人は兄弟分となり盛に諸方を荒して廻る。遠州月輪村に於て鄰領に取圍まれた時、どうしても駄右衛門を差出さねばならぬ事となり、月本家の騒動の爲めに淺々中の玉島幸兵衛を禮三が百兩で買取り、面體の似たるを幸ひ引渡す。沒落した月本家は其の金を得て再興せられる。役者は小團次(駄右衛門、幸兵衛)、菊次郎(船玉お才)、家橘(小狐禮三)等。

◎十一月(市村座)、寫し〻〻――其儘姿寫繪。清元、竹本にて一場。龜屋都業所持の寫し繪が抜け出すといふ趣向。吉例の三番叟が出る、牡丹に獅子の狂ひがあり、坊主と幽靈と骸骨などの爭ひもある。其度に口上言ひの福助が出て來る。役者は小團次(福助)、家橘(三番、幽靈)等。

五十歳(慶應元丑年)。

○春より三座兼勤となる。

○十二月十二日、雷門燒失の火事に住宅全燒す。

△十月、中村座にて鶴藏改めて三世中村仲藏となる。

□一月(市村座)、野〻〻悟助〻〻――粹菩提悟道野晒。(草雙紙出づ『鶴千歳曾我門松』。芳幾畫る、國貞畫く。)二幕三場からなる世話物。大阪の千日前に住む俠客悟助が、住吉で土器賣の侘助を助けやりしが緣となつて娘のお賤に思はれ、又扇屋の娘小田井にも見初められる。悟助は一休禪師に誓つて妻

帶はせぬと言つたのだが、死ぬの生きるのと騒がれて仕方なしに小田井を貰ふ事になる。するとお賤は思ふ男の爲めとあつて身を沈め、後に提婆の仁三に辱められた悟助の男を立てさせやる、悟助はやがて四天王寺の山門に於て仁三に仕返しをする。『野晒』は鶴千歳曾我門松の中の二番目であつたが、一番目は京都近在に住む酒賣り又六が醫者を雉子と見誤つて鐵砲で打殺し、終に自害するの作を脚色してある。何れも京傳の『稲妻表紙』に據つたもの。役者は家橘(悟助)、彥三郞(浮世戸平、又六)、訥升(おしづ)、鶴藏(佗助、仁三)等。悟助は五世菊五郞の出世役の一つであつた。

◎一月(市村座)、一休地獄噺。富本、淸元、岸澤にて一場。高須の里珠名屋の傾城地獄太夫が高名なるにより一休和尙來りて逢ひ、悟助を思ふ二人の女が尼とはなつたが、來世は無間地獄に落ちるであらうと言はれ、地獄太夫の求めに應じて、地獄極樂の物語りをなし、水鏡の法談をなす。役者は團藏(一休)、彥三郞(地獄太夫)、家橘(悟助)等。

□一月(中村座)、角屋——鶴龜壽曾我島臺。一幕二場だけにて、一番目御家物の六幕目、掛川宿角屋の場を助筆せしもの。一色家の重寶勘合の印を探索に出た千島左衛門が掛川宿へ來て惡人につけ狙はれたが、元の下僕にして盜賊のうすきの仁三に角屋へ賣りこかされたおしづがゐて匿ひくれる。角屋の聟の宗次も左門之助に恩義あつて匿ひくれる。所が舅の九兵衛は惡漢でどうかして左門之助を引きづり出して褒美にありつかうとする。果ては仁三を差向けて脅かすので、おしづが突殺す。

左門之助が生憎と眼病に罹つたのを救ひたさに宗次は悴を殺して平癒せしめ、自分は男の爲めに殺される。役者は小團次(角屋宗次)、左團次(千島左門之助)、龜藏(鬼九兵衛)現十郎(仁三)等。

□三月(守田座)、紅皿缺皿――月缺皿戀路宵闇。四幕十一場からなる。繼橋家の楓姫の實母が亡つたに就て迎へられた片もひは、連子の紅皿姫をのみ愛し、楓姫をば缺皿と改めさせて虐待する。缺皿が左近太郎と相愛した事を知つた時には憎みの餘り折檻し、雜藏に入れて餓死せしめんとする。辛うじて忠義な若黨に救はれ神の助けによつて父の仇敵たる天目須之助を討取る。役者は田之助(缺皿)、芝翫(須之助)、三十郎(片もひ)等。馬琴の合卷『皿々鄕談』に據つたもので、芝居としても成功した。書下しの名題は魁駒松梅櫻曙で、これには紅皿缺皿以外に隅田川乘切講談が附け加へられてあつた。

□五月(市村座)、俠客傳――菖蒲太刀對俠客(同題の草雙紙出づ、諺藏、壽治綴る、國貞畫く。)七幕十七場からなる世話物。『新田の庶流脇屋右小將義詮の嫡子、異姓を以て成人したる館の小六助則』と『楠河内守正元が忘れがたみの姑摩姫』との二人が如何にもして足利義持を討たんとして付け狙ふも遂に果さず、又の再興を約して別れるに終る。役者は彥三郎(小六。維滿)、訥升(義持、又市)、菊次郎(姑摩姫)等。馬琴の讀本『俠客傳』に據つたものである。

◎五月(市村座)、忠臣藏七段返し――忠臣藏形容畫合。竹本、淸元、常磐津、岸澤にて七場。忠臣藏

の大序より七段目までの骨子を拾ひ滑稽淨瑠璃に書いたもので、道具は居所替り等にて變化する。役者は訥升(判官、奴紀の平、おかる)、家橘(若狹之助、勘平)、彥三郎(師直、伴內、平右衛門)、菊次郎(顏世、おかや)等。滑稽淨瑠璃としては傑れた作であつた。

□五月(中村座)、女定九郎——忠臣藏後日建前。忠臣藏の後日譚の五幕目で二場からなる。「まむしのお市」とまで呼ばれたる毒婦が、伏見街道の雨宿りにおかるの母おかやに逢ひ、お市が二世と言交はした定九郎が仇の片割だと知つてゆすりに行く。と此の日が與市兵衛と定九郎双方の一週忌でもあり、おかやが實の母であることを知り、我身の惡業を深くも感じ鐵砲腹をして果てる。役者は小團次(お市)、權十郎(小山田)、紫若(おかる)等。

□八月(市村座)、五人女——處女評判善惡鏡。(同題の草雙紙刊行さる、諺藏綴る、國貞畫く。)五幕十三場からなる世話物。大盜賊の神道德次と其の女房になつてゐる雲切りお六を中心にして、白浪五人女を書いたものである。これに御家騒動を絡ませて、お六が鈴鹿山で奪ひ取つた琵琶丸の短刀は、德次の尋ねる主家のものと分かり申譯の爲めに自害し、餘のものも召捕はれたり自殺する。此の他に孝女お淺の哀れな物語をそへてある。◎淸元の『貸浴衣汗雷』は御殿女中に裝つた、すばしりお熊が德次と夕立にかこつけて關係をつけ、後日のゆすりの種にする所の色合に用ひられた淨瑠璃である。役者は菊次郎(お六)、彥三郎(德次、お淺)、家橘(すばしりお熊)、訥升(木鼠お吉)、三津五

郎（おさらばお傳）、鶴藏（山猫おさん）等。

□八月（守田座）、笠森お仙——怪談月笠森。三幕五場からなる世話物。草加在の名主におせん、おきつといふ姉妹があつて、おきつが今村といふ武家に奉公してゐてお手がつき正妻になほると定まる。其處へ今村の御主君の周旋で家老の娘を否應なしに迎へよと仰せられたので、おきつには手當をして在所へ返さうとなつた。おきつは心密かに今村の心事を恨んでゐると、以前から思ひをかけてゐた下部の市助が、有る事無い事焚きつけて嫉妬せしめ、門跡河岸へ誘ひだして挑み、却て彈かれるので市助が慘殺して了ふ。然しおきつはこれをも今村の指圖と思ひ込み亡靈となつて現はれ今村は遂に切腹する。おきつの仇は姉のおせんが討取る。役者は田之助（おきつ、おせん）、九藏（市助）、福助（今村丹三郎）等。お仙よりもおきつが中心で田之助はこれにも成功した。九藏の下部市助も評判になつた。

□八月（中村座）、上總市兵衛——上總綿小紋單地。（同題の草雙紙出づ、諺藏綴る、國輝畫く。）五幕九場からなる世話物。上總姉ヶ崎の名主次郎兵衛は配下なる宗次郎が猪と見誤つて人の娘を撃殺した科によつて所拂ひ、遠島に處せられる。次郎兵衛の下僕市兵衛も、もとより貧窮人ではあるが、跡の老主人、幼子を引受け、鎌倉笹目ヶ谷に逼塞し、日夜主人の赦されん事を梵字ヶ瀧の不動尊に祈る。八年の後忠僕市兵衛の誠心通じてか、赦免の報を手にして喜悦する。役者は小團次（市兵衛）、

龜藏(次郎兵衛)、榮三郎(市兵衛女房おしづ)、權十郎(木鼠忠次)等。津藤が下總の寒川から聞書にして寄せた「市兵衛記」を骨子として創作したもので成功した作であつた。此の中幕へ『俊寛』を挿んで暗に島の生活を彷彿させてあるが、これは『平家物語』の蟻王島下りを脚色したもので、小團次(俊寛)、左團次(蟻王)等であつた。

□九月(市村座)、左近太郎――左近太郎雪辻能。一幕三場からなる時代物。『葛の葉』に補足したもの。もとは小野の家臣なる好古郷の家來能師左近太郎照綱が、舊主の娘六の君が惡漢に奪はれたるを河内國牧方堤に於て助け、連れ歸りて匿まふ。それと知つた惡漢等領主の威を着て來り首討つて渡せと迫る。太郎の妻花町は妹楓を身代りに立てんと欲し、楓の許嫁にて太郎の弟なる衛門之助も同意して楓を身替りに立たせ、衛門之助は申譯の爲め切腹し、且つ姫の眼病を癒す。役者は彥三郎(左近太郎)、菊次郎(花町)、家橘(衛門之助)等。

◎九月(市村座)、關所藝盡し――滑稽俄安宅新關。富本、淸元、竹本にて一場。安宅に新關が設けられて其處を通らんとするものは何か藝を見せなくては通さぬと言ふので、滑稽淨瑠璃に伴れてをかしみの踊りや身振りが續出するといふ趣向。役者は彥三郎(戶樫、五斗兵衛)。訥升(横山太郎、猿廻し與次郎)、三津五郎(お三輪)、菊次郎(朝顏)、家橘(たばこや源七、澤井の助平)等。殊に彥三郎の戶樫が評判よく、成功した滑稽淨瑠璃であつた。

□十月(守田座)、石和川――鵜飼石御法川船。一幕一場の時代物。(次の「會式櫻」を下の巻としてこれを上の巻としたのは岸澤と竹本を用ひあるが故なれど單獨の作と見れば時代物と見るを可とすべし)。鵜飼勘作は以前は上總葛飾にて平賀と呼んだ郷士であつたが、零落して甲州石和川の邊に來り、老母の病を癒さんとて禁斷の場所へ鵜を入れた爲めに禁獄され簀卷にされて淵へ沈められる。その跡へ東條左衛門が來て鎌倉殿の御用なりとて悴經市の血汐を捧げようといふ。暫時の猶豫を願ひ經市と別れを惜しむ間に、經市は東條の落胤と判明して許す。此處へ日蓮と日朗來りて濟度し經市は日像と名づけられて弟子入りする。役者は芝翫(勘作の靈、日蓮)、九藏(東條)等。

◎十月(守田座)、池上夜參り――會式櫻花江戸講。淸元にて一場。池上へ夜參りの法華衆徒が萬燈を押立てて出で種々な滑稽があり、終には迷子の阿彌陀を連れて來てとう〳〵題目黨に引き入れるといふ結末。役者は芝翫、八百藏、九藏、三十郎、友右衛門等何れも信者講の面々。

五十一歳(慶應二寅年)。

△一月、瀨川如皐作『蟒お由』中村座に上場されて喝采を博す。

△五月八日。市川小團次歿す(五十五歳)。

□二月(市村座)、明石志賀之助と薄雲――櫓太鼓鳴音吉原。(同題の草雙紙出づ、言彥(彥藏が事)、金作綴る、國貞畫く。)六幕十一場からなる世話物。明石志賀之助は大江公のお抱へ相撲、仁王仁太夫は北條公のお抱へ相撲である。今度双方が取組む事となつて大江公は是非とも勝たせたいと思つ

てゐるが、其の日間近になり明石は癪を煩つて出場も難しくなつた。と弟子の朝霧が師匠の病氣平癒を不動尊に祈り、其の加護によつて病もなほり勝負にも勝つ。公からはお褒めの言葉に添へて、日之下開山と銘した羽織を頂戴する。薄雲は吉原仲之町でも一二と謳はれた傾城で、これを深見十三が見初める、薄雲も彼れの虚無僧姿が忘られない。けれども深見は鼠の精を體したもので、それと知つた薄雲の秘藏猫が害を未然に防がうとて其の戀に邪魔する。猫はやがて新造胡蝶に乗り移つて深見を口說かせ深見を寄せつけまいとする。薄雲は姉女郎たる自分の間夫を盜むとは太い女だと言つて胡蝶を櫻の木につるして折檻するが、猫に助け下されて深見に恨みの刃を切りつける。◎清元の「鼠啼色逢夜」は『薄雲』の序幕の深見十三との見初めに用ひた淨瑠璃。役者は彦三郎（志賀之助、深見）、紫若（薄雲）、權十郎（仁王仁太夫）、家橘（胡蝶、鷲の長吉）、九藏（朝霧、幻次郎吉）等。

◎二月（市村座）、義仲と巴――有姿夢湖水。富本にて三場。前の『薄雲』の發端の爲めにつくられたもので、飛脚二人が江州四明ヶ嶽まで來て森入り、鼠ヶ洞に迷ひ入り、妖鼠の術にて粟津ノ原より逃れ來りし義仲と巴御前とが歡樂を盡す夢を見、あとより來た飛脚喚平が所持の銀の猫を奪ひ合ふ。役者は彦三郎（音平、虚無僧草月實は舊鼠の怪）、權十郎（義仲、喚平）、紫若（巴御前）、家橘（渦平）等。

□二月(守田座)、曾我のゝゝゝ敷皮——富治三升扇曾我。四幕六場からなる時代物。河津の三郎祐泰の遺子一萬、箱王が、後禍を慮られて賴朝の手に捕へられ、まさに由比ヶ濱に於て斬罪に行はれんとする。これが畠山重忠の切なる諫言によつて赦免される事となり、すでに濱邊の敷皮に坐してゐた二人が赦されるといふ、曾我の生立を書いたもの。役者は小團次(鬼王、重忠)、菊次郎(滿江)、三十郎(祐信)等。

□二月(守田座)、鑄かけ松——船打込橋間白浪。『曾我の敷皮』の二番目として書かれたもので、三幕七場からなる世話物。鑄掛屋渡世の松五郎が、兩國橋の上から、田舍大盡の贅を盡しての船遊山を見て、金さへあればどんな榮耀も出來るのだと、心機一轉して宗旨を更へ盜賊になる。或夜大盜賊の梵字の眞五郎の妾宅へ强盜に入り、妾のお咲は五年前に夜船の中で契りを結んだ女と知れ、眞五郎の情で改めて夫婦にし落して貰ふ。後二人は寺門前の花屋へ門付になつて來て、花屋の主人佐五兵衞は實父と分かり、十七年振りに對面する。その悅びも束の間で、救ふ積りで惠んだ百兩の爲めに恩家刀屋の宗次郎が入牢したと聞き、書置を認めて松五郎は切腹する。◎淸元の「梅柳軒朧夜」は三幕目同明町の藝者屋で宗次郎が金策に困じて死なうと覺悟し、藝妓のお組と別れを惜しむ所に用ひられた淨瑠璃。役者は小團次(いかけ松)、菊次郎(お咲)、三十郎(眞五郎、佐五兵衞)、新升(宗次郎)、三津五郎(お組)等。講釋に據つた作。小團次の最終の白浪世話物で、二月の十二日に開場し

て死ぬ五月八日頃までも、百日近く打續けた當り狂言であつた。

□八月（守田座）、飛驒の內匠と加賀の千代——孝悌譔六十餘集。五幕十二場からなる世話物。伊賀ノ國の鄕士平內の子が美濃十石峠から鷲に攫はれ行き、近江に於て無事に成育して大工となり、終に國守より內匠の稱を許され、飛驒の山中から來たといふので飛驒の內匠と呼ばれた。家中の惡人左京が謀叛を企て、引入れんとし却て斬られる。內匠は人を殺した罪を負うて石山寺に自殺せんとし、加賀の千代に救はれる。後越中に志し飛驒の山中に於て護摩の灰と畚渡しの際に爭ひ、谷間に落ち實父の平內に助けられる。左京の娘お照は父の仇敵と狙つてゐたが、內匠の正道なる事を知り、改めて和解せんことを乞ふ。役者は菊次郎（千代）、三十郎（平內、左京）、友右衛門（內匠）等。小團次の追善狂言であつたが、興行は大の不成功であつた。

五十二歲（慶應三卯年）。

○前年來三題噺衰へて、『繪合せ』流行する。

△田之助足疾を獲て次第に惡し。

△王政復古す。

□一月（中村座）、おしづ禮三——契情曾我廓鑑。（同題の草雙紙出づ。諺藏、金作綴る、國貞畫く。）三幕六場からなる世話物。淺草田甫に住む非人の傳二が拾上げて育てたおしづは今小町と呼ばれる程に美しかつた。これが女太夫として門に立ち傳馬町二丁目の奧州屋といふ小道具屋の若い衆で今業平と噂された禮三郎に見初められ子までなした。後禮三が菊一文字の短刀を紛失した申譯に身投

けせん•とし傳二に救はれ、少時非人小屋の樂しい生活に耽つた。が奥州屋の娘が禮三に戀慕してゐた所から二人の仲は割かれる。別れてから一月經て、禮三は大師詣での歸るさ、おしづは眼病平癒の爲日朝樣へ願詣での戻り道に、雪の小磯ヶ原に再會して悲しい別れを遂げる。傾城草履打の方は加賀見山のを吉原仲之町三浦屋のお職岩藤と尾上初菊等の遊女に借りたものである。役者は田之助(おしづ、岩藤)・家橘(禮三郎、初菊)及龜藏、三十郎、新車、左團次等。何しろ當時の人氣者の家橘、田之助がおしづ、禮三を演じたのだから大評判で成功した。噺家の柳橋の實見談に暗示を得て新作せるもの。殊に小磯ヶ原の雪の別れなどは見物を泣かせたもので、今も行はれてゐる淨瑠璃の小磯ヶ原は、和國太夫がこれを採つて用ひたものである。

◎二月(市村座)、魂の入替——質庫魂魂入替。富本、淸元にて一場。大和ノ國なる質屋寶珠の質庫に於て、孔明の陣太鼓、大津畫奴、將門の裝束、扨は宿場女郎の枕等の精が化けて出る。それを奇妙院の所藏たりし魂入替傳書の精があちこちと入替へて踊り拔く趣向のもの。役者は龜藏(孔明の精)、左團次(大津畫奴)、田之助(宿場女郎)、家橘(奇妙院傳書の精)等。馬琴の作に據りしもの。

□五月(市村座)、和尚次郎と妲妃のお百——善惡兩面兒手柏。七幕十三場からなる世話物。和尚次郎はもと深川妙心寺で日章と呼んだ役僧であつたが、門前の花屋作兵衞の娘お花と契りを結んだのが露顯し、女犯の罪に問はれて追放される。窮迫した二人は投身心中を企てたが、女を先立てて死に

後れ、急に心機一轉して遊人となり和尚次郎と名乘る。數年を經て巡禮となつて廻り歩く中お花に逢ひ、これを捕へて廓へ賣りとばす。後に救ひ出さんとし過つて父の作兵衛を殺すやうな羽目となり、餘りの罪業に身を悔い自殺する。一方大阪の廻船問屋桑名屋德兵衛はふとした事から、小間使のお百に迷ひ遂に家産を蕩盡し二人で江戸へ下る。莫連者のお百は德兵衛を捨てて小三と名乘り深川藝妓となる。德兵衛は棄てられた悔しい一念で紙屑買ひとまで零落して、お百の住家を突留める。お百は出世の妨げ、惡足だといふので、德兵衛をお態婆と共に十萬坪で慘殺する。役者は家橘（和尚次郎、お百）、龜藏（作兵衛）、左團次（德兵衛）及び三十郎、新車等。語りの文句にも斷つてある通り前者は春風亭柳枝の落語、後者は桃川燕林の講談に據つたものであつた。家橘の和尚次郎と左團次の德兵衛とが好評であつた。

□七月（市村座）、新累――新累女千種花嫁。五幕十四場からなる世話物。千葉家の妾名草が中小性の西入權之丞と密通せしとの嫌疑を受けてなぶり殺しにされる。と其の時着てゐた秋草の模樣の小袖が廻り廻つて、新たに妾の候補に擧げられた與左衛門の娘累の手に入る。所が此の小袖の祟りと與左衛門が十七年前に女房を殺害した其の鎌を以て隅田川の渡しで瞽女を殺して三十兩奪ひ取つた應報とで、累は半面大火傷して妾に上れなくなる。此の累と、浪人して流れ來た權之丞とが契を結び、與左衛門は身の罪業を悔いて廻國に出るので、其の跡へなほつて與左衛門の名跡を嗣ぐ。年經て

權之丞の與左衛門が庄屋の娘おふみと通じをる由を、伯父の金五郎から聞かされ煽てられて、鎌を以ておふみを殺さんとし却て與左衛門に殺され、死靈となつて取殺す。役者は家橘(巣)、龜藏(與左衛門)、左團次(權之丞後に與右衛門)三十郎(金五郎)等。馬琴の『因果物語』に據つたもの。

□八月(市村座)、鳩の平右衛門――稽古筆七いろは。義士銘々傳の中で一幕二場からなる世話物。足輕寺岡平右衛門が主家の沒落後故郷に歸り、東下りの合圖を待つてゐる中に、矢間小汐田の兩士が知せに來るので、迎へて一年經つや經たずの女房に別れて江州逢坂山まで來て辨當をつかひながら群り來る鳩の親子睦じい態を見て戀しくなり、もと來た路へ引返し家へ戻る。父平左衛門は悴に未練の殘らぬやう切腹して門出に手向け、平右衛門は涙をふるつて別れを告げる。役者は父平左衛門(龜藏)、平右衛門(九藏)等。

◎八月(市村座)、諷々法燈籠。富本、清元、竹本、長唄にて一場。竹之丞百五十回忌の追善に出來た淨瑠璃所作事で、京都の盆踊りを取入れた、京と江戸との名所盡しである。これを上の卷として、下の卷には『螢々色大山』(清元にて二場)がある。大阪住吉の祭禮に飴屋が出たり、唐人の宙乘りが出たり、百里見の眼鏡が持出されたりして、際物の滑稽が演ぜられる。江戸山祭りの場では大山へ講中の衆が參詣に行き、茶店に休んでゐる間に各自の色懺悔をするといふ趣向であつた。役者は家橘(見物左衛門、唐人飴ほにほろ、大山詣りよき琴の菊松)及び竹松、龜藏、新車、左團次、

子團次等。

□十月(守田座)、勢力鐵砲腹——巖石碎瀑布勢力(又は群淸瀧贔屓勢力)。三幕四場からなる世話物。達師神力民五郎の舅甚兵衛が栗林村に於て何者にか殺害され所持の百兩を奪はれる。と民五郎の食客左門が片袖ちぎられて無く又その金子を拾つてゐる所から、左門の所業と思ひ込み、當の下手人奇妙院が片袖を種にゆすりに來た時罪を負つて自分だと答へる。それを聞いた甚兵衛の娘のおしほや仲間の白瀧與吉が憤る事などあるが、やがて子分の知せによつて、かねて遺恨ある岩岡竹五郎に一味の奇妙院の所爲だと判明するので、民五郎は明神山に馳け上り彼等を討つて仇を報じる。然し竹五郎の子分に取卷かれ潔よく鐵砲腹をして果てる。これを後に與吉や左門が竹五郎に仕返しをするに終る。役者は芝翫(神力民五郎、竹五郎)、仲藏(修驗者奇妙院)、訥升(三ツ島左門)、友右衛門(白瀧の與吉)等。芝翫の當り狂言であつた。仲藏の奇妙院が無類の出來榮であつたといふ。

【五十三歳】(明治元年戊辰年
紀元二五二八年、
西暦一八六八年)

○八月、市村座に於て家橘改め五世菊五郎となる。此の興行に際し『蔦の葉』の與勘平を左團次に振當てゝ容れられず、默阿彌も共に退座す。

△十一月、五世(名人)烏非清満歿す(八十二歳)。

△澤村田之助脫疽を病みヘボンの治療を受く。

△江戸を東京と改稱し聖上行幸さる。

□三月（市村座）、おわか伊之助——隅田川鶯音曾我、（同題の草雙紙出づ、琴咲（金作）、言彦（諺藏）綴る、國貞畫く。）四幕五場からなる世話物。鳶の者伊之助が三年前成田に於て柳橋の藝妓お若を見初め、互ひに忘れず思ひ合うてゐて遂げず、或る晩兩國橋の上でお若は惡漢に追はれ河中に跳び込む、折よく下を通りかかつた伊之助の船に助けられ、これが緣となり天下晴れての夫婦になる。おしづの後日も附加されゐる。禮三郎は其後次弟に家が厭になつておしづに逢ひ度くなり、其の餘り家を拔け出し淺草田圃なる傳次の非人小屋へ訪ねて來る。おしづも飛び立つ思ではあつたが、さう未練が殘つては禮三郎の爲にならないと思案し、思ふ男への心中にわざと愛想づかしをなし自害して禮三郎に詫び、身を立てさせる。◎非人小屋の出逢に清元の『梅薫いろは田家』がある。役者は家橘（禮三郎、伊之助）、田之助（おしづ）、三津五郎（お若）及び龜藏、左團次、仲藏等。

□三月（守田座）、けいせい重の井——染分千鳥江戸褄。三幕三場からなる世話物。由留木家の腰元重の井が與作と不義して江戸へ下り、吉原花菱屋にて重の井と名のつて傾城となる。與作を達引く金に困り按摩の慶政から七十兩借入れる。程經て慶政に金を返さねばならぬ事となり當惑せる折、それと知つたおさんが盗み持來れる百兩を慶政に返す。鷲塚官太夫等は慶政を歸途に待伏せ殺害してその金を奪ふ。と慶政は與作の兄と分かり官太夫等は付狙ふ敵と知れ、與作は重の仇敵を仲之町で討果す。役者は田之助（重の井）、訥升（與作、慶政）、芝翫（官太夫）、菊次郎（おさな）、九藏

(八平次)等。

□五月(同座)、廓塚お松――意鋪錦浮名廓塚一幕三場からなる世話物。三田の三角の切見世に美しくて諸藝に達した流行妓がゐて、あまりに段違ひだから掃溜お松と呼ばれた。三浦家の若殿榮之丞が故師の娘と見定め樂をさせたいと毎日通つて來る。其の爲の金策に菅家の一軸を質入して困る、それを助けた五郎藏がお松を奪つて逃げる。榮之丞もそれと知つて追かけ、お松と共に五郎藏を討取り、二人は目出度く夫婦になる。役者は田之助(お松)、訥升(榮之丞)等。

□五月(市村座)、八犬傳刀賣り――荒芽山襍花八房。二幕三場からなる世話物。犬山道節が白井の城下に於て管領貞正に逢ひ、村雨の刀を賣らんとして近寄り切りつける。後遁れて荒芽山なる音根が隱家に忍びゐる内四犬士にめぐりあひ、又力次、尺八の亡魂など出で音根と世四郎と夫婦になり、道節は火遁の術を捨てるまで。此の中『荒芽山』の件は明治七年新富座で書下されたのであるが、便宜上一緒に解題して置く。役者は權之助(道節)、左團次(力次等)。

五十四歲(明治二巳年)。

□一月(守田座)、遠山鹿子――當訥芝福德曾我(同題の草雙紙出づ、桃壽(濤治)綴る、國貞畫く。)四幕十場からなる世話物。赤松滿祐の後と六角家との確執から、大津の畫工又平の子又六は赤松家に黨して六角左京の首級を擧げ、尚も六角家の忠臣名古屋山三元春をたづねながら互に仇敵と付狙

ふ。又平の宅に於て出會し勝負を決せんとしたが、六角家の若殿は又平に助けられ、且は其舅になりをる爲め、義理に責められ討つ事ならず、卽ち又平切腹して互の心を鎭め、勝負を延はさしめる。これに島原茨木屋の傾城遠山太夫と阿野四郎次郎との關係を交へたもの。種彥の「遠山鹿子」に據つた作。役者は訥升（名古屋山三）、芝翫（不破伴左衞門）、田之助（遠山太夫）、菊次郎（[illegible]生）、仲藏（又平）、左團次（篠垣軍藤太）等。

□一月（同座）、日高川――戀紀の路日高曙。二幕三場からなる時代物。眞名子の庄司が娘淸姬は去年の夏四條河原の夕涼みに見初めた男が眼に殘つて忘れないでゐると、其の男が山伏姿になり安珍と名乘り來て一夜の宿りを請ふにより泊らせる。と安珍は其夜同じ塲にゐた小田卷姬と連立つて道行をしたので、淸姬は嫉妬を起し追かけ、日高川を渡す船頭が居ないので自ら蛇體となつて物凄く打渡るといふまで。役者は田之助（淸姬）、訥升（安珍）、仲藏（庄司）、多賀之丞（小田卷姬）等。

□二月（市村座）、書換加賀騷動――蝶三升扇加賀製。四幕六場からなる時代物。多賀家の執權望月左近が謀叛を企て、若黨又助を手先に使ひ、或は大領を毒害し、或は系圖を盜み出さしめ、終に忠臣蟹谷雅樂之助を窮地に陷れる。雅樂之助は唯一人忠義を盡し、我子をも犧牲に供して若君を守育て、遂に惡人を滅し御家を再興するに終る。役者は權之助（雅樂之助）三十郎（左近）、友右衞門（又助）等。

□三月(守田座)、京島怪談——廓文庫敷島物語。六幕十二場からなる世話物。吉原仲の町三浦屋の抱敷島は、女將のお玉と若い衆源四郎との情事を見知つたところから、枕搜しの罪を被せられ、遣手のお爪と源四郎の爲めにつひに責殺され、古葛籠に入れて川流しにされる。敷島は恨んで亡靈となつて現はれ、情人なる藤代屋重三郎に告げ、敵討の事と遺子の後事とを托する。その後源四郎とお玉は府中へ遁れて女郎屋を始めてゐる、と新たにお玉の情夫となつた阿古木主膳が源四郎とお玉を殺す。役者は田之助(敷島、其の亡靈、お玉)訥升(重三郎、主膳)、仲藏(お爪、五平次)等。田之助が足を失つたに就いて、作者がそれで勤まる役にして書いた作で好評であつた。

□五月(市村座)、義士餘談——名大星國字書筆。六幕八場からなる義士の外傳。不義士と呼ばれた小山田庄三郎の遊蕩が實は御家の重寶たる黄金の鷄を奪ひ返さん爲めであつたといふ事を中心にして、父重左衛門の切腹を書き、それに泉岳寺の引揚と十八ヶ條申開き、細川邸の切腹を書き、大切淨瑠璃やうに高輪開帳の景氣を添へたもの。役者は權之助(由良之助、庄三郎)、三十郎(重左衛門)等。◎常磐津、淸元の『是評判伊吾同餅』は、泉岳寺の開帳に其の境内へ出來た伊吾餅屋の店頭で、伊吾餅賣り三人と給仕女三人とが趣向をして、忠臣藏の大序から十一段までを言立にして、『水魚連の茶番めかして』種々の滑稽を演ずるのである。役者は餅賣り(權之助、家橘、友右衛門)、給仕女(紫若、菊次郎、國太郎)等。

□七月(守田座)、三勝半七——群入田鶴紅葉曙。一幕一場の世話物。田之助が病氣全快して出勤したのを當て込んだもので、茜屋半七が三勝の病氣全快して又もとのやうになれたのを悦ぶといふ趣向のものであつた。役者は田之助(けいしや三勝)、左團次(茜屋半七)、仲藏(茜屋平左衛門)等。

□七月(中村座)、小堀政談——吉様参由縁音信。五幕十四場からなる世話物。本郷の八百屋久四郎の娘天人お七が、百兩の金故に思はぬ男釜屋武兵衛の所へ行かねばならぬ事となり、駒込の圓城寺に匿れてゐる小堀家の若殿左門之助に操を立てて自害せんとする。それを救つたのが湯灌場小僧吉三で、當歳から行方不明になつてゐたお七の兄であつた。義賊の吉三は百兩金を調達して與へたが極印金故に面倒が起る。お七は左門之助に逢ひたさに木戸を開けようと櫓の太鼓を打つて召捕はれるが、此の罪も吉三の罪も小堀家の仁田忠常の仁惠によつて無事に收まる。これに小堀家の御家騒動が絡んで、殿の妾にして吉三の情婦の湯島のお勘は後に吉三と共に相果てる。役者は菊五郎(お杉、吉三、傳吉)、三津五郎(お勘、お七)、龜藏(吉田忠左衛門、紙屑屋伊兵衛)、璃鶴(左門之助)等。乾坤坊良齋の講釋に據つた作。此の時には、左門之助を座敷牢から救ひ出して圓城寺へ落してやるお杉の責殺される所が評判であつた。

□八月(守田座)、世話の妹脊山——早晩稲守田當穐。三幕三場からなる世話物。大和國妹山の領主大宰の家來柏木の後家と、紀伊國脊山の領主大判司の家來戸津川半十郎とが、玉川邊に住ひ地境の事

から爭論し代官所へ呼ばれて調べられ、却つて双方共にお主の跡を圍ひをる事が發覺し、柏木は雛鳥の首を、戸津川は久我之助の首を討つて差出さねばならぬ事となる。と兩家の啀同志の妹と息子とが相愛してゐるを附目に身替りに立てる。一方、肝腎の二人は百年目の源八が引攫つて逃げたので兩家の者追掛け行き二人を奪ひ返し、重器小烏丸の短刀をも手に入れ、主家へ歸參の事も叶ふといふに終る。役者は訥升(久我之助、後家お定の悴清三郎)、仲藏(百年目の源八)、左團次（下男芝藏、下女お崎)、菊次郎(柏木のお定)、多賀之丞(雛鳥、半十郎妹おたか)、友右衞門(半十郎)等。

□八月(市村座)、桃山譚――駒迎三升入盃觴の中幕。一幕四場からなる時代物にて新歌舞伎十八番の一つ。加藤清正（書下しは佐藤正清）が小西石田等の讒言によりて秀吉の勘氣を蒙り蟄居中、伏見の大地震の際一番がけに桃山城へ馳せつけ、警固に任じ其功を以て許され、朝鮮征伐に出立するまで。後明治六年九月に増補され其の前へ二幕五場だけ秀次の亂行と高景の諫言とを加へたが、桃山の件とは殆ど關係がない。役者は權之助(清正、秀次)、菊次郎(幸藏主、増補の際は門之助)、三十郎(秀吉)等。團十郎の地震加藤は極め附の評判物で、いつも大成功をしたものである。

◎八月(同座)、三社祭禮――能中富清御神樂。富本、清元にて三場。天の岩戸に天照太神かくれ玉ひしにより、其前にて鈿女の命を始め諸人舞樂を奏し、日光の射すを見ていでませしを悦ぶ。石清水の八幡社頭に於て、八月十五日の放生會に、鳩の精來りて小烏賣りの小鳥を悉く買取り放ちやる。

春日山は、樂人撫子と舞女との戀物語りにて、其の中へ生酔の仕丁が絡んでをかしみになる。役者は權之助(手力男尊、鳩の精、仕丁太郎又へ、撫子)、三十郎(猿田彦)、羽左衛門(樂人求女)等。

□十月(中村座)、善知鳥安方——相馬祭禮音菊月。四幕七場からなる時代物。相馬將門の後胤たる姉の瀧夜叉と弟の太郎良門とが父の志を繼いで謀叛を起したが、却つて賴信の謀計に陷り墓の妖術も消されて用をなさず、齒噛みをなして退く。これに善知鳥安方の忠死と妻錦木の身賣りとを絡ませた世話場が加へられてある。役者は菊五郎(良門、ちよぼ平、安方)、三津五郎(錦木、瀧夜叉)等。補作であつた。

□十月(市村座)、日蓮記——花楓高祖御傳記。三幕八場からなる時代物。弟子の日朗が出家の因縁に始まり、相州米ヶ濱彌三郎宅に潛伏中を召捕はれ、龍ノ口に處刑されんとして救はれ、佐渡に流され塚原の庵室にある事三年、徒弟の日朗赦免狀を携へ來りて鎌倉へ歸るまで。役者は權之助(日蓮)、三十郎(彌次兵衛)、芝翫(彌三郎)、菊次郎(千日女)、羽左衛門(日朗)等。

◎十一月(守田座)、忘れ藥——三國三朝妙藥奇。岸澤、竹本にて二場。藪醫師寒竹が夢に唐土を見、お半長右衛門の道行を見て般得塚の忘草を見たりと見て醒むれば、忘草は枕頭にあつたので、寒竹は想ひをかけてゐる義太夫の女師匠を手に入れんとし、稽古に來る邪魔者へ振りかけ放心させる中、皆に氣附かれ終ひに袋叩きに逢ふ。役者は仲藏(藪醫寒竹)、菊次郎(義太夫師匠竹本苛香)等、

滑稽淨璃瑠中でも出色の作であつた。

五十五歳　（明治三午年）。　　△十一月、三世關三十郎歿す（六十六歳）。

△九月、津藤歿す（四十九歳）。

□一月（守田座）、左馬之助湖水渡り——墨畫龍湖水乘切。一幕三場からなる時代物。武智左馬之助光俊が光秀敗亡の後御家の系圖を安全にせんものと、江州石場村なる丹吾兵衛の住家を訪れて、光秀の妾あやめの方に渡し、歸途は大鹿毛に騎りたるまま、湖水を乘切り、坂本城へ辿り着くまで。役者は訥升（光俊）、仲藏（丹吾兵衛）。紫若（あやめの方）、左團次（入江長兵衛）等。

□二月（市村座）、桑名屋德藏——寶來曾我島物語。三幕四場からなる世話物。小松重盛が嚴島へ奉納したといふ、朝霧の篳篥を北條殿が金子千兩にて買ひ取り、桑名屋德藏を船長にした船を以て鎌倉に運ぶ途中、鳴門の渦丸の爲めに奪はれ、その跡を追つて跳り入つた德藏は、次第に波に漂はされて鬼界ヶ島に到り、そこの島人を妻としてをる事十年、北條家の迎ひの船が來たので、哀れな島別れをして乘船するまで。役者は權之助（德藏）、菊次郎（おなぎ）、九藏（渦丸）等。

◎二月（同座）、寫眞の九一——魁寫眞鏡俳優畫。常磐津にて一場。寫眞師の內田九一の所へ御殿女中や田舍侍が寫しに來て、さま〴〵の滑稽を演る。役者は權之助（九一）、芝翫（田舍侍）等。寫眞の輸入されたのを早速に取入れた際物の大切淨瑠璃であつた。

□三月(守田座)、慶安太平記――樟紀流花見幕張。八幕十六場からなる御家物。由比正雪の大謀計を慶安太平記に據つて書いた作。正雪が金井谷五郎、千葉作左衛門等を手なづける所から、丸橋忠彌との關係を描き、忠彌の舅弓師藤四郎が伊豆守に訴人せし爲め、事先づ破れ、忠彌は江戸にて捕はれ、正雪は駿府の梅屋にて捕はれる。◎歌澤の『濡浴衣松藤浪』は、第五幕目の有馬温泉に於て八右衛門と湯女小藤との色合に用ひられた狂言淨瑠璃であつた。役者は芝翫(正雪、八右衛門)、訥升(伊豆守、谷五郎)、紫若(藤枝、小藤)、左團次(忠彌、初藏)、仲藏(九郎兵衛、藤四郎)等。役々皆よかつたが取分け左團次の忠彌は未曾有の大成功で、彼れの出世藝となつたものであつた。

□三月(中村座)、梅曆――梅曆辰巳園。序幕の丹次郎佗住居の場だけ默阿彌の作。丹次郎の所へ米八と仇吉が訪ねて來て戀の口論をするの件。◎歌澤の『辰巳園』は米八と丹次郎との色合である。役者は菊五郎(丹次郎)、廣次(仇吉)、三津五郎(米八)等。春水の人情本『梅ごよみ』に據つたもの。

◎三月(同座)、僧正坊と粂の仙人――大和谷瀧音羽湯。常磐津、富本、竹本にて二場。鞍馬山の僧正坊が妻と子天狗を相手に興じてゐる所へ、武者修業に出た唐木無三四が來合せ、試合して負かされ谷へ投げ込まれる。次は音羽湯の女湯の流し場で、女の白い股を見たいばつかりに湯屋の番頭に化けた粂の仙人が、歌澤の師匠芝濤と熊さんとの甘い所を見せつけられて閉口し、丁度やつて來た赤蛙屋の臺の仙人に煽いで貰ひ天上する。役者は菊五郎(無三四、粂仙人)、廣次(僧正坊、金太郎・

熊)、三津五郎(女天狗、芝濤)等。

□五月(守田座)、魚屋の茶碗――時鳥水響音(始めは三題噺魚屋の茶碗にて序幕だけなりしが明治、十四年春木座にて再度に上場せし際に後の二幕を增補して名題も改めたり)、三幕七場からなる世話物。遊人まむしの次郎吉が道具屋の手代に化けて魚屋の茶碗を壊し、其の申譯にと兩國橋から狂言の身投をし、花垣七三郎に救はれ五十圓騙り取り、蟒の久太が邪魔する事などある。身投けした時花垣の妹おつるに見初められ、ついに花垣の好意によつて夫婦になるといふ結末。役者は菊五郎(次郎吉)、仲藏(蟒の久太)、訥升(七三郎)等。本傳に詳說したが、自作の三題噺を脚色したものである。兩國の西川岸で次郎吉と久太との掛合は好評であつた。

□八月(同座)、桶狹間合戰――狹間軍記鳴海録。七幕九場からなる時代物。滿洲の城主小田春永と鳴海の城主今川氏基との確執に始まり、郡幸內の刺客事件、桶狹間の雨中合戰があつて、氏基討死し滿洲に於て春永、東吉等其の首實檢をなすまで。役者は訥升(正行、大濤)、芝翫(東吉、氏基)、田之助(義晴)、菊五郎(幸內)、仲藏(九郎三郎、權阿彌)、左團次(春永)等。田之助は矢張り足を失つてゐたから、馬上で現はれ奮戰する役になつてゐた。

◎十月(中村座)、六人男――男達六初雪。富本にて一場。芝居町へ勢揃ひをして芝居へ繰込む前にそれ〴〵つらねがあり、藝妓が出てそれに應じ、褒め言葉をかけると言つたもの。彥三郎(男達、

賴政源太)、菊五郎(同天人吉三)、廣次(同閻魔の胴六)、權之助(同雷神五郎藏)、芝翫(同仁王力松)、三津五郎(同辨天鐘吉)等で、稀に見る顏揃ひであつた。田之助は茶屋娘となつて坐つてゐる役を勤めた。

◎十一月(守田座)、幽靈のだんまり——鐘音雨古墳。岸澤にて一場。さる金持の娘が死んだので葬られたが、湯灌場小僧が掘り返して金にしようとし、鍬を取つたが、葬られてゐる女の許嫁の男が幽靈となつて現はれ、掘らせないやうにするだんまり。役者は菊五郎(寺男寺島長吉、庵崎求女の靈)、仲藏(墓守雲哲)等。

◎十一月(同座)、八人聟——緣結姿八景。清元、岸澤にて一場。石濱の娘深雪が聟を取る事となり、其の見合を別莊ですると、山伏、大工、通客、醫者などが八人集まり、各自其の隱し藝を見せて試驗され、終に待乳の小姓晴我と手に手を取つて奧に入るといふ趣向。役者は芝翫(髮結駒形の喜藏)、訥升(通客隅田の秋月)、左團次(山伏洲崎の晩慶)、紫若(深雪)兒雀(神職富士春日)、子團次(大工團屋の權吉)、國太郎(晴我)等。

五十六歲(明治四未年)。——(二)十月、六世市川團藏歿す(七十二歲)。

(一)五月、三女ます歿す(十三歲)。(三)散髮令を布き、郵便局を置く。

□一月(市村座及守田座)、後風土記——碁風土記魁升形。(「碁風土記」と題せる草雙紙出づ。諺藏、

金作綴る、國貞畫く。)三幕六場からなる時代物。武田四郎勝頼が小田の軍勢に攻めたてられて、天目山に立籠り遂に討死し、幼君をば小宮内膳が供して武州鷲窪村の閑居に匿まふまで。これに鳥井常右衛門が岩代川の鳴子を潜つて加勢を頼んだといふ挿話が加はつてゐる。役者は權之助(小宮内膳)、訥升(勝頼)、芝翫(常右衛門)等。始めの二幕は市村座で、三幕目は守田座で演出した。權之助が掛持をしてゐたからである。

◎二月(市村座)、角田川、車引——梅花王戯場番組。岸澤、長唄にて二場。角田川邊に渡守の筈作が憩つてゐる所へ、都より狂ひ來れる斑女御前が來て、我子梅若は何處にあるやと訊し、奪ひ行きし人買ひの行方をたづね、船に乘せて案内せよと頼み入れる。人力車の趣向の車引は、越後の飴賣が二人、人寄せをして踊つてゐる所へ、人力を引き來るを支へ、飴屋は梅王、櫻丸となり、車夫が松王となり、車の母衣が除れて中から待合の女將が時平で現はれるといつたもの。役者は芝翫(斑女御前、車夫駒八)、訥升(筈作、飴賣紀の助)、家橘(飴賣渦八)、三津五郎(茶屋勝見の女房おやま)等。

□三月(同座)、狐靜——狐靜化粧鏡。一幕一場からなる時代物。初音の鼓に張用された源九郎狐の女房狐は、靜が大和に下つてからは御恩報じの爲めに仕へ、靜の亡き後に經若君を守育て靜御前に化けてゐる。鷲尾三郎は眞實の靜と思ひ仕へゐる。之を聞傳へた鎌倉にては、化生の物と推し畠山

重忠を遣はし、源九郎狐の髑髏を香爐として名香を炷き其の姿を現ぜしめる。役者は訥升（靜實は千本狐）。左團次（鷲尾）、芝雀（重忠）等。

◎三月（同座）、大津畫畫し——名大津畫劇交張。淸元、岸澤にて一場。浮世又平の描いた襖の大津畫が抜け出して踊り興じるといふ趣向。役者は訥升（座頭）、芝雀（瓢簞鯰、辨慶）、仲藏（鬼の念佛）、紫若（藤娘）、家橘（福祿壽）、左團次（奴）、子團次（大黑）等。

◎三月（中村座）、茂林寺——壽名殘島臺。富本、竹本、長唄にて三場。館林の文福茶釜に化けてゐる古狸を擊たうとして來た獵人の吾藏が、田舍娘に化けた狸に散々弄られ、住僧の林鶴も化され、二人とも寺の裏の籔で氣がついて見ると、大きな八疊敷の睾丸に愕かされる。名題に名殘云々となつてゐる譯は、此の興行に龜藏が一世一代を勤め足利義滿公になつて『老松』を出したからである。役者は菊五郎（住僧林鶴、田舍娘お福實は古狸）、彥三郎（狩人）等。

□八月（守田座）、眞田雪村——出來穐月花雪聚。（前年五月市村座に上場する筈で出幕とならざりし「眞田打紐緩」を增補せるもの。）四幕九場からなる時代物。執權北條時政が主人賴家公の幼きに乘じ天下を取らんとし、諸大名の去就を訊した。信州上田の城主佐々木四郎高綱は事の非なるを知れど、坂本城なる賴家に仕へる事に決心し、穩かに城を開いて紀州なる九度山に閑居なし、妻を離別し、自分は釣に耽りゐて、安達掃部守の招きに應じ坂本城に乘込み、軍師となるまで。役者は權之助（時

政、高綱)、左團次(土肥彌五郎、松田左近)、仲藏(庄屋)、芝雀(廣繼、掃部守)等九度山閑居をば、新歌舞伎十八番の一に算へてある。

□十月(同座)、忠臣藏十二時――四十七刻忠箭計。九幕二十場からなる義士劇。高輪禪居寺に會合して、いよ〳〵其夜子の刻を合圖に討入る旨を密議するに始まつて、由良之助が南部坂なる葉泉院にお暇申す件、蕎麥屋楠屋に集まる件、高野邸討入より炭部屋本望を遂ぐるまで。これに小山田庄左衞門の變心と、高田郡兵衞の災厄と、小汐田又之丞の病氣全快して義士の中に加はる件等を綯ひまぜにしたものである。役者は權之助(師直、由良之助、高田郡兵衞、平八、文吾)、左團次(小山田、元助、清水大學)、芝雀(重太郎、戸田局、又之丞)、紫若(葉泉院)、仲藏(源四郎、官左衞門)等で成功した作で、殊に南部坂に於ける葉泉院との別れが好評であり、左團次の小山田は出來がよかつた。

五十七歲(明治五申年)。

△二月、紫若改めて八世岩井半四郎となる。

△二月、田之助一世一代(二十八歲)。

△博覽會始めて開かる。

△守田座は五月限りにて猿若町を去り、十月より新富町に於て興行をなす。

□一月(守田座)、義經記――猿若三鳥名歌閧。六幕十一場からなる時代物。義經が攝州渡邊の宿に陣して居た時、梶原景時が逆櫓を用ひるやう勸めたのを拆けた爲めに怨を買ひ、平家討伐の後鎌倉に入らんとして許されず、所謂腰越狀を奉つて尙許されず、京師に走り堀河の夜討に遭ひ、吉野山

の雪中で靜御前に別れ、自分は奥州に遁れんとする。佐藤忠信が居殘つて、義經と僞はり捕はれるまで。役者は權之助（義經、忠信）、左團次（義久、覺範）、紫若（靜、朝顔）、仲藏（景時、辨慶、藤内）、翫雀（重忠、宗盛）等。三幕目の腰越狀も新歌舞伎十八番の中に算へられた事がある。然しさすがの權之助も腰越狀を長々と讀上ぐる所は甚だ不評に終つたといふ。

□一月（村山座）、田之助名殘――國性爺姿寫眞鏡。一幕一場の世話物。浪花の藝妓古今が黒木屋の彦惣を夫に持つてから間もなく、鳴門を船で越す際に難破し、異國船に助け上げられロンドンに伴はれ七年間を經る。彦惣が尋ねて行つて、カンキスの邸の樓の上と下とで面會した、古今も恩人の病氣の爲めに歸國するを得ず、彦惣も父の大病との報せを受けて滯留し得ず、止むを得ず涙を呑んで再び別れる。役者は田之助（古今）、訥升（彦惣）であつたが、田之助が一世一代の口上に准へて彦惣を見送りながら『……白浪の泡に等しき人の身は夜半の嵐の仇櫻、明日をも待たで散る事あれば、是れがお顏の見納めかと思ひ廻せば廻す程、お名殘をしう（と見物を見渡し暇乞の思入あつて）ござりまする』と別れを告げた時には、見物も涙に袖を濡らしたといふ。

□一月（中村座）、淀車と鵜の長吉――戀慕相撲春顏觸。三幕七場からなる世話物。力士淀車浪五郎と船頭鵜の長吉とが俠客の意地づくから爭論しあつてゐたが、仲直りし合體するまでを描き、一方浪五郎は主家の重寶千壽院の短刀と胡蝶の茶碗を紛失せしめた所から女房お崎と共に詮議する。二品

はお崎に戀慕してゐるお坊主幸次の手にあると判明し、種々の災厄に打勝ち、結局は幸次を討取り、重器を持參し本地歸參が叶ふまで。役者は芝翫(淀車)、菊五郎(幸次、長吉)、三津五郎(お崎)等。め組の喧嘩をあてこんだものであつた。

□七月(村山座)、大鹽平八郎――浪花潟入江大鹽。六幕十二場からなる時代物。與力大鹽平八郎が蝦蟇の妖術を以て諸方に出沒する尼僧貢を懲らし、それを機會として、貧民救恤の必要を悟り方策を構へ上へ建言した所、奉行所内に中傷するものがあつて容れられず、卽ち自ら徒黨を組み富豪より奪ひ取つて貧民に與へんとして亂を起す。然し戰利あらずして、緣家なる三吉屋五郎兵衞方に潛伏中捕はれんとし自殺する。これに寺澤左膳なるものの興廢を添へてある。役者は彥三郎(平八郎、お春、五郎兵衞)、訥升(作治郎、格之助、お常)、壽三郎(太郎作、左膳)、太郎(貢、善右衞門)等。

◎十月(同座)、玉兎――流行玉兎合。淸元、長唄にて二場。此の當時家々で兎を飼ふ事が流行したのでその際物に出來た作。上の卷は玄宗皇帝が月宮殿に行き饗應さるるの件、下の卷は園原山で、兎取りが兎を取りに行くのを、月の精が行つて邪魔をするといふもの。役者は彥三郎(玄宗、兎取九郎藏)、訥升(賤の男四郎實は玉兎の精)等。

□十月(守田座)、ざん切りお富――月宴升毬栗。二幕三場と發端一場よりなる世話物。但馬屋の淸七が用達に出た途上で、女中に水をぶつかけられたが緣となつて、坊主與三の女房お富と同席した

ばかりで美人局の厄に逢ふ。與三は但馬屋へ行き百兩ゆすり取る。清七は一旦里へ歸る事となり、船宿の主人觀音久次の所へ行きは行つたが、仇討を思立ち、終に小名木澤でお富を殺害し、與三をば自殺せしめる。◎哥澤の『黄色露濡衣』は、發端の色合に用ひて成功した狂言淨瑠璃。役者は權之助(與三郎)、半四郎(お富、清七女房お仲)、翫雀(清七)等。

五十八歳（明治六酉年）。

○二月十日、午前二時に住宅燒失す。
○澤村座へ補作者に出る。
△四月より後の其水、竹柴進三の名番附に載る。
△九月、中村宗十郎上る。
△十一月、坂東龜藏歿す(七十四歳)。
△歐化主義の雜誌『明六雜誌』生る。

□二月(守田座)、對面——新年對面盃。岸澤にて一場。曾我の五郎、十郎等、鎌倉なる工藤の館前に於て對面をなし、工藤より盃を賜ひ五郎三寶を踏み碎く事あり、狩場切手を引手物として贈られる。役者は彥三郎(工藤祐經)、芝翫(小林の朝比奈)、訥升(十郎)、左團次(五郎)、翫雀(大磯の虎)等。對面に岸澤を用ひたのが新趣向であつた。幕明きへ出る淨瑠璃觸れのせりふに、『昔を今に淨瑠璃の幕明きへ出る觸書きはいつもお定まり』『それでは餘り舊弊過ぎ一洗してもよい所』『斯く文明盛んにして開化近よる秋に到り』『まだ劇場は開けぬか』『人參牛蒡の作者ども』と割ぜりふで言はせてある。

□三月(村山座)、酒井の太鼓——太皷音智勇三略(たいこのおとちゆうのさんりやく)。三幕九場からなる時代物。甲州の武田信玄と戰つて駿州濱松に陣取つた德川家康が、すでに敗軍と定まつた時、わざと城門を閉ぢず橋も落さず篝を焚かせ、殊に思慮深き酒井左衛門は味方の勇氣をつけんが爲め、生醉の體を裝ひ、時の太鼓を勇ましく打つた。其の凛々たる音を聞いた武田方の馬場美濃守は、必ず敵に計略あらんと懼れを抱き退軍する。此の場面を中心に德川家の旗下なる鳥井家と鳴瀬家の確執と和解とを描いたもの。役者は權之助(鳥井、德川善三郎、酒井左衛門)、菊五郎(鳴瀬東藏)、門之助(酒井姉伏屋、松江)、時藏(三平、彦右衛門)、三十郎(馬場三郎兵衛)等。成功した芝居で特に太皷櫓の場が好く、又一つには權之助と菊五郎個人同志の和解も人氣を呼んだ。新歌舞伎十八番の一。

□五月(同座)、灘波戰記——梅浪花眞田軍配(うめなにはさなだのぐんばい)。五幕十二場からなる時代物。秀吉死して關東の勢日に增してよく、大阪方にも去就決せぬ者が多かつた。片桐且元も駿府に使してからは疑念を挿まれ、淀の方に諫言するも却つて不可なるを見て、高野に入らんと決心し、木村重成に見送られて今福堤に別れを告げ、其時軍師として眞田幸村を擧げておく。幸村來り先づ南條讃岐守を自滅せしめる。これに荒川隼人と塙團右衛門とが家康を住吉浦に討たんとして、果さぬ作が加へられてある。役者は權之助(且元、幸村、隼人)、三十郎(南條)、門之助(淀の方)、菊五郎(重成)等。

□五月(同座)、だつきのお百——御伽草紙百物語(おとぎざうしひやくものがたり)。三幕五場からなる世話物。前に慶應三年市村座に

書下した『お百』の結尾を附けたやうなもので、大體に於て大差はない。彼には無かつた中川左膳なるものの切腹と、お百に責殺された徳兵衛の、女房に生れた悪子にお百が切られて死ぬ橋場總禪寺の場とが加はつてゐる。役者は三津五郎(お百)、權之助(彦五郎)、三十郎(中川左膳)等。

□五月(守田座)、子持高尾――廓晴衣紅葉裲襠。三幕五場からなる世話物。吉原三浦屋の抱女高尾は最上吉之丞と深い仲となり、子までなした所から子持高尾と呼ばれ、年が明けると同時に吉之丞と佗住居をする。然し吉之丞の役目たる御家の重寶寢覺の香盒の詮索に從事する中危難に逢ひ、入水などするが救ひ上げられ、やがて目出度く歸參が叶ふ。役者は訥升(高尾)彦三郎(若黨作藏)、翫雀(吉之丞)、左團次(次郎吉)等。訥升の子持高尾が評よく成功であつた。

□六月(中村座)、髪結新三――梅雨小袖昔八丈。四幕十一場からなる世話物。白子屋のお熊が手代の忠七と出來てゐる所へ、金に絡んで義理で聟を迎へねばならぬ事となつて家出を謀る、それを知つた髪結渡世實は上總無宿の遊人入墨新三が忠七を連出し、途中で忠七を蹴倒し、お熊をさいなんだ末家主長兵衛に渡して金にする。始めに掛合つて手を燒いた遊び人彌太五郎源七は、深川の閻魔堂橋に於て新三を殺し、源七は召捕はれ大岡越前守の裁斷を仰ぐ。役者は菊五郎(新三、越前守)、仲藏(彌太五郎源七、家主長兵衛)、半四郎(お熊)、梅五郎(下剃勝奴)等。成功した作で、殊に二幕目の富吉町新三宅の場は世話物中での傑作である。柳櫻の人情噺に據りし作。

〇六月(守田座)、安倍乘切――隅田川乘切講談。五幕七場からなる時代物。安倍豐後守が剛直な所から、將軍徳川家光公が牛ヶ淵で試し斬りをするを懲らし、次殿中試合に於て打ちすえ、恥しめて御諫言申上げたのが氣に觸りし爲めお言葉が絶えた。すでに切腹せんとまで決心したのを大坪彦左衛門が留め、隅田川滿水の時に馬上濁流を乘切つて殊功を顯はし、御勘氣を赦され十萬石の加増を受ける。役者は彦三郎(彦左衛門)、芝翫(豐後守)、左團次(平田彈右衛門)等。前に『紅皿缺皿』と綯ひ交ぜにしたのを切放して修正したものであつたが、評判はあまり好くなかつた。

◎五月(村山座)、雷人形遣、仕丁――花楓法音樂。富本、淸元、竹本にて三場。曾我の十郎が虎御前に去られてから取のぼせ、狂氣になつたのを大藤内成景が祈りを上げて癒さうとして失敗するのが第一場。第二場は大山の子雷が下界へ落ちたのを捜しに來た親雷も落ちて、人形使となり嫉妬女房の人形を遣ふ。第三場は三人上戸の餅搗であつた。役者は菊五郎(大藤内、親雷、人形遣ひ、仕丁五郎丈)、三升(太郎丈)、家橘(十郎)、宗十郎(次郎丈)等。

〇十月(中村座)、竹中問答――艷山錦木下。二幕三場からなる時代物。竹中半兵衛重治が主人齋藤龍興に建議して再三用ひられぬ所から栗原山に隱栖してゐたのを、木ノ下藤吉郎秀吉が智略を以て織田家に引入れ、遂に信長と握手せしめるまでを書いたもの。役者は權之助(木下藤吉郎)、仲藏(竹中半兵衛)、芝翫(信長)等。

□十一月(村山座)、山科閑居、淸水一角――忠臣いろは實記。三幕五場からなる時代物。初めの二幕は大石の山科閑居で、祇園町に入浸つて吉良家の間者牧山丈左衛門をたぶらかし、終にその爲めに母と妻及び二人の小供をも離別するに到る。後の一幕二場は全くとび離れたもので、吉良家の牧山宅で年忘れの酒の座へ淸水一角が醉つて來て、必ず大石は敵討をするであらうと、話をして宅へ歸り、姉と弟の介抱を受けながら寐入ると、山鹿流の陣太鼓が聞えるので跳ね起きて驅け行くまで。役者は三升(大石)、菊五郎(一角)、三十郎(牧山)等。

□十一月(守田座)、大佛供養――音駒山守達源氏。五幕七場からなる時代物。賴朝の平家討伐に際して、景淸だけは生捕り家臣にせんと欲し三保谷國俊に內意を傳へておく。やがて八島檀浦の戰も果ててから、景淸と三保の谷とはある濱邊に爭うて錏を引ちぎられる。やがて二人は兜と錏とを別々に持つて、甲師の幸作の許にて落合ひ修繕を賴む。此の時にも景淸に鎌倉殿の厚き志をほのめかしたが、臣たる事を肯ぜず、賴朝を付狙ふ內、南都大佛殿に催された供養の場で彼を討たんとして、露顯し又もや臣たる事を勸められるが肯じなかつた。これに佐藤繼信の討死が加へてある。役者は彥三郎(國俊、繼信、後室山路、重忠)、芝翫(景淸、敎經)、左團次(成淸、高畑次郎)、高雀(三保の谷妻おきせ)等。

□十一月(同座)、鳥越甚內――東京日日新聞。三幕九場からなる世話物。舊幕の浪士鳥越甚內が酒の

爲めに家産を傾け、今は車夫になりをる正直長次がいくら異見をしても聞き入れない。或る夜本所の一の橋で醉つたまぎれに秩父屋半右衛門を殺す。と其の殺される前に半右衛門から七十圓の金を恵まれた門三郎と淺茅等戀同志に殺人の疑がかかり箱根の湯元で捕へられ糺問される。甚内はそれを傳聞して神戸より船にて來り、自首して助ける。が、話の末に甚内の父は昔て半右衛門の爲めに、伊香保で銃殺されたのだと分かつて、自然に敵討をしたやうな結果となつて釋放される。役者は彥三郎（甚内、戸長）、瓢雀（半右衛門）、訥升（門三郎）、左團次（長次）等。明治を舞臺に取つた世話物ではあつたが、さして好評ではなく、左團次の長次だけが人の口に上つたに過ぎなかつた。

五十九歲（明治七戌年）。

河原崎座再興され、七月河原崎權之助改めて九世市川團十郎となる。——— △默阿彌の執成しにより、嵐璃鶴は市川權十郎と改め河原崎座の十月興行より出勤する。

□三月（村山座）、曾我實錄——夜討曾我裾野曙。（明治十二年新富座にて上場に際して夜討曾我狩場曙と題し、交來綴る、梅堂國政畫の草雙紙出でたり。）五幕七場からなる時代物。富士の卷狩に、十郎工藤狩屋の前を通りかかりて呼留められ、工藤と測らず對面をなし、其の夜討入る決心をして、筐贈りを濟ませ、大磯なる虎、片貝、手越、龜鶴等の手引を得て忍び入り本望を遂げる。が十郎は仁田四郎に討たれ、五郎は御所の五郎丸の爲めに捕へられて、頼朝の調べを受け、犬坊丸に仕返し

をされる。役者は三升(五郎、工藤)、宗十郎(十郎、賴朝)、家橘(仁田四郎)及時藏、門之助等。大成功の芝居であつた。

◎三月(同座)、釣堀——眞似三升劇番組。淸元、竹本にて一場。吉原の龍宮屋で二階へ釣堀の座敷といふのを作り、好事の紳士達に糸を下させ、階下から相方を釣り上げるといふ趣向でいろ〳〵な滑稽を演ずる。役者は三升(浦島屋太郎)、家橘(宿場女郎おふぐ)、時藏(田舍婆おたこ)等。

□七月(河原崎座)、楠正成——新舞臺巖楠、七幕十五場からなる時代物。正成が千早の城を棄てて金剛山に籠り、足利の勢日に盛んなるを見て意を決し、櫻井の驛に於て正行に訣別し湊川に向ふまでを書いたもの。此の間の挿話として、兒島高德が院の庄の行在所へ赴き櫻を削つて詩を書く件、隱岐の國から帝を船に移し奉るの件等が添はつてゐる。役者は團十郎(正成、高德、琵琶法師)、左團次(和田新三郎)、訥升(恩地左近、六條忠顯)等。

□七月(守田座)、三人片輪——繰返開花婦見月。三幕八場からなる世話物。さる新開町の錢湯で、六三郎がお園に預けておいた金時計と財布とを、天ぷら銀次が相ずりの喧嘩をして盜み出し時經つて屑屋に賣る。これを散髮屋の佐吉が知つて賣主名前の牛肉屋五郎七を詰る。ちやうど此處へ米屋の赤米仙右衞門が、不正な賣方をした天罰で盲目になつて來り、五郎七の罪を聞いて、それでは、彼れに賴んで北海道へやつた忰も外國へ賣とばしでもしたのであらうとこれも詰りに行く。五郎七が

臺所へ引かれてから、天ぷら銀次が自首して出たので罪は許され、ほつと安心したので五郎七は癇が癒り、左吉の聾は雷鳴で聞えるやうになり、仙右衛門の盲目も秋津から貰つた眞珠の利目で開くので、三ケ日出度く納まる。役者は菊五郎(仙右衛門、銀次)、彦三郎(豐)、左團次(左吉)、芝翫(五郎七)等。

◎七月(同座)、熊遣ひ——蔭踊熊月輪。岸澤にて一場。當時の見せ物に、熊が胸を突出して月の輪を見せて踊るといふのがあつた。それを當てこんで熊と熊遣ひを出して振事にしたものであつた。役者は菊五郎、仲藏、彦三郎等。

□十月(同座)、宇都宮騷動——宇都宮紅葉釣衾。六幕十一場からなる御家物。本田上野介が駿河大納言へ忠義の爲め、氏光公日光御社參に就き釣天井の湯殿を作らせ、壓潰さん手筈をしたのを、大工の與四郎が庄屋の娘に逢ひに行き、密事を口外せるより將軍は江戸に引返し、與四郎は城内にて責殺される。役者は彦三郎(上野介、井伊掃部守)、菊五郎(與四郎、越中守)、左團次(石川八左衛門、川村靱負)、翫雀(氏光公、棟梁)等。講釋に據つた大好評の芝居で、特に彦三郎の本田上野介及左團次の八左衛門は當り藝であつた。

□十月(河原崎座)、河内山——雲上野三衣策前。四幕十一場からなる世話物。片岡直次郎が御茶の水で情婦松ケ枝の弟與之助から丑松の奪つた金とも知らず、五十兩の金を丑松からまき上げる。其の

爲めに弟の苦難となり、金の調達を頼まれ、彼れは河内山宗俊に依頼する。河内山は質屋上州屋の娘が、松江の邸へ奉公中殿様に愛せられたが妾となるを肯んぜず、引留められて居ることを聞知り、上州屋へ話して金にし直次郎に渡し、其の替り上野の宮の使僧道海と僞り首尾よく娘を取返す。後に直次郎、丑松等と共に山下袴腰で捕はれる。役者は團十郎(河内山)、三十郎(直侍)、家橘(松江侯)等。講釋に據つたものでこれも成功したが、後の増補された作の方がよい作になつてゐる。

◎十月(同座)、日高川――道行妬仇浪。常磐津、竹本にて二場。此の方は庄司の邸がなくて日高川の渡場から始まる。安珍と苧環姫とが日高川を渡つたあとへ、清姫が嫉妬の焔に燃えて追來り、船頭に渡せといふが渡さない。清姫怒つて『おお渡さぬとてもここまで來てやみ／＼此儘歸らうや、日高の川の水底に沈まば沈め死なば死ね、念力通さでおくべきか』と、言ひさま川の中に躍り入り、川を渡つて道成寺の鐘樓を騒がす。これを左馬五郎照光が取押へる。役者は訥升(清姫)、團十郎(萬才鶴太夫)、國太郎(安珍)等。

六十歳（明治八亥年）。

△六月、尾上菊次郎歿す(六十二歳)。

△一月、守田座は新富座と改稱す。

□一月(新富座)、大岡天一坊――扇音々大岡政談。八幕十五場からなる御家物。紀州平澤村感應院の小坊主法澤が、お三婆の許に御墨附のある事を知り老婆を殺して奪ひ取り、將軍の落胤と稱し、美

濃國常樂院にて山內伊賀亮等を腹心に語らひ江戶へ乘込む。將軍家にては如何にしても否定すべき反證を得ず、吟味掛りの大岡越前守は無常門より忍び出でて小石川館なる水府綱宗公に縋り再吟味の仰せまでも請ひ、種々苦心せるも能はず、いよ／＼其の日限も迫つて切腹と定まつた時に、紀州平野村へ調べにやつた平石治右衛門と吉田三五郎とが、證人を連れ來り、天一坊の化の皮を剝ぎ召捕るまで。役者は彥三郎(大岡越前守)、菊五郎(法澤天一坊、平石)、左團次(山內伊賀亮、吉田)、芝翫(水府公、下男久助)等。講釋に據つた作で、非常の成功を收めた。彥三郎の大岡越前守、菊五郎の天一坊等評よく、又四幕目の無常門及び七幕目の大岡邸切腹の場などは大喝采を博したものである。

□一月(同座)、鎌田又八——梅鎌田大力背說。三幕四場からなる世話物。道中師の鎌田又八が大力で、淺草觀音前へ荒れ出た牛を僕殺し、紀文の子を助けて五十金を受ける。然し其の金は牛を失つた與次兵衛に與へるが、此の金故にあぶれ者の鳥越甚內に慘殺される。後に與次兵衛は又八の義理ある親と知れたので、甚內に仇を報ずる。役者は芝翫(又八)、彥三郎(紀文)、左團次(甚內)等。

◎三月(同座)、田舍芝居——日待遊月夜芝居。淸本、竹本にて一場。越後國の在方に地芝居があることとなり、その稽古を土地の者がすると、菅原と忠臣藏がまざつてごつちやになり、苦情や泣事が出來るといふ滑稽淨瑠璃。役者は彥三郎(田舍醫師玄伯)、菊五郎(百姓草分)、芝翫(百姓金十)、翫

雀(神職鈴成)等。評判は好かつた。

□五月(河原崎座)、吉備大臣――吉備大臣支那譚。二幕二場からなる時代物。遣唐使安倍仲麿が支那で餓死せしめられたに就て、問罪の使者として吉備大臣が唐土蓬萊宮に赴いたが、安祿山、揚國忠等に妨げられて王に謁する事が出來ぬ。然し償として簠簋内傳と金子百萬兩とを貢せしむる事に取定め、約成つてから野馬臺の詩を讀めと言はれ、仲麿の精とも思はれる蜘蛛の援助を得て讀み分け、歸朝の途に就く。役者は團十郎(吉備大臣)、權十郎(吳懷寶)、仲藏(安祿山)等。此の當時大久保公が支那へ談判に行つたのを當てた際物。新歌舞伎十八番の一として成功したものである。

◎五月(同座)、瓦斯燈――意中闇照瓦斯燈。常磐津にて一場。夜も瓦斯燈に照されて賑やかな萬世橋の花盛りに、豪商萬福屋億右衛門が心願あつて人を助けに出てゐて、士族の果ての夫婦と田舎漢の老人夫婦と大工の夫婦とが、いづれも心中せんとするを見て救ひ、三十圓宛の金を與へ、開化の世の有難さを諭し死を思ひ止まらせるといふもの。役者は團十郎(萬福屋)、門之助(女房お萬)、團右衛門(百姓久平)、權十郎(士族淵方)等。瓦斯燈が行はれ始めたので狂言淨瑠璃として取入れたものである。

□六月(新富座)、明治八年迄の戰爭――明治年間東日記。八幕十二場からなる世話物。上野戰爭に敗れて根岸飛鳥山などを通つて脫走した彰義隊が函館に立籠り、切腹せんとし官軍と和睦するまでを

取扱ふ。これに脫走中の淸水谷之丞が逃げる時に帶刀を川へ投げ込んだが、その刀を拾つて惡漢の傳五郞が氷屋の助八を殺す、すると遺つた者は淸水の仕業と思ひ附狙ふ、氷屋には幸七といふ忠僕が在つて難儀を助け、つひに傳五郞を自殺せしめる件などもある。これらの八幕を明治元年から八年までの事に脚色したもの。役者は彥三郞(淸水谷之丞)、菊五郞(轟、幸七)、左團次(宗八、九藏)、芝翫(大佛六郞、傳五郞)等。

□八月(中村座)、柳澤騷動――裏表柳團繪。八幕十二場からなる時代、世話の御家物。五代將軍綱吉公が男色に耽らせたまふにより、御母公の內意により、柳澤出羽守は己が娘を小姓に仕立てて差上げ、遂に妾となり一子を擧げる。此の緣により柳澤は暴威を揮ひ、後には調伏の祈禱をなし、毒害せんとまで謀る。これを察した井伊掃部守が諫言しても用ひられぬ故、奥方に申上げると、奥方は決心して將軍を刺し、又自らもその場に果てる。これだけの筋を運ぶに裏表にし、世話で利かした出羽屋忠五郞と武藏屋德兵衛との關係を挿み、自然に筋を一貫せしめるやうに脚色したもの。役者は團十郞(井伊侯、柳澤侯、出羽屋忠五郞)、半四郞(おさめの方、おりう)、仲藏(曾根權太夫、五郞藏)、十郞(將軍、德兵衛)等。講釋に據つた作であるが大成功を收めた。

□十月(新富座)、黑田騷動――筑紫巷談浪白縫。六幕十七場からなる時代物。菊地多門之助が箱崎八幡へ參詣の歸途、紅陽院の紅葉法師の許に在る男裝してゐる小姓のあざみを見初め、所望するが應

じなかつた。其の返報に紅陽は女犯の罪に問はれ、鉛の熱湯を注がれ責め殺される。やがて多門之助はあざみを迎へ取り、妾としお筆の方と呼び、日夜淫酒に耽つてゐる。長崎表に在勤中の鳥山豐後之助急ぎ來り、禁制を犯した萬石積の新造船を破壞し、御行跡に就て嚴しく諫言するので多門之助も目が覺め、次第に惡人亡ぼされ御家は安泰となる。役者は彦三郎(鳥山豐後、太田屋勘兵衞)、菊五郎(紅陽、青柳主水)、左團次(菊地公)、訥升(あざみ、お筆の方)等。講釋に據つた作。後の黑田騷動よりも好評であつた。特に紅葉の間で鳥山豐後が青柳主水と闇試合をし、それとなく異見するの件は壓卷であつた。

六十一歲(明治九子年)。

△十一月、新富座類燒す。此の時限り彦三郎は阪地に下り間もなく歿す。

□一月(新富座)、妙々車——善惡兩輪妙々車。七幕十六場からなる世話物。讃州屏風ヶ浦の漁夫浦作に拾はれて育てられた志度六の父は、越後の雷村に於て獵師の度九郎に殺害されたのであつた。度九郎の悴魔度六は父の妾麻生と關係あるを悟られたるが爲め、終に父を慘殺し海賊荒灘太郎の手下になる。後に志度六は番助といふ麻生の情夫から一切を聞き仇敵魔度六を日出度く討取る。役者は彦三郎(浦作、度九郎)、菊五郎(荒妙、魔度六、海龍)、左團次(切平、番助)、芝翫(荒灘太郎)、訥升(お麻、志度六)等。種員の合卷に據つた作。

□三月(同座)、川中島——川中島東都錦畫。五幕十五場からなる時代物。村上義清が武田勢の爲めに敗れて上杉家に援けを請ふにより、酒呑みの鬼小島彌太郞を遣して和睦せしめんとして聞かれず戰爭となる。義清の家來氏光が間者として武田方に入込みて露顯し、武田方の駒澤も古鐵買の七兵衞と化けて、上杉方へ入込み露顯する事などがある。川中島では八幡河原に於て山本勘助が討死し、謙信は單騎武田の本陣に迫つて信玄に切掛け、意を果さずして引返すまで。役者は彥三郞(謙信、光氏)、菊五郞(勘助、七兵衞)、左團次(鬼小島、旗持大藏)、芝翫(信玄)、訥升(義清、小笹)等、成功した芝居であつた。

□三月(中村座)、朝比奈——鎌倉山春朝比奈。四幕十二場からなる時代物。朝比奈に戀してゐる松島の局が、北條義時の弟朝時に橫戀慕せられ夜中にさらはれ行くのを、勤番の朝比奈が事荒立てぬやう、內密に濟ましたるより却つて事を生じ、後に朝比奈と晴れて夫婦にされると許された甲斐もなく、松島は自害して責を果す。これを聞いて義盛が其の雄々しさを感嘆する。役者は團十郞(朝比奈)、仲藏(義盛)、半四郞(松島の局)、門之助(政子尼公)、時藏(朝時)等。團十郞の朝比奈が大詰で、松島の書置を讀んで俺は泣かぬと言つて淚をかくし、仲藏の義盛は、俺は泣くと言ひながら手放しで大聲に泣く所が面白かつたといふ。

□三月(同座)、お峰慶十郞——僞織大和錦。三幕六場からなる世話物。浪人して生計に困じた神谷慶

十郎が、妻のお峰を後家と見せかけ、大和國吉野在から上京した若木を美人局で結び、三年の後に若木をば殺害して一家を横領する。これを見知つた暗の丑藏が田舎訛りながらゆすりに來て五十兩の草鞋錢を取る。慶十郎は養福寺縄手に待伏せして丑藏を殺す。やがて事露顯し兩人ともに自殺する。」役者は團十郎(慶十郎)、仲藏(丑藏)、半四郎(お峰)等。

□五月(同座)、平家物語――牡丹平家譚。三幕四場からなる時代物。多田藏人行綱が西八條の中門に於て、西光、俊寛等の密謀を訴へるに始まり、西光を詮議の上首を刎ねる。清盛、宗盛等まさに法住寺殿に迫らんとして、武具に身を堅めたる所へ重盛來り、宣命を示し諫言して思ひ留まらしめる。終りの一幕は鬼界ヶ島の俊寛で、すべて平家物語の本文通りの活歴式であつた。(尤も前に上總木綿の中幕へ脚色した俊寛は、本文よりも作爲する所が多く、院本のそれに近く、これとは異なつたものである。)又現今行はれてゐる二幕以外の發端のやうに『鹿ヶ谷山莊會議の場』が置いてあつたが、これも略ゝ本文通りのものである。後年歌舞伎座で演ぜられた時には、猶此の初めへ成親卿邸の場と加茂社裏手の場とが増補され、二幕目へ兩御門御輿振の場が加へられたが、要するに西八條中門の訴へから西光の詮議、重盛の諫言までが主要部分である。役者は團十郎(重盛、俊寛)、仲藏(清盛)、時藏(西光)等。後新富座に再演された時には團十郎(西光、重盛)、左團次(清盛)、仲藏(鬼界ヶ島の島長四郎太夫)等であつた。團十郎の重盛はいつも評よく、仲藏の清盛、左團次の清盛

もそれ〴〵評のよい所があつた。團十郎の西光も好評であつたといふ。新歌舞伎十八番の一。

□六月(新富座)、伊達騷動——早苗鳥伊達聞書。(『伊達評定』と題せる草雙紙出づ、笠亭仙果綴る、國政畫く。)六幕十五場からなる御家物。伊達騷動の實錄で、原田甲斐、多田刑部等が幼君なるにつけ込んで陰謀を企らむが、荒木、神並兩人の裏切りによつて露顯し、忠臣の伊達安藝守、片倉小十郎、松前鐵之助等力を併せて惡人を召捕り切腹せしめる。役者は彥三郎(原田甲斐、黃門公、魚賣五平次)、菊五郎(神並、片倉)、左團次(荒木和助、伊達安藝)、芝翫(松前鐵之助)、訥升(板倉內膳、政岡)等。講釋に據つた作で成功した。三幕目の水戸街道で神並が水戸樣に嘆願する所や伊達家奥殿の場などが特に好評であつた。

◎六月(同座)、義仲と百人藝——三社祭禮巴提燈。富本、竹本、常磐津にて二場。義仲が京都にあつて驕奢に耽る間に關東勢に攻めたてられ、注進に來た巴御前が宇治川の破れた事を告げるので、義仲が齒嚙みをする。此の義仲の件をば、淺草茶店の主人が三社祭りに軒へ吊した、巴の提灯の緣から夢に見るといふ趣向で、そこへ百人藝が二人やつて來て曲藝をして見せる。役者は芝翫(巴御前、百人藝勘次)、菊五郎(百人藝扇吉)、訥升(義仲)等。

□九月(同座)、太閤記——音響千成瓢。(同題の草雙紙出づ、仙果綴る、芳虎畫く。)五幕十一場からなる時代物。齋藤內藏之助は山崎に於て光秀に諫言したが用ひられず、光秀は小栗栖村に於て百姓

の竹槍にかゝつて最期を遂げる。明智の城中は其報を得て、光俊の指圖に從ひ寶器を安全の地に移す。內藏之助も一時堅田の里に落ち、潜みゐたるも捕へられ、三井寺の本陣にて詮議の上處刑される。大詰は大德寺の燒香であつた。役者は彥三郞(光秀、內藏之助乳母芝崎、秀吉)、團十郞(內藏之助、勝家)、左團次(光俊、佐久馬、代助)、訥升(利家)等。堅田の茅屋と大德寺の燒香とが非常に好評で、成功した。

□九月(同座)、女太閤記——出世娘瓢簪。三幕五場からなる世話物。清元の家元が歿したので、その遺子にして正統たるお三坊を家元になほさうといふ奴の秀吉の組と、芝佐久間町の延勝がそれに對抗して旗上げをするに就て、その方に加擔する組とに分かれ、簪と節附の傳書とを枷にして爭ふ。そのもつれから佐久間町の鬼源太が、福島屋の市松と果し合ひをするに到る。役者は訥升(秀吉、市松)、彥三郞(加賀屋又三郞)、左團次(延勝)等。すべて一番目の太閤記を世話で行つた趣向で、材料は春水の人情本であつた。然し趣向の多くが時の見物によく了解されなかつたといふ。

□十一月(同座)、天草騷動——天草日誌劇新聞。(『天草島優士會合』と題せる草雙紙出づ、仙果綴る、國政畫く。)六幕十三場よりなる御家物。豐臣氏大阪に滅亡の際九州に落延びた浪士等折あらば叛旗を飜へさんとし、切支丹宗を信じて德川氏に壓伏されつつある天草島に勢力を殖ゑてゐる。先づ土地の庄屋、地頭等を欺いて老木の根から銅佛の天光頭樣を掘出させて靈驗顯著なるを知らしめ、庄

屋の悴四郎の利發を觸れ、織田家の系統なる旨を說き徒黨の將と仰ぐ。板倉内膳正、伊豆守等來り攻むるも容易に降服せず、糧食盡きて內通する者を生じ、つひに原城を陷れ天草四郎を討取る。役者は彥三郎(板倉侯、磯波、安房守)、團十郎(千々輪、內膳正、鍋島、宗意軒)、菊五郎(四郞、甲斐守、山田右衞門)、左團次(大矢野、庄屋小左衞門)、芝翫(赤星、駒木根)等。

六十二歲（明治十丑年）。

○二月、オーストリアの男爵にして、六歲
省へ出仕中のシーボルトに本讀みをして
聞かせる。

△八月、櫻田左交歿す(七十六歲)。
△十月、五世彥三郎大阪にて歿す(四十六歲)。
△西南役起る。

□四月(新富座)、女書生繁――富士額男女繁山。四幕九場からなる世話物。上州伊香保在の妻木右膳は子に運が惡く、三人までも育たなかつたところから、人の敎ふるがままに、次に生れた女兒繁をば幼時から男裝にして育て上げ、廿五六歲には散切の書生風で東京へ遊學させ神保の食客となつてゐる。と故鄕の貧困な父が病氣だといふ報せが來たので、神保から二百兩の金を盜んで歸鄕する。其の途中で惡車夫御家直の爲めに、乳房の工合から女と感づかれ、强要されて一夜の契りを結ぶ。御家直は繁が父に二百圓の金を與へた事をも知つて、父を殺害し其の金を奪ふ。繁は歸京の夜、事實を告白して神保に許され、改めて神保の權妻として向島に圍はれる。父の殺害された事は知らなか

つたが、繁を眞實の男と思つて見初めた戸倉屋の娘お由の投身一條から明白になり、角田堤に於て御家直に酒を呑ませおきて敵討をする。清元として有名なる『夕立碑春雷』あり。役者は菊五郎(繁)、左團次(車夫御家直)、半四郎(お由)等。評判のよい明治式散切の世話物であつた。

□六月(同座)、孝子の善吉――勸善懲惡孝子譽。零落して紙屑買となつた孝子の善吉が、貧に迫つて孫の爲めに衣類を盜み取つた親父の罪を引受けて入獄し、横濱海岸の道普請に出てゐる。と或る日善吉の子の市之助が、父をたづね來ていろ〳〵と近狀を物語る。これを傍で同じ鎖りに繫がれてゐた、惡黨の虎藏が聞いて改心する事があり、善吉の出獄後、もとの邸宅地から先祖の埋めておいた小判が掘出されたので、家も再興出來ることになる。役者は菊五郎(善吉、寫眞師北庭筑波)、左團次(虎藏、手代)、仲藏(甚兵衛)等。此の作は、作者が嘗て横濱で外役場を實見して出來たもので、芝居としても成功した。

◎八月(同座)、氷屋――千種花月氷。清元にて一場。京橋へ新しく出來た氷屋の店頭へ休んだ、花簪屋の廣吉と權妻のおやまとが、戀に陷り亭主の翫太がその間を取持つといふもの。役者は芝翫(氷屋の翫太)、宗十郎(廣吉)、半四郎(おやま)等。

□十二月(同座)、黄門記――黄門記童幼講釋。七幕十八場からなる時代物。三筋町の魚屋久五郎が堀田の邸外で魚を盜んだ犬を撲殺した咎によつて召捕はれ、打首に處せられようとする。是れを聞い

た盲目の父玄蹟は、水戸黄門の傳通院佛參の歸途を要して訴へる。黄門は卽座に聞屆け、久五郎の命を助けてやる。是と同時に堀田公が、私慾の爲めに河童の吉藏を用ひて、安宅丸に精ありとし祟りの恐れを名として破却せんとの巧み、及び黄門の能の師匠藤井紋太夫が公を毒殺せんとしたる事等顯はれ、稻葉石見守は死を決して堀田公を刺す。時の將軍綱吉公へは黄門がよしなに扱ひ繕ふといふまで。役者は團十郎(黄門、美濃守)、菊五郎(石見守、吉藏、藤井紋太夫)、左團次(堀田、久五郎)、仲藏(玄蹟)、半四郎(靜江、小富)、宗十郎(綱吉公、家老夏目)等。講談に據つた作。大一座で、新富座を盛返した程に成功した作。特に團十郎の黄門、菊五郎の河童の吉藏、仲藏の玄蹟等は上出來であつた。

◎十二月(同座)、上野惣踊り――街明治世賑。長唄にて一場。黄門記の大切で、內國勸業博覽會の開かれた年なので、其の祝ひの俄に出るといふ趣向で、上野の廣小路へ賑々しく繰出して踊るといふ物。役者は團十郎(數寄屋町の若い者七兵衞)、菊五郎(同菊松)、左團次(同高松)、仲藏(同銀藏)半四郎(藝妓おやま)等。

六十三歲(明治十一寅年)。

○三月及び四月發行の『魯文珍報』に魯文編の『河竹新七傳』載る。これが默阿彌傳の最初とす。

△六月、新富座の本普請出來し、洋服(燕尾服)着用の開場式を擧行す。

△七月、三世田之助歿す(三十四歳)。

△九月、新富座に於て始めて夜芝居を催す。

△九月、五世市川新車歿す(五十八歳)。

△六月、菊地容齋歿す(九十一歳)。

□二月(新富座)、西南征記――西南雲晴朝東風。(同題の草雙紙出づ、仙菓綴る、國周畫く。)七幕十九場からなる世話物。征韓論を主張するも容れられずして退いた、西郷隆盛を中心として熊本に徒黨結ばれ、三太郎峠に勢揃ひして熊本鎭臺を攻圍んだが落ちない。篠原討死し、次第に鹿兒島勢衰へ、山形有朋よりの勸降狀を見て、一大決戰の後死を覺悟するまで。これに西郷方へ荷擔しなかつた澤元彥右衛門が、恨を買つて捕へられ終に鐵砲腹をするの作が添へてある。役者は團十郎(隆盛、兵糧方五郎藏)、菊五郎(刀研小川宗次、篠原國元)、左團次(桐野年秋、作藏)、宗十郎(武上四郎、澤元)等。際物の事とて大成功を得。八十日餘も打續けたといふ。此の前の一月興行へ『西郷のだんまり』として、西南事件に關係ある人を見せておいたのも效があつたのである。

◎二月(同座)、根津八人廻し――是珍聞猫根津美。常磐津にて二場。根津八幡屋のお職女郎小せんが、流行ッ兒で容易に顏を見ることも出來ないので、言合はさねど八人の男が精々上品に作り上げて行き、廻し部屋で待つてゐる間に、段々化の皮が現れるといつた滑稽淨瑠璃。役者は團十郎(華族白井實は福德屋の息子德太郎)、菊五郎(九州の侍段平實は圓朝の弟子圓幸)、左團次(擊劍家仙吉實は獅子舞の重六)、仲藏(福德屋實は本町の番太郎)、宗十郎(西洋醫實は西向寺の鈍念)、鶴藏(洋

漢の書生實はアルヘイ床の勘次)、半四郞(八幡屋の小せん)等。

□六月(同座)、三河後風土記――松榮千代田神德。(同題の草雙紙出づ、仙果綴る、周延畫く。)八幕十八場からなる時代物。家康少壯の頃岡崎在の產見村に於て百姓權右衞門の難儀せしを救ひ、其の家に雨宿りして娘おまんを見初め身重とならしめた件。次に織田信長の嫌疑を霽がん爲め、子息信康を生害せしめて信長に從屬し、かくて信長弑せられるに及んで、彼れは伏見に走り駿河に歸らんとし伊賀越の難を越えたが、白子の濱にて追手に逢ひ、辛うじて干鰯船に乘じ遁れる件。後に上洛し秀吉に謁見の節、秀吉自身より內密の依賴を受けた通りに、彼れに位をつけてやる等の件。役者は團十郞(家康、築山御前)、菊五郞(秀吉、柏原小兵太)、左團次(譽田平八、角屋七郞次)、半四郞(おまん)等。開場式の狂言で成功した。日の出に瓦斯の灯を用ひたのは此の時が始めてであつた。

□八月(同座)、八犬傳――荒芽山梅花八房。八犬傳の中の、荒芽山なる音根が栖家へ力次尺八の亡靈出でて物語るより、世四郞が音根と夫婦になる件、及び道節が四犬士に逢ひ、火遁の術を棄てんとして傳書の一卷を火中するに終る。前の道節刀賣りと合せて二幕三場。默阿彌の脚色した八犬傳はこの部分だけであつた。役者は團十郞(道節、小次郞)、左團次(尺八、犬川)、小團次(信乃)等。

□七月(都座)、岩龜樓の龜遊――縱橫濱孝子新織。四幕七場からなる世話物。前に吉原で子の日と呼んだ橫濱岩龜樓の龜遊は、一人の異人に思ひを懸けられたがふり通し、深く言ひ交した妻木市之丞

の身の爲めを思つて、嫌つてゐた隈本嘉太郎に身を任せ、のちに嘉太郎は市之丞の仇敵と判明したので討取らしめる。龜遊は主人への申譯と市之丞への申譯に自害する。役者は我童(傘屋與兵衛)、我當(妻木宗次郎)、權十郎(市之丞)、百之助(龜遊)等。際物であつたがあまり成功しなかつた。

□九月(同座)。根津宇右衛門——花紅葉根津神垣。四幕十場からなる御家物。甲府宰相は次代の將軍たるべき御身にてありながら、兎角亂行にのみ心奪はれ、侫臣を近づけ、稍ゝともすれば良臣、良民を手討にする。根津宇右衛門死を堵して諫言しお手討になるが、死しても止めず、亡靈となつて現はれ、君に奉らるべかりし毒杯を留め、君調伏の呪咀を顯ぜしめ、ついに君を改心させ奉る。其の功により根津權現と崇められるに至る。役者は我童(新助、宇右衛門)、新十郎(甲府公、岡野主膳)、我當(主計、多門)等。講釋に據つた作。

□九月(市村座)、柳生家督定め——二蓋笠江島參詣、又二蓋笠柳生試合。一幕三場からなる時代物。九州の劍客大島雲四郎が、御指南役たる柳生但馬守と試合の申込をしたが、但馬守不快とあつて、本腹なれど次男の又十郎が行き、わざと敗北し、兄を安らかに家督になほしたい心から諸國修行を願ひ出る。妾腹なれど一旦家督と定めた十兵衛が三年越し臆病神につかれてゐるのも嘘病だが、これも本腹の又十郎に家を讓りたい爲めであつたと分かり、結局一先づ十兵衛が家を嗣ぐ事と定まる役者は家橘(十兵衛、)權十郎(又十郎)、三十郎(但馬守、大島)等。講釋に據つた作。

□十月（新富座）、延命院――日月星享和政談。（同題の草雙紙出づ、松郁漁夫著、國政畫く。）七幕二十場からなる世話物。旅役者宮川牛之助が、志を立つて江戸に下らんとし、大阪梅田の小橋に於て六兵衛を救ひ、其の緣故によつて娘おころと契り、江戸に走らんとして渡船に乘つた時、曉星右衛門の捕物騷ぎが始まり、おころ父子が水死したのを見て發心し、頭を丸め、日當と名のり、やがて谷中延命院の住職となる。美僧の爲めに風儀を亂し、終に脇坂侯と笹川幸十郎との協力によりて捕はれ死刑に處せられる。曉星右衛門は諸所を强盜し廻つた末、揚屋町の女郎屋の亭主と化けたが、度々割前をねだつてゐた馬吉、九郎藏と共に捕はれる。これに近江屋常三郎といふ若旦那が、非人の娘のお竹と契り、後に別れてゐて非人ではないと知れ、目出度夫婦になるといふ件を添へてある。役者は團十郎（笹川、曉星右衛門）、菊五郎（牛之助、日當、馬吉）、宗十郎（脇坂侯、柳屋治右衛門）、半四郎（おころ、お唉）仲藏（宗右衛門、柳全）等。講釋に據つた作。仲藏の柳全、菊五郎の日當、馬吉共に好評で成功した。

□十月（同座）、秩父重保身替り――二張千草重藤。一幕二場からなる時代物。秩父の庄司重能が義朝の弟義賢の一子駒王丸を匿ひゐる旨を、野心ある武藏左衛門有國に訴へられ、都よりは特に源家に因み深き齋藤實盛を上使として遣はし、首討てと命ずる。重能は我子重保を身替りに立て首討つて渡す。實盛は僞首と知りつつ其の忠義に嘆服し持歸る。役者は團十郎（實盛）、宗十郎（重能）、菊之

助(太郎重保)等。寂しい中幕ではあつたが評は好かつた。此の芝居を魯文が評し、始めて活歴と呼んだのである。

□十一月(同座)、八乙女と手打連――東花一座顔見世。常磐津にて二場。京都芝居前の場では八乙女連が舞出で、明日の初日を祝ひ、舞納める、大阪手打連は、これも顔見世狂言の盛大を祝つて舞納める。役者は手打連(團、菊、左、宗十郎、仲藏、家橘、子團次、團右衛門、菊之助、鶴藏)、八乙女連(小紫、粂三郎、しげ松、てうじ、梅三郎、清十郎、此糸、駒三郎)等。此興行には昔の顔見世興行に習つて、それ〴〵の式例を行つたり、顔見世番附までも作つたが、最早世間の注意を集める譯には行かなかつたといふ。

□十一月(都座)、重忠の討死――義重忠士礎。二幕五場からなる時代物。秩父に隠栖してゐた重忠父子が、鎌倉表に騒亂ある由を聞きて馳せつけんとし、重保先づ乘込む。と騒亂とは僞りにて、實は北條時政が重忠父子を失はんとの計であつて、重保は由比ヶ濱に誘き出されて討死し、重忠は二股川まで來りし所を支へられ、遂に世を恨み切腹して果てる。役者は我童(重忠)、新十郎(本間次郎、我當(重保)等。

◎十一月(市村座)、紀文十二ヶ月――全盛遊黄金豆蒔。常磐津、竹本にて一場。吉原揚屋町和泉屋に於て紀文大盡が三浦屋の几帳を相方として全盛遊びをなし、節分の豆に准へて黄金を蒔くと言つた

趣向。役者は權十郎(紀文大盡)、女寅(几帳)、三十郎(共角)、時藏(文山)等。

六十四歲(明治十二卯年)。

○二月、『歌舞伎新報』生る。
○三月より同誌上に勸進帳年代記を書く。
○四月より同誌上に助六年表を書く。
○七月、横濱へ異人芝居を見に行く。
○十二月より『歌舞伎新報』誌上に『霜夜鐘十字辻筵』掲載さる。
○四月より忍塚建立に取りかゝる。
△七月米國大統領グラント來遊し、新富座に招待さる英文の筋書も始めて出來た。
△八月、久松座開業。

□二月(新富座)、赤松滿祐——赤松滿祐梅白旗。七幕十二場よりなる時代物。足利六代將軍義教公は法の庭に育ちしにも似ず暴行多く、滿祐が娘にしてお局なる小辨を故なくして手討となし、果ては佞臣山名の言葉を用ひ、滿祐の所領三ヶ國を削り、赤松持貞に與へんとする。滿祐之れを知つて恨み能樂堂の舞臺開きに將軍を招じて弑し奉り、自分は播州白旗城に立籠り、終に屠腹して果てる。これに足利氏に恨みを懷く正光が春日神社頭に將軍を射損じ、詮議の上死刑となるの件を添へてある役者は團十郎(赤松滿祐、飯尾爲種)、菊五郎(赤松教康、楠正光)、左團次(渥美、泣男佐兵衛)、宗十郎(足利義教、鳥尾小太郎)等。

□二月(同座)、人間萬事金世中。三幕七場からなる世話物。横濱の陶器商惠府林之助が相場に手を出して失敗し、子の林之助は伯父の邊見勢左衛門に引取られてゐる。邊見一家は大の吝嗇揃ひで世話

もしないでゐる。と、長崎にゐた林之助の叔父死亡して二萬圓の紀念金が來るので、急に一家が親切を盡しおらんといふ娘を嫁に貰つて呉れなど申し入れるが、其の心根を試す爲めに古借金があると言つて二萬圓の取戻し事件が起つたといふと、またもとの薄情に返る。そこを見極め親戚の毛織五郎右衞門は同じ境遇にあつたお倉を娶らせ、目出度く惠府林の店を再興する。役者は團十郎（毛織）、菊五郎（林之助）、仲藏（邊見）、半四郎（お倉）、小團次（おらん）等。此作はリットンの小說の梗概を櫻癡居士が作者に語り、それを翻案した喜劇で、相當に成功を收めたものである。

◎二月（同座）、妾の糶市——魁花春色黃鳥。常磐津、淸元にて一場。向島の梅屋敷で妾の糶市があつて、權妻の月見得の會を催すといふ趣向で藝盡しをさせる。役者は團十郎（銀行家長井）、菊五郎（日歩貸しおつね）、左團次（米商安根）、半四郎（おたの）等。

□五月（同座）、高橋お傳——綴合於傳假名書。六幕十四場からなる世話物。上州上牧村勘右衞門の娘お傳が、癩病を發した亭主浪之助を介抱し、伊香保、橫濱と步く內、やがて毒婦の本性を發はして毒殺し、自分は船で東京へ上る。その途中野毛の辨藏に言寄られて海へ飛入り、救ひ上げられた田川吉太郎に惚れる。此の男の爲めに、伊香保以來口說き廻してゐた古着屋の吉藏を、藏前の宿屋丸竹の二階で刺殺す。それよりお傳の捕はれて服罪し死刑に處せらるゝまで。役者は團十郎（淸五郎、民尾）、菊五郎（お傳、虎吉）、左團次（田川）、小團次（浪之助）等。

□五月（同座）、殿中問答――花絡中山城名所。二幕四場からなる時代物。中山大納言が扇町大納言と共に傳奏となつて關東に下向し、中山（若山）大納言は病氣と言ひ立て、玄關まで乘打をして愕かし松平（增平）侯を相手として、政所と東叡山との關係を詰り、幕府よりの五ヶ條上達に對する答辯をば左右に托し、先づ下達せし三ヶ條を承諾せしめ、幕府の横暴を咎め、朝威を蔑にせしを詰る。役者は團十郎（中山大納言）、菊五郎（水戸宰相）、宗十郎（松平侯）等。

□二月（市村座）、娼妓小松――正權妻梅柳新聞。三幕七場からなる世話物。吉原の稻本で孝行と評判を取つた娼妓小松は、もと穗積といふ士分の娘であつたが、兄の放埒故に身を沈め母を養育してゐるのである、これに材木屋の若旦那伊之助が馴染み百圓の金を惠まうとするが受けない。伊之助の父が共の小松の志を聞いて請出し、女房にしてやらうといふ。と此處へ稻本の女將の妹お若が向島で伊之助を見初めて以來忘られず、夫婦にしてくれと賴み入れるので、結局お若を正妻とし、小松を權妻にしようとなる。役者は壽美之丞（伊之助）、國太郎（小松）、女寅（お若）、三十郎（新平、伊左衞門）等。

◎七月（猿若座）、額ぬけ――昔噺額面戲。常磐津にて一場。淺草奥山なるあやめ團子の店先へ、御堂の額を拔出した、韓信、賴政、天人、牛若丸などが集まつて來て種々な滑稽を演ずる。役者は我童（韓信）、半四郎（天人）、新十郎（賴政）、市藏（一つ家の老婆）等。

□七月（新富座）、八幡太郎――後三年奥州軍記。一幕二場からなる時代物、義家が前九年の役を濟ましてから、健忘症にかかりしと見せてわざと勘氣を蒙り、江州志賀の里なる太鼓師作太夫の家に潜みゐる。而して竊かに奥羽の軍狀を注意しをる中、光房の報せを得て嘘病も癒り、出陣する事となり、城代井上賴清より手勢千人を借りて出陣せんと勇み立つまで。役者は團十郎（太郎義家）、左團次（賴清）、仲藏（荒川作太夫）等。グランド招待に就き、彼れの立志傳を引直して書いたものであつた。

□九月（同座）、漂流奇談――漂流奇談西洋劇。四幕七場からなる世話物。船頭淸水の三保藏と親父の五左衞門とが、水主の兼松を連れて下田へ行く途中、暴風に遭つて洋中に漂はされる事十二三日、辛くも親子離れ〳〵となつて、米船と英船とに助け上げられ、生死の程も互ひに定かならずなる。三保藏は桑港の日本領事館に世話になり、やがて供をして佛京パリーへ行く。一方五左衞門はロンドンに在つて、パリーへ行き西洋芝居を見ての歸るさ三保藏に對面して悅ぶ。その西洋芝居を見に行くといふ場と、對面との間へ、眞實の異人芝居を一幕挿んだのである。役者は團十郎（三保藏）仲藏（五左衞門）、小團次（兼松）、市十郎（阿波の藤五郎）等、橫濱まで洋劇の正物を見に行つて企て、西洋の事情は洋行歸りの官吏などに聞いたものであつたが、前景氣の素晴らしいにも似ずまんまと失敗した。けれどもそれは洋劇が迎へられなかつたからで、趣向や作の構想はなか〳〵よく

出來てゐた。

○十月（同座）、鏡山――鏡山錦栬葉。九幕十六場からなる御家物。加賀家の足輕長次兵衛の悴長九郎が利口發明な所から、茶道より次第に出世し大月藏人と名も改め三千五百石の祿を食むに到り、つひに家老を失ひ、妾腹たる慶之助を嫡男になほし已一人威を揮はんと謀る。此の爲め筑摩川の乘切に君公を危くし、鏡山に小田大炊を刺さんとするが、何れも中途にして破れ、大月は中老政尾、安宅郷右衛門等と共に召捕はれる。役者は團十郎（多賀公、小田大炊、菊五郎（大月藏人、曾平次）左團次（安宅、政尾）、半四郎（お照、お貞）、宗十郎（浦井主膳、佐渡守）、仲藏（大六、萬助）等。成功した作であつた。四幕目の大月邸から鴫川堤の殺し、七幕目の鏡山紅葉狩の場などは、有名である。役々が適してゐて十分の成功を收め得た。

◎十月（同座）、湯島五人男――中夜宮五人俠客。淸元にて一場。湯島天神の祭禮に、俄の趣向で以て五人男が花々しく勢揃ひをするといふ賑やかしのもので、鏡山の大切に附けられた狂言淨瑠璃であつた。役者は團十郎（男達上野ノ鐘五郎）、菊五郎（同根岸ノ松右衛門）、左團次（同湯島の長吉）、宗十郎同根津ノ八重藏）、半四郎（同不忍ノ辨吉）等。

六十五歲（明治十三辰年）。

○六月、『霜夜鐘十字辻筮』の合本歌舞伎新報社より出版さる。

○十二月までに向島百花園内に忍塚を建立し了る。

□一月(新富座)、新膝栗毛——滑稽膝栗毛。二幕四場からなる世話物。彌次郎兵衛、喜多八が甲州猿日宿の在を通りかかり、柿盗人をして、百姓に見つけられ、罰として眉を剃り落される。すると駕籠屋が役者と鑑定して酒代をねだるので、二人とも役者になり濟す。猿橋では江戸から役者が乘込んだといふので、地狂言を出す事となり、蠶屋の奥座敷で白石の稽古をする。と彌次喜多が何も知らなかつたり、稽古に來たお妾に色目をつかつたりなどして、さまざまな滑稽を演ずる。役者は團十郎(彌次兵衛)、左團次(喜多八)、仲藏(蠶屋作左衛門)、宗十郎(素人淨瑠璃横日勘次郎)、半四郎(同妾むら)等。

□三月(同座)、伊賀越——日本晴伊賀報讐。八幕廿場からなる世話物。生田の藩中なる渡邊靭負の先祖が、大阪陣に討死した時帶して居た名刀五郎正宗をば、澤井又五郎の先祖が持返り渡邊家へ渡してやつた。後に仔細あつて澤井へ預けてあつたのを靭負の代になつて取戻し悴志津摩の差料とした。それを又五郎が恨んで、あらぬ流言を放つた結果、靭負は正宗を返却し、非行を擧げ酷しく異見をした。又五郎は憤つて靭負を殺害し、逃れて生田の別家矢部の邸内に潜んだ。生田家にては又五郎を取戻さんとし、却つて討られ笹川丹右衛門は切腹するに至る。一方志津摩の義兄に當る荒木政右衛門は、變を聞くや譽田家を去り仇討の畫策をなす。大久保彥左衛門が事の大とならんを慮り政右衛門に內通し、三州吉田より人吉に逃れんとする又五郎を伊賀越に於て討たせる。これへ生田

家に縁故深き俠客夢の市藏の子分宗次と、矢部家の中間との喧嘩一件が添へてある。役者は團十郎(政右衛門、重兵衛、矢部城五郎)、菊五郎(ヌヘ五郎、市藏)、左團次(生田官兵衛、半兵衛)、宗十郎(譽田侯、笹川)、仲藏(靭負、彦左衛門)、半四郎(お谷、おてふ)等。成功した芝居であつた。

□六月(新富座)、荏柄の平太――星月夜見聞實記。四幕七場からなる時代物。北條義時が將軍家の外戚となつてより横暴を極めるに就き、これが討伐として泉の小次郎親平、及び和田の一族へ荏柄の平太も加はり、すでに夜討の手筈も定まつた所へ、由利八郎の變心より事顯はれ、血判狀を示して荏柄の平太を糺彈する。平太却つて義時の非行をならし遂に處刑される事となる。役者は團十郎(荏柄の平太)、菊五郎(由利八郎)、左團次(泉の小次郎、義時)等。

□六月(同座)、霜夜鐘十字辻筮。(同題の草雙紙出づ、交來綴る、芳年畫く。)五幕十場からなる世話物。零落した士族の六浦正三郎は、三年以前武道の師たる、杉田氏より大義の企てを明され、徒黨すべく勸められたが應ぜず、却つて天下の爲めなりと感じて師を討ち、やがては其の子の杉田薫に討たれて死ぬ積りであつたが、その後諸國を浪々して貧苦に迫り眼を煩つた時巡査となつた薫に助けられ、其の住所を知つた所から兼ねて望み通りにならんものと、先づ子の正太郎をば、楠石齋の妻のむらに賴み置き、薫に事實を明し討たれんと申し出でたが、薫も眞相を知りては討ち得ず、石齋の仲裁に任せ、六浦は僧となり菩提を弔ふ事となる。これに按摩と見せて實は大盜賊の宗庵や、讃岐金

助やを配して波瀾を生じ、やがて皆善心に立返る。役者は團十郎（石齋）、菊五郎（杉田薫）、宗十郎（六浦正三郎）、仲藏（宗庵）、半四郎（おむら）、左團次（金助）等。讀物として歡迎された割合に芝居としては評判がよくなかつた。

□十一月（同座）、茶臼山――茶臼山凱歌陣立。五幕十一場からなる時代物。大阪落城を書いたもの。關東方日に〳〵勢よく、大阪方非となる。淀君の去就も決せず大野父子を賴り眞田幸村をも疑ふに至る。幸村は死を決し悴大助を秀賴に侍せしめ。家重代の六文錢の旗は兄信之に贈り置き四天王寺にて討死する。續いて木村重成も死を決し、母なる宮内の局と一世の別れをなして戰死し、後藤又兵衛も討死する。秀賴は小姓の殉死を受けて切腹し、淀君も宮内局に勸められて生害する。信之は旗を受け家康の許しを得て幸村の妻を鄕里まで送り遣はす。役者は團十郎（幸村、宮内局、德川大御所）、菊五郎（重成、加藤彌平次）、左團次（後藤又兵衛、武田左太夫）、仲藏（青木清右衛門）、宗十郎（邊見甲斐守、信之）、半四郎（淀の方、更科）等。團十郎の德川老侯は此の作より當り役となり宮内局もよかつた。

□十一月（同座）、おさよの怪談――木間星箱根鹿笛。四幕十七場からなる世話物。岩淵九郎兵衛の本妻おさよは、夫の爲めに小田原の女郎屋へ身を沈め貢いでやつてゐる。と九郎兵衛は一方で山猫おきつといふしたたかものを情婦とし、此の女を玉にして若旦那の新三郎から色仕掛で金を捲き上げ

る。それをおさよが知つて追かけて來るので、箱根の三枚橋で切殺す。すると共の後東京にゐる弟で茶商の與七の所で熱病に罹り、神經病になつておさよの亡靈に襲はれる。終に九郎兵衞は村正の刀を振廻しながら往來に飛出し、おきつにも切りつけ自分をも切る。役者は菊五郎（おさよ、同亡靈、與七）、左團次（九郎兵衞）、團十郎（海老屋十兵衞）、仲藏（良助）、家橘（新三郎）等。神經病の二番目と稱されて好評であつた。特に左團次の九郎兵衞は作中の傑作であつたといふ。

◎十一月（同座）、伊勢音頭と甚九――樹々錦旅路土產。常磐津、淸元にて一場。古市備前屋に於て團十郎、左團次に化けた旅役者が伊勢音頭を踊らせる。そこへ越後の八百八後家が越後甚句に連れて踊りながら來て、其役者の化の皮をむき自分等の男妾だと言ひ、互に手を取つて惣踊りになる。役者は團十郎、菊五郎、左團次、仲藏等。この淨瑠璃は一切の準備は整うたにも拘はらず、諸種の事情で上場はされなかつた。

六十六歲（明治十四巳年）。

○十一月（[illegible]『島衞』を一世一代として退隱し古河默阿彌と改む。

○此の興行にも引幕を贈られた。

△六月、三世瀨川如皐歿す（七十五歲）。

△十二月、春木座にて始めて落語芝居を催す。

△自由黨起る。

□三月（新富座）、增補河內山――天衣紛上野初花。（次の松山美談と共に草雙紙に出づ、交來綴る、國

政書く。）七幕十七場からなる世話物。前の河内山を增補したもの。寺田幸兵衛といふ浪人の筆職人を書き足し、直侍と三千歳とを詳密に纖細に描いた物である。金子市之丞といふ惡侍が始終絡むのも前にはない。殆ど面目を一新して前者に比して遙かに勝れた作になつた。◎淸元の『忍逢春雪解』は入谷の寮へ直侍が三千歳に逢ひに行つた所の色合に用ひられた。役者は團十郎（河内山宗俊）菊五郎（直次郎）、左團次（金子市之丞）、宗十郎（寺田幸兵衛）、小團次（丑松）、半四郎（三千歳）等。大入り續きの芝居であつた。松江の玄關、入谷の蕎麥屋から大口の寮までとが特に好評であつた。

□三月（同座）、大石城受取——千代譽松山美談。一幕三場からなる時代物。備中の城主水谷出羽守が江戸に於て發狂し、法により嫡子なき故斷絶と決定し、譽田侯を正使とし、副使として淺野侯の名代大石內藏之助とが城受取に行く。と、松山城では家老を始め城を枕に決戰する積りでゐると知れ內藏之助一人平服にて城代家老を訪れ、說得し終に平和のうちに開城せしめる。役者は團十郎（內藏之助）左團次（家老杉山）、家橘（譽田侯）等。依田百川より材料を與へられて作りしものなれど不評であつた。

□五月（猿若座）、大盃——大杯觴酒戰の强者。一幕二場からなる時代物。武田の浪人馬場三郎兵衛信久が足輕才助と名のり內藤紀伊守の足輕となつて其日を暮し、唯酒ばかり飲んでゐた。或時井伊掃

部守が花見に招かれて來て、いざ酒宴となつてお相手をするものがないので才助が上る。酒酣なるに及んで井伊侯から肴をと望まれ眉間に殘る古疵の物語りをせよと仰せられる。辭退する術もなく物語りの末、甞て大阪夏の陣に於て井伊公と爭つた時のものと分かり、侯が家臣に貰ひたいと懇望されたが、改めて千五百石で內藤家へ抱へられる事となる。役者は左團次(馬場三郎兵衛)、壽美藏(內藤侯)、權十郎(井伊侯)、八百藏(平石治右衛門)、等。評判がよくて左團次の專賣物となつた。

◎六月(同座)、土蜘。長唄にて二場。葛城山の蜘蛛の精が、比叡山の僧知籌となつて源賴光を惱まし、やがては天下を魔界ともせんとしたのを平井保昌に見現はされ、四天王等と共に葛城山に登り首尾能く退治する。役者は菊五郎(蜘蛛の精知籌)、左團次(保昌)、家橘(賴光)等。成功した新しい所作事。新古演劇十種の一である。

□六月(同座)、おその六三――古代形新染浴衣。(同題の草雙紙出でたり)。三幕七場からなる世話物大工の六三と淺草仲町福島屋の娘おそのとは幼馴染であつたが、割なき仲となつてゐる。ここへ田舍の豪農から千圓の持參金附の聟を迎へる事となつたので、おそのは六三を慕つて駈け込む。二人は本所の兄七郎助を賴つて行くと、彼れも盜賊の名を被せられて困却してゐた所であつたが、盜人の長次が自首して出たので、あつちもこつちも目出度く納まる。此の他には次興行の『島衛』の發端

として、島藏と千太が福島屋へ盗賊に入つて主人淸兵衛の足を傷け、千圓の金を奪ひ取り、二人は東西に別れて高飛びせんとする事となるまでが添へてある。役者は菊五郎(六三、島藏)、左團次(七郎助、千太、淸兵衛)、半四郎(おその)、松助(熊鷹長次)等。成功した芝居であつた。

□十月(春木座)、湯殿の長兵衛――極付幡隨長兵衛。四幕十七場からなる世話物。水野十郎左衛門の主宰する白柄組の贔屓角力黑鷲官太夫と、長兵衛等町奴の贔屓にしてゐる、當時花形の角力櫻川五郎藏との勝負に櫻川が勝つた爲め、黑鷲は櫻川を恨んで今戸橋に於て討たんとし、却つて返り討にされる。此の時櫻川の落した煙草入れが長兵衛の子分唐犬權兵衛の贈つたものであつたので、水野方では常から仲の好からぬ町奴共の所爲と見做し、長兵衛を呼びつけ殺さうとする。櫻川はそれを聞いて申譯の爲めに切腹する。長兵衛は覺悟して單身水野邸に赴き湯殿に於て突殺される。役者は團十郎(長兵衛)、權十郎(櫻川、水野)等。非常の好評を博した二番目物である。

□十一月(新富座)、後の加賀騷動――復咲後日梅。(同題の草雙紙出づ、交來綴る、楊州周延畫く。)四幕十一場からなる時代物。多賀の大領の妾お梅の方と、急に立身したる高村半右衛門とが情を通はせ、且つは毒を以て殿を亡き物にせんとする謀叛あるを知つた坂田善三郎は、私憤と稱し、催能に事寄せて刺す。坂田は飽までも私怨と稱し切腹する。切腹に臨んで辭世と上書を殿に差上げ、竊かに事の顚末を言上する。役者は團十郎(坂田、大領)、左團次(高村、江崎)、宗十郎(武部、おさは)

等。

□十一月(同座)、明石の島藏、松島千太――島衛月白浪。五幕九場からなる世話物。西へ別れた島藏は、故郷明石へ歸り改心して出京し、千太も郷里松島を志して奥州白河まで行つて、引返し來り二人は二度の出合をし、千太は望月輝に遺恨があるから、金を奪つて慘殺する手傳ひをしてくれろと頼むが島藏は聞かず、夜に入つて九段の招魂社前に落合ひ相談したが、島藏は動かなかつた。千太は彼れを不實と罵り、切つてかかるを抑へつけ、懇々と說諭し、因果應報の恐ろしさを說いて聞かせ、終に島藏が千太を改心させるまで。◎清元の『色增艶夕映』はお照と望月との色合に用ひられた好評の淨瑠璃であつた。役者は團十郎(望月輝)、菊五郎(島藏)、左團次(千太)等。白浪狂言の書納めと稱して執筆したものだけに好評を以て迎へられた。

◎十一月(同座)、浪底親睦會。常磐津、清元、竹本にて一場。浪の底龍宮に於て、知盛が會長になり、典侍の局、脩月照、お半、長右衛門、橋姫、河童、海坊主、潜水夫などが寄集り、親睦會を開きいろんな物語があつて、終りに乙姫が潜水夫を聟に見立てるといふ滑稽淨瑠璃。役者は團十郎(典侍局)、菊五郎(潜水夫)、芝翫(知盛)、半四郎(乙姫)等。

六十七歳(明治十五年年)。

○三月より『歌舞伎新報』誌上に、『鱗閣鵜飼燎』の——序幕出初む。

△二月、八世岩井半四郎歿す(五十四歳)。

◎三月(春木座)、釣狐。長唄にて三場。百姓太郎作の狐釣りを止めさせようと思ひ、狐は太郎作の伯父白藏主に化けて、次郎助、三郎次等の居る所へ行き、殺生石の物語をし、狐の執念深く怖しい事を話し畏を捨てさせる。が棄てたと見せかけた畏にかかり、捕へられる。而して此の場を演じた忰の藝を見て小倉山太夫が悦び、勘當が許されるといふ趣向にしたもの。役者は團十郎(白藏主、狐)芝翫(山太夫)、家橘(太郎作)等。狂言に出發した所作で、新歌舞伎十八番の一に算へられてゐる。

◎六月(新富町猿若座)、大丸騷動――切籠形京都紅染。四幕十場からなる世話物。大松屋二代目の淸十郎が、祇園の藤棚の下で藝妓の繁野を見初め妻にする事となる。がもとの情夫三之丞が江戸から來たので、繁野は淸十郎を棄てて駈落する。その上彼女の親父五郎右衛門に欺かれたので淸十郎は無念のあまり猛りたち、家に傳はる正宗の刀の祟りによつて狂ひ出し京都中を切捲り、自分は自殺して果てる。役者は高助(淸十郎)、左團次(五郎右衛門、藤兵衛)、小團次(佐野屋治兵衛)、田之助(繁野)、家橘(三之丞)等。

◎六月(同座)、望月。長唄にて二場。望月左衛門の爲めに非業の最期を遂げた、安田庄司の奥方白菊が、今は勘氣を蒙むり旅人宿甲屋の主人才兵衛となり居る小澤刑部に逢ひ、敵討を賴む。才兵衛の妻おちかは望月の妹と分りたれば離緣し、奥方を女房だと言ひたて、折よく投宿した望月を酒宴の興の獅子舞に事寄せて討取り、望月も潔く討たれ傳書の一卷を渡す事となる。役者は高助(おちか)

左團次（望月）、左團次（才兵衛實は小澤刑部）等。

□十月（市村座）、朝鮮征伐——張扇子朝鮮軍記。五幕十一場からなる時代物。小西行長は平壤に立籠つてゐたが、二十萬の援兵が大明より來ると聞き、大谷刑部、石田三成等と共に引揚げ、王城に於て李如松と和睦するの件。內地に於ては豐太閤が肥前名護屋へ出陣の途中、音渡の瀬戸に於て弑さんとせし船頭與次兵衛實は黑崎蔭義を見出し、詮議の末刑罪に行ふの件。役者は菊五郎（小西行長、與次兵衛）、家橘（石田、毛利）、我童（李如松）、璃寬（太閤、大谷刑部）等。講釋に據つた作。

□十一月（新富座）、黑田騷動——黑白論織分博多。五幕十二場からなる御家物。筑紫の大領貞行が法度になつてゐた萬石積の大船を造らんとの議を起す。此の企を好餌として浦橋重太夫は御家横領の計畫を進め、淺川主水に恩義を蒙らせて繪圖を引かせ、船が出來する。一方重太夫は大領貞行が安養寺に於て見初めた、小姓出立の要人實は獵人只村彌兵衛の娘お秀を參らせ淫酒を勸め、住職紅陽をば大友家の末葉であり又女犯の罪ありとして責殺す。これを聞いた長崎在勤中の老臣鳥山大膳は急ぎ歸來し、陰謀の端緒を捉へ、君を諫め、やがて其の力によつて黑白を明白にし、處刑する。役者は團十郎（大膳、只村彌平次）、左團次（浦橋重太夫）、右團次（安養寺の紅陽、淺川主水）、紫若（要人、お秀）等。

□十一月（同座）、朝鮮長屋——僞甲當世簪。三幕九場からなる世話物。朝鮮長屋の鼈甲屋京屋の娘

お浦の聟になつた同業和國屋の新三郎は、夫婦仲はよいが兩親が舊弊で慾張りなところから兎角折合惡く、唐木屋の息子が二千圓の持參金を持つて來たがつてゐるのを知り、追出されようとする。これを耳にした莫連者達摩のお才が夫半目の長五郎と共に新三郎に惡名をつけて追出す。お浦も夫の跡を追つて家出する爲め新しく聟も迎へられず、媒人の長房幸治からは責め立てられ、終に舊弊のちよん髷を落し、緣をば舊に戻して貰ふ。役者は菊五郎(幸次、お才)、左團次(半目の長五郎)、仲藏(久平次)、家橘(新三郎)、松助(眼九)、秀調(おかん)等。長房幸次は花房公使といふやうに、當時の朝鮮事件を當てたものであつたが、評は一向立たなかつた。

◎十一月(同座)、共進會——共進會名畫夜遊。常磐津にて一場。上野に共進會があつて夜になると陳列中の畫の中の人物が拔け出して來て遊びさま〴〵な滑稽を演ずるといふ趣向。役者は團十郎(是眞の百姓)、芝翫(玉章の道成寺)、仲藏(穗庵の乞食)、鶴藏(華村の猿引)等。作は出來たが上場はされなかつたといふ。

六十八歲(明治十六年未年)。

△坪内逍遙氏譯『シーザル奇談』出づ。

□一月(新富座)、柳生と松前屋——芽出柳緑翠松前。六幕十四場からなる世話物。柳生又十郎が慶元小菊と密通して家を追はれ、上州箕輪なる丸目藏人に就いて劍道を修業する事三年、指傳の免許を

得て歸來し、大久保彥左衞門を介して、父但馬守と試合の上勘當を許され家督になほるといふ作。松前屋五郎兵衞が義兄甚右衞門の難儀を見兼ね、內藤家の者三人を打懲らした故恨まれ、盜賊に入つて傷つけたとの計策を構へて五郎兵衞を罪に陷し既に命も危うくなつた所を一心大助の働によつて大久保彥左衞門が再吟味をなす事となり、事實明白し釋されるまで。役者は菊五郎(五郎兵衞)、左團次(內藤、但馬守、太助)、仲藏(大久保彥左衞門)、右團次(又十郎、淸兵衞)、芝翫(甚右衞門)等。讀本に據つた作であるが成功したものであつた。

□四月(同座)、石魂錄――石魂錄春高麗菊。五幕九場からなる時代物。鎌倉石切山なる望夫石の申子なる秋布は、執權職よりの仰せで瀨川釆女と夫婦になるが、その七日目に夫は九州なる大宰の經高追討軍の軍師として由比ヶ濱から出船する。釆女は彼の地に到り殊功を顯はし、一夜敵の軍師牛淵の忍び來れるを追うて、末の龍花なる藁屋にたどりつき、實の母玉島に逢ひ、九郎は母の弟と知れ如何にせんと躊躇する。然し玉島は自害し九郎も潔く釆女に討たれ、功を立てさせる。釆女はやがて目出度く關東に凱陣する。役者は菊五郎(釆女)、左團次(九郎)、仲藏(玉島、彌四郎)、多賀之丞(秋布)等。馬琴の讀本に據つた作。

□四月(同座)、金看板――金看板俠客本店。三幕七場からなる世話物。本町の三臟圓の店へ江戸一といふ金看板が出來た所から、異名に金看板の甚九郎と呼ばれた俠客が、人殺しの罪で捕はれた木崎

の久藏が繩拔けしたのを助け、望みに任せて上州なる母のお庵へ暇乞に行かせる。其後甚九郎と俠客大五郎との間に喧嘩の起つた時、久藏が身をなげうつて止め恩報じをする。役者は團十郎（甚九郎、お庵）、左團次（久藏）、芝翫（大五郎）等。

◎四月（同座）、茨木。長唄にて一場。東寺の羅生門に於て綱の爲めに腕を切取られた惡鬼茨木童子が津ノ國なる綱の伯母と姿を變へて來り、强ひて面會し酒を飮み、唐櫃なる鬼の腕を一見したいと言ふので、止むを得ず見せると、見る〳〵鬼相を現はし其の腕を奪つて飛去る。役者は菊五郎（叔母眞柴實は茨木童子）、左團次（綱）等。『土蜘蛛』と同じ形式の所作事であつたが好評であつた。新古演劇十種の一。

□五月（市村座）、新皿屋敷――新皿屋敷月雨暈。三幕九場からなる世話物。磯部主計之介の妾お蔦が岩上典藏等の詭計にかかつて浦戸紋三郎と不義をしたとの汚名を着る。主計之介は怒つてお蔦を手討にし、井筒の中に切込む。紋三郎も自刄しようとするが、お蔦の亡靈に留められ、惡人共の一味連判狀を賠る。お蔦の慘殺された事を聞いた兄の魚屋宗五郎は、酒の勢に任せて磯部邸へ怒鳴り込む。家老これを取鎭め、やがてお蔦の靈の告げによつて惡人亡び御家は安泰になる。役者は菊五郎（お蔦、宗五郎）、我童（紋三郎、主計之介）等。菊五郎の宗五郎は特に妙を極め、作としても成功したものであつた。

□九月(同座)、不動文治——今文覺助命刺繍。四幕八場からなる世話物。萩原良作が零落して、家重代の名刀不動國行を賣つて百五十兩になつたを、途中で坪内侯の中間熊藏の爲めに強奪される。それに就き弟分の不動文次が金策をしたが出來ないので、坪内侯の息女と戀仲になつてゐると難題をふきかけて調達する。行方不明の良作をば、日頃念ずる大山の瀧に打たれて、不動尊へ祈願を籠め首尾よく助ける。其の後坪内侯へは改めて詫びた所が、息女を妻に賜はり不動國行も良作へ戻る。役者は菊五郎(不動文治)、高助(坪内慶十郎)、松助(熊藏)、我童(良作)等。

□十月(新富座)、實錄十人斬——千種花音頭新唄。四幕九場からなる世話物。油屋のおこんに思をかけた福岡貢には、妻があるので思ふやうにならないでゐると、藍玉屋の岩次が拾つた金を持つて來て、仲居のまんのを說付けおこんを身請せんとする。まんのは狂言を書いて貢に盜賊の汚名を着せて恥しめる。貢は憤怒の極家の重器葵下坂を以てまんのと弟の兼松その他を殺害し、叔父の磯貝宅に至り罪を明して切腹する。これに貢の恩人松坂屋千次郎が大々講の金百五十圓を兼松に掏り取られる件が絡まつてゐる。役者は菊五郎(貢)、左團次(まんの、磯貝)、松助(兼松)、源之助(おこん、お梅)等。伊勢音頭の實錄で、評判は可なりよかつた。

□十一月(市村座)、增補天竺德兵衛。一幕二場だけ增補した世話物。鐵砲職の覺藏が銀杏の前を山路で助けて連歸り妹と稱して匿つてゐる。此の行立を知つてゐる弟の猪之助が、それを覺藏の情婦だ

と妻のおりくに焚きつけ、自分は姫の入つた葛籠を負つて志賀越へさしかかる。覺藏は驚いて追かけ行き猪之助、おりくをも殺害し、自分は鐵砲腹をして果てる。役者は菊五郎(覺藏)、家橘（猪之助)、松助(與四郎)等。

□十二月(花柳壽輔の爲めに作す)。釣女。常磐津にて一場。大名定之進が妻を申受けようと西の宮の惠比壽三郎へ太郎冠者と連立行き、御告を受けて釣竿を得たので、それにて釣り、大名は上臈を太郎冠者はしこめを釣り上げ、奪合ひをして太郎冠者上臈の手を取りて走り行くまで。狂言から脫化したもの。

六十九歳(明治十七申年)。

○四月、新富座に於て、竹柴金作改めて三代目河竹新七となる。

○此の前後より演劇改良の叫び高く、特に狂言作者に對する攻擊次第に盛んとなる。

△求古會生る。

△猿若座島越に移轉し十一月開場す。

□四月(新富座)、徵兵の狂言――滿二十年息子鑑。五幕十一場からなる世話物。藤掛作藏の伜松太郎は、弟と共に人力車夫にまでなり下つたが、もとは士族であつた。滿二十年になつたに就いて徵兵に出ねばならぬ事となつたが、親へ孝行を盡したいばつかりに、花垣家の名刀を盜んで伏罪し、徵兵を免れんとしたが、其の不心得を泥熊に諭され、短刀をばもとに返して兵役に出ようとしたが、

一旦侵した罪の爲めに出られなくなる。近所の經師屋の悴巳之助は潔よく兵隊に出るに就き、立振舞などあるにつけ、徴兵には何事をおいても行くべきものだと感じ罪を後悔する。役者は菊五郎(藤掛松太郎)、左團次(伴七、泥態)等。際物として當るべきであつたが、あまり世間に歡迎されなかつた。

□四月(同座)、幸壽丸身替り——二代源氏譽身換。二幕三場からなる時代物。多田滿仲が遁世の後四男美女丸を嫡子とし、菩提の爲めに中山寺に遣はし出家させせんとした所、美女丸遊逸なる由聞え、預け置きたる仲光に首討てと命ずる。仲光はあまりのおいたはしさに我一子幸壽丸を身換りに立てて取繕ふこと三年の後、滿仲の長子滿成の法會の席上で、横川なる源信僧都に從つて得度した、美女丸の源賢と滿仲親子の對面をなす。滿仲へは滿成の遺子を與へて其の忠を賞でる。役者は團十郎(仲光)左團次(滿仲)、仲藏(源信)、家橘(美女丸)、金太郎(幸壽丸)等。成功した作で、新歌舞伎十八番の一に算へられてゐる。

□四月(市村座)、世話の淸玄——浮世淸玄廓夜櫻。三幕九場からなる世話物。吉原入間屋の抱女小櫻を見初めた無住庵の淸玄は、何度通つても聞かれず、寺からは追放され、總泉寺裏の庵室に籠つたままあまりに思ひつめたので、生靈となつて小櫻の前へ現はれる。小櫻の兄牛島惣太はそんな奴は殺してしまへといふので、やつて來て慘殺する。小櫻は夢に、淸玄の靈が藏前の若隱居露夕と化け

てゐて、小櫻の情人松三郎が嫁を迎へたのを果敢なんで、身投げせんとするを助け契りを結ぶと見て、小櫻が地藏堂から出た出逢がしらに、惣太の爲めに淸玄と見誤られ遣手のお爪と共に殺される。淸玄の下部六兵衛と嘉三七とは後に惣太に仇を報ずる。役者は菊五郎(淸玄、露夕、淀五郎)、我童(松三郎)、時藏(牛島惣太)、三十郎(六兵衛)、壽美藏(嘉三七)、松助(お爪)等。大入りをとつた作であつた。

□九月(新富座)、泉岳寺――名高輪牛角文字。常磐津にて一場。高輪泉岳寺前の茶店いろはの場で、東京の席亭が義士に關する興行で利益を得るのを德とし、泉岳寺へ常香盤を奉納する。此處へ牛方の猛六が酒に醉つて來て、牛の身振りやら聲色やらを使つて大亂擬氣を演ずる滑稽淨瑠璃。役者は席亭の主人(團十郎、菊五郎、左團次等)、鶴藏(牛方の猛六)等。

□十一月(猿若座)、高時と義貞――北條九代名名家功。上、中、下の三卷に區別せられてある時代物。上の卷は二場にて、安達三郎が北條高時の愛犬雲龍に母を噛まれたのを怒つて打殺し、死罪に處せられんとする。これを大佛、城の入道等諫めて思ひ留まらせ、尚も酒宴を續け、春日の田樂法師を呼ばんといふ時に燈火消え、數多の天狗入來り高時を飜弄する。中の卷は三場にて、大佛陸奧守の家臣本間山城守が、大酒の爲めに勘氣を受けて許されず、新田義貞の攻め來るをも見てゐねばならぬを情なく思ひ、建長寺にて切腹せんとするを留められ、父刑部の勸めに從ひ、捨つる命ならば一功を

立てて死せよと言はれ、卽ち敵將大館次郞の首を主君の實檢に備へ、勘氣御免となるも、重傷に堪へ兼ね落入る。下の卷は一場で、義貞が稻村ヶ崎に於て龍神に名刀を捧げ、海水を引かせて軍勢を渡すといふ太刀流しの件である。役者は團十郞(高時、本間、義貞)、仲藏(城の入道)、九藏(本間父刑部)、權十郞(大佛陸奥守)、八百藏(彌四郞)等。三卷中で最も好評であつたのが高時の件で、新歌舞伎十八番の一になつてゐる。

七十歲(明治十八年)。

○一月、千歲座開場し、その式を舊例に則る。
○五月、默阿彌は本所へ轉宅の準備をなす。
△五月、坪内雄藏氏著『當世書生氣質』出づ。

△五月、硯友社組織され『我樂多文庫』初篇出づ。
△內閣開始。

□二月(千歲座)、棊盤忠信——千歲曾我源氏礎。五幕十場からなる時代物。平家方が都落して屋島の假御所に屯せる中、敎經は士氣を鼓舞せんとして大醉し、果ては宗盛の愛妾朝顏を切り、或は佐藤繼信が義經と名乘りて攻來るをば射殺しなどする。一方義經は賴朝の不興を蒙むり堀川御所を追はれ、雪の吉野を過ぐる途中僧徒に取圍まれ、忠信の防戰により辛くも遁れ奧州に下る。忠信は唯一騎京都に歸り、小柴の邸を訪へるを訴人するものあつて捕手に圍まれる。卽ち棊盤を以て追散し切腹する。大詰の『山伏攝待』は新歌舞伎十八番の一に算へられたもので、義經主從が奧羽に下り、討

死せる佐藤繼信、忠信兄弟の母教信尼に逢ひ、戰模様を聞き、又旗揃へをして勵ますの件である。役者は團十郎(繼信、靜、教信尼)、菊五郎(義經)、左團次(忠信、辨慶)、芝翫(横川覺範、常陸坊)等。源平盛衰記に據つた作で、成功した。

□二月(同座)、筆賣幸兵衛——水天宮利生深川。三幕八場からなる世話物。零落して妻に死なれた船津幸兵衛が、いよ〳〵困窮に迫り、年も行かぬ二人の女兒と乳呑兒とを抱へて、筆の行商をしながら行く先々で貰ひ乳をしてゐた末、子供等を刺殺し自分も死なうと決心したがあまりの果敢なさに發狂し、深川の海邊川へ投身したが、水天宮の利益によつて車夫の三五郎に助けられ、次第に諸方より惠みを受けて樂になる。これへ幸兵衛の父に教を受けた事のある萩原良作の弟小天狗要次郎と茨木傳次等が、質屋の山岡へ强盜に押入りて捕はれ、改心するの件が添はつてゐる。役者は菊五郎(幸兵衛、小天狗)、左團次(三五郎、良作)、我童(山岡富三郎)等。二幕目の幸兵衛發狂は作中の眼目で成功した。◎清元の『風狂川邊の芽柳』は狂亂の場へ用ひた淨瑠璃である。

□五月(市村座)、女化狐——女化稻荷月朧夜。三幕八場からなる世話物。常陸國根本村なる浪人曾根忠三郎が、八年前に狩人の擊たんとした狐を助けてやつた事がある。其の恩返しに坂東三十三所の靈場を巡る巡禮となつて來り、母おすがの看病をなす中に忠三郎と契り二人の子まで生した。が、人相見の言葉より化生の自分がゐては、家に祟りある事を知り、夫と子とに別れて、根本ヶ原の芒

の中に消えるといふ哀れな物語り。役者は團十郎(荒川道之進)、菊五郎(お秋實は女化狐、彌三平)、左團次(與三次)、高助(忠三郎)、國太郎(母おすが)等。傳說を取つたものだが世話の『葛の葉』とも稱すべきものであつた。

◎五月(同座)、男しやべり――柳櫻青樓噺。淸元にて一場。北嵯峨の別館へ病氣保養に來てゐる細川の息女花園姬の所へ、お氣に入りの飴賣りが來て、踊りを御覽に入れる。それから姬の見初めた梅津掃部之助が來て、靑樓噺をして慰める。其の後で姬の所持する閻浮檀金の不動像を見たいとて見せて貰ひ、これこそ赤松滿祐の所持せしもの、我こそは赤松彥三郎則政なりとて、奪はんとするにより、捕手大勢かゝり召捕る。役者は高助(梅津實は赤松彥三郎)、菊五郎(飴賣り玉蔵實は柏木太郎照元)、家橘(飴賣り實は柏木次郎)、松之助(花園姬)等。

□十一月(新富座)、髮染の實盛――老樹曠紅葉直垂。二幕三場の時代物。平家は次第に木曾義仲の爲に破られ、いよ〳〵決戰明日に迫るに及び、齋藤實盛も討死と決心する。都にあつて若君守護に任じてゐた、二人の息子が初陣せんとして來れるを追返し、今井兼平が木曾方の軍師に仰がんとて來りしをも謝絕し、白髮を墨にて染め、錦の直垂を着して單騎出陣なし、手塚光盛に討たれ、首實檢に際し樋口次郎兼光が實盛と見極め哀惜する。役者は團十郎(實盛、兼光)、左團次(義仲)、宗十郎(今井四郎)等。

◎十一月(同座)、船辨慶。長唄にて一場の所作。義經、賴朝と不和になり西國に走り、津の國大物浦より乘船せんとし、武藏坊が言葉に從うて妾なる靜を送り返し、いざ船出せんとするに知盛の靈出で海中に引入れんとするを武藏坊法力を以て退散せしむる。役者は團十郎(靜、知盛の靈)、左團次(辨慶)、芝翫(船頭三保太夫)、海老藏(義經)等。新歌舞伎十八番の一。

◎十一月(同座)、水鳥記――水鳥記熟柿生醉。常磐津にて一場。品川海晏寺に於て紅葉狩を兼ねた酒戰の勝負をする。近邊から集まつた酒呑が勝負をし、負けたものが罰として踊りを踊るといつたもの。役者は團十郎(大蛇丸底深)、左團次(甚鐵坊常赤)、芝翫(地黃坊樽次)等。

□十一月(千歲座)、御金藏破り――四千兩小判梅葉。六幕十四場からなる世話物。中間上りの野州無宿の富藏が、浪人の藤岡藤十郎と組んで御金藏を破り、四千兩の小判を盜み出し、藤十郎方に預け置いて、富藏もちび／＼貰つては遊んでゐる。詮議が嚴重になるので、富藏は加賀に病んでゐる老母に逢ひに行つて捕へられ鴨籠で送られる。熊谷驛で八年前に離緣し行きがけに別れを告げた父と妻子に見送られ、傳馬町の大牢に打込まれる。藤十郎も貸附所を設けて繁昌してゐたが、手代の木更津千次から露顯して捕はれ、二人ともに死罪となる。役者は菊五郎(富藏、定廻り尾林)、九藏(藤岡藤十郎)、松助(千次、檢使黑川)、傳五郎(雁八)、國太郎(お民、おさよ)等。傳馬町の御牢内の場を始め全體にわたつて評判よく成功した。

七十二歲（明治十九戌年）。

○五月、歌舞伎新報社より引幕を贈らる。

○六月、十六日に『藤澤山へ參詣なし金四十圓を寄附なす』（手記による）。

（六月、『戀闇鵜飼燎』の合本成る。

○十月、守田勘彌弟子入りし古河新水と稱す。

○十月、能進大阪にて歿す。

△十二月、三世仲藏歿す（七十八歲）。

△八月、演劇改良會組織さる。

□一月（新富座）、西洋咄――西洋咄日本寫繪。六幕十五場からなる世話物。佐久間町で春見屋といふ宿屋を出して失敗した、もと旗本の春見丈助が、百姓助右衛門の預けた三千圓を見て惡心を起し、仲間の又作と共謀し、殺して死骸をば佐野へ棄てに行く、途中で沼田の池へ投り込み、其の時引いて行つた車夫をも殺す。七年程經て又作文なしになり春見をゆすりに來る。一方助右衛門の子重次郎は一家をまとめて上京し、貧窮な活計を立ててゐる內、屋根屋の淸次に逢ひ、淸次によつて、かの二人の惡事を探り掛合ふ。春見も免れずと知つて切腹し、家はそつくり重次郎に讓り渡される。役者は團十郎（春見丈助）、左團次（又作、淸次）、小團次（重次郎）、源之助（おいさ）等。圓朝の人情噺を脚色せるもの。

◎一月（同座）、かつぽれ――初霞空住吉。常磐津にて一場。淺草仁王門前の床几へ腰を下した甘井官藏が、ちやうど來かゝつたかつぽれの連中を呼んで茶番を演らせる趣向。舛坊主と島藏が、刈萱になつたり、梅忠になつたりして笑はせ、惣踊りになる。役者は團十郎（舛坊主）、左團次（島藏）、

及び小團次、團右衛門、しう調、源之助等。

□三月（千歳座）、加賀鳶――盲長屋梅加賀鳶。六幕十場からなる世話物。加賀様お抱への鳶の者梅吉の女房おすがは、子分の雷五郎次に口説かれて、應じなかつた爲めに恨まれ、雷鳴に怖れて子分の巳之助と同じ蚊帳に入つたのを、密通と言立てるのに、梅吉も詮方なく兄弟分の松蔵へ預ける。おすがは父の關口に詫びても許されず、武士の堅氣に手討にせんとまで言ふ。やがて死神につかれた五郎次の仕業と判明し許される。熊鷹の道玄は御茶の水の土手で靑梅在の百姓を殺し金を奪ひ、按摩のお兼を相ずりにして質屋伊勢屋の主人をゆする。と松蔵の爲めに下手人たるの緒を見出され、續いて縁の下に匿してあつた血痕のある衣類が現はれたので捕縛され服罪する。役者は菊五郎（道玄、梅吉、死神）、九蔵（松蔵、關口、坂田）、家橘（伊勢屋與兵衛、巳之助）、松助（五郎次、お兼）、松之助（お花、おすが）、菊之助（子守お民）等。成功した作であつた。菊五郎が『村井長庵』を演じたいとの希望を止めて其の替りに新作した作であつた。五郎次が死神に誘はれる件も好評で、◎殊に其の中へ淸元の『岸柳朧人影』を用ひたのは、凡手の眞似し得ざる所だと稱された。

◎三月（同座）、花合せ――花合四季盃。淸元、竹本にて一場。業平、小町、僧正偏正等が集まり、歌合をしながら戀物語に耽る。小野道風が出て來て、韓信の裝になつてゐる唐人飴と角力を取る事などがある。酒宴になつてから石川五右衛門だと名のる釜盜人が來て滑稽を演じる。役者は菊五郎

(唐人飴の市兵衛)、九藏(道風)、家橘(業平)、松之助(小町)等。

□五月(同座)、戀闇鵜飼燎。八幕十一場からなる世話物。藝妓小松が鼻毛の長い客を引かけ逃し、文三とは狂言心中をし、自分は小田原へ行つて娼妓になり漂浪する。やがて甲州へ越さうとして笹子峠まで行つて狼に喰殺され、首は谷川を流れて石和川に落ち、見なる鵜遣ひ甲作の網にかゝると いふ筋。役者は菊五郎(小松、甲作)、九藏(船木賢三郎)、松助(熊藏)、家橘(文三)等。

□五月(新富座)、華山と長英――夢物語蘆生容畫。七幕十五場からなる時代物。渡邊華山が洋書を讀んで海防を策論し、高野長英が蘭書を翻譯し又は意見を發表したので幕府に睨まれ、鳥居耀藏等の爲に捕はれ、華山は三宅公の下に蟄居を命ぜられ、後重なる嫌疑に堪へ兼ね、母の命もあり切腹して果てる。長英も入獄中出火ありて牢拂ひとなつたのを機會に鄕里の奥州に匿れ、年を經て面體を變じ澤三伯と名のり、青山百人町に在つたを、以前馴染の豐倉屋抱へお瀧の情夫巾着切の仁三郎に突留められ、縛せられんとして終に自ら咽喉を突いて果てる。役者は團十郎(華山、院主愛善、尾林)、左團次(長英、華山の母)、小團次(仁三郎、福田半香)等。『文明東漸史』に據つた作で成功した。

□五月(同座)、雪のだんまり――水滸傳雪挑。唐土瓦罐寺の一場。九紋龍と魯智深とが、瓦罐寺に於て錦の袋を奪ひ合ひ、月の出るに及び互に顏を見合せ無事を祝し合ふに終る。役者は團十郎(九紋

龍史進)、左團次(花和尚魯智深)等。

□十一月(同座)、梵字の德次郎——月白刃梵字彫物。六幕十一場からなる世話物。義賊神道德次郎が麻布極樂寺の住職隨念の放埒に附けこみ、女房のお眷を後家に仕立て美人局のやうにして五百兩を奪ひ、日光へ落ちる。其の途中で、十三年も前にある家へ忍び込み、娘と一夜の契りを結んだ時に宿つた子にめぐり遭ひ、祖父の杢我に連れられて中禪寺道まで追つて來て、左の腕に梵字の彫物のあるが父だと言遺した事を語り、親子の名のりは遂げさせたが、間もなく自首して出で梟首となる。これに宇都宮在の刀鍛治野上平造の出世譚を添へてある。役者は菊五郎(德次郎、平造)、松助(七藏、杢我)、家橘、松之助等。

◎十一月(同座)、茶リネの曲馬——鳴響茶利音。竹本、清元にて一場。當時人氣を占めたチャリネの曲馬と道化師、或は佛國パリの靴屋一家の滑稽狂言、それから大象の曲藝までも添へた見世物を舞臺に上せたもの。役者は菊五郎(チャリネ、一本足)、松助(口上言ひ)、及家橘傳五郎等。

□十二月(新富座)、伊勢三郎——茡源氏陸奥日記。一幕一場の時代物。伊勢三郎が上州なる隱家に在りて夜盜を事としてゐる所へ、鞍馬山で修業した義經が奥州の秀衡を賴りて下りがけに、美作崎兵衛の爲めに遮られしを辛くも逃れ來りて一夜の泊りを請ふ。酒の上にて互にそれと悟り名のり合ひ三郎は伴をして奥州に下らんと誓ふまで。役者は團十郎(伊勢三郎)、福助(義經)、門藏(左六太)、

源之助(濱萩)等。能曲風の高雅な作で新歌舞伎十八番の一。

◎十二月(同座)、瓜盗人——狐塚寫澤水。常磐津にて二場。豪農福富徳右衛門の畑に瓜が澤山になり、狐が盗んでいけないから夜番を付ける事となり、痴鈍の太郎作が番に當る。所がそれを見廻りに行つた主人夫婦と次郎助とを、狐の化けたのだと思ひ込み松の木に縛りつけて燻す、やつとの事で免れて太郎作をあべこべに縛る。役者は團十郎(福富)、菊五郎(太郎作)、左團次(助次郎)、松助(福富女房)等。此の狂言淨瑠璃は一切の準備が悉く整へられたにも拘らず、上場はされずにしまつた。

七十二歲(明治二十亥年)。

○本所二葉町へ轉住す。
○三月、新富座に於て進三改め竹柴其水となる。

○四月、天覽劇の擧行あり。
△長谷川二葉亭の『浮雲』現はる。
△十二月二十八日脚本樂譜條例發布さる。

□三月(新富座)、太田道灌——歌徳恵山吹。一幕二場の時代物。道灌が狩に出て雨に逢ひ、高田の賤ヶ屋に立寄り雨具の借用を申込んで、山吹の花で斷られ、休息さして貰ふ段となりて道灌と分かり、仇敵と呼はつて切つて掛る。卽ち先年石濱に於て滅ぼされたる豐島の一族と分明し、道灌は其の時の戰物語りをなし、紀念にと托された閻浮檀金の觀音像を娘に渡し、母娘の道灌に對する恨みも解けて感謝するまで。役者は左團次(道灌)、小團次(畑作實は洲崎八郎)、源之助(おむら 實は豐

島家の息女撫子)等。

□六月(同座)、關ヶ原——關原神葵葉。五幕十場からなる時代物。秀吉他界してより關東方益々振ふを見て三成窃かに策を立て、會津なる上杉氏謀叛の由を言觸させ、其の虚を伏見に突かんとし、却て家康の爲めに敗れる。軍師大谷刑部は自殺し、三成は大阪へ落ちんとし途中に於て捕はれる。これに細川の室敷浪が大阪城に赴くを欲せずして、二人の子供を刺して、焰の中に自害する件が添へてある。役者は團十郎(家康、敷浪、大谷刑部)、菊五郎(藤堂高利、石田三成)、左團次(鳥井彦右衛門、細川侯)、松助(平十郎、九右衛門)等。團十郎の家康も敷浪もよく、成功した作であつた。

◎六月(同座)、矢矧の寮——西東戀取組。三河島なる矢矧の別莊で、淨瑠璃姫と謳はれたおきよが婿を選むに淨瑠璃を語らせて及第したものが選ばれるといふ趣向で、結局才藏が御氣に叶ふといふまで。役者は團十郎(萬藏)、菊五郎(才藏)、家橘(牛若丸)、福助(淨瑠璃姫)等。今の歌右衛門は此の時に福助と改名し名題に昇進したのである。其の口上は此の前の場の五人男勢揃ひの場で述べられてゐる。

□七月(中村座)、白井權八と猫石——五十三驛扇宿附。七幕十八場からなる世話物。白井權八故あつて本庄助太夫を殺害し江戸へ發足する。これを許嫁の八重梅が若黨と共に追かけ、また助七、助

八の兄弟は父の敵討をせんものと追ふ。權八は四日市で盜賊新五郎の家に泊つて懲らし、金谷の松原に於て助七助八の兄弟を返り討にし、大井川にて捕はれる。これに京の織屋宗三郎が藝妓のお袖と江戸へ道行する途中、岡崎の古寺で怪猫の精お蔦に惱まされ、これを擊留に來た、獵人繁藏が祟りを受けて自殺する件が添はつてゐる。役者は菊五郎(權八、お蔦、繁藏)、福助(若黨八內、正作)、家橘(宗三郎、助七)、松助(雲鐵、彌市)、松之助(八重梅)等。南北の作を殆ど創作的に改訂增補したものであつた。

◎十月(新富座)、紅葉狩。常磐津、竹本、長唄にて一場の所作。信州戸隱山の紅葉狩に餘五將軍平惟茂が從者運平と共に登り、更科姬に呼留められ、酒宴の間に眠りを催し、やがて山神の促すに目覺むれば姬の影はなく、惡鬼と姿を現じ躍りかゝらんとするより惟茂退治する。役者は團十郎(更科姬實は鬼女の精)、左團次(惟茂)、芝翫(山神)等。能に據つたもので新歌舞伎十八番の一つ。

□十一月(中村座)、因幡小僧雨夜噺。七幕十二場からなる世話物。盜賊の親分因幡小僧新助は忍びの術に長じて、神原家の寶刀菊一文字と金三百兩とを盜み出して逃げる。宿直の役の曾根繁之丞はこれが爲めに主家を放れ詮議に從事する。新助は八王子在なる伯勞初右衞門の妾おさよと馴染み江戸に來り、おさよは後初右衞門の爲めに身を賣る。寶刀は此時に曾根の手に入りて歸參が叶ふ。小間物屋の才治郎は神原家の奥女中小萩と駈落したが途中で捕はれ、才治郎は深き谷底に落ち蟒に呑まれ

る、やがて來り見れば小萩は殿の愛妾となりをるにより、恨みを述べての歸るさに殺害され、恨みの餘り亡靈となつて祟る。役者は菊五郎（新助、才治郎）、高砂屋福助（初右衛門、お民）、成駒屋福助（小萩）、家橘（曾根、神原）、松之助（おさよ）等。

七十三歳（明治二十一子年）。

○五月より歌舞伎新報社にて『河竹正本狂言畫』なる叢書を發行し默阿彌の作を出版す。四六版型の大さ、勘亭流の表紙にて、『大杯』、『加賀鳶』等數種續刊されたり。

△十二月、演藝矯風會發企され、千歲座に演習會を開く。

△此の年博士號下る。

□一月（市村座）、浮島ヶ原――會稽源氏雪白旗。二幕三場よりなる時代物。陸奥なる秀衡を頼りて在りし義經が賴朝兵を擧げしと聞き、先づ武藏坊等を連れて佐藤庄司の旅宿に到る。庄司基治は賴朝と合體は不得策なりと留めたが聞かず、繼信、忠信の二人を連れて關東へ志し、駿州浮島ヶ原にて對面する。賴朝大きに悦び、直に先手の大將を命ずるまで。役者は團十郎（佐藤庄司、賴朝）、福助（義經）、芝翫（辨慶、時政）等。

□四月（中村座）、醉月のお梅――月梅薫朧夜。六幕十三場からなる世話物。元宇田川屋の藝妓お梅が丹次郎に惚れてゐて逢引を繁くした爲め、丹次郎の身に迷惑を來し、女房お園の心中を察しやり池上の曙樓で緣を切り、金貸の九郎兵衛に身を任さうと決心する。斯くて白葉酒に景氣はつけてさ

うしたものゝ、其のまゝ家へ歸られもせず、箱廻しの巳之吉を呼出したところ、ふとした事から言ひ募り、見咎められた出双庖丁で突殺す。殺したあとでほつと眼が覺め、自首して出で無期徒刑に處せられる。役者は菊五郎(お梅、代言人大河)、福助(德兵衛、傳之助)、家橘(丹次郎)、松助(巳之吉)等。

□四月(同座)、妲妃の腹裂――化粧鏡寫俤。一幕二場の時代物。『お梅』の中幕であつた。殷の紂王が妲妃の勸めによりて亂行あるを憂ひ、諫言した杜元銑は手討にされ、その妻女は孕めるにより腹を割かんとする。これを西伯侯姫昌が留め、道師より奉つた照魔鏡に照し見れば、妲妃は九尾の狐なる事判然し退治する。役者は菊五郎(妲妃)、福助(妻柳條)、家橘(姫昌)等。

□九月(千歲座)、矢矧日吉月弓張。二幕三場からなる時代物。織田家に仕へてゐた木下藤吉郎時代の秀吉が京都三條橋畔に於て、夢に其の往昔蓮葉に逢ひ、岡崎の代官へ忍び入るの手引をせし事を見醒めてより安國寺に天下を掌握すると言はれて悦び、蓮葉與六へ加勢の軍を賴みに行きて其の承諾を得るまで。役者は團十郎(與六)、菊五郎(猿之助、藤吉郎)、左團次(安國寺)等。

□九月(同座)、油坊主のだんまり――油坊主闇夜墨染。一場のだんまり。祇園の社頭に夜な夜な現はるる怪しき僧形の者あるを、平忠盛討取らんとして來り、その油坊主と戰ひて討取る。役者は團十郎(油坊主實は甲賀三郎義澄)、菊五郎(平忠盛)、左團次(陸奥四郎爲義)等。

□十月（中村座）、淺間噴火——音聞淺間幻燈畫。五幕十場からなる世話物。赤坂田町の信濃屋善兵衛の娘お夏を、御家人上りで黑鍬組の丈五郎が望んでゐるに恐れをなし、道中師の初藏をたのんで信州小諸に送る途中、淺間山の噴火に遭ひ、初藏は娘の生死を知る事も叶はで江戸へ歸り、面目なさに切腹せんとするを、劍客の重內に助けられ、娘はかの丈五郎が助け出して連歸りをるを知つて貰ひに行き、嫁にくれるか聟に取るかの掛合の末、重內が丈五郎を切つて捨て娘をば無事に取戻す。役者は菊五郎（初藏、丈五郎）、團十郎（權八）、福助（重內）、松之助（お夏）等。

□十一月（市村座）、覺全と三吉——僞博多獨鈷菊菱。三幕五場からなる世話物。大名小畠主水が踊りの師匠小扇に思ひをかけ、妾にせんとするが應じない。といふのは鳶の者の三吉といふ油蟲があるからである。繼母のお爪が殿の御前で娘に異見してゐる所へ、三吉が來て悠々と連れて行く、家來の平馬は是非殿の願を叶へて差上げたいと、修驗者覺全の許へ來る。覺全は遊人の仲間の勘次を盜賊に仕立て、不動の金縛りをやつて見せて評判を取り、大繁昌をしてゐるので、平馬が百兩金を持つて賴みに來て、惡修驗者と知れ召捕りになる事。役者は菊五郎（三吉、覺全）、家橘（主水）、松助（勘次）等。

七十四歲（明治二十二丑年）。

△一月、俳優組合組織され、俳優の等級定まり、團、菊、左の三人取締りとなる。

——

○十一月二十五日、次女島歿す。

〈十一月二十一日、歌舞伎座開場。　　△憲法發布さる。
〈『柵草紙』發刊さる。

□三月（新富桐座）、憲法發布――朝日影三組杯觴。淸元、常磐津にて一場。憲法發布の祝典に際して車引の茶番やら、馬乘りの騷ぎやらで、賑やかに滑稽を盡して祝ふ。役者は團十郎（世話役堀越）、菊五郎（素人演說家寺島）、左團次（草苅藤五郎）等。

□十月（同座）、奉書試合――柳生荒木譽奉書。一幕二場の時代物。荒木又右衞門が柳生流指南の看板を掲げたのを見た但馬守がうさん者ではないかと呼びつけて確めて見れば、大恩ある正物の又右衞門なので、改めて厚く待遇すると言つたもの。役者は菊五郎（柳生）、左團次（又右衞門）、團十郎（唐犬權兵衞）等。

□自然居士（創作年月不詳）。淸元にて一場。陸奥の人買等三人して都の兒を奪ひ來り、近江國打出の濱に憩うて祝酒を汲交しゐる所へ、東山雲居寺の自然居士來り、兒を返し吳れよと言はれるに、三人の者共舞を所望する、卽ち居士一差舞ひ、人買共の醉倒れ、眠るに乘じて兒を連れて去る。上場もされなかつたのだから、役者の指定も記されてない。

七十五歲（明治二十三寅年）。

○四月、市村座に『一つ家』を書下せし際、スケ――默阿彌として名を列れしが、これ番附面へ載りし最後なり。

△國會開かる。

△五月、千歳座焼失。

△六月、春木座焼失。

◎三月(新富座)、柱建と濤龍館——一﨟職狩場棟上。清元、長唄にて二場。富士の巻狩の催しあるに就て狩屋の惣奉行祐經と、景時、朝比奈等が天地人を壽き、萬代祝うて柱建ての式を終り、河津の三郎を殺したのは股野なりとの物語と、大磯での戀物語があつて場が替り、大磯濤龍館となる。請負師の一老職須藤一郎が、父の受けし恨みを忘れぬ佐賀の十太郎、五郎次の兄弟等に對面し、共に杯を擧げる。世話で曾我の對面を利かせたもの。濤龍館の方をば『名大磯湯場對面』といふ名題にしてある。役者は芝翫(工藤、淺沼)、菊五郎(梶原、櫻川幸三)、左團次(朝比奈、須藤)、家橘(十太郎)、小團次(五郎次)等。

◎四月(市村座)、一ッ家。竹本にて二場。淺草一つ家の惡婆いばらが、泊りを求める旅人を石の枕に臥さしめて壓殺しにしてゐる中に、都育ちの兒が來る。これをも例のやうにと思つたところ、娘が見初めそつと逃してやる。老婆それと知つて娘を憎み殺さうとすると老婆の五體動かずなる。兒は觀世音の假に姿を現じたものであつた。やがて老婆を許したまへば改心し、後悔して池に跳り入る。——これをば船乘の佐渡七が觀音堂前に假睡した間に、夢見るといふ趣向であつた。役者は菊五郎(老婆いばら、佐渡七)、松助(掃除坊主雲念)、松之助(兒花若)、榮之助(娘淺茅)等。新古演劇

十種の內。

◎十月(歌舞伎座)、戻橋。常磐津にて二場、愛宕山の惡鬼が洛中を騷がすにより、賴光來つて警備に任ずる。或夜家來の渡邊綱使者の役にて、一條戻橋にさしかゝりて妖女に遭ひ、二條通りまで道連となり行き、綱見現はし退治せんとし、鬼女の爲めに中空まで引揚げられしも、髭切丸の威德を以て鬼の腕を切取る。役者は菊五郎(扇師の娘早百合實は惡鬼)、左團次(渡邊綱)等。好評を博した作で新古演劇十種の一。

七十六歲(明治二十四卯年)。

○四月、『千社札天狗古宮』を『歌舞伎新報』に掲載し、一幕半程にて完尾せずに終つた。

○九月、長女及び其水を伴ひ、箱根江の島方面へ旅行す。

△六月、歌舞伎座に福地櫻痴居士の『春日局』上場さる。

△六月、川上音次郎中村座に旗上興行をなす。

△『早稻田文學』發刊さる。

◎一月(歌舞伎座)、風船乘——風船乘評判高閣。常磐津、清元にて二場。英國人スペンサーが上野博物館前に於て、入場料を取つて輕氣球に乘つて飛揚し、根岸に降りる。次の場は淺草公園で、十二階で輕氣球を見物した者の輕氣球感想が取沙汰され、二の酉で熊手を擔いで來合せた、圓朝や福富治右衛門が踊りを踊る。役者は菊五郎(紙人形、スペンサー、圓朝)、芝翫(福富萬右衛門)、家橘(箱

屋吉藏)等。

◎五月(新富座)、愛宕館芝浦八景。常磐津、清元、竹本、長唄にて二場。愛宕山の愛宕館の開館式である。館前入口で新曲の芝浦八景を踊つたり、娘等八人が今光氏と噂される山崎の弟と一緒に踊りたがつて大騒ぎになる。次の場は龍宮で皆して浦島の故事を踊つてゐる、そこへ八大龍王が來て大和武尊と弟橘姫との故事を述べ、鎭護の祈りを上げる。役者は菊五郎、左團次、芝翫、家橘、小團次等。

□(十二月より翌年にかけて)安政奇聞佃夜嵐は、始め『新舞臺安政奇聞』として、守田勘彌、田村成義兩氏の發案に係り、默阿彌が其の全部に參與し、第四幕目の捕物の場を特に執筆せるもの。

七十七歳(明治二十五辰年)。

○四月より毎月一編宛の豫定にて『狂言百種』を春陽堂より發行。第一編は『村井長庵』なりき。八編十二種だけ出版されて中絕す。

○十一月、一つ橋なる官報局に於て局長の高橋健三氏及び坪内、饗庭氏等十數人の前に於て本讀みをする。物は『上總市兵衛』なりき。

□一月(歌舞伎座)、箱根山曾我初夢。一幕二場の時代物。輕井澤の女郎屋八幡屋に泊つた小平が、曾我の對面に因みのあるものが傍にあつたから、其の晩の夢に、——箱根權現に代參した工藤祐經が箱王丸と對面し、河津三郎を殺したのは俺ではない股野であると言つて短刀を土産に取らせた——

といふ對面を、初夢に見るといふ趣向。

◎一月(同座)、出初――楷子乘出初晴業。清元にて一場。鍛冶橋内に於て鳶の者の辰五郎始め皆々が出初をなし、楷子乘をば丑松と辰五郎がする。これに與吉と小榮との色事をちよつぴりそへてある。役者は菊五郎(辰五郎)。家橘(與吉)。松助(梅右衛門)、秀調(待合の女房)、榮三郎(藝妓小榮)、丑之助(丑松)等。

七十八歳(明治二十六巳年)。

○一月二十二日午後四時歿す。

△殆ど同時刻に鳥越座燒失す。

△四月、關根只誠氏歿す。

△北村透谷等の『文學界』創刊さる。

◎一月(歌舞伎座)、奴凧――奴凧廓春風。常磐津にて三場。大磯舞鶴屋の場では、正月の事とて曾我を取入れ、和田一族の催しで揚屋に大寄があるといふので、其の趣向を見に來た祐成が、虎少將に逢ふといふ件。八町堤奴凧の場は、舞鶴屋の息子小傳三と丁稚の三吉とが凧を揚げる所で、奴凧は廓の上をあちこち飛びながら踊る。兩國のももんじ屋鎌倉屋では、富士の卷狩の趣向に准へて、獵人の仁太郎が碓氷峠で生捕つた猪を擔いで來、暴れ出したのを取つて押へとどめをさすといふまで。役者は菊五郎(奴凧、獵人仁太郎)、家橘(祐成)、福助(虎少將)、猿之助(鎌倉屋の若い者狼の與藏)、菊之助(三吉)、榮三郎(藝妓おやま)、丑之助(小傳三)等。明治の初年に彥三郎、菊五郎、

榮三郎、米升、太郎等で富本の淨瑠璃に書いた、『奴凧』に據つた作であるが、殆ど面目を一新してゐる。これが絶筆であつた。

略年譜及著作解題（終り）

默阿彌脚本年表

此の年表は、大正八年十二月「演藝畫報」誌上に諸家の「默阿彌囘顧錄」が掲載された時、畏友渥美清太郎氏が編纂發表せられたるものである。前項の「著作解題」とは甚だ重複するの嫌ひはあるが、一方には補作、淨瑠璃其他の遺漏誤脫を補訂すべく、また他面、便利有意義なる一覽表と信じたので、今回同氏の快諾を得て、茲に輯錄した次第である。

年月	座名	名題	摘要	役者	備考（中評は特に記さず）
弘化二年七月	河原崎座	假名手本忠臣藏	宗十郎の爲めに牛之丞赤穗酒屋の場を書足す。（一幕）	澤村宗十郎、市川新車、嵐吉三郎等	牛之丞の女敵討の筋で、同じ趣向を後に「宇都谷峠」へも用ゐてある。
弘化四年一月	同座	飾駒曾我道双六	孫八切腹、神輿の胴六の世話場を一幕書足す。（一幕）	松本錦升、市川九藏、市川新車等	錦升の胴六が絲の下にゐて孫八の切腹をとめるセリフは江戸中大流行後にも二三度演じられた。（好評）
弘化四年五月	同座	福聚海駒量傳記	富士淺間の中へ筑波茂兵衛任俠の場を書足す。（一幕）	松本錦升、尾上榮三郎、市川九藏等	觀世音利生記をどうかしたやうなものである。再演無し。
同年同月	同座	時花雛淺草八景	左甚五郎と三社祭の所作事觀世音開帳の當込。常磐津。一幕	中村歌右衛門、尾上梅幸、松本錦升等	甚五郎の方は補作。三社祭はいろいろなものを添へて新作したもの。再演なし。
嘉永元年十一月	同座	東都內裏花良門	相馬良門の世界のだんまり。小團次と初めての顏合せ。（一幕）	市川團十郎、市川小團次、尾上菊次郎等	このとき初めて小團次と顏を合せたが、大したこともなかつた。再演無し。（好評）
嘉永三年三月	同座	難有御江戸景清	岩戸のだんまり。海老藏の歸京を日輪の再現に擬す（一幕）	市川海老藏、坂東彥三郎、市川九藏等	「琵琶の景清」へ連絡してゐる筋。近頃二三度再演された。
嘉永四年十一月	同座	舛鯉瀧白旗	閻魔小兵衛と若草伊之助、地獄極樂隣同士の世話物（二幕）	市川海老藏、市川團十郎、岩井粂三郎等	隣同士と美人局の趣向は「心謎解色絲」といふ舊作から借りたが、他はすべて新趣向。再演あり。（好評）
同年同月	同座	濡嬉浮寢鴫	清元淨瑠璃。右「瀧白旗」中、若草伊之助の道行である（一場）	市川團十郎、岩井粂三郎、河原崎長十郎等	曲節は今でも古い人は知つてゐる。當時は流行つたもの。
嘉永五年一月	同座	戀衣雁金染	團十郎の清玄を一番目に、二番目は雁金五人男を添へたもの。（三幕）	市川團十郎、市川海老藏、岩井粂三郎等	清玄の方は舊作を補綴し、雁金文七を結びつけたもの。再演なし。

年月	劇場	外題	内容	役者	備考
嘉永五年一月	河原崎座	闇梅夢手枕	右の狂言中、清玄の夢の場に使ふ清元淨瑠璃である。一場	市川團十郎、岩井粂三郎等	此の清元は當時大流行をして今でも殘つてゐる。再演あり。（好評）
同年月	同座	月柳廓髪梳	右「雁金染」中權六と岩崎の色模樣に使つた富本淨瑠璃。（一場）	同右	富本からたのまれて書いたもの。再演なし。
嘉永五年七月	同座	兒雷也豪傑譚話	美圖垣笑顏作の草双紙を脚色したもの。（五幕）	市川團十郎、嵐璃寬、岩井粂三郎等	兒雷也の生立から國分寺の山門までである。再演あり。（好評）
嘉永六年二月	同座	しらぬひ譚	種員の合卷を脚色したもの。（七幕）	坂東彥三郎、坂東しうか、嵐璃珏等	春之助の術ゆづりから、小島渦丸見現はしまで。再演度々あり。大好評
同年四月	同座	しらぬひ譚（後日）	前のが好評なので追かけて後日を脚色したのである。（八幕）	同右	玄海灘右衞門のダンマリから矢部河原の詰合まで。再演度々あり。大好評
同年月	同座	樹闇戀曲者	右「しらぬひ」中秋作と若菜姬の道行富本淨瑠璃。（二場）	同右	再演あり。（好評）
同年九月	同座	怪談木幡小平次	小平次といふ役者が惡漢と妻のために慘殺される狂言。（四幕）	同右	後の小團次の小平次よりも好評であつたもの。再演あり。（好評）
同年月	同座	亂菊枕慈童	右「小平次」中、序幕の夢に使つた長唄所作事。（一場）	嵐璃珏	素の長唄として曲は現存してゐる。再演あり。（好評）
安政元年三月	同座	都鳥廓白浪	忍の惣太の鳥目の忠義。松若の女姿等をからめたもの。（六幕）	市川小團次、坂東しうか、嵐璃寬等	「櫻々清水清玄」といふ狂言に大訂正を施したもの。再演度々あり。（好評）
同年八月	同座	吾孺下五十三驛	天一坊を怪鼠傳の世界に直して脚色し、外にいろ〳〵添へたもの。（七幕）	同右	天一坊のほかに三作の世話場猫の怪談夜啼石の幽靈など取入れ前後二回に分けてある。再演あり。（大好評）

同年同月	同座	桑名浦島浪乙姫（くはなうらなみのおとひめ）	右「五十三驛」中、駿河之助と高窓の夢の清元淨瑠璃（一場）	同右	再演なし。（好評）
安政二年五月	同座	兒雷也後編譚話（じらいやごにちものがたり）	大蛇丸の生立から、刀屋半七、農夫義助の件より、三すくみまで。（十幕）	河原崎權十郎、坂東竹三郎、嵐吉三郎等	八代目の俤を弟の權十郎で見せようとして失敗した。再演あり。（不評）
安政三年三月	市村座	夢結蝶鳥追（ゆめむすぶてふにとりおひ）	夏齋の講談を原におこよ源之丞、雪駄直し長五郎の一件を脚色。（四幕）	坂東龜藏、關三十郎、尾上菊五郎等	其外一番目には曾我へ同じ筋を絡ませ、猶淨瑠璃もあつた。再演あり。（好評）。
同年同月	同座	梅柳戀道連（うめやなぎこひのみちづれ）	おこよ源之丞、吾妻與五郎の道行に使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。歌曲廢滅。
同年同月	同座	えにしの橋（はし）	源之丞がおこよを見初める場に使つた長唄の獨吟もの。（一場）	同右	長唄に曲節は殘つてゐる。二世杵屋勝三郎の作曲。
同年同月	同座	うす氷（ごほり）	おこよ源之丞が色もやうの場へ使つた長唄獨吟。（一場）	同右	曲節は現存してゐる。同じく勝三郎の作曲。
同年五月	同座	梅雨濡仲町（さつきあめぬれたなかちやう）	美代吉殺しの講談を小さん金五郎の世界に直した世話物。（三幕）	同右	寛政度の狂言「初小袖血汐鮫鞘」に大分依つてゐるところがある。再演なし。
同年九月	同座	蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）	夏齋の講談に依つて作つた座頭文彌殺しの怪談。（五幕）	市川小團次、坂東龜藏、尾上菊五郎等	再演度々あり。（好評）
同年同月	同座	心中玉露白無垢（しんぢうつゆのしろむく）	右「宇都谷峠」中、古今彦三の道行に使つた富本淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。（好評）
同年十一月	同座	倡女誠長田忠孝（ちよろのまことをさだのちうかう）	その三立目「鞍馬山」のだんまりに書いた長唄物。（一場）	市川小團次、河原崎權十郎、尾上菊五郎。	二世勝三郎作曲として曲は長唄に現存し、再演も度々あつた。（好評）

同年同月	同座	松竹梅雪曙（しようちくばいゆきのあけぼの）	小團次に當はめて書おろしたお七である。（三幕）	同右	院本の「伊達娘戀緋鹿子」へ、在來の「其往昔戀江戸染」を混じたもの。再演あり。
同年同月	同座	封文戀書置（ふうじぶみこひのかきおき）	お七の道行に使つた富本淨瑠璃である。（一場）	同右	これも在來のお七の道行へ多少の筆意を加へたもの。
安政四年一月	同座	鼠小紋東君新形（ねずみこもんはるのしんがた）	鼠小僧次郎吉の傳記を講談に依つて脚色したもの。（五幕）	同右	此のほか上方狂言の「かりのたより」を鼠小僧に混じて添へてあつた。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	倖綠笑遠山（まねてみどりわらふとほやま）	鼠小僧の一場として、三番叟及上方俄を仕組し常磐津淨瑠璃。（一場）	同右	當時兩國の廣小路で興行してゐた茶番俄の當込みである。再演無し。（好評）
同年五月	同座	敵討噂古市（かたきうちうはさのふるいち）	講談の「夢と寐言の仇討」へお家騒動を添へたもの。（七幕）	同右	正直清兵衛と佐々木騒動のなひまぜである。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	時鳥酒杉本（ほとゝぎすさゝのすぎもと）	右「噂古市」中お梅粂之助色模樣へ使つた富本淨瑠璃。（一場）	同右	夕霧伊左衛門の人形を使ふ趣向、現今廢曲。（好評）
同年七月	同座	網模樣燈籠菊桐（あみもやうとうろのきくきり）	講談の「小猿七之助」へ同じく「玉菊燈籠」を添へたもの。（七幕）	同右	七之助の夢「矢剱橋」は後に獨立したものとなる。「玉菊」の中には松平外記一件が入る。再演あり。（大好評）
同年十月	同座	絲時雨越路一諷（いとしぐれこしぢのひとふし）	瞽女の小唄から取つた越後の大工殺しである。（二幕）	同右	一番目が先代萩であつたので、それに連絡するやう筋をつけてある。再演無し。（不評）
安政五年三月	同座	江戸櫻清水清玄（えどざくらきよみづせいげん）	講談の「花川戸助六」へ一番目として清玄を交へたもの。（四幕）	市川小團次、尾上菊五郎、關三十郎等	清玄は在來のを補綴し、巧みに新作と結びつけたもの。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	解帶綾瀨河（とけしおびあやせのかはみづ）	右「清水清玄」中、清玄の夢に使ふ富本淨瑠璃。（一場）	同右	清玄と櫻姫の色模樣である。廢曲。（好評）

年月	座	外題	内容	役者	備考
同年同月	同座	忍岡戀曲者（しのぶがをかこひはくせもの）	右「清水清玄」中白玉權九郎道行の吾妻路淨瑠璃。（一場）	同右	後清元常磐津等に變へられた事もあつたが現存してゐる。再演あり。（好評）
同年五月	同座	假名手本硯高島（かなでほんすゞりのたかしま）	種々な義士銘々傳の中へ、新作として赤垣の德利と、菅谷半之丞を入れたもの。（二幕）	同右	兩方とも講談から來てゐる。再演あり。（好評）
同年十月	同座	小春宴三組杯觴（こはるのえんみつぐみさかづき）	白石噺と比翼塚へ講談の「鉢の木」を組合せたもの。（二幕）	同右 市川海老藏	外に添へ幕として「忍び車」のだんまりと、「北條時賴記」から取つた肉附面がある。再演あり。（好評）
安政六年二月	同座	小袖曾我薊色縫（こそでそがあざみのいろぬひ）	鬼薊淸吉の巷談へ八重垣紋三の義談を混じたもの。（六幕）	市川小團次、關三十郎、岩井粂三郎等	當時あつた四千兩の御金藏破り事件を利かしたもの。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	梅柳中宵月（うめやなぎなかもよひづき）	右「薊色縫」中十六夜清心道行の清元淨瑠璃。（一場）	同右	清元中の名曲として、現に大流行を極めてゐる。（大好評）
同年同月	同座	蝶同翼輕業（てふこてふつばさのかるわざ）	當時流行した輕業を常磐津の所作にしたもの。（一幕）	同右	廢曲。再演なし。（好評）
同年四月	同座	牡丹記念海老胴（よろひぐさかたみのえびどう）	楠正儀の病氣が、杉本佐兵衞の忠死で癒える時代物（二幕）	同右	七代目海老藏の追善に演じた物、内容も名題も共意味に滿ちてゐる。（好評）
同年同月	同座	種々薩陲誓掛額（しゆじゆさつたちかひのかけがく）	一つ家、淡島、橋辨慶等淺草觀音の額を使つた吾妻路富本の踊。（一幕）	同右	廢曲。再演なし。
同年七月	同座	小幡怪異雨古沼（こはだくわいいあめふるぬま）	小幡小平次の怪談へお花半七の情話を挿入したもの。（六幕）	同右	再演あり。
同年同月	同座	由緣色萩紫（ゆかりのいろはぎのむらさき）	右「小平次」中お花半七邂逅の場に使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演は無いが、清元に曲は殘つてゐる。（好評）

同年九月	同座	日月星晝夜織分(にちげつせいちうやのおりわけ)	星が「夜這星」月が「神田祭」日が「入日の清盛」と組合せた清元常磐津竹本の所作。(一幕)	同右	日と月は在來のものへ筆を加へたのであるが、星は清元の節附が巧いので現存してゐる。(好評)
萬延元年一月	同座	三人吉三廓初買(さんにんきちさくるわのはつがひ)	八百屋お七の世界を借りて新作した盜賊因果譚と谷峨の傾城買二筋道との合併。(六幕)	同右	默阿彌會心の作ではあつたが、當時は役者の關係から、喝采は薄かつたのである。再演あり。
同年同月	同座	淨土双六振賽日(じやうどすごろくふるやさいにち)	右「三人吉三」中、和尚吉三が夢見る地獄の對面の常磐津淨瑠璃。(一場)	同右	これが覺めると小塚原で、和尚吉三と一重長兵衞のだんまりになる。再演あり。
同年同月	同座	夜鶴姿泡雪(よるのつるすがたのあわゆき)	右「三人吉三」中、文里が一重を訪れる場へ用ゐた花園淨瑠璃。(一場)	同右	花園の家には曲が殘つてゐる筈である。
同年同月	同座	初櫓噂高島(はつやぐらうはさのたかしま)	右「三人吉三」大切捕物の場へ使つた清元淨瑠璃。(一場)	同右	清元には今でも曲が殘つてゐるが、再演以後此の場は竹本である。
同年三月	同座	加賀見山再岩藤(かゞみやまごにちのいはふぢ)	南北の「骨よせ岩藤」へ、院本の又助切腹を取合せたお家狂言。(六幕)	同右	再演あり。
同年同月	同座	拙腕左彫物(およはねうでひだりのほりもの)	在來の左甚五郎を訂正して、鏡山へ結びつけた常磐津淨瑠璃。(一場)	同右	在來のお山人形よりも好評で以後是と定まつた、曲は現存、尚大切に「石橋」をつけてある。(好評)
同年五月	同座	戀闇忍常夏(こひのやみしのぶのとこなつ)	天下茶屋の中へ一幕加へた、伊織染の非色模樣の清元淨瑠璃。(一場)	同右	天下茶屋に色氣が無いので、一場の彩に挿入したのである。廢曲。再演なし。
同年七月	同座	八幡祭小望月賑(はちまんまつりよみやのにぎはひ)	在來の「切られ與三」へ、縮屋新助美代吉殺しを交へた世話狂言。(六幕)	同右	一月以來の不評を一時に取返した傑作である。再演あり。(大好評)
同年同月	同座	三五月須磨寫繪(つきすまのうつしゑ)	右「八幡祭」中祭禮の場へ使つた踊屋臺の清元淨瑠璃。(一場)	同右	松風村雨と槍持奴の踊りを屋臺に持込み出來た趣向。再演なし。(大好評)

年月	座	外題	内容	役者	備考
文久元年二月	同座	魁若木對面	三十三間堂通し矢の曾我對面の富本淨瑠璃。（一場）	中村芝翫、河原崎權十郎、市村羽左衛門	若手役者ばかり集まつたから、つけた名題である。廢曲。再演なし。（好評）
同年同月	同座	契戀春粟餅	在來の「粟餅」を補綴した常磐津淨瑠璃。（一場）	同右	當時の流行物と、深川の假宅を取合せたので好評。曲は現存。（好評）
同年同月	守田座	相生源氏高砂松	馬琴の「怪鼠傳」を櫻田治助と合作した時代物。（六幕）	市川小團次、尾上菊次郎、市川市藏等	默阿彌は「正忠演宅」と「重忠旅館」を書いたのであつたが、治助作の他幕を壓倒した。再演あり。（好評）
同年五月	市村座	轡音纏染分	上方狂言の「廻船話」と江戸狂言の「岩井歌」を合して由留木の世界にしたお家狂言（八幕）	中村芝翫、河原崎權十郎、澤村田之助等	補綴狂言ではあつたが、娘重の非嫉妬の場は純創作である。再演あり、
同年同月	同座	時鳥夏朧夜	右「纏染分」中いろは新助の道行に使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	廢曲。再演あり。
同年同月	同座	瀑布露玉川	六社祭に玉川の晒女と色法印を取合せた清元淨瑠璃。（一場）	同右	廢曲。再演なし。
同年同月		連獅子	花柳芳次郎名弘め浚ひのために作つてやつた長唄である。		二世杵屋勝三郎が作曲し、今も盛んに唄はれてゐる。（好評）
同年同月	守田座	龍三升高根雲霧	伯圓の講談「雲霧仁左衛門」を脚色した世話狂言。（七幕）	市川小團次、市川市藏、尾上菊次郎等	默阿彌はそのうち因果物師小兵衛の件を二幕書いたのである。その二幕だけは再演あり。
同年七月	市村座	東驛いろは日記	義士銘々傳を五十三驛に准へたお家狂言。京都より府中まで。（六幕）	中村芝翫、河原崎權十郎、澤村田之助等	府中から先の趣向もあつたが時間の都合でやらなかつた中には鎌腹の如き舊作もある、一部再演。（好評）
同年同月	同座	夢結露轉寢	右「いろは日記」中おりえ重太郎道行の花園淨璃瑠。（一場）	同右	飴うりの本町二丁目が入つてゐて有名なものであつたが現今廢曲。再演なし。（好評）

同年同月	同座	廓俄色實穐（さとのにはかいろのできあき）	「いろは日記」の大詰へ、二丁町の場として入れた吉原俄の清元淨瑠璃。（一場）	同右	桃太郎の昔話から、船頭の雀踊に變る踊。再演なし。（好評）
同年八月	守田座	櫻莊子後日文談（さくらさうしごにちぶんだん）	在來の「櫻草子」へ、光然祈りと入水たゞ加へたお家狂言。（八幕）	市川小團次、尾上菊次郎、中村鶴藏等	この內默阿彌は光然の件を一幕二場書いたのみである。再演あり。（好評）
文久二年三月	市村座	青砥稿花紅彩畫（あをとざうしはなのにしきゑ）	豐國の錦繪から思ひついた白浪五人男の世話狂言。（五幕）	中村芝翫、河原崎權十郎、市村羽左衞門等	辨天小僧が强請の件は羽左衞門に依つて有名になり、その件のみ再演多多あり。（大好評）
同年同月	同座	春宵色夕闇（はるのよひいろのゆふやみ）	右「青砥稿」中赤星十三變心の件へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。曲は廢滅。（好評）
同年八月	同座	月見曠名畫一軸（つきみのはれめいぐわのいちぢく）	在來の「血達磨」へ新たにお六と之助の因果譚を書込んだ世話物。（七幕）	同右	再演無し。
同年同月	同座	法四季紙家橘拙（のりのしきしかきつのふつつか）	市村竹之丞追善に出來た四季の所作事。富本、清元。（一幕六場）	同右	春は鞍馬山と鳥さし、夏は喜瀬川。秋は玉菊と願人のチョボクレ、冬は鴛鴦である。再演無し。
同年同月	守田座	勸善懲惡覗機關（くわんぜんちようあくのぞきからくり）	講談の「村井長庵」を脚色したもの。（九幕）	市川小團次、尾上菊次郎、市川市藏等	このうち櫻田治助が上ぎらおかんの件を一幕書いてゐるが長庵と連絡の筋が稀薄である。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	恨葛露濡衣（うらみくずつゆにぬれぎぬ）	右「覗機關」中、小夜衣千太郎の道行へ使つた岸澤淨瑠璃。（一場）	同右	素淨瑠璃としても大好評で、今に歡迎されてゐる。再演あり。（大好評）
同年十月	同座	神有月色世話事（かみありづきいろのせわごと）	出雲大社の緣結びと結びちがへた男女の道行の滑稽淨瑠璃清元、岸澤、竹本。（一幕）	同右	再演あり。（好評）
文久三年二月	市村座	蝶千鳥須磨組討（てふちどりすまのくみうち）	櫻田騷動を當込んだ雪の曾我對面。これが二番目の發端になる。（一場）	市川小團次、尾上菊次郎、市村家橘等	櫻田の當込みとわかつて後に禁止されたが、再演あり。（好評）

同年同月	同座	三題噺高座新作（さんだいはなしかうざのしんさく）	自作の三題噺を脚色した世話物の國性爺である。（四幕）	同右	右の「雪の對面」が藤次の夢で始まる。此の作では引幕を貰ふ。大切の虎狩は出幕にならなかつた。（好評）
同年同月	同座	梅八重色香深川（うめのやへいろかのふかがは）	右「三題噺」中幸次郎千山の色模様に使つた清元淨瑠璃（一場）	同右	現今廢曲。再演無し。
同年四月	同座	花卯木伊賀兩刀（はなうつぎいがのりやうたう）	在來の「伊賀越」の内、家橘のために新たに傘張武助の件を增補したもの。（八幕）	同右	このうち武助の件一幕を二場に潤色したのみである。再演あり。（好評）
同年同月	同座	戀計文珠智惠輪（こひのてくだもんじゆのちゑのわ）	江口の西行と、手品使ひを組合せた富本淨瑠璃。（一幕）	同右	現今廢曲。再演無し。（好評）
同年六月	同座	皿屋舖化粧姿視（さらやしきけしやうのすがたみ）	在來の狂言へ新たに三上の胴六を家橘のために書足したお家物。（四幕）	同右	このうち胴六の件りを一幕二場書足したのである。再演あり。（好評）
同年同月	同座	身辻占菊株（みのつじうらきくのひともと）	在來のテレメンへ清元の淨瑠璃だけ增補したもの。（一場）	同右	再演あり。（好評）
同年八月	同座	竹春比虎溪三笑（たけのはるこけいのさんせう）	名題は「薄雪」であるが、それへ膝栗毛の狐の件を交へたのである。（二幕）	同右	再演無し。
同年同月	同座	露尾花野邊濡事（つゆとおばなのべのぬれごと）	右「膝栗毛」中、彌次喜多が狐に化される所へ使つた清元の滑稽淨瑠璃。（一場）	同右	再演無し。廢曲。
同年同月	同座	玆江戸小腕達引（ここがえどこうでのたてひき）	講談の「腕の喜三郎」を脚色したもの。（三幕）	同右	純創作といつても差支へない。再演あり。（大好評）
同年十一月	同座	歳市廓討入（としのいちさとのうちいり）	歳の市を、義士の夜討によそへた滑稽淨瑠璃、富本。（一場）	同右	再演あり。（好評。）

元治元年二月	同座	曾我綉俠御所染（そがもやうたてしのごしよぞめ）	種彦の「面影草紙」によつたお家物時鳥と御所の五郎藏。（六幕）	市川小團次、市村家橘、關三十郎等	再演あり。（大好評）
同年同月	同座	柳風吹矢の糸條（やなぎにかぜふきやのいとすじ）	當時流行の吹矢の人形をいろ／＼に使つた滑稽淨るり。富本清元。（一場）	同右	再演あり。（好評）
同年七月	守田座	三保浦松月横櫛（みほのうらまつつきのよこぐし）	切られお富を澤村田之助に書卸したのである。（四幕）	中村芝翫、澤村田之助、市川九藏等	切られ與三郎を女で見せたのだが役名を借りただけで全然創作。（好評）
同年同月	同座	穐色於富與三郎（あきのいろおとみよさぶらう）	右「浮名横櫛」中お富與三郎道行の清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。廢曲。
同年八月	同座	一谷凱歌小謠曲（いちのたにがいかのこうたひ）	在來の「契情忠度」の後へ書足した鳥目の上使である。（一場）	市川小團次、尾上菊次郎、中村福助等	「いろは歌義臣鑒」といふ院本から趣向だけ借りたもの。再演あり。（好評）
同年同月	同座	淺縁義理柵（あさきえんぎりのしがらみ）	在來の南北作「玉屋新兵衞」小女郎緣切の件へ書足した富本淨瑠璃。（一場）	同右	曲は殘つてゐる。再演なし。
同年十月	守田座	双蝶色成曙（ふたつてふいろのできあき）	双蝶々の書かへの中へ、當時開帳のあつたお竹大日如來の件を書込んだ。（四幕）	中村芝翫、澤村田之助、關三十郎等	此うち默阿彌はお竹の件を一幕書いたのみ。再演あり、默阿彌は後に是だけを「身光於竹功」とつけた。（好評）
同年十一月	市村座	小春穩沖津白浪（こはるなぎおきつしらなみ）	日本駄右衞門小狐禮三の盗賊譚をかいたお家物。（五幕）	市川小團次、尾上菊次郎、市村家橘等	五幕以上に脚色してあつたが、時間の都合で出なかつた。再演あり。（好評）
同年同月	同座	其儘姿寫繪（そのまゝすがたのうつしゑ）	當時流行の寫し繪を所作事にした清元竹本淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。（好評）
慶應元年一月	同座	鶴千歳曾我門松（つるのちとせそがのかどまつ）	京傳の「醉菩提」ダ六を一番目野晒悟助を二番目にしたお家物。（五六幕）	坂東彦三郎、市村家橘、澤村訥升等	不破名古屋の方は大體原作通りだが野晒悟助は全然創作である。切に地獄太夫の問答がある。（好評）

同年同月	同座	一休地獄噺（いつきうぢごくばなし）	「曾我門松」の大切につけた地獄の遊女屋の滑稽上るり。富本清元岸澤。（一場）	同右	再演なし。
同年同月	中村座	鶴龜壽曾我島臺（ちよにんぜいそがのしまだい）	大阪狂言の「彌太郎」の中へ角屋の宗次の件を加筆。（七幕）	市川小團次、岩井粂若、坂東龜藏等	このうち角屋を一幕だけ書いたのである。役名を改めて再演されたことがある。
同年三月	守田座	魁駒松梅櫻曙微（いちはんのりめいきのさしもの）	櫻田作の「乗切講談」へ默阿彌は馬琴の「皿々郷談」を書加へた。（七幕）	中村芝翫、澤村田之助、關三十郎等	默阿彌はこのうち四幕十一場を書いた。のちに其の部分だけを「月缺皿戀路宵闇」と題して再演あり。（大好評）
同年四月	同座	十二段夢の浮橋（だんゆめのうきはし）	右の「紅皿缺皿」で缺皿が夢の矢矧の寮の清元淨瑠璃。（一場）	同右	のちに此の場だけ獨立した淨瑠璃として出したことがある。（好評）
同年五月	市村座	菖蒲太刀對俠客（しやうぶだちつゐのけうかく）	馬琴の「俠客傳」を脚色したもの。（七幕）	坂東彦三郎、市村家橘、尾上菊次郎等	再演無し。
同年同月	同座	忠臣藏形容畫合（ちうしんぐらすがたのゑあはせ）	七段返しの滑稽淨瑠璃である竹本清元常磐津岸澤。（一幕）	同右	滑稽淨瑠璃としては傑作である。再演あり。（好評）
同年同月	中村座	忠臣藏後日建前（ちうしんぐらごにちのたてまへ）	後日の忠臣藏女定九郎の娘のお市と狩人繁藏の復讐譚。（六幕）	市川小團次、河原崎權十郎、岩井粂若等	此中大抵は舊作で默阿彌は二幕だけ加筆したのである繁藏の件は上方狂言敵討浦朝霧より取る。再演あり。
同年八月	市村座	處女評判善惡鏡（むすめひやうばんぜんあくかゞみ）	雲霧五人女の白浪物語と、津山の孝女お淺の傳記。（五幕）	坂東彦三郎、市村家橘、中村鶴藏等	再演あり。（好評）
同年同月	同座	貸浴衣汗雷（かしゆかたあせになるかみ）	右「善惡鏡」中、素走りお熊が色仕掛の場へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	曲として傑作なので今でも大流行である。（大好評）
同年同月	守田座	怪談月笠森（くわいだんつきのかさもり）	笠森おせんと、同姉おきつの因果物がたりである（四幕）	中村芝翫、澤村田之助、市川九藏等	講談の「三人姉妹因果譚」に依つたもので此内櫻田治助は澁宇義兵衛切腹の件を作つてゐる再演あり。（好評）

同年同月	中村座	上總棉小紋單地	「市兵衞記」といふ寫本を元にして書いたもの。(六幕)	市川小團次、河原崎權十郎、市川左團次等	此の中に市兵衞の夢として俊寛の島物語を一幕添へてある。再演あり。(好評)
同年九月	市村座	蘆屋道滿大内鑑	「大内鑑」の中へ左近太郎の忠節と牧方見のだんまりを加へたもの。(五幕)	坂東彦三郎、尾上菊次郎、澤村訥升等	默阿彌の新作は此の中、一幕三場だけである。再演なし。新作だけが「左近太郎雪追兎」につけてある。
同年同月	同座	想入月弓張	右「大内鑑」中、楓といふ娘が若衆に假裝した寛王と道行の富本上るり。(一場)	同右	再演無し。
同年同月	同座	滑稽俄安宅新關	安宅の新關を、院本中の種々なる人物が通る滑稽淨瑠璃で富本清元竹本。(一場)	同右	滑稽淨瑠璃としては成功した作。再演あり。(好評)
同年十月	守田座	鵜飼石御法川船	日蓮記のうち勘作作家を新訂した岸澤竹本淨瑠璃。(一場)	中村芝翫、大谷友右衞門、市川九藏等	勘作住家へ東條左衞門が現はれて別箇の悲劇を見せてゐるが、是は「一世一代功力妙法字」といふ狂言から取つたもの。再演なし。
同年同月	同座	會式櫻花江戸講	右の「鵜飼石」の下として、會式參りの任侠男をそろへた清元淨るり。(一場)	同右	再演無し。
慶應二年二月	市村座	櫓太鼓鳴音吉原	明石仁王の角力の達引へ、薄雲の猫を加へた世話物(七幕)	坂東彦三郎、河原崎權十郎、市村家橘等	講談を原にした作。再演あり。(好評)
同年同月	同座	有姿夢湖水	右「櫓太鼓」中、二幕目へ添へた義仲巴の色もやうだんまりの富本淨瑠璃。(一幕)	同右	權十郎家橘喧嘩の和解を舞臺で行つたのである。再演無し。(好評)
同年同月	同座	鼠嘀色逢夜	右「櫓太鼓」中、深見十三實は鼠の精と、薄雲太夫色もやうの清元上るり。(一場)	同右	再演無し。
同年同月	守田座	富士三升扇曾我	曾我兄弟敷皮の難を救はるゝまでの一件。(六幕)	市川小團次、尾上菊次郎、關三十郎等	近江八幡石段のタテ朝比奈のダンマリなぞも入つてゐる。再演あり。(好評)

同年同月	同座	船打込橋間白浪	「敷皮」の二番目として書續けられた鑄掛松の狂言。（三幕）	同右	最初は「敷皮」と同じ名題の二番目になつてゐたが、後年默阿彌自身が新くつけたのである。小團次最後の狂言、再演あり。（大好評）
同年同月	同座	梅柳軒朧夜	右「鑄かけ松」中お組宗次郎心中の場の清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演無し。（好評）
同年五月	同座	新板む津の玉川	伊達の書かへで、默阿彌は世話場の政岡を書いた。（七幕）	同右	默阿彌の書いたのは一幕二場である上方狂言「けいせい睦玉川」の書かへにて再演無し。（不評）
同年八月	同座	孝悌譚六十餘集	飛驒の内匠の諸國物語。すべて國々にわたつた役名が集めてある。（五幕）	同右	小團次の追善狂言で、趣向は中々面白かつたが大不評であつた。二番目に「紀文」がついてゐる。再演あり。
同年同月	同座	長生殿枕の兼言	右「六十餘集」の中幕へつけた岸澤淨るりで、長壽の人ばかり集まる趣向。（一場）	同右	再演なし。
同年同月	同座	譽大盡金の豆蒔	右「六十餘集」二番目紀文遊興の場の清元淨瑠璃。（一場）	同右	脚色したばかりで上場せぬうち閉場したらしい。
慶應三年一月	市村座	契情曾我廓亀鑑	一番目を「お静禮三」二番目を「契情鏡山」それへ、藝者船頭の達入を交へたもの。（八幕）	市村家橘、澤村田之助、市川左團次等	義太夫の「小磯ヶ原」は此の一番目から取つたもの。二番目は昔の狂言の補作である。再演あり。（好評）
同年同月	同座	籔鶯畔別路	右「お静禮三」緣切の場へ使つた三游半七の餘所事淨瑠璃である。清元。（一場）	同右	再演あり。（好評）
同年同月	同座	質庫魂入替	馬琴の「質屋庫」から思ひついた魂入れかへの滑稽淨瑠璃。富本清元。（一場）	同右	再演あり。
同年五月	同座	善惡兩面兒手柏	柳枝の落語と燕林の講談に依つた「和尚の次郎」と「妲妃のお百」のなひ交。（七幕）	同右	再演あり。主人公のお百は田之助がつとめる筈であつたが、足の病氣で家橋が代つた。（好評）

年月	座	外題	内容	役者	備考
同年同月	同座	時鳥二世契	右「兒手柏」中日章とお花の道行へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	曲は現存してゐるが、再演無し。
同年七月	同座	新累女千種花嫁	馬琴の「解脱物語」から思ひついた怪談の世話物。（五幕）	同右	物はいゝのだが、人氣役者が少ないので不評に終つた。再演無し。
同年同月	同座	夢結露濡事	右の狂言中與右衛門と累の色模様の清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演無し。
同年同月	同座	謳同法燈籠	竹之丞追善淨るり、京都の盆踊、唐人飴屋、見物左衛門などが出る。富本清元長唄。（一場）	同右	再演無し。（好評）
同年同月	同座	登同色大山	右の下として作られた清元淨るり、江戸ッ子の大山參りである。（一場）	同右	再演無し。（好評）
同年八月	同座	稽古筆七いろは	銘々傳種々のうち「鳩の平右衛門」の件を脚色した。（五幕）	同右	默阿彌の新作は一幕二場であつたが同人作の赤垣までも此の時入つてゐた。再演あり。（好評）
同年十月	守田座	群清瀧贔屓勢力	講談「天保水滸傳」中、勢力富五郎の件である。（二幕）	中村芝翫、大谷友右衛門、中村仲藏等	再演あり。（好評）
明治元年三月	市村座	隅田川鶯音曾我	舊作の「忍の惣太」を一番目に中幕へは「お蔀の後日」二番目は新作「お若伊之助」である。	市村家橘、坂東三津五郎、市川左團次等	お若伊之助は「契情曾我」に入つてゐた、辰とお雪の後日を書いたものである。再演無し。
同年同月	同座	梅薫いろは田家	右狂言中、お靜の件へ使つた清元淨瑠璃。（二場）	同右	百人一首の人物が出て踊る。これがお靜の夢になる趣向。再演無し。
同年同月	守田座	染分千鳥江戸褄	契情重の非と與作の仇討物（二幕）	中村芝翫、澤村田之助、澤村訥升等	寛政度の「敵討染分襁」といふ脚本からヒントを得たらしいが、面目一新してゐる。（好評）

年月	座	外題	摘要	主なる役者	備考
同年同月	同座	田宇梅跡着重縫	右「契情重の井」中重の井與作の色模樣の清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。
同年五月	市村座	里見八犬傳	在來の「八犬傳」に新たに刀うりの件を增補。（三幕）	市村家橘、河原崎權十郎、大谷友右衞門等	道節刀うりの場を一幕二場だけ增補したのである。再演あり。（好評）
同年同月	守田座	田長鳥浮名仇夢	三角の切見世女郎、庫塚お松の情話を書いたもの。（一幕）	澤村田之助、澤村訥升、市川九藏等	再演なし。
同年同月	同座	二世契縁の短夜	右「浮名仇夢」中お松榮之丞色模樣の富本淨瑠璃。（一場）	同右	同右。
同年十月	市村座	其俤花鞘當	不破名古屋の鞘當を新たに淨瑠璃にしたもの。富本。（一場）	河原崎權十郎、尾上菊五郎、尾上菊次郎等	再演なし。
明治二年一月	守田座	當納芝福德曾我	種彥の「遠山鹿子」を脚色したもの。（四幕）	中村芝翫、澤村訥升、澤村田之助等	再演あり。
同年同月	同座	戀紀の路日高曙	安珍淸姬の增補である。（二幕）	同右	在來の「日高川入相花王」を增補して淨瑠璃に力を用ひたもの。再演あり。
同年同月	同座	花浪現在道成寺	右「淸姬」の中、道行へ使つた清元上るりである。（一場）	同右	再演あり。
同年二月	市村座	蝶三升扇加賀製	加賀騷動の書替にはなつてゐるが實は仙石騷動。（四幕）	河原崎權之助、大谷友右衞門、岩井紫若等	元治元年八月守田座の「四海大和望月駒」をソックリ持つてきたものである。
同年同月	同座	鶯地獄畫襖	右狂言中古寺のだんまりへ使つた清元淨瑠璃である。（一場）	同右	再演あり。

同年三月	守田座	好色芝紀島物語（かうしよくしきしまものがたり）	講談の「敷島物語」へ、水戸黄門記を入れたもの。（七幕）	中村芝翫、澤村訥升、澤村田之助等	このうち黄門記八幡藪の件一幕二場だけ櫻田治助が書足したもの。默阿彌は後に自作の分だけを「廓文庫敷島物語」と改めた。（好評）
同年同月	同座	櫻花雨契雲（ゆめみぐさあめとなるくも）	敷島の亡靈が、情夫重三郎のところへ現はれる場の淸元上るり。（一場）	同右	再演あり。
同年五月	市村座	名大星國字書筆（なにおほぼしかなかきふで）	討入後の大星の十八ヶ條と切腹を描き、これへ小山田庄三郎の變心をそへたもの（六幕）	河原崎權之助、大谷友右衞門、岩井紫若等	小山田の方は不評であつたが、十八ヶ條は好評で、後にまで演じられた。
同年同月	同座	袖浦泪濡事（そでがうらなみだのぬれごと）	右狂言中、小山田の姉が情婦お倉へ緣切をたのむ場の淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。
同年同月	同座	是評判伊吾同餅（これはひやうばんいごどうもち）	泉岳寺の開帳を當込んだ餅屋の滑稽上るり。常磐津淸元。（一場）	同右	再演なし。
同年七月	守田座	群入田鶴紅葉曙（なれいるたづもみぢのあけぼの）	田之助の病氣全快を當込んだ三勝半七の世話物。（一幕）	澤村田之助、市川左團次、中村仲藏等	再演なし。
同年七月	中村座	吉様參由緣音信（きちさままゐるゆかりのおとづれ）	講談の「小堀騷動」を脚色した八百屋お七の世話物。（五幕）	尾上菊五郎、坂東三津五郎、坂東龜藏等	再演あり。（好評）
同年八月	市村座	桃山譚（ももやまものがたり）	地震加藤の書卸してある。（一幕）	河原崎權之助、關三十郎、岩井紫若等	新歌舞伎十八番の中へ編入されてゐる。再演あり。（好評）
同年同月	同座	能中富淸御神樂（よいなかとみきよめのみかぐら）	天の岩戸。八幡の放生會。春日山の樂人等を取合せた富本淸元上るり。（一幕）	同右	再演あり。
同年同月	守田座	早晩稻守田當穐（わせおくてもりたのできあき）	妹脊山の二番目として、吉野山を世話物に書直したのである。（三幕）	大谷紫道、尾上菊次郎、澤村訥升等	啞同士の戀を描いたのが珍らしかつたが、中評。再演無し。

年月	座	外題	内容	俳優	備考
同年十月	中村座	相馬祭音幾久月（さうままつりおとにきくづき）	善知鳥安方の忠義と頁門の旗揚てある。（四幕）	尾上菊五郎、坂東三津五郎、坂東龜藏等	再演あり。在來の「忠義傳」を增補したものである。（好評）
同年十一月	市村座	花桅高祖御傳記（はなみちかうそごでんき）	日蓮記中、彌三郎の件、龍口の件、塚原の件を脚色したのである。（三幕）	河原崎權之助、中村芝翫、岩井紫若等	至極淋しいもので、中評ではあつたが物はいゝ。再演なし。
同年同月	守田座	三國三朝妙藥噺（さんごくさんてうめうやくばなし）	一名忘れ草。醫者が天竺から忘れ藥をもつて歸つて使ふ滑稽淨瑠璃。岸澤。（一幕）	澤村訥升、大谷紫道、市川左團次等	再演あり。（好評）
明治三年一月	同座	館扇曾我訥芝玉（ごしよあふぎそがつとしだま）	在來の太閤記のあとへ櫻田治助は大德寺を書き默阿彌は左馬之助の乘切を書たのである	澤村訥升、中村仲藏、岩井紫若等	默阿彌の書いたのは左馬之助の件一幕であつた。後に此の場だけを自身「義綺龍湖水乘切」と名けた。（好評）
同年二月	市村座	寶來曾我島物語（ほうらいそがしまものがたり）	桑名屋德藏の島物語と、生島新五郎の情話てある。（六幕）	河原崎權之助、尾上菊次郎、市川九藏等	默阿彌はこのうち、德藏の件り三幕四場だけを書いたのである。再演あり。（好評）
同年同月	同座	魁寫眞鏡俳優畫（さきがけてしやしんのやくしやゑ）	寫眞師九一のところへ種々の人物が寫しにくる滑稽上るり常磐津。（一場）	同右	早くも寫眞を淨瑠璃の種に使つたものである。再演無し。
同年三月	中村座	大和谷瀧音羽湯（やまとだにたきのおとはゆ）	鞍馬山に天狗の野宴と音羽湯に粂の仙人が三助になつてゐる滑稽上るり常磐津富本二場	尾上菊五郎、大谷廣次、坂東三津五郎等	當時の何かの當込みらし。
同年同月	同座	梅曆辰巳園（うめごよみたつみのその）	如皐と合作で、春水の「梅曆」を脚色した。（三幕）	同右	このうち默阿彌は序幕の丹次郎住居だけを作つた。此の場には哥澤を初めて使つた。再演無し。
同年同月	守田座	樟紀流花見幕張（くすのきりうはなみのまくはり）	慶安太平記の中、忠彌の召捕、膂田の召捕、金井の島目等を脚色したもの。（六幕）	中村芝翫、澤村訥升、市川左團次等	當時のことなので、また宇治常悅、鞠ヶ瀨秋夜、細川勝元等で演じてゐた。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	濡衫松藤浪（ぬれゆかたまつにふぢなみ）	右狂言中、有馬の湯治場て八右衞門小藤の色もやうに使つた哥澤。（一場）	同右	再演無し。（好評）

年月	劇場	外題	内容	主なる役者	備考
同年同月	同座	家櫻廓掛額	十八番をそつくり尾上家の式で行つた助六である。(一場)	尾上菊五郎、中村芝翫、岩井紫若等	世界は伊賀越であつたと云ふ。再演無し。
同年五月	市村座	眞田打絲綛	九度山村の幸村を脚色したものである。(一場)	河原崎權之助、市川九藏、尾上菊次郎等	準備なつて看板まで出ながら、何の都合からか遂に出演にならなかつた。
同年同月	守田座	時鳥水響音	自作の三題噺から取つた蜆の次郎吉の世話物である。(一幕)	尾上菊五郎、中村仲藏、澤村訥升等	最初は三幕位の豫定で書いたのだが時間の都合で序幕しか出なかつた。再演あり。(好評)
同年八月	中村座 市村座	昔熱田土佐畫姿	土佐畫風の俄の淨るりである富本常磐津。(一場)	中村芝翫、河原崎權之助、市川門之助等	忠臣藏の通しの中へ、一幕加へたもので、幕明に木國へ注進の筋がある再演無し。
同年同月	守田座	狹間軍記鳴海録	鳴海軍記のうち義元戰死、犬千代奮戰、郡宰内拷問等を書いたもの。(七幕)	中村芝翫、澤村訥升、尾上菊五郎等	足の無い田之助までが主要な人物に扮して活動してゐる。再演あり。(好評)
同年十一月	同座	鐘音雨古墳	岸澤上るりを使つて墓場に幽靈の現はれるだんまりといふ一種變つた物。(一場)	尾上菊五郎、澤村訥升、中村仲藏等	これは次の滑稽上るりへ筋のつながる趣向であつた。
同年同月	同座	縁結姿八景	一人娘に婿八人の滑稽上るり清元岸澤である。(一場)	同右	再演あり。
同年同月	中村座 市村座	男達六初雪	六人男が芝居前へ勢揃ひをする富本淨瑠璃。(一場)	河原崎權之助、中村芝翫、尾上菊五郎等	留女は足のない田之助が紀伊國屋お梅で現はれた。再演なし。
明治四年一月	守田座 市村座	後風土記魁升形	鳥居常右衞門の岩代川水潟りと、小宮内膳の一件とを組合せたもの。(三幕)	同右	一つの狂言を兩座に分けて演じた。權之助が駈持の都合からである。(好評)
同年同月	中村座	畫音音春錦	草摺引と、奴凧を組合せた所作。富本と長唄である(一幕)	坂東彦三郎、尾上菊五郎、中村壽三郎等	兩者とも從前の作を増補したものである。再演あり。

同年二月	市村座	廻車四季祝	斑女の狂亂と和しの車引と、石橋とを組合せた岸澤長唄もの。（一幕）	中村芝翫、澤村訥升、坂東三津五郎等	斑女の方は「角田川」として長唄に曲節が殘つてゐる、再演あり。
同年三月	中村座	壽名殘島臺	松竹梅を組み合せた富本竹本長唄の所作事である。（一幕）	坂東龜藏、坂東彦三郎、尾上菊五郎等	松は老松竹は狐と狩人梅は梅ヶ枝の組合せ。松は龜藏の一世一代引退を祝つたもの。再演無し
同年同月	守田座 市村座	狐靜化粧鏡	狐が靜御前に化けて義經の遺子を育てゝゐるといふ顏見世風の時代物。（一場）	澤村訥升、坂東家橘、市川左團次等	仔細あつて此のときは準備成つて上場しなかつたが、後に明治十二年になつて演ぜられた。再演あり。
同年同月	同座	名大津畫劇交張	大津繪の拔出て踊る清元岸澤の上るり。（一場）	同右	再演あり。
同年八月	守田座	出來穐月花雪聚	前の「眞田打」へ増補した眞田幸村の九度山村である。（四幕）	河原崎權之助、中村翫雀、市川左團次等	まだやかましい時分だつたので役名はすべて近江源氏の世界、幸村も高綱になつてゐる。再演あり。（好評）
同年十月	同座	四十七石忠箭計	討入當日を銘々傳に割あてた十二時の忠臣藏。（九幕）	同右	一日の狂言を十二時にわりあてたは近松の「會稽山」に習つたのである再演あり。（好評）
同年同月	同座	夢結戀山崎大和	右「忠箭計」中、平入郎の夢の場に楊貴妃の現はれる清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演無し。
明治五年一月	中村座	戀慕相撲春顏觸	力士淀川浪五郎と船頭鶴の長吉との達入世話物。（三幕）	中村芝翫、尾上菊五郎、坂東三津五郎等	文政度の「御攝曾我閏正月」を巧みに改作したものである。再演あり。
同年同月	守田座	猿若三鳥名歌閧	義經記のうち逆櫓論腰越狀吉野山に忠信の奮戰まで。（六幕）	河原崎權之助、中村翫雀、市川左團次等	腰越狀の場を新歌舞伎十八番の一に數へたこともあつた。再演あり。（好評）
同年同月	同座	調度亥子德淺草	忠信の塔を使つてすぐに淺草にかはる、義經記當こみの富本岸澤清元上るり。（一場）	同右	再演なし。

年月	劇場	名題	内容	俳優	備考
同年同月	村山座	國性爺姿寫眞鏡（こくせんやすがたのうつしゑ）	黒木屋彦惣がロンドンへ行つて妻に逢ふといふ新らしい世話物。（一幕）	澤村田之助、澤村訥升、坂東彦三郎等	田之助が病氣で引退の披露に作つたのである。再演無し。
同年三月	中村座	花雲命捨鐘（はなのくもいのちのすてがね）	助六の狂言の中へ、特に此時挾んだ哥澤上るり。（一場）	尾上菊五郎、坂東三津五郎、中村仲太郎等	再演無し。
同年五月	中村座	浮廓心善惡（うかれくるわこゝろのぜんあく）	善玉惡玉の所作事。常磐津清元竹本。（一場）	尾上菊五郎、中村芝翫、坂東三津五郎等	再演無し。
同年七月	村山座	浪花潟入江大鹽（なにはがたいりえのおほしほ）	大鹽平八郎の謀叛に筆屋作次郎の義死をそへたもの。（六幕）	坂東彦三郎、澤村訥升、市川門之助等	再演あり。
同年十月	同座	流行玉兎合（りうかううさぎあはせ）	當時東京で兎を飼ふことが流行したのを當込んだ清元長唄の所作事。（一幕）	同右	再演あり。
同年同月	守田座	三國無双瓢軍扇（さんごくぶさうひさごのぐんばい）	太閤記を、内藏之助の堅田落から、大徳寺燒香までを脚色した時代物。（三幕）	河原崎權之助、市川左團次、中村翫雀等	再演あり。
同年同月	同座	月宴升毬栗（つきのえんますのいがぐり）	ざんぎりお富に坊主與三の白浪世話物。（三幕）	同右	再演あり。散髪になり始めの時代を當込んだもの。
同年同月	同座	黄色露濡衣（いになろつゆにぬれぎぬ）	ざんぎりお富へ使つた哥澤上るり。（一場）	同右	再演なし。
同年同月	同座	身曇晴秋風（みのうきぐもはれてあきかぜ）	ざんぎりお富の大切に使つた常磐津清元岸澤上るり。一場	同右	再演なし。
明治六年二月	同座	新年對面杯（しんねんたいめんのさかづき）	曾我の對面へ新たに岸澤を使つた淨瑠璃もの。（一場）	坂東彦三郎、中村芝翫、澤村訥升等	再演なし。

年月	座	名題	内容	主なる役者	備考
同年三月	村山座	太鼓音智勇三略(たいこのおとちゆうのさんりやく)	後風土記のうち酒井の太鼓を中心に、鳥居鳴瀨の爭ひをかいたもの。(四幕)	河原崎權之助、尾上菊五郎、中村時藏等	三幕目に「一谷凱歌小謠曲」の世界をかへた鳥眼の上使が入つてゐた。再演あり。(大好評)
同年同月	同座	身辻占聞鶯(みのつじうらきくやうぐひす)	在來の「鬼神のお松」の中へ新たに挿入した淸元の所作事淨瑠璃。(一場)	同右	再演無し。
同年四月	守田座	關東銘物男達鑑(かんとうのめいぶつをとこだてかゞみ)	「櫓太鼓鳴音吉原」を增補し、二番目へ「子持高尾」を足したもの。(六幕)	坂東彥三郞、中村芝翫、澤村訥升等	二番目の子持高尾は、後に別に「廓費着紅葉裲襠」といふ名題をつけた。再演あり。(好評)
同年同月	同座	花雪積繰言(はなのゆきつもるくりごと)	子持高尾の大切吉之丞と高尾の道行淸元淨瑠璃。(一場)	同右	再演あり。
同年同月	中村座	梅柳櫻幸染(うめやなぎさくらのかつぞめ)	「加賀見山再岩藤」へ奥方の雪責を增補し、一二三場割を取かへたもの。(六幕)	尾上菊五郎、澤村訥升、岩井半四郞等	奥方の雪責は振附から役者になつた瀨川路之丞のために書いたのである。再演あり。
同年五月	村山座	梅濵花眞田軍配(うめのたにはなのさなだのぐんばい)	大阪軍記の脚色。實名を使つたのは是が初めて。(五幕)	河原崎權之助、尾上菊五郎、關三十郞等	且元重成の今福堤の別れから、幸村の入城、薄田隼人が家康を討損じるまで。再演無し。
同年同月	同座	御伽草紙百物語(おとぎざうしひやくものがたり)	「善惡兩面兒手柏」から和尙次郞の件をぬき、多少訂正を施したもの。(三幕)	河原崎權之助、坂東三津五郞、中村時藏等	再演あり。
同年同月	中村座	梅雨小袖昔八丈(つゆこそでむかしはちぢやう)	髮ゆひ新三と白子屋おくまの一件を脚色したもの。(四幕)	尾上菊五郞、岩井半四郞、中村仲藏等	柳枝の人情噺を脚色し、大岡裁判の結着まである。再演あり。(大好評)
同年六月	守田座	隅田河乘切講談(すみだがはのりきりかうだん)	「鶴駒松梅櫻曙微」の中から、佐野の件を抄して阿部豐後守に直したもの。(五幕)	中村芝翫、坂東彥三郞、市川左團次等	二番目には「紅皿缺皿」が同じ名題の下に添へてあつた。再演あり。(不評)
同年九月	村山座	增補桃山譚(ぞうほももやまものがたり)	前の「桃山譚」にだんまりと秀次の亂行を加へたもの。(三幕)	河原崎三升、中村宗十郞、市川門之助等	再演あり。(好評)

同年同月	同座	花楓法音樂（はなもみぢのりのおんがく）	十郎の狂亂と、雷神の由來と、三人上戸の餅搗とを合せた富本清元竹本淨瑠璃。（一幕）	同右	再演無し。
同年十月	中村座	艶山錦木下（いろますやまにしきのこのした）	太閤記のうち、竹中問答を脚色したもの。（二幕）	中村芝翫、河原崎三升、中村仲藏等	再演無し。
同年十一月	守田座	音駒山守護源氏（おとこやまもりたてげんじ）	繼信の忠死と、景清の大佛供養を組合せたもの。（五幕）	中村芝翫、坂東彦三郎、坂東秀調等	西澤一鳳の作物からヒントを得て書いたものである。再演あり。
同年同月	同座	東京日新聞（とうきやうにち／＼しんぶん）	鳥越甚內といふ浪人を書いた散髮劇の最初の作。（三幕）	同右	最初の散髮劇としては中評であつたが、趣向は中々新らしい。再演あり。
同年同月	同座	濡露花袖褄（ぬれつゆはなのそでづま）	右「日新聞」へ使つた門三郎淺茅道行の清元淨るり。（一場）	同右	再演あり。
同年同月	村山座	忠臣いろは實記（ちうしんいろはじつき）	銘々傳のうち義平拷問、山科閑居、島原遊興、淸水一角等を取合せたもの。（五幕）	河原崎三升、尾上菊五郎、中村宗十郎等	義平拷問は在來の作で、默阿彌は島原と閑居と一角の泥醉を書いた。再演あり。（好評）
明治七年三月	同座	蝶千鳥曾我實傳（てふちどりそがのじつでん）	禪司坊の自殺から曾我の從送り、夜討本望まで。（五幕）	同右	再演あり。禪司坊の切腹は勝諺藏がとつて自作の同名題に用ひた。
同年同月	同座	眞似三升劇番組（まねてみますかぶきのばんぐみ）	望月、うつぼ猿、釣堀等を組合せた富本清元竹本長唄の所作事。（一幕）	同右	再演あり。
同年七月	守田座	里見八犬士勇傳（さとみはつけんしゆうでん）	芳流閣から荒芽山まで。此のとき荒芽山の場が出來たのである。（三幕）	中村芝翫、坂東彦三郎、尾上菊五郎等	このときの荒芽山と、以前の刀賣とを合せて、作者は「荒芽山梅花八房」と名けてゐる。再演あり。
同年同月	同座	繰返開花婦美月（くりかへすかいくわのふみづき）	赤米仙右衞門と天鼓羅銀次の散髮劇である。（三幕）	同右	當時の新らしい物と云ふものを遺憾なく取入れてあるのは驚く位である。再演あり。

年月	劇場	名題	梗概	主なる役者	備考
同年同月	河原崎座	新舞臺巖楠（しんぶたいいはほのくすのき）	兒島高德と、正成櫻井驛の別れまでを書いたもの。（七幕）	市川團十郎、市川左團次、澤村訥升	再演なし。（不評）
同年十月	同座	雲上野三衣策前（くものうへのさんえのさくまへ）	河内山宗俊が松江のゆすりとくらやみ丑松の惡事。（四幕）	同右	伯圓の講談にもとづいて脚色したものである。再演あり。（好評）
同年同月	同座	日高川紀國名所（ひだかがはきのくにめいしよ）	「戀紀の路日高曙」の内淨瑠璃の件を書直したもの。（三幕）	同右	前には田之助の足が使へないので加減して書いたが今度は訥升なので淨瑠璃の場なぞ十分書いた。再演あり。
同年同月	守田座	宇都宮紅葉釣衾（うつのみやもみぢのつりよぎ）	宇都宮釣天井の一件を講談に依つて脚色したもの。（六幕）	坂東彦三郎、尾上菊五郎、市川左團次等	菊五郎が宇都宮の遭難事件を當込んであるさうだ。再演あり。
明治八年一月	新富座	扇音々大岡政談（あふぎびやうしおほをかせいだん）	講談に依り新たに脚色したものである。（八幕）	同右	講談を放れて脚色した場に好い所があつた。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	梅鐮田大力巷談（うめがかまただいりきはなし）	大力の道中師鐮田又八の復讐譚。（三幕）	同右	時間の都合で全部出なかつたといふ、再演あり。
同年三月	同座	日待遊月夜芝居（ひまちあそびつきのよしばゐ）	田舍芝居の滑稽淨るりで、清本と竹本を行ふ。（一場）	同右	此のときの一番目が菅原と忠臣藏だつたので、此の芝居でもそれをやる筋である。再演あり。（好評）
同年五月	河原崎座	花見時由井幕張（はなみどきゆゐのまくはり）	金井と丸橋の一件だけ殘してあとは全部書改めた慶安太平記。（五幕）	市川團十郎、市川左團次、市川權十郎等	一番目を正雪親子別れまで。二番目を丸橋にした。再演あり。（好評）
同年同月	同座	吉備大臣支那譚（きびだいじんしなものがたり）	吉備公が野馬臺詩の一件を脚色したもの。（一幕）	同右	大久保公が當時支那へ談判に行つたのを當込んだもの。新歌舞伎十八番の一つ。（再演あり。好評）
同年同月	同座	意中闇照瓦斯燈（こゝろのやみてらすがすとう）	士農工の貧乏人を商人が助けるといふ常磐津もの。（一場）	同右	そろ／＼流行り出した瓦斯燈を道具に使つてある。再演あり。

同年六月	新富座	明治年間東日記（めいぢねんかんあづまにつき）	彰義隊の函館脱走等明治の巷談を脚色した散髪物。（八幕）	坂東彦三郎、中村芝翫、中村鴈雀	一幕を一年にして、序幕の元年から大詰の八年までに到つたのが面白い。再演無し。
同年八月	中村座	裏表柳團畫（うらおもてやなぎのうちはゑ）	柳澤騷動を脚色したお家物。際どい所は世話物に直してある。（八幕）	市川團十郎、市川權十郎、岩井半四郎等	講談に據つたもの。再演あり。（好評）
同年同月	同座	夢結朝妻船（ゆめむすぶあさづまぶね）	右「柳澤騷動」中、朝妻船に使つた清元淨るり。（一場）	同右	この場が出羽屋忠五郎の夢になる趣向。再演あり。
同年十月	新富座	筑紫巷談浪白縫（つくしかうだんなみのしらぬひ）	白縫譚の役名を使つて脚色した黑田騷動である。（六幕）	坂東彦三郎、中村芝翫、尾上菊五郎等	紅葉の間の闇仕合が特に好評であつた。再演あり。
同年十一月	同座	初深雪佐野鉢木（はつみゆきさののはちのき）	「小春宴三組杯觴」の前へ青砥藤綱の一幕を增補した。（三幕）	同右	再演あり。
明治九年一月	同座	善惡兩輪妙車（ぜんあくりやうわのをぐるま）	種員の合卷を脚色したもの。（七幕）	同右	面白く出來てはゐたが當時の人氣に適さなかつたらしい。再演あり。（不評）
同年三月	同座	川中島東都錦繪（かはなかじまあづまのにしきゑ）	甲陽軍記の鬼小島樂岩寺駒澤七郎の件。（五幕）	同右	當時流行した武者繪から思ひついたものである。再演あり。（好評）
同年四月	中村座	鎌倉山春朝比奈（かまくらやまはるのあさひな）	顯晦錄に依て朝比奈と局松島の件を脚色したもの。（四幕）	市川團十郎、岩井半四郎、中村仲藏等	再演あり。
同年同月	同座	僞織大和錦（まがひおりやまとにしき）	劍客神谷要十郎と女房お峯。くらやみ丑藏のゆすり。（三幕）	同右	朝比奈の二番目へ直ぐつけたので、別に名題は無かつたが、後年默阿彌が斯う名けた。再演あり。
同年五月	同座	牡丹平家譚（なとりぐさへいけものがたり）	平家物語のうち、鹿ケ谷會合から重盛諫言まで。（三幕）	同右	重盛諫言は新歌舞伎十八番の一である。再演あり。（好評）

年月	劇場	名題	梗概	主なる俳優	備考
同年六月	新富座	早苗鳥伊達聞書（ほとゝぎすだてのきゝがき）	伊達騒動の實錄を、各役者に一々見せ場があるやうに通して仕組んだもの。（六幕）	坂東彦三郎、中村芝翫、尾上菊五郎等	講談に據つたもの。再演あり。（好評）
同年同月	同座	三社祭禮巴提灯（さんじやまつりともゑのちやうちん）	巴御前の勇戰と、淺草の入人藝を組合せた常磐津富本淨るり。（一幕）	同右	再演無し。
同年九月	同座	音響千成瓢（おとにひゞくせんなりひさご）	「三國無双瓢軍扇」（明智城渡し光秀切腹を添へたもの。（五幕）	坂東彦三郎、市川團十郎、市川左團次等	再演あり。（好評）
同年同月	同座	出世娘瓢簪（しゆつせむすめひさごのかんざし）	太閤記を世話に直し、木下を藝者秀吉にした趣向。（三幕）	澤村訥升、市川左團次、坂東彦三郎等	春水の人情本から脚色したものである。再演あり。
同年同月	同座	紫野邊一本（ゆかりのいろのべのひともと）	右「娘太閤記」中秀吉と又三郎色合清元淨るり。（一場）	同右	再演無し。
同年十一月	同座	天草日誌劇新聞（あまくさにつしかぶきのしんぶん）	天草騒動を一日の通し狂言に脚色したもの。（六幕）	同右	此の狂言で芝居は類焼に逢つた。再演無し。（好評）
明治十年四月	同座	新舞臺恩恵景清（しんぶたいめぐみのかげきよ）	日向島景清の前へつけただんまりの場である。（一場）	尾上菊五郎、中村芝翫、中村宗十郎等	再演無し。
同年同月	同座	富士額男女繁山（ふじびたひつくばのしげやま）	女書生妻木繁が親の仇を討つ散髪世話物。（四幕）	同右	當時噂にあつた男装の女のことを種にしたもの。再演あり。（好評）
同年同月	同座	夕立碑春電（ゆふだちつかはるのいなづま）	右狂言中、繁が仇を討つ向島の場へ、使つた清元淨るり。（一場）	同右	曲節は現存してゐる。再演あり。
同年六月	同座	勸善懲惡孝子譽（くわんぜんてうあくかうしのほまれ）	親の罪なきて懲役にゆく孝子善吉と、半七お梅の情話を交たもの。（五幕）	同右	作者が當時横濱で見た一小事を種に作つたのだといふ。再演あり。（好評）

年月	座	名題	内容	俳優	備考
同年同月	同座	夢見草葉蔭一聲（ゆめみぐさはかげのひとこゑ）	半七が夢の高尾十三絃切の場へ使つた清元浄瑠璃。（一場）	同右	曲節は現存す。
同年同月	同座	千種花月氷（ちぐさのはなつきのこほり）	氷屋の店先で替屋と權妻色もやうの清元浄るり。（一場）	同右	當時流行の氷屋を道具に使つたもの再演なし。
同年十二月	同座	黄門記童幼講釋（くわうもんきをさながうしやく）	犬公方、紋太夫手討、石見守刃傷、安宅丸等を巧に鹽梅したもの。（七幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	講談に依つたもの刃傷の件は堀田家から故障が出て除かる。再演あり。（好評）
同年同月	同座	街明治世賑（ちまたあかるきぢせいのにぎはひ）	博覧會の開かれた祝ひの所作事。長唄。（一場）	同右	再演なし。
明治十一年一月	同座	兒模様曾我館染（ちごもやうそがのごしよぞめ）	敷皮曾我と黄門記の中へ挾んだ西南戰爭のだんまり。（一場）	同右	再演なし。
同年三月	同座	西南雲晴朝東風（おきげのくもはらふあさごち）	西南戰爭をしくんだ通し狂言隆盛出陣まで。（七幕）	同右	再演あり。（大好評）
同年同月	同座	是珍聞猫根津美（これはちんぶんねこのねずみ）	根津の大八幡の小町花魁を張にくる八人客の滑稽浄るり。常磐津。（一幕）	同右	當時の根津の流行を當込んだもの。再演なし。
同年六月	同座	松榮千代田神德（まつのさかえちよだのしんとく）	後風土記を家康中心に、大垣兵粮入から秀吉謁見までを仕組む。（八幕）	同右	新富座新築開場式の狂言。再演あり。（好評）
同年同月	同座	牡丹蝶扇彩（ぼたんにてふあふぎのいろどり）	石橋と元祿踊を組合せた長唄所作事。（二場）	同右	上は「花見踊」下は「新石橋」として共に曲は現存。再演あり。
同年七月	都座	縱横濱孝子新織（たてよこはまかうしのしんおり）	岩龜樓龜遊の貞死一件と妻木市之丞の仇討を仕組む。（四幕）	片岡我童、市川權十郎、澤村百之助等	最初は坂下事件と組合せて通しにする筈であつたが都合で龜遊の件だけになつた。坂下事件の方は後に三世新七が書直して出した。再演あり。

年月	座	名題	内容	主なる俳優	備考
同年九月	同座	花紅葉根津神籬（はなもみぢねづのかみがき）	根津右衛門の忠死と、百姓新助の實意談を交へたもの。（四幕）	同右	講談に依つたもの。再演あり。
同年同月	市村座	二蓋笠江島參詣（にかいがさえのしままうで）	柳生とお夏清十郎を組合せたものである。（七幕）	同右	このうち默阿彌は柳生家督定めの件一幕三場を助筆したのみ。再演無し。
同年十月	新富座	日月星享和政談（じつげつせいきやうわせいだん）	延命院日當一件と盜賊曉星右衛門の一件。（七幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	日當、星右衛門、月見の文次を組合せた名題。再演あり。（好評）
同年同月	同座	女夫同士意裏表（めをとどうしこころのうらうへ）	右「日月星」中、お竹常三郎、おさき馬吉二組の道行に使つた清元。（一場）	同前	再演無し。
同年同月	同座	二張弓千種重籐（にちやうゆみちぐさのしげどう）	實盛首實檢重能苦忠の時代物。（一幕）	同右	此の狂言にて初めて「活歴」といふ熟語が出來た。再演あり。
同年同月	都座	義重忠士礎（ぎはおもしちうしのいしずゑ）	秩父重忠戰死の件を脚色したもの。（二幕）	片岡我童、片岡我當、市川新十郎等	再演あり。
同年十一月	市村座	全盛遊黄金豆蒔（ぜんせいあそびこがねのまめまき）	「紀文大盡錦入船」の大切、紀文道具の常磐津淨るり。（一場）	市川權十郎、中村時藏、市村家橘等	再演無し。
同年同月	同座	東花一座顔見世（あづまのはないちざのかほみせ）	江戸の二番、京の早乙女連、大阪の手打連で三都の顔見世を見せた常磐津淨るり。（二場）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	再演無し。
明治二十二年二月	市村座	正擢妻梅柳新聞（ふたりづまばいりうしんぶん）	娼妓小松の貞節と、零落士族が壹みをなする筋。（三幕）	市川權十郎、河原崎國太郎、市川女寅等	殆んど默阿彌の女弟子が筆になつたものだといふ。再演あり。
同年同月	同座	墨川流清元（すみだがはながれのきよもと）	右狂言中、向島柏屋の場へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	同右

年月	劇場	外題	梗概	主要役者	備考
同年同月	新富座	赤松滿祐梅白旗（あかまつまんいうらめのしらはた）	滿祐の謀叛と楠正光の刺客一件とを混じたもの。（七幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	いざ上場となると役者や時間の都合で三幕六場に減つてしまつた。再演無し。（不評）
同年同月	同座	人間萬事金世中（にんげんばんじかねのよのなか）	西洋種の喜劇で、惠府林之助の出世譚である。（二幕）	同右	リツトンの小說の梗概を櫻痴居士から聞いて、立案したものである。再演あり。
同年同月	同座	魁花春色音黃鳥（かいくわのはるいろねのうぐひす）	向島の梅屋敷で姿のセリ市があるといふ常磐津清元の滑稽淨るり。（一場）	同右	再演無し。
同年五月	同座	綴合阿傳假名書（とぢあはせおでんのかなぶみ）	高橋お傳毒婦傳を書いた際物。（六幕）	同右	當時死刑があつたので直ぐに脚色した世話物である。
同年同月	同座	花洛中山城名所（はなのみやこやましろめいしよ）	中山大納言が並木守と殿中での大問答を描いたもの。（二幕）	同右	再演無し。
同年七月	猿若座	昔噺額面戲（むかしばなしがくのたはむれ）	淺草觀音の額堂の畫が拔出すといふ常磐津の滑稽淨るり。（一場）	岩井半四郎、片岡我童、片岡市藏等	上の卷には「雪の常磐」で此の淨るりが次についたのである。再演なし。
同年同月	新富座	後三年奥州軍記（ごさんねんおうしうぐんき）	八幡太郎義家が虚病を借りて鳥羽に注意し、のち出陣するまで。（一幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	米國のグランド將軍招待につき特に執筆したので、彼の立志傳から案じたもの。再演なし。（不評）
同年九月	同座	漂流奇談西洋劇（へうりうきだんせいやうかぶき）	清水三保藏といふ船頭が難船から外國へわたり、諸國を旅行する筋。（四幕）	市川團十郎、中村宗十郎、岩井半四郎等	舞臺は全部外國で、巴里劇場の場には外人を雇つて芝居を演じさせる破天荒の試みであつたが、尚早にすぎて失敗した。再演なし。（不評）
同年十月	同座	鏡山錦楓葉（かゞみやまにしきのもみぢば）	加賀騷動の通し狂言、小田大炊が中心に大槻立身より牢獄まで。（九幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	講談から取つたもの。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	中宵宮五人侠客（なかよひみやごにんをとこ）	湯島の祭禮に五人男の勢揃ひのある清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。鏡山の大詰が居所替りで此の淨瑠璃に變つた。

年月	劇場	外題	内容	主なる役者	備考
明治十一年三月	同座	滑稽膝栗毛	膝栗毛のうち、甲州街道に彌次喜多が役者と間違へられる件。中に常磐津もある。（一幕）	同右	再演あり。
同年三月	同座	日本晴伊賀報讐	伊賀越仇討を新たに書直したもので、夢の市藏が中心になつてゐる。（八幕）	同右	市藏毒死の件は、池田侯毒死の傳説を、世話物に引直したのである。再演あり。（大好評）
同年五月	猿若座	有松染相撲浴衣	有馬の猫騷動に、雷電小野川力士の達引を絡めたもの（八幕）	片岡我童、岩井半四郎、中村宗十郎等	講談に據つたもの。再演あり。（好評）
同年六月	新富座	星月夜見聞實記	泉の親衛が義時誅伐の手筈を定め花柄の平太も加はつたが露顯する筋。（四幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	由利八郎が親衛に殺される場は當時あつた或る闇殺事件の當込である。再演あり。
同年同月	同座	霜夜鐘十字辻筮	役者六人から各自任意の役柄を提出させた形式で仕組んだ世話物。（五幕）	同右	最初歌舞伎新報へ讀物として連載されたものを増補して上演した。再演あり。
同年同月	同座	二十日月中宵闇	右「霜夜鐘」中お兼豐三郎の道行に使つた清元淨るり。（一場）	同右	再演あり。
同年十一月	同座	茶臼山凱歌陣立	大阪冬の陣。重成と宮内局の件が中心である。（五幕）	同右	再演あり。（好評）
同年同月	同座	木間星箱根鹿笛	娼妓おさよの貞節と、岩淵九郎兵衛といふ士族上りの悪黨が働らく世話物。（四幕）	同右	おさよの幽靈を神經病として扱つたのが新らしくて大評判。再演あり。
同年同月	同座	樹々錦旅路土產	越後の縮屋が古市へ來て役者に化けて失敗する常磐津清元の滑稽淨るり。（一場）	同右	準備成つたが、事情あつて上場されなかつた。
明治十四年四月	同座	天衣紛上野初花	前の「雲上野三衣策前」を全然改訂し、河内山以外、直侍を活躍させた世話物。（七幕）	同右	前の「三衣策前」とは比べ物にならぬほどの大好評であつた。再演あり。

年月	座	外題	内容	役者	備考
同年同月	同座	忍逢春雪解(しのびあふはるのゆきどけ)	右狂言中、直侍と三千歳の色模様に使つた清元淨るり。(一場)	同右	清元中での大流行今でも盛んである再演あり。
同年同月	同座	千代譽松山美談(ちよのほまれまつやまびだん)	大石内藏之助、松山國城の一件である。(一幕)	同右	依田百川氏が材料を供給したとのこと。再演無し。
同年五月	猿若座	大杯觴酒戰強者(おほさかづきしゆせんのつはもの)	馬場三郎兵衛が井伊掃部頭に大酒に依て見出される時代物。(一幕)	市川左團次、市川權十郎、市川壽美藏	講談からとつたもの。左團次の專賣物になつた。再演あり。(好評)
同年六月	新富座	夜討曾我狩場曙(ようちそがかりばのあけぼの)	前の「曾我實錄」のうち主要な場を抄き、これへ序幕を添へたもの。(五幕)	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	再演あり。(好評)
同年同月	同座	土蜘(つちぐも)	四天王の土蜘退治を作つた長唄所作事。(一場)	同右	能から取つた新所作事長唄の曲現存再演あり。新古演劇十種の一。(好評)
同年同月	同座	古代形新染浴衣(こだいがたしんぞめゆかた)	おその六三を明治の世界に直し、七郎助の世話場をそへたもの。(三幕)	同右	このうち明石島藏松島千太の件は中途で消えてゐたが、實は「島衛」の伏線であつた。再演あり。
同年十月	春木座	極附幡隨長兵衛(きはめつきばんずゐちやうべゑ)	櫻川五郎藏の義死長兵衛水野の達引を組合せたもの。(四幕)	市川團十郎、市川權十郎、坂東家橘等	講談から取つたもので、再演あり。(大好評)
同年十一月	新富座	復咲後日梅(かへりざきごにちのうめ)	後日の加賀騒動で、高田善三郎が刃傷の一件である。(四幕)	市川團十郎、市川左團次、中村宗十郎等	門弟諺藏作「金澤評定」を見て、甘いところを東京風に濃く新脚色したもの。再演あり。
同年同月	同座	島衛月白浪(しまちどりつきのしらなみ)	明石の島藏、松島千太の盜賊改心談。(五幕)	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	二世河竹新七としては一世一代の作で、これで古河默阿彌と改名したのである。再演あり。(大好評)
同年同月	同座	色增栬夕映(いろまさるもみぢのゆふばえ)	右「島衛」中、望月とおてるの色もやうの清元淨るり。(一場)	市川團十郎、岩井半四郎等	清元中でも大流行の曲である。再演あり。

同年同月	同座	浪底親睦會（なみのそこしんぼくくわい）	水に縁ある戯曲中の人々が集まる滑稽淨るり。清元常磐津竹本（一場）	同右	親睦會といふことが當時流行り出したので早速用ゐたのである。再演あり。
明治十五年三月	春木座	釣狐（つりぎつね）	能師新太郎が釣狐の白藏主を演じて勘當を許される筋。（一幕）	市川團十郎、中村芝翫、坂東家橘等	能の「釣狐」を眞似たい團十郎の希望で、「歌舞伎十八番」の一に數へたが、中評再演なし。
同年五月	同座	三題噺魚屋茶碗（さんだいばなしさかなやのちやわん）	前の「時鳥水響音」のあとを二幕増補したもの。（三幕）	尾上菊五郎、市川權十郎、尾上松助等	あとへ次郎吉の強請と、蘇生した久太の掛合をつけた、増補の分再演無し。（好評）
同年六月	新富座	望月（もちづき）	小澤刑部友房が主人の遺子と共に仇望月を討つ筋。（一幕）	市川右團次、市川左團次、助高屋高助等	獅子の件は「今様望月」と題して長唄の流行物である。西澤一鳳の原作を増補したもの。再演無し。（好評）
同年同月	同座	切籠形京都紅染（きりこがたきやうのべにぞめ）	大丸屋騒動で、清十郎が狂氣して多勢を殺す筋。（四幕）	助高屋高助、市川左團次、澤村田之助等	再演無し。
同年十月	市村座	張扇子朝鮮軍記（はりあふぎてうせんぐんき）	朝鮮の小西行長が和睦の件へ與次郎兵衛の筋を絡む。（五幕）	尾上菊五郎、嵐璃寛、片岡我童等	當時の朝鮮事件を當込んで作つたもの再演無し。
同年十一月	新富座	黒白論織分博多（こくびやくろんおりわけはかた）	黒田騒動で實録に近く脚色したもの。（五幕）	市川團十郎、市川左團次、市川右團次等	筑紫橋口から、十太夫詰問まで。再演あり。
同年同月	同座	鼈甲當世簪（べつかふたうせいかんざし）	朝鮮長屋の暴徒半日の長次と鳶の手房幸次の達引。（三幕）	尾上菊五郎。市川左團次、中村仲藏等	朝鮮事件當込の世話物で、最初は「朝鮮種僞簪」といふ名題であつたが、朝鮮公使館から故障が出て直つた
同年同月	同座	田鴈露手枕（たのものかりつゆのてまくら）	右狂言中、お浦新三郎色もやうに使ふ富本上るり。（一場）	同右	富本に曲は現存。再演無し。
同年同月	同座	共進會名畫夜遊（きようしんくわいめいがのよあそび）	共進會の繪畫が夜拔出すといふ常磐津の滑稽淨るり（一場）	市川團十郎、中村芝翫、中村仲藏等	準備成つたが、上場されなかつた。

年月	劇場	外題	内容	主なる役者	備考
明治十一年六月	同座	芽出柳翠緑松前（めだしやなぎみどりのまつまへ）	大久保彦左衛門、松前屋五郎兵衛、一心太助、柳生又十郎等。（六幕）	尾上菊五郎、市川左團次、市川右團次等	講談に據つたもの再演あり。（好評）
同年同月	同座	是花茗荷奇代妙藥（これはめうがきたいのめうやく）	前の「妙藥所」を訂正した清元常磐津浄るり。（一場）	尾上菊五郎、中村芝翫、尾上多賀之丞等	再演あり。（好評）
同年四月	同座	石魂録春高麗菊（せきこんろくはるのこまぎく）	馬琴の「石魂録」を脚色したもの。（五幕）	尾上菊五郎、市川左團次、尾上多賀之丞等	前年久松座に「望夫石貞操松枝」として上演する筈が、今年に至つたのである。再演無し。
同年同月	同座	茨木（いばらき）	茨木童子が伯母に化けて腕を取返す長唄所作事。（一場）	尾上菊五郎、市川左團次、坂東家橘等	當時はあまり評判がよくなかつた曲は長唄に現存。再演あり。
同年同月	同座	金看板侠客本店（きんかんばんたてしのほんだな）	侠客金看板甚五郎の義侠と、木崎の久藏の親子別れ。（三幕）	市川團十郎、中村芝翫、市川左團次等	講談に基いた作。木崎の親子別れが大評判。再演あり。（好評）
同年同月	同座	柳櫻東錦繪（やなぎさくらあづまのにしきゑ）	芳年の「市原野」と、清親の「百面相」を組合せた常磐津清元浄瑠璃。（一場）	同右	再演なし。
同年同月	同座	意中駒意見一諷（こゝろのこまいけんのひとふし）	「金看板」中お花房次郎道行に使つた常磐津浄瑠璃。（一場）	同右	再演あり。
同年五月	市村座	新皿屋鋪月雨暈（しんさらやしきつきのあまがさ）	お蔦の責めと、魚屋宗五郎の酒亂を書いたもの。（三幕）	尾上菊五郎、嵐璃寛、片岡我童等	世話の元右衛門がしたいといふ菊五郎の望みで書いた。再演あり。（大好評）
同年七月	新富座	花菖蒲慶安實記（はなしやうぶけいあんじつき）	道灌山會合。金井の切腹。忠彌の拷問なぞを増補した。（六幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	増補した場は何れも好評であつた。再演あり。（好評）
同年九月	市村座	今文覺助命刺繍（いまもんがくじよめいのほりもの）	文覺の荒行を世話に直した不動の文次の侠客物。（四幕）	尾上菊五郎、助高屋高助、片岡我童等	團十郎の文覺が好評だつたので當込んだのである。再演あり。

同年十月	新富座	千種花音頭新唄（ちぐさのはなおんどのしんうた）	貢の十人斬を新らしく書直した世話物。（四幕）	尾上菊五郎、市川左團次、澤村源之助等	東京中の名妓が伊勢音頭に出演したので大好評。踊の場の長唄は「伊勢音頭」として現存 再演あり。（好評）
同年十一月	市村座	增補天竺德兵衛（ぞうほてんぢくとくべゑ）	在來の作へ北野の社前と覺藏の鐵砲腹を加へたもの。（四幕）	尾上菊五郎、片岡我童、河原崎國太郎等	增補の分、再演なし。
同年十二月		戎詣戀釣針（えびすまうでこひのつりばり）	花柳壽輔のさらひのために作つた狂言の釣女。常磐津。（一場）		後に芝居に移つた。曲は現存。
明治十四年七月	同座	浮世清玄廓夜櫻（うきよせいげんさとのよざくら）	清玄の墮落を世話物に書直した作。（三幕）	同右	再演あり。（好評）
同年同月	同座	夢見草朧八重咲（ゆめみぐさおぼろのやへざき）	右「浮世清玄」中清玄の靈が小櫻を助ける場の清元。（一場）	同右	再演なし。
同年同月	新富座	滿二十年息子鑑（まんにじふねんむすこかゞみ）	徵兵制度を當込んだ訓戒的の世話物。（五幕）	尾上菊五郎、市川左團次、助高屋高助等	當時の人氣に反感をおこさせて遂に失敗、再演なし。（不評）
同年同月	同座	二代源氏譽身換（にだいげんじほまれのみがはり）	仲光の幸壽丸身換を仕組んだ時代物。（二幕）	市川團十郎、市川左團次、助高屋高助等	新歌舞伎十八番の一として再演あり。（好評）
同年九月	同座	名高輪牛角文字（なもたかなわうしのつのもじ）	寄席の亭主大勢泉岳寺へ常香盤を奉納する常磐津淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。
同年十一月	猿若座	北條九代名家功（ほうでうくだいめいかのいさをし）	高時天狗舞、本間直家の勘當赦免、義貞の太刀流し。（三幕）	市川團十郎、中村仲藏、市川九藏等	天狗舞は新歌舞伎十八番の一として再演あり。（好評）
同年同月	新富座	飛驒內匠諸國譚（ひだのたくみしよこくばなし）	前の「六十餘集」に增補を加へたもの。（五幕）	尾上菊五郎、市川左團次、坂東家橘等	增補したのは獵夫熊藏の作である。

年月	劇場	外題	内容	俳優	備考
明治十八年二月	千歳座	千歳曾我源氏礎（ちとせそがげんじのいしずゑ）	忠信義信兄弟の忠勇と、靜御前の法樂舞。（五幕）	市川團十郎、市川左團次、尾上菊五郎等	「山伏攝待」は新歌舞伎十八番の内としてある。再演あり。（好評）
同年同月	同座	水天宮利生深川（すゐてんぐうめぐみのふかがは）	筆屋幸兵衛貧苦の發狂と、小天狗要次郎の改心譚。（三幕）	尾上菊五郎、市川左團次、片岡我童等	再演あり。（好評）
同年同月	同座	風狂川邊の芽柳（かぜにくるふかはべのめやなぎ）	右「水天宮」中、幸兵衛發狂の場へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	清元に曲殘る。再演あり。
同年五月	市村座	女化稲荷月朧夜（をなばけいなりつきのおぼろよ）	常陸の女化原の傳説を大内鑑の世話物として脚色したもの。（三幕）	尾上菊五郎、市川左團次、助高屋高助等	再演無し。
同年同月	同座	柳櫻青樓噺（やなぎさくらくるわばなし）	赤松則政が男しやべりの清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。
同年十一月	新富座	老樹曠紅葉直垂（おいきのはにもみぢのひたゝれ）	實盛が白髮を染めて出陣する史劇。（二幕）	市川團十郎、市川左團次、中村宗十郎等	再演無し。
同年同月	同座	船辨慶（ふなべんけい）	靜の訣別と知盛の亡靈を組合せた長唄所作事。（一場）	同右	能の「船辨慶」から脱化したもの。再演あり。曲は長唄に現存。（好評）
同年同月	同座	水鳥記熟柿生酔（すゐてうきじゆくしのなまゑひ）	水鳥記の人物がそれ〴〵出て酒の呑みくらをする常磐津淨瑠璃。（一場）	同右	再演無し。
同年同月	千歳座	四千兩小判梅葉（しせんりやうこばんのうめのは）	安政度の金藏破り、藤岡藤十郎と野州無宿富藏をかいたもの。（六幕）	尾上菊五郎、市川九藏、坂東家橘等	初めて傳馬町の牢内を仕組んだので大好評であつた。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	巢鴨里比翼道行（すがものさとひよくのみちゆき）	右「四千兩」中、おたつ德次郎道行へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。

年月	劇場	名題	內容	主なる役者	備考
明治十九年一月	新富座	西洋噺日本寫繪（せいやうばなしにほんのうつしゑ）	士族のうどん屋井生森又作の實事談。（六幕）	市川團十郎、市川左團次、市川小團次等	圓朝が飜譯した人情噺を更に脚色したもの。再演あり。
同年同月	同座	初霞空住吉（はつがすみそらもすみよし）	かつぽれの常磐津淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。（好評）
同年三月	千歳座	盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめのかゞとび）	加賀鳶梅吉の任侠譚と熊鷹道玄の惡事を組合せたもの。（六幕）	尾上菊五郎、市川九藏、坂東家橘等	道玄は菊五郎が長庵をやりたい希望に副はせるために作つたもの。再演あり。（大好評）
同年同月	同座	岸柳朧人影（きしのやなぎおぼろのひとかげ）	右「加賀鳶」中死神の現はれる場へ使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演あり。
同年同月	同座	花合四季杯（はなあはせしきのさかづき）	百人一首や花骨牌の人物が出て來て踊る清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。（好評）
同年五月	新富座	夢物語盧生姿畫（ゆめものがたりろせいのすがたゑ）	高野長英の一條と、渡邊華山の切腹を交へたもの。（七幕）	市川團十郎、市川左團次、市川小團次等	「文明東漸史」に依つて脚色したもの再演あり。（好評）
同年同月	同座	水滸傳雪挑（すゐこでんゆきのだんまり）	魯智深と九紋龍が雪中の爭闘。（一場）	同右	再演あり。（好評）
同年同月	千歳座	戀闇鵜飼燎（こひのやみうかひのかゞりび）	げい者小松の惡事と、鵜飼甲作の世話物。（八幕）	尾上菊五郎、市川九藏、坂東家橘等	歌舞伎新報に連載したものを増補して上場。再演あり。
同年同月	同座	墨川月雨雲（すみだがはつきにあまぐも）	右「鵜飼燎」中小松と文三の道行に使つた清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。
同年十一月	同座	月白刃梵字彫物（つきのしらはぼんじのほりもの）	梵字の徳次郎白浪譚の世話物。（六幕）	同右	再演あり。このうち一部は出場せずに終る。（好評）

年月	劇場	名題	内容	俳優	備考
同年同月	同座	鳴響茶利音曲馬（なりひゞくちやりねのきよくば）	當時有名だつたチヤリネの曲馬を踊にした清元淨瑠璃。（一場）	同右	再演なし。
同年十二月	新富座	萼源氏陸奥日記（みはえげんじみちのくにつき）	牛若丸と伊勢三郎の對面。（一幕）	市川團十郎、中村福助、澤村源之助等	新歌舞伎十八番の一「伊勢三郎」として再演あり。
同年同月	同座	狐墳寫澤水（きつねづかうつすさはみづ）	瓜盗人太郎作の滑稽淨るり。常磐津。（一幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	座の都合で上演されなかつたが、曲は殘つてゐる。
明治二十三年三月	同座	歌徳恵山吹（うたのとくめぐみのやまぶき）	太田道灌雨宿りより豊島の一族に面會する時代物。（一幕）	市川左團次、市川小團次、澤村源之助等	再演なし。（好評）
同年四月	千歳座	國性爺理髪姿見（こくせんやりはつのすがたみ）	三題噺の和國橋藤次を散髪物に直して大切なつけたもの。（三幕）	尾上菊五郎、岩井松之助、坂東家橘等	散髪としては再演なし。
同年六月	新富座	關原神葵葉（せきがはらかみのあふひば）	關ヶ原軍記を三成の召捕まで脚色したもの。（五幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	細川の奥方自害、大谷刑部の自殺など好評。再演あり。（好評）
同年同月	同座	西東戀取組（にしひがしこひのとりくみ）	矢切の別莊で淨瑠璃姫の聲えらみといふ滑稽淨瑠璃。常磐津。（一場）	同右	今の歌右衛門が名題昇進披露の淨るりである。再演あり。
同年七月	中村座	五十三驛扇宿附（つぎあふぎのしゆくづけ）	從來の五十三驛なゾックリ書直したもので、白井權八と、岡崎の猫が中心。（七幕）	尾上菊五郎、中村福助、坂東家橘等	南北の原作はほんの俤だけで、全く創作である。再演あり。（好評）
同年同月	同座	比翼紋愛井の字（ひよくもんいとしゐのじ）	右「五十三驛」中權八小紫色もやうに使つた清元淨るり。（一場）	同右	俗に「淺草の權八」といつて清元に現存。再演あり。
同年同月	同座	勢獅子牡丹花笠（きほひじしぼたんのはながさ）	右五十三驛中箱根の宿の祭禮へ使つた常磐津淨るり。（一場）	同右	再演なし。

年月	劇場	外題	内容	主なる役割	備考
同年十月	新富座	紅葉狩（もみぢがり）	維茂が戸隠山で、姫と化した鬼女を退治る竹本長唄常磐津所作事。（一場）	市川團十郎、市川左團次、中村芝翫等	謡曲から脱化したもの。新歌舞伎十八番の一として再演あり。（好評）
同年十一月	中村座	因幡小僧雨夜噺（いなばこぞうあめのよばなし）	盗賊因幡小僧新助と蜂に刺れる才次郎とを組合せたもの。（七幕）	尾上菊五郎、中村福助、中村芝翫等	講談から仕組んだもの。再演無し。
同年月	同座	墨流雲間の白浪（すみながしくもまのしらなみ）	右「因幡小僧」中、新助とお小夜が雨宿りの場へ使ふ清元浄るり。（一場）	同右	同右。
明治二十一年一月	市村座	會稽源氏雪白旗（くわいけいげんじゆきのしらはた）	頼朝義経浮島ヶ原の對面を書いたもの。（二幕）	市川團十郎、中村芝翫、中村福助	同右。
同年四月	中村座	月梅薫朧夜（つきとうめかをるおぼろよ）	當時の巷説花井お梅の箱屋殺しを早速仕組んだ際物。（六幕）	尾上菊五郎、中村福助、坂東家橘等	再演あり。
同年月	同座	化粧鏡寫俤（けしやうかゞみうつすおもかげ）	西伯侯姫昌が名鏡に依つて妲妃が悪狐なるを見現はす物。（二幕）	同右	「善悪両面兒手柏」のとき、お百の夢として出す筈が見合せたのを復活させたのである。再演なし。
同年九月	千歳座	矢矧日吉月弓張（やはぎひよしつきのゆみはり）	猿之助の生立と蓮葉へ藤吉が加勢の[illegible]たのむまで。（二幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	猿之助の矢矧橋は小猿七之助の一夢、安國寺との出合は大阪の「[illegible]月」、蓮葉との交渉は三世新七の「[illegible]眞書太閤記」の一節。
同年月	同座	油坊主闇夜墨染（あぶらばうずやみよのすみぞめ）	祇園の社頭に灯ともしの油坊主と忠盛のだんまり。（一場）	同右	再演あり。
同年十月	中村座	音聞淺間幻燈畫（おとにきくあさまのうつしゑ）	御家人黒鍬重五郎の悪事と、道中師初蔵が淺間山の働き。（五幕）	市川團十郎、尾上菊五郎、中村福助等	盤梯山の噴火を當込んだ際物であつた。再演無し。
同年月	同座	鐘四谷御堀水音（かねもよつやおほりのみづおと）	右「幻燈畫」中、おなつ佐七の道行に使つた清元浄るり。（一場）	同右	再演なし。

同年十一月	市村座	僞博多獨鈷菊菱（まがひはかたとつこのきくびし）	不動院覺全の惡事と源氏車の三吉の任俠。（三幕）	同右	再演なし。
同年月	同座	春錦秋葉櫻（はるのにしきあきはにざくら）	右「獨鈷菊菱」中、三吉と小扇の色もやうに使つた清元上るり。（一場）	同右	同右。
明治二十二年三月	新富座	朝日影三組杯觴（あさひかげみつぐみさかづき）	憲法發布の賑ひを見せた清元常磐津淨瑠璃。（一場）	市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次等	再演無し。
同年四月		千社札天狗古宮（せんしやふだてんぐのふるみや）	三島お千の美人局と、松島千太の改心。		歌舞伎新報千號を祝つて本月から掲載し始めた脚本であるが事情あつて中絶した。
同年五月	千歳座	三國一曙對達染（ふじのあけぼのつゐのだてぞめ）	山川組の六人男六人女が勢ぞろひの常磐津上るり。（一場）	同右	再演あり。（好評）
同年十月	新富座	柳生荒木譽奉書（やぎふあらきほまれのほうしよ）	荒木が柳生に望まれ、試合のとき奉書一つで勝つ筋。（一幕）	同右	講釋種である。再演あり。
明治二十三年三月	同座	一﨟職狩場棟上（いちらふしよくかりばのむねあげ）	杜建の曾我に、梶原の色話し、清元長唄の所作。（一場）	中村芝翫、尾上菊五郎、市川左團次等	再演あり。
同年月	同座	名大磯湯場對面（なにおほいそゆばのたいめん）	右の下の巻で、曾我の對面を明治の世界に碎いた清元淨るり。（一場）	同右	再演無し。
同年四月	市村座	一ツ家（や）	淺草一ツ家の石の枕を仕組んだ竹本淨るり。（二場）	尾上菊五郎、岩井松之助、尾上榮之助	再演あり。新古演劇十種の一。（好評）
同年十月	歌舞伎座	戻橋戀の角文字（もどりはしこひのつのもじ）	惡鬼が扇折の女に化けて綱を惱まさんとして腕を切られる常磐津淨るり。（三場）	尾上菊五郎、市川左團次等	再演あり。新古演劇十種の一。（好評）

默阿彌脚本年表（終り）

年月	劇場	名題	内容	主なる役者	備考
明治二十四年一月	同座	風船乘評判高閣（ふうせんのりうはさのたかどの）	スペンサーの風船乘と淺草公園に圓朝の噺り、常磐津清元。（二場）	尾上菊五郎、尾上菊之助、中村芝翫等	當時の當込み物。再演なし。
同年五月	新富座	愛宕館芝浦八景（あたごくわんしばうらはつけい）	一人娘に婿八人の滑稽と、海底に八大龍王の勢揃ひ。常磐津清元長唄竹本。（二場）	同右	愛宕館の新築祝ひを當込んだもの。下の卷の八大龍王の件は上場しなかつた。再演無し。
明治二十五年一月	歌舞伎座	箱根山曾我初夢（はこねやまそがのはつゆめ）	箱根權現に祐經箱王の對面を道づれ小平が夢に見る筋。（二場）	尾上菊五郎、尾上榮之助、市川八百藏等	鹽原多助の芝居の中幕に挾んだもの再演無し。
同年五月	同座	階子乘出初曠業（はしごのりでぞめのはれわざ）	消防出初の階子乘の清元浄るり。（一場）	同右	再演あり。
同年五月		傀儡師箱根山猫（くわいらいしはこねのやまねこ）	山猫お六といふ毒婦とお三といふ孝女を取合せた世話物。		歌舞伎新報に本月から掲載し始めたが、未定のまゝ歿してしまつた。
明治二十六年一月	同座	奴凧廓春風（やつこだこさとのはるかぜ）	十郎の廓通ひ、奴凧富士の卷狩を組合せた常磐津浄るり。（三場）	尾上菊五郎、尾上榮之助、坂東家橘等	好評再演あり。是が絶筆であつた。

参照書目

『梓輿奇人傳』(文久三年刊、三題噺集)。『隈なき影』(慶應二年刊、繪合せ集)。『魯文珍寶』(明治十一年三月、第十一、十二號)。『歌舞伎新報』(明治十三年十二月、第百十七號より、及び第千四百三十一號より)。『早稻田文學』第三十五號より小羊子閱與泰輔氏編)。『梨園の落葉』(坪内博士)。『月くさ』(森博士、三木竹二氏)。『市川團十郎』(伊原青々園氏)。『尾上菊五郎自傳』(時事新報社版)。『歌舞伎』(第七十四號より、並に第百七十五號「默阿彌の卷」)。『明治文學史』(岩城準太郎氏)。『近世日本演劇史』(伊原青々園氏)。『演藝畫報』、『新演藝』。『續歌舞伎年代記』(豊芥子)。『續々歌舞伎年代記』(田村成義氏)。『歌舞伎狂言細見』(飯塚友一郎氏)。『劇壇の最近十年』(坪内博士)。『少年時に觀たる歌舞伎の追憶』(坪内博士)。『世話狂言の研究』(小山内薫氏編)。『演劇叢話』(關根只誠氏)。『劇壇五十年史』(關根默庵氏)其他。

主要人名索引

く

け

こ

河竹默阿彌

著作解題索引

あ

い（ゐ）

河竹默阿彌

え

お（を）

か

さ

に

ぬ

ね

の

は

ひ

み

む

め

も

そ

た

ち

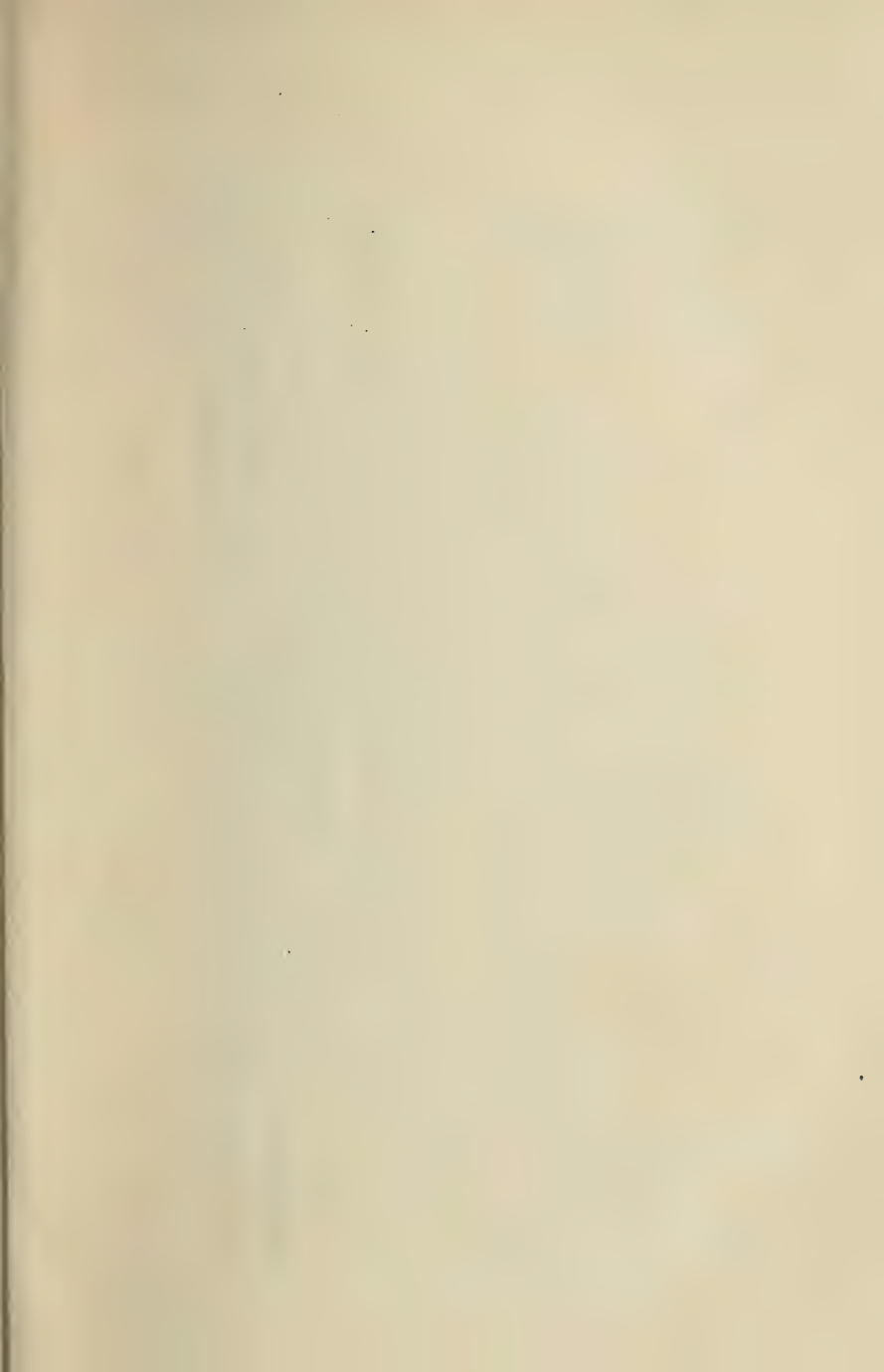
つ

索引終り

跋

亡師廿三回忌の追善に同じ田地に育ちたる竹柴領の有志を兼ね罌粟の若葉の露程なりと報いをせんと思ひ立つれど元より無智の小作男耕す業の拙くして土筆に似たる筆は執れども過去の事のみ思ひ草芽出しの一句も出ざれば下手の考長々しくと唯々七尺去つて

師の影による年波を三つ割の
法會に手向く其水や温

竹柴其水

卷末に

私がこの默阿彌傳を作つたのも、もう十年の餘も前のことになつた。最初の本は大正三年の十二月、川上邦基氏の經營してゐた演藝珍書刊行會の手によつて作られた。それは菊判の體裁で五百八十頁ほどであつた。その後、內容に增訂を施して、三六判型の本になつたのが大正六年の一月で春陽堂から發行された。がこの紙型は兩方とも、一昨年の大震災に燒亡してしまつた。今度默阿彌全集の發行に伴なつて、改版が企てられてゐたが、やうやくにして更に增訂版ができることになつたのである。かういふ本の性質として、絕版になり易いものが改版されたことは、默阿彌に取つても、亦私に取つても、望外の悅びと言はねばならない。

十年ひと昔とよく言ふが、回想して見ると、この本に就いても、默阿彌に關聯しても、そこにさまざまなことがあつた。どうしても忘れられない事柄が可なりにあつた。

この本がまだ活字になる前に、[illegible]閱讀の勞を取られた上、懇切なる示教を賜はつたのは、坪

內先生と饗庭篁村翁とであつたが、その篁村翁も——また興味深い序文を寄せて下さつた田村成義翁も——また、跋を書いてくれたら、唯一の幇助者になつてくれた竹柴其水老人も、みな相次いで此世を去つてしまつた。それから、昨年十一月、既に此の本の改版に取りかゝつてから、母糸女までも見送り、その略傳を附載することになつたなど。まつたく、私はこの本を眺めて限りない追憶に耽り、悵然たらざるを得ないものがある。

殊にこの傳記の中に含まれてゐる默阿彌の具體的性行の如きは、殆ど全部母の賜物であつたと言つてよい。私がこの傳記を計劃してから、凡そ三年の間といふものは、自分も好奇的な心持を以て知らうとしてゐたから、食後の閑談雨のつれ〴〵、長火鉢のそばに坐つてゐる母に、何くれとなく話しを聞かせて貰つて、默阿彌に關する逸話や性行を知ることに努めた。さうして、袋戶棚の片隅におかれてあつた小さな手帳に、それを怠らずに書きとめた。その手帳は十冊近くにも及んで、この傳記の血となり肉となつたのであつた。今日この本ができても、母と其水の眼にかけられないのは、まつたく張合がない。全集が毎卷できる度に、母に見て貰へないのが、何とも言へず寂しいが、殊にこの本の成るの日は、また一層暗い心持に閉ざゝれるこ

とであらう。

一昨年の大震災には、家に藏してゐた默阿彌の著作稿本を始め、さま〴〵の手稿本、糸女の作つた脚本に至るまで、殆どその悉くを燒き失つた。けれども、その脚本浄瑠璃の大部分は、默阿彌脚本集二十五卷によつて、原形を保存することができたし、又遺墨の類は前の傳記並に脚本集の插繪として、多數使用したから見本だけは保存することができた。私は震災前の五年間を、脚本集の刊行に捧げたのが徒爾でなかつたことを、特に震災後に知つた。早くこしらへておいて、いいことをした。私は心からさう思つたのである。今度刊行中の「默阿彌全集」は、昨年から今年、明年と、三年間を以て終了の積りであるが、私は今まつたく他を顧みることなしに、できるだけの誠意を以て、その完成の爲にいそしんでゐる。さうして震災後の今日にあつては、默阿彌に關する全部は、この傳記と「默阿彌全集」とに盡され、記念されるやうにしたいと希ひながら。

脚本集を基礎として、全集を完成するに必要なる著作の採訪、遺墨或は關係圖書の蒐集に

は、可なり困難を感じないわけには行かなかつた。それでも、震災後先輩知友から與へられた深厚なる同情と援助とによつて、先づ相當完全の域にまで到達し得たことは、感謝の辭を知らないほど有難かつた。

恩師坪内逍遙先生が、傳記の編著に、また全集の刊行に際して、終始最高の顧問として指導されたことは、深く感銘する所であるが、伊原青々園、松居松翁、三田村鳶魚、三村竹清、林若樹、坪内大造、樋口二葉、尾寅事服部長兵衞、山田一、金子千代子、吉川粂一、戸田春造、京極斧之亮、橋本梅藏、吉村三五郎、吉村留藏、竹内元正、田中佐次兵衞等の先生、知友、親戚各位。並に默阿彌門下である所の竹柴篤三、竹柴満吉、竹柴金三、竹柴秀葉、竹柴晋吉、竹柴金作、竹柴光葉、竹柴鷄三、竹柴重香、其水未亡人岡田まつ其他一門の人達などが、或は著作臺本に、或は關係版本に、或は番附の下繪、大名題の下書、書翰等の遺墨にわたつて、惠與せられ又は採訪蒐集の勞を取られたる所甚だ多い。また京都の尼野貴之氏が多年蒐藏せられたる舞臺使用の正本數百種を提供せられたことも、默阿彌脚本の整備上忘るべからざる厚情であつた。最後に書肆春陽堂は、默阿彌存生中(明治二十四年)に狂言百種を發行した以來、古い

縁故を持つてゐたのであるが、當主和田利彦氏も亦既往八ヶ年の長きにわたつて、興本集に、全集にと、著作刊行のことに從事してゐてくれる。このことを讃誇の文學者小峰八郎氏の名と共に、茲に殊記しておく。

尚一言お斷りしておきたいことがある。それは、この傳記の中へは、默阿彌の生涯性行等に就いて、あらゆる見聞や材料を網羅したい希望であつたが、なか〳〵思ふやうに行かなかつた一事である。あとから〳〵と新らしい逸話が語られ、珍奇な材料や遺墨が示される。現に、組版を終つた今日に至つて、挿繪として入れたいものや、是非入れておきたいやうな好材料を惠與せられてゐる。けれども、最早如何ともし難いので、殘念ながら割愛の止むなきものも二三にとゞまらない。然し、これらは今後刊行の「全集」口繪として、解說を附して順次挿入することにした。この點に關して、深く御諒恕を願つておかねばならない。

（大正十四年六月末日、河竹繁俊記）

大正十四年七月一日印刷
大正十四年七月三日發行

増訂第三版

『河竹默阿彌』

（柴田是眞下繪默阿彌好み
「五十の涙」裝幀貳百部限　非賣品）

著者　東京府澁谷町中澁谷八五〇番地　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市本郷區眞砂町三十六番地　佐藤駒次郎

默阿彌全集の刊行

（河竹糸女補修　河竹繁俊校訂編纂　〰〰　久保田米齋氏裝畫　三村竹淸氏題字）

『狂言百種』八冊は作者存生中の出版になり、『默阿彌脚本集』二十五卷は、大正八年より同十二年に至る間に刊行された。然し、いづれも大震災の爲に紙型を燒失せしめたので、從來梓行された曲目の全部に、尙二十餘篇の作を包含する『默阿彌全集』二十卷の豫約刊行計畫を發表した所、幸ひに大方の贊同を得、昨大正十三年八月以降毎月一冊宛正確に配本を遂行しつゝある。本全集は作者自筆の稿本、舞臺正本によりて、嚴密なる補修校訂を經て刊行されるものであるから、唯一の完本であると言つてよい。

左に大凡の內容を揭げる。（刊行の趣意、內容の詳細等は、發元春陽堂に內容見本を請求せられ、御承知相成りたい。）

第一卷（既刊）岩戸の景淸。えんま小兵衛。白縫譚。雪駄直し。宇都谷峠文彌殺し。附錄興行年表。――（全八一一頁。着色木版えんま小兵衛の錦繪二頁大一葉、作者肖像、錦繪番附等の插繪七葉。作者筆題字、語い、解說を含む中[illegible]在[illegible]）

第二卷（既刊）忍ぶの惣太。幡隨長兵衛。鼠小僧。黒手組助六。附錄興行年表。——（全八八二頁。二頁大奉書刷錦繪玻璃版一葉、作者筆勸進帳の看板下繪木版一葉。挿繪五葉。中扉四葉。）

第三卷（既刊）傾城玉菊。小猿七之助。赤垣源藏。十六夜清心（鬼あざみ）。三人吉三。因果小僧。附錄興行年表。——（全八八八頁。二頁大着色木版小猿七之助錦繪。作者筆番附の下書。挿繪六葉。中扉六葉。）

第四卷（既刊）鉢の木。縮屋新助。白浪五人男（辨天小僧）。村井長庵。鰻の善三郎。孝女お竹。附錄興行年表。——（全八五〇頁。二頁大着色木版鉢の木錦繪一葉。作者筆正本の一部分一葉。挿繪六葉。中扉六葉。）

第五卷（既刊）雪の對面。和國橋。御所の五郎藏（時鳥殺し）。女定九郎。鳥目の上使。生立曾我。鑄掛松。附錄興行年表。——（全八八六頁。作者引幕二頁大玻璃版、版行作者肖像各一葉。挿繪七葉。中扉七葉。）

第六卷（續刊）野晒悟助。白浪五人女。明石志賀之助と薄雲。鶴の平右衞門。左馬之助湖水乘切。附錄興行年表。——（全約八五〇頁。二頁大玻璃版。作者稿本の一部各一葉。挿

附錄興行年表。――（全約八五〇頁。着色木版二頁大、伽羅の片仲節寄鑑、作者肖像各一葉。挿繪五葉。中扉五葉。）

第十二巻（續刊）川中島軍記、實錄伊達騒動、女書生繁。附錄興行年表――（全約八七二頁。二頁大玻璃版、新富座開場式圖各一葉、挿繪四葉。中扉三葉。）

第十三巻（續刊）金の世の中、孝子善吉。水戸黄門記。花街の平太。附錄興行年表。――（全約八六四頁。二頁大玻璃版、吾妻下繪木版口繪各一葉、挿繪四葉、中扉四葉。）

第十四巻（既刊）延命院日當。加賀騒動。仲光。太田道灌。附錄興行年表。――（全八三一頁。二頁大玻璃版、作者手紙各一葉。挿繪四葉。中扉四葉。）

第十五巻（既刊）實錄伊賀越。霜夜の鐘。木の間の星。附錄興行年表。――（全八八八頁。光澤紙三色版刷の杉田萱、菅原吾坂下繪各一葉。挿繪三葉。中扉三葉。）

第十六巻（既刊）河内山と直侍。島ちどり（明石の島藏、松島千太）。浮世清玄。高時、義貞。附錄興行年表。――（全八七八頁。着色木版二頁大島藏千太錦繪、引退口上書附各一葉。挿繪四葉、中扉四葉。）

第十七巻（續刊）恭盤黒信。關ヶ原軍記。佐生荒木奉書。新皿屋敷。鵜飼の僧。附錄興行

年表。――(全約八四四頁。二頁大玻璃版、作者筆畫合せ各一葉。挿繪五葉。中扉五葉。)

第十八卷　(既刊) 筆賣幸兵衛。女化狐。幡隨院長兵衛。四千兩。附錄興行年表。――(全八二六頁。着色木版二頁大長兵衛錦繪、繪合せ選評各一葉。挿繪四葉。中扉四葉。)

第十九卷　(既刊) 加賀鳶。夢物語(華山と長英)。花井お梅。伊勢三郎。附錄興行年表。――(全八七八頁。二頁大玻璃版、作者筆飾り豹下繪着色木版畫各一葉。挿繪四葉。中扉四葉。)

第二十卷　(續刊) 本卷は淨瑠璃、所作事集とし、紅葉狩。船辨慶。釣狐。土蜘蛛。茨木。戻橋。一つ家。夜這星。緣結び。歲の市。吹矢。忠臣藏七段返し。滑稽安宅新關。忘れ藥。田舍芝居。かつぽれ。湯底親睦會。風船乘り。粟餅。寫し繪。日高川。釣女。望月。奴凧。額拔け。扇合せ。瓦斯燈。憲法發布。質屋の庫。水滸傳雪のダンマリ。油坊主のダンマリ。鞍馬山のダンマリ等を含む。

右二十卷の首卷として、默阿彌詳傳竝に河竹糸女傳(河竹繁俊著)を置き、最後に註解の研究錄を別冊として續刊するの豫定である。

（尙、右二十卷に編入し得ざりし作物、例へば「梅雨濡仲町」、「骨寄せ岩藤」、「小狐禮三」、「菖蒲太刀對俠客」、「上總市兵衞」、「左近太郎」、「桑名屋德藏」、「妙々車」、「桶狹間軍記」、「戀相撲春顏觸」、「子持高尾」、「大佛供養」、「鳥越甚內」、「竹中問答」、「大和錦」、「天草軍記」、「千代田の神德」、「高橋お傳」、「有馬猫騷動」、「大丸騷動」、「芽出柳綠松前一心太助」、「金看板甚五郞」、「不動文治」、「滿二十年息子鑑」、「五十三次扇宿附」、「因幡小僧」、「會稽源氏雪白旗」、「淺間山の噴火」等が殘されてゐる。これは二十卷完了後、特に傑れたるもののみを何等かの方法に於て刊行するやうに、目下計畫中であることを書添へておく。）

右全集に收められたる脚本、淨瑠璃の類は、現今屢〻舞臺上に演ぜられる所のものゝ如く、時間の制限俳優の關係等によりて、濫りに省略せられ、原作の面目を損したものではない。責任を以て極めて忠實に全曲を輯錄せるものであるから、眞の默阿彌劇の硏究乃至は幕末の江戶歌舞伎、明治初年の散切物活歷劇等の硏究は、本全集に就いて觀るの外はないであらう。且つ年代順に配列してあるから、此全集は直ちに江戶末期より明治に亙る戲曲史、演劇史、俳優史をも語る。同時に時代々々の世相、市井民衆の思想風俗等を遺憾なく活寫してゐる。則ち、單に劇の硏究者、愛好者のみに須要なばかりでなく、一般人士に取つても興味深き讀物であることを信じて疑はない。——口繪挿繪に至つては、最も珍奇なるものを蒐集する事に努めた。或は二十數度刷の着色木版錦繪の複製に、或は作者の筆蹟、看板番附の下繪に、或は錦繪、繪本、舞臺寫眞等に亙つて、是れを精巧なる玻璃版に亞鉛版に木版に附すること、全卷を通じて百餘枚。優に一大記念書帖を成すものと言つてよからうと思ふ。